



Title	漢籍古鈔本における漢字音の基礎的研究：鎌倉・南北朝時代加点の經書類を中心に
Author(s)	鄭, 門鎬
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第14569号
Issue Date	2021-03-25
DOI	10.14943/doctoral.k14569
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/81134
Type	theses (doctoral)
File Information	Munho_Jung.pdf



[Instructions for use](#)

令和二年度博士学位論文

漢籍古鈔本における漢字音の基礎的研究

—鎌倉・南北朝時代加點の經書類を中心に—

北海道大学大学院文学院

鄭 門 鎬

目 次

第1部 研究篇	1
第1章 はじめに	2
1.1 研究の背景と目的	2
1.2 本研究の構成	5
1.3 漢字音研究へのアプローチ	5
1.4 近代以降の日本漢字音研究の概略	6
第2章 資料選定および研究方法	11
2.1 資料選定	11
2.2 漢字音注記の被注字の分韻とデータ作成	14
2.3 各注記の問題と分析方法	17
2.3.1 仮名音注の分析方法	17
2.3.2 声点における表記の問題と分析方法	24
2.3.3 反切・同音注の分析方法	26
第3章 『論語』の漢字音	27
3.1 使用資料	28
3.2 仮名音注	31
3.2.1 非鼻音化の遅れ	31
3.2.2 歯音字（サ行音）における表記の揺れ	33
3.2.3 合口字の表記	37
3.2.4 ハ行転呼音による表記の混同	43
3.2.5 「㊦ヨウ」と「㊧ウ」の混同	44
3.2.6 長母音表記	47
3.2.7 m・n 韻尾字の表記	49
3.2.8 促音化	50
3.2.9 t 韻尾の仮名表記	51
3.2.10 呉音・百姓読みの混入	52
3.3 声点	56
3.3.1 軽声点の加点	56
3.3.2 上声全濁字の去声化	57

3.3.3	濁声点の加点	63
3.3.4	非規範的な声点	67
3.4	『論語』における『經典釈文』の利用	74
3.4.1	反切注	74
3.4.2	同音注	77
3.5	小結	80
	別表1 『論語』完本3種の巻毎の加点状況	84
第4章	『古文尚書』の漢字音	85
4.1	使用資料	85
4.2	仮名音注	87
4.2.1	非鼻音化の遅れ	87
4.2.2	歯音字（サ行音）における表記の揺れ	89
4.2.3	合口字の表記	91
4.2.4	ハ行転呼音による表記の混同	93
4.2.5	「㊦ヨウ」と「㊧ウ」の混同	95
4.2.6	長母音表記	96
4.2.7	m・n 韻尾字の表記	97
4.2.8	促音化	98
4.2.9	t 韻尾の仮名表記	99
4.2.10	呉音・百姓読みの混入	99
4.3	声点	101
4.3.1	軽声点の加点	101
4.3.2	上声全濁字の去声化	101
4.3.3	濁声点の加点	104
4.3.4	非規範的な声点	105
4.4	『古文尚書』における『經典釈文』の利用	107
4.5	小結	112
第5章	『孝経』の漢字音	114
5.1	使用資料	115
5.2	仮名音注	118
5.2.1	非鼻音化の遅れ	118
5.2.2	歯音字（サ行音）における表記の揺れ	120
5.2.3	合拗音表記の残存	124
5.2.4	ハ行転呼音による表記の混同	127
5.2.5	「㊦ヨウ」と「㊧ウ」の混同	128
5.2.6	長母音表記	130

5.2.7	m・n 韻尾字の表記	131
5.2.8	促音化	132
5.2.9	t 韻尾の仮名表記	133
5.2.10	呉音・百姓読みの混入	134
5.3	声点	135
5.3.1	軽声点の加点	136
5.3.2	上声全濁字の去声化	137
5.3.3	濁声点の加点	143
5.3.4	非規範的な声点加点	145
5.4	『孝経』における『經典釈文』の利用	153
5.5	小結	158
	別表2 『古文孝経』上声全濁字（諸本間の不一致加点箇所）	160
	別表3 『古文孝経』の非次濁字の濁声点加点箇所	161
第6章	おわりに	163
6.1	仮名音注	163
6.1.1	非鼻音化の遅れ	163
6.1.2	齒音字（サ行音）における表記の揺れ	165
6.1.3	合口字の表記	167
6.1.4	ハ行転呼音による表記の混同	168
6.1.5	「㊦ヨウ」と「㊦ウ」の混同	169
6.1.6	長母音表記	169
6.1.7	m・n 韻尾字の表記	170
6.1.8	促音化	171
6.1.9	t 韻尾の仮名表記	172
6.1.10	呉音・百姓読みの混入	172
6.2	声点	173
6.2.1	軽声点の加点	173
6.2.2	上声全濁字の去声化	173
6.2.3	濁声点の加点	174
6.2.4	非規範的な声点	175
6.3	各典籍における『經典釈文』の利用	176
第2部	資料篇	177
第1章	各資料における声点の『広韻』対照表	178
1.1	論語	178
1.2	古文尚書	180
1.3	孝経	183

第2章 分紐分韻表)	189
2.1 論語諸本分紐分韻表	189
2.2 尚書諸本分紐分韻表	273
2.3 孝經諸本分紐分韻表	291
使用テキスト	342
参考文献	344

第 1 部 研究篇

凡例

- ・所在を表す場合、卷子装は「巻数・行数+注文」の順に表す。正文と注文を区別する必要がある場合は、便宜上、注文の行数の次に A を付して示す。また、具体例の次に半角括弧に入れて所在番号を示す。粘葉装・綴葉装などの冊子本は「巻数・張数、表・裏、行数+注文」の順に表す。

例) 卷子本：馬 (①21) (巻第 1、21 行の正文)、盛 (④45A) (巻第 4、45 行の注文)

冊子本：綿 (①47A1) (巻第 1、47 張の表 1 行の正文)

門 (6B6A) (6 張の裏 6 行の注文)

- ・声点の加点を示す場合は加点された字の右側に小字で示す。

例) 王 (去)(③3)

- ・仮名音注はその多くが右側に付されるため、左側に付されている場合は行数の次に「左」、合点が付されている場合は「合」で示す。反切注・同音注の場合は加點箇所が不規則であるが、多くは左側に書き込まれるため、区別のために右側に書き込まれている

- ・㊦㊧㊨㊩㊪のような丸付き仮名は該当段の音を表す。

例) ㊦：イ段音、㊨：エ段音

- ・明らかに別筆で書き込まれている漢字音注記には該当箇所に波線を引いて区別する。

例) ^ア愛 (8B5)

- ・音注以外に仮名・ヲコト点を示す場合、仮名(訓読み・助詞・助動詞など)は括弧に囲まらず片仮名で、ヲコト点は括弧に囲んで平仮名で表示することによって区別する。

例) 上 (去)ニハ(に・は)(③191)

- ・被注字の字体は新字体で表すが、一部は字体により混同を招くことがあるため、旧字体を用いた箇所もある。

例) 藝 (ゲイ：疑母・祭韻) 芸 (ウン：于母・文韻)

證 (シヨウ：章母・證韻) 証 (セイ：章母・勁韻)

缺 (クエツ：溪母・薛韻) 欠 (ケム・カム：溪母・黻韻) など

第 1 章 はじめに

1.1 研究の背景と目的

日本の漢字音には多くの層位があることは周知の事実であり、これらは時代、そして相異なる体系・地域の母胎音によって重層的に積み重なっている。その様にして、日本漢字音 (Sino-Japanese) と呼称されるものの中には、古音・呉音・漢音・新漢音・唐音・近代音と定義されるものがある。このように多くの種類があるのは、その堆積を物語るものであろう。この重層的な漢字音を一つの言語において用いていることは、他の漢字文化圏の中でも類を見ない現象であり、筆者の母国語である韓国語に内包されている韓国漢字音 (Sino-Korean) には、韻書に基づく多音字を除けば 9 割以上の字が一字に当たり一音を持つのが一般的で

ある。

現代の日本語における漢字音というものは、一字に対して一字音のみならず、単語・熟語によって字音読みは多様性を帯びている。その多くは、漢音と呉音から起因した字音が占めており、「人間じんかん／にんげん」や「利益りえき／りやく」のように同じ漢字の熟語であっても、どの層位の字音で読まれるかによって、意味合いを異にしている場合も散見される。日本漢字音の研究も主として、この漢音と呉音という、二層の字音に重きが置かれている。本研究で対象としている字音は、その二大層のうち、漢音で読まれる資料、特に儒教経典（以下、経書類と称す）を中心として扱うものである。

抑も、漢音という字音の層は、呉音よりは新たなものであり、日本に漢音が入り流布する前の段階においては、仏教とともにもたらされた呉音が夙に定着しており、既に日本語の音韻構造に組み込まれて生活に浸透していた。呉音の母胎音の招来の経路については定かではないが、主として六朝期の南方呉地方の中国語音とされる。それに反して、漢音は主に中国の統一国家が形成された隋から唐に当たる、いわば中古音に属する字音を母胎にしており、遣隋使、遣唐使や学僧などによって、首都である長安の方言を基礎にして日本に招来されてきている。日本では新層の字音の渡来とともに、朝廷によって「正音」が推奨されるようになる。大学寮では音博士という発音の教官を中国本土から招いて行われた。例えるなら、現代の外国語学習のために、ネイティブスピーカーの講師を招いて、本土の発音を直に聞き学習する方式と同じである。

しかしながら、漢音という新層の字音は、一時期の字音が突発的に流入したのではなく、年月をかけて持続的にもたらされたものである。当然、中国本土に於ける通時的な言語の変化を被っていることは明らかである。なおも、中国本土においても、隋朝以降、科擧の導入により、いわゆる「規範」とすべき字体・音韻が国家によって制定・頒布されることにより、旧要素・俗的とされるものは捨象されるようになる。

隋・初唐の段階の字音と京の長安の発音が標準音と定められた盛唐（玄宗即位）以降の字音の違いは、当時の国家プロジェクトというべき仏典翻訳に反映されている。たとえば、同原典『Mahāmāyūrīvidyārājñī』を用いて翻訳された義浄の『大孔雀呪王経』（705年）と、その以降に翻訳された不空（Amoghavajra）の『仏母大孔雀明王経』（8世紀半ば）とでは、サンسكريットの音写を如何に反映するかという問題において違いがあるとされる。前者は『切韻』に代表される中古音の音韻体系に忠実したものであり、後者は伝統的な字音ではなく、長安方言の公認に従い、当時の口語に則って行われたものであるとされる¹⁾。斯くの如く、絶えずして当時の中国本土における言語政策は変化してゆくものであった。日本漢音も遣隋使派遣から、遣唐使中止に至るまで、最大約300年に亘る期間内に日本に齎されたものとされるのであれば、日本漢音という名称字体も一括りにしていいものではないかも知れない。しかしながら、日本語の音韻体系における受け入れ方（表音文字の枠における表記および声点による声調の表示）の方面においては、より古層に当たる呉音とその性格を異にし

¹⁾ 小林（1984）

ていることは言うまでもない。

漢音流入の最初の段階において、それを基に学習を行っていたのは、貴族や知識層（博士・僧侶）などの身分が高く、なお学習の機会が与えられた集団だと考えられる。この字音は、民間に流布していたものとは判然とした差があったと考えられる。なお、同じく博士家・僧侶といっても、それぞれ学閥・宗派というものは区々であり、限られた集団において、個別的に伝承が行われて、各集団における「読み癖」なるものが形成されてきた。それに加えて、短い一期間において急速に輸入したのではなく、何百年に亘り将来されてきたものであり、当然その間に起こっている中国本土の音韻変化を日本における漢字音学習にも反映されたと見るのが自然であろう。このように、種々の集団内において、享受されてきた字音の読みを根幹にして、時代が経るにつれ民間にも次第に拡散していくことが想定される。これらの学習の過程を残す証拠が、現存の訓点資料として伝わっているが、諸本間の字音点を分析すると、大方の傾向には共通性を持つものの、決してすべてのものが一致しないことが分かる。このように、大同小異なるものが生じる原因は、伝授の過程、集団の違い、個人差、母胎音を受け入れた時代など様々な経緯が存したためであろう。

近年の漢字音の研究では、訓点資料を基にした帰納的な字音を礎にして、個人、もしくは資料の種類（言うなれば、ジャンル）などによって、現れる字音が多様性を帯びていることが明らかになりつつある。筆者はこれらの研究を踏まえて、殊に同時期に書写・加点されており、なお現存資料の種類が多様な漢籍訓読資料に焦点を当てる。漢籍訓読資料の範囲に入るものとしては、四書分類における「経・史・子・集」であるが、本研究は最初のステップとして、相互比較が可能である「経（経書類）」を主要な対象にするものである。

本研究では以下の点を目指すものである。

- イ 典籍内において、ほぼ同時代に書写・加点されており、且つ相互比較分析が可能な異本を収集する。各本に書き込まれている漢字音注記を基に、資料の間の差を明らかにすることにより、同典籍内でも鈔本・博士家の系統により異なる部分があることを証明する。
- ロ 漢音の母胎音における問題と日本における音韻変化など、漢字音をめぐる内外的な要素によって、表記・加点に乱れが生ずる。その揺れに関わる幾つかの要因を基準にして、漢字音注記を分析することにより、各鈔本における表記・加点の特徴が異なることを明らかにする。また、各典籍における中国側注釈書の利用状況を、現存本との対校を交えながら、その利用状況と問題点を論じる。
- ハ 韻書の体系と符合する「規範的」である加点と、韻書の体系と齟齬する「非規範的」と言える表記・加点に注目し、典籍を跨ぎ「非規範的」な字音が現れる場合は、経書類において、一般的に流布していた字音として認める。
- ニ それに加えて、漢音研究における基礎的なデータ（分紐分韻表）を公開することにより、日本漢音研究に一助することを目標とする。

1.2 本研究の構成

本研究の構成は、以下のような基準をもって作成する。まず、本研究は第一部の研究篇と第二部の資料編に分けられる。

研究篇の第1章では、本研究に至るまでの動機を述べるとともに、対象となる訓点資料に基づく漢字音研究に至るまでの、近代以降の日本漢字音研究史の概括的な流れを述べる。

第2章では、本研究の対象資料と研究方法について概説する。まず、第1節では本研究で用いる資料の選定方法とその理由について概括する。次の第2節では、選定された資料に加点されている（書き込まれている）漢字音注記を如何に分類し、データを作成するかについて述べる。第3節では、漢字音注記を仮名音注・声点・反切注および同音注（類音注、同音字注とも、以下は同音注と称す）に大別して、各注記における研究方法およびその対象字について詳細に述べる。

本論の第3章は『論語（集解）』、第4章は『（古文）尚書』、第5章は『孝経』を扱う。第3章から第5章では、すべて同様の方法で分析を行う。

第3章から5章までは、次のような方式で叙述する。まず各章のはじめにて、各典籍を対象にした先行研究について概括する。そして、第1節では、使用資料をテキストの系統および博士家の違いにより分類し、各資料について紹介を行う。第2節では、各典籍から得られた仮名音注を幾つかの基準により分類し、その傾向と表記の「ゆれ」に着目し、分析を行う。第3節では、各典籍に加点されている声点を漢音声調の特徴に照らし合わせて、その傾向を示す。第4節では、各典籍に書き込まれている反切注・同音注を対象にし、現存完本の通志堂本『經典釈文』との対校を通じて、各鈔本で現れている現存本との差に注目し、その傾向を分析する。

第6章のまとめには、『論語』『古文尚書』『孝経』から得られた結果を総合し、数値を年代順・加点者グループごとに分け、図表化して示すことにより、各資料から得られた言語現象の特徴を略述する。

資料編は、『論語』『古文尚書』『孝経』の3種の声点を切韻系韻書である『広韻』との対照表を付すとともに、最後には、本研究で扱った21種の資料を基に作成した分組分韻表で構成される。

1.3 漢字音研究へのアプローチ

本研究における漢字音へのアプローチは、訓点資料の中の漢字音注記を基にして、その実情を示すものである。このように訓点資料を礎にする、日本漢字音に関する研究は、約100年間に亘り研究が蓄積されてきており、今日に至るまでの諸家による研究成果は枚挙に暇がない。

だが、その研究のアプローチとしては、大別して二つの方式があると言える。一方は訓点資料における漢字音注記に着目し、その表記の特徴・加点の傾向などを顕わにしようとする帰納法と、他方は中国成立の辞書・音義書における漢字音注（反切・同音注）に基づいて、

日本漢音に反映されている規則性を示した演繹法がある。

漢字音というものは抑も中国本土の口語が基になっているが、外国人（もしくはその言語の話者）の音声を耳で聞き、文字という手段で記録する他なかった。しかし、時代と流れとともに直接的に現地の音声を耳で聞いて学習することができなくなるため、耳で聞く時代から、次第に記録と伝承により学習する時代になったと考えられる。訓点資料における漢字音注記は、原音要素の取捨選択が行われた後に固着したものが、訓点資料における漢字音注記である。殊に、仮名による漢字音注記（以下、仮名音注）は日本語と中国語の音韻構造が相異なる中で、日本風に改変がなされたという限界を有する。

しかしながら、日本語の音韻変化に相俟って表記（字音仮名遣い）の乱れは避けられないものであった。江戸時代の国学者たちは、字音仮名遣いの乱れを正す方法として韻図や反切などの中国語音韻学を礎とした。文雄の『磨光韻鏡』（延享元年刊、1744）や、その一部を引き継いだ本居宣長の『字音仮名用格』（安永五年刊、1776）などに代表される近世韻学が栄えるが、彼らの方法論は『広韻』を基準にして、日本漢字音として呉音と漢音を演繹的に作り出すことにより、字音仮名遣いの乱れを正すものであった²⁾。しかし、演繹的に字音を作り出す動きは、近世韻学の隆盛とともに行われていたものではなく、その以前の時代から反切注を以て仮名として表記する際にも用いられたものであると見られる。

端的な事例として、江戸初期上梓された寛永八年版（1631）『大広益会玉篇』における仮名音注を見ると、漢音形と思しき字音の中には「酈ヒウ（孚弓切、巻2・8ウ2）」「約イヤク（於略切、巻27・1オ6）」「帽バウ（莫到切、巻28・2オ4）」のような事例が存する。

これらの字は、古訓点料における漢字音注の実例から探ると、

「酈ホウ」正安本『文選』

「約ヤク」正和本・嘉暦本・建武本『論語集解』

「帽ホウ」『管見抄』、正安本『文選』

のように表記される。寛永八年版『大広益会玉篇』はほぼ満遍なく仮名音注が附されている字書であるが、その中には反切を基に作為的であると判断されるものもあり、上記に挙げた鎌倉時代加点の訓点資料と比べてみても、差があることが確認できる。このように、字音仮名遣いの領域においては、通時的に見て、帰納的な字音から演繹的な字音が増える傾向にあった。

1.4 近代以降の日本漢字音研究の概略

ところが、明治以降、大矢透の『仮名遣及仮名字体沿革史料』を初めとする、国語史に古訓点本研究が活用される研究が始まることにより、漢字音の領域に於いても、演繹的な字音への軌道修正が行われるようになる。訓点資料が国語史の研究に取り入れられるようになり、演繹的な字音と帰納的な字音との間隙があることに気づき、これらを古訓点本に基づく帰納的な字音を以て反駁する動きが見られる。

²⁾ 沼本（2014：108）

満田新造 (1920) 「「スキ」「ツキ」「ユキ」「ルキ」の字音仮名遣は正しからず」は、その中で先駆的な論稿である。これは、『韻鏡』に基づく止撮合口字を対象に、当時の北京官話の合口音に当たる字が、必ずしも日本漢字音では合拗音表記にならないことを挙げるとともに、保延本『法華経単字』(平安期)、安貞二年本『新訳華嚴経音義』(鎌倉期)、至徳三年版『法華経音訓』(南北朝時代)、寛文十一年版『太平記』などの訓点資料に基づいて、カ行以外の「㊦キ」の表記はその正当性がないという主張を展開している。満田氏の論稿は『太平記』を除くと呉音資料に偏っている問題はあるが、訓点資料に基づく通時的な研究としては評価されるべきものである。

大島正健 (1931) 『漢音呉音の研究』は日本漢字音研究を専門に扱っている研究書である。カールグレン以降構築されつつある中国中古音の再構音・北京音・韻書を基に対応関係を示し、漢音・呉音形として適切である字音を導出するとともに、万葉仮名(音仮名)にまでその域を広げ、中国原音(方言)などを基にその根源を求めようとした研究である。大島氏の研究は、韻書の声母・韻母別に漢音・呉音の語形をある程度定めているが、その手法は中国語音韻学に基づく演繹的な性格が強く、古訓点本については言及されていない。

本格的に漢音資料を基に、江戸時代における演繹的な字音の問題を取り上げる論稿としては有坂秀世 (1944a、初出 1938) 「メイ(明)ネイ(寧)の類は果たして漢音ならざるか」、同氏の (1944b、初出 1941) 「帽子」等の仮名遣について」がある。有坂氏の論稿は漢音資料に基づく仮名遣いを考察する研究の中で嚆矢と言えるものであり、これらは日本の古辞書や訓点資料の実例を挙げることで、「反切音」と「流通音」という(本研究における「演繹的な字音」と「帰納的な字音」)概念を挙げている。これによって、江戸期から昭和初期に用いられていた仮名遣いが作爲的な字音と、平安末から室町以前に用いられていた字音とが「相錯雑」していることを証明したものであった。

戦後から今日に至るまで、諸家により大量の訓点資料・古辞書を用いて、漢字音の研究が行われるようになる。従来までの一部の言語現象を基に、その仮名遣いに注目されていた研究から、漢音・呉音・唐音など漢字音の層位を分類し、各々声点と韻書との関係、典籍の訓読における韻書・注釈書の利用など、多方面に亘る研究が行われるようになる。

これにより、漢字音研究の専門書の上梓や訓点資料における漢字音注記を基にした分韻表が公開されるようになる。日本漢字音を専門的に扱う論文の他にも、日本語音韻に関する通時的な研究の基で日本漢字音が扱われることも当然あるため、今日に至るまで枚挙に暇がないほどの量が世に公開されている。

また、本研究で問題にした個々の言語現象・加点の特徴については、従来までの研究を挙げながら述べるため、次章の研究方法に委ねることとし、本節では今日まで上梓された日本漢字音に着目した主要な専門書についての概略を挙げるに止めることとする。

・沼本克明 (1982) 『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』

平安時代から鎌倉時代までの大量の資料を対象にして、呉音論・漢音論として大別し、

更に、各論において、資料の種類により詳細に分けて分析を行っている。各資料をにおける漢字音注記の実例を挙げながら分析してすることにより、漢字音が如何に日本化したかを歴史的に解明しようとした研究である。

・高松政雄（1982）『日本漢字音の研究』

辞書・音義書など大量の字を収録する文献を用いて、漢音・呉音・唐音など、日本漢字音を為す、ほぼすべての字音の層に亘り分析を行っている。その中で、仮名の表記および声点における諸問題を挙げ、特殊である字音（慣用音）についても論じる研究である。

・沼本克明（1986）『日本漢字音の歴史』

中国語音韻学に関する基礎的な知識に触れた上で、上代から近世までの通時的観点で訓点資料・辞書を基にして、各字音層の流入や、定着するまでの呉音・漢音に起きている変化について、宋音（唐音）に流入についても幾つかの資料を挙げながら述べているなど、日本漢字音の概説書という性格が強い。

・湯沢質幸（1987）『唐音の研究』

唐音の特徴・研究の現況を通覧し、なお中世の唐音資料『聚分韻略』『略韻』などの文献を基に、具体例を声母・韻母別に分析するほか、呉音・漢音などの関係、江戸期韻学における唐音の位置など、唐音をとりまく時代的な背景を通時的な観点で通覧した研究である。

・高松政雄（1988）『日本漢字音概論』

沼本（1986）と同様、日本漢字音の概説書であり、中国語音韻学の基礎的な概念をかいつまんで述べるとともに、呉音・漢音・唐音（中世的）・唐音（近世的）に分けて、資料における仮名・声点の実例を中国語音韻学に基盤として、特徴について述べている。

・小倉 肇（1995）『日本呉音の研究』

呉音資料である『法華経音義』『法華経单字』など42種の『法華経』音義書に加点されている漢字音注記を基に、中国語音韻学の特徴と、仮名・声点が加点されている被注字と対応し、審らかな論究を行っている。その他に、資料編として法華経音義掲出対照表および分韻表を附し、『法華経』読誦音を俯瞰できる研究である。

・築島裕編（1995）『日本漢字音史論輯』

漢字音研究者の論文集のような性格であるが、各論において日本漢字音の層位（小松英雄）、加点資料における声点の起源（石塚晴通）、呉音資料の声調（奥村三雄）、字音仮名遣い（沼本克明）など、漢字音研究における諸問題について述べている。その他に呉音資料の『観智院本類聚名義抄』の和音注、漢音資料の『蒙求』の漢字音注記の分紐分韻表を付している。

・湯沢質幸（1996）『日本漢字音史論考』

本書は序論において、各字音の層の成立とその使用領域、漢字音の研究課題を先に挙げているが、日本漢字音史をとりまく歴史的な事件（漢音奨励）と江戸期の漢字音研究の実態・位置づけやその他の外国語（韓語・蘭語）との関係性について述べている。

- ・沼本克明（1997）『日本漢字音の歴史的研 究—体系と表記をめぐって—』

厖大な資料を基に、呉音論・漢音論（新漢音）・宋音論（唐音）にわけ、日本漢字音における各層の字音を、資料の実例を挙げながら様々な観点をもって分析している。それに加えて、入声・撥音韻尾の諸相に関して論ずるとともに、表記史論においては、漢字音のみならず、当時の他の外国語である梵語音に至るまで、多岐に亘る視野をもって、日本漢字音の表記・加点の体系に関して審らかに追及している研究である。

- ・高松政雄（1997）『日本漢字音論究』

日本漢字音の研究における課題を最初に提示するとともに、音表示・音形・体系のほか、呉音と閩南方音・叶音など多方面での論究を行っており、中国語音韻学と日本漢字音との関係性とその傾向に関する理論に主眼が置かれている。その他に『禅林類聚音義』の研究と漢字音関連書籍の書評を付している。

- ・佐々木勇（2009）『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』

この研究は、主として漢音資料を6種（字音直読資料、漢籍訓読資料、仏書訓読資料、和化漢文資料、音義・字書、辞書）に分けており、各々異なる特徴を帯びていることを、代表的な資料を以て明らかにしようとした研究である。佐々木氏は菊澤季生（1933）『国語位相論』における「位相」という概念を漢字音の分野に取り入れ、加点者の違い・ジャンル之差といった「位相差」により、漢音資料における差を求めたものである。

- ・沼本克明（2013）『帰納と演繹とのはざまに揺れ動く字音仮名遣いを論ず—字音仮名遣い入門—』

呉音・漢音・唐音資料から収集した事例（帰納的な字音）を基に声母・韻母別の特徴を列挙し、本居宣長の『字音仮名用格』における字音仮名（演繹的な字音）に至るまで、字音仮名遣いの諸問題に着目し、通時的な視点から通覧した研究である。

- ・湯沢質幸（2014）『近世儒学韻学と唐音—訓読の中の唐音直読の軌跡—』

近世の儒学者が残した著作を基に、唐音に関する記述を集め、各儒学者が置かれていた環境ないし認識について述べるとともに、江戸中期の文雄などに代表される近世韻学の隆盛の下で、近世の学者による著作に焦点を当て、唐音の利用・位置づけについて論じたものである。

- ・小倉 肇（2014）『続・日本呉音の研究』

呉音資料である『日本靈異記』『華嚴経音義』『金光明最勝王経音義』『類聚名義抄』『大般若経（訓点本・音義）』の5種の典籍・複数の資料を基に、小倉（1997）と同様、中国語音韻学における声母・韻母・声調と、仮名・声点が加点されている被注字と対応し、審らかな論究を行っていると同時に、使用資料を基に作成した分紐分韻表・掲出字対照表を附している。

このように、諸家により、その研究方法は千差万別であり、辞書・訓点資料の収集に基づく漢字音使用の実態、通時的な変化、それをとりまく環境や歴史など、漢字音研究には、多

様な観点によって、形成されている。

最初の漢字音研究は、一部の良質の資料にのみ焦点を当てる微視的な研究にとどまっていたものの、次第に同典籍・大量の鈔本を横断して比較分析するような巨視的な研究が公開されるようになった。上記の成果の他にも、近年の漢音資料に着目した研究の中には、石山裕慈（2008）「論語古写本における漢字音について」をはじめとする、同（2011）「中世における『論語』古写本の声点について」、同（2013）「『遊仙窟』各本に記入された日本漢字音の位置づけ」のように、複数の『論語』『遊仙窟』鈔本を用いることにより、その鈔本内における漢字音注記の特徴ないし差に注目した研究が際立つ。

本研究は、佐々木氏の漢字音における「位相差」を契機に出発したものである。筆者は比較的現存資料が多く残っている、漢籍訓読資料のうち、経書類に着目し、同典籍であっても、加点者の所属する集団・個人差により、漢字音注記における差を追究するとともに、主として博士家で行われてきた経書類における、漢字音の実態を示すことである。そのためには、資料を収集し、漢音における幾つの特徴を挙げ、なおその傾向を異本間と比較することにより可能となる。

第2章 資料選定および研究方法

2.1 資料選定

扱、本題に入るに先立って、資料の現存状況についても焦点を当てる必要があると考えられる。資料によっては、近世の版本のみが残存し、訓読の固定化が著しく多様性が褪色しているものがあり、もしくは古い面影を残している写本が現存していても、近世以前の写本が唯一無二のものであり、その当時の学習の一端を示す極めて重要な資料であったとしても、果たしてその資料の表面上の形が、当時の訓読の全てとも断言できない。学習者（加点者）の漢字の知識、構文の捉え方というものは、学派が同じであればある基盤は同色のものであっても、詳細な部分においては十人十色であって当たり前であったため、有標な形として残るものが、その資料における学習方法のすべてを反映しているとは言いがたい。そのため、古来から連綿として学習・伝授・講読が続いて行われている典籍の中でも、現存の数が比較的に多いものを選別し、各資料に施されている加点を基にして、そのうち、漢字音が各資料において如何なる様相を呈するか分析すると、その多様性を窺うことができる。従来の研究では伝授の過程が明らかであり、且つ良質の資料を中点として研究が行われているが、本研究では、その他にも周辺的とも言える資料にも視野を広げて見ることによって、一つの典籍の中において各資料が帯びる相対的な差と、またその他の典籍との差（個人差、学習の場、用いられた注釈書）を各資料の漢字音注記を基に導き出すことを目指す。また各資料から得られたデータを基に典籍ごとの傾向を数値化し、図表として表すことにより、各典籍における諸本別の傾向を示す方法を取る。

本研究で扱う経書類の枠に入る典籍の種類としては『論語』をはじめとして、『尚書（古文）』『孝経』『毛詩』『荘子』『礼記』など数多の典籍が存する。しかし、同典籍における異本間の傾向の差を明瞭にするためには、ほぼ同時代に書写・加点された資料が多く残る典籍でなければならない。且つ相異なる地位（博士家・仏家）に属する人物によって作成された典籍（もしくは、博士家点に則って寺院にて加点された資料をも含む）が両方とも現存する典籍を扱うことにより相互比較が可能であるものである必要がある。この条件に当て嵌まる典籍としては『論語』『古文尚書』『孝経』が適切である。

資料の加点時期は、平安末期から室町初期までに至る古鈔本のみを選定する。このような選定の理由は、まず、平安初期加点の漢籍はほぼ存在せず、あったとしても日本漢字音を研究するための漢字音注記が極めて少ない。つまり漢字音注記の種類が多くが中国側注釈書・もしくは字書・韻書由来の反切、同音字注であることが殆どであり、漢字音が仮名で表記される例は極めて少ない。そのため、漢字音を仮名で表記する仮名音注（音仮名とも）がある程度、漢字音注記として表記が定着する時期から、漢語アクセントの和語アクセント化³⁾により、室町時代以降の訓点資料には声点を加点する資料が減少する前の段階に絞ることとする。さらに、漢字の四隅に声点と同時に施していた濁点が、次第に仮名点の右肩に定着するようになる。つまり、音韻・表記の面でも大きな変化が起きる前まで

³⁾ 沼本（1986：266-268）

の段階の資料を追うことになる。

本研究では、基本的には、鎌倉時代から南北朝時代までの加点資料を扱うが、一鈔本に加点が重層的に行われており、その中には室町以降の加点と思しき痕跡が残るものも存する。本研究で扱うほぼ全ての資料には、後筆が入り混じっているが、このような後筆の峻別は極めて困難である。ただし、後筆が極めて多いと判断される資料である、建武本『論語』や元徳本『古文尚書』などは、最初の加点の時期から 100 年以上離れた後筆が入り混じっているため、厳密な意味では本研究における、鎌倉・南北朝時代の時期の枠には入らないが、音韻変化に伴う表記上の変化、加点傾向の変化を捉えるためには有意義な資料であるため、考察の対象とする。

さらに、漢字音注記の種類と、種類ごとの多寡が存するという問題がある。漢字音注記である声点・仮名音注・反切注および同音注をすべて施さない資料も多く、漢字音の注記を施す際に、仮名音注を殆ど用いず、反切注・同音注の書き込みや声点が主となる資料も存する。その一方で、仮名音注の比率が高く、反切注・同音注といった中国側注釈書・辞書を用いた痕跡が殆ど残っていない資料もある。

本研究で扱う経書類は中国側注釈書『經典釈文』が用いられるが、その中には音注、義注、字体注などの注記により、本文の加点に関わってくるため、いくなれば規範性が強く、注釈書を持たない転籍よりは、日本語化がより遅いと言える。ところが、加点の数、質的な面は、加点者の漢文に関する知識によって左右されるため、同典籍のうちでも加点の差が生ずる。そこで、本研究では、限定された時代に多数の現存資料が残る以下のような資料を用いる。

次章の第 3 章から第 5 章までは、各々『論語』『古文尚書』『孝経』における、同典籍・異本間の比較となるので、各章において、典籍名を冠しない資料名を用いるが、各資料の相互比較が必要になる場合は、以下のような略称（括弧内の名称）を用いることとする。資料の詳細については、各章の使用資料に委ねることとし、以下には本研究で扱う 3 種の漢籍、全 21 種資料の略称を挙げる。

・ 論語（7 種）

正和本（正和論語）

嘉暦本（嘉暦論語）

建武本（建武論語）

高山寺清原本（高清論語）

群書治要論語（群書論語）

文永本（文永論語）

高山寺中原本（高中論語）

・ 尚書（5 種）

群書治要尚書（群書尚書）

天理本（天理尚書）

元徳本（元徳尚書）

観智院本（観智尚書）

文和本（文和尚書）

・ 孝経（9種）

仁治本（仁治孝経）

建長本（建長孝経）

永仁本（永仁孝経）

三千院本（三千孝経）

正安本（正安孝経）

元亨本（元亨孝経）

元徳本（元徳孝経）

群書治要孝経（群書孝経）

清家文庫御注孝経（清御孝経）

その他に、各論において、漢字音注記の実例を他資料と比較が必要である場合は、以下の既刊の分紐分韻表、および独自で調査した院政時代から室町時代までの幾つかの漢音資料の実例を大いに参考とした。

・ 既刊資料（漢音）

『蒙求』（10種鈔本）、金沢文庫本『群書治要』経部、久遠寺蔵『本朝文粹』

佐々木勇（2009）『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』所収

・ 既刊資料（呉音）

西教寺蔵『法華経音義』

萩原 義雄（1990）「西教寺蔵『法華経音義・法華経略音』」所収

観智院本『類聚名義抄』和音

沼本克明（1995）『日本漢字音史論輯』所収

保延本『法華経单字』、九条本『法華経音』

小倉 肇（1995）『日本呉音の研究』所収

『金光明最勝王経音義』、安田八幡宮蔵『大般若経』、高山寺蔵『新訳華嚴経音義』

小倉 肇（2014）『続・日本呉音の研究』所収

・ 独自調査

- 神田本『白氏文集』：京都国立博物館蔵、巻第3・4（1113年点）
 書陵部『文選』：宮内庁書陵部蔵、巻第2（院政期点）
 谷村本『白氏文集』：京都大学谷村文庫蔵、巻第4残巻（院政期点か）
 嘉禎本『白氏文集』：大東急文庫蔵、巻第4（1238年点）
 正応本『白氏文集』：天理図書館蔵、巻第4（1289年点）
 永仁本『白氏文集』：天理図書館蔵、巻第3（1293年点）
 『管見抄』：内閣文庫蔵（1295年点）
 上野本『注千字文』：上野家蔵（1297年点）
 猿投本『文選』：猿投神社蔵、巻第1（1304年点）
 時賢本『白氏文集』：宮内庁書陵部蔵、巻第3（1325年点）
 京大本『白氏文集』：京都大学附属図書館蔵、巻第3（鎌倉後期点か）
 東洋文庫本『白氏文集』：東洋文庫蔵、巻第4（墨筆：室町初期点、朱筆：1443年点）

2.2 漢字音注記の被注字の分韻とデータ作成

漢字音の注記としては、中国の韻書・注釈書由来のものである反切・同音注（同音字注、直音注とも）がある。また、被注字の声調を表すための機能を果たす声点があり、中国の字音を日本語の文字として表し、日本語の音韻における支配を受け、日本語化した字音である仮名音注が存する。図2-1はこの4つの漢字音注記がすべて施されている被注字を示したものである。

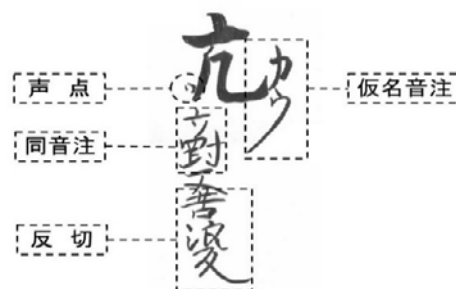


図2-1 漢字音注記の種類（模写例）

被注字の分韻については、『広韻』を基準に立てるも、多音字が極めて多いため、韻分類のためには、特定の字を分析するに当たり、その字が用いられる構文、漢語などを把握し、それを基に『広韻』に属する一つの韻に定める必要がある。もちろん、多音字の場合は特定の典籍においても、読み方に関する基準が漢籍ごとに異なる場合があるため、その際は各漢籍における注釈書の韻に従うこととなる。

『経典釈文』における記述を基に考えても、多音字の中には「○○反又音△」「音○或△△反」のように、「又」「或」を含む注文形式がある。それに加えて、孔安国、何晏、鄭玄などの意見が食い違う諸注釈家の釈文が入り、その上『字林』『玉篇』などの字書に基づいた字音が添えられることにより、1字の被注字に4～5種の反切注が立ち並ぶ場合も存する。分韻は基本的に、最初の字音注に拠り、当然「又」「或」以降は参照するに留まることとなるが、最初の字音注と、仮名・声点の中に最初の音注と食い違う場合には、「又」「或」以降の字音が大いに参考となる。

従来までの漢字音研究として不可分の関係として『広韻』を基準にしており、かつ本研究においてもそれは同様である。しかし、漢籍における被注字が全て『広韻』に収録されているわけではなく、『広韻』に掲出されていない未収録字が一部あり、もしくは掲出字としては所収されていても、各漢籍の注釈書における個々の字における反切注・同音注が、『広韻』の体系とずれがある場合が存する問題が残っており、それらを棚上げにしたままになっている傾向がある。しかし、未収録字の中には、字書や注釈書によって異体字の関係にあることが立証可能なものが存し、その異体字の字音に倣って韻を分類することとする。

例えば、「荆」は『広韻』には掲出されていないが、他の掲出字の注文に字体注「跽：別足。亦作荆。(並母・未韻)」から「荆」と「跽」が異体字の関係であることが立証できる。このような場合は「荆」と「跽」は同音として考えても差し支えないだろう。

それに加えて、『広韻』には収録されているが、当該韻を『広韻』から見いだせない例がある。『論語』でよく見かける「食」のような字音がその一つである。「食」は『広韻』では、2つの韻に属する多音字で、去声の志韻の羊母（反切羊吏切、漢音形イ）、入声の職韻の船母（反切：乗力切、漢音形シヨク）に属し、「シ」という字音を導き出しうるものは所収されていない。しかし、『經典釈文』内の「論語音義」には「食：音嗣」の同音注が存する。「嗣」は志韻の邪母であるため、『広韻』には未収録のものである。これを受けて、声点を「去声点」、仮名音注は「シ」を施している。この場合は、「食」は「嗣」と同音字と判断せざるを得ないため、分韻の際には該当箇所「食」は「嗣」と同韻として分類することとなる。

このような方針を踏まえて、3種の典籍・24,017の被注字を『広韻』に立脚し分類するにあたり、分析の便宜を図るため、以下の項目に分けて作成する（各項のデータにおける色の選定は恣意的なものである）。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q
1	ID	Cha	Location	Hani	Inj	Rhym	Deng	Sh	Ton	Kana	Fanqie	Fanqie	Homoph	Syl	Ongofu	Remark	PH_AN_JDSW
2	LY_SW0001	00序	SW01_003	叙	邪/齒	2_09語開3	04遇	上濁1	*					1	*	㊦「して」	*
3	LY_SW0002	00序	SW01_003	墨	邪/齒	2_06旨合3(A)	03止	上	リユキ	力(左)	軌(左)			2i	2中壘	字体「壘」中壘：力軌反	*
4	LY_SW0003	00序	SW01_003	校C	匣/喉	3_37效開2	08效	*	カウ	戸(左)	教(左)			2u	1(中壘)校	*校尉：戸教反	*
5	LY_SW0004	00序	SW01_003	耐3	影/喉	3_08未合3	03止	*	キ					1	2校尉	*校尉：戸教反	*
6	LY_SW0005	00序	SW01_003	向α	書/齒	3_42漾開3	11宕	去	シヤウ	舒(左)	尚(左)			2η	2劉向	㊦「か」劉向：舒尚反	*
7	LY_SW0006	00序	SW01_005	太	透/齒	3_14泰開1	05蟹	*	*				大音泰	2i	*	「大音泰」大子大傳：並音泰	*
8	LY_SW0007	00序	SW01_005	傳	幫/唇	3_10遇合3(B)	04遇	去	フ					1	*	*大子大傳：並音泰	*
9	LY_SW0008	00序	SW01_005	夏2	匣/喉	2_41馬開2	10曷	上	*	戸(左)	雅(左)			1	1夏侯勝	*夏：戸雅反	*
10	LY_SW0009	00序	SW01_005	侯	匣/喉	1_51侯開1	14流	平	ゴフ					2u	2夏侯勝	*侯勝：音升。或升韻	*
11	LY_SW0010	00序	SW01_005	勝1	書/齒	1_48蒸開3	13管	平・ヲ	*	又升(左)	又証(左)	音升(左)		2η	3夏侯勝	通志堂本、侯勝：音升。或升韻	*
12	LY_SW0011	00序	SW01_006	前	從/齒	1_33先開4	07山	平	*					2η	*	*	*
13	LY_SW0012	00序	SW01_006	將3	精/齒	3_42漾開3	11宕	平	*					2η	(將軍)	*	*
14	LY_SW0013	00序	SW01_006	軍	見/牙	1_24文合3	06臻	平	*					2η	(將軍)	*	*
15	LY_SW0014	00序	SW01_006	蕭	心/齒	1_35蕭開4	08效	上	シヨウ					2u	1蕭望之	*	*
16	LY_SW0015	00序	SW01_006	望3	明/齒	3_42漾合3	11宕	去濁1	*					2u	2蕭望之	*	*
17	LY_SW0016	00序	SW01_006	之	章/齒	1_07之開3	03止	平	*					1	3蕭望之	*	*
18	LY_SW0017	00序	SW01_006	丞1	常/齒	1_48蒸開3	13管	平	*					2η	(丞相)	*丞相：息亮反	*
19	LY_SW0018	00序	SW01_006	相3	心/齒	3_42漾開3	11宕	去	シヤウ	息(左)	亮(左)			2η	(丞相)	*丞相：息亮反	*
20	LY_SW0019	00序	SW01_006	產	孃/喉	1_08微合3	03止	平	キ					1	1韋賢	*	*
21	LY_SW0020	00序	SW01_006	賢	匣/喉	1_33先開4	07山	平	*					2η	2韋賢	*	*
22	LY_SW0021	00序	SW01_007	玄	匣/喉	1_33先合4	07山	平	*					2η	1玄成	*	*
23	LY_SW0022	00序	SW01_007	成	常/齒	1_46清開3	12禡	平	*					2η	2玄成	*	*

図 2-2 『論語集解』を対象にしたデータ入力例

- A 連番 (ID) : 漢字音注記が出現した順序に沿って特定の番号を与える。
- B 章 (Chapter) : 各典籍における章名を示す。
- C 所在番号 (Location) : 各典籍における巻 (冊) 数と行数を示す。
- D 被注字 (Hanzi) : 漢字音注記の対象 (被注) 字を示す。多音字の場合は、他の声・韻との区別のために、橙色に色付けし、別の記号 (1~4、A~D、 α ~ γ 等) を添えて表した。被注字が『広韻』に所収されているが、該当の声韻がない場合は△、未収録字は×を添えて分別する。
- E 声母 (Initial) : 韻書に基づいた被注字の声母を示す。分析の便宜を図るため、声母の清濁 (全清・次清・全濁・次濁) を色付けして区別し、五音 (唇・舌・牙・齒・喉) の区別を行う。
- F 韻母 (Rhyme) : 韻書に基づいた被注字の韻母を示す。
『広韻』の順番に合わせ、平声を 1₋、上声を 2₋、去声を 3₋、入声を 4₋、第 1 韻「東董送屋」から最後の第 61 韻「凡范梵法」のように対応する韻に一定の番号を付与する。例えば、董韻の場合「2_01 董」に入力する。
- G 等呼 (Denghu) : 被注字の韻の等呼を示す。甲乙韻は各々「(A)」 「(B)」 を付け加える。
- H 十六撰 (16-she) : 分類の便宜のため被注字の十六撰「通・江・止・遇・蟹・臻・山・効・果・仮・宕・梗・曾・流・深・咸」を示す。
- I 声点 (Tone) : 被注字に施された声点を示す。声点のうち、非規範的な声点と判断されるものは、以下の基準で色分けする。
・上声全濁字の去声化を反映したもの (赤色、例：善_(去) など)
・被注字の声点として不適切であると判断されたもの (空色、例：肅_(平) など)
- J 仮名音注 (Kana) : 被注字に施された仮名で書かれた音注を示す。仮名音注のうち、非規範的な表記であるものは、以下の基準で色分けする。
・音韻変化により揺れが生じるもの (赤色、例：要エウ>ヨウなど)
・呉音形と判断されるもの (空色、例：祭セイ>サイなど)
・百姓読み・慣用音と判断されるもの (緑色、例：陋ロウ>ヘイなど)
- K 反切上字 (Fanqie_Shang) : 被注字に書き込まれた反切の上字を示す。
- L 反切下字 (Fanqie_Xia) : 被注字に書き込まれた反切の下字を示す。
- M 同音注 (Homophones) : 被注字に書き込まれた同音注 (もしくは類音注) を示す。
- N 音節 (Syllable) : 仮名に表記する際の音節数を示す。漢字音の音節には判断に様々な問題があるため、基本、佐々木 (2009 : 620) の判断方式を倣うが、韻尾を持つ字は (p, t, k, m, n, ŋ, u, i) を付け加えた。
- O 音合符 (Ongofu) : 音合符が施されている 2 字以上の熟語 (人名を含む) を示す。音合符が施されていない場合でも、異本との対校を通じて、必要に応じて追加した。
- P 備考 (Remarks) : 施されている仮名点、漢字注など、被注字の韻分類

Q 注釈書の音注 (PH_AN_JDSW、Phonological Annotation of JingDianShiWen) : 各鈔本に書き込まれた漢字音注記の典拠になり得る、中国側注釈書『經典釈文』(通志堂本)における被注字の音注(反切注、同音注)を示す。

2.3 各注記の問題と分析方法

漢字音を習得する最初の段階においては、中国本土の字音を口伝により、学習されたものであり、表記も漢字によってなされていた。しかし、表音文字の仮名の発展により、漢字音を仮名で表記することが次第に増えていく。仮名音注は、漢字音を日本語の音韻体系に合わせて表記する、最も「日本語化」が進んだ字音であるが、表記の固定化は平安後期から院政期ごろとされる⁴⁾。

仮名表記がある程度、固定化するまでは、中国語の原音を聞いて原音に近い字音に表記するため、次第に仮名という日本語の体系に当てはめ、日本語の音韻で表現できない撥音・促音などを特殊な符号を用いるなどの試行錯誤を経ている。

しかしながら、韻書の基準で同韻とされる字を声母別に並べてみると、必ずしも表記が完全に一貫せず、非対称的な状態となる。各字音が伝えられるその中には、日本語の音韻に組み込まれることと同時に、中国語の原音自体における問題、中国語と日本語の音韻差による原音要素の捨象、時代による日本語音韻の変化など多様な要因によって揺れが生じる。その他に呉音の混入、加点者の誤判により生じた字音が施されるなど、ほかの層位の字音が交わるものが存する。更に、訓点資料の場合、底本の新旧、後の加点者による仮名の追記により仮名表記のみならず、声点加点にはバリエーションが生じることとなり、表記・加点の一貫性を欠くことが多々見られる。

2.3.1 仮名音注の分析方法

本研究では、各資料に現れる仮名音注の表記の一貫性を調べるために、従来まで先学によって行われた研究を基に、仮名音注における最も規範的な表記を定め、表記の揺れ・乱れが見られるものを収集し、いくつかの尺度を以て、表記における混同と固定という観点から数値化した各基準に当てはまる例を分析する方法を用いる。各資料の仮名音注分析の基準は以下の尺度をもって分析することとする。

① 非鼻音化の遅れ

漢音形では、母胎音の性格である非鼻音化の反映により、明母はバ行音となり、泥母はダ行音となるが、一部の例外が見られる。「蒙」^{モウ}「明」^{メイ}「猛」^{マウ}や「農」^{ノウ}「年」^{ネン}「寧」^{ネイ}など撥音韻尾を有する字においてマ行、ナ行となる場合が存する。この事象を扱った研究としては、有坂(1944a)「メイ(明)ネイ(寧)の類は果して漢音ならざるか」がある。有坂氏は、正倉

⁴⁾ 沼本(1986: 165-178)

院蔵『蒙求』の付音を含む、中国の諸方言、唐代の吐蕃（チベット）の音訳、『大日経』の悉曇対注の例などの例を挙げ、同様の現象は唐代の西北の字音（長安音）の特色を忠実に反映したためであると結論付けている。長安音の問題としては明母が $m > mb > b$ 、泥母が $n > nd > d$ のような変化があったことが想定され、漢音より更に後の時代の字音である新漢音資料では、これらの非鼻音化が更に進むことにより、「門」^ボ「猛」^{バウ}「明」^ベや「寧」^{テイ}「念」^{テン}「難」^{メン}の事例が報告される⁵⁾。

漢籍訓読資料から得られる付音の中には、撥音韻尾を有する字の中でも、マ行とバ行、ナ行とダ行の間に揺れが見られる字が一部見られる。全くの同韻であっても、「ミン」・「ビン」、「メン」・「ヘン」、「ナウ」・「ダウ」、「ネム」・「デム」のような表記の間では同韻に属しても、諸本を跨いで比較すると差が見られる。更に、撥音韻尾を有しない蟹撰字のうち、一部の明母字が非鼻音化せずに、「マイ」の例が多く見られる（ただし、本研究で扱う資料内では泥母字の「ナイ」の事例はなし）。これらが、バ・ダ行で読まれる場合は、濁声点の加点率が高い資料の中にも、反映されているため、加点の様相からも揺れを確認できる。そのためには、3種の撥音韻字における明母・泥母字の付音を調査する必要がある。

ŋ 韻尾字（喉内撥音韻尾字）：通撰・江撰・宕撰・梗撰・曾撰

n 韻尾字（舌内撥音韻尾字）：臻撰・山撰

m 韻尾字（唇内撥音韻尾字）：深撰・咸撰

各資料において、明母・泥母字でありながら、以上の韻尾を有する字の仮名音注を韻母別に表として作成し、かつその数を表すことにより、経書類におけるマ行／バ行、ナ行／ダ行音の分布をより明確に表す。

② 歯音字（サ行音）における表記の揺れ

漢音形における歯音（半歯音を含む）は原則的にサ行音（半歯音はザ行音）となる。中国原音において歯音声母は日本の音声に比べかなり複雑な体系を為しており、日本語の音韻になかった音韻上の区別は、殆ど捨象されサ行音に表記された。しかし、サ行音は音韻上ではそれらが詳細に分別されていなかったが、実際の音声では、[s]～[ʃ]、[dz]～[dʒ]のように幅があったとされていたとされる⁶⁾。それらが、一部反映されていると考えられる箇所があり、拗介音を持つ韻母の仮名表記の内においても、「サウ」～「シヤウ」や、「ス・スウ」～「シユ・シウ」などのようなバリエーションが見られる。サ行直音表記の場合、多くが正歯音二等字に分類される莊母・初母・崇母・生母（以下、歯音二等字）に集中する傾向が見られる。ところが、訓点資料における仮名音注では、必ずしも合致しないと言える。サ行直音

⁵⁾ 沼本（1986：151-154）

⁶⁾ 橋本（1966：221）は漢字音と万葉仮名の対応から、「音標的に今日は sa, si, su, se（西の或る地域では、東北、山陰、九州にあり）、so。これを万葉仮名の漢字音について調べると s, ʃ, ts, ts', tʃ, tʃ', 濁音として z, ʒ, dz, dʒ（この音二つについては疑問があるが、要するに日（漢じつ・呉にち）の類で、日本語の音標には左行濁音に用ゐらる）の音を子音とする。或る人はこれをみて古の左行音が ts、或いは tʃ 等だったと説く。而して漢音 tsa（今は tso）を sa と写す等（梵語 candana > 梅檀）の事実はある。然しさうでなくてはならぬという積極的な証明だけでは出て来ない。同時に s 音も左行で写してあるのである。只昔左行音が ʃ ではなかったかということは考えられる」と述べている。現代の土佐方言（山田 1983）のようにサ行音には摩擦音と破擦音（[ts], [dz], [θ], [ð], [s], [z]）が認められる方言もある。

とサ行拗音の表記が各々の字において多く見られるかを調査することにする。このような表記の揺れが見られる箇所は以下の通りである（ただし、声母別の表記上が際立たないと考えられる臻撰真韻合口字・諄韻を除く）。

ア段音：シヤウ：サウ（宕撰陽韻⁷⁾）

ウ段音：シウ（シク）：スウ（スク）（通撰東韻拗）

シユ・シウ（シユウ）：ス・スウ（遇撰虞韻・流撰尤韻⁸⁾）

オ段音：シヨ・シヨウ：ソ・ソウ（セウを含む）（遇撰魚韻、通撰鍾韻・曾撰蒸韻）

各資料において、歯音字のうち、以上の韻母に属する字に加点された仮名音注とその数を声母別に分け表として作成することにより、経書類におけるサ行直音とサ行拗音の分布をより明確に表す。

③ 合口字の表記

かつての漢字音表記には「クワ」「スキン」「クエン」などのような合拗音表記が存在していた。これらは、母胎音における合口介音「-w」を反映したものである。本来はこれらは日本語の音韻になく、仮名では転写が困難であるか、もしくは不可能なものがあったため、これらの字音を表すためには、中国式の反切注・同音注が用いられるほかに、類似した音を借りて表面上では漢字であるが、中国音韻では必ずしも合致しない表記である拗音仮名⁹⁾を用いる。

これらが日本語化して仮名で定着するも、カ行音に多く残存する。「クワ」のようなア段合拗音は戦前に至るまで表記として残存するが、イ段・エ段合拗音は鎌倉頃までに起ったアヤワ三行の統合によって、キ^[wʲi]>イ^[i]、エ^[wʲe]>エ^[je]、カ行合拗音の中でも、クキ^[kʷi]>キ^[ki]、クエ^[kʷe]>ケ^[ke]¹⁰⁾のような音韻の統合を反映した表記の変化も見られる。ただし、本研究で扱う鎌倉初期から南北朝期までの資料の中では、「キ」「エ」を介在する表記が如何に残っているかという部分に着目する。

以下のような分類で、ワ行音が介在する表記と、直音化（もしくは音韻統合）を反映した表記との比率を示すこととする。

・イ段合拗音

通撰・曾撰（鐘韻・蒸韻）：㊦キヨウ（一ク）>㊧ヨウ（一ク）

⁷⁾ ア段音となる字の中では、麻韻の開口拗音字（シヤ・サ）がある。麻韻拗音字の中には、時賢本『白氏文集』（346）や『群書治要』（③8）などの資料から「嗟（精母）」に直音「サ」を加点する事例は存するが、本研究に用いた21種の鈔本の対象字の中には、すべての仮名音注が整然として「シヤ」表記であったため、本研究では麻韻字は対象から除いたことを先に断っておく。

⁸⁾ 本研究では、シウ・シクなどの字音は厳密にはウ段音とはいえないが、通時的に見ると、「シウ>シユウ」「シク>シユク」のような変化を辿るため、「シユ」と同じくウ段音として処理した。

⁹⁾ 嵬「火（クワ）イ」、貴「鬼（クキ）」、戒「受（シユ/シウ）」などのように、仮名で拗音を転写することが定着する前の段階に、類音の漢字を介在して表記するものであり、この名称については小松（1971：669）では「準かな」と称しているが、本研究では廣岡（1988）、肥爪（2019）による名称に従った。

¹⁰⁾ 肥爪（2019：166）

- 止摂（支・脂・微韻合口）：㊦キ>㊧
- 臻摂（文韻合口・諄韻・文韻¹¹⁾）：㊦キン>㊧ン
- 宕摂（陽韻合口）：㊦キヤウ（一ク）>㊧ヤウ・㊦ワウ（一ク）
- 曾摂（職韻合口）：㊦キキ>㊧キ
- ・エ段合拗音
- 蟹摂（齊・祭韻合口）：㊦エイ>㊧イ
- 山摂（元・先・仙韻合口）：㊦エン>㊧ン
- 梗摂（庚韻合口3等、昔・青韻合口）：㊦エイ>㊧イ

なお、合拗音表記において、平安初期には非常にまれであるが、ナ行音における「ヌアニ」¹²⁾のような表記も報告されている。このように、カ行（牙音・喉音）以外の合拗音表記である「スキ（シキ）・ルキ」や「スキン（シキン）・ツキツ（チキツ）」などの表記の残存についても検討する。

カ行以外の合拗音に関する研究としては、まず満田（1920）があり、止摂合口字の「スキ」「ツキ」「ユキ」「ルキ」などといった仮名遣いは韻鏡学者の誤解から生じて起ったものであるという指摘をしている。ところが、沼本（1982）は臻摂合口字の例を取り上げ、「スキ」「シキ」などは原音を正しく表記しようとした結果であると述べている¹³⁾。佐々木（2009）は「スキ等は、例外的な存在」としており、それは主として「反切・同音字注に支えられた軌範的な音注を施す資料」に見られるとしている¹⁴⁾。このように、サ行合拗音（タ行・ラ行）の残存に関しては諸説が存するが、表記の意識は各本ごとに異なる。主として歯音・舌音の合拗音表記が現れる韻母は、『広韻』の以下の部分に当たる。

- ・止摂合口
 - ㊦キ・㊧キ：㊦イ
- ・臻摂（真韻合口、諄韻）
 - ㊦キン・㊧キン（一ツ）：㊧ユン・㊧ン・㊦ン（一ツ）

このように、「キ」「エ」を介在するような表記が現れる韻母を対象にして、仮名音注の合拗音表記と直音化（ないしワ行音のア行音への同化）の比率を数値化して、消滅・残存の傾向を明らかにする。

¹¹⁾ ただし、文韻の中には「訓クキン」のように合拗音（㊦キン）の表記となり、直音化した表記（㊧ン）となるような付音があるものの、同じく喉音声母の中には「薰クン」「勛クン」などの用例が見られ、牙音声母字は主として「君クン」「群クン」のように「㊦ン」表記で、同様である。このような揺れがあるため、本研究では「訓クキン」という付音は特殊な事例として扱うこととし、文韻は除外することとする。

¹²⁾ 春日（1956：199）は平安極初期資料の訓点資料の聖語蔵本『阿毘達磨雜集論』巻第14にナ行合拗音である「罽：ぬ阿爾（ヌアニ）」の1例が報告されている。

¹³⁾ 沼本（1982：1159-1177）

¹⁴⁾ 佐々木（2009：886-891）

④ ハ行転呼音による混同

平安後期から、二音節以降のハ行音がワ行音に変化する現象が生じ、本研究に使用している資料の中にも仮名音注の表記の面において、この影響を受けたと見られる例が多く見られる。特に、p 尾字の「フ」が「ウ」として表記される例が多く見られる。また反対の例として、原則として「ウ」と表記される、ŋ 韻尾を有する通撰・江撰・宕撰・遇撰・梗撰（「イ」表記となる3・4等字を除く）・曾撰や、u 韻尾を有する效撰・流撰字が「フ」として表記される場合が見られる。その他に、ごく稀であるが、合拗音表記における「クワ・クエン」などを「クハ・クヘン」に表記する例や、i 韻尾表記の「イ」を「ヒ」に表す事例が存するが、これらの例は非常に少なく、実例を示すにとどまる。

p 韻尾字【深・咸撰】（ウ：フ）

ŋ 韻尾字【通・江・梗・曾・宕撰】（ウ：フ） ただし、「イ」となる梗撰字を除く

u 韻尾字【遇・效・流撰】（ウ：フ）

その他（イ韻尾字、合拗音表記）

⑤ 「㊦ヨウ」と「㊧ウ（㊧フ）」の混同

通撰・曾撰字（イ段+ヨウ）と效撰（エ段+ウ）・咸撰字（エ段+フ）の表記に揺れが存する箇所が見られる。このような乱れは院政期初期前後から見られ、

「㊦ヨウ」 jɔŋ > joũ > jou > jo:

「㊧ウ」 jeu > jeo > jo:

「㊧フ」 jeɸu > jeu > jeo > jo:

のような音韻変化を経て、同様に[jo:]となったためである¹⁵⁾。しかし、各資料から見られるこのような表記の乱れは資料ごとに、また韻ごとに偏りが見られる。そのため、以下の当該韻に書き込まれた仮名音注を調べて、乱れの度合いを各資料ごとに示すこととする。調査対象となる韻類は以下の通りである。

㊦ヨウ > ㊧ウ 通撰（鍾韻）・曾撰（蒸韻）

（ただし「封」^{ホウ}「繪」^{ソウ}のように直音となる一部の字を除く。）

㊧ウ・㊧フ > ㊦ヨウ 效撰（蕭韻・宵韻）・咸撰（葉韻・帖韻・業韻）

（ただし、咸撰字のうち、「雜」^{サツ}「接」^{セツ}のように促音化する字を除く。）

⑥ 長母音表記

現代日本語においても「農夫^フ／夫婦^{フウ}」「詩人^シ／詩歌^{シイ}」などのように、普段短母音である字が長音として表記される例が散見される。これに関しては、岡本（1969・1970）は各々止撰・遇撰（虞韻）字を対象にして、中国原音を日本字音として転写する際に、拗介音の強弱を反映した影響とする意見がある。沼本（1982：754-757）は、漢音直読資料である『蒙求』諸本の字音注を分析する中で、短母音の長音化が文献に拠って全く異なる様相を呈してい

¹⁵⁾ 沼本（1986：250-255）

ることから、「歴史的な変遷で把えることはできない事象」として判断し、岡本氏の説を否定し、原因として、口語性の反映によるという意見を示している。佐々木(1989)は同じく『蒙求』諸本の中において長母音表記が曲調である去声(上声調)・平声軽(下降調)に集中していることを指摘し、「実際に読誦された折の音声現象としての長音化が、仮名書音形の上に現れたものであると考えられる」と結論付けており、長音表記が見られない資料に関して「規範性の強い資料」であるという推論を導き出している。

本研究で扱う漢籍訓読資料の場合、注釈書に裏付けられる規範性の強い資料が主なものであるが、漢字音の領域内のうち、呉音のように、和語のアクセントの中に取り組みられている階層の、原則的に曲調が一音節内に現れないため、これを回避するような現象が、漢音資料の中に現れ得る。調査対象は原則一音節字となる以下の字である。

- ①止摂 開口 (㊦>㊦イ)
- ②遇摂・流摂 (㊦ヨ・㊦・㊦)>㊦ヨウ・㊦ウ・㊦ウ)
- ③果摂・仮摂 (㊦・㊦ヤ)

⑦ m・n 韻尾字の表記

漢音の母胎音となる唐代の長安音においては、舌内撥音韻尾(-n)と唇内撥音韻尾(-m)との区別がある。これらは、日本の音韻上には本来なかった要素であり、仮名で表記するに当たり、様々な試行錯誤があったが、両者の音韻の区別は各々院政期に舌内撥音韻尾字は「ン」/-n/と唇内撥音韻尾字は「ム」/-m/として仮名が付与され定着していく。しかし、これらも音韻上の統合により、11世紀から混同例が見られ、次第に統合して/-N/となっていくとされる¹⁶⁾。鎌倉時代以降、両者が表記の面においても混同するとされる。本研究で扱う資料はそれ以降に書写・加点された資料であり、表記上の区別が歴然としているもの、混同が著しく、一方に統合しているものも見られる¹⁷⁾。本研究では各資料の韻尾における「ン」・「ム」表記の度合いを調査し、各韻尾字に如何に仮名表記を施しているかを集計し、数値化して示すこととする。

舌内撥音韻尾字(ン表記)

入声字を除外する臻摂・山摂

唇内撥音韻尾字(ム表記)

入声字を除外する深摂・咸摂

⑧ 促音化

原則として「ツ」表記は、舌内入声韻尾(-t)のみ現れるが、その他の字にも促音化を反映したと考えられる表記が存する。t韻尾以外の字のうち、促音表記が認められる多くの場

¹⁶⁾ 沼本(1986:166-169,241-243)

¹⁷⁾ m・n 韻尾の区別の意識が脆弱な鈔本の場合、殆どが「ン表記」へと定着する傾向が強い。ただし、石山(2013)によると、金剛寺本『遊仙窟』(1321年点)の場合は、m・n 韻尾を一括して「ム」に表記している鈔本も報告されている。

合は、入声韻尾を有する p 韻尾字（原則として「フ」表記）・k 韻尾字（原則として「ク／キ」表記）であり、後続する音が無声音である条件において見られる。これらは、現代日本語における漢語の仮名表記にも現れ、p 韻尾字の中に「^{フツ}雑誌」「^{ハツ}法度」「^{カツ}合点」などや、k 韻尾の「^{ガツ}学校」「^{カツ}作家」「^{ラツ}落下」などのように一定の漢語において、促音化を反映した表記である「ツ」が見られる。なお、p 韻尾字の中には単独で用いられる場合も、「^ツ立」「^ツ雑」などのように、t 韻尾と同様の表記を施している事例を、漢籍訓読資料でも見出せる。

小松（1956）は、p 韻尾字の場合、「a. 韻尾- ϕ u が無声子音と緊密な結び付き、u が無声化して脱落する。b. 残された- ϕ は極めて不安定な形であるため、そのまま存続することができず、もとの一モーラを保存して、促音におきかえられた。c. 語性上この様な結合が、その使用率の圧倒的部分を占める一部の文字は、常に「ツ」表記をとるため、遂に舌内入声と誤認され、無声子音に続く以外の場合でも、-t と発音されるようになり、更に現行の-cuu にまで変化した」の過程を経て、p 韻尾の促音化のプロセスを提示している。

その他に、沼本（1981・1986）は「^{フツ}富貴」「^{キツ}牛車」「^{カツ}早急」のような、入声韻尾を持たない字の一部が促音化する事例についても言及し、これについては音便とする辞書などがあることが見られるが、鎌倉以前から用例が見られる。本研究においては、t 韻尾以外の、p・t・u などの促音化が各典籍に現れるかを調査し、後続の子音との関係、促音表記が単字形として現れているかという実態を示す。

⑨ t 韻尾の仮名表記

日本語の音韻にかつてなかった、韻尾の問題については定着の過程において紆余曲折があった。漢音の定着から比較的かけ離れていない平安時代の漢音資料の中にも、t 韻尾の表記は「ム表記」を施している『漢書楊雄伝』白粉点（天曆二年（948）点）や「チ表記」以外にも無表記、平仮名の「ん」に類似する文字を用いる表記や、類音を施すなど、多様な韻尾表記を書き込んでいる『蒙求』天曆頃点（947~957）から表記の試行錯誤の過程を窺うことができる¹⁸⁾。呉音資料の中においても、同様の表記が見られるが、とりわけ「チ表記」が多くなっている。漢音形において「ツ表記」が定着する時期は平安後期以降である。沼本（1986：173）はこの理由として、「[-t]の閉促性の表記により適切であった為に、専らこの形で固定して行ったものであろう」としている。林（1980）は、「チ表記」が、「ツ表記」に勝る資料においても、先行母音の種類により、表記を異にしていることを挙げている。その中で、書写・印刷の時期を通時的に見るため、呉音資料の九条本『法華経音』、『法華経単字』、心空『法華経音訓』の事例を挙げているが、殊に先行母音が「i」である場合は、「チ表記」が多く、奥寄り母音の「u」である字のみが「ツ表記」になっていることを挙げている。「チ」→「ツ」への変化は、奥寄りの先行母音を持つ字に始まって、前寄りの先行母音を持つ字にまで及ぶことを指摘している。

「チ表記」は、鎌倉以降加点の漢音資料においても残存が見られ、より古い漢字音の層で

¹⁸⁾ 沼本（1986：130-140）。

ある、呉音形の字音が漢音資料に混入されるか、もしくは底本の踏襲により「チ表記」の字音が後代の資料においても残存すると思しき事例が散見される。本研究で扱う資料はほぼ鎌倉時代に集中しており、「チ表記」は非常に稀であるが、このような表記が多く現れる環境を推察し、なおその資料の性格・年代を特定する。

⑩ 呉音・百姓読みの混入

漢字音には日常生活において用いられる漢字音の層と、典籍の世界においてのみ用いられる漢字音の層（難読字・常用されない字・多音字の問題等）があったと考えられる。経書類の漢字音注記は、主として漢音形が用いられるものの、日常生活における語形（より古層の字音である呉音形）などが混用される場合が存する。また、難読字の場合は字書・注釈書が用いられるが、一部はそれらを参照するプロセスを経ず、漢字の構成要素の一部から類推することによって、非規範的な字音が生じることがあるが、ある特定の典籍の中にはこのような仮名音注が紛れ込むか、同様の過程を経て書き込まれた底本を踏襲することが見られる。更に体系的なずれが特定の典籍内において、規則的に見られることもあるが、体系的な齟齬であると同時に、個人差・もしくは地域差による可能性が想定される。

2.3.2 声点における表記の問題と分析方法

漢音資料の声点の分析に当たり、まずは漢音の声調の特殊性について触れる必要がある。漢音は隋唐代の長安音を母胎音としているが、それを反映した漢音資料の声点を基に分析すると、切韻系韻書と食い違っている幾つの特徴を有することがわかる。本研究では、声点の分析に当たって、以下のような基準を以て、各典籍における声点加点の傾向を明らかにする。

① 轻声点の加点

漢音声調の特徴としては、平声と入声の軽重分け六声体系として定着する。佐々木 (1998) によると、軽重の差は院政期から両者が混同されるようになり、最終的には四声体系へと定着するため、加点資料における年代の判定の上にも重要な証拠となる。表 2-1 のように、漢音声調は平声と入声の軽重（平声重は低平調、平声軽は下降調、入声重は低平調、入声軽は高平調）を分ける六声体系として定着している。本研究で対象とする資料の大多数は軽重の差に混同が著しくなる時期、もしくは区別がほぼ消滅した時期の資料であるが、同時代書写・加点の資料であっても、より区別が判然としていた時期の底本に則って厳密に行って区別しているものもあり、四声体系へと安定しており、区別が殆ど行われぬ資料も存する。

表 2-1 四声と漢音声調

	全清	次清	全濁	次濁
平声	平声軽 (下降調)	平声軽 (下降調)	平声重 (低平調)	平声重 (低平調)
上声	上声 (高平調)	上声 (高平調)	去声 (上昇調)	上声 (高平調)
去声	去声 (上昇調)	去声 (上昇調)	去声 (上昇調)	去声 (上昇調)
入声	入声軽 (高平調)	入声軽 (高平調)	入声重 (低平調)	入声軽 (高平調)

そこで、本研究では、理論上、軽声が加点される平声字・入声字を対象に、その加点の軽重を集計し、表に表すことに拠り、各資料の声調体系の実態を示す。

② 上声全濁字の去声化

上の表 2-1 に挙げた如く、多くの上声全濁字が去声化するという中国音韻史上の問題が日本漢音に反映される。日本漢音資料における上声全濁字の去声字の問題については、具体的な資料を基にした柏谷（1965）・沼本（1973・1982・1986・1997）、佐々木（2009）などの多数の研究がある。その中で、佐々木（2009：568-571）によると、上声全濁字の去声化をすべての資料で反映しているわけではなく、韻書に従って上声点を施している資料も存し、上声・去声が混同している資料もある一方、完全に去声化を反映している資料も見られると述べている。本研究では各資料の上声全濁字の加点を集計し、去声化を反映せず、去声以外の声点が加点されている場合は、その原因を多方面から探る。

③ 濁声点の加点

訓点資料における濁声点加点に関する研究としては、佐々木（2006）による論考がある。博士家の学派・宗派により濁声点の比率が異なることを実証し、濁声点をよく加点する博士家・宗派として清原家・菅原家・真言宗を挙げ、濁声点をあまり加点しない博士家・宗派として藤原家・中原家・法相宗・天台宗を挙げている。これらは、声点の形式においても区別がなされており、前者に当たる資料は「◦◦」（本研究では「濁 A」と称す）であり、後者に当たる資料は「◦/◦」（本研究では「濁 B」と称す）を主として用いているが、加点の比率においても「濁 A」が「濁 B」より高いことを示している。

本研究では、各資料の濁声点を分析する際に以下の基準をもって分析を行うこととする。

まず、漢音資料において、原則濁音となる、明母・泥母・疑母・日母字を対象にして、加点の実態を単点と濁点とにわけ、各資料における濁点の頻度を示す。ただし、明母・泥母字に当たっては前述のとおり、非鼻音化の遅れにより濁声点を施さない字があるため、一部の字を除く。それとともに、各鈔本に「濁 A」「濁 B」の加点状況と傾向を探る。

二つ目は、前掲の濁音となる 4 つの次濁声母字以外の全清・次清・全濁字に加点されている濁声点の実例を挙げるとともに、連濁や呉音声調の混入などの方面から、その原因について考察する

④ 非規範的な声点

經書類は漢音で読まれるのが慣習であるが、加点資料の実態を俯瞰すると、完璧に漢音のみで施す資料は極めて少ない。もちろん、漢音の特性が個々の字に至るまで、完全に証明されているわけではないが、韻書の四声・声母の清濁との関係性との乖離する声点というものも無論存すると想定される。本研究の主として扱う鎌倉時代から南北朝時代の間の漢字音の学習には、声点を施すことにより、依然として声調の学習も伴われていたが、仮名音注と

同様、各資料のこの声点には非規範的であると言えるものも混じている。

個々の典籍の書写・加点に関わった加点者が僧侶である場合も多く、寺院という環境において慣れ親しまれてきた呉音形の加点を施すことが散見される。なお、博士家の中でも、学派により、各字の読み方には微細な差が生じている可能性も捨てきれない。

更に、多音字の場合、複数の声調を持つことがあり、注釈書『經典積文』に沿わない加点が施されることもある。なお、仮名音注のように字形・音符による類推による誤り、「争>諍」や「馬>瑪」のように転義により増画をしている字は、転義が本義と声調を異にするような問題があるなど、このような声点加点には様々な要因があると考えられる。本研究では、このような事例に当該する字を、他鈔本の加点と比較できる一覧表を作り、特に学派別に読み方が異なる箇所について注目する。

2.3.3 反切・同音注の分析方法

本研究で扱う、3種の経書類の典籍・21種の資料の中には、上記の仮名音注や声点の以外にも漢字の音を表す、漢文注が存在する。経書類の多くは、陸徳明撰『經典積文』からもたらされたものであり、このような学習方法は、現代生活において外国語のテキストを学習する際に、教科書の他にも参考書や辞書を利用し、その内容を書き込むことと、さも変わらないようなものである。

日本の『論語』テキストとして最も多く用いられた何晏の『論語集解』自体には、正文(本文)に対する鄭玄・孔安国・馬融などの諸家の注釈が割注の形式で組み込まれているが、字句の内容に関わる訓詁注や、文脈を説明するような注が主なるものであり、多音字(破音)や難字の読み方など、音韻的な情報は乏しい。訓点本の中には『經典積文』を利用した漢文注記が正文・割注の行間・欄上・欄下に書き込まれることで補われることにより、『經典積文』の利用の痕跡が残る。

被注字の多くは複数の字音を持つ字か、難字であることが多く、文脈に合わせて反切や同音注のように直接的に漢字音に関係する内容が書き込まれる。これらは、日本の加点者ないし学習者が学習の便宜のために書き加える仮名音注・声点と有機的な関係を持つのである。

本研究では、現存の通志堂本『經典積文』を基に、各鈔本に書き込まれている反切注・同音注の異同・その利用の程度に触れるとともに、切韻系韻書と比較して見られる体系的な齟齬(誤写を含む)について報告する。最後に、被注が多く行われている字に関する考察を行う。

第3章 『論語』の漢字音

孔子の言行録である『論語』は、儒教の経書類の中で最も広く読まれた漢籍であり、古来から日本を含む東アジアの全域に亘って流布しており、その影響力は現代においても絶大である。日本には数多くの『論語』古鈔本・版本が現存するが、『論語』古鈔本は奈良・平安時代まで遡る資料がなく、鎌倉時代初期書写の高山寺本の残闕が最古の鈔本とされる。古代から現代にいたるまで諸家による数多の注釈が登場したが、鎌倉初期から14世紀に至るまでの現存鈔本は、すべて何晏の集解本である。

『論語』訓点本を材料にして、多方面に亘る研究が行われてきたが、日本漢字音に主眼を置いた主な研究としては以下のようなものが存する。

まず、石山（2008）は、高山寺清原本、文永本、嘉元本、建武本を対象に反切・同音注・声点・仮名音注の全体的な加点状況について簡潔に述べているほか、主として仮名音注を中心に論じ、その他にも各本における六声体系の消滅の度合いについて簡潔に述べている。それに次いで、石山（2011）は、前掲の2008年の研究で取り扱った4種の資料のほかに、嘉暦本と『群書治要』の論語引用部分（巻第9）とを交え、声点の全体状況の報告と諸本ごとの加点の異同について述べている。特に上声と去声間の異同が多く見られることを指摘し、その主要な原因として上声全濁字の去声化と一音節去声字の上声化を挙げている。石山（2012）は、室町時代に書写された清原宣賢手沢本、伝清原良枝書写本の他に、建武本の室町時代後筆、宮内庁書陵部蔵本（永禄・元龜年間写）、東京大学総合図書館蔵本を材料に清濁の加点例を中心に論じた研究であり、鎌倉から室町に至るまでの『論語』鈔本を材料に日本漢字音について詳細に述べている。

そのほかに、佐々木（2009）も嘉元本、建武本のほかに『論語』鈔本を多数材料にしているが、その中でも正和本の例を幾つか取り上げている。上声・去声が連続する場合、去声が上声化しない用例、中低型を回避せずに残す用例、止撮合口字の中の「スキ」「ルキ」表記の用例があることを挙げ、そのほかに上声全濁字の去声化の状況を提示している。佐藤（2013）は、鎌倉初期から室町末期における清原家成立の論語を材料に音注について簡潔に論じており、鎌倉初期の書写・加点の高山寺清原本のk韻尾の促音化「篤敬：トクケイ>トツケイ」が室町時代加点本には再び「トクケイ」に戻ったことや、慣用的な読みである「論語：ロンゴ」が建武本において「リンギヨ」と表記された例を取り上げて、漢字字書の利用により口語的な字音が規範的な字音へと変じたことを述べている。坂水（2015）は、清原宣賢と清原枝賢書写の『論語』『中庸章句』を材料にして仮名音注を中心に、両者における音変化に関する字音点・語形・オ段拗長音表記の相違について報告している。

本章では、鎌倉時代から室町初期に書写された『論語集解』（以下では、『論語』とする。本研究における『論語』は『論語集解』を指す）鈔本7種の資料を対象とする。各資料にはすべて漢字音注記が施されているため、漢音資料の一つとして注目するに値する。しかし、成立の場と、後筆による加点の多寡により、漢字音注記にも差が存すると期待される。仮名音注・声点については、主要な音韻変化が如何に反映されているかに注目し、反切注・同音

注についてはその量が最も多い正和本を中心に『經典積文』との比較を通じて、差が存する字については切韻系韻書である『広韻』との音韻体系の比較を行う。更に、それらが如何に、和訓注に適用されたかについても簡略に述べることにする。

3.1 使用資料

本研究で扱う『論語』の現存資料は書写・加点者、もしくは奥書により、訓点の系統が確認できる鈔本であり、便宜上清原家と中原家に分けることにする。鎌倉時代から南北朝時代の現存資料としては清原家の訓点を引き継ぐ資料が多いが、完本は最古の正和本のほか2種を扱う。他は選抄本（群書治要）や零本である。本研究で対象とする『論語』古鈔本7種は以下の通りである。

完本（清原家）

(1) 正和本

東洋文庫蔵。正和四年（1315）写であり、全十巻が揃うテキストの中で最古のものである。巻第10の巻末の本奥書によると、正和本は、仁治三年（1242）清原教隆の書写本¹⁹⁾を証本にしており、明経博士である清原家点を伝授するための資料である。しかし、伝授の過程において、書写・朱墨校点に関わった人物が実際誰であるかは、判然としないとされる²⁰⁾。奥書が存する巻第1、巻第2、巻第3、巻第8²¹⁾から見て、書写は正和四年、朱墨校点が終わった時点は、正慶二年（1333）であったことが確認できる。多くの異本のみならず、『經典積文』『論語注疏』などの注釈書を以て、本文校勘を施し、多くの書き込みが存する。近年二度に亘る影印²²⁾が公刊されており、その全体像をより鮮明に確認できるようになった。本研究では2015年勉誠出版で出版された原色原寸大の複製本を用いる。

(2) 嘉暦本

紅葉山文庫旧蔵であり、現宮内庁書陵部蔵。巻第5、6、7、10は奥書を欠くが、残りの各巻の奥書によると、仁治三年の清原教隆の本奥書があり、正和本と同じ仁治三年清原教隆書写本を底本として用いていることがわかる。書写年代は嘉暦二年（1327）から嘉暦三年（1328）にかけて書写しており、加点時期も正和本とほぼ同時期であると推定される。巻第1の巻末には「加州白山八幡院 玉泉坊書之 禅澄之」とあり、巻第2、3、8、9にも「禅澄」の名があることから、地方の神道家において、清原家鈔本を以て書写・加点が行われていると判

¹⁹⁾ 武内（1939：323）は正和本について「教隆写定の論語は既に佚したるも、これを転写せるもの二部存せり。一は岩崎男東洋文庫所蔵の正和鈔論語にして（中略）此本諸巻の終に建長中教隆が其子直隆に家の秘説を伝へたること、文永中直隆はこれを長兄有隆の子教有に与へて、更に一本を浄写して弘安三年その子教元に授けたること、延慶中教元の弟教宗がその息繁隆に伝へたることを記して、更に正和四年写、正慶二年校点の奥書を存すれば、此本が教隆、直隆、教元、繁隆と子々孫々に伝授せられたる清家の証本を正和年中に改写して正慶中に加点せるものなるを証すべし」と述べている。

²⁰⁾ 石塚・小助川（2017）の訓点解題による。

²¹⁾ 前述のとおり、巻第10の巻末にも奥書が存するが、本奥書のみである。

²²⁾ 本研究において、本文の訓点の確認は原色原寸で公刊された勉誠出版の2015年版を用いたが、解説は汲古書院の2017年版を参照した。

断される。ただし、巻第4のみ正安四年(1302) 釈覚源により、他の巻より早い時期に同底本をもって書写されている。調査には宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧にて公開されている写真を用いる。

(3) 建武本

大東急記念文庫蔵。巻第1から6までは建武四年(1337) 明経博士である清原頼元が飯尾三郎に伝授し、巻第7から10までは康永元年(1342) 頼元が良枝の孫である良兼(巻末には法名である沙弥真性となっている)に伝授したことが確認できる。小林(1968)は清原家点を忠実に写している頼元・良兼の加点の他に、室町期別点があることを述べており、中原家の訓読法的一端をも取り合わせていることを指摘している。字画で別点の仮名を区別することは困難であるが、右肩に濁点を定着させている仮名点は、室町中期以降のものだと判断される²³⁾。調査には1937年出版された二色刷りの複製本を用いる。

零本(清原家)

(4) 高山寺清原本

高山寺蔵。10巻のうち、巻第7、巻第8のみが現存する。奥書には、書写・加点年代が明記されていないが、鎌倉初期の書写とされる。巻末紙背には「爲見外傳故論語一部／如形清家一説所讀也／天台宗沙門僧禪信之本」とあり、清原家の加点本を模した鈔本と考えられる。しかし、本研究で扱う他本と比べて、異なる特徴が散見され、朱点が全く施さずに仮名に改めており、本文・注文をかなり崩して書写している。更に、『經典釈文』を引用したと見られる漢文の注釈が見られない。調査には、『高山寺古訓点資料 篇一』(汲古書院、1980)及び、高山寺転籍文書総合調査団長の石塚晴通先生から頂いたカラー写真を用いた。

選抄本(清原家)

(5) 群書治要巻第9

宮内庁書陵部蔵。全50巻のうち、巻第9は孝経(鄭注)と論語に当たる。180行から最終行までが論語部分であり、巻9の巻末には「正嘉元年(1257) 四月十二日加墨点了／前參河守清原(教隆)」とあり。句読、ヲコト点は朱点、仮名点、返読符、声点は墨点である。調査には宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧にて公開されている写真と複製本(古典研究会叢書漢籍之部第13巻、汲古書院、1989)を用いた。

零本(中原家)

(6) 文永本

全10巻中、2巻のみ現存。醍醐寺に巻第7、東洋文庫に巻第8が分蔵されている。巻第7

²³⁾ 沼本(2014: 188-204) 訓点資料において、仮名に施される濁点が右肩に定着した時期は1400年から1500年の間とされる。

の巻末には、「文永五年（1268）閏正月六日書寫之／（花押）／五月七日移點了」とあり、別筆にて「文永七年（1270）十二月十三日以累家之／説奉授三品羽林尊閣畢／主殿権助中原師秀／文永七年十二月廿八日以累家之／説奉授三品羽林尊閣畢／主殿権助中原師秀」の伝授識語があり、巻第8の巻末には「文永五年八月三日以家本書寫畢／九月十一移點了」のみであり、伝授識語の部分は存しない。紀年が明示されている古鈔本の中では最古のものである。

(7) 高山寺中原本

高山寺蔵。10巻のうち、巻第4、巻第8のみが現存する。巻第8には奥書が存せず、巻第4の巻末にある「嘉元元年（1303）九月廿五日於中御門京極令書寫了／大法師了尊／點校了」と、本奥書には安貞二年（1228）年写、寛元元年（1243）中原師有の伝授奥書が存する。巻第8も巻第4の僚本であり、ほぼ同時期の加点であると考えられる。科段、句読、フコト点は朱点、仮名点、返読符、声点は墨点である。欄上・行間には漢文注および、異本との異同を記しているものも存する。調査には、『高山寺古訓点資料 篇一』（汲古書院、1980）及び、高山寺転籍文書総合調査団長の石塚晴通先生から頂いたカラー写真を用いた。

本研究で扱う鈔本は零本・選抄本を含むため、分量はそれぞれ異なるが、漢字音注記には資料別に多寡があり、完本であっても、漢字音注記の種類別にも加点数の差が見られる。完本の3種を基に、漢字音注記の種類ごとの加点状況を第3章の末尾の別表1にまとめた。声点・仮名音注は主として前半部の方に多く施されており、建武本の場合、特に仮名音注が後筆により多く補われている。嘉暦本・建武本の反切注・同音注は正和本に比べて、多くが省略されている。零本・選抄本の場合、分量が少なくなるが、注記の中で、反切注・同音注の書き込みが全くない鈔本（高山寺清原本）もあり、極めて少ない鈔本も見られる（『群書治要』論語部分、反切注1例・同音注1例²⁴⁾）、資料の性格、つまり伝承に重点を置くか、もしくは学習（読み上げ）に重点を置くかにより、その数は増減されるようである。学習に重きがある場合は、仮名音注の加点が非常に多く、高山寺清原本は2巻のみが現存するが、仮名音注の数は816字であり、現存しない他巻にも同様の訓点が施されていたとしたら、完本で現存したと想定すると、その5倍ほどである、4000字以上になる。完本で現存する正和本の場合は、仮名音注の被注字は延べ1622字であるが、それに反して反切注・同音注が最も多く、仮名音注の機能をこれらの注記が代替することが可能であり、敢て施さなかったと考えられる。

中原家鈔本の場合も、文永本・高山寺中原本は同様に各々2巻のみが存するが、漢字音注記の加点は高山寺中原本の方がより多い。文永本は博士家に与る人物が直接加点を行って

²⁴⁾ 『群書治要』経部（巻第1～巻第10、うち巻第4は欠巻）における他巻の反切注、同音字注の被注字数は次の通りである（反切注、同音注の順、佐々木（2009）資料編に基づく）。

巻1（48字、5字）、巻2（27字、8字）、巻3（30字、21字）、巻5（18字、8字）、巻6（13字、7字）、巻7（9字、4字）、巻8（34字、16字）、巻10（5字、4字）。

おり、高山寺中原本は博士家本を基に僧侶により書写・加点が行われているが、加点の際には、一部の加点が増補された可能性も否めない。中原家鈔本は現存資料が少ないため、その実態を把握するのは困難である。ところが、加点の数の増減は、底本による最初の加点以外にも、学習の便宜のために情報の量を増し、可読性を高める側面もあるため、高山寺中原本の方がより学習に重きがある鈔本であると言えるだろう。

3.2 仮名音注

本研究で扱う鈔本のほとんどは鎌倉中期から後期の書写であり、建武本は南北朝時代初期の書写が行われた時点以外にも、室町時代の加点をも含む鈔本である。そのため、仮名音注の多くは、院政期以降の音韻変化を受け、m・n 韻尾の統合、ハ行転呼音による表記の混乱、合拗音の直音化などの音韻変化により、表記の規範性が乱れる仮名が多く見られる。本章では日本語の音韻変化・統合により体系的に乱れたと判断される、いくつかの現象を中心に述べるほか、母胎音（中国語）における特徴を反映すると考えられるものに注目し、これらが如何に仮名表記に反映されているかという点も考察する。最後に、呉音のように別層位の字音が混入した例や、明らかに体系的な齟齬が存すると判断される例を中心に分析することにする。

仮名音注には字画の濃淡・小大に差があるなど、補入と見られる箇所も少なからず存する。これらは、各鈔本の仮名音注が多層的に加点されているためであり、注意を要するべきところである。そのため、本研究では明らかに補入であると疑われる箇所には、所在番号に波線を引いて示すことにした。

3.2.1 非鼻音化の遅れ

漢音は母胎音の長安音の影響と言われる非鼻音化を反映しているため、その影響により明（微）母字はバ行音、泥（孃）母字はダ行音となるが、撥音韻尾を持つ一部の字では、相対的に非鼻音化の進行が遅れることとなる。それらを、『論語』諸本の中に仮名音注ではどのように反映しているかを分析するため、明・泥母字あり、且つ撥音韻尾字を持つ字を中心に仮名音注の声母をどのように表記するかについて着目する。まずは、明母撥音韻尾字における仮名音注が施されている例を集めて分析することとする。以下の表 3-1 は明母（微母）撥音韻尾字の実例と字数を纏めたものである。

表 3-1 明母（微母）撥音韻尾字における仮名音注

		ㄱ 韻尾字						
字	声・韻	正和	嘉暦	建武	高山/清	群書	文永	高山/中
蒙	明・東	モウ(1)		モウ(1)	モウ(1)			モウ(2)
亡	微・陽	ハウ(2)						
罔	微・養	ハウ(2)		ハウ(1)				
望	微・漾			パウ(1)				
盲	明・庚2	ハウ(1)		ハウ(1)	ハウ(1)			

猛	明・梗2							マウ(1)
孟	明・映2			マウ(8)	マウ(2)			マウ(1)
明	明・庚3			メイ(8)	メイ(1)			
盟	明・庚3	メイ(1)			メイ(1)			
命	明・映3	メイ(1)	メイ(1)	メイ(23)	メイ(4)			
名	明・清	メイ(2)		メイ(1)				
n 韻尾字								
字	声・韻	正和	嘉暦	建武	高山/清	群書	文永	高山/中
民	明・真甲			ミン(3)				
敏	明・軫乙	ヒム(2) ヒン(1)	ヒン(1)	ビン(7)				ヒン(1)
閔	明・軫乙			ビン(5)				
文	明・文			ブン(23) フン(6)	フン(2)			
聞	明・文			ブン(1) ブ(1)	フン(2)			フン(1)
聞	明・問	フム(2)		ブン(2)				
問	明・問	フム(4)	フン(2)	ブン(5)				フム(1)
汶	明・問	フン(1)		フン(1)				
門	明・魂	モン(1)		モン(1)	モン(1)			
方	明・願			ハン(1)				
曼	明・願	ハム(1)						
墮	明・換	マム(1)	マン(1)	マン(1)				
蛮	明・刪	ハム(1)		バム(1)	ハン(1)			ハン(1)
慢	明・諫	マム(1)		マン(1)				マン(2)
面	明・線甲			メン(2)				
冕	明・彌乙	ヘム(4) ヘン(1)	ヘン(1)	ベン(3) ヘン(2) ベム(1)	ヘン(1)	ヘン(2)	ヘン(1)	ヘン(3)
免	明・彌乙			ヘン(1)				

上の表の中のうち、明母字の中、マ行音表記が安定しているのは、東韻（モウ）、庚韻 3 等字（メイ）、清韻（メイ）、真韻甲類（ミン）、魂韻（モン）、桓韻（マン）、仙韻甲類（メン）である。一方、ハ行音表記が安定するのは、陽韻（パウ）、真韻乙類（ビン）、文韻（ブン）、元韻（パン）、仙韻乙類（ベン）

庚韻 2 等字のうち、「盲（庚韻/平声）」「猛（梗韻/上声）」「孟（映韻/去声）」は各々声調が異なるだけであり、同韻に属する字であるが、「盲」の仮名は「ハウ」となっている。ところが、「猛」は清原家鈔本の中からは例は見られないが、「孟」は清原家・中原家鈔本において両方とも「マウ」の付音が見られる。更に、「蛮（刪韻/平声）」「慢（諫韻/去声）」もなお声調が異なるだけであり、同韻に属するが、清原家・中原家に関係なく「蠻」は「ハン」、「慢」は「マン」となっている。

その他に、甲乙類が存する真韻、仙韻字の中には、甲類「民」は「ミン」、「面」は「メン」のようにマ行音となっている一方、乙類「敏・閔」は「ヒン（ビン）」、「冕・免」は「ヘン（ベン）」の付音が見られることから、表記の相補分布が見られる。ただし、「民」「面」は後筆が多く含まれる建武本のみに含まれており、加点例が非常に少ないため、他の資料を踏まえて以上の対応関係についても追及すべきである。『群書治要』の中の『論語』以外の部分において、真韻甲類の中には「民」は「ミン（⑧398）」、「甞」は濁声点が施された「ヒン（上濁）（③67、③292）」のような用例が見られることから、同類の中においても字によってマ・バ行が分れる事例も存する。

次は泥母字におけるナ行・ダ行音を出現の具合を、同様の方法で分析する。以下の表 3-2 は泥母撥音韻尾字における仮名音注の実例と字数を纏めたものである。

表 3-2 泥母（嬢母）撥音韻尾字における仮名音注

ŋ 韻尾字								
字	声・韻	正和	嘉暦	建武	高山/清	群書	文永	高山/中
農	泥・冬			ノウ(2)			ノウ(1)	
寧	泥・青	ネイ(3)			ネイ(1)			
倭	泥・徑	ネイ(5)	ネイ(1)	ネイ(11)	ネイ(3)		ネイ(1)	ネイ(3)
寤	泥・徑	ネイ(1)		ネイ(1)				
能	泥・登			ノウ(6)	ノウ(2) ナウ(1)			ノウ(2)
n 韻尾字								
字	声・韻	正和	嘉暦	建武	高山/清	群書	文永	高山/中
難	泥・寒	ナム(1)						
難	泥・翰	ナム(3) ナン(1)		ナン(1)	ナン(2)			ナン(1) タン(1)
年	泥・先			ネン(1)	ネン(1)			
m 韻尾字								
字	声・韻	正和	嘉暦	建武	高山/清	群書	文永	高山/中
南	泥・覃			ナン(4)				

『論語』諸本の中には、泥母撥音韻尾字のダ行音表記はほぼ見られず、大半はナ行音となっている。該当韻類としては、冬韻（ノウ）、青韻（ネイ）、登韻（ノウ）、寒韻（ナン）、先（ネン）、覃母（ナム>ナン）である。ただし、「難」は高山寺中原本において、「タン」(⑧149)の用例が見られるが、なお左側に書き込まれており、後筆である。それに加えて、本研究で扱う7種『論語』鈔本のうち、「難」に濁声点を施す鈔本は見られないため、「ナン」が伝承されてきた字音であるといえる。唯一、m 韻尾字である「南」は建武本以外の他諸本には見られず、「ナン」の付音が見られる箇所が4か所存する。正和本・嘉暦本の中では「南」仮名音注は見られないが、声点加点はすべて単点（非濁点）であり、ナ行音が伝承されてきた字音と判断される。

3.2.2 歯音字（サ行音）における表記の揺れ

日本漢音では歯音声母は基本サ行音となるが、基本拗音表記となる韻母の仮名表記を俯瞰すると、同韻であっても、声母によってサ行直音とサ行拗音となる箇所がある。拗音表記は拗介音を反映したために現れるが、サ行直音と拗音の分布が異なる原因としては、声母の種類の違いがその一因になると考えられる。以下の表 3-3 は同韻内部で直音と拗音が分布がどの声母に集中するかを示したものである。

表 3-3 歯音声母・拗音韻母字における仮名音注

ア段音								
字	声・韻	正和	嘉暦	建武	高山/清	群書	文永	高山/中
将	精・陽			シヤウ(1)				
将	精・漾			シヤウ(1)				
爵	精・藥		シヤク(2)		シヤク(1)		シヤク(1)	

踰	清・陽	サウ(1)		シヤウ・サウ合(1)				サウ(1)
墻(牆)	從・陽	シヤウ(1)	シヤウ(1)	シヤウ(2)	シヤウ(3)		シヤウ(1)	シヤウ(2)
襄	心・陽	シヤウ(2)	シヤウ(1)	ジヤウ(1)	シヤウ(2)		シヤウ(1)	シヤウ(1)
相	心・漾	シヤウ(1)		シヤウ(5)	シヤウ(3)			シヤウ(1) サウ(1)
翔	邪・陽	シヤウ(1)	シヤウ(1)	シヤウ(1)				
莊	莊・陽	サウ(4)	サウ(2) サフ(1)	サウ(4)	シヤウ(1) サウ(1)		サウ(1)	サウ(2)
創	初・漾		サフ(1)	サウ(1)	サウ(1)		サウ(1)	
章	章・陽			シヤウ(7)				
掌	章・養				シヤウ(1)			
繳	章・藥			シヤク(1)				シヤク(1)
昌	昌・陽			シヤウ(2)				シヤウ(1)
綽	昌・藥	シヤク(2)	シヤク(2)	シヤク(2)	シヤク(5)		シヤク(1)	
傷	書・陽			シヤウ(1)				
商	書・陽			シヤウ(4)				
賞	書・養		シヤウ(1)	シヤウ(1)				
向	書・漾	シヤウ(1)	シヤウ(1)	シヤウ(1)				
常	常・陽	シヤウ(2)		シヤウ(2)				
尚	常・陽			シヤウ(1)				
裳	常・陽	シヤウ(1)		シヤウ(2)				
上	常・漾				シヤウ(1)			
攘	日・陽	シヤフ(1)					シヤウ(1)	
壤	日・養			ジヤウ(1)	シヤウ(1)			
讓	日・漾	シヤウ(2)		ジヤウ(4)				
弱	日・藥	シヤク(2)	シヤク(1)		シヤク(2)			シヤク(1)
若	日・藥		シヤク(2)	シヤク(1)				

ウ段音

字	声・韻	正和	嘉暦	建武	高山/清	群書	文永	高山/中
馱	精・屋	シク(2)		シク(2)				
肅	心・屋	シク(2) シ□(1)		シク・シユク(1) シク(1)	シク(3)	シク(1)		シク(1)
宿	心・屋	シユク(2)		シク・シユク(1) シユク(1)				シユク(1) シク(1)
踰	生・屋	シク・シユク(1)	シク(1)	シク(2)				
終	章・東	シウ(1) シフ(1)						
衆	章・送		シウ(1) シフ(1)	シユウ(8) シウ(3) シユ(2)	シウ(1)			
祝	章・屋	シク(2)	シク(2)	シユク(2)	シク(1)		シク(1)	
淑	常・屋			シク(1)				
孰	常・屋	シク(2)	シク(1)	シク(1)				
熟	常・屋	シク(2)	シユク(1) シク(1)	シク(1) シユク(1)				シク(1)
叔	書・屋	シク(2)	シユク(1)	シユク(8)	シク(9)		シク(1)	
戎	日・東				シウ(1)			
肉	日・屋		シユク(1)					
足	精・遇	スウ(1)	スウ(1)	スウ(1)		スウ(1)		
聚	從・麌	シウ(1)		シユウ(1)	シウ(2)			シウ(2)
須	心・虞	ス(1)	スウ(1) スフ(1)	シユ(1)		ス(1)		
数	生・麌	ス(2)		ス(2)				
教	生・遇		スウ(1)	スウ(1)				
朱	章・虞			シユ(1)				
主	章・麌			シユ(5)	シユ(2)			
樹	常・遇			シユウ・シウ(1) シユウ(1)				
戍	書・遇	シウ(1)						
儒	日・虞	シユ(1)		ジユ(1)				

孺	日・遇			シユ(1)				
乳	日・遇			シウ(1)				
酒	精・有	シユ(1)		シユ(2)				
鱸	清・尤	シウ(2)		シウ(1)	シウ(1)		シウ(2)	
就	從・宥	シウ(1)						
修	心・尤		シウ(1)		シウ(1)			
脩	心・尤	シユウ(2)		シウ(1)			シウ(1)	シユ(1)
		シウ(1)		シユウ(1)				
袖	邪・宥	シウ(1)		シウ(1)				
緞	莊・尤	シユ(1)	シウ(1)	ス・シウ(1)				
		シウ(1)						
鄴	莊・尤	スフ(1)	スウ(1)	スウ(1)				
廈	生・尤	シウ(1)	シウ(1)	シウ(1) ²⁵⁾				
周	章・尤			シユウ(18)	シウ(1)			シウ(1)
				シウ(5)				シユウ(1)
洲	章・尤			シウ(1)				
咒	章・宥	シウ(1)		シウ(1)				
臭	昌・宥	シウ(1)	シウ(1)	シウ(1)				
獸	書・宥			シウ(1)				
				シユウ(1)				
受	常・有	シウ(3)		シユ(2)	シウ(2)			スウ(1)
				シユウ(1)				シウ(1)
寿	常・有	シウ(3)						
手	書・有			シユ(1)				
首	書・有	シユ(1)		シユ(1)	シウ・シユ(2)			シユ(1)
								シウ(1)
首	書・宥	シユ(1)		シユウ(1)				
守	書・宥			シユ(1)				
柔	日・尤	シウ(2)		シユウ(1)	シウ(2)		シユ(2)	シユ(1)
才段音								
字	声・韻	正和	嘉暦	建武	高山/清	群書	文永	高山/中
沮	清・魚	シヨ(2)	シヨ(1)	シヨ(3)	シヨ(1)		シヨ(1)	
睢	清・魚	シヨ(2)	シヨ(2)	シヨ(2)				シヨ(2)
叙	邪・語			ジヨ(1)				
				シヨ(1)				
序	邪・語			ジヨ(1)				
俎	莊・語	ソ(1)		ソ(1)	ソ(1)			
楚	初・語			ソ(2)	ソ(1)			
助	崇・御	シヨ(1)			ソ(1)			ソ(1)
蔬	生・魚	ソ(2)	ソ(1)	ソ(3)				ソ(1)
								ソ合・シヨ(1)
疏	生・魚	ソ(2)	ソ(2)	ソ(1)	ソ(1)		ソ(2)	ソ(1)
(疏)								
諸	章・魚			シヨ(5)				
處	昌・御			シヨ(2)				
舒	書・魚	シヨ(1)	シヨ(1)					シヨ(1)
書	書・魚			シヨ(4)	シヨ(1)			シヨ(1)
暑	書・語	シヨ(1)		シヨ(1)				
黍	書・語	シヨ(2)	シヨ(1)	シヨ(1)				
庶	書・御	シヨ(4)	シヨ(2)	ソ(1)				シヨ(1)
			ソ(1)					
恕	書・御	シヨ(1)		ジヨ(1)	シヨ(1)		シヨ(1)	シヨ(1)
				シヨ(1)				
如	日・魚	シヨ(2)	シヨ(1)	シヨ(10)	シヨ(1)			シヨ(1)
				ジヨ(8)				
縱	精・用	シヨウ(1)						
從	精・用	シヨウ(1)						
足	精・燭			ソク(1)	ソク(1)			
從	從・鍾				シヨウ(1)			

²⁵⁾ 建武本の字体は「廈」(生母・宥韻)に作るが、他本においては「廈」に作る。通志堂本『經典釈文』の中では「廈：所留反(匿也)」にしているため、これに依拠して「廈」の誤写として判断した。

従	従・用	シヨウ(2)		シヨウ(2)	シヨウ(1)			セウ(1)
松	邪・鍾			シヨウ(1)				
誦	邪・用	シヨウ(2)	セフ(2)	シヨウ(2) セウ(1)				シヨウ(1)
訟	邪・用	セウ(1)	セウ(1)					
頌	邪・用	シヨウ(2)	シヨウ(1) セウ(1)					
俗	邪・燭	シヨク(3) ソク(1)		シヨク(2)	シヨク(1)		シヨク(1)	シヨク(2)
鐘	章・鍾			シヨウ(1)				
種	章・腫	シヨウ(2)			シヨウ(1)		セウ(1)	セウ(1)
属	章・燭	ソク(1)		シヨク(1)				
属	常・燭	ソク(1) シヨク(1)			シヨク(2)			シヨク(1)
束	書・燭	ソク(1)		ソク(2)				
稷	精・職	シヨク(2)	シヨク(4)	シヨク(3)	シヨク(3)			シヨク(2)
側	莊・職	ソク(1)						
側	初・職	ソク(1)						
色	生・職	シヨク(2)		ソク(5) シヨク・ソク(1)	シヨク(1)			シヨク(1) ソク(1)
畜	生・職	ソク(1)	ソク(1)	ソク(1)		ソク(1)		
職	章・職	シヨク(1)			シヨク(1)			シヨク(1)
称	昌・蒸			シヨウ(7) セウ(4)	シヨウ(3) シヨ(1)			シヨウ(1)
称	昌・證				シヨウ(2)			シヨウ(2)
丞	常・蒸			セウ(1)				
殖	常・職	シヨク(2)		シヨク(1)				
勝	書・蒸			シヨウ(1)				
升	書・蒸	セウ(1)	セウ(1)	セウ(2) シヨウ(1)				
式	書・職	シヨク(1)	シヨク(1)	シヨク(2)				
飾	書・職	シヨク(2)	シヨク(1)	シヨク(2)	シヨク(1)		シヨク(1)	
乘	船・蒸			シヨウ(1)				
乘	船・證			シヨウ(5)				
食	船・職	シヨク(10)	シヨク(1)	シヨク(11)	シヨク(1)			シヨク(1)
仍	日・蒸	セウ(1)						

表 3-3 のように、主として直音表記は正歯音の莊母・初母・崇母と細正歯音の生母に集中する。しかし、正歯音・細正歯音以外の声母字の中でもサ行直音となる箇所が所々に見当たる。「蹠」(清母)のように直音化表記となっているが、建武本には「シヤウ」表記が一端書き込まれてから、後に「サウ」を書き加えたうえに、合点を施すなどの過程を経ているため、經書類における「蹠」の字音は直音が一般的であったと見える。この字音に関しては傍の「倉」の字音によって類推されたとも考えられる。「蹠」の『經典釈文』における音注は「七良反」であり、反切注により類推できる字音は「シヤウ」となる。ところが、建武本では「七郎反」のように反切下字を誤写しており、これによって導き出される字音は「サウ」となる。建武本に「シヤウ」「サウ」の二つの仮名音注が書き込まれていながら、合点が施されているのは反切注に起因するものであろう。

東韻拗音の中では、拗長音化が進み「シウ>シユウ」「シク>シユク」などの表記の揺れがあるものの、「スウ」「スク」といった直音表記はどの声母字であっても『論語』諸本からは見られない。

虞韻(麌韻・遇韻)字の「教」は多音字であり、上声と去声が両方とも声母が生母で一致

し、仮名表記も直音表記となっている。その他に、歯頭音の精母の「足」、細歯頭音の心母の「須」は両方とも直音表記されている。ただし、「足」は他鈔本においても「スウ」で表記されている反面、「須」は正和本・群書治要においては短母音表記「ス」、嘉暦本においては長母音表記「スウ」を、建武本のように拗音表記「シユ」を施しているものも存し（ただし、「シユ」は呉音形である可能性がある）、揺れが著しい。

同じくウ段音となる尤韻（有韻・宥韻）字の中では、殆どが「シユ」「シウ」となっている。直音表記が見られるのは、莊母字であり、「鄴」のみが仮名音注が書き込まれた清原家完本3種の中ではすべて直音表記となっている。しかし、同じく莊母字「緘」は付音がある全鈔本から拗音表記されているが、建武本は直音表記が併記されている。

最後に、オ段音となる魚韻（語韻・御韻）、鐘韻（腫韻・用韻・燭韻）、蒸韻（拯韻・證韻・職韻）の字を見ていくと、前掲の韻母字と同様に歯音二等字に直音表記に集中している。しかし、例外の事例も同様に存する。

正歯音以外の声母の中で直音表記となる魚韻字は「庶（書母）」のみであるが、嘉暦本・建武本の中では直音表記の「ソ」、正和本・嘉暦本・高山寺清原本の中では「シヨ」であり、直音と拗音とで揺れが見られる。鐘韻字では「足（精母）」「俗（邪母）」「属（章母・常母）」「束（書母）」において、直音表記が見られるが、「俗」「属（常母）」は正和本のように拗音表記と直音表記が併記されているほか、「属（章母）」のように正和本においては直音表記「ソク」、建武本においては「シヨク」と表記されている事例もあり、揺れがあると見られる。これらは呉音と同形となっているが、これらが呉音表記の混入か、漢音の中にも同様の表記が混在していたかは定かではない。ところが、「足」「束」は同韻母であるにもかかわらず、拗音表記は見られず、「ソク」のみである。

蒸韻字の中には歯音二等字のみにおいて直音表記が見られるが、生母の「色」のみ、拗音表記「シヨク」が加点されている鈔本もあり、建武本・高山寺中原本のように同種の鈔本の中に「ソク」と「シヨク」が併用されている。正和本、高山寺清原本では拗音表記のみであるが、建武本には「ソク」が5例存し、建武本の加点者はこれらの字音を「ソク」として認識していたと考えられる。漢音の中でも「色」に限っては、資料によって異形態が同時に存在していたように見受けられる。

3.2.3 合口字の表記

各資料の中の合拗音の表記は、鎌倉時代の音韻変化を受けて、合口字が直音化するか、合口性が脱落される用例が多く見られる。合拗音の表記について、本節では、第一に、イ段・エ段ワ行音のア行音への統合「キ>イ、クキ>キ」「エ>エ、クエ>ケ」がどれほど進行しているかという側面と、第二に、牙音・喉音以外の歯音・舌音声母字における「スキ」や「スキン」などの合拗音表記が現れるか否かという側面をもって分析していく。

第一に合口性の脱落を調べるに先立って、合拗音が最も著しく現れる、喉音影母・羊母・于母声母字（ワ・ア行音）、牙音と喉音の曉母・匣母声母字（カ行音）を中心に挙げる。

一部の字には「㊦ヨウ>㊧ウ」のような表記の変化や、長音化を反映した「㊦イ」などの表記も見られるが、ワ行音の表記がない場合は、合口性が消滅したと判断する（ただし、「クイヨウ」「クエン」は合拗音「クヰ」「クヱ」と同様に扱う）。

まず、漢音形において、原則「ヰ」を介する字を挙げ、合拗音の残存と統合の事例を見ていく。以下の表3-4は本研究で扱った『論語』諸本の中のイ段合拗音となる字に仮名音注が施されたものである。

表3-4 イ段合口字における仮名音注（牙音・喉音声母）

通撰・曾撰／㊦キヨウ（ク）>㊦ヨウ（ク）・㊦ウ								
字	声・韻	正和 (5:16)	嘉暦 (4:3)	建武 (4:26)	高山/清 (1:2)	群書 (1:0)	文永 (0:1)	高山/中 (0:7)
恭	見・鍾	ケウ(2) クキヨウ(1) キヨウ(1)	ケウ(1)	キヨウ(5) キヤウ(3) キヨフ(1) ケウ(1)				キヨウ(1)
共	見・鍾			キヨウ(1)				
拱	見・腫	クキヨウ(1)		クキヨウ・ キヨウ(1)				
供	見・用			クキヨウ(1)				
曲	溪・燭				クキヨク(1)			
共	群・用	クキヨウ(1)	クキヨウ(1)	ケウ(1)		クキヨウ(1)		
玉	疑・燭			ギヨク(4)				
獄	疑・鍾	キヨク(1)						
凶	曉・鍾	ケウ(1)		ケウ(1)				
矜	見・蒸	ケウ(2) キヨウ(1) クキヨウ(1)	クイヨウ(1) キヨウ(1)	キヨウ(3) クキヨウ(1) キヨウ・キ ヤウ(1)	キヨウ(1)		キヨウ(1)	キヨウ(1)
兢	見・蒸			キヨウ(1)				キヨウ(1)
棘	見・職		キヨウ(1)	キヨウ(1)				
極	群・職	キヨク(2)		キヨク(1)				
興	曉・蒸	ケウ(3)		キヨウ(1)	キヨウ(1)			ケウ(2) キヨ(1)
雍	影・鍾	ヨウ(2)	キヨウ(1) ヨウ(1)	ヨウ(3) キヨウ(1)				エウ(1)
邕	影・鍾	キヨウ(1)	キヨウ(1)					
応	影・證	ヨウ(1)		ヨウ(1)				
億	影・職			ヨク(1)				
止撰／㊦キ>㊦								
字	声・韻	正和 (20:11)	嘉暦 (8:0)	建武 (12:54)	高山/清 (8:0)	群書 (3:0)	文永 (3:0)	高山/中 (6:0)
帛	見・微	クキ(1)		キ(5) クキ(1)				
季	見・至			キ(20)				
鬼	見・尾			キ(5)				
篋	見・旨	キ(1)		クキ(1)				
貴	見・未			キ(1)				クキ(1)
龜	見・脂	クキ(1)		キ(1)	クキ(1)			クキ(1)
喟	溪・至	クキ(2)	クキ(1)	キイ(1) キ(1)				
匱	群・至	クキ(2) ²⁶⁾	クキ(1)	キ(1)	クキ(1)	クキ(1)		
篋	群・至	クキ(3) キ(1)	クキ(1)	キ(2) クキ(1)	クキ(2)	クキ(1)	クキ(2)	
危	疑・支	クキ(2)	クキ(1)	クキ(3)				

²⁶⁾ 1例は本文を「横」(㊦159A)に作り、異本注記「匱キ(摺)」あり。

		キ(1)						
巍	疑・微	クキ(1)		ギ(3) キ(1)				クキ(1)
魏	疑・未	ギ(1)		ギ(1)				
揮	曉・微	キ(1)	クキ(1)	クキ(1)	クキ(1)			クキ(1)
毀	曉・紙	クキ(2)		クキ(3)				
尉	影・未	キ(3)	キ(1)	イ(2)				
威	影・微	イ(1)		イ(2) キ・イ(1)			キ(1)	キ(1)
委	影・紙	イ(1)						
惟	羊・脂	キ(1)	キ(1)	イ(2)				
遺	羊・脂	キ(1)		イ(1)	キ(1)			
唯	羊・旨	イ(1)	キ(1)	キ(1)				
帷	于・脂	イ(2)						
為	于・支	イ(1)		イ(2)	キ(2)			キ(1)
為	于・寘							キ(1)
韋	于・微	キ(1)		イ(1)				
臻撰／㊦キ>㊦ン								
字	声・韻	正和 (3:1)	嘉暦 (1:2)	建武 (1:2)	高山/清 (2:0)	群書 (1:0)	文永 (1:0)	高山/中 (3:0)
均	見・諄	クキン(1)			クキン(2)		クキン(1)	クキン(2)
鈞	見・諄	クキン(1)	クキン・キ ン(1)	クキン(1)				クキン(1)
允	羊・準	イン(1)	イム(1)	イン(1)				
尹	羊・準	キム(1)		イン(3)		イン(1)		
宕撰／㊦キヤウ(ク)>㊦ヤウ・㊦ワウ(ク)								
字	声・韻	正和 (3:9)	嘉暦 (0:1)	建武 (2:10)	高山/清 (1:0)	群書 用例無し	文永 用例無し	高山/中 (1:0)
躍	見・藥	キヤク・ク ワク(1)	クヤク(1)	クキヤク(1) キヤク(1)				
匡	溪・陽	キヤウ(3)		キヤウ(2)				
狂	群・陽	キヤウ(4) クキヤウ(1)		キヤウ(7)	ワウ(1) ²⁷⁾			クキヤ(1)
悅	曉・養	クワウ・キ ヤウ(1)		クキヤウ(1)				
曾撰／㊦キ>㊦キ								
字	声・韻	正和 (0:4)	嘉暦 (1:1)	建武 (4:1)	高山/清 (3:0)	群書 (1:0)	文永 (1:0)	高山/中 (2:0)
洫	曉・職	イキ(1)	キキ(1) イキ(1)	キキ(3)	キキ(1)	キキ(1)	クキキ(1)	
域	于・職	イキ(2)		イキ(1)	キキ(2)			キキ(2)
闕	于・職	イキ(1)		キキ(1)				

以上の例のように、最も多く合口の原音の痕跡を残しているのは、止撰字であり、比較的「キ」「クキ」の語形を残している。

合拗音の表記は時代が下るにつれ消失するが、建武本の場合、直音化が進んでいる室町期の後筆が多く含まれているため、合拗音の表記は極めて少ないが、その中には職韻合口字である「洫」「闕」はすべて「キキ」として表記されている。唯一「域」のみが「イキ」として表記されているが、建武本より古い書写本である正和本では、すべて合口性は失われた表記である「イキ」となっている。建武本の後筆を一々峻別することは困難であるが、「キキ」の付音がある底本の転写により受け継がれたと考えられる。「洫」の『經典釈文』の反切注は「呼域反」となっているが、曉母の字は日本漢音では原則的に「カ」行音とな

²⁷⁾ 「クワウ」の一部を表記したものと考えられる。

るため、中原点本の文永本の「クキキ」は反切注に基づいた字音であろう²⁸⁾。

「クキヨウ」「クキヤク」のように合拗音・開拗音が共起する通摂・宕摂字の表記は、鎌倉時代の資料には残存するものの、その多くは合口性を消失し、開拗音表記となっている。宕摂字「クキヤウ」「クキヤウ」の場合はア段合拗音表記「クワウ」となるか、ア段開拗音表記「キヤウ (クヤウ)」のようになる事例も見られる。このように、構造が複雑な「クキヤウ」の諸要素は早くから一部の要素が捨象され単純化するが、

一方、韻尾のない単純な音韻構造である、止摂「クキ」のような表記は、より長く保たれると判断される。

次は、エ段合拗音の事例を見ていく。下の表 3-5 は原則エ段拗音となる字に施された仮名音注の実例をまとめたものである。

表 3-5 エ段合口字における仮名音注 (牙音・喉音声母)

蟹摂 / ㊦エイ > ㊦イ								
字	声・韻	正和 (2:4)	嘉暦 (2:1)	建武 (1:26)	高山/清 (4:0)	群書 用例無し	文永 (1:0)	高山/中 (3:0)
圭	見・齊	ケイ(2)		ケイ(3)				
珪	見・齊	ケイ(1)		ケイ(1)				
恵	匣・霽	ケイ(1)	クエイ(1) ケイ(1)	ケイ(9) ケイ・クエイ(1)	クエイ(3)			クエイ(1)
慧	匣・霽	クエイ(1)		ケイ(1)	クエイ(1)		クエイ(1)	クエイ(1)
衛	于・祭	エイ(1)	エイ(1)	エイ(11)				エイ(1)
山摂 / ㊦エン (ツ) > ㊦エン (ツ)								
字	声・韻	正和 (5:14)	嘉暦 (1:8)	建武 (7:25)	高山/清 (5:0)	群書 用例無し	文永 (5:3)	高山/中 (10:3)
狷	見・線	ケン(1)	ケン(2)				ケン(1)	
讜	見・屑	ケツ(1)		クエツ(1)	クエツ(1)		クエツ(1)	
決	見・屑	ケツ(1)						クエツ(1)
犬	溪・銑			ケン(1)				
闕	溪・月	ケツ(2)	ケツ(1)	ケツ(3)			クエツ(2)	ク□ツ(1)
缺	溪・薛	ケツ(1)		クエツ(1)				
權	群・仙	クエン(1) ケム(1)	ケン(2)	クエン(1) ケン(1)				
原	疑・元			ゲン(2)				
元	疑・元	クエン(1)						
愿	疑・願	クエン(1)		グエン(1) ケン(1)				クエン(2)
月	疑・月			ケツ(2) ゲツ(2) ケツ・ゲツ(1)				
絢	曉・霰	ケム(1)		クエン(1)				
血	曉・屑	クエツ(1)		ケツ(3)	クエツ(2)			ケツ(1) クエ(1)
玄	匣・先	ケム(1)		ケン(2) ゲン(2)				
淵	影・先	エン(1) エン(1)		エン(1)				エン(2)

²⁸⁾ 佐々木 (2009: 218) は「泚: キキ>イキ」を漢音形として認めてもよいとの見解を出している。一方、『広韻』における同音字、闕「イキ」(㊦164A)は經典釈文の同音注である「音域」から生じたものと考えた方が妥当であろう。『広韻』には于母が確認できないが、『集韻』では多音字であり「越逼切 (于母)」「忽域切 (曉母)」の二音が認められる。

怨	影・願	エン(1)	エン(1)	エン(1)			エン(2)	エン(2)
悦	羊・薛	エツ(1)						
説	羊・薛		エツ(1)					
遠	于・阮			エン(3)	エン(1)			エン(3)
瑗	于・線	エン(1) エム(1)	エン(2)	エン(2)	エン(1)		エン(2)	
梗撰／㊦エイ(キ) > ㊧イ(キ)								
字	声・韻	正和 (0:4)	嘉暦 (1:1)	建武 (0:11)	高山/清 用例無し	群書 用例無し	文永 用例無し	高山/中 用例無し
兄	曉・庚	ケイ(1)		ケイ(8)				
役	羊・昔	エキ(2)	エキ(1) エキ(1)	エキ(1)				
疫	羊・昔	エキ(1)						
栄	于・庚			エイ(1)				
詠	于・映			エイ(1)				

エ段合拗音は高山寺清原本では直音化の例が見られないことから、古い体系を維持していたと見られる。しかし、3種の清原家完本では直音化が目立つ。特に蟹撰・梗撰字合口字の中では合拗音を反映している仮名音注は少なく、直音化がかなり進んでいると見られる。山撰字のように該当の字が多く見られる箇所においても、合拗音表記が一部見られるものの、直音表記が圧倒的に多い。ところが、中原家鈔本の文永本、高山寺中原本の用例を見ていくと、清原家鈔本と比べ、合拗音表記が依然として多く残っていることが確認できる。梗撰の字のみ用例を確認できないが、蟹撰・山撰字の中では「エ」を介在する表記や、「血クエ」のように仮名音注の一部を表記したと見られる事例においても、「エ」が「エ」へと音韻の統合を反映しているものの、原音における合口性を表そうとしているものも存する。

イ段合口字の中では韻尾を持たない単純な構造の中では、残存が遅くなるようであるが、エ段合口字の中では韻尾を持たない「クエ」のような字音は漢音形にないため、エ段合拗音は直音化がより進んでいるように見えると判断される。

最後に、牙音・喉音以外の合拗音表記について取り上げる。次の表 3-6 は歯音と舌音声母における合拗音表記を見ていく。

表 3-6 歯音・舌音合拗音における仮名表記

止撰／㊦ㄱ・㊧ㄱイ > ㊨イ								
字	声・韻	正和 (5:8)	嘉暦 (1:7)	建武 (2:9)	高山/清 (0:2)	群書 (0:2)	文永 (0:1)	高山/中 (0:5)
莖	従・至	スイ(1)	スイ(1)					
随	邪・支			スイ(1)				
燧	邪・至	スイ(1)	スイ(1)	スイ(1)				
綏	心・脂	スヰ(1) スイ(1)	スイ(2)	スヰ(1) スイ(1)				
衰	生・脂	スヰ(1)						スイ(1)
帥	生・至	スイ(2)	スイ(1)	スイ(2)		スイ(1)		
出	昌・至		スイ(1)			スイ(1)		
瑞	常・眞	スヰ(1)						
誰	常・脂	スイ(2)						
類	来・至			ルイ(1)	ルイ(2)		ルイ(1)	ルイ(2)
縲	来・脂	ルイ(1)	ルイ(1)	ルイ(1)				
誅	来・旨	ルヰ(1)	ルヰ(1)	ルヰ(1) ルイ(1)				ルイ(2)
罍	来・旨	リュヰ(1)		ルイ(1)				

臻撰／㊦キン・㊧キン（ツ）＞㊨ユン・㊩ン								
字	声・韻	正和 (1:8)	嘉暦 (1:4)	建武 (2:32)	高山/清 (0:8)	群書 用例無し	文永 (1:1)	高山/中 (1:2)
循	邪・諄	シユン(2)		シユン(1)				
恂	心・諄	シユム(1)	シユン(1)	シユン(1)				
荀	心・諄		シユン(1)	シユン(1)				
春	昌・諄			シユン(1)				
出	昌・術			シユツ(1)	ヒツ(4)			
舜	書・稔			シユン(7)	ヒン(1)			
楯	船・準	シユン(1)		スキン(1)	ヒン(1)		シキン(1)	シキン(1)
順	船・稔		シユム(1)	シユン(1)	ヒン(1)		シユン(1)	シユム(1) シユン(1)
述	船・術			ジュツ(1)				
純	常・諄	シユン(2) スキム(1)	シユン(1) スキン(1)	ジュン(1) スキン(1)				
潤	日・稔	シユン(1) ジュム(1)		シユン(1) ジュン(1)	ヒン(1)			
論	来・諄			リン(13)				
倫	来・諄			リン(2)				

上掲の表の通り、止撰字の本研究で対象にした完本三種の資料には「スキ」「ルキ」と「スイ」「ルイ」といった表記も並存している。一方、他4本からは「㊦キ」の例を見出すことが出来ない。佐々木(2009)は「反切・同音字注に支えられた軌範的な音注を施す資料」に「㊦キ」表記が集中することを述べており、本研究で扱う『論語』諸本のうち特に反切注を多く施している正和本において、止撰における「㊦キ」表記が最も多い。表3-6の止撰字のうち「㊦キ」表記が見られる5字のうち、各本に反切注・同音注が書き込まれている字は、正和本「綏(⑤250、音雖)」「罍(①3、力軌反)」「誄(④136、力軌反)」、嘉暦本の「誄(④136、力軌反)」、建武本「綏(⑩92A、音雖²⁹⁾)」「誄(④113、力鬼反)」であり、「㊦キ」の事例すべてに書き込まれているわけではない。

ところが、各本が参照した『經典釈文』には現存本との異同があった可能性も十分ある上に、他の該当箇所から同被注字の音注を補ったもの、更には各本には『經典釈文』所引の音注を書き加えず、いわば「無標」の形であるだけで、仮名音注・声点の加點作業にはこれらの音注が取り入れられたものもあったと想定される。

正和本の「瑞(⑤49A)」の場合は、音注の書き込みは認められないが、通志堂本には「此瑞：時患反」の音注がある。その反面、正和本の「綏(⑤250)」には「音雖」の音注の書き込みがあるが、通志堂本の該当箇所からはその典拠が見当たらない。これは、正和本が用いた『經典釈文』には当該の音注があったか、もしくは他章の音注を補うことにより(通志堂本の巻第10に当たる子張篇には「綏之：音雖」がある)、仮名音注にも影響があったと見られる箇所である。

ただし、正和本の「衰(⑨65A)」の場合は、『經典釈文』『論語音義』にはその「衰：七雷反(子罕篇)」「齊衰：七雷反(郷党篇)」の2条があるが、当該の字音は喪服(漢音形：サイ)を意味するものであり、正和本に仮名音注が書き込まれた「衰」は「盛衰」の語の一部であるため「衰える」との意味とは異なるため、この字に限っては反切注・同音注と

²⁹⁾ 仮名音注は割注(⑩92A)に書き込まれているが、同音注の「音雖」は本文(⑩90)に書き込まれている。

の関連性は薄いと思われる。

次に臻撰の用例を見ていくと、「純」と「楯」に「㊦キン」形の字音が見られる。「純」の該当箇所には「也純：順倫反。絲也（子罕篇）」の音注があり、正和本・建武本は当該音注が書き込まれているが、嘉暦本にはこれが「無標」の形で仮名音注に取り入れられたと思われる。「㊦キン」形の仮名音注はすべて割注である「純絲也」に書き込まれているものであり、他篇に「純」を含む「純素」「純如」の語にはすべて「シユン」の仮名音注が施されており、反切注による影響があったと考えられる。

「楯」もなお通志堂本に「盾：又作楯。並食允反」の音注があるが、清原家鈔本の正和本には「シユン(⑧147A)」、建武本には「スキン(⑧174A)」、高山寺清原本は「ヒン(⑧99A)」であり、諸本によって区々であるが、建武本のみ「㊦キン」表記であり、反切注は書き込まれていない。反切注・同音注がまったく書き込まれていない高山寺清原本を除き、当該の音注が書き込まれている清原家鈔本は正和本のみであるが、一般的に本文・割注の左右に書き込まれる反切注・同音注とは異なり、欄上に「盾：字又作楯食允反又句（句の誤りか）」の異本注があり、直接的な引用ではなく、仮名・声点の加点作業が一端終わったのちに、校勘の際に書き込まれた注であると考えられる。

一方、中原家鈔本の文永本・高山寺中原本には両方とも「シキン(⑧113A／⑧134A)」の仮名音注があるが、その他に通志堂本には見られない同音注「音順」が書き込まれている。これらのことから、「㊦キ」「㊦キン」などの仮名音注は原音を忠実に反映する装置である「反切注・同音注」の働きがある程度作用しているという風に見受けられる。

ただし、高山寺清原本の場合は、臻撰字齒音声母字がすべて「ヒン」「ヒツ」のようなハ行音で付音を施しており、異色を放つ。

沼本(1980)は「これ等の事象は清原本が音声言語に依る学習の結果を反映している事を示している。即ち、清原本の識語「能と讀寫了」に照して考えれば、現在ある形に成立する段階で口誦口授が行われた事を意味している。そしてその段階で清原本の場合は不要の釈文引用注が消滅してしまったと考えることが出来る(中略)日本漢音の維持には正式音注の支えが有ったはずと述べたが、清原本にそれが見られないのに対して、口頭語的要素がより多いのは、やはり関連した問題ではないかと考えるのである」との意見を示している。これは、奥書から清原家鈔本を底本としていることが確認できる鈔本であるが、他の『論語』鈔本において、サ行合拗音もしくは開拗音で現れるに反して、字音の表記が異なるのは、個人差、特に方言のような地方的な特色を持つゆえのものであると判断される。

3.2.4 ハ行転呼音による表記の混同

次は二音節以降のワ行・ア行音の表記がハ行転呼音により、ハ行音に表記される箇所について検討する。これらの混同は原則「フ」に表記される p 韻尾を持つ深撰・咸撰入声字、「ウ」に表記される η 韻尾を持つ通撰・江撰・宕撰・梗撰(3・4等字を除く)・曾撰と u

韻尾を持つ遇撰（虞韻）・效撰（唇音を除く）の間で見られる。以下の表 3-7 は本研究で扱った 7 種の『論語』諸本におけるハ行転呼音による表記の揺れをまとめたものである。

表 3-7 ハ行転呼音による表記の揺れ

韻尾	表記	正和	嘉暦	建武	高山/清	群書	文永	高山/中
p 韻尾	フ表記	13	9	29	4	2	2	11
	ウ表記	20	5	13	11	0	1	3
ŋ 韻尾	ウ表記	175	56	461	93	6	22	67
	フ表記	8	8	1	6	0	1	2
u 韻尾	ウ表記	105	60	345	89	11	24	50
	フ表記	17	12	1	4	0	0	4

p 韻尾字における表記の混同の比率が ŋ、u 韻尾字に比べて極めて高い。p 韻尾字の場合、清原家の『論語』3 本および高山寺清原本では両者の混同のより著しく、正和本、高山寺清原本のように「ウ」表記が「フ」表記を上回る鈔本も見当たる。一方、中原本にも同様にウ表記も存する。群書治要はハ行転呼音による混同は見られず、論語部分のみならず、経部（巻第 1～巻第 10）全体における p 韻尾字の仮名音注が施されている 38 例のうち、促音表記 2 例「蟄(⑦55)」「盍(⑨310)」と不適切と見られる字音 2 例「繫(③265、漢音形チフ)」「儻(⑦16)」³⁰⁾を除き、34 例はすべてフ表記となっている。このことから、『群書治要』の場合、規範的な表記の字音を施すために努めていたのではないかと考えられる。

原音に ŋ 韻尾を有する通撰・江撰・宕撰・梗撰・曾撰字より、u 韻尾を有する效撰・流撰字からは、その混同が著しいことが認められる。しかしながら、u 韻尾字においてフ表記が多く見られる正和本、嘉暦本の場合、「フ」表記の多くが後世の人による別筆と判断され、単にウ・フの境目が弱くなっている時期であるからというよりは、個人が持つ表記の規範が異なるためであり、/u/という音韻を書き記すに当たり「フ」という表記を用いる加点者によるものが、一部加筆されたためであろう。

その他には、以下のように合拗音表記における「ワ」を「ハ」に表記する例や、i 韻尾表記の「イ」を「ヒ」に表する例が稀に存する。

- ・正和本：「禍(⑧65A)」
- ・嘉暦本：「怪(④74)」「榔(⑥27A)」^{クハク}「果(⑦137A)」^{クハ}
- ・建武本：「絵(②30A)」^{クハイ}
- ・高山寺/中：「慧(⑧43)」^{クエヒ}

3.2.5 「㊦ヨウ」と「㊦ウ」の混同

鎌倉以降からは音韻変化の影響により「㊦ヨウ」（通撰鍾韻³¹⁾・曾韻蒸韻）と「㊦ウ」（效撰宵韻・蕭韻）および「㊦フ」（咸撰葉韻・帖韻・業韻）の間に発音が統合し、拗長

³⁰⁾ 佐々木（2009）資料編を基に集計したものである。

³¹⁾ 「封：ホウ」のように直音となる唇音声母字は除く。

音化するが、そのための表記の混同例も多く見られる。このように表記の揺れが見られる箇所に着目して、且つどれほどの混同例が見られるかを示す。まずは、原則「㊦ヨウ」の表記となる通撰と曾撰における仮名音注の表記を下の表 3-8 にまとめる。

表 3-8 鐘韻・蒸韻字における仮名音注

通撰・曾撰／㊦キヨウ・㊦ヨウ>㊦ウ								
字	声・韻	正和 (28:14)	嘉暦 (11:7)	建武 (59:14)	高山/清 (15:0)	群書 (1:0)	文永 (1:1)	高山/中 (12:8)
恭	見・鍾	ケウ(2) クキヨウ(1) キヨウ(1)	ケウ(1)	キヨウ(5) キヨフ(1) ケウ(1)				キヨウ(1)
共	見・鍾			キヨウ(1)				
拱	見・腫	クキヨウ(1)		クキヨウ・ キヨウ(1)				
供	見・用			クキヨウ(1)				
共	群・用	クキヨウ(1)	クキヨウ(1)	ケウ(1)		クキヨウ(1)		
凶	曉・鍾	ケウ(1)		ケウ(1)				
縦	精・用	シヨウ(1)						
従	精・用	シヨウ(1)						
従	従・鍾				シヨウ(1)			
従	従・用	シヨウ(2)		シヨウ(2)	シヨウ(1)			セウ(1)
鐘	章・鍾			シヨウ(1)				
種	章・腫	シヨウ(2)			シヨウ(1)		セウ(1)	セウ(1)
松	邪・鍾			シヨウ(1)				
訟	邪・用	セウ(1)		セウ(1)				
誦	邪・用	シヨウ(2)	セフ(2)	シヨウ(2) セウ(1)				シヨウ(1)
頌	邪・用	シヨウ(2)		シヨウ(1) セウ(1)				
冢	知・腫	テウ(1)	テウ(1)	チヨ(1)				
重	澄・鍾							テウ(1)
重	澄・用		テウ(1)	テウ(1)				テウ(1)
雍	影・鍾	ヨウ(2)	キヨウ(1) ヨウ(1)	ヨウ(3) キヨウ(1)				ユウ(1)
邕	影・鍾	キヨウ(1)	キヨウ(1)					
容	羊・鍾			ヨウ(4)				ヨウ(2)
庸	羊・鍾	ヨウ(3)	ヨウ(1)	ヨウ(2)	ヨウ(2)			ヨウ(1)
勇	羊・腫	ヨウ(4)	ヨフ(1) キヨウ(1)	ヨウ(4)	ヨウ(1)			ヨフ(1)
用	羊・用	ヨウ(1)		ヨウ(3)	ヨウ(1)			
矜	見・蒸	ケウ(2) キヨウ(1) クキヨウ(1)	クイヨウ(1) キヨウ(1)	キヨウ(4) クキヨウ(1)	キヨウ(1)		キヨウ(1)	キヨウ(1)
兢	見・蒸			キヨウ(1)				キヨウ(1)
興	曉・蒸	ケウ(3)		キヨウ(1)	キヨウ(1)			ケウ(2) キヨ(1)
称	昌・蒸			シヨウ(7) セウ(4)	シヨウ(3) シヨ(1)			シヨウ(1)
称	昌・證				シヨウ(2)			シヨウ(2)
丞	常・蒸			セウ(1)				
升	書・蒸	セウ(1)	セウ(2) シヨウ(1)	セウ(1)				
勝	書・蒸			シヨウ(1)				
乘	船・蒸			シヨウ(1)				
乘	船・證			シヨウ(5)				
仍	日・蒸	セウ(1)						
徵	知・蒸	テフ(1)		チヨウ(1)				
憑	並・蒸	ヘウ(1)	ヒヨウ(1)	ヘウ・ヒヨ ウ(1)				ヘウ(1)

應	影・證	ヨウ(1)		ヨウ(1)				
---	-----	-------	--	-------	--	--	--	--

被注字数が極めて少ない群書治要論語部分、文永本からは以下の表記の揺れを把握し難いが、「㊥ウ」と表記される用例と声母・韻母の間には直接的な関係は見られず清原家鈔本の完本3種の中には、「㊦ヨウ」が「㊥ウ」へと表記されている事例が混じていることが分かる。建武本は室町時代の後筆があり、「㊥ウ」のみならず、牙音声母字の一部の中には「㊦ヤウ」の表記も散見される。しかし、同じ清原家底本を用いたとされる高山寺清原本の場合は、完本3種と比べて両者が混同する事例はまったく見られない。高山寺中原本の中の場合は、清原家鈔本の完本3種と同様、両者の混同が著しい。

次は、原則「㊥ウ」表記となる效撰と「㊥フ（促音表記を除く）」表記となる咸撰入声字における「㊦ヨウ」の仮名表記を見ていく。以下の表3-9は該当字を纏めたものである。

表3-9 宵韻・蕭韻・葉韻・帖韻・業韻における仮名音注

效撰・咸撰／㊥ウ>㊦ヨウ								
字	声・韻	正和 (40:3)	嘉暦 (20:2)	建武 (67:12)	高山/清 (19:0)	群書 (7:0)	文永 (4:1)	高山/中 (13:6)
漂	滂・宵		へウ(1)					
剽	滂・笑					へウ(1)		
瓢	並・宵	へウ(1)		へウ(1)				
廟	明・笑			べウ(5)	へウ(1)			
彫	端・蕭	テウ(1)	テウ(2)	テウ(2)				
鳥	端・篠	テウ(1)		テウ(2)				
弔	端・嘯	テウ(1)		テウ(1)				
釣	端・嘯	テウ(1)	チヨウ(1)	テウ(1)				テウ合・チヨ(1)
朝	知・宵			テウ(1)				
超	透・宵	テフ(1)		テウ(1)				
条	定・蕭	デウ(1)						
調	定・蕭		テフ(1)		テウ(1)		テウ(1)	テウ(1)
篠	定・嘯	ゼフ(1)	テウ(1)	テウ・セウ合(1)				
朝	澄・宵	テウ(1)		テウ(9)				
趙	澄・小	テウ(2)		テウ(2)				テ□(1)
徼	見・蕭	ケウ(1)	ケウ(1)	ケウ(1)				
驕	見・宵	ケウ(3) ケフ(1)	ケウ(1)	ケウ(2)	ケウ(1)			ケウ(1)
皦	見・篠	ケウ(1)	ケウ(1)	ケウ(1)				
僑	群・宵	ケウ(1)		ケウ(1)		ケウ(1)		
堯	疑・蕭	キヨウ(1)		ギヨウ(4) ケウ(1) ゲウ(1)				
蕭	心・蕭	シヨウ(1) セウ(1)	セウ(1)	セウ(2)	セウ(2)			シヨウ(1)
小	心・小			セウ(6) シヨウ(1)	セウ(1)	セウ(1)		シヨウ(1)
笑	心・笑	セウ(1)		セウ(1)				
昭	章・宵			セウ(1)				
少	書・小				セウ(1)			
少	書・笑			セウ(4)				
韶	常・宵	セウ(1) ゼウ(1)		ゼウ(3)	セウ(2)			セウ(1) シヨウ(1)
召	常・笑	セウ(1)		セウ(2)	セウ(2)			
邵	常・笑	セウ(1)		セウ(1) シヨウ(1)				
曉	曉・篠	ケウ(1)		ケウ(1)				
夭	影・宵	エウ(1)	エウ(1)	ヨウ(1)		エウ(1)		

要	影・宵			ヨウ(1)	エウ(2)			
天	影・小	エウ(1)	エウ(1)	ヨ□(1)				
要	影・笑	ヨフ(1)		ヨウ(1)				
揺	羊・宵			ヨウ(1)				
陶	羊・宵	エウ(2)	エフ(1) ヨウ(1)	ヨウ(1)		エウ(2)		
寮	来・蕭		レフ(1)	レウ(1)	レウ(3)		レウ(1)	
了	来・篠	レウ(1)			レウ(1)		リョウ(1)	リョウ(1) リヨ□(1)
繚	来・篠			レウ(1)				
擾	日・小	セウ(1)		セウ(1)				
輒	端・葉	テウ(2)	テフ(1)	テウ(1)				テフ(2)
接	精・葉	セウ(1)		セウ(2) セフ・セウ(1)	セウ(1)		セフ(1)	セフ(1)
妾	清・葉	セウ(1)	セウ(1)		セウ(1)			セウ(1)
捷	從・葉	セフ(2)	セフ(1) セウ(1)	セフ(2)				セフ(1)
撰	書・葉			セフ(1)				
葉	書・葉	セフ(3)	セフ(2) セウ(1)	セウ(2)		セフ(1)	セフ(1)	セフ(3)

「㊤ウ」となる效撰字の中には「㊤ヨウ」表記となる字は清原家・中原家、両方の鈔本に見られる。ただし、通撰・會撰でも挙げたように清原本の高山寺清原本、群書治要論語部分では混同例は見られないことは、混同が著しくなる時期の前の段階に書写加点された底本が利用されたことが考えられる。混同例は高山寺中原本に多く見られることから、底本のみならず、加点者が当該字の字音を当時の「㊤ヨウ」と「㊤ウ」の統合が進行していた口語に頼って表記していたと見られる。

しかし、咸撰字の中には7種の鈔本の中に「㊤ヨウ」表記は一例も見られない。加点年代が比較的新しく、後筆が交じる建武本の中でも八行転呼音により「㊤フ」から「㊤ウ」となる表記は見られるが、表記上では区別は效撰字よりは保たれていたと見られる。咸撰字の場合、入声字のみが該当する。

ところが「㊤フ」のようなp韻尾字は、「㊤ツ」のように後続の子音の影響で促音化する事例も見られることから、「㊤フ」は韻尾の入破音の性格を遅くまで保存したために、「㊤ウ」よりは「㊤ヨウ」との音韻の統合が遅れた可能性がある。

3.2.6 長母音表記

本節では原則短音表記となる字の中で、長母音表記で仮名音注が施されている部分を注目する。対象字としては、止撰字、果・仮撰字、遇・流撰字があり、一般的に用いられる短母音表記と長母音表記との比率を示し、各本における仮名音注を比較することにより、諸本間の差があるかを調べる。下の表 3-10 は『論語』鈔本の仮名音注のうち、長母音表記が現れる字を特記し（灰色で囲んだ箇所）、音注の例の数をまとめたものである。ただし、対象字が極めて多いため、長母音表記が現れる字のみを挙げ、他本の仮名と比較することとどまる。

表 3-10 長母音表記

止撰

字	声・韻	正和 (0)	嘉暦 (0)	建武 (15)	高山/清 (0)	群書 (0)	文永 (1)	高山/中 (2)
姫	見・之	キ(1)	キ(1)	キ(2)				キ(1) キイ(1)
四	心・至			シイ(5) シ(2)				
食 [×]	邪・志	シ(6)	シ(2)	シ(9) シイ(1) シ・シイ(1)				
至	章・至			シイ(2)				シ(2)
是	常・紙	シ(4)	シ(2)	シイ(3)				
弑	書・志	シ(3)		シイ(1)				
殺 [×]	書・志 ³²⁾			シイ(1) シイ・シ(1)	シ(3)		シ(1)	シ(2)
噫	影・之	イ(3)	イ(3)	イ、(2) キイ(1)			イ(1)	
希	曉・微	キ(2)			キ(1)		キイ(1)	キイ(1)
喟	溪・至	クキ(2)	クキ(1)	キイ(1) キ(1)				
遇撮・流撮								
字	声・韻	正和 (2)	嘉暦 (0)	建武 (15)	高山/清 (0)	群書 (0)	文永 (0)	高山/中 (0)
旅	来・語	リヨ(1)	リヨ(1)	リヨ(3) リヨウ(1)	リヨ(3)			
暮	明・暮	ホウ(1) ホ(1)		ホ(1)				
夫	非・虞		フン(1)	フ(13) フウ(4) フ、(4)				
父	奉・虞			フウ(4) フ(4)				
舞	微・虞	フ(2)		フ(1) ブウ(1)	フ(1)			フ(1)
烏	影・模	フウ(1)						フ(1)
富	幫・宥	フ(1)		フ、(1)				
果撮・仮撮								
字	声・韻	正和 (0)	嘉暦 (0)	建武 (0)	高山/清 (0)	群書 (0)	文永 (1)	高山/中 (0)
牙	疑・麻		ガ(1)		カ(1)		カア(1)	

表 3-10 に挙げた字は、「旅」を除けば、去声字（上声全濁字を含む）と平軽字に集中しており、長母音表記は上昇（去声）・下降（平声軽）といった曲調を反映した表記であると判断される。

『論語』鈔本に現れる長母音表記は、特に建武本に集中しているが、全体被注字の比率からは決して高くない。建武本の中でも、「四」における「シイ」の仮名音注が 5 例あるが、そのうち 4 例は「四方」、1 例は「四時」であり、短母音表記の「シ」は「第四」「四乳」の 2 例であり、特定の熟語でのみ使用されると考えられるが、「四」に仮名音注が施されているのは、建武本のみであるため、他本との対照は困難である。

ところが、比較的異本と相互比較が可能な「弑（殺）」の仮名音注は、建武本を除き、「シ」であるため、長母音表記が他本に比べて多いのは、加点者個人の特徴と見られる。そ

³²⁾ 「殺」の異体字「斃」に作るが、建武本の 2 例は両方とも異本注として「弑」が書き込まれている。他鈔本は「弑」に作るため、「弑」と同音として分類する。

他にも「希」のように、清原本には短母音表記「キ」となるものの、中原本には長母音表記「キイ」の付音があり、一部の字は訓点の系統によって異なる伝承の仕方をしたと見られる。

遇撰の「夫」の仮名音注は建武本に加点例が多く見られるが、長母音表記である「フウ」もしくは「フゝ」といった仮名音注が書き込まれている 8 例は、すべて孔子を称する熟語「夫子」である。更に、「父」の場合も同様であり、長母音表記「フウ」はすべて熟語「父母」に書き込まれている。ただし、すべての「夫子」「父母」に対して長母音表記がされているわけではなく、短母音「フ」を書き込んでいる事例も各々2例、1例見られる、特定の熟語にのみ長母音表記が与えられたのであろう。

このように、『論語』鈔本における長母音表記は清原本・中原本に関わりなく、極めて稀であるが、とりわけ、建武本では一部の熟語を中心にして、慣習的に読まれていた長母音を書き込む事例が幾つか見られる。

漢籍訓読資料の中でも、経書類は『經典釈文』の音注に支えられた規範的な字音点が施される傾向が強いが、建武本は他の6種の鈔本に比べ仮名音注も豊富に書き込まれている。これは、加点者は読誦の便宜を図るためでもあり、なおも南北朝時代以降の後筆が書き加えられることによるものであろう。これは、時代が下るとともに、『論語』鈔本における仮名音注の規範性という側面でも、口語的な要素によって表記の面により柔軟的になっていくと考えられる。

3.2.7 m・n 韻尾字の表記

元来、m 韻尾字と n 韻尾字は発音を異にしており、表記の面においても n 韻尾字は「ン」、m 韻尾字は「ム」として定着し、書き分けられてき。しかし、院政期以降、両者の音韻上の区別は漸次消滅するとされ³³⁾、表記の面においても混同が見られる。以下では、「ン表記」を n 韻尾字、「ム表記」を m 韻尾字の規範的な表記として考えた上で、各資料において、両者の表記の混同がどのような様相を呈するか分析するため、『論語』諸本の実例を基に統計を取った結果を簡略に示すと以下の表 3-11 に示す。

表 3-11 m・n 韻尾字における仮名表記の揺れ

韻尾	表記	正和	嘉暦	建武	高山/清	群書	文永	高山/中
m 韻尾	ム表記	40	3	21	29	0	0	9
	ン表記	16	19	59	0	5	14	12
	その他	0	0	0	0	0	0	0
n 韻尾	ン表記	86	62	588	107	12	29	85
	ム表記	127	4	32	0	0	0	6
	その他	0	0	3 ³⁴⁾	0	0	0	0

³³⁾ 沼本 (1986 : 241-245)

³⁴⁾ 建武本の中にはン表記とム表記が併記されている申「シン・シム」(④9)、韻尾零表記の聞「ブ」(⑧204)、ツで表記している信「シツ」(⑩28)などの例がある。

7種の資料の中で、例外が1例も見られないのは、高山寺清原本であり、これは、単に巻第7の巻末の紙背に書かれている「如形清家一説所讀也」とおり底本として利用された清原家鈔本の加点時代が両者の区別が判然としていた時期のものと判断される。鎌倉時代初期の書写とされている高山寺清原本は、2巻の零本でありながら、仮名音注が他の清原家鈔本に比べ、極めて多い。高山寺清原本は異本をもって対校し、合点を施している箇所も散見される。このことから、複数の底本が用いられたており、仮名音注が異本から多数の仮名音注がもたらされたと考えられる。ところが、先に述べたごとく、高山寺清原本は「シユン」「シユツ」を「ヒン」「ヒツ」に表記するなど、「口頭語的要素」が強い鈔本でありながらも、加点者禅信はm・n韻尾に関して厳密に区別して表記していた可能性も遺存する。

他の清原家鈔本である群書治要、嘉暦本、後筆が多く雑じる建武本の場合も、ほぼ「ン表記」となっている。しかし、正和本はn韻尾字である臻撰・山撰字における約4割程度が「ン表記」であり、「ム表記」が優勢である。m韻尾字である侵撰・咸撰字における韻尾の表記も、ほぼ同様であり、正和本においては、「ム表記」が優勢であることから、「ン表記」が多数を占めている群書治要・嘉暦本・建武本とは異なる³⁵⁾。

一方、中原家の2種の鈔本の場合、加点年代がより早い文永本では、両者が完全に「ン」表記として定着していることが見られるが、高山寺中原本からは両者の混同が見られ、特にm韻尾字の表記の乱れが著しいという差が見える。また、高山寺中原本と文永本が共通的に現存する巻第8をもって判断しても、仮名音注の被注字数が4倍近く多い（高山寺中原本308字、文永本80字）ことから、加点者が仮名音注を加筆することにより「ム表記」も増えることになったと判断しても差し支えないだろう。

3.2.8 促音化

以下では、t韻尾字以外の入声韻尾字における「ツ表記」の例を挙げる。これらは入声字の促音化を反映した表記と考えられるが、後続する字が無声音字である場合にのみ現れる。下は促音化の具体例と共に、所在番号の次に音合符を付す場合³⁶⁾や当該字に加点されている仮名点（もしくはヲコト点）を挙げる。仮名点が施されている場合は片仮名、ヲコト点が施された場合は平仮名で挙げておく。

【深・咸撰】p韻尾字

³⁵⁾ ただし、正和本の場合「ン」「ム」の表記が巻ごとに異なる。n韻尾字は巻第1から6までは「ム」が圧倒的多数（ン46例：ム119例）であるのに反して、巻第7から10まではそれらが逆転する（ン41例：ム11例）。m韻尾も同様であり、第1から6までは「ム」表記が多数（ム32例：ン4例）、巻7から10までは覆る（ム8例：ン11例）現象が見られる。正和本と同じ底本を用いた嘉暦本からは、「ム」表記が極めて少ないため、同現象が見いだせなかった。しかし、建武本からは、n韻尾字の「ム」表記が巻第1から巻第6まで多く施され、m韻尾字の「ム」表記は巻第7から巻第10までの比率が高くなる現象が見られる。建武本は伝授過程で、巻1から6までと、巻7から10までの加点が5年の差を置いて、異なる人に伝授することが判然としている資料であるが、どの底本が用いられたかについては明記されていない。正和本の底本である、仁治三年鈔本の祖点と同様の問題があり、建武本に同底本が共通的に用いられた可能性は捨てがたいが、この問題については今後の課題としたい。

³⁶⁾ 当該資料に音合符が無い場合も、他本に音合符が施されている場合は一語としてみなす。

- ・正和本 (31 例 : 8 例) 集^{シツ} (①32 集解)、揖^{イツ} (⑤157 するときは・⑤175 するが)、執^{シツ} (④38 執鞭・④65 執礼)、撰^{セン} (②105 せ・⑥127A とは)、接^{ケツ} (⑤192A するぞ)
- ・嘉暦本 (15 例³⁷⁾ : 1 例) 揖^{イツ} (⑤157 するときは)
- ・建武本 (31 例 : 10 例) 集^{シツ} (①126 集解)、撰^{セン} (②88 せ/せ)、十^{ジツ} (③112 十室)、執^{シツ} (④31 執鞭・④54 執礼³⁸⁾)、葉^{エツ} (④56³⁹⁾葉公・⑦70 葉公・⑦75 葉公)、揖^{イツ} (④95 メ/し・⑤136 スルトキンハ/するときは、⑤150 スルカ/するが)、法^{ハツ} (⑩112 法度)
- ・高山寺/清 (15 例 : 0 例)
- ・群書治要 (2 例 : 1 例) 蓋^{カヅ} (310A は)
- ・文永本 (3 例 : 0 例)
- ・高山寺/中 (14 例 : 2 例) 撰^{セン} (④102A スソ-ル)、十^{ジツ} (⑧118 十世)

【通・江・宕・梗・曾撰】k 韻尾字

- ・正和本 (223 例 : 2 例) 篤^{トツ} (⑧24 篤行)、擊^{ケツ} (⑨236 擊磬裏)
- ・嘉暦本 (68 例 : 0 例)
- ・建武本 (205 例 : 3 例) 百^{ハツ} (⑦282 百官・⑩21 百工・⑩76 百官)
- ・高山寺/清 (112 例 : 2 例) 篤^{トツ} (⑧16 篤敬・⑧17 篤敬)
- ・群書治要 (11 例 : 0 例)
- ・文永本 (29 例 : 0 例)
- ・高山寺/中 (66 例 : 3 例) 篤^{トツ} (⑧16 篤敬)、析^{キツ} (⑧112⁴⁰⁾離析スレトモ・⑧113A 離析)

以上の例の通り、促音化表記の事例は全体の中のごく僅かであるが、k 韻尾字よりは、p 韻尾字において促音表記の比率が高く、p 韻尾字の中でも「揖」「執」「撰」のような、一定の字に集中している。その多くに音合符が付され、一つのまとまった語を成している中で、後続の字音が無声子音である場合に現れる傾向がある。これは、漢字のみならず、無声子音である、サ行変格動詞「ス」の活用形、助詞「は」「と」が後続する場合も存する。

唯一、例外と言えるものとしては「執礼」があるが、「執」の後方に有声音が登場し、他の字とは促音化の傾向が異なる。これは、「執」が単独で用いられる場合においても、促音表記がある程度、定着して用いられるようになったことを物語るものである。

3.2.9 t 韻尾の仮名表記

本研究で扱う資料は鎌倉時代から南北時代にかけて加点了された資料である。この時期の加点了資料の場合、t 韻尾字の表記は、ほぼ「ツ」へと定着しており、本来日本語の音韻に存

³⁷⁾ 葉(④067)には右側に「セウ」と左側に「セツ」が施されているが、「セウ」に合点が付されている。

³⁸⁾ 執(④054)「シツ」の他に「シフ_左」あり。

³⁹⁾ 葉(④056)「セフ」の他に「セツ_左」あり。

⁴⁰⁾ 「セツ」の「ツ」の左側に「キ」の加筆があり、「析」には「星歴反」という反切注が書き込まれている。「セツ」の加点了は字体が「折」に近似しており、いわゆる百姓読みである可能性もある。

在しなかった外国語の字音として試行錯誤が重ねられていた結果である。定着の代案の一つには「チ」による表記もあり、現在の漢字音の中では「吉^{キチ}」「質^{シチ}」「御節^{ネチ}」「越後^{エチ}」のように特定の語彙や、「一^{イチ}」「七^{シチ}」「八^{ハチ}」のような数字、漢音より早く定着した呉音形「日^{ニチ}」など、限定的な場面のみ用いられる。このように t 韻尾におけるチ表記が『論語』諸本の中でも僅かでありながら存する。以下の表 3-12 は各本の「ツ」「チ」表記の割合を示したものである。

表 3-12 t 韻尾の仮名表記

表記	正和	嘉暦	建武	高山/清	群書	文永	高山/中
ツ表記	78	31	168	57	9	14	26
チ表記	1	0	5	0	0	0	1
チ・ツ並記	0	0	4	0	0	1	0
零表記	0	0	0	0	0	0	0

『論語』7種の全鈔本の中のほぼすべてが「ツ表記」であることが確認できるが、チ表記が皆無というわけではなく、一部の鈔本には見られる。正和本「質^{シチ}(②77A)」の1例、建武本「一^{イチ}(①105、②138、⑦57、⑩86)」、「桀^{ケチ}(⑨147)」の5例、高山寺中原本「溢^{イチ}(⑧7A)」の1例のみである。「ツ」・「チ」並記の事例としては建武本に「契^{セチ・ツ}(④193A)」「七^{シチ・シツ左}(⑥108)」「腓^{ヒチ・ヒツ}(⑨33、⑨36)」の4例あり、文永本に「紘^{コツ・コチ}(⑦138A)」の1例が存する。

林(1980)は奥寄りの母音より前寄り母音の順(ウ>オ>ア>エ>イ)に、舌内入声音の仮名表記が「チ」から「ツ」へと変わっていくことを示している。『論語』鈔本に加点された一部の「チ表記」を見ると、イ段「質・一・七・腓・溢」とエ段「契・桀」に集中している。

しかしながら、「チ表記」は時代が降るにつれ、減る傾向にあるが、室町時代後筆が多く混入されている建武本において、「チ表記」が最も多いことは、時代の経過によるものではないかと判断される。他6種の鈔本の中には皆無といっても等しい状況である。このように、「チ表記」が後代の加点に多くなっていく原因は、漢音・呉音が混用され、その境目が比較的にあやふやになってゆき、日常生活に用いられる一部の呉音由来の漢字音が、加筆の過程において紛れ込まれたためのものと考えられる。

3.2.10 呉音・百姓読みの混入

次は漢音の語形とは認めることができない、呉音の混入箇所もしくは明らかに誤り(百姓読み)と判断される例を挙げる。さらに、被注字が多音字であるが、その字句に適さない仮名音注が付された箇所についても検討する。ただし、建武本の場合、室町中期以降の加点が多く含まれており、仮名の右肩に濁点を施す例が多く見られる。声点の他にも、二元的に濁音を表しているため、仮名音注に濁点を施さない正和本とは同じ尺度では見ることができない。本研究では仮名音注に濁点を施して呉音形と同形となる場合は省くこ

とにする。以下は呉音および誤りである例であり、所在番号の次に漢音形とこれらに反切注・同音注が施された場合は、所在番号の次に反切注・同音注を示しておく。

【呉音】

- ・正和本（14例／2例：12例）

有反切・同音注 繪 (②36 胡対反/クワイ)、慤 (④218A 苦角反/カク)⁴¹⁾

無反切・同音注 温 (①166A/ワン)、俗 (②65A/シヨク)、患 (②209A)/患 (③248A)/患 (④164A/クワン)、文 (③84A/ブン)、斗 (③152A/トウ)、祭 (⑤231/セイ)、率 (⑥125/スキツ>シユツ)、殺 (⑥261/サツ)、興 (⑧9A/クキヨウ>キヨウ)、杏 (⑨114A/カウ)

- ・嘉暦本（6例／1例：5例）

有反切・同音注 檣 (⑨116A 羊久反/イウ)

無反切・同音注 愠 (①42/ワン)、繪 (②36/クワイ)、圻 (③52A/ヲ)、文 (③65A/ブン)、令 (⑨115A/レイ)

- ・建武本（41例／7例：34例）

有反切・同音注 邕 (①27 於恭反/キヨウ>ヨウ)、圻 (③44A 音鳥/ヲ)、贖 (④64⁴²⁾五恠反/クワイ)、和 (④103_左 戸臥反/クワ)、慤 (④181A_左 ⁴³⁾苦角反/カク)、簪 (⑦90_左 ⁴⁴⁾所交反/サウ)、耦 (⑨147 音偶/ゴウ)

無反切・同音注 没 (①77/ボツ)、世 (①175、⑦50・⑧133・⑧153/セイ)、山 (②18/サン)、勇 (③23・④127⁴⁵⁾・④163・⑤115・⑥107・⑦168・⑨50⁴⁶⁾)/勇 (⑦135/ヨウ)、人 (④64_左 ⁴⁷⁾・⑨202/ジン)、鳥 (④85/ヲ)、興 (④130_合 ⁴⁸⁾クキヨウ>キヨウ)、聖 (⑤115⁴⁹⁾/セイ)、日 (⑤183⁵⁰⁾/ジツ)、祭 (⑤199⁵¹⁾・⑥148_左 /セイ)、顔 (⑥26/ガン)、帥 (⑥103/スキツ>シユツ)、豹 (⑥181/ハウ)、誦 (⑦32/シヨウ)、斗 (⑦90/トウ)、芥 (⑦187/セイ)、幼 (⑦291_左 ・⑨176_左 ⁵²⁾イウ)、従 (⑧6/シヨウ)、教 (⑧104_左 ⁵³⁾カウ)、涅 (⑨39A/デツ)、情 (⑩57/セイ)

- ・高山寺/清（2例／0例：2例）

無反切・同音注 卿 (⑦21A/ケイ)、語 (⑦120A/ギヨ)⁵⁴⁾

- ・群書治要 用例無し

41) 佐々木 (2009: 208) は、金澤文庫本『群書治要』の巻第10 (孔子家語)、191行にも「慤 (コク)」の例を挙げて、「呉音形の混入」として判定している。

42) 「ケイ_左」の他に「クワイ」の加点あり。

43) 「コク_左」の他に「カク」の加点あり。

44) 「セウ_左」の他に「サウ」の加点あり。

45) 「ユウ」の他に「ヨウ_左」の加点あり。

46) 「ヨウ」の他に「ユウ_左」の加点あり。

47) 「ニン_左」の他に「ジン」の加点あり。

48) 「コウ_合」の他に「キヨウ」の加点あり。

49) 「シヤウ」の他に「セイ」の加点あり。

50) 「ニチ_左」の他に「ジツ」の加点あり。

51) 「サイ」の他に「セイ」んお加点あり。

52) 「ヨウ_左」の他に「イウ」の加点あり。

53) 「ケウ_左」の他に「カウ」の加点あり。

54) 「コ」の他に「キヨ_左」の加点あり。

- ・文永本 (1例/0例 : 1例)

無反切・同音注 樸^{ホク} 55)(⑦91A/ハク)

- ・高山寺/中 (4例/1例 : 3例)

有反切・同音注 相^{サウ} (⑧99 息亮反/シヤウ)

無反切・同音注 衛^{エイ} (④22/エイ)、患^{グエン} (④90A/クワン)、由^ユ (④108A/イウ)

【慣用音・百姓読み】

- ・正和本 (25例/11例 : 14例)

有反切・同音注 辟^{ヘイ} (②10⁵⁶必亦反/ヘキ)、郁^{イク} (②68 於六反/イク)、葶^{キヤウ} (③68A 許庚反/カウ)、齋^{セイ} (④42⁵⁷側皆反/サイ)、鞅^{ワウ・アウ} (④49A 於丈反/ヤウ)、汶^{ヒム} (③181⁵⁸音問/フン)、棘^{キョク} (⑥212 紀力反/キョク)、檜^ク (⑨115 羊久反/イウ)、倚^キ (⑨204A 其綺反/キ)、繚^{リョウ} (⑨231 音了/レウ)、漂^{ヒョウ} (⑩70A 匹昭反/ヘウ)

無反切・同音注 曰^{イツ} (①15・⑧63A/エツ)、屢^{リョ} (③20A/ル)、鏤^{ロウ} (③84A/ロウ)、憲^{ケン} (③157/ケン)、郷^{ケイ} (④103/キヤウ)、翼^{エキ} (⑤160^{左59}/ヨク)、帥^{ソチ} (⑥103⁶⁰/スキツ>シユツ)、惡^{アク} 61) (⑦128A/アク)、詐^サ (⑦223A/サ)、溺^{シヤク} (⑦321A⁶²/デキ)、虎^{キヤク} (⑧157^合/コ)、愆^{ケン} (⑧213A/ケン)、揺^ユ (⑨235/エウ)

- ・嘉暦本 (17例/7例 : 10例)

有反切・同音注 向^{キヤウ} (①2 舒尚反/シヤウ)、緇^{クワツ} (③9A 吐刀反/タウ)、鞅^{ワウ} (④49A 於丈反/ヤウ)、慝^{トク} (⑥283 吐得反/トク)、鱸^{シウ} (⑦47A 音秋/シウ)、糾^{キウ} (⑦226 居黝反/キウ)、黈^{トウ} (⑧51 吐口反/トウ)

無反切・同音注 枉^{クワウ} (①188A/ワウ⁶³)、齊^{セイ} (④42⁶⁴/サイ)、蒯^{クワイ} (④49/クワイ)、姫^キ (④119/キ)、晰^{セキ} (⑥153/セキ)、吾^ゴ (⑦229A/ゴ)、夫^フ (⑦241/フ)、篠^{セウ} (⑨201A⁶⁵/セウ)、洒^{サイ} (⑩39/サイ)、賚^{ライ} (⑩130A/ライ)

- ・建武本 (15例/7例 : 8例)

有反切・同音注 根^{ケン} (③49⁶⁶直庚反/タウ)、齋^{サイ} (④35 側皆反/サイ)、柴^{シイ} (⑥57⁶⁷仕佳反/サイ)、父^フ (⑦72⁶⁸音甫/フ)、甫^フ (⑥114^左音父/フ)、倚^キ (⑨170A 其綺反/キ)、洒^{サイ} (⑩32⁶⁹色壳)

55) 「ホク」の他に「ハク^{左合}」の加点あり。

56) 「ヘイ」の「イ」の右側に「キ」を補入している。

57) 「セイ」の他に「サイ」の加点あり。

58) 「ヒム」の他に「フン」の加点あり。

59) 右側には「ヨク」の加点あり。

60) 「帥」の左側には「率ソツ・イ本ハ」という異本注記があり、正和本・嘉暦本は「率」に作る。「ソチ」は「率」に依拠した字音と判断されるが、同時に呉音と判断される。

61) 原文の方は「惡^入人^は惡^{ニクミ}己^レを^レ」(悪人は己を悪(にく)みす)となっており、更に入声点が施されており、文脈から「アク」を施すのが妥当である。

62) 「シヤク」の他に「テキ」の加点あり。

63) 「タウ」の他に「ワウ」の加点あり。

64) 「セイ」の他に「サイ合」の加点あり。「斎」は多音字であるが、『經典釈文』の注には「側皆反本或作齋同」となっており、「サイ」が適切である。

65) 「テウ」の他に「セウ合」の加点あり。

66) 「チヤウ」の他に「タウ」の加点あり。

67) 「シイ」の他に「サイ^左」の加点あり。

68) 「ホ」の他に「フ^左」の加点あり。

69) 「セイ」の他に「サイ」の加点あり。「洒」は多音字であり、「セイ(心母・齊韻)」も存するが、經典釈文に依拠した

反/サイ) **無反切・同音注**^{キヤツ・ヤツ} 日 (①12/エツ)、屢^{ルユ} (③16A/ル)、具 (⑥89・⑥180/ク)、宗 (⑥114/ソウ)、庶^{シヤ} (⑧160^{左70}/シヨ)、信 (⑩28^左/シン)、陵 (⑩81/リョウ)

・高山寺/清 (6例/0例:6例)

無反切・同音注^{キヤツ} 蔡 (⑦37A)、邦 (⑦100A/ハウ)、冢^{シヤウ} (⑦113/チョウ)、越 (⑧32A/クワツ)、日 (⑧41A・⑧41A/エツ)

・群書治要 (1例/1例:0例)

無反切・同音注^{ヤツ} 日 (⑨540/エツ)

・文永本 (7例/1例:6例)

有反切・同音注^{ヘン} 駢 (⑦131^左 蒲田反/ヘン)

無反切・同音注^{キヤツ} 伐 (⑦102/ハツ)、陋 (⑦213A/ロウ)、日 (⑧41A/エツ)、蕭 (⑧135・⑧136A/セウ)

・高山寺/中 (3例/0例:3例) 姑 (④23A/コ)、蕭 (⑧114・115A/セウ)

このような非規範的な字音は、反切注・同音注を伴わない字において散見され、呉音混入の事例としては「教」^{ケウ}「絵」^エ「患」^{グエン}「斗」^トなどのように、日常生活において用いられる字が多いようである。一方、漢音・呉音の体系に当てはまらない付音には、多音字であるため複数の字音のうち、適切でない方の字音を施したためのものや、「溺 (弱)」^{シヤク}「蒯 (萌)」^{マウ}「蕭 (肅)」^{シヤウ}「陋 (丙)」^{ロウ}「愆 (衍)」^{エン}などのように、字画の一部を取った類推により生じた字音が見られる。

反切注・同音注が施されている場合でも、このような漢音形との間にずれが生じる原因としては、仮名音注が施された後に、注釈書に依拠した反切注・同音注が付加されても、元来施された音注が改められることなく、残されたためか、もしくは反切注・同音注を施した後にも、加点者が十分に把握せず、後代の点本をもって補う過程で混入されたためであろう。更に、字体の問題と考えるべき問題もあり、正和本・建武本には「倚」がその字音に当たる。『經典釈文』における「倚」の反切は「倚也：其綺反」であり、正文の「植其枝而芸 (其の枝を植 (よせたて) て芸 (くさはら) ふ)」に対する注文として、「孔安国曰 植^チ (は) 倚」が存する。

『広韻』には「倚」に対して、「キ」の字音になる韻は収録されいないが、紙韻における「倚：立也 (反切：渠綺切)」と通ずるようである。本研究では字体については委細に論わないが、古鈔本の中には「徂徠」「徘徊」を「徂徠」「俳徊」のように「イ」に書写する例があり、「イ」と「彳」が通ずるために生じた誤りであると判断される。

また、日「キヤツ>ヤツ」は正和本・建武本・群書治要などから見られるが、「日」は切韻系韻書の体系に拠ると、于母・月韻合口字であり、規範的な字音としては「エツ>エツ」となる。鎌倉時代加点の他の漢音資料の実例としては、「日」 (上野本『注千字文』62

反切注から則って判断すると、適さない字音であるが、嘉暦本には当該反切が付されていない。

⁷⁰ 「シヤ左」の他に「ソ (シヨの直音化表記)」の加点あり。」

句)があり、後述の『古文孝経』の中にも「日」と同音字である「鉞」は「エツ」(三千孝経 201、元亨孝経 257、正安孝経 261・262・263)、「エツ」(仁治孝経 274・275・277、建長孝経 313)がある。その他、「鉞」(金澤文庫本『群書治要』⑤236)、「鉞」(永仁元年鈔本『白氏文集』③50、1293年点)、などが見られる。「日：キヤツ>ヤツ」という加点は、『孝経』の鈔本からも同様の仮名音注が現れ、金澤文庫本『群書治要』の他の部分にも1例(⑤80)などにも見られることから、演繹的な字音である「エツ」より、「キヤツ」が経書類において、伝承されてきた字音であると見た方がよいだろう。

3.3 声点

7種の『論語』鈔本においては、一部の加点が後筆によって補われた箇所が認められる。正和本・嘉暦本の場合、声点の濃淡の違いが認められる箇所や、大きさ、後述の濁声点の加點などの差が認められる箇所が存するが、声点の峻別は極めて困難であるため、別途の表示は省く。各本の声点被注字は、完本である正和本が1697字、嘉暦本が2367字、建武本が2506字であり、選抄本である群書治要は197字、2巻ずつ現存する残巻である高山寺清原本が360字、文永本が376字、高山寺中原本が544字確認できた。各本の声点を『広韻』の体系に対応させた表を、第2部の資料編に附しておく。以下では漢音声調の主なる特徴を取り上げ、それらが各資料で如何に現れているかを見ていく。

3.3.1 轻声点の加點

漢音資料には六声体系、つまり平声の入声の軽重を分ける声調体系として定着している。しかし、院政期以降から平声軽(下降調)・入声軽(入声高調)は各々平声(低平調)・入声(入声低調)へと変化するとされる⁷¹⁾。実際の声点の加點・伝授の段階では南北朝初期まで残存が認められる(時代がより降る資料においては、底本の加點を忠実に反映する故に軽点が残存する場合が存する)。六声体系における理論的な加點字⁷²⁾は平声の場合、全清・次清字は平軽点、全濁・次濁字は平重点であり、入軽の場合、全清・次清・次濁字は入軽点、全濁字は入重点となる。以下の表3-13は理論上、軽点が加點される平声・入声の字を対象に、重点・軽点加點の傾向をまとめたものである。

表3-13 各鈔本における軽点の加點

	平重点 (全清・次清)	平軽点 (全清・次清)	入重点 (全清・次清・次濁)	入軽点 (全清・次清・次濁)
正和本	153(230)	28(41)	97(161)	19(21)
嘉暦本	187(338)	50(64)	91(169)	64(95)
建武本	199(343)	15(17)	90(141)	38(46)
高山寺/清	17(22)	22(24)	4(4)	7(7)
群書治要	21(24)	7(10)	10(17)	3(5)

⁷¹⁾ 佐々木(1998)

⁷²⁾ 沼本(1986: 52)

文永本	21(22)	22(25)	10(12)	22(30)
高山寺/中	38(47)	32(35)	13(17)	20(23)

上表のごとく、本研究で対象にしている7種の資料には、すべて六声体系の痕跡を残している。3種の完本および『群書治要』論語部分は平声・入声における軽点の比率は高くないことから、声点加点を底本にしていた時点で既に、軽重の区別はあるものの、ほぼ四声体系へと定着しつつあると状況であると判断される。平声字の場合は3種の資料において、圧倒的に平重点が多いが、入声点の場合、地方の仏舎で書写された嘉暦本は他2本より比較的高い比率で軽点を保っていることが確認できる。清原家鈔本のうち、他の鈔本とは異なる特徴を持つ高山寺清原本は、他の諸本より軽点が多く残存している。

正和本と嘉暦本の底本となった、清原教隆加 points の仁治三年鈔本が現在逸失されているため、その姿を窺うことはできない。正和本と嘉暦本は5年ほどの加 points の差があるにも関わらず、両者における反切注・同音注の数に歴然たる差、つまり中国側注釈書の依存度には差が認められる。正和本と嘉暦本の底本の加 points 者である、清原教隆が直接加 points した『群書治要』も、鎌倉後期の加 points 本である正和本・嘉暦本とほぼ同様であり、平声、入声の重点の比率が高いことは共通する。最も加 points の時期が遅い、建武本の方もなお、軽点加 points の比率が低い。

7種『論語』鈔本のうち、最も理論的な加 points に近いのは、清原家鈔本を底本として用いた、高山寺清原本である。軽点・重点の混同は著しいが、平声・入声両方とも軽点の比率が高い。高山寺清原本の加 points は鎌倉初期とされるが、底本は当然鎌倉初期以前に遡る時期の加 points 本であり、軽重の区別がより保たれていた時期であり、それが声点加 points に反映されているためであろう。

一方、中原家鈔本の文永本、高山寺中原本は各々1270年点、1303年点であり、各々清原本の比較的に近い時期の加 points 資料である、群書治要論語部分(1257年点)と嘉暦本(1328年点)と約20~30年の加 points の差があるが、鎌倉中期から後期の清原本と比べて軽点の加 points 率が高く、中原家鈔本において軽点加 points がより保たれていたと判断される。

3.3.2 上声全濁字の去声化

漢音声調の特徴の一つは上声全濁字が去声化する長安音の音韻変化を反映させているという点である。しかし、漢音資料の中でも去声化の度合いには差があるとされる⁷³⁾。去声字を施さずに、上声点もしくは平声点を施す場合、反切下字の声調に影響があるかどうかを考え、更に、音合符などによって結合された一つの語として認められる場合、中低型を回避しようとしている試みがあるかなど、様々な方面から検討する。以下の表 3-14 は上声全濁字を声値がどのように反映されているか、該当字の声点を数値化してまとめたものである。

⁷³⁾ 佐々木(2009:569) 上声全濁字の去声化を反映する度合いによって、すべてが上声点のもの、ほぼ半分のもの、去声点が多いもの、すべて去声のものに分類している。

表 3-14 上声全濁字の加点様相

諸本	声点	上声点	去声点	その他
正和本		12(15)	34(48)	1(1)
嘉暦本		12(17)	40(82)	2(2)
建武本		7(9)	55(109)	2(2)
高山寺/清		1(1)	14(14)	1(1)
群書治要		4(4)	3(3)	0(0)
文永本		1(1)	14(16)	1(2)
高山寺/中		2(2)	12(15)	0(0)

各本の上声全濁字に加点された声点を観察すると、『群書治要』論語部分を除き、清原家・中原家鈔本両方から去声点の比率が高いことがわかる。『群書治要』の場合、経部（巻1~10）に加点された上声全濁字95字のうち、去声点を施している字は40字である反面、上声点を加点している53字であり、上声加点字の方が多い。先に述べたとおり、『群書治要』経部は清原教隆は直接書写加点した資料であるが、正和本・嘉暦本は清原教隆の加点本が底本として用いられている。上声全濁字の加点の比率という面に限っては、一見その傾向を異にしているように見える。

以下では、上声全濁字の去声化を反映しておらず、上声化を残存しているか、その他の声点を施している字について検討する。表3-14は『論語』鈔本の中に見られる去声点以外の用例を挙げたものである。反切注と同音注がある場合は、反切下字もしくは同音注に声調を小括弧で表示する。さらに、熟語・人名の一部など二字以上の漢語である場合は、その単語全体に施された声点を示すこととする。

表 3-15 上声全濁字における去声点以外の加点

連番	鈔本	所在	字	声・韻	声点	反切・同音注	熟語
1	正和	①3	叙	邪・語	上濁	—	—
2	正和	①5	夏	匣・馬	上	戸雅 _(上) 反	夏 _(上) 侯 _(平) 勝 _(平・去合)
3	正和	①87	儉	群・琰	上	—	—
4	正和	②18	儉	群・琰	上	—	—
5	正和	③51A	腐	奉・麌	上	房甫 _(上) 反	—
6	正和	④21	憤	奉・吻	上	房粉 _(上) 反	—
7	正和	④71	憤	奉・吻	上濁	扶粉 _(上) 反	—
8	正和	④139	儉	群・琰	上	—	—
9	正和	④142	蕩	定・蕩	上	徒党 _(上) 反	蕩 _(上) 蕩
10	正和	⑥18A	動	定・董	上	—	動 _(上) 静 _(去)
11	正和	⑦13	待	定・海	上	—	—
12	正和	⑦321A	荷	匣・哿	平	胡我 _(上) 反又音何 _(平)	荷 _(平) 箕 _(去)
13	正和	⑧157	兕	邪・旨	上	徐履 _(上) 反	虎兕 _(上)
14	正和	⑧159A	檻	匣・檻	上	—	—
15	正和	⑨128A	昊	匣・皓	上	胡老 _(上) 反	昊 _(上) 天
16	正和	⑨204A	倚 ⁷⁴⁾	群・紙	上	其綺 _(上) 反	×

⁷⁴⁾ 仮名音注における漢音以外の混入にて述べた如く、字体は「倚」（影母・紙韻）であるが、訓仮名「ヨセタテ」と反切注「其綺反」から判断して『広韻』の「倚：立也（反切：渠綺反）」（群母・紙韻）と判断した。46番の建武本の「倚(⑨170A)」についても同様である。

17	嘉暦	①19	氏	常・紙	上	—	苞 _(平) 氏 _(上)
18	嘉暦	①19	氏	常・紙	上	—	周 _(平) 氏 _(上)
19	嘉暦	②3	氏	常・紙	上	—	季 _(去) 氏 _(上)
20	嘉暦	②96A	社	常・馬	上	—	—
21	嘉暦	②104A	儉	群・琰	上	—	—
22	嘉暦	③50A	腐	奉・麌	上	—	—
23	嘉暦	④19	上	常・養	上	—	以 _(上) 上 _(上)
24	嘉暦	④139	儉	群・琰	上	—	—
25	嘉暦	④142	蕩	定・蕩	上	徒党 _(上) 反	蕩 _(上) 蕩
26	嘉暦	④226	蕩	定・蕩	平	—	蕩 _(平) 蕩
27	嘉暦	⑤11	儉	群・琰	上	—	—
28	嘉暦	⑤164A	限	匣・産	上	—	門限 _(上)
29	嘉暦	⑤256	雉	澄・旨	上	—	雌 _(平) 雉 _(上)
30	嘉暦	⑥18A	動	定・董	上	—	動 _(上) 静 _(去)
31	嘉暦	⑦7	氏	常・紙	上	—	季 _(上) 氏 _(上)
32	嘉暦	⑦320A	荷	匣・哿	平	—	荷 _(平) 實 _(上)
33	嘉暦	⑧159A	檻	匣・檻	上	戸覽 _(上) ⁷⁵⁾ 反	—
34	嘉暦	⑨48A	皂	從・皓	上	—	—
35	嘉暦	⑨128A	昊	匣・皓	上	胡老 _(上) 反	昊 _(上) 天
36	建武	①4	夏	匣・馬	上	戸雅 _(上) 反	夏 _(上) 侯勝
37	建武	②43	祀	邪・止	上	—	逆 _(入) 祀 _(上)
38	建武	②79	后	匣・厚	平	—	夏 _(去) 后 _(平) 氏
39	建武	③43A	腐	奉・麌	上	房甫 _(上) 反	×
40	建武	③193A	上	常・養	上	—	—
41	建武	④16	上	常・養	上	—	以上 _(上)
42	建武	④17A	上	常・養	上	—	以上 _(上)
43	建武	⑤142A	限	匣・産	上	諧眼 _(上) 反	門限 _(上)
44	建武	⑦268A	荷	匣・哿	平	—	荷 _(平) 實 _(去)
45	建武	⑨126A	父	奉・麌	上	—	諸父 _(上)
46	建武	⑨170A	倚	群・紙	上	—	—
47	高/清	⑦102A	荷	匣・哿	平	—	荷 _(平) 實 _(去)
48	高/清	⑦110A	解	匣・蟹	上	—	—
49	群書	221	儉	群・琰	上	—	—
50	群書	314A	辨	並・彌	上	—	—
51	群書	356	負	奉・有	上	—	襁 _(去) 負 _(上)
52	群書	450	兕	邪・旨	上	—	虎兕 _(上)
53	文永	⑦175A	父	奉・麌	平	—	父 _(平) 子
54	文永	⑦176	父	奉・麌	平	—	—
55	文永	⑧40A	咎	群・有	上	其九 _(上) 反	怨咎 _(上)
56	清/中	⑧41A	是	常・紙	上	—	奈 _(去) 是 _(上) 何
57	清/中	⑧100	兕	邪・旨	上	徐里 _(上) ⁷⁶⁾ 反	虎 _(上) 兕 _(上)

これらの字に上声点が施された原因の一つとしては、漢音声調の調値が反映されたわけではなく、中国側注釈書の反切下字の声調に依拠したためと考えられる。実際、上掲の57例のうち、17例の字には反切注もしくは同音注が施されている。各資料に直接反切注・同音注が書き込まれていない場合も、『經典釈文』依拠の注文が間接的に参考した蓋然性も存する。

ところが、上声全濁字における去声加点字の中にも、反切注・同音注が施されている字は正和本11例、嘉暦本10例、建武本17例、文永2例、高山寺中原本3例（上声・去声

⁷⁵⁾ 『広韻』に基づく「檻」は檻韻（上声）に属するが、反切下字の「覽」は敢韻（上声）に属する。

⁷⁶⁾ 『広韻』に基づく「兕」は旨韻（上声）に属するが、反切下字の「里」は止韻（上声）に属する。通志堂本『經典釈文』における該当箇所は「虎兕：徐履反」であり、なお、清原家鈔本の正和本・嘉暦本には反切下字を「履」としており、一致する。ところが、高山寺中原本と同様の中原本の文永本では「徐里反」となっていることから、訓点の系統によって反切注の中に一部差があると見られる。

点を両方付す所を除く)があり、声点加点の過程においては必ずしも反切下字の声調に頼ったとは断定することはできない。嘉暦本の場合、「叙_(上・去)(①2)」「夏_(上・去)(①207)」「儉_(上・去)(②18)」「憤_(上・去)(④21)」のように合点を施さず、上声全濁字の声点加点の特定を保留し、複数加点を行っている箇所も見られるが、他本においては複数加点を施すところはなく、嘉暦本に使われた底本を踏襲するものか、複数の底本を用いたためのものと判断される。

上の表 3-15 のように各資料における上声全濁字の場合、多くが去声化することになるが、去声字については熟語である場合、呉音資料の中では中低型の回避という問題と一音節去声字の上声化によって調値が変化することが指摘される⁷⁷⁾。これらは呉音の母胎音における声調が持つ性質であるより、日本語のアクセントにおける問題であるため、漢字音が日本語のアクセントの影響下に組み込まれた字音の層において起きる問題であると判断される。呉音の声調は、すでに日本語アクセントの体系に組み込みが完了している字音の層である。それに比して、新しい漢音の方は、母胎音の要素がある程度保っており、なお韻書、注釈書に裏付けられた声調が声点として加点されるため、これらの混同は比較的に少ないと考えられる。漢音形の字音も幾百年の歳月を経て日本語化し、それらが日本語の音韻体系に同化していく過程を辿るため、呉音の声調と同様な現象が起きかねないと判断される。

上声全濁字の平声・上声加点字に施された反切注・同音注はほぼ上声を指しているが、これら『經典釈文』依拠の注記以外の原因を探るため、まずは2字以上の熟語と判定できる事例を対象にし、去声の調値(上昇調)を韻書に依拠した上声の調値(高平調)に改める理由として、中低型の回避の事例を中心に触れることにする。以下の例は表 3-15 の熟語を上声全濁字を去声のある場合と、各本の加点に従った場合とで分けて、中低型を回避できるかを検討する(○は低調、●は高調、◐は下降調、◑は上声調を示す)。

【熟語】	【去声】	【各本の声点】(表 3-15 の連番)
「以上」	イ シャウ	イ シャウ (23・41・42)
「荷簣」	カ クキ	カ クキ (12・42・46)/カ クキ (32)
「夏后氏」	カ コウ シ	カ コウ シ (38)
「夏侯勝」	カ コウ ショウ	カ コウ ショウ (2・36)
「昊天」	カウ テン	カウ テン (15・35)
「季氏」	キ シ	キ シ (19)/キ シ (31)
「襁負」	キヤウ フ	キヤウ フ (50)
「逆祀」	ゲキ シ	ゲキ シ (37)
「虎兇」	コ シ	コ シ (13・51・56)
「周氏」	シウ シ	シウ シ (18)

⁷⁷⁾ 沼本 (1997 : 230・232)、佐々木 (2009 : 610)。

「雌雉」	シ [○] 子 [●]	シ [○] 子 [●] (29)
「諸父」	シ [○] ヲ [●]	シ [○] ヲ [●] (43)
「奈是何」	ダイ [○] シ [●] カ [○]	ダイ [○] シ [●] カ [○] (55)
「蕩蕩」	タウ [○] タウ [●]	タウ [○] タウ [●] (9・25)/ <u>タウ[○]</u> <u>タウ[○]</u> (26)
「動靜」	トウ [○] セイ [●]	トウ [○] セイ [●] (10)
「苞氏」	ハウ [○] シ [●]	ハウ [○] シ [●] (17)
「父子」	フ [○] シ [●]	フ [○] シ [●] (52)
「門限」	モン [○] カン [●]	モン [○] カン [●] (28・44)
「怨咎」	エン [○] キウ [●]	エン [○] キウ [●] (54)

19種の熟語のうち、中低型を回避するための上声を施したと考えられるのは「以上」「荷簣」「季氏」「襁負」「虎兇」「諸父」「奈是何」「蕩蕩」「怨咎」の9例に当たる。

すべての語の分析は省くが、主な去声点回避の原因を考察すると、まず「以上」の場合「上」は多音字であり、『広韻』の養韻（上声）と漾韻（去声）に属する。しかし、漢音の声調の中では養韻字の場合、上声全濁字であるため去声化される可能性がある。嘉暦本・建武本における「以上」（23・41）の「上」に上声点が施された箇所には、反切注が書き込まれていない。正和本の当該箇所には、仮名音注・声点を施さず『經典釈文』の音注「以上：時掌反(④20)」が書き込まれているほか、卷第3（雍也篇）にも「以上(③226)」の熟語が現れる。卷第4と同様に声点はなく、『經典釈文』の反切注「以上：時掌反。注可上同」が書き込まれている。嘉暦本には「上」に反切注が書き込まれていないが、正和本との同種の清原教隆による加点本が底本として用いられているため、23番の上声点の場合は、反切注の下字に依拠して、上声点が施された蓋然性がある。ところが、建武本の場合、「上」に上声点を施しているのは3例（40・41・42）があるほか、卷第3には正和本の「以上(③226)」に当たる本文(③191)に反切注「時掌反(③191)」と去声点が施されている。しかしながら、すぐ次の注文には（表3-15の40、③193A）上声点が施されている。これは漢文注の取り方が省略されている上に、「以-上(去)=ハ(に・は)③(191)」「上(上)(たる)(③193A)」のように仮名点・ヲコト点などにより「上」の訓読の仕方が異なるうえに、『經典釈文』の注記「注可上同」が建武本には省かれており、反切注が本文のみならず、割注までに被注の領域が及ぶことが示されなかったのも、加点が相異なる一因であったろう。卷第4の場合は両方とも「以上」の語に施されている上声点（表3-15の41・42）には両方とも漢文音注が書き込まれていない。卷第3と同語であるにも関わらず、上声点を施している理由は定かではないが、反切注がある場合にのみ去声点を施していることから、建武本の加点者は「上」に対しては上声点を施す習慣を持っていたと考えられる。

「荷簣」は「簣」が去声字であるため、去声と去声の連続を避けるために、正和本・建武本は「荷」を平声化するか、嘉暦本は後続の「簣」を上声化させるなどの中低型を回避するための試みが見られる。ところが、『經典釈文』所引の注記「胡我反又音何」の同音

注「又音何」の「何」は平声字である。清原家鈔本のすべての資料において「荷」に平声点を施しているのは、前者の反切注ではなく、後者の同音注を取ることに由来する加点であると判断される。通常、「音〇又〇〇反」もしくは「〇〇反又音〇」の形式を取る場合、「又」の前の部分が優先されて加点に反映されると傾向があるが、被注字によっては注記の反映し方には差があるようである。しかし、この9例以外の残りの10例の熟語は、上声点を加点しても、中低型を回避できないか、もしくは敢えて調値を変えないと考えられる例である。

次は、上声点加点の理由を、「1音節字去声字の上声化」という観点で探る。石山(2011)においても、『論語』鈔本を対象にして、一部の字に限り1音節去声字の上声化を反映していることを述べている。表3-15のうち1「叙」、2・36「夏」、5・22「腐」、13・52「兕」、17・18・19・31「氏」、16・46「倚(倚)」などの字が確実に1音節字に該当するが、各本における上声点の加点箇所を他本の該当箇所と比べると「叙」「夏」「兕」「氏」などは諸本によっては、去声点が施されている箇所も見られる。そのため、全ての字が、音節数により上声点を付しているとは言い難い。そのうえ、「夏」のように同じ反切注「戸雅反」を介しても、「夏_(上)侯_(平)勝_(平・去合)」(正和本①5)と「子_(上)夏_(去)」(正和本①70)のように同鈔本内において、異なる声点を施している事例も散見される。

上声全濁字の加点が、音節数との関係性があるか否かという側面から分析するため、上声全濁字のうち、上声もしくは去声点加点が施されている字を音節数別に処理すると、以下の表3-16のとおりになる。

全体の加点は去声点に傾いており、去声点を避ける理由として、少なくとも『論語』諸本においては音節数の問題が上声点加点の全例に適用されるわけではないことは明らかである。

一音節字における曲調の回避という側面で見ると、清原家鈔本の場合、音節数に関係なく去声点の方が多く、なお、上声点加点字の中でも二音節字の方が多き鈔本も見られるなど、日本語アクセントの影響下に組み込まれ曲調である去声を回避したと見られる事例は、一部には該当するが、漢音資料に関しては一般的であるとは言えない。

表 3-16 上声全濁字の加点と音節数

鈔本	声点	1音節	2音節
正和	上声	5(5)	7(10)
	去声	12(17)	21(31)
嘉暦	上声	4(7)	8(10)
	去声	14(27)	26(55)
建長	上声	5(5)	2(4)
	去声	18(31)	37(78)
高/清	上声	0(0)	1(1)
	去声	5(5)	9(9)
群書	上声	2(2)	2(2)
	去声	1(1)	2(2)
文永	上声	0(0)	1(1)
	去声	4(5)	10(11)
高/中	上声	2(2)	0(0)
	去声	2(2)	10(13)

表3-14、3-15に挙げたように、中原家鈔本の場合、清原家鈔本に比して去声化をより高い比率で保持していることが認められる。ただし、これは清原家の加点本を底本とするすべての鈔本に当て嵌まるものではない。上声全濁字における去声以外の声点加点には様々な要因が考えられるものの、具体的な箇所の中で諸本間に差があるという点では、加点者の違いによる差を反映しているのものであると推測する。高山寺清原本・建武本は去声点比率が高いものの、清原教隆が加点に与った『群書治要』および清原教隆の加点本を底本とする正

和本・嘉暦本の事例が、表 3-15 の 58 例のうち、39 例を占めることから見るに、これは明らかである。後述の『孝経』鈔本でも同様の現象があるが、これについては第 5 章にて述べることとする。

3.3.3 濁声点の加点

漢音において次濁字である明母（微母）・泥母（孃母）・疑母・日母（ただし、一部の明・泥母の撥音韻尾字を除く）の 4 つの声母字は原則として濁音形となる。本節では、濁声点加点の種類とその加点の傾向を示すとともに、濁音声母以外の字における濁音の加点例を検討することにする。

まず、濁声点の加点の種類と、その加点の傾向を見ていく。本研究で対象にした『論語』鈔本における濁声点には、「○○」の形と「○/○」の形があるが、便宜上「○○」の類を「濁 A」、「○/○」の類を「濁 B」として示す。これは加点本の系統により、「濁 A」「濁 B」が分けられて用いられるが、二種類の濁点が混用されている鈔本があることに留意したい。

「濁 A」は主として清原家、「濁 B」は中原家加点本で見られることから、一鈔本で両者が見られる鈔本の場合、異本校勘の際に、異なる学派の底本を用いることにより、混淆されたといえる。また、一部では本来単点であった箇所にも単点を付加することにより、結果的に濁点としている箇所も見られる。ところが、中原家鈔本の文永本、高山寺中原本の中には「濁 B」の形式の濁声点がほぼ見られず、「濁 A」の形式で施している箇所が多い。各本の「濁 A」「濁 B」の使用実態を見ると以下のとおりである。

正和本	濁 A-187 例	濁 B-13 例	文永本	濁 A-17 例	濁 B-0 例
嘉暦本	濁 A-231 例	濁 B-35 例	高山寺中原本	濁 A-67 例	濁 B-2 例
建武本	濁 A-24 例	濁 B-1 例			
群書治要	濁 A-20 例	濁 B-0 例			
高山寺清原本	濁 A-3 例	濁 B-0 例			

まず、清原家鈔本である完本 3 本の加点の傾向を見ていく。正和本は巻第 1 から 10 まで万遍なく濁点が施されているが、「濁 B」の加点の 13 例は巻第 3、第 4、第 5、第 6、第 9、第 10 から確認でき、偏りは少ない。次に、嘉暦本の加点状況から見ると、ほぼ巻第 1（8 例）と第 2（23 例）に集中しており、これらは後筆による補入であると判断される。建武本は南北朝時代の書写本ではあるが、室町以降の加点が多いため、声点の中でも多くは補入と考えられる。建武本は完本の中で声点の被注字が最も多いが、濁声点の加点率は極めて低い。更に、建武本は全体の濁声点の数は 25 例であり、ほぼ前半部分に集中している。康永元年に書写された巻第 7 から巻第 10 まで濁声点の加点数は僅か 3 例（「擾（去濁 B）」(㊦023A)」のみは「濁 B」のみである。複製本の上では、南北朝時代の加点と室町時代と加点を区別することは困難であるが、濁点を仮名に移行させている意識が強くなって

いく室町中期以降の補入が多く交じるがために、自然に濁声点加点の比率が低くなったのである。他の清原本である群書治要と高山寺清原本には抑も「濁 B」による濁声点は見られない。

一方、中原家鈔本を見ると、「濁 B」はほぼ見られず、どの鈔本でも「濁 A」が優勢となっている。坂本（1942）によると中原本の明経点の中でも清原家鈔本に同じ種類の訓点を用いられている実態を述べている。坂本氏の論稿には、声点についての言及はないが、清原家の加点と同種のもので存する理由としては、中原家加点本において一部が清原家の訓点を採用しているという結論を述べている。2種の中原家『論語』の濁声点の形式にも同様のものが採用されている蓋然性は十分あると見られる。高山寺中原本には「濁 B」が見られるが、「暴（去濁 B）（④94）」「謀（平濁 B）（⑧60）」のみで各巻に1例を施す程度である。「濁 B」の形式で施される鈔本には濁声点の加点率が抑も低いため、高山寺中原本は清原本の加点を採用した鈔本と、本来中原家の明経点を施した鈔本とが底本として用いられた可能性がある。

次は、声点被注字のうち原則漢音形では濁声点が施される4種の声母に属する字には必ずしも濁声点が施されているわけでもなく、個人・博士家などの違いにより、濁声点加点の頻度には差が生じる。本研究で扱う『論語』諸本から4種の声母に属する字を対象に、単点と濁点の加点の比率を調査し、その傾向を露わにすることとする。次の表3-17は各本の濁声点加点の比率を示したものである。

表 3-17 各鈔本における濁声点加点の比率⁷⁸⁾

諸本	声点	単点	濁点	比率
正和本		16	168(濁 A:164/濁 B:4)	91.3%
嘉暦本		13	255(濁 A:220/濁 B:35)	95.1%
建武本		201	24(濁 A:23/濁 B:1)	10.7%
群書治要		0	19	100%
高山寺清原本		19	2	10.5%
文永本		28	14	33.3%
高山寺中原本		22	64(濁 A:63/濁 B:1)	74.4%

佐々木（2006）の論稿では「濁声点をよく加点する」（清原家・菅原家・真言宗）部類、「濁声点をあまり加点しない」部類（藤原家・中原家・天台宗＜推定＞）があることを述べている。その中で、本研究でも扱う『論語』中原家鈔本である高山寺中原本についても分析をしており、高山寺中原本に関しては、本来中原家で用いていた「濁 B」が1例のみであることを根拠に「中原家点は濁点をあまり使用していないものであった」という結論に至っている。ところが、同じく中原本である文永本と比べて濁声点の加点の比率が高く、なお巻第4、39例・巻第8に25例あり、巻ごとの差も著しいものではない。小林（1980）

⁷⁸⁾ 本表の比率は非濁点と濁点との比率を示すものであり、濁点加点の比率は「濁 A」と「濁 B」を合算したものである。なお、明母・泥母でも非鼻音化が進行せず、マ・ナ行音として残存していたと考えられる以下の26字を除く。
 【明母】孟猛盲マウ、埤[樓]慢曼マン、明ミン、名命盟盟メイ、面メン、蒙モウ、門モン
 【泥母】難ナン、南男ナム、佞寧審ネイ、年ネン、農能ノウ

は高山寺中原本に関して「中原家の訓説に基きつつも諸説を勘案した」と述べており、「濁 A」が用いられている点から推測すると、濁声点に関しては多くが清原家鈔本のような他家の鈔本の影響があったように見受けられる。文永本の場合は、残念ながら、本奥書および後筆を施した加点者による奥書などは存しない。それにもかかわらず、上述のとおり「濁 A」のみが現れるのは、最初底本として用いた中原家鈔本には本来単声点のみであったものの、後に他本を用いて「濁 A」が補われた可能性も想定される。文永本には後筆による補入が一部あり、「濁 A」もその過程において入り込んだ可能性は十分あるように見える。

一方、5種の清原家鈔本は奥書から清原家の博士が直接加点に関与しているか、もしくは、清原家鈔本を底本として加点が行われていることが明らかな鈔本である。正和本・群書治要の場合は、直接加点に清原家の博士が与っていることが明白であり、濁声点を施す比率が非常に高い。嘉暦本は正和本と同種の加点本が底本として利用されており、なお加点には宗教関係者が関わっているが、濁点の面においては、かなり高い比率を示している。

ところが、建武本の場合、濁声点の加点率は全体の1割ほどに満たない。これは、上述のごとく、建武本の訓点既に仮名に濁点に移行される時代に至って多く行われており、それにつれて濁声点の比率も減少していると考えられる。

高山寺清原本の場合は、清原家鈔本を底本として用いており、なお鎌倉初期の加点と考えられていることから、建武本のように、仮名への濁点の移行を原因として挙げるのは難しい。所蔵先である高山寺が真言宗寺院であり、真言宗資料も清原家と同様に「濁 A」を用い、声点をよく加点するとされるが、加点に直接関与した「禅信」は天台宗に所属する人物である。奥書の「如形清家一説所讀也」のとおり、清原家点のように読んだものであるものの、加点の比率が非常に低いのは濁声点の加点は天台宗において行われている慣習に従って読んでいるためであるか、濁声点の頻繁に施されない時代の祖点を用いたためであろう。

次は、漢音で原則濁音となる4種の声母以外の字に濁点が施される事例が各本から見られているが、これらは読み癖もしくは連濁などの要因が想定される。以下に、本研究で扱った7種の鈔本の中に見える、全清・次清・全濁声母字の濁声点加点の事例を挙げる。

・正和本 (26例)

全清 (8例) 羲 (去濁 A)(①35)、翁 (入濁 A)(②117、曉)、斷 (去濁 B)(③171A、端)、稅 (去濁 B)(⑥222A、書)、穀 (入濁 B)(⑦149、見)、山 (平濁 A)(⑧146A)、戟 (入輕濁 A)(⑧178A)、博 (入濁 B)(⑨130、幫)

次清 (2例) 肯 (去濁 A)(③251A、溪)、仆 (去濁 A)(⑥264A、滂)

全濁 (16例) 叙 (上濁 A)(①3、邪)、陪 (平濁 A)(②24A、並)、便 (平濁 B)(③118A、並)、憤 (上濁 A)(④71、並)、群 (平濁 B)(⑤19A、群)、伎 (去濁 B)(⑤42A、群)、瑞 (平濁 A・B)⁷⁹⁾(⑤49A、常)、

⁷⁹⁾ 平声の圈点に「ㄱ」をその右側に補っている風に見える。

弁 (入濁 A)(⑤197A、並)、具 (去濁 A)(⑤257A、群)、孰 (入濁 B)(⑥226A、常)、慙 (平濁 A)(⑦258A、従)、楯 (去濁 A)(⑧178A、船)、篠 (去濁 B)(⑨200A、定)、禽 (平濁 A)(⑨238A、群)、随 (平濁 A)(⑨244、邪)、分 (去濁 A)(⑩165A、奉)

・嘉暦本 (12 例)

全清 (3 例) 羲 (平濁 A)(①034、曉)、卜 (入濁 A)(①070A、幫)、恕 (去濁 A)(②191、書)

次清 (1 例) 仆 (去濁 A)(⑥264A、滂)

全濁 (8 例) 存 (上濁 A)(①62、従)、合 (入濁 A)(②50A、匣)、鈍 (去濁 A)(②211A、定)、分 (去濁 A)(③148A、並)、分 (平濁 A)(④242、並)、具 (去濁 A)(⑤258、群)、僕 (入軽濁 A)(⑦49、並)、随 (平濁 A)(⑨245、邪)

・建武本 (0 例)

・群書治要 (1 例)

全濁 (1 例) 暴 (去濁 A)(362、並)

・高山寺清原本 (0 例)

・文永本 (3 例)

全清 (1 例) 荒 (平濁 A)(⑧160A、曉)

全濁 (2 例) 何 (平濁 A)(⑧42、匣)、陪 (平濁 A)(⑧143、並)

・高山寺/中 (3 例)

全清 (1 例) 龜 (平濁 A)(⑧100)

全濁 (2 例) 暴 (去濁 B)(④94、並)、陪 (平濁 A)(⑧121、並)

上掲の例のうち、どの鈔本でも全濁声母字が最も多いことが確認できる。なお、正和本の「濁 B」の総加点例は僅か 13 例であるが、次濁声母字 175 例の中で、「汝 (去濁 B)(③182A)」「莫 (入濁 B)(④125)」「隅 (平濁 B)(⑨95A)」「泥 (去濁 B)(⑩18A)」の 4 例のみであり、残りの 9 例は非次濁声母字である。一方、嘉暦本の「濁 B」の用例、35 字は例外なく次濁声母字である。

とりわけ全濁声母字において、多くの濁声点加点字が見られる原因の一つとして、漢音の母胎音である中国語(秦音)の音韻現象をそのまま反映したために残存した説が挙げられる。7 世紀から全濁声母字が無声化する現象が起きるが、唐末に至るまで依然として無声化が完全に完了していないとされる。そのため、無声化という音韻変化を受けなかった時代に日本に移植・定着した呉音を反映する資料では全濁字に主として濁点が付されるが、漢音資料では清音となることが圧倒的に多い。その他には、呉音声調(もしくは呉音の語形か)が混入されたという説も存する⁸⁰⁾。

⁸⁰⁾ 佐々木 (1992 : 656) は、「(全濁声母字の濁音形の由来は) 日本漢音の母胎音が全濁声母字の無声化を完了させていないものであり、それをそのまま反映した」という説を否定している。その理由として、摩擦音→破擦音→破裂音の順で無声化の進行することを挙げているが、実際の漢音資料から得られた用例は様々であることを挙げている。その一方、中国では、無声化が進行する一方、日本資料における全濁声母字の濁音形が増え続ける現象と漢籍よりも仏典に濁音形が多いという事実から、呉音の混入をその原因として指摘している。本研究では両方の可能性があったという趣旨で論ずる。

さらに、上掲の 45 字のうち、『広韻』の体系と異なる声点が付されたのは 6 字ある。この 6 字を呉音資料における声点と比べて、表 3-18 に示す。

表 3-18 各本の濁音用例と呉音資料の声調⁸¹⁾

字	所在	広韻	声点	法華経単字 (保延本)	法華経音義 (西教寺本)	大般若経 (安田八幡宮本)
義	正和①35	曉・支 _(平)	去濁 A	—	—	—
肯	正和③251A	溪・等 _(上)	去濁 A	平	平	平
伎	正和⑤42A	群・紙 _(上)	去濁 A	反切：後 _(平) 二 _(平)	平濁	平濁・上濁
瑞	正和⑤49A	常・寘 _(去)	平濁 A	平	平濁	平濁
楯	正和⑧178A	船・準 _(上)	去濁	平	平濁	平濁
存	嘉暦①62	従・魂 _(平)	上濁 A	上	去濁	—

「義」の場合は、管見の呉音資料上で、加点が行われている箇所は発見できなかった。『論語』において「義」は「曹義」という人名の一部であるが、正和本において去濁点を施していることは、字体が類似する、「義」（疑母・寘韻（去声））に誤認したためであると考えられる。ところが、嘉暦本でも同じ個所(①34)に平濁点が施されており、当該字が漢音の中でも濁音として伝授されていた可能性がある。曉母・支韻（紙韻・寘韻）の呉音形は観智院本『類聚名義抄』・『法華経音義』諸本などの資料で見受けられる字は「戲（寘韻）」があるが、すべての資料において仮名の音形は「ケ_(平声)」となり、呉音混入の可能性は低いようである。

「伎」と「楯」は上声全濁字の去声化を反映したものであると考えられる。表 3-18 のとおり、6 字のうち、呉音声調と判断し得る字は「瑞」と「存」のみであり、他の字は呉音声調に依拠したと説明することは困難である。

なお、熟語であり、前接字の撥音韻尾により、連濁の事例として判断されるものとしては「蒙山」（正和本⑧146A）、「供具」（正和本⑤257A・嘉暦本⑤258A）、「忠恕」（嘉暦本②191）、「三分」（嘉暦本④242A）、「残暴」（群書治要 362A）、「沈荒」（文永本⑧160A）の延べ 7 字が存する。これらの字は他本において、同様に濁声点を施しているわけではないため、加点者により、異なるようである。この連濁と見られる事例は稀ではあるが、文永本を除き、正和本・嘉暦本・群書治要など清原教隆が関わる鈔本において、その事例が存する。

3.3.4 非規範的な声点

上掲の仮名音注の中にも、漢音体系とかけ離れた付音書き込まれている事例を見てきたが、声点においても漢音声調とのずれが確認できる箇所が見当たる。『論語』諸本の中には、『広韻』と漢音声調との関係性から照らし合わせて、声点の加点とずれが存するところを中心にみていく。以下の表 3-19 は注釈書・韻書とは齟齬する声点加点の例を韻書の四声に分類し、各本の声点加点を比較して示した表である。

⁸¹⁾ 呉音資料としては保延本『法華経単字』（小倉 1995 に拠る）、西教寺蔵『法華経音義』（萩原 1990 に拠る）、安田八幡宮蔵『大般若経』（小倉 2014 に拠る）を用いた。

表 3-19 非規範的な声点 (*は多音字、^は上声全濁字)

【平声字】82字									
番	字	积文音注	正和 (21)	嘉暦 (20)	建武 (20)	高/清 (9)	群書 (2)	文永 (10)	高/中 (19)
1	勝*	音升或升證反	平・去合(05)	平・去(04)					
2	蕭	—	上(06)	平(05)					
3	章	—	平(08)	上(07)					
4	張*	—	平(15)	上(14)					
5	周	—	平(26)	上(25)					
6	諸*	—	平(30)	平・上(29)					
7	尚*	—	平(35)	平・去(34)					
8	義	—	去濁(35)	平濁(34)					
9	荀	—	去(35)	平(34)					
10	而	—	上濁*(01 37)	平濁(36)					
11	存	—		上濁(62A)	平(53A)				
12	磋*	七多反	上(113)	平(112)	平(96)				
13	知	如字又音智	平(179)	平・去(178)					
14	孫	—		平(191A)	去(163A)				
15	施*	—	去(201A)	平・去(200A)					
16	卑	—		平(252A)	去(243A)				
17	鄴*	側留反	平(271)	平(271)	去(260)				
18	驕	—	平(2142A)	平(2142A)	上(2120A)				
19	兼*	—	平(2106A)	去(2106A)					
20	門	—		上濁(2113A)					
21	儀	—	入(2122A)						
22	安	—	上(2178A)	平(2178A)	平(2150A)				
23	齊*	—		入(310A)	平(38)				
24	兵	—		平・去(335A)	平(330A)				
25	任*	音壬又而鳩反	去濁(3137A)	去濁(3137A)	去(3116A)				
26	人	—			上(3191)				
27	与*	—	上(3247)						
28	夭*	於驕反	平(412)	平輕・上(411)	平(49)				
29	舒	—		去(412A)					
30	隅	—			平(420A)				上(410A)
31	超	—			去(440A)				
32	鈞	—	平(476A)		平(463A)				去(438A)
33	期*	—			平(495)				平・去(460)
34	勞*	—	去(4151)		平(4126)		去(261)		平(483)
35	興*	—	平(4156A)	平輕(4156A)					去(486A)
36	辭	—							上(496A)
37	任*	—	平濁(4186)	平濁(4185)	去濁(4155)				
38	任*	—							去(4105A)
39	任*	—			去(4157)				
40	任*	—							去濁(4106A)
41	身	—							去(4107A)
42	長*	—							上(4124A)
43	和*	—	去(54A)	去(54A)	平(53A)				
44	予*	—	上(529A)	平(529A)	上(526A)				
45	吳	—			去濁(529A)				
46	藏*	—	去(578A)	去(578A)					
47	沽*	音姑	去(578A)	去(578A)	去(567A)				
48	賓	—			平・去(5139)				
49	同	—			上(6114)				
50	樊	—					上(329A)		
51	将*	—		去(714A)					
52	治*	—	平(7183A)	平(7182A)	平(7153A)	平(713A)		平・去(7125A)	
53	寮	力彫反			平(7256)			上(7221)	
54	慙	—	平濁(7258A)	平(7257A)	平・去(7215A)			平(7182A)	

55	陳 ^ㄊ	—					去(⑦65A)			
56	人	—	去(⑦204)							
57	称 ^ㄊ	—				去(⑦248)	去(⑦88)			
58	陳 ^ㄊ	—					去(⑦97A)		平・去(⑦226A)	
59	興 ^ㄊ	—	去(⑧9A)							去(⑧5A)
60	身	—							上(⑧25A)	
61	仁 ^ㄊ	—					去(⑧27)			
62	仁 ^ㄊ	—					去(⑧27)			
63	仁 ^ㄊ	—					平濁・去(⑧27A)		平(⑧24A)	平濁(⑧27A)
64	柔	—	平濁・上濁(⑧37A)						平濁(⑧20A)	平濁(⑧23A)
65	相 ^ㄊ	—								去(⑧81)
66	顛	音專					平(⑧80)	平(444)	平合・上(⑧102)	上(⑧89)
67	與 ^ㄊ	音瑜			平(⑧114)		平(⑧80)	平(444)	平・上(⑧102)	平(⑧88)
68	顛	音專					平(⑧81)		上(⑧103)	平合・上(⑧89)
69	顛	音專							上(⑧104A)	上(⑧89A)
70	分 ^ㄊ	—					上(⑧98)		去(⑧132)	
71	称 ^ㄊ	—					去(⑧135A)			
72	聞 ^ㄊ	—					去(⑧136)		平濁(⑧189)	平濁(⑧157)
73	便 ^ㄊ	婢緜反	平・平輕(⑧204)	平(⑧204)	平(⑧169)				平(⑧153)	平合・去(⑧130)
74	便 ^ㄊ	—					去(⑧170)	平(⑧112)	去(⑧155)	去(⑧131)
75	便 ^ㄊ	—								平合・去(⑧131A)
76	任 ^ㄊ	音壬	去濁(⑧152)		平(⑧125)				平濁(⑧112)	平濁(⑧96)
77	忠	—			平(⑧194)	平輕(⑧127)				去(⑧149)
78	蒲	—			平(⑧201A)	平(⑧134A)				上(⑧155A)
79	之	—	平(⑨32A)		上(⑨26A)					
80	超	—					去(⑨183A)			
81	湯 ^ㄊ	—					去(⑩101A)			
82	喪 ^ㄊ	—	去(⑩137)		平(⑩115)					

【上声字】94字

韻	字	积文音注	正和 (18)	嘉曆 (44)	建武 (27)	高/清 (11)	群書 (3)	文永 (8)	高/中 (11)
83	語 ^ㄊ	—		去濁(①3)					
84	禹	—	平(①18)	上(①17)	上(①14)				
85	散 ^ㄊ	—	上(①33)	上・去(①32)					
86	領	—	上(①34)	上・去(①33)					
87	顛	魚起反 ⁸²⁾	上濁・去(①35)	上濁(①34)	上濁(①29)				
88	友	—	上(①54)	去(①53)	去(①46)				
89	拳	—		去(①63A)	上(①54A)				
90	友	—		去(①72)	去(①62)				
91	五	—	去濁(①89A)						
92	矩	—	去(①135A)	去(①134A)	平(①115A)				
93	偃	—	平(①146A)	上(①145A)	上(①124A)				
94	子	—		平輕(①169)					
95	理	—		去(①172A)					
96	枉	紆往反		去(①187)					
97	友	—		去(①198)	去(①169)				
98	友	—		去(①200A)					
99	五	—		去濁(①209A)					
100	考	—			去(①182A)				
101	止	—		去(②25A)	上(②21A)				
102	美	—		去濁(②33)	上(②27)				
103	后 ^ㄊ	—		去(②94)	平(②79)				
104	此	—			去(②85A)				
105	五	—		去濁(②76A)					
106	舞	—		去濁(②78A)					
107	我	—		去濁(②94)					
108	土 ^ㄊ	—		去(②113A)					
109	好 ^ㄊ	—	去(②113A)	去(②113A)	去(②95A)				
110	五	—		去濁(②117A)					
111	美	—		去濁(②130)					

⁸²⁾ 通志堂本には当該字の音注が所収されていないが、完本3種には共通的に反切注「魚起反」が書き込まれている。

112	武	—		去濁(②132)					
113	美	—		去濁(②132)					
114	放 [*]	方往反	上(②181A)	去濁(②181A)	上(②153A)				
115	友	—		去濁(②214)					
116	冉 [*]	—		上濁(③18A)	去濁(③14A)				
117	予 [*]	羊汝反或音餘		平(③56)					
118	耳	—		去濁(③66A)					
119	飲 [*]	—			去(③160)				
120	肯	—	去濁(③251A)						
121	礼	—		去(④20A)					
122	雅	—							去(④32A)
123	詠	力軌反	上(④136)		上(④113)				上·去(④73)
124	坦	吐但反	去(④142)	去(④142)	上·去(④118)				上(④76)
125	蕙	絲里反				上(261A)			去(④83A)
126	鄙	—	—						去(④95)
127	寡	—		去(④177)					上(④98)
128	且	—			去(④167A)				
129	起	—	上(④191A)	上(④191A)	上(④159A)				平(④107A)
130	美	—							平(④121A)
131	侗 [*]	音通又勅動反	平·上合(④216)	平·上合(④216)	上(④180)				去(④122)
132	蕩 [△]	—		平(④226)	去(④188)				
133	菲 [*]	音匪	上(④246A)		上(④205A)		平(285A)		
134	此	—	上(⑤24A)	上(⑤24A)	去(⑤21A)				
135	我	—		去濁(⑤30A)	上(⑤26A)				
136	爾	—	上濁(⑤61)	上濁(⑤61)	去濁(⑤52)				
137	著 [*]	竹呂反	去(⑤123A)	去(⑤123A)	去(⑤106A)				
138	去 [*]	—		上(⑤193A)	去(⑤166A)				
139	餒 [*]	奴罪反	去(⑤203A)	去(⑤203A)	去(⑤174)				
140	不 [*]	—	去(⑥256)						
141	与 [*]	—						平(⑦20A)	
142	敢	—		去(⑦33)					
143	襁	居丈反	上(⑦37)	上(⑦37)			去(356)		
144	數 [*]	色主反		去(⑦110A)	上(⑦91A)				去(⑦70A)
145	有	—							去(⑦114)
146	齒	—			上(⑦160A)	去(⑦18A)			去(⑦132A)
147	比 [*]	—				上·去(⑦81A)			上(⑦207A)
148	荷 [△]	胡我反·河音同	平(⑦321A)	平(⑦320A)	平(⑦268A)	平(⑦102A)			
149	叩	音口				去(⑦119)			
150	父 [△]	—							平(⑦175A)
151	父 [△]	—							平(⑦176)
152	党	—							去(⑦256A)
153	冢	—		去(⑦338)					
154	倚 [*]	於綺反				平輕(⑧20)			
155	拳	—	去(⑧18A)						
156	美	—						上(⑧32A)	上濁·去(⑧33A)
157	小	—				去(⑧43A)			
158	小	—				上(⑧58A)			上(⑧61A)
159	党	—				去(⑧79A)			
160	拳	—	去(⑧80)						
161	餒 [*]	奴罪反	上濁(⑧107A)	上濁(⑧105A)	去(⑧86A)	上(⑧64A)		上(⑧75A)	去(⑧67A)
162	仰	—				平(⑧70A)			
163	少 [*]	—			去(⑧154A)	去(⑧103A)		去(⑧140A)	去(⑧119A)
164	友	—				去(⑧111)			去(⑧133)
165	隱	—				入(⑧117A)			
166	坂	音反			上(⑧201A)	去(⑧134A)			上(⑧155A)
167	屏 [*]	—	上(⑧180A)	平(⑧180A)					
168	荏	而審反			去(⑨65A)				
169	敢	—	去(⑨138)		上(⑨115)				
170	理	—			去(⑨187A)				
171	施 [*]	舊音繩·…	上(⑨239A)	上(⑨240A)	上(⑨199A)		平(523A)		
172	散 [*]	—			去(⑩58A)				
173	顯	—			去(⑩94A)				

174	牡	茂后反	上(合·去)①20	去濁①120	上①100				
175	牡	茂后反	去濁①122A	去濁①122A					
176	管	—		平①132A	上①110A				

【去声字】46字

韻	字	积文音注	正和 (9)	嘉曆 (15)	建武 (11)	高/清 (5)	群書 (3)	文永 (1)	高/中 (13)
177	将*	—	平①16	平①15					
178	次	—			平①14				
179	慎	—	平①64A	平①63A	去①54A				
180	弊	—	去①76A		平①64A				
181	從*	子用反		去②118A	平②99A				
182	喻	—	平②193A	平②193A	去②163A				
183	思*	—		平②202A	去②171A				
184	乘*	繩證反		平③37	去③31				
185	行*	下孟反	去③103A	平③103A	去③87A				
186	汶*	音問		去濁③181	平濁·去③153				
187	瓠*	—	平輕③190A						
188	燕*	於見反	去④11	平·去④11	去④8				
189	贖	五怪反	去濁④49A	去濁④49A	去④40A				平·去濁④23A
190	怪	—	去④75	去④74	去④62				平④37
191	怪	—							平④38A
192	地	—							平④43A
193	敗*	(如字)							平④59A
194	敗*	(如字)							平④64A
195	戰	—			去④134				平·上合④88
196	慢	—							平④96A
197	豆	—		平輕④174					平④97
198	路	—					平(266A)		去④105A
199	用	—							平④108A
200	摯	音至							平④108A
201	瑞	時恚反	平濁⑤49A	去⑤49A	去⑤43A				
202	泰	—			平⑤14A				
203	喪*	息浪反			平⑤26A				
204	重*	—		平⑤138A					
205	讓	—		平濁⑥158A	去⑥131A				
206	封*	—		平⑦44A	平⑦36A			平輕⑦19A	
207	瑗	于眷反	平⑦47A	平⑦47A					
208	王*	于況反又如字		平·去合⑦60	平⑦49			去⑦30	
209	王*	于況反又如字	平⑦61A	平·去⑦61A				去⑦31A	
210	政	—	平⑦62						
211	論*	—	平⑦181	平⑦180					
212	射*	—				平輕⑦2			
213	要*	—		去⑦205	去⑦172	平·去⑦28			
214	譜	側鳩反	去⑦308A	去⑦308A	去⑦257A	平·去⑦94A			
215	難*	乃且反	去⑦347A	去⑦347A	平⑦290A	平·去⑦117A			
216	利	—				平⑧57A			
217	代	—			去⑧71	去⑧53			平⑧55
218	字	—			去⑧110A	去⑧77A			平⑧85A
219	勞*	—	去⑩33	去⑩33	平⑩27		去(529)		
220	闇	—	去⑩65A	去⑩65A	平·去⑩54A				
221	量*	音亮			去⑩112		平(544)		
222	量*	音亮	去⑩135A	去⑩135A	去⑩113A		平(545A)		

【入声字】6字

韻	字	积文音注	正和 (0)	嘉曆 (0)	建武 (0)	高/清 (3)	群書 (0)	文永 (0)	高/中 (3)
223	惡*	—	入④198A						去④110A
224	作	才洛反	入⑦257A	入⑦257A	入⑦215A	平⑦62A		入輕⑦182A	
225	石	—				平⑦102A			
226	鑿*	—	入輕⑧94A		入⑧76A				上⑧59A
227	甲	—				平⑧90A			
228	入	—							平濁⑧134A

上表の 228 字の一々の字について取り上げるのは、枚挙に暇がないが、韻書・注釈書との声点のずれは、まずは『經典釈文』所引の音注における諸家の解釈の相違や、複数の字音を持つ多音字のように、中国内部の問題と、諸本の加点に関わっている博士家（清原家・中原家）及び個人差による差、つまり日本内部の位相差の問題が複合的に絡まってもたらされた結果であろう。

まず、上表のうち、96 字が多音字に該当する字であるが、そのうち、經典釈文の音注（破音における「如字」を含む）が確認できるのは、32 字である。その中で、音注が複数ある字について述べたい。音注が複数ある、繰り返しになるが、「○○反又△△反」「○○反又音△」「音○或△△反」「如字又△△反」のように、2 種以上の音注がある場合、「又」「或」などにより、区切られている場合が多くある。このような場合、多くが最初の音注（下線部分）が声点に取り入れる傾向がある。

ところが、声点を加点する際に、異本（加点者）ごとに一部の字に関しては取捨選択の面に差が見られる。『經典釈文』に複数字音を所収している字は、平声字「勝(1)」「知(13)」「任(25)」、上声字「予(117)」「侗(131)」「荷(148)」「施(171)」、去声字の「王(208・209)」延べ 9 字である。本研究では、最初の音注に則って分韻しているが、漢籍訓読における多音字の声点加点には、はっきりとした「正解」を設定せず、よりフレキシブルな受容の立場を取ったと考えられる。

嘉暦本の場合、この 9 字のうち 5 字、正和本の場合 2 字は複数声点を施しており、「又」「或」以降の字に該当する字音をも表そうと努めている。その他にも、異本との対校の過程に於いて、「又」「或」以降の音注が声点に反映されている場合が稀ながら見られる。

「勝(1)」の正和本の加点は平声を表す注記「音升」と、去声を表す注記「或升證反」を反映し、平声点と去声点が施されているが、対校の過程で合点が施されているのは去声点の方である。

同じく「侗(131)」も、平声を表す注記「音通」と上声を表す注記「又勅動反」があるが、正和本、嘉暦本は平声点と上声点があり、合点は両方とも上声点に施されている。嘉暦本の声点は、正和本と同様、仁治三年の清原教隆による加点本を利用している共通点があるため、この声点はもともと、仁治三年点本に施されていた加点を引き継いだ加点と考えられる。正和・嘉暦本の後に加点された建武本には上声点のみが施されているため、清原家諸本の中では、此のごとく、共通的に上声点を選択していることになる。一方、中原家鈔本の高山寺中原本には、当該字に去声点が施されている。切韻系韻書にも去声韻はないため、これはやや不審な加点であるが、『經典釈文』所引の反切注「又勅動反」の反切下字「動」が上声全濁字であるため、加点者が去声字として誤判した可能性があると思われる。

上に挙げた 9 字のうち、なお 2 番目以降の音注が声点に反映されたと見られる字がある。「任(25)」の場合、平声を示す「音壬」、去声を示す「又而鳩反」があるが、清原本の完本 3 種はすべて去声点を施している。

前節の上声全濁字でも挙げた「荷(148)」も「胡我反本又作河音同」のような注記があり、上声を表す「胡我反」と異本注及び平声韻の音注の機能を担うと見られる「河音同」が見られる。ところが、清原家鈔本5種の加点はすべて、同音注を取り入れた平声点が施されている。当該箇所には漢文の注記が書き込まれている鈔本は、正和本と文永本のみであるが、正和本は最初の反切注「胡我反」のみが書き込まれているのみであり、文永本にはより長い「故我反又音河本又作河音同」のような漢文注がある（ただし、声点は施されていない）。通志堂本とは若干の異同はあるものの、内容はほぼ同様である。「予(117)」の場合も同様、上声韻の「羊汝反」と平声韻の「又音餘」があるため、上声韻に重きがあると見られるが、嘉暦本にのみ平声点の加点がある。「王(208・209)」は去声韻の「于況反」と破音における原義を示す「又如字」があり、平声韻を示すものであろう。「注同」の説明もあり、正文である「王(208)」のみならず、割注の「王(209)」をも被注の領域が至る。清原家鈔本の場合は、平声点・去声点を施している嘉暦本を除き、正和本・建武本は平声点を施している。一方、中原家鈔本の文永本は、正文・割注両方とも去声点を施している。

「施(172)」清原家完本3種はすべて上声点を施していると見られる。切韻系韻書における「施」の声調は、平声（支韻）、去声（眞韻）のみで、上声韻が所収されていない。ところが、当該字句の『經典積文』における「施」の注文には多数の音注が含まれており、正和本の場合、欄上には「施：舊音詩紙反、男也。李巡注余疋[雅]曰、殊禪戚憑皆云詩支反云一[施]不仰也。一云詩歧反、或云依孔直以反、一音勅紙反、落也。並謂不反舊音」という書き込みあり、その中には下線部分のように5種の音注が存する。本研究に於いては、最初の「舊音詩紙反」の説明に則り、上声字に分類した。ただし、現存本の通志堂本は「舊音施。又詩紙反。亦詩歧反。孔云以支反。一音勅紙反」という平声韻を表す音注より始まり、義注を省き、音注にも若干の異同があることから、現存の通志堂本は、内容に一部改変があったと見られる。同じく清原家鈔本である群書治要の論語部分にも、当該字句が所収されているものの、平声点を施しているのは、一般的に用いられている字音を施したためであると考えられる。

次は、鈔本の系統により、声点加点を異にしている部分に注目したいと思う。2種の中原家鈔本は残巻であるため、清原家鈔本と比較が可能なのは、巻第4、7、8である。上述の「侗(131)」のように、中原家鈔本において、清原本には現れない去声点を施すような事例があり、25例⁸³⁾がこのような場合に当たる。このうち多音字は7字のみであり、残りの18例は切韻系韻書における単音字となる。このことは多音字における他方の声調を表しているものではなく、一部の字が系統によって、伝承されてきた声調が異なっていたことを物語る。清原家鈔本における「顛(66・68・69)」の平声点は、平声字の同音注「音專」に支えられてきたものであるが、一方、中原家鈔本における上声点はどのような経緯で加点されたのかが明

⁸³⁾ ある系統の鈔本にはない加点が、他の系統鈔本において現れる事例と判定したのは次の字である。

多音字：「興(35)」 「治(52)」 「與(67)」 「分(70)」 「聞(72)」 「侗(131)」 「比(147)」

多音字：「隅(30)」 「鈞(32)」 「寮(53)」 「顛(66・68・69)」 「忠(77)」 「蒲(78)」 「誅(123)」 「蕙(125)」 「寡(127)」 「起(129)」 「贖(189)」 「怪(190)」 「戰(195)」 「路(198)」 「代(217)」 「字(218)」

らかではない。『經典釈文』の「論語音義」以外の「韻」の説明がある他巻にも上声点の典拠となる情報は見つからない。そのため、対校の過程において、加点者は一部の字を上声点か平声点（もしくは平聲点）に改められている。更に、「怪(190・191)」とこれを反切下字とする「聵(189)」は中原家鈔本において、すべて平声点を施している。そのため、中原家鈔本においては、「怪」を実際平声で読んでいたことが分かる。「怪」は去声韻に属する字であるため、平声点を施すのは、漢音資料としては適切ではない。呉音資料である『法華経音義』諸本から平声点以外の加点は見られないことから、中原本における平声は呉音声調が混入し、それが伝承された事例であると考えられる。その他にも中原本において、呉音声調の混入と思しき加点は「與(67)」の上声点、「寡(127)」の平声点、「起(129)」の平声点、「戰(195)」の平声点、「字(218)」の平声点などである。

3.4 『論語』における『經典釈文』の利用

伝統的に経書を読む際は、陸徳明撰『經典釈文』を拠り所としていることが指摘されている⁸⁴⁾。しかし、原本『經典釈文』は夙に散佚しているため、本研究における対校の作業には現存の通志堂本（巻第24の「論語音義」）を用いることにする。僅かに残る『經典釈文』の古鈔本と比べ異同が多いことから、通志堂本を用いることは些か問題があるが、現存本の限界がある。各本における反切注・同音注を通志堂本と対校したところ、共通点が遙かに多いため、『經典釈文』に依拠したことは疑いようがない。本研究では、『論語』を学習し、伝授する過程で、中国側注釈書における音注がどのように反映されているかを考察する。完本の正和本、嘉暦本、建武本などは粗密の差があるが、反切注・同音注が10巻全巻に書き込まれている。中原家鈔本である文永本、高山寺中原本も同様の状況である。

一方、『群書治要』の論語部分は同音注1例のみであり、高山寺清原本には反切注・同音注がまったく書き込まれていない。これは底本の内容を如何に摂取するかに大きな違いがあることを表すもので、仮名・声点などで十分漢字音を認識できるという考え方、もしくは『群書治要』のように、帝王学にその目的があった資料の場合は、『論語』『孝経』のような幼学書は既に学習が先行されていたため、省かれたのではないかと考えられる。

本章では主に注釈書所引の反切注・同音注が最も多い正和本を基準にして、通志堂本と対校し、その実態を述べることにする。反切注・同音注の音韻的な問題と訓注への反映の仕方についても考察する。但し、他本の反切注に差が存する場合は、脚注を付して言及することとする。

3.4.1 反切注

正和本の反切被注字は940例であり、それらと通志堂本との比較の結果、反切注の一致の

⁸⁴⁾ 足利（1932：844）「（前略）而して下の三法則を厳守せり。第一則は、経書を読むときは、必ず陸徳明經典釈文所定の音によりしことなり。こは現存清原・中原両家の諸点本によりて、明に知らるゝなり」

詳細⁸⁵⁾は以下のとおりである。

(A1) 通志堂本と反切注・被注箇所が完全に一致する……………827例 (88.0%)
(A2) 反切注は一致するが、通志堂本の被注箇所の前後に付されている……6例 (0.6%)
(B) 通志堂本と正和本の反切注が異なる……………68例 (7.2%)
(C) 正和本には反切注を施しているが、通志堂本には同音注を施している…4例 (0.4%)
(D) 正和本には反切注を施している箇所を通志堂本から見いだせない……35例 (3.7%)

通志堂本と正和本の反切注・被注箇所が完全に一致する場合が 827 例 (A1)、通志堂本における被注箇所の前後にあるが、被注字が一致する場合が 6 例であり (A2)、両者を合わせるとほぼ 9 割が通志堂本の反切と一致する。残りの 1 割は通志堂本と反切注が異なる (B)、正和本には反切注を施しているが、通志堂本には同音注を施している (C)、もしくは通志堂本の被注箇所から正和本の反切注が確認できない (D) に分類できる。以下、両者の反切注が一致する 833 例を除く、107 例についてその詳細を挙げる。更に、(B) (C) (D) の詳細については、各々以下の表 3-20、表 3-21、表 3-22 に挙げ声母・韻母の一致状況を挙げ、『広韻』の音韻体系と比較し、一致・不一致の状況を簡潔に述べる (該当字が『広韻』における韻目と完全に一致しない場合でも、「同用」の韻目である場合は韻母が一致するものとして扱う。(声)は声母不一致、(韻)は韻母不一致を指す)。

表 3-20 反切注が異なる例 (B)

所在	字	正和本	通志堂本	声母・韻母 の一致状況	所在	字	正和本	通志堂本	声母・韻母 の一致状況
①65A	侈	尺氏反	尺紙反	一致	⑤220	攤	乃多反	戸多反	不一致(声)
①73A	盡	津忍反	津刃反	不一致(声)	⑤223	饋	其位反	其愧反	一致
①129	格	加白反	加百反	一致	⑤238A	昵	女乙反	女力反	不一致(韻)
②26	曾	側登反	則登反	不一致(声)	⑤241	各	苦日反	苦百反	不一致(韻)
②52A	躋	千兮反	子兮反	不一致(声)	⑥125	乘	時証反	繩証反	不一致(声)
②80	科	告禾反	苦和反	一致	⑥129	晒	式忍反	詩忍反	一致
②113A	別	彼列反	彼別反	一致	⑥150A	裕	古合反	古洽反	不一致(韻)
②114A	酢	在洛反	才洛反	一致	⑥191	疚	九又反	久又反	一致
②124	從	在用反	才用反	一致	⑥247	倦	其眷反	其卷反	一致
②126	喪	息浦反 ⁸⁶⁾	息浪反	不一致(韻)	⑥264A	仆	撫遇反	蒲北反	不一致(韻)
②129	鐸	直洛反	直略反	不一致(韻)	⑥287	錯	古故反 ⁸⁷⁾	七故反	不一致(声)
②188	參	所全反 ⁸⁸⁾	所金反	不一致(韻)	⑥293	選	息變反	息恋反	一致
②188	貫	古貫反	古乱反	一致	⑦30	圃	居古反 ⁸⁹⁾	布古反	不一致(声)

⁸⁵⁾ 分類の際、正和本に反切注が施された被注箇所が通志堂本において、被注箇所として所収されていても、反切注・同音注といった漢字音注記が存しない場合、もしくは「如字」のみが注されている場合は、(D)として分類する。また、通志堂本に漢字音注記が存しても、正和本に反切注・同音注が施されていない箇所については、本研究では挙げないことにした。

⁸⁶⁾ 建武本(②106)にも通志堂本と同様、反切下字を「浪」に作る。

⁸⁷⁾ 嘉暦本(⑥289)にも通志堂本と同様、反切上字を「七」に作る。

⁸⁸⁾ 嘉暦本(②188)・建武本(②159)にも通志堂本と同様、反切下字を「金」に作る。

⁸⁹⁾ 嘉暦本(⑦030)も反切上字を「布」に作るが、建武本(⑦024)は右側に「居古反又音布」、左側に「布古反」が書き込ま

③3	縲	力追反	尤追反	不一致(声)	⑦123A	嗜	時志反	常志反	一致
③81	臧	作郎反	子郎反	一致	⑦165	盪	吐浪反	土浪反	一致
③92	弑	申志反	施志反	一致	⑦166A	泥	仕角反	仕捉反	一致
③93	乘	時證反	繩證反	不一致(声)	⑦179	卑	婢支反	婢之反	一致
③131	訟	在用反	自用反	一致	⑦179	謹	市針反	時針反	一致
③152	庾	喻甫反	兪甫反	一致	⑦180A	乘	時證反	繩證反	不一致(声)
③179A	語	魚虞反	魚拋反	一致	⑦236	相	息高反 ⁹⁰⁾	息亮反	不一致(韻)
③264	施	如鼓反 ⁹¹⁾	始鼓反	不一致(声)	⑦349	悌	火針反	大計反	不一致(声)
④115	揖	一入反	伊入反	一致	⑧11	慍	紆運反	紆問反	一致
④136	祇	祁支反	祈之反	一致	⑧36	卷	眷勉反	眷免反	一致
④166A	踈	以接反	在接反	不一致(声)	⑨20	莞	華板反	華版反	一致
④199	吝	力刃反	力認反	一致	⑨50	瓜	故花反	古花反	一致
④223A	称	尺称反	尺證反	一致	⑨105	孺	而拊反	而樹反	一致
④233A	召	時照反	七照反	不一致(声)	⑨198	從	在用反	才用反	一致
⑤3	罕	呼但反	呼旱反	一致	⑨234	播	波佐反	彼佐反	一致
⑤122	袍	蒲交反	蒲刀反	不一致(韻)	⑨239A	施	詩支反	詩豉反	不一致(韻)
⑤123A	臬	思里反	絲里反	一致	⑩15	汎	芳鍛反	芳劔反	不一致(韻)
⑤149	廷	徒佞反	徒寧反	不一致(韻)	⑩39	応	於證反	抑證反	一致
⑤157	躩	駒略反	駟碧反	不一致(韻)	⑩70A	漂	匹昭反	匹照反	不一致(韻)
⑤194	殺	色介反	色界反	一致	⑩125	蔽	必世反	必袂反	一致
⑤201	饋	於異反	於羹反	一致	⑩155	儼	宜檢反	魚檢反	一致

通志堂本と正和本の反切法が相異しているとしても、音が完全に一致するものは40例ある。残り28例は声母(14例)・韻母(14例)が異なっており、その中には、正和本の転写の過程で誤写したところであると判断される事例が多い。通志堂本における「呢(⑤238A)」の反切下字「力」は、明らかな誤刻であるが。その他にも「貫：古貫反(②188)」のように被注字と反切下字が同様であり、反切注として適していない例が存する。

表 3-21 正和本には反切注を施しているが、通志堂本には同音注を施している例 (C)

所在	字	正和本	通志堂本	声母・韻母の一致状況	所在	字	正和本	通志堂本	声母・韻母の一致状況
⑥183	訶	而軫反	音刃	不一致(韻)	⑦227	召	詩照反	音邵	不一致(声・韻)
⑦16	迂	於于反	音于	不一致(声)	⑨192	撫	亡甫反	音呼又音武	不一致(声・韻)

以上の4字の場合は、すべて『広韻』の音韻体系と一致しない。「撫」の場合『広韻』には滂母・麌韻(上声)であるが、二つの同音注である「呼」は曉母・模韻(平声)、「武」は微母・麌韻(上声)であり、どちらとも一致しない。

次は、正和本には反切注を施しているが、通志堂本が当該字に注を施していない箇所である。経書を読む際『經典積文』を用いることが当然とされていたのなら、以上の反切注が『經典積文』の「論語音義」の他の条、もしくはその他の巻にも現れる可能性はないのだろうか。下の表8は、通志堂本をもとに「論語音義」内に同様の反切注がある場合は◎、『經典積文』の他の巻に同様の反切注がある場合は○、他の巻に被注字として挙げられているが、反切注が一致しない場合は△、通志堂本自体から見いだせない反切注である場合は×として示す。

れている。

⁹⁰⁾ 嘉曆本(⑦235)にも通志堂本と同様、反切下字を「亮」に作る。

⁹¹⁾ 建武本(③223)にも通志堂本と同様、反切上字を「始」に作る。

表 3-22 正和本には反切注を施している箇所を通志堂本から見いだせない例 (D)

所在	字	正和本	通志堂本	所在	字	正和本	通志堂本	所在	字	正和本	通志堂本
①18	講	古項反	×	④133	禱	丁老反	◎	⑦142A	責	七洛反	×
①33	邕	於恭反	×	④204	好	呼報反	◎	⑦177	誨	古対反	×
①35	顛	魚起反	△	⑤52	少	詩照反	◎	⑦254	祝	之大反	×
①51	令	力皇反	◎	⑤73	縱	子用反	◎	⑧24	行	下孟反	◎
①91	行	下孟反	◎	⑤178	容	章勇反	×	⑨16	遠	于萬反	◎
①107	好	呼報反	◎	⑤209	撤	直列反	◎	⑨179	為	于偽反	◎
①113	琢	陟角反	◎	⑤216	齋	側皆反	◎	⑨185	易	以鼓反	◎
①140A	須	思夷反	△	⑥28	鯉	良士反	×	⑨219A	行	下孟反	◎
①163	焉	於虔反	◎	⑥218A	去	起呂反	◎	⑨244	突	徒忽反	×
①172	罔	亡丈反	○	⑥263	偃	於偃反	×	⑩151	焉	於虔反	◎
③19	屢	力具反	○	⑦57	去	起呂反	◎	⑩165A	分	扶間反	◎
③25	從	才用反	◎	⑦100	行	下孟反	◎				

以上の表 3-22 から通志堂本における直接的な被注箇所ではなくても、正和本のうち 2/3 が通志堂本の反切法と共通している。このことから、正和本が用いた『經典釈文』には上掲の字に直接注を施していた可能性があるか、もしくは正和本の加点者が前後に出現している反切注を用いて、文脈に合わせて付加している可能性も想定される。

ところが、正和本の全体的な状況から観察すると、特定の字に圧倒的に多く反切注が施されることが認められる。その原因は、反切注を施す対象字（被注字）が多音字・難読字であるためであろう。反切注を施している字の半数以上である 595 例（異なり数 245 字）が多音字であり、特に本義を表す場合ではなく、転義を表す必要があるとされる場合が多いと考えられる。多音字（同形異音字もしくは同形異義字）は特に混同する可能性が高いため、内容の解釈・理解の正確性を来すためには、細心の注意を払う必要があったのは言うまでもない。

特に頻度が高かった「行（映韻）」（32 例）は「おこない・行動」の意味である場合にのみ反切注を施し、文脈に合わせて何も付さないか、もしくは格助詞を表すためのヲコト点を付していることが多い。「好（号韻）」（29 例）も反切注を施す目的は当該字を形容詞ではなく、動詞として読ませるためのものであり、殆どが「コノム」「ヨミス」の訓注が付されているか、もしくはヲコト点「(この) む」を施す場合が大半である。「為（眞韻）」（23 例）も、多くはヲコト点「(ため) に」を付すか、もしくは仮名注の「タメ」（3 例）の訓注を付す。「焉（仙韻）」（20 例）もほとんどが「イツク-そ」「ナム-そ」を施している。

一方、単音字は 345 例（異なり数 280 字）であるが、最も頻度数が高い字は「枉・倦・齋」（4 回）であり、次いで「慍・諂・蔽・戚・彫・飯」（3 回）である。残りは 2 回以下であり、その多くは難読字であるか、「齊（齋）」や「衰（縵）」のような通用字との混同を防ぐという役割も担っていると考えられる。

3.4.2 同音注

反切注と同様の方法で、正和本の同音注と通志堂本『經典釈文』を比べる。注記の形式としては、「音 A」「或音 A」「又音 A」「一音 A」「A 音 B」「AB 音同」「或本作 AB 音同」など

があり、且つ通志堂本と正和本の間に注記形式がやや異なる場合も存する。これらについては、反切注と同様、被注字と同音注が同じと見做すことができる場合は、一致例として扱うこととする。正和本の同音注は 382 例であり、その詳細については反切注と同様の方法で分類し、以下に示す。

- | |
|---|
| (A1) 通志堂本と同音注・被注箇所が完全に一致する……………311 例 (81.4%) |
| (A2) 同音注は一致するが、通志堂本の被注箇所の前後に付されている……………5 例 (1.3%) |
| (B) 通志堂本と正和本の同音注が異なる……………21 例 (5.5%) |
| (C) 正和本には同音注を施しているが、通志堂本には反切注を施している……………10 例 (2.6%) |
| (D) 正和本には同音注を施している箇所を通志堂本から見いだせない……………35 例 (9.2%) |

同音注の一致例 (A1、A2) は合わせて 8 割ほどであり、反切注よりは若干低い比率ではあるが、一致例が圧倒的に多数であることが確認できる。反切注と同様の方法で、通志堂本と正和本の同音注が異なる (B)、正和本には同音注を施しているが、通志堂本には反切注を施している (C)、もしくは通志堂本の被注箇所から正和本の同音注が確認できない (D) に分類し、以下の表 3-23、表 3-24、表 3-25 に例を挙げ、各々の状況に関して略述する。

表 3-23 同音注が異なる例 (B)

所在	字	正和本	通志堂本	声母・韻母 の一致状況	所在	字	正和本	通志堂本	声母・韻母 の一致状況
④163	夫	音扶	音符	一致	⑧8	糧	音良	音粮	一致
⑤31	太	音泰	音太 ⁹²⁾	一致	⑧29	夫	音符	音扶	一致
⑤48	夫	音扶	音符	一致	⑧139	奥	音臽	音瑜	一致
⑤50	晁	音勉	音免	一致	⑧141A	宓	又音服	又音伏	一致
⑤167	齊	音咨	音資	一致	⑧163	夫	音扶	音符	一致
⑤236	太	音泰	音太	一致	⑧199	夫	音扶	音符	一致
⑥232	祗	音之	音支	一致	⑨79	齋	臽音俞	音瑜	一致
⑦48	完	音丸	音桓	一致	⑨179	夫	音扶	音符	一致
⑦159	遜	孫音巽	音遜	一致	⑨204	芸	音雲	音云	一致
⑦191	食	又音似	又音嗣	不一致(韻)	⑨229	大	音泰	音太	一致
⑦262	夫	音扶	音符	一致					

正和本と通志堂本の反切注が異なるのは 21 字であるが、声母・韻尾が異なるのは食(⑦191)の 1 例のみである。「似」は邪母・止韻 (上声)、「嗣」は邪母・志韻 (去声) であり、声調が異なる。

次に、正和本には同音注が書き込まれているが、通志堂本の漢字音注記は反切注で表されている事例を検討する。

表 3-24 正和本には同音注を施しているが、通志堂本には反切注を施している例 (C)

所在	字	正和本	通志堂本	声母・韻母 の一致状況	所在	字	正和本	通志堂本	声母・韻母 の一致状況
----	---	-----	------	----------------	----	---	-----	------	----------------

⁹²⁾ 通志堂本は「大宰：上音太」となっており、被注箇所を「大」に作る。

③237	楽	音洛	五教反	不一致(声・韻)	⑥119	暫	音赤	星歴反	不一致(声・韻)
⑤164	闕	音域	于逼反	一致	⑥148	沂	音其	魚依反	不一致(声・韻)
⑤185	纈	音軫	之忍反	一致	⑦257	作	音作	才洛反	不一致(声)
⑤225	廐	音救	久又反	一致	⑩11	距	音巨	具慮反	不一致(韻)
⑥27A	榔	音郭	古廓反	一致	⑩120	牡	音某	茂后反	一致

上表のとおり、正和本には同音注が施されているが、通志堂本の該当箇所反切注が施されているのは10例である。そのうち半数の例において声母・韻母が一致しない。「楽」の場合は多音字であるが、正和本は「ラク」、通志堂本は「ガウ」という音を表すために施していることから、正和本が用いた『經典釈文』と通志堂本の間には多音字に対する取捨選択の優先順位に差があった可能性がある。

最後に表 3-25 は正和本には同音注を付しているが、該当箇所に通志堂本には音注自体が存しない場合である。反切注と同様の方法で『經典釈文』から見られる音注であるかを判断するため、「論語音義」内に同じ同音注がある場合は◎、通志堂本の他の巻に同じ同音注がある場合は○、他の巻に被注字として挙げられているが、同音注が異なる場合は△、当該同音注自体を通志堂本から見いだせない場合は×として分類して示す。

表 3-25 正和本には同音注を施している箇所を通志堂本から見いだせない例 (D)

所在	字	正和本	通志堂本	所在	字	正和本	通志堂本	所在	字	正和本	通志堂本
①111	楽	音洛	◎	⑤105	夫	音符	◎	⑨17	智	知音智	◎
②23	汝	女音汝	◎	⑤207	食	音似	○	⑨44	牟	音毛	×
②116	楽	音岳	◎	⑤250	綏	音雖	◎	⑨52	汝	女音汝	◎
③14	汝	女音汝	◎	⑥83A	循	音巡	◎	⑨69	女	音汝	◎
③44	汝	女音汝	◎	⑦11	舍	音捨	◎	⑨117	女	音汝	◎
③56	与	音餘	◎	⑦22	楽	音岳	◎	⑨119	楽	音岳	◎
④19	脩	音周	△	⑦116	巫	音無	◎	⑨124	夫	音符	◎
④46	楽	音岳	◎	⑦140	切	音絶	×	⑨178A	耜	音似	○
④70	汝	女音汝	◎	⑧22	与	音餘	◎	⑩77	更	音庚	◎
④106A	誨	音会	×	⑧137A	導	道音導	◎	⑩86A	仇	音求	◎
④192	楽	音岳	◎	⑧240	駟	音四	◎	⑩143	屏	音丙	×
④245A	厠	音思	△	⑨14	与	音餘	◎				

以上の表からは、29例が通志堂本から典拠を見出せるものであることが確認できた。これらも正和本に用いられた『經典釈文』が上掲の字を被注箇所として挙げている可能性があり、かつ他の被注箇所にある同音注を活用して、正和本の加点者が字句の解釈に合わせて補った可能性も考えられる。

同音注が施された字は半数である延べ201(異なり75字)が多音字であり、そのうち最も多い字は「与」で47例である。音注として「音餘(余)」である38例のうち、助辞の意味として用いられ、ヲコト点の加点も「か」が施されたのは24例、「や」が施されたのは5例である。「音預」が施されている6例はすべて仮名音注に訓仮名「アツカル」が施されている。次に多い「夫」(31例)の場合は「音符(かの、それ、かな、か)」「音扶(かな、かの、かれ)」という風に、ヲコト点・訓仮名の違いに大きな差はないため、訓点からは明瞭な差は見られなかったが、「それ」は「音符」を施した字にのみ存する。「楽」は19例であ

り、同音注「音洛 (13 例：タノシフ・タノシヒ)」「音岳 (6 例：ヲコト点のみ)」によって訓点をはっきり分けている。その次に「説 (悦)」(11 例)「ヨロコヒ」「ヨロコフ」のように反切注と殆ど同じ理由で注音をしている。

一方、『広韻』には単音字であるが、「太 (大)」(14 例)、「知 (智)」(13 例)、「汝 (女)」(9 例)、「道 (導)」(6 例)、「遜 (孫)」(6 例) は、各々括弧内の字と通用字の関係であり、字体の類似や偏旁冠脚を加えることによって、意味を異にしている字である。これらは、文の内容に関わるため、同音注を付している用例と考えられる。

以上、正和本と通志堂本を比較し、被注字の反切注・同音注の異同と、どのような意識で被注しているかという二点について概観した。正和本と通志堂本における音注に差が生じた原因としては、正和本にはより古い釈文系統からの転写と通行版本 (南宋・長興版本) からの転写とが多層的に加筆されている可能性がある⁹³⁾。正和本は校勘の過程で多数の注釈書・異本を用いているため、その蓋然性は高い。

3.5 小結

本研究では、清原家および中原家加点を反映している『論語』完本 3 種と残巻本 4 種の鈔本を対象にし、その中に施されている漢字音注記 (仮名音注、声点、反切注・同音注) を素材に、その漢字音から如何なる特徴が認められるかについて検討した。以上の分析結果から各注記別に以下のような結果が得られた。

仮名音注

・非鼻音化の遅れという観点からは、明母・泥母字のうち撥音韻尾を持つ字を対象に、非鼻音化された表記 (バ・ダ)、鼻音表記 (マ・ナ) の表記の分布を調べた。韻母の種類によって、これらは相補分布するが、庚韻・刪韻は同韻の中でも声調により、表記を異にしていることが確認できた。

・歯音字 (サ行音) の表記の揺れという側面からは、原則他声母では拗音となる傾向を持つ、3 等韻字を基に、歯音字の表記を調査した。多くが歯音二等字に属する字に、直音表記が集中するが、例外と見られる部分も多く、一部の字は字画の一部による類推によると疑わしき事例も散見すると判断した。

・拗音表記の場合は、鎌倉初期に近い資料である場合は、より合口字の性質 (ワ行音) を保っており、鎌倉後期から南北朝時代の鈔本には直音化が目立つ。ただし、構造が複雑な「クキヨウ (通撰・曾撰)」・「クキヤウ (宕撰)」のような表記は、より単純な構造である「クキ (止撰)」に比して消滅が早いことが確認できる。なお、近い時期に書写された清原家鈔本と中原家鈔本を比較すると、中原家鈔本の方がより「キ」「エ」を介する合口性をより温存している。歯音・舌音声母字における「キ」を介する表記 (止撰・臻撰)

⁹³⁾ 坂井 (1969 : 96)

は、清原家・中原家両方の鈔本から、その事例は極めて少ないものの、「スキ」「スキン」などの表記は反切注・同音注を共起する部分に集中することが確認できた。

・ハ行転呼音は p 韻尾字が「フ」から「ウ」にされる集中が著しく、ŋ・u 韻尾字「ウ>フ」となる字は比較的少ない。ただし、p 韻尾字の表記については、各本によって異なり、鎌倉中期点の『群書治要』は「フ」表記が殆どである反面、より加点時代が早い高山寺清原本は「ウ」表記の方が優勢であり、鈔本により表記に関する意識には差があると判断される。

・「㊦ヨウ」「㊦ウ (㊦フ)」の混同は、比較的に加点時代が早い高山寺清原本・群書治要には見られない。鎌倉後期以降の鈔本からは、系統に関係なく、「㊦ヨウ」「㊦ウ (㊦フ)」両方の混同が著しいことが確認できた。なお、「㊦ヨウ」から「㊦ウ」に表記が変わるより、「㊦ウ」から「㊦ヨウ」へ変ずる少ない。なお、咸撰字の「㊦フ」が「㊦ヨウ」に表記されている事例は『論語』鈔本から見いだせなかった。

・長母音表記は一部の鈔本のごく限られた字の中でのみ現れた。特に最も加点例が多かった建武本における一部の字、その中でも、平声軽・去声といった曲調の字に集中して現れる。

・m・n 韻尾の表記は、揺れがまったくない鈔本（高山寺清原本）、両者の表記が混同する鈔本（正和本・建武本・高山寺中原本）、ほぼン表記に集中する鈔本（嘉暦本・文永本）に区別することが出来る。ただし、ム・ン書き分けは鈔本により、差があり、正和本は他本に比べ、m・n 韻尾字をム表記の事例が多い。このように、ほぼ同時代の鈔本の中でも、加点者により、表記の傾向は異なることが確認できた。

・促音化は、文永本を除く 6 種の鈔本から、その事例が確認できた。促音化表記は、入声韻尾 p・k 韻尾の次に、無声子音が後続する場合、その加点が集中するが、k 韻尾字よりも、とりわけ p 韻尾字にその事例が多く、k 韻尾字は全体の加点の比率から照らし合わせても、促音化の度合いは低い。

・t 韻尾の表記の転写はどの鈔本においても、「ツ」として固定しているが、稀に「チ」に表記する事例が存する。「チ表記」は前寄り母音のイ段音・エ段音に集中するが、後筆が多い建武本に最もそのチ表記例が多い。

・最後に、各鈔本には、漢音形とは認められない、呉音形の混入、百姓読みと判断される事例も一部含まれている。これらの加点は、その多くが、『經典釈文』所引の反切注・同音注が、その裏付けに用いられていないため生じることが多い。反切注・同音注がある場合においても一部の漢音以外の字音が混入されているが、これは、反切注・同音注を施した前の加点が修正されず残存しているか、後筆が補われる過程で混入された可能性が高い。呉音形は日常生活に用いられる字が多く見られ、百姓読みは、字画の一部を取り類推によって生ずるものであると判断される。

声点

・7種の鈔本からは、すべて平声・入声の軽点が認められる。ただし、最も加点時期が早い高山寺清原本でも両者の混同が見られるものの、依然として理論上の軽点を加点する比率が高いが、鎌倉後期から南北朝にかかる時期の声点はその比率が次第に低くなる。さらに、加点時期が比較的に近い清原家鈔本と中原家諸本の傾向を見ると、中原家鈔本の方が軽点加点の比率が高いことが確認できた。

・上声全濁字の去声化という側面では、中原家鈔本がより去声化の度合いが高い。一方、清原家鈔本は高山寺清原本・建武本は去声点の比率が高いが、主として清原教隆が関与した鈔本に限り、上声が他本に比べ高い比率で加点されている。去声点以外の加点の原因を、呉音声調および日本語アクセントで現れる、中低型の回避および一音節去声字の上声化という側面から分析を行った。その一部は、この事象により説明できる部分があるが、その全体が当てはまらず、清原教隆が一部の上声全濁字における去声点を、『經典釈文』や韻書に基づいて上声点に変更したと疑われる。

・濁声点加点は、中原家鈔本より清原家鈔本の方がその加点率が高い。ただし、高山寺清原家本と建武本は濁声点の加点比率が極めて低い。高山寺清原本の場合、濁声点をあまり施さない天台宗の僧侶による加点であり、それが濁声点加点の比率に影響を与えたと考えられる。一方、建武本の場合、室町時代以降の加点が多く混じており、仮名の右肩に濁点を施す事例も多いことから、濁声点の役割が仮名に移行されたためであろう。更に、漢音形で原則濁音となる明母・泥母・疑母・日母以外の濁声点が集まるが、それ以外の全清・次清・全濁声母字の中でも一部の濁声点加点が見られる。特に全濁声母字に濁声点が集まっており、漢音の母胎音において抑も濁音（有声音）として伝承されてきた可能性がある。一部の事例は前接の鼻音韻尾により連濁が生じたと見られる事例も認められる。

・最後に、非規範的であると判断される声点は、その多くが多音字であり、『經典釈文』における第一の音注を取らず、他方の音注に倣ったためであると判断されるものが存する。その他に、鈔本系統により、声点加点を異にしている部分があり、これらの字からは、各博士家において、伝承されてきた字に差があったことを物語るものと判断される。その中では、呉音資料の中に同様の加点があるものが混じており、呉音声調の混入が、このような加点の原因の一つであることを述べた。

反切注・同音注

・数が最も多い正和本を基に調査し、通志堂本『經典釈文』と比較することによって、各々1割・2割ほど不一致の例が認められる。これらの一致しない反切・同音注は、正和本における誤写と宋本以降の『經典釈文』版本の転写のみならず、より古い系統の異本を転写したためであると判断される。

・反切注・同音注は、本来の目的である、多音字の区別（同形異音ないし異義）・字形による混同が生じる可能性のある字・通用字の問題を解決するものであり、厳密な読み分けのために、特定の被注字に集中しており、訓仮名を施すにも、音注が大いに左右している

ことが認められる。

・ただし、『経典釈文』所引の注記を本文に書き込まない鈔本もあり、これらは、書写・加點の目的により、省かれたと考えられるが、有機的に本文の内容と連携している。

本研究では、『論語』7種における個々の事象について、大まかに論じるに留めた。しかし、加點の状況、中国側注釈書の利用の仕方には諸本ごとに差があるため、他の『論語』加點資料にも視野を広げ、本研究で棚上げにしてきた諸問題を解決することを今後の課題としたい。

別表1 『論語』完本3種の巻毎の加点状況

『論語』は正文と注文を合わせて約37,000字の分量であり、各巻の巻末⁹⁴⁾には正文(経)と注文(注)の字数を記しているが、実際の字数とは多寡が存する。さらに、諸本ごとに補鈔・抹消による字数の加減が存するが、2017年版正和本の複製本の解題に所収されている「調整値」をもとにし、各巻にどれほどの比率で漢字音注記が施されているかを以下に示す。

		正和	嘉暦	建武	正和	嘉暦	建武	正和	嘉暦	建武	正和	嘉暦	建武
		声点			仮名音注			反切注			同音注		
巻1	経 1465	265 (18.1)	301 (20.5)	130 (8.9)	77 (5.3)	25 (1.7)	451 (30.8)	58 (4.0)	33 (2.3)	58 (4.0)	22 (1.5)	6 (0.4)	23 (1.6)
	注 1645	128 (7.8)	239 (14.5)	133 (8.1)	76 (4.6)	46 (2.8)	45 (2.7)	16 (1.0)	11 (0.7)	15 (0.9)	6 (0.4)	3 (0.2)	7 (0.4)
巻2	経 1213	55 (4.5)	160 (13.2)	107 (8.8)	52 (4.3)	29 (2.4)	221 (18.2)	60 (4.9)	27 (2.2)	41 (3.4)	17 (1.4)	8 (0.7)	9 (0.7)
	注 2053	87 (4.2)	247 (12.0)	150 (7.3)	95 (4.6)	30 (1.5)	34 (1.7)	28 (1.4)	13 (0.6)	7 (0.3)	5 (0.2)	2 (0.1)	6 (0.3)
巻3	経 1714	70 (4.1)	143 (8.3)	159 (9.3)	90 (5.3)	28 (1.6)	328 (19.1)	69 (4.0)	31 (1.8)	65 (3.8)	40 (2.3)	18 (1.1)	35 (2.0)
	注 2290	86 (3.8)	168 (7.3)	148 (6.5)	121 (5.3)	34 (1.5)	59 (2.6)	42 (1.8)	19 (0.8)	36 (1.6)	17 (0.7)	9 (0.4)	17 (0.7)
巻4	経 1505	74 (4.9)	96 (6.4)	108 (7.2)	93 (6.2)	45 (3.0)	303 (20.1)	64 (4.3)	45 (3.0)	43 (2.9)	26 (1.7)	19 (1.3)	19 (1.3)
	注 2228	88 (4.0)	105 (4.7)	141 (6.3)	132 (5.9)	50 (2.2)	102 (4.6)	37 (1.7)	36 (1.6)	21 (0.9)	13 (0.6)	14 (0.6)	8 (0.4)
巻5	経 1466	69 (4.7)	87 (5.9)	132 (9.0)	121 (8.3)	34 (2.2)	307 (20.9)	88 (6.0)	45 (3.1)	86 (5.9)	42 (2.9)	14 (1.0)	39 (2.7)
	注 2493	68 (2.7)	91 (3.7)	139 (5.6)	133 (5.3)	41 (1.6)	45 (1.8)	28 (1.1)	22 (0.9)	42 (1.7)	1 (0.04)	2 (0.1)	5 (0.2)
巻6	経 2089	63 (3.0)	64 (3.1)	134 (6.4)	89 (4.3)	13 (0.6)	436 (20.9)	68 (3.3)	32 (1.5)	10 (0.5)	29 (1.4)	6 (0.3)	8 (0.4)
	注 2245	62 (2.8)	58 (2.6)	105 (4.7)	104 (4.6)	20 (0.9)	26 (1.2)	36 (1.6)	19 (0.9)	4 (0.2)	8 (0.4)	4 (0.2)	2 (0.1)
巻7	経 2394	99 (4.1)	178 (7.4)	117 (4.9)	60 (2.5)	69 (2.9)	421 (17.6)	83 (3.5)	44 (1.8)	27 (1.1)	43 (1.8)	14 (0.6)	21 (0.9)
	注 2764	95 (3.4)	175 (6.3)	132 (4.8)	68 (2.5)	69 (2.5)	42 (1.5)	45 (1.6)	34 (1.2)	9 (0.3)	7 (0.3)	4 (0.1)	3 (0.1)
巻8	経 1795	69 (3.8)	39 (2.2)	100 (5.8)	58 (3.2)	13 (0.7)	316 (17.6)	45 (2.5)	31 (1.7)	10 (0.6)	32 (1.8)	13 (0.7)	12 (0.7)
	注 1961	62 (3.2)	33 (1.7)	117 (5.8)	82 (4.1)	12 (0.6)	28 (1.5)	16 (0.8)	12 (0.7)	8 (0.4)	9 (0.5)	5 (0.3)	4 (0.2)
巻9	経 1664	94 (5.6)	62 (3.7)	157 (9.4)	59 (3.5)	12 (0.7)	314 (18.9)	73 (4.4)	52 (3.1)	38 (2.3)	44 (2.6)	15 (0.9)	22 (1.3)
	注 2027	90 (4.4)	53 (2.6)	176 (8.7)	59 (2.9)	14 (0.7)	49 (2.4)	42 (2.1)	23 (1.1)	13 (0.6)	8 (0.4)	4 (0.2)	8 (0.4)
巻10	経 1229	39 (3.2)	37 (3.0)	61 (5.0)	21 (1.7)	8 (0.7)	187 (15.2)	34 (2.8)	8 (0.7)	7 (0.6)	13 (1.1)	3 (0.2)	5 (0.4)
	注 1070	36 (3.4)	31 (2.9)	58 (5.6)	32 (3.0)	11 (1.1)	21 (2.2)	8 (0.8)	1 (0.1)	1 (0.1)	1 (0.1)	0 (0.0)	1 (0.1)
計	37310	1699 ⁹⁵⁾ (4.6)	2367 (6.3)	2506 (6.7)	1622 (4.3)	604 (1.6)	3738 (10.0)	940 (2.5)	538 (1.4)	541 (1.5)	384 (1.0)	163 (0.4)	254 (0.7)

⁹⁴⁾ ただし、巻第4と巻第8の巻末には字数を記していない。各巻に記されている字数の詳細については2017年版の「訓点解題」7頁を参照されたい。

⁹⁵⁾ 学而篇の内題に施されている朱声点が2例存するが、本表では除いた。

第4章 『古文尚書』の漢字音

『尚書』（もしくは書経）は中国古代の帝王の言行録であり、儒学の根幹を為す重要な書物であることは周知の事実である。本研究で扱う孔安国伝『古文尚書』⁹⁶は13巻・58篇に構成されている。日本に現存『古文尚書』の古鈔本・古版本には本文に「惠（徳）」「焄（前）」「峇（時）」といった隸古字が混じるものが多い。中国においては、唐の玄宗（在位712-756年）が集賢学士である衛包に命じて、古体の文字を当時の通行字体に改めており（衛包改字）、それ以降の経書の手本となる開成石経（837年）は当時の標準字体に改められている。このような流れから見ると、日本に於ける『古文尚書』のテキストは盛唐以前の流れを汲むテキストが利用されたと見て良いと考えられる。

日本に現存する最古の『古文尚書』テキストである唐写・平安中期点本⁹⁷に書き入れられた注記・訓点については、小林（1967）・石塚（1983）、原（1987）などの諸家からの訓読の側面から既に詳細な研究がなされており、漢字音の側面から同資料を題材にした研究としては、沼本（1969・1982）がある。沼本氏の一連の研究では、『古文尚書』平安中期点における音注（反切注・同音注）と現存本の通志度本、敦煌本『經典積文』残巻などを材料に、「書入れ音注と通志堂本の音注との不一致の殆どが、敦煌本と通志堂本との不一致に対応し、その不一致の原因は、平安中期点書入れ音注の方が敦煌本と同体裁の原初形經典積文の姿を示している為」という結論を出している。

しかし、平安以降の時代に書写・加点された『古文尚書』訓点資料の漢字音に関しては、未だ詳細な研究がないのが現状である。

本研究では鎌倉時代から南北朝時代の200年間の間に、書写・加点された資料であり、且つ朱点・墨点の区別が可能なカラー写真を入手できた資料を中心に、各本に施されている漢字音注記を調査する。

各被注字を、中国の韻書『広韻』を用いて分類し、仮名音注・声点については、表記・加點の揺れに関わるいくつかの事象を取り上げ、それらを各節において実例を挙げながら述べることにする。次に、反切注・同音注については、中国側注釈書である『經典積文』のうち現存本の通志堂本における「尚書音義」（巻第3・巻第4）との比較を通じて、鎌倉時代から南北朝時代まで加点された『古文尚書』鈔本における音注の差を導き出し、一致の度合いと、一致しない部分に関しては、その特徴点について述べる。

4.1 使用資料

本研究で扱う『古文尚書』鈔本は、カラー写真で入手できた5種の資料を対象とする。ただし、『論語』『孝経』とは異なり、全巻を完備する鈔本が現存しない限界を持つ。以下は、

⁹⁶ 本研究で用いる『古文尚書』は漢武帝の時に孔子旧宅の壁中から発見されたものではなく、東晋の梅賾が発見し、朝廷に献上したとされるものである。清の閻若璩『尚書古文疏證』、惠棟『古文尚書考』などによってテキストの半分が東晋時代の偽作とされて以来、『偽古文尚書』と呼称される。

⁹⁷ 現在は各々東洋文庫（岩崎本：巻3の前半一部、巻5、巻12）、東山御文庫（九条本：巻3、巻8、巻10、巻13）、文化庁（神田本：巻6）に分蔵されている。

各資料に関する概略である。

清原家

(1) 群書治要巻第2 (選抄本)

宮内庁書陵部蔵。『群書治要』のうち、巻第2に当たる。『古文尚書』の58篇のうち、延べ28篇の一部を抜粋している。群書治要の経部(巻1~10)に対しては、関東清原家の文章博士である清原教隆が4年に亘り直接加点が施しており、巻第2は建長五年(1253)の加点である。漢字音注記としては墨点のみであり、朱のヲコト点が施されている。調査には宮内庁書陵部漢籍集覧の写真を用いた。

(2) 天理本 (天理本巻第11)

天理図書館蔵。卷子1軸。巻第11の「周官」から「君陳」の前部分に当たる。巻末奥書を欠くが、金谷(1980)・築島(1980)による本資料の解説では、鎌倉後期の書写と判定しており、清原家の流(経伝点)のものであることが推定されると述べている。古文がすべて今文に改められており、宋刊本の本文に依拠したためであると推測している。漢字音注記としては薄い朱・墨筆の声点、墨筆の反切・同音注・仮名音注が存する。調査は天理図書館より入手した紙焼きの写真を用いた。

中原家

(3) 元徳本

東洋文庫蔵。卷子1軸。巻第6の「泰誓上」から「武成」に当たる。巻首に一部の欠損があるが、首尾巻具。元徳二年(1330)博士家の中原康隆による奥書を有する。約90年に亘る講読の奥書があり、室町中期に施されたと見られる別筆が多く含まれる。中原家の点本でありながら、清原家の訓説に拠っていることが、坂本(1943)、小林(1967)によって指摘されている。漢字音注記としては朱・墨筆の声点、墨筆の反切・同音注・仮名音注が存する。調査には原寸原色の東洋文庫善本叢書7(2015、勉誠社)を利用した。

中原家+藤原家

(4) 観智院本

天理図書館蔵。卷子1軸。巻首を欠き、巻第11の「周官」の後半部から「康王之誥」に当たる。元亨三年(1323)中原家鈔本をもって移点した藤原長頼の奥書があり、文和三年(1354)喜久壽丸によって、藤原家式家の加点本を移点したという別筆の奥書が存する。経典点(中原家)と紀伝点(藤原式家)が混在しており、両者が並立する場合は、紀伝点に朱合点を施しているところが多く見られる。漢字音注記としては朱・墨筆の声点、墨筆の反切・同音注・仮名音注(一部朱筆の仮名あり)が存する。調査には天理図書館より入手した紙焼きの写真を用いた。

(5) 文和本（天理本巻第4）

天理図書館蔵。巻第4の「太甲上」から「咸有」に当たる。首尾は揃っているが、129行から2行の欠落がある。奥書には（藤原）長頼が中原家の秘本を以て移点しており（ただし紀年なし）、更に別筆で文和三年（1354）の藤原式家の点本を移点し、朱点を校勘したことが記されており、観智院本との共通点が多い。漢字音注記としては朱・墨筆の声点、墨筆の反切・同音注・仮名音注が存する。調査は天理図書館より入手した紙焼きの写真を用いた。

4.2 仮名音注

沼本（1969）は、「（平安中期点本『古文尚書』の）字音注には、反切注・同音字注のみであり、仮名による字音注が一切施されていない」ことを報告しているが、鎌倉時代の資料を見ると仮名音注の数は飛躍的に増えてくる。本研究で対象にした鈔本5種の中で、仮名音注が最も多く施されている資料は元徳本（巻第6、315例）であり、次に観智院本（巻第11、232例）、群書治要本（選抄本、207例）、文和本（巻第4、74例）、天理本（巻第11、40例）の順である。特に、元徳本に仮名音注が多く施された原因は、後筆による加点が多く含まれ、約90年に亘る伝授の経緯が別筆か交じることとなり、且つ仮名に濁点が右肩に定着している表記も見当たる⁹⁸⁾。本節では、まず、各本から日本語音韻上の影響を受けて表記の統一性が乱れる部分について注目する。次は、漢籍訓読資料を講読する際は、漢音で読まれることが慣例となっているが、別階層の字音である呉音形を反映した表記、加点者の類推によって導き出された、いわゆる慣用音の例について述べる。

4.2.1 非鼻音化の遅れ

漢音形の声母と仮名表記の間の問題として、非鼻音化現象が見られるが、これは撥音韻尾を持つ字においてより進行が遅れる。『古文尚書』諸本で非鼻音化の反映が見られる箇所（明母バ行、泥母ダ行）と依然として鼻音表記（明母マ行、泥母ナ行）が残る韻母を調査する。以下の表4-1は明母字のうち、撥音韻尾を有する字とその仮名音注を示したものである。

表4-1 明母（微母）撥音韻尾字における仮名音注

ㄱ 韻尾字						
字	声・韻	群書	天理	元徳	観智院	文和
幪	明・東	ホウ(1)				
扈	明・江		マウ(1)			
亡	明・陽	ハウ(1)				
望	明・漾			ハウ(1)		
猛	明・梗2			マウ(2)		
命	明・映3	メイ(1)		メイ(2)		

⁹⁸⁾ 沼本（2013：188-204）によると、訓点資料において仮名に直接濁点を施す形式は1400年代前半から現れはじめ、急増するのは1550年以降としている。さらに、元徳本には応永二七年（1420）まで講読に用いられたことが巻末奥書から確認できるため、仮名の右肩に濁点を施す加点は最初の元徳年間の加点ではなく、後代の補入であると考えられる。

冥	明・青			メイ(1)		
n 韻尾字						
字	声・韻	群書	天理	元徳	観智院	文和
文	明・文				フン(1)	
蠻	明・刪	ハン(1)		ハン(2)		
慢	明・諫			マン(1)		
瞑	明・霰	メン(1)				
湏	明・線甲	メン(1)		メン(1)		
面	明・線甲				メン(1)	
勉	明・彌乙			ヘン(1) ヘム(1)		
冕	明・彌乙			ヘン(1)		

以上、マ行音となるのは、庚韻（梗韻・映韻）の2・3等字、先韻（銑韻・霰韻）、仙韻（獮韻・線韻）の甲類に集中する一方、バ行音は陽韻（養韻・漾韻）、文韻（吻韻・問韻）、仙韻（獮韻・線韻）の乙類に集中している。ただし、刪韻（平声）字の「蛮」は「ハン」であるが、同列の諫韻（去声）字の慢は「マン」となっており、『論語』鈔本で見られた結果と同様である。

唯一、通撰字である、群書治要^{ホウ}「幪(21A)」は声母がハ行（バ行）音で表記されており、更に平濁点が施されている。前章の『論語』のうち4種の鈔本（正和本、建武本、高山寺清原本、高山寺中原本）において見られる「蒙」^{モウ}は「幪」とまったく同音であるが、異なる表記となっている。「幪」が登場する「瞬典（眞書）」の該当する『經典釈文』の「尚書音義（巻第3）」には該当字の音注を見いだせない。『經典釈文』の他の音義には巻第7（毛詩音義下）「幪幪：莫弘反茂盛也」、巻第9（周礼音義下）「幪：莫公反劉莫貢反」、巻第12（礼記音義之二）「幪之：音蒙」に見られる。他の巻の巻第12の同音注を基づいたとすると、「モウ」が施された可能性が高いが、反切注に基づく演繹的方法によって施された可能性が高い。『群書治要』の経部の中にも、同音字の「蒙」に「ホウ(①157)」の仮名音注が見られることから、清原教隆は当該字をこのように読んでいたと考えられる。

その他に、撥音韻尾を持たないが、明母においてマ行音を残存している字が一部ある。隊韻字である「昧」に「マイ」の付音が見当たる資料として、元徳本(129_左・214_左)と文和本(20)があり、本研究で扱った他の資料の中でも、同様の表記が見られることから、漢音形は「バイ」ではなく「マイ」として受け継がれてきたようである。元徳本には同音注「音妹(129)」「音毎(214)」の注記があり、「ハイ(バイ)」の字音が入り込む余地はあるように見える。『大漢和辞典』『漢辞海』などの現代漢和辞典においては「昧」の漢音形を「バイ」として載せている。しかし、漢音資料では明母の泰韻・皆韻字の中には「バイ」とならず、「マイ」が書き込まれる例が報告されている⁹⁹⁾。明母字は撥音韻尾を有する一部の字を除き、殆どがバ行音となり、隊韻（灰・賄韻を含む）は「㊦イ」となるため、現代の漢和辞書における「バイ」という音形は反切と日本漢字音における規則を利用した、演繹的な方法で導き出された字音であると判断される。

更に、元徳本(139)には侯韻字である「髻」に「モウ」の付音があるが、左側には『經典釈

⁹⁹⁾ 佐々木 (2009 : 195)。

文』所引の反切注「茂侯反」が書き込まれている。明母・侯韻字は「戊」「母」「牡」のように漢音形は「ボ」となるが、他の侯韻字は原則「㊦ウ」の表記となる。これらの字の呉音形は「ム」であるため、呉音の混入とはいいいがたい。この字音が、反切注を通じて作り出された作為的な字音とするなら、声母のマ行音となっていることから、加点者が「茂」をマ行音として認識することにより可能となる。しかし、切韻系韻書には「髻」が侯韻には所収されておらず、東韻に属している字であるため、『經典積文』の反切注を用いた作為的な字音とは判断しにくい。さらに、後述するが、一部の鈔本には『切韻』が利用されている痕跡が残っており、東韻字の字音である「モウ」を施している蓋然性が高い。

次は、泥母のうち撥音韻尾を有する字は下の表 4-2 の通り 1 字のみである。

表 4-2 泥母（嬢母）撥音韻尾字における仮名音注

ㄱ 韻尾字						
字	声・韻	群書	天理	元徳	観智院	文和
佞	泥・徑	ネイ(1)		ネイ(1)		

上の表のように本研究で用いた『古文尚書』諸本のうち、泥母撥音韻尾字は「佞」のみである。これは前章の『論語』諸本で見られる当該字「佞」や同音字「甞」、青韻（平声）の「寧」に施されている仮名と同様、泥母青韻字は原則ナ行音となると見られる。

4.2.2 歯音字（サ行音）における表記の揺れ

原則拗音となる 3 等韻に属する字の中でも、一部の歯音字の中には、拗音表記にならず、直音表記の付音が見られる。本節では『古文尚書』諸本の中に見られる歯音字を声母別に分け、拗音表記と直音表記の分布について調査する。

以下の表 4-3 は、ア段拗音が現れる陽韻字、ウ段拗音が現れる眞韻・尤韻、オ段拗音が現れる魚韻・鍾韻・蒸韻字を対象にして、各鈔本に書き込まれている仮名音注を示したものである。

表 4-3 歯音声母・拗音韻母字における仮名音注

ア段音						
字	声・韻	群書	天理	元徳	観智院	文和
雀	精・葉				シヤク(1)	
祥	邪・陽			シヤウ(1)		シヤウ(1)
庠	邪・陽	シヤウ(1)		シヤウ(1)		
廂	心・陽				シヤウ(1)	
削	心・葉	サク(1)	サク(1)		サク(1)	
爽	生・養			サウ(2)		サウ(2)
酌	章・葉				シヤク(1)	
傷	書・陽			シヤウ(1)		
餉	書・漾	シヤウ(2)				
蕪	日・葉				シヤク(1)	
ウ段音						
字	声・韻	群書	天理	元徳	観智院	文和
肅	心・屋		シク(1)		シク(1)	

祝	章・屋			シク(1)		
塾	常・屋				シク(2)	
戎	日・東			シウ(2) シユ(1)		
肉	日・屋			シク(1)		
足	精・遇	スウ(1)				
聚	従・麌			シフ(1)		
囚	邪・尤			シユ(1)		
叟	心・尤			シウ(1)		
羞	心・尤			シフ(1)		
受	常・有			シウ(1)		
綬	常・有	シウ(1)				
手	書・有					シユ(3)
才段音						
字	声・韻	群書	天理	元徳	観智院	文和
緒	邪・語	シヨ(1)				シヨ(1)
叙	邪・語				シヨ(1)	
助	崇・御			ソ(1)		
杵	昌・語			シヨ(1)		
従	従・鍾				シヨウ(1)	
統	邪・燭	シヨク(1)				
春	書・鍾			シヨウ(1)		
蜀	常・燭			シヨク(1)		
統	常・燭			シヨク(1)	シヨク(1)	
辱	日・燭			シヨク(1)		シヨク(1)
稷	精・職			シヨク(2)		
繪	従・蒸				ソウ(1)	
側	莊・職	ソク(1)				
仄	莊・職	ソク(1)			ソク(1)	
昃	莊・職	ソク(1)				
色	生・職			ソク(1)		
式	書・職			シヨク(1)		
仍	日・蒸				シヨウ(1)	
苻	日・蒸				シヨウ(2)	

サ行直音となる声母はア段音は心母・生母、ウ段音は精母、オ段音は従母・莊母・崇母・生母である。『古文尚書』の中では実例が比較的少ないが、『論語』鈔本と同様に正歯音二等に属する莊母・初母・崇母・生母は例外なく直音で現れている。

ア段音の中に正歯音以外の声母を持つ「削」は心母であり、同声母を持つ「廂」はサ行拗音で現れていることから、同じ声母字の間でも拗音・直音の表記がわかる。

ウ段音の中では正歯音二等に属する字はないものの、精母字の「足」のみが直音表記となっている。虞韻及び尤韻字の仮名表記の中では「シユ」のように拗音表記のほか「シウ」(元徳本の「聚」「羞」のようにハ行転呼音による「シフ」を含む)のようにア行音で表記がなされたものも存する。

オ段音の中では正歯音二等に属する声母字はすべて直音表記となっている。ただし、例外であるのが、従母字である観智院本の「繪(150A)」のみである。観智院本(巻第11)の当該箇所を『經典釈文』で検索すると被注箇所ではないが、『古文尚書』巻第3に当たる「禹貢第一」の『經典釈文』の音注に「繪:似陵反」が先んじて掲出されている。ただし、「似」声母は『広韻』では邪母となるため、若干のずれは見られるものの、この反切注を基づく仮名音注が施されたとすると「シヨウ」が施された可能性が高く、直音となる理由は定かでは

ない。しかし、他の資料の中でも「繪」に対して直音を施している実例があり、『白氏文集』諸本の中でも正応本『白氏文集』・東洋文庫本『白氏文集』に「繪」の仮名音注として「ソウ」の加点があることから、この字音は直音で読まれていたと考えられる。直音で読まれているのは傍の「曾」が当該字の読みに関係していたと推測する。前述の『論語』諸本の中でも、清母の「踰」も傍の「倉」との関係性が疑われていたが、確証とすべきものはないため、他鈔本を交えて類例があるかを調査する必要がある。

4.2.3 合口字の表記

本節では『古文尚書』諸本に見られる「ㄱ」「ㄴ」介在の字音表記について見ていく。本研究に用いた鈔本は鎌倉中期から南北朝期に亘る鈔本であり、仮名音注において、イ段・エ段合拗音直音化が進んでいる。本節では合拗音表記が想定される合口字及び通撰（鐘韻）・曾撰（蒸韻）の乙類字を中心にその仮名表記を諸本間の比較を行うこととする。まず、以下の表4-4はイ段合拗音（ないしア段音への統合）が想定される字における仮名表記と用例の数を表したものである。

表4-4 イ段合口字における仮名音注（牙音・喉音声母）

通撰・曾撰／ㄱキヨウ（ク）＞ㄴキヨウ（ク）						
字	声・韻	群書 (1:3)	天理 用例無し	元徳 (1:2)	観智院 用例無し	文和 (1:1)
恭	見・鍾	クキヨウ(1)				
龔	見・鍾					クキヨウ(1)
拱	見・腫			キヨウ(1)		キヨウ(1)
昞	曉・燭			クキヨク(1)		
矜	見・蒸			キヨフ(1)		
兢	見・蒸	キヨウ(1)				
殫	見・職	キヨク(1)				
凝	疑・蒸	キヨウ(1)				
止撰／ㄱキ＞ㄴ						
字	声・韻	群書 (7:0)	天理 (1:0)	元徳 (4:2)	観智院 (5:1)	文和 用例無し
癸	見・旨			クキ(3)	クキ(1)	
宥	見・旨	クキ(1)		キ(1)	キ(1)	
戮	群・脂				クキ(2)	
夔	群・脂	クキ(1)				
揆	群・旨	クキ(1)				
危	疑・支			クキ(1)		
偽	疑・寘				キキ(1)	
虺	曉・尾	クキ(1)				
威	影・微	キ(2)				
維	羊・脂	キ(1)	キ(1)			
違	于・微			イ(1)		
韋	于・微				キ(1)	
臻撰／ㄱキン＞ㄴ						
字	声・韻	群書 用例無し	天理 用例無し	元徳 用例無し	観智院 (0:1)	文和 用例無し
均					キム(1)	
宕撰／ㄱキヤウ（ク）＞ㄴヤウ・ㄴワウ（ク）						
字	声・韻	群書 用例無し	天理 用例無し	元徳 (0:1)	観智院 用例無し	文和 用例無し
筐				キヤウ(1)		

曾撰／㊦キ>㊧キ						
字	声・韻	群書 用例無し	天理 用例無し	元徳 用例無し	観智院 用例無し	文和 用例無し

「キ」を介在する仮名音注は、止撰に集中しているのは、他の鈔本と同様であり、通撰字のうち、合拗音を施している字は群書治要、元徳本、文和本に1例ずつ確認できる。臻撰・宕撰字は、各々1鈔本の事例が確認され、相互比較が困難であるが、すべて直音表記である。

次はエ段合拗音が期待される合口字のうち、仮名音注が見られる字の表記を見ていく。以下の表4-5はエ段合拗音とその仮名音注の数をまとめたものである。

表4-5 エ段合口字における仮名音注（牙音・喉音声母）

蟹撰／㊦エイ>㊧イ						
字	声・韻	群書 用例無し	天理 用例無し	元徳 (0:1)	観智院 (0:5)	文和 用例無し
圭	見・齊				ケイ(3)	
銳	羊・祭				エイ(2)	
衛	于・祭			エイ(1)		
山撰／㊦エン(ツ)>㊧ン(ツ)						
字	声・韻	群書 (1:4)	天理 用例無し	元徳 (0:4)	観智院 (2:2)	文和 用例無し
決	見・屑				ケツ(1)	
愿	疑・阮	クエン(1)				
血	曉・屑			ケツ(1)		
眩	匣・先	ケン(1)				
淵	影・先			エン(1)		
琬	影・阮				エン(2)	
怨	影・願			エム(1)		
悦	羊・薛				エツ(1)	
説	羊・薛	エツ(3)				
鉞	于・月			エツ(1)		
梗撰／㊦エイ(キ)>㊧イ(キ)						
字	声・韻	群書 (0:2)	天理 用例無し	元徳 (0:1)	観智院 用例無し	文和 (0:1)
嬰	見・梗	ケイ(1)				
惇	群・清	ケイ(1)				
役	羊・昔			エキ(1)		エキ(1)

エ段合拗音が想定される字のうち、蟹撰・梗撰字からは合拗音の用例は見いだせず、すべて直音表記となっている。山撰字の中で一部合拗音表記が認められるのは群書治要の「愿^{クエン}(101)」、観智院本の「琬^{エン}(158・159A)」が見られるのみで、エ段合拗音は直音化がほぼ完了したと見られる。

次は、歯音・舌音における合拗音表記が『古文尚書』諸本に見られるかを調査する。止撰合口字および臻撰真韻・諄韻合口字のうち、仮名表記が書き込まれている字は以下の表4-6の通りである。

表4-6 歯音・舌音合拗音における仮名表記

止撰／㊦キ・㊧キ>㊨イ						
字	声・韻	群書	天理	元徳	観智院	文和

		(0 : 1)	用例無し	(0 : 4)	(0 : 5)	(1 : 0)
帥	生・至			スイ(1)		
萃	従・至			スイ(1)		
遂	邪・至				スイ(1)	
垂	常・支			スイ(1)	スイ(3) ¹⁰⁰⁾	
墜	澄・至	ツイ(1)				ツキ(1)
累	来・紙			ルイ(1)	ルイ(1)	
臻撰 / ㊦ㄱㄴ・ㄷㄱㄴ (ツ) > ㄷㄴ・ㄷㄴ						
字	声・韻	群書 (1 : 4)	天理 (0 : 1)	元徳 (2 : 5)	観智院 (0 : 1)	文和 用例無し
駿	精・稗			シユン(1)		
卒	精・術			シユツ(1)		
準	章・準		シユム(1)			
筍	心・準				シユム(1)	
戍	心・術			シユツ(1)		
蠹	昌・準	シユン(1)				
循	邪・諄	シユン(1) シキㄴ(1)		スキㄴ(1)		
徇	邪・稗			シユン(1)		
殉	邪・稗	シユン(1)				
楯	船・準			スキㄴ(1)		
黜	徹・術	チツ(1)				
律	来・術			リツ(1)		

止撮合口字のうち、合拗音表記と見られるものは文和本の「墜(22A)」のみであり、他は「㊦イ」表記となっている。牙音・喉音声母字を「㊦キ」表記については、「反切・同音字注に支えられた軌範的な音注を施す資料」に多く見られる傾向がある。先述の『論語』の正和本には「㊦キ」表記5例が見られ、そのうち『古文尚書』に用いられる『經典釈文』が該当の仮名に影響を与えたかと考えられる。『經典釈文』『尚書音義』には「墜」に関する音注は見当たらず、反切注との関連性は薄いと見られる。さらに、臻撰字の齒音・舌音声母字の中では、「循」「楯」が「キ」を介在する合拗音表記となっている。群書治要・元徳本の合拗音表記が見られる「循」は通志堂本『經典釈文』『尚書音義』内部に掲出されていない。

表4-6の中で開拗音表記「駿」「徇」「殉」および直音表記となっている「黜」の4字は『經典釈文』に音注が所収されている。元徳本の「徇(53A)」は、52行目の正文に「似俊反」の音注が直接書き込まれているものの、合拗音表記の仮名音注が書き込まれているわけではない。残り3字の該当箇所には反切注・同音注が書き込まれていない。

実質的に音注がサ行合拗音に関わっている事例は、元徳本の「楯(142A)」のみであり、『經典釈文』所引の音注「食允反又音允」が書き込まれている。

4.2.4 ハ行転呼音による表記の混同

p 韻尾は日本漢字音において「フ」として定着するが、この表記は、2音節以降のハ行音がワ行音ないしア行音と統合する、ハ行転呼音によるものである。音韻上の区別が困難になり「フ」から「ウ」へと変じる表記が見られる。逆に「ウ」(η 韻尾・u 韻尾)の場合も、「フ」に混同される事例が見られる。この韻尾に該当する字の仮名音注が、『古文尚書』各本にお

¹⁰⁰⁾ 1例(163)のみ朱筆で書き込まれている。

いて如何に表記されているか、その傾向を以下の表 4-7 ように示す。

表 4-7 ハ行転呼音による表記の揺れ

		群書	天理	元徳	観智院	文和
p 韻尾	フ表記	3	2	0	3	0
	ウ表記	0	0	2	5	1
ŋ 韻尾	ウ表記	22	6	46	28	13
	フ表記	0	0	3	1 ¹⁰¹⁾	0
u 韻尾	ウ表記	21	2	25	23	5
	フ表記	0	0	3	2	0

p 韻尾字の場合は、フ表記が比較的に残っているのは清原家鈔本にのみであり、清原家鈔本の『群書治要』の場合は、『論語』におけるハ行転呼音にも述べたように、かなり厳密に「フ表記」が行われている。一方、中原・藤原家鈔本の中には揺れが見られるか、「ウ表記」のみの鈔本も見られる。これは、単に博士家による問題というより、p 韻尾字におけるハ行転呼がほぼ定着している時期の加点者によって、当該の仮名が書き込まれているためであると考えられる。すべて「ウ表記」である文和本は p 韻尾字のうち仮名音注がある字は「狎(31A)」1 例のみであり、判断は困難であるが、元徳本の「ウ表記」の事例を見ると、「接(149A)」^{ユウ}「邑(209)」のように、各々「㊦フ>㊦ウ>㊦ヨウ」、「㊦フ>㊦ウ>㊦ユウ」の過程を経て、拗長音化が完了した表記であり、最初の書写・加点が行われた鎌倉後期ではなく、それ以降の時代の加点者により書き込まれていると見られる。比較的に仮名の表記が多い観智院本の中では、同字であっても、「夾(155・156A)」と「夾(163)」のように「フ表記」と「ウ表記」が混用されている箇所も見られる。これは文暦二年(1235)の本奥書を持つ底本を用いて、元亨三年(1323)(中原)長頼により書写・加点がなされてから、約 30 年後の文和三年(1354)に藤原式家を利用した喜久壽丸という人物による後筆によって「ウ表記」が補われているためであると思われる。

音韻変化 ŋ 韻尾、u 韻尾の中にはハ行転呼音の影響があると見られる例は付音のある全体の用例からは非常に稀である。ŋ・u 韻尾におけるハ行音表記は元徳本と観智院本に見られ、元徳本の ŋ 韻尾字である「孕(21)」^{ヨフ}「崩(24)」^{ホフ}「揚(81)」^{キフ}、u 韻尾字である「佑(33A)」^{イフ}「休(72)」^{キフ}「羞(212A)」^{シフ}、観智院本の ŋ 韻尾字である「熊(227)」^{イフ}、u 韻尾字である「宥(91)」^{イフ}「釗(136)」^{ケフ}があり、なお主要母音が「u」である元徳本の「聚(202A)」^{シフ}のような事例も散見される。これらは、2 音節以降の「ウ」と「フ」との音韻上区別が消失したための揺れである。両者の統合がほぼ完了しており、ŋ・u 韻尾字の「フ表記」が「ウ表記」を上回る資料がある可能性は残るが、本研究において扱う資料では、すべて「ウ表記」が優勢となっている。ところが、元来「ウ」で表記される ŋ・u 韻尾字が「フ表記」となる事例が、p 韻尾における「ウ」表記より少ないのは、2 音節以降のハ行転呼が進んでいても、ハ行音[ɸ]が形態素の頭音においては依然として残存していたことに一因があると思われる。

¹⁰¹⁾ 壩(140A)「ユフ」という加点があるが、異音形「イウ」の表記の揺れであると判断し、除外した。

4.2.5 「㊦ヨウ」と「㊧ウ」の混同

鎌倉以降からは「㊦ヨウ」と「㊧ウ・㊧フ」が音韻の統合より、仮名音注の中でも両者が混同する例が増加する。沼本（1982：750-751）は「jou（㊦ヨウ）と eu（㊧ウ）とが共に拗長音化し、その結果が同一の音価に帰した事象が院政期に始まり、鎌倉期以降増加して行った」と述べている。本研究で扱う『古文尚書』諸本においても、このような事例が散見されるが、まずは、原則「㊦ヨウ」表記となる通撰（鍾韻）字および曾撰（蒸韻）字の仮名表記において、「㊧ウ」の表記加点されている事例を検討する。以下の表 4-8 は『古文尚書』鈔本において、その混同がどれほどの比率で現れるかをまとめたものである。

表 4-8 鍾韻・蒸韻字における仮名音注

字	声・韻	群書 (6:0)	天理 用例無し	元徳 (7:2)	観智院 (6:1)	文和 (2:2)
冢	知・腫			テウ(1)	テウ(1)	
寵	徹・腫			テウ(1)		テウ(2)
恭	見・鍾	クキヨウ(1)				
龔	見・鍾					クキヨウ(1)
拱	見・腫			キヨウ(1)		キヨウ(1)
従	従・鍾				シヨウ(1)	
春	書・鍾			シヨウ(1)		
庸	羊・鍾	ヨウ(1)		ヨウ(1)		
墉	羊・鍾				ヨウ(1)	
容	羊・鍾	ヨウ(2)		ヨウ(1)		
勇	羊・腫			ヨウ(1)		
憑	並・蒸				ヒヨウ(1)	
矜	見・蒸			キヨフ(1)		
兢	見・蒸	キヨウ(1)				
凝	疑・蒸	キヨウ(1)				
孕	羊・證			ヨフ(1)		
仍	日・蒸				シヨウ(1)	
苳	日・蒸				シヨウ(2)	

原則、「㊦ヨウ（ただし、㊧ウとなる一部の字を除く）」となる鍾韻・蒸韻字の中で、「㊧ウ」の表記となる字は、元徳本の「寵^{テウ} (34A)」「冢^{テウ} (183)」、観智院本「冢^{テウ} (11)」、文和本の「寵^{テウ} (80・112A)」であり、すべて舌音声母字に集中している。「チヨウ」となる事例は見られない。これはほぼ同時期に加点されている前章の『論語』諸本において、ほぼすべての声母字にこのような混同が見られたものとは対照的に見える。

清原家鈔本の群書治要（尚書部分）、天理本巻 11 の中には、舌音の用例が見られないが、『群書治要』の経部（巻第 1~10）の該当韻字のうちの舌音声母字は「冢(㊦105・㊦6)」「徹(㊦75・㊦230・㊦186・㊦69)」の 6 例があるが、仮名表記はすべて「テウ」となっている。なお半舌音字の「陵(㊦69)」「凌(㊦397)」もすべて仮名表記は「レウ」である。

佐々木（2009：207-208）もこの問題について触れており、「同じく清原教隆加点の久遠寺蔵『本朝文粹』でも、当該字に一例の仮名音注が存し、「青冢^{テウ} (十二 69)」とされる。あるいは、教隆は、「冢」の音を「テウ」と判断していたものであろうか」との見解を示している。

しかし、「テウ」加点の例は神田本『白氏文集』（1113年点）に「塚」(㊦^{テウ}28)の例があり、このような表記が院政期資料から見られることから、早い段階からこのような表記が舌音字を中心に混同されていたようである。

次は原則「㊦ウ」となる效撰（宵韻・蕭韻）と「㊦フ」となる咸撰入声字（葉韻・帖韻・業韻）の仮名表記を見ていく。『古文尚書』において当該韻に属する字に仮名音注が施されている事例を以下の表 4-9 に示す。

表 4-9 宵韻・蕭韻・葉韻・帖韻・業韻における仮名音注

字	声・韻	群書 (6:0)	天理 用例無し	元徳 (4:1)	観智院 (6:0)	文和 (2:0)
妖	影・宵					エウ(1)
繇	羊・宵	エウ(1)				
釗	見・蕭				ケフ(1)	
驕	見・宵				ケウ(1)	
喬	群・宵			ケウ(1)		
照	章・笑			セウ(1)		
邵	常・笑			セウ(1)		
擾	日・小	セウ(1)				
彫	端・蕭				テウ(1)	
朝	知・蕭	テウ(1)				
兆	澄・小			テウ(1)		
召	澄・笑					テウ(1)
妙	明・笑				ヘウ(1)	
楫	精・葉	セフ(1)				
接	精・葉			シヨウ(1)		
變	心・帖	セフ(1)	セフ(1)		セウ(1)	
協	匣・帖	ケフ(1)	ケフ(1)		ケフ(1)	

本研究で扱う『古文尚書』鈔本 5 種においては、「㊦ウ」「㊦フ」が拗長音化した事例は極めて稀であり、前節のハ行転呼音において述べたように、元徳本の「接」(149A)が唯一の混同例である。これは「㊦フ（セフ）」にハ行転呼音の影響を受け「㊦ウ（セウ）」となり、さらに拗長音化し最終的には「㊦ヨウ（シヨウ）」に表記されている例であり、後筆による補入と考えられる。

4.2.6 長母音表記

本節では原則短音表記となる字の中で、長母音表記で仮名音注が施されている部分を注目する。対象字としては、止撰字、果・仮撰字、遇・流撰のうち、一音節と字である。下の表 4-10 は『古文尚書』鈔本の仮名音注のうち、長母音表記が現れる字と、その数を示したものである。ただし、対象字が極めて多いため、長母音表記が現れる字以外の用例は省いた。

表 4-10 長母音表記

止撰						
字	声・韻	群書 (0)	天理 (0)	元徳 (0)	観智院 (1)	文和 (0)
侈	昌・紙	シ(1)		シ(1)	シイ(1)	
果撰・仮撰						

字	声・韻	群書 (0)	天理 (0)	元徳 (0)	観智院 (0)	文和 (0)
遇撰・流撰						
字	声・韻	群書 (0)	天理 (0)	元徳 (0)	観智院 (0)	文和 (0)

前章において扱った、『論語』鈔本からは僅かではあったが、建武本のように長母音の表記が一部の字を中心に見られる鈔本も存することを述べた。ところが、5種の『古文尚書』鈔本からは、観智院本の「驕^{クワシイ}侈(41A)」以外は見いだせない。天理本と群書治要には「侈」に対して、上声点が施されているのみであり、仮名音注はない。『論語』鈔本の場合、長母音表記はほぼ曲調である、平軽字・去声字に集中したが、「侈」は昌母(全清)・紙韻(上声)であるため、去声化の事例であるとも判断し難い。群書治要には「華^ク侈(去)(343A)」のように「侈」に去声点を施している事例も見られるが、これが単なる誤りか否かについては判断し難い。ただし、これに去声点が施される余地があると見られるのは、『經典釈文』の反切注「昌氏反。又式氏反」における、上声全濁字である反切下字「氏」によりミスリードされた可能性である。

本研究で用いた『古文尚書』は全13巻を揃う鈔本がなく、『論語』のように2巻以上分量が備わっている鈔本を収集するに至らなかった限界の基で作成された限界もあったが、このような事例が少ないのは、漢籍訓読資料における表記の強い規範性によるものであろう。

4.2.7 m・n 韻尾字の表記

平安後期の時点では、m 韻尾は「ム」、n 韻尾は「ン」に区別されていたん定着し、両者は書き分けられていたが、両者は次第に合一化し、室町時代になるとほぼ「ン」表記へと定着し現代に至る。鎌倉時代から南北朝時代には、両者の混同が著しくなったため、その区別はあまり厳密ではなかったと判断される。『古文尚書』各本には、m 韻尾を「ン」と表記する例や、n 韻尾字を「ム」として表記する例が多く見られる。以下の表4-11はこの二つの韻尾の表記の傾向を数値化したものである。

表4-11 m・n 韻尾字における仮名表記の揺れ

韻尾	表記	群書治要	天理本	元徳本	観智院本	文和本
m 韻尾	ム表記	1	0	1	1	0
	ン表記	10	1	7	5	2
	その他	0	0	0	0	0
n 韻尾	ン表記	29	2	35	19	9
	ム表記	0	5	5	16	1
	その他	0	0	1	0	0

上掲の表のように、ほぼすべての資料に亘って「ン」の表記が二つの韻尾字において優勢である。ただし、観智院本・天理本においては、n 韻尾字の「ム」表記も少なからず並存する。また、観智院本の「訓(158)」と「訓(188)」、文和本の「𪛗(129)」と同じ行の「𪛗(129)」

のように、同一資料の中にも、同じ字に対して施された仮名音注にも混同例が見られる。天理本における n 韻尾字の「ン表記」の仮名音注「人^{ジン}(81)」「頑^{クワン}(100)」は明らかに後筆であり、全体的に「ム」表記の仮名音注を施している。元徳本には「ン」「ム」のどちらにも属さない「散^{サン}(223)」の事例が存するが、これについては漢音以外の混入にて後述することとする。

4.2.8 促音化

本節では t 韻尾以外の字の仮名表記に見られる「ツ」表記について考察する。その多くは p・k といった入声韻尾字であり、基本的に後続の字音が無声音である場合に生じ、現代の字音の中でも p 韻尾字における「雑^{ザツ}誌」「法^{ハツ}被」や k 韻尾字における「学^{ガク}校」「石^{セツ}膏」といったようなものがこれに当たる。以下は『古文尚書』の p・k 韻尾字のうち、促音化を反映したと見られる仮名音注の事例を挙げるとともに、各本の p・k 韻尾字において仮名音注が施されている字数（非促音表記：促音表記）を示したものである、促音化の事例がある場合は、当該字が用いられた熟語もしくは後続の仮名（ヲコト点・仮名点）を付した。

【深・咸撰】p 韻尾字

- ・群書治要（3 例：0 例）
- ・天理本（2 例：0 例）
- ・元徳本（2 例：2 例）答^{タツ} (146A、は)、執^{シツ} (160A、執夷)
- ・観智院本（8 例：3 例）雑^{ザツ} (150A、雑繪・153A、雑采)、答^{タツ} (199、答拜)
- ・文和本（1 例：0 例）

【通・江・宕・梗・曾撰】k 韻尾字

- ・群書治要（35 例：0 例）
- ・天理本（7 例：0 例）
- ・元徳本（41 例：0 例）
- ・観智院本（30 例：0 例）
- ・文和本（8 例：0 例）

観智院本の例は各々「雑繪」「雑采」「答拜」など後続字の子音が漢音形では無声音となる場合である。一方、元徳本「答^(は)

[taφuφa>taφφa]のような過程を経て、促音化を反映しているものと考えられる¹⁰²⁾。しかし、「執夷」に施された仮名音注は、後続する発音が無声音でないにも関わらず、促音表記が現れている。特に、常用される字の中には、後続子音の影響に関係なく促音化した音形が独立的に使われる例も見られる¹⁰³⁾。さらに、「フ（もしくはウ）」と「ツ」表記が併存する例は

¹⁰²⁾ 類例は築島（1969：334）、佐々木（2009：217）などで報告されている。

¹⁰³⁾ 『論語』、『孝経』鈔本の中でも、正和論語の「執^{シツ}礼(④65)」、元亨孝経の「原湿^{シツ}(210)」など、同じく鎌倉時代末期に書写・加点された資料の中においても、後続の子音に関係なく、促音化を反映している例が見られるが、これらの漢字音の表記は当該字が促音化表記として定着して、単独の字音でも、p と t 韻尾の区別が付かないほど、独

多く見られる。本研究で用いた観智院本の「答」には同じく「答拜」の用例で2回登場しており、「答^{タツ}-拜 スルコトハ(197)」「答^{タツ}拜^(ナ)(199)」のように、異なる仮名音注を施している場合が見られる。

その反面、k 韻尾字の仮名音注は、すべて「ク」「キ」で表記されている。『論語』『孝経』の諸本には僅かながら、無声子音字が後続する場合に、促音化を反映した表記が現れるが、本研究で用いた『古文尚書』の諸本からは、促音表記を全く見いだす。

4.2.9 t 韻尾の仮名表記

t 韻尾字の仮名表記は鎌倉時代にはほぼ「ツ」へと安定しているが、前章の『論語』諸本において述べたように、ごく僅かに「チ」を用いた表記が見られた。『古文尚書』諸本の中では、t 韻尾の表記に揺れが見られるかを調査する。以下の表 4-12 は『古文尚書』5種の韻尾表記の傾向を示したものである。

表 4-12 t 韻尾の仮名表記

表記	群書	天理	元徳	観智院	文和
ツ表記	14	1	25	10	7
チ表記	0	0	0	0	0
チ・ツ並記	0	0	0	0	0
零表記	0	0	0	0	0

以上のように、『古文尚書』諸本の中では「チ」による表記や、韻尾の部分を書き表さない零表記などは全く見られず、完全に「ツ表記」に安定していることが確認できた。

4.2.10 呉音・百姓読みの混入

次は『古文尚書』の仮名音注のうち、漢音の語形とは認めることができない、呉音の混入箇所もしくは明らかに誤りであると判断される例、そして被注字が多音字であるが、『經典釈文』の音注に照らし合わせて、適さない仮名音注を加点している箇所についても検討する。以下は、呉音と慣用音(百姓読み)の例を示したものであり、反切注・同音注が有る場合は、所在番号の次に示した。

【呉音】

- ・群書治要 用例無し
 - ・天理本 用例無し
 - ・元徳本 用例無し
 - ・観智院本 (3例/0例:3例)
- 無反切・同音注^{ナフ}壙(140A/ヨウ)、畫(154/クワ)、廬(240/リョ)

立したものと考えられる(小松(1956)・沼本(1997:661-669))。

- ・文和本 用例無し

【慣用音・百姓読み】

- ・群書治要 (2例/0例 : 2例)

無反切・同音注 愆^{ヘン} (16A・63A/ケン)、

- ・天理本 (1例/0例 : 1例)

無反切・同音注 揆^{キョウ} (12/クキ)

- ・元徳本 (7例/3例 : 4例)

有反切・同音注 劓^{ケツ} (21 口孤反/コ)、否^ヒ (36 方有反/フ)、散^{サン} (223 西且反/サン)

無反切・同音注 諫^{ケン} (67/カン)、兆^{テウ} (74/テウ)、律^{リツ} (92A/リツ)、盧^{リョ} (139/ロ)

- ・観智院本 (1例/1例 : 0例)

有反切・同音注 幄^{ワク} (140A 於白¹⁰⁴反/アク)

- ・文和本 (1例/0例 : 1例)

無反切・同音注 爰^{アイ} (摺消)(95A/エン)

『古文尚書』には呉音および百姓読みの例は極めて少なく、その理由としては『論語』諸本と同様、漢字音を依拠すべき中国側注釈書が利用されているからであると判断される。

こういった例の多くは反切注・同音注がそもそも『經典釈文』に被注字として掲出されていないか、掲出されていたとしても、各鈔本には省略されていることが多く見られる。観智院本・元徳本は反切注を介しながらも誤った字音が施される箇所が見られるが、これは仮名音注が施されたのちに、反切注を追加されてからも、仮名音注に合点や摺消訂正などの処置をしなかったためか、もしくは他の加点本を移点する際、誤った字音をそのまま踏襲したためであろう。

注釈書に依拠できなかった部分に対しては、加点者が仮名音注を施す際に、日常生活において頻繁に用いられる呉音形の字音が紛れ込む可能性が生じ、且つ漢字の字形によって任意的に判断される場合があると見られる。百姓読みの場合、漢字の一部に基づく類推や字形の類似によって導き出される。たとえば、群書治要の「愆」という仮名音注は「衍」の部分^{ヘン}を、観智院本の場合「幄」も同様、隣の「屋」によって導き出されたものであろう。文和本の「爰」の場合は「愛」のように字体の類似性によって導き出されたものであると判断されるが、摺消によって修正が加えられている。「散」の例は単なる誤写であるようであるが、この字音は、反切下字「且」を「且 (漢音形シヤ)」に誤認し、それに加えて「カツ」という和訓を字音として誤認した結果、導き出されたものではないかと考えられる。最後に元徳本の「否」に書き込まれた「ヒ」の例は、多音字であるが共起する反切注から照らし合わせると「ヒ」という仮名音注は不適切である。

¹⁰⁴ 通志堂本は「愆：於角反」に作る。

4.3 声点

本研究で用いた5種の資料の中には、群書治要を除き、墨筆と朱筆の声点が並存する。声点の加点が、『古文尚書』鈔本において、どのように反映されているかについて考察することとする。各本における声点の被注字数は、群書治要が368字、天理本朱点が37字・墨点が2字、元徳本朱点が66字・墨点が25字、観智院本朱点が163字・墨点が93字、文和本朱点が84字・墨点が50字であり、群書治要を除く4種の鈔本の声点には朱・墨の別がある。これらを対象に漢音声調の主要な特徴を基準にして、各本にどのような傾向が現れるかを分析する。

4.3.1 轻声点の加点

本研究で扱う鈔本5種は鎌倉中期から南北朝初期までの資料であるが、平声・入声における軽重の差は院政期の加点資料から混同例が見えるとしており、室町期の資料には軽重の区別は実質上消え、四声体系へと定着する。それでは、本研究で用いた鈔本5種における理論上の轻声点の加点箇所にとれほどの比率で反映されているかを表4-13に示す。

表 4-13 各鈔本における轻声点の加点

諸本	声点 細分類	平声(全清・次清)		入声(全清・次清・次清)	
		平重点	平軽点	入重点	入軽点
群書治要	—	23(29)	26(33)	33(36)	11(11)
天理本	朱	2(2)	0(0)	0(0)	2(2)
	墨	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
元徳本	朱	4(4)	1(1)	0(0)	2(2)
	墨	1(1)	2(2)	3(3)	1(1)
観智院本	朱	22(27)	0(0)	9(11)	1(1)
	墨	5(5)	1(1)	3(3)	4(4)
文和本	朱	15(21)	0(0)	5(7)	2(2)
	墨	3(3)	0(0)	3(3)	1(1)

鎌倉中期点である群書治要には平軽点・入軽点がまだ残存しているが、軽点を加点すべき箇所の多くで重点を施しており、軽点消滅の過渡期であることを物語る。他の加点本には朱墨点に分かれており、且つ声点の加点の数が少ないが、天理本の場合は、加点数がかなり少ないが、朱点は平声・入声の加点がなく、墨点は平声字が重点、入声字が軽点のみであり、結果としては四声体系である。元徳本の朱点・墨点ともに平声・入声の軽点が施されており、六声体系であるように見えるが、加点数が少なく判断し難い。南北朝初期の加点資料である観智院本・文和本の方は轻声点の加点例がほぼ見当たらない。

4.3.2 上声全濁字の去声化

漢音声調には、上声全濁字が去声に変じる特徴が見られるが、各本における去声点の反映の度合は、資料ごとに異なる。上声全濁字に去声点の加点が多く施される資料もあれば、韻書の体系に沿って上声点の加点率が高い資料がある。なお去声化を反映した加点と韻書に

おける分類に従って、上声点を施す比率がほぼ同率の資料も見られるなど、傾向は区々である。以下の表 4-14 は『古文尚書』5種の鈔本の上声全濁字を調査し、各鈔本における上声全濁字の去声化の度合いをまとめたものである。

表 4-14 上声全濁字の加点様相

声点 諸本	細分類	上声点	去声点	その他
群書治要	—	3(3)	5(6)	0(0)
天理本	朱	1(1)	3(3)	0(0)
	墨	0(0)	0(0)	0(0)
元徳本	朱	0(0)	2(2)	0(0)
	墨	2(2)	0(0)	0(0)
観智院本	朱	1(1)	2(4)	0(0)
	墨	0(0)	3(3)	0(0)
文和本	朱	0(0)	1(3)	0(0)
	墨	1(1)	5(7)	0(0)

本研究で扱った 5種の資料を加点の系統から観ると、第一に清原家加点の群書治要と元徳本（中原家の関係者による鈔本でありながら、清原家鈔本に依拠する）、天理本（清原家点推定）、第二に中原家点と藤原式家の加点が混用するほぼ同一の加点で混用される観智院本・文和本に分けることができる。

佐々木（2009：981-997）によると、「清原家加点資料以外は、全濁上声の上声化をほぼ完了している」ことが指摘されている。清原家加点本の中で去声化を反映しない資料が比較的多く、その資料の一つとして『群書治要』経部を扱っている。『群書治要』経部全体の加点の比率は、上声点 49 例、去声点 40 例¹⁰⁵⁾としており、群書治要の尚書部分は去声点が高いものの、全体の加点の比率としては、上声点の方が高いことが報告されている。

5種の鈔本の中には元徳本の墨点以外には、去声点の加点率が高いことが確認できる。各鈔本の上声全濁字例が極めて少ないため、正確な判断は降せないが、全体的な傾向としては去声点加点の比率が高いことがわかる。

しかしながら、去声点以外の字を施している字が一部あり、これらに上声点が施される原因について分析する。以下の表 4-15 は上声全濁字のうち、去声点以外の声点を施している字の一覧と、反切注・同音注の書き込みの有無と、被注字が熟語で読まれていたか否かを示したものである。

表 4-15 上声全濁字における去声点以外の加点

連番	鈔本	所在	字	声・韻	声点	反切・同音注	熟語
1	群書	80A	動	定・董	上	—	—
2	群書	114	象	邪・養	上	—	—
3	群書	144A	腐	奉・麌	上	—	—
4	天理	41A	上	常・養	上(朱)	時掌反	已上 (上)
5	元徳	92A	上	常・養	上(墨)	時掌反	以上 (上)

¹⁰⁵⁾ 佐々木（2009：983）の群書治要巻2の尚書部分に上声点3例、去声点6例を挙げているが、カラー写真版で調べた結果、去声点1例「禍(50A)」が抜けており追加した。そのため、経部全体の去声点は41例である。

6	元徳	202A	聚	従・麿	上(墨)	—	窟聚 (上)
7	観智院	171A	庀	崇・止	上(朱)	音俟徐又音士	—
8	文和	69	緒	邪・語	上(墨)	—	令 (去) 緒 (上)

上の事例から反切注・同音注が上声点加点に直接関わっているのは天理本の「上」、元徳本の「上」、観智院本の「庀」である。「上」の場合は多音字であり、上声と去声があるが、上声の「上」が上声全濁字であるため、去声化する余地ができる。そのため、声調（意味）の区別を容易にする装置として、上声全濁字の去声化を敢て回避しようとしたと考えられる。前章の『論語』諸本の中でも触れたように、「上」の字に声点を施さずに、反切注のみを書き込むことで上声であることを示すか、敢て上声点を施している事例について述べたが、天理本・元徳本の事例も同様である。

「腐」の場合は、1音節字であるため、曲調である去声を避けるための加点である可能性もあるが、「尚書音義」に「腐：扶甫反」の音注があることから（ただし、群書治要には反切注の書き込みはない）、反切下字に則った声点であると判断される。

次に熟語4例の中で、和語・呉音アクセントにおける制限を受けることによって、去声点を回避したか否かについて調査する。中低型の回避という側面から見ると、まず、天理本の「已上」・元徳本の「以上」の「已」「以」は両方とも上声字であり、次に「上」が去声字である場合は、高平調と上声調が連続し、中低型となる。そのため、上声点を施すことに拠り、これを回避する役割もあるように見える。

文和本の「令緒」の場合は、去声と去声の連続であり、「緒」の字を上声に変じることによって、中低型を回避することとなる。元徳本の「窟聚」の場合は、入声軽の声調が遺存した場合と、消滅した場合とを考えると異なってくる。「窟」は溪母字で、原則入声軽声となるが、入声軽（高調）を維持した場合、後続の「聚」が去声調である場合はアクセントの中低型が生じることとなる。ところが、入声軽が消滅し、重声（低調）であると、敢て回避することは不要となる。前節において入声の軽声について述べた通り、元徳本においては、朱点・墨点の軽声が完全に消滅しているわけではないと判断される。そのため、軽声を維持していた場合は、中低型の回避のために改めた可能性も出てくる。

更に、1音節字の去声字が上声字となる呉音の特性が入り込んでいるかという側面についても検討する。

佐々木（1998）は呉音において生じる「一音節字は去声から上昇になる」という特徴が、漢音声調では一般的ではなかったと述べている。その中で、漢音資料の金沢文庫本『群書治要』、書陵部蔵『老子』（1386年点）、清原宣賢加点『毛詩』

表 4-16 上声全濁字の加点と音節数

鈔本	種類	声点	1音節	2音節
群書	—	上声	1(1)	2(2)
		去声	3(3)	3(3)
天理	朱	上声	0(0)	1(1)
		去声	2(2)	1(1)
	墨	上声	0(0)	0(0)
		去声	0(0)	0(0)
元徳	朱	上声	0(0)	0(0)
		去声	2(2)	0(0)
	墨	上声	1(1)	1(1)
		去声	0(0)	0(0)
観智	朱	上声	1(1)	0(0)
		去声	0(0)	2(4)
	墨	上声	0(0)	0(0)
		去声	2(2)	1(1)
文和	朱	上声	0(0)	0(0)
		去声	0(0)	1(3)
	墨	上声	1(1)	0(0)
		去声	1(1)	4(6)

(1521 年点) を対象に検討した結果、一音節字における去声が呉音資料のように上声化されず、去声を保持される傾向があり、極めて稀であると述べている。佐々木氏の検証と同様、各本に現れる上声全濁字の声点加字を対象にし、1 音節字と 2 音節字とに分けて、まとめると上の表 4-16 の通りになる。

加字の事例はほんのわずかあるが、1 音節字がすべて回避されているわけでもないことが確認できる。上声加字が 3 例で最も多かったのは、群書治要であるが、その詳細を見ると、1 音節字は 4 例「揆_(去)(13・434)」「腐_(上)(144A)」「禍_(去)(50A)」であり、そのうち 1 例のみが上声点を加字している。また、ŋ 韻尾を有する (2 音節) 字 3 例「動_(上)(80A)」「象_(上)(114)」「蕩_(去)(484)」のうち、2 例が上声点を施している。他の鈔本の中でも、天理本朱点、元徳本墨点、観智院本墨点において、2 音節である字に上声点が施されていることから、音節数が直接的に去声点回避に働きかけたとは考え難いと判断される。

4.3.3 濁声点の加字

日本漢音では、原則的に中国語音韻学における次濁字の明母・泥母・疑母・日母の声母字に濁点が施される (ただし、明母・泥母のうち一部の字には例外がある)。しかし、資料によっては濁声点を施す頻度が多いものから、ほぼ清濁の区別を施さない資料も散見される。以下の表 4-17 は各『古文尚書』鈔本における濁声点の加字の比率をまとめたものである。

表 4-17 各鈔本における濁声点加字の比率¹⁰⁶⁾

諸本	声点	細分類	単点	濁点	比率
群書治要		—	5	56	91.8%
天理本		朱	4	0	0%
		墨	0	0	—
元徳本		朱	2	0	0%
		墨	1	4	80.0%
観智院本		朱	4	12	75.0%
		墨	4	3	42.8%
文和本		朱	2	9	81.8%
		墨	5	2	28.6%

各本の濁点の施し方には、頻度と加字の種類が異なる。「∞」(濁 A、群書治要・元徳本の墨点) もしくは「[∞]/_∞」(濁 B、観智院本の墨点/朱点・文和本の墨点/朱点) の形で加字される。

小林 (1967 : 1274-1304) は漢籍古点本における 2 種類の濁声点について言及しており、濁音符 (濁声点) の系統についてまとめると、「∞」は明経道である清原家、紀伝道である菅原家、「[∞]/_∞」は明経道である中原家、紀伝道である藤原式家・藤原日野家において用いられると述べている。また、濁声点は中国語音韻学における清濁ではなく、日本語の音韻上の清濁を区別するためのものであり、院政期の資料にはほとんど現れない。濁声点の加字は

¹⁰⁶⁾ 本表の中では、漢音形においてもマ行音、ナ行音を保つと考えられる以下の字を除外する。

【明母】厖マウ、慢マン、冥明冥命メイ、湏メン、【泥母】：難ナン、佞ネイ、能ノウ

鎌倉時代以降より増えるが、博士家・宗派別にその頻度は異なることが報告されている¹⁰⁷⁾。

群書治要は清原家鈔本、元徳本は中原家鈔本であり、観智院本と文和本は藤原長頼が中原家鈔本をもって移点しているが、各々別の加点者によって藤原式家鈔本をもって校勘を行っていることが巻末奥書から確認できる。天理本からは濁声点がまったく見いだせない上に、巻末を欠いているため確認が難しく、なお声点加点自体も非常に少ない。元徳本は中原康隆による点本であるが、坂本(1943)によると「清原良賢の談義を書き加へた累家の秘本であることを知り得る」としており、朱筆の声点よりは、墨筆の声点の方が、清原家訓に拠って、もたらされたものであると判断される。

また、原則濁声点を施す4種の声母字に属さない一部の字に濁声点が施されている事例があるが、観智院本に3例があるのみであり、他の鈔本からは見られない。以下はその実例である。

全清字(1例) 「盥(去濁B・墨)(116A)」

全濁字(2例) 「晝(去濁B・墨)(154A)」「弁(上濁B・朱)(171A)」

まず、全清字の「盥」は、観智院本において「洮盥」の熟語となっており、連濁による加点である余地が残る。全濁字2例の方が熟語ではなく、「豊席(の)晝エカケル¹⁰⁸⁾エノ(左)…(154A)」のように訓読み(左訓の場合は呉音形+助詞)されており、「子コノ(の)皮ノ(の)弁ッ(171A)」のように、前接の字が助詞であるので、濁点が施されている理由としては連濁は除外される。

全濁字の場合、呉音形は濁る傾向があり、呉音声調の混入が疑わしいが、呉音声調からこの3字を探ると、「盥」は高山寺本『新訳華嚴経音義』に平声点、安田八幡宮本『大般若経』に去声点があり、「晝」は九条家本『法華経音』に平声点、そして「弁」は『金光明最勝王経音義』に平声点などが見られる。声調が呉音資料と合致する事例は「盥」のみであり、他2字は呉音声調の混入ではなく、漢音の母胎音から濁音であった可能性が残る。

4.3.4 非規範的な声点

本節では、上述の軽重、上声全濁字の去声化、濁声点の問題の以外にも、切韻系韻書における声調と食い違う加点について述べる。『古文尚書』に用いられた『經典积文』における

¹⁰⁷⁾ 佐々木(2006)によると、博士家・仏家によって濁声点の加点率は異なることが指摘されており、濁声点をよく加点する集団として清原家・菅原家・真言宗(濁Aの形式)、濁声点をあまり加点しない集団としては、藤原家・中原家・法相宗・天台宗(濁Bの形式)を挙げている。また、院政期の加点資料の実例を挙げ、濁声点の加点の状況について審らかに述べている。具体的な資料として、東洋文庫蔵『春秋経伝集解』保延五年点(1139、清原家鈔本に、中原家点あり)には濁声点の加点が殆ど見られないとしている。本研究で独自調査した漢籍のうち、院政期加点における濁声点の加点の実態をみると、神田本『白氏文集』天永四年点(1113、藤原家鈔本)は墨筆濁声点8例(非濁声点47例)、角筆点の濁声点2例(非濁点4例)、書陵部本『文選』院政初期点(巻第2、11世紀末～12世紀初、書写者未詳)には墨筆の濁声点9例(非濁点9例)・角筆点3例(非濁点17例、角筆点の濁声点例の全例は呉音形か)、濁声点が施されているものの、加点の比率は極めて低いと言える。ただし、神田本白氏文集の場合、濁声点は後筆により補われたものであるという指摘(小林1967:1301-1304)があり、加点の最初の段階においては濁声点の加点はほぼ行われなかったと考えられる。

¹⁰⁸⁾ 「エカケル」の「カ」に上濁点あり。

音注には、切韻系韻書にない声韻が字句の加点に影響を与えていることに一因があると見られる。その他にも『經典積文』の所収されていない、被注字の場合は、底本に基づいた声点の継承、呉音声調の混入、誤読などの原因により加点されたと考えられる。以下の表 4-18 は切韻系韻書と声調が食い違う箇所を四声によって分類したものである。

表 4-18 非規範的な声点一覧 (*は切韻系韻書における多音字)

【平声字】8 字							
番	字	積文音注	群書	天理	元徳	観智院	文和
1	構*	—	上(26)				
2	歌	—			上朱(213A)		
3	功	—			去朱(220A)		
4	鰥*	—	去(360)				
5	行*	—		去朱(13A)			
6	謀	—				去朱(35)	
7	弘	—				上朱(133)	
8	屏*	—				上朱(231)	
【上声字】13 字							
番	字	積文音注	群書	天理	元徳	観智院	文和
9	果	—	去(102A)				
10	脞	倉果反	去(133)				
11	手	—					去朱(42)
12	己	—					去墨(48A)
13	美	—					去濁朱(58A)
14	改	—					去朱(125A)
15	涵	面善反	去(293)		去墨(15)		
16	侈	昌氏反又式氏反	去(343A)				
17	拳	—				去朱(47)	
18	忍	—				去墨(99A)	
19	否*	方九反				去朱(101A)	
20	盥*	音管				去濁墨(116A)	
21	壤	如丈反				上濁墨・去濁朱(211)	
【去声字】21 字							
番	字	積文音注	群書	天理	元徳	観智院	文和
22	故	—	平(83)				
23	毅	五既反	平濁(102)				
24	懈	佳壳反	上(134A)				
25	縦*	子用反	去(208)				上朱(44)
26	当*	—					平朱(94A)
27	任*	—					平濁朱(103)
28	任*	—	去濁(223A)				平朱・去墨(104A)
29	統	—			上墨(189A)		
30	仞	音刃	上(356)				
31	長*	—				上朱(19A)	
32	駟*	戸旦反				平朱(54A)	
33	進	—				平朱(54A)	
34	畏	—				平朱(88)	
35	頰	音悔				上朱(115)	
36	勞*	—				平墨(128A)	
37	畏	—				平朱(129)	
38	畏	—				平墨(128A)	
39	胤	—				上朱(161)	
40	弁	皮彦反徐扶变反				上濁朱(171A)	
41	畏	—				平朱(190)	
42	齊*	才細反				上墨(198A)	

上表のうち、『經典釈文』所引の音注があるのは14字であり、そのうち、複数の字音注が存するのは、上表における「侈(16)」と「弁(40)」の2例である。ところが、2例の反切を見ると、「侈」の場合は、2つの反切下字が両方とも「氏(紙韻・上)」であるが、声母が「昌(昌母)」「式(書母)」で異なる。一方、「弁」の場合は反切下字が「彦(線韻・去)」「変(線韻・去)」で同韻に属する上に、「皮(並母)」「扶(並母)」であり、全くの同音である。そのため、「侈」に上声点、「弁」に去声点以外の声点が施される蓋然性は見られない。

「侈_(去)(343A)」の場合は、他の鈔本の中でも声点加点の事例は見られるが、同じ群書治要の尚書部分においても、「侈_(上)(459)」の加点例があるほか、天理本「侈_(上朱)(51A)」、元徳本「侈_(上朱)(19)」、観智院本「侈_(上墨)(41A)」などがあり、例外なく上声点が施されている。群書治要には当該字に『經典釈文』所引の反切注の書き込みは見られないが、『經典釈文』が利用されていたことは、各音の反切注・同音注の書き込みから疑いようがない。『經典釈文』における「侈」の反切下字の「氏」は上声全濁字であることから、漢音資料としては去声で読まれていた余地はあったのではないかと見られる。

次に「弁」の場合、割注が「弁_(上濁朱)(171A)」、正文が「弁_(墨去)(169)」であり、正文の割注の加点が相異なり、なお加点の系統も異なる事例であると判断される。観智院本には、中原家の加点本に基づいて書写・加点した元亨三年の加点と、藤原式家の加点本をもって朱墨点を校合した文和三年の加点があるが、朱点と墨点の声点が一体どの段階、どの祖本による加点であるかは峻別し難い。

「弁」の他にも、上掲の表4-18のとおり、観智院本には切韻系韻書と齟齬する声点が多く見られるが、そのうち大体数は朱声点(15例、うち単音字は11例)である。同じく、中原家祖本・藤原式家が校合に用いられた、文和本も同様に朱点の加点において、切韻系韻書とは異なる様相を帯びる加点が施されているように見える。これは一定の博士家において、やや傾向を異にする声点が伝承されてきたと見るのが自然であろう。

その他にも、多音字のうち、他本との対照が可能である、27(正文)・28(割注)番の「任(侵韻・平、沁韻・去)」の加点を見ると、清原家鈔本の群書治要は該当箇所を去声点として読んでいる。その反面、文和本においては、朱点の平声点と墨点の去声点を施している。上述の「弁」のごとく、この事例も博士家により、声点加点における伝承が異なっていたものを物語る実例として判断される。

4.4 『古文尚書』における『經典釈文』の利用

日本における『古文尚書』や『論語』といった経書の訓点本には、片仮名による漢字音注・和訓やヲト点の他にも漢字注が書き込まれている。夙にこの問題について、足利(1932: 844)は経書の講読において、必ず『經典釈文』を利用することを指摘している。本研究で対象とした『古文尚書』鈔本に施されている反切注・同音注などは、現存本の通志堂本『経

典積文』(以下、通志堂本)¹⁰⁹⁾と比較すると、注記の多くが合致する。しかし、現存の通志堂本とは注記の内容が異なる場合があり、また、注記の粗密には差が見られる。本節では、各鈔本に見られる反切・同音注を通志堂本「尚書音義」と比較した結果をまとめると表 4-19 のとおりである。

表 4-19 各鈔本に書き込まれた反切注・同音注と通志堂本との比較

鈔本(注記) 積文	群書		天理		元徳		観智		文和	
	反切	同音	反切	同音	反切	同音	反切	同音	反切	同音
一致	25	5	20	5	90	24	99	42	2	0
不一致	1	1	2	2	10	2	14	3	1	1
無し	0	2	7	0	7	4	24	15	0	1
合計	26	8	29	7	107	30	137 ¹¹⁰⁾	60 ¹¹¹⁾	3	2

各本における反切注・同音注の書き込みの数は、本文の総字数に比例せず、加点者がどれほどの反切注を施したか否かによる。分量としては、群書治要巻第2が534行(正文の場合一行14~16字程度)であり、最も長い。『經典積文』被注箇所は比較的少ない。また、文和本は反切注・同音注の書き込みが他本に比べると極めて少ない。分量の多寡によらず、通志堂本から見いだせない注文は各本から見られるが、これは、沼本(1969)¹¹²⁾に述べたように、現存の通志堂本とときに用いられた『經典積文』の本文と体裁が異なるためであろう。さらに、「尚書音義」内の他篇の注記、もしくは「尚書音義」以外部分における『經典積文』の音注を引用することが想定されるほか、更に他の典籍が用いられた可能性、つまり『經典積文』以外の字書・韻書が用いられた可能性も否めない。本研究では、現存通志堂本との比較を通じて、主として反切・同音注の用字に焦点を当て、その傾向について述べる。

通志堂本と一致しない反切注

- ・群書治要(1例)
 - ① 刳：口孤反(295/口胡反)
- ・天理本(2例)
 - ② 麗：力皮反(62A/力支反) ③ 度：徒洛反(86A/上待洛反)
- ・元徳本(10例)
 - ④ 匱：其愧反(20A/其魏反) ⑤ 刳：口孤反(21/口胡反)
 - ⑥ 度：待洛反(36/徒洛反) ⑦ 徇：似俊反(52/以俊反)

¹⁰⁹⁾ 当時用いられたと考えられる原本積文に近いものとして敦煌本の残巻 Pelliot Chinois 3315 が現存するが、巻1の一部のみに当たる残巻であり、完本である通志堂本を用いた。

¹¹⁰⁾ 反切注の一部が欠損により、判読が困難な箇所2例を除く。傳：直口反(通志堂本：直專反、146)、雍：於口反(通志堂本：於用反、160)。

¹¹¹⁾ 欠損によって判読が困難な箇所1例を除く。「球：音口(通志堂本：音求、159)」。

¹¹²⁾ 沼本(1969)の報告によると、平安中期点『古文尚書』においても同様の問題があり、約76%が通志堂本と一致し、音注が『經典積文』を参照して加えられたと推定できるが、一致しない部分も少なからず存するとされる。さらに、敦煌本の經典積文残巻との比較を通じて、形式的における差、反切法の差、また古文注記が通志堂本において削除されている点など、内容的な面で改変された箇所が多いことを指摘している。そのほかに、『經典積文』内の他の音義を用いていると考えられる部分があり、また、出典を「切韻」と明記している音注があることも報告されている。

- ⑧ 酬：況付反(58/況具反) ⑨ 斲：側略反又七略反(97/側略反又士略反)
 ⑩ 比：徐扶至反(141/徐扶志毗志二反) ⑪ 楯：食允反(142A/食準反又音允)
 ⑫ 索：西洛反(144/西各反) ⑬ 勗：許必反(156/許玉反)
- ・観智院本 (14 例)
- ⑭ 處：昌慮反(8A/昌呂反) ⑮ 駒：俱付反俱兪反(54A/俱付反)
 ⑯ 狃：女尤反(94/女九反) ⑰ 長：誅丈反丁丈反(99A/丁丈反)
 ⑱ 釗：善遼反...徐之肴反(133/姜遼反...徐之肴反) ⑲ 幄：於白反(140A/於角反)
 ⑳ 度：舊音杜洛反(146/舊音待洛反) ㉑ 屏：歩經反歩丁反(146/歩經反)
 ㉒ 箴：服結反/切云莫結反眠列反(150/眠結反) ㉓ 純：之允反又之潤反(150/之允反又之閏反)
 ㉔ 重：直勇反(168A/直用反) ㉕ 戮：音達字林几羸反(174/音達)
 ㉖ 瞿：其俱反字林巨于反(174/其俱反徐音懼) ㉗ 羨：羊九反(217/羊久反)
- ・文和本 (1 例)
- ㉘ 遠：于方反(9A/于萬反)

通志堂本と異なる同音注

- ・群書治要 (1 例)
- ㉙ 樂：音洛又音岳(46/音洛)
- ・天理本 (0 例)
- ・元徳本 (2 例)
- ⑳ 榭：音謝(19/爾雅云有木曰榭本又作謝) ㉚ 哉：音才(173A/徐音載)
- ・観智院本 (3 例)
- ㉛ 度：音杜(146/音亘) ㉜ 慕：音其・音文¹¹³⁾(170/音其) ㉝ 戡：音勘(219/音堪)
- ・文和本 (1 例)
- ㉞ 冕：音勉(37/音免)

上の 35 例は反切・同音注の用字が異なるところであり、その差によって、以下の 5 つに分類できる。

- (A) 用字は異なるが、同音である (12 例) — ①②③⑤⑥⑧⑪⑫⑯⑳㉓㉔㉗
 (B) 用字が異なり、異音である (15 例) — ④⑦⑨⑩⑬⑭⑰⑱⑲㉑㉒㉕㉖㉘
 (C) 同音の注記が並立する (3 例) — ⑮⑰⑲
 (D) 他出典の注記が混入されている (3 例) — ㉒㉕㉖
 (E) その他 (2 例) — ㉙㉚

¹¹³⁾ 慕 (群母・之韻、漢音形キ) に「音文」が書き込まれた原因としては、極めて類似する字形の字である「素」と混同し、且つ該字の音注を『經典積文』の他の部分から引用する過程があったと考えられる。尚書音義内部の「太甲下第七 (古文尚書卷 4 に当たる)」に「素：音問徐音文」があり、この音注はこれに依拠した可能性が高いと考えられる。

(A) は切韻系韻書の体系に照らし合わせて同音となるものである。①のように群書治要に書き込まれた注記「口孤(模韻・平声)反」と通志堂本の「口胡(模韻・平声)反」や③のように天理本に書き込まれた「徒(定母)洛反」と通志堂本の「待(定母)洛反」が同じ韻母もしくは同じ声母に属するため、同音である例である。

(B) は観智院本の注記⑩「狃:女尤(尤韻・平声)反」に該当する通志堂本の反切注「狃:女九(有韻・上声)反」のように、切韻系韻書の体系から照らし合わせると齟齬する注記である。

(C) は⑮の駒:「俱付(虞韻・平声)反・俱兪(虞韻・平声)反」、⑰長:「誅(知母)丈反丁(知母)丈反」のように、通志堂本には見られない反切注であるが、切韻系韻書の体系に則ると同音となる注記が複数列ねるものである。これらは、原本の『經典釈文』には存したが、現存本には削除された結果か、もしくは『經典釈文』以外の出典の音注を加えることによって、並立することとなったと判断される箇所である。

(D) は他の出典から引用していることが明記されている場合であり、⑳箴:「服結反・切云莫結反眠列反」のように『經典釈文』以外に「切」、つまり『切韻』が引用されていることが示されている。しかし、㉕㉖の『字林』(呂忱撰)は『經典釈文』に多数引用されているため、観智院本に引用された『經典釈文』には、通志堂本にない本文があり、それが用いられたと考えられる。

(E) は(A)～(D)に分類できないものであり、㉙樂:「音洛又音岳(46)」のように『經典釈文』の他の部分に例が確認されるものや、㉛樹:「音謝」のように通志堂本には、異体字注「爾雅云、有木曰樹本又作謝」として施していても、元徳本においては同音注の形式となっている場合などがある。

次は、各鈔本で反切注・同音注が施されているが、通志堂本の該当箇所に音注が見いだせない場合である。下はその例である。

通志堂本の該当箇所に見当たらない反切注

- ・群書治要 (0例)
- ・天理本 (7例)
 - ①黜:勅律反(3) ②甸:田遍反(6) ③緯:禹畏反(21A) ④詰:起一反(31)
 - ⑤陟:直律反(39) ⑥賄:忽罪反徐凶倍反(63) ⑦倚:於綺反(92)
- ・元徳本 (7例)
 - ⑧侈:尺氏反(19) ⑨巧:苦孝反(104) ⑩迪:徒歴反(114) ⑪塉:玉篇云莫六反(128)
 - ⑫叟:所求反(140A) ⑬華:胡化反胡瓜反(176) ⑭濟:子計子礼二反(211)
- ・観智院本 (24例)
 - ⑮代:一音大計反(3) ⑯詰:起一反(18) ⑰黜:直律反・丑律反(27) ⑱令:力政反(29)
 - ⑲侈:式氏反又尺氏反(40) ⑳休:許虬反(43) ㉑長:直良反(52A) ㉒賄:忽罪反徐凶倍反(55)
 - ㉓毫:歩各反(59) ㉔懷:工衡反(68A) ㉕丕:普悲反(87) ㉖辟:扶亦反(90)

- ⑳罍：魚巾反(97A) ㉑膺：於矜反(107) ㉒魄：普白反(113) ㉓奠：徒鍊反(126)
 ㉔迓：五賀反(129) ㉕悟：五故反(131) ㉖坐：才卦反(151A) ㉗鏤：来豆反(154A)
 ㉘車：尺遮反(180A) ㉙纁：許云反(180A) ㉚休：許虬反(219) ㉛倚：於綺反(240A)

・文和本 (0 例)

通志堂本の該当箇所に見当たらない同音注

・群書治要 (2 例)

- ㉜車：音居(119) ㉝霖：音林(253)

・天理本 (2 例)

- ㉞又：音宥(37) ㉟宄：音軌(98)

・観智院本 (15 例)

- ㊱代：音代(3) ㊲又：音宥(24) ㊳驕：徐音橋(40) ㊴麗：音吏(54A)
 ㊵又：音刈(70) ㊶繇：音由(74) ㊷宄：音軌(94) ㊸顧：音固(112)
 ㊹才：音哉(113) ㊺逾：音踰(129) ㊻慄：音栗(131) ㊼中：音仲(141)
 ㊽繇：音由(177) ㊾璋：音章(194) ㊿尸：音師(204)

・元徳本 (3 例)

- ㊱仇：音求(60) ㊲筐：音匡(208A) ㊳昧：音每(214)

・文和本 (1 例)

- ㊼中：音仲(127)

上の 61 例の反切・同音注は『經典釈文』の音注と異同によって、以下のように分類できる。

(A) 「尚書音義」内に同じ注記がある (25 例) —

- ②④⑦⑩⑫⑬⑯⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟

(B) 「尚書音義」他の『經典釈文』に同じ注記がある (15 例) —

- ①⑧⑨⑰⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛

(C) 複数の注記の中に一部が『經典釈文』と一致する (1 例) —⑰

(D) 『經典釈文』には同じ注記が見当たらない (17 例) —③⑤⑥⑪⑭⑱㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛

- ㉜㉝㉞㉟

(E) その他 (3 例) —⑮⑳㉑

(A) は該当部分には注記が施されていないが、『古文尚書』の他の篇から同じ注記を見いだせる箇所である。②「甸：田遍反」は「周官 (周書第二十二、卷第 11)」に書き入れられた注記であるが、通志堂本の「周官」の部分には該当字が掲出されていない。しかし、尚書音義上「禹貢 (夏書第一、卷第 3)」に「甸：田遍反 (11A4)」の注記があり、これに倣ったと考えられる。

(B) は⑩「奠：徒鍊反」のように、「顧命（周書二十四、卷第 11）」の部分に書き入れられた反切注であるが、通志堂本「尚書音義」には見当たらず、『經典積文』の他の音義書である、毛詩音義下（卷第 7）にの一条合致する注記「既奠：徒鍊反（卷第 7・8B8）」が見当たらない。

(C) は複数の音注が書き入れられているが、一部通志堂本と同一の音注が他篇に存する場合で、⑰「黜：直律反・丑律反(27)」のうち、「黜：丑律反」は尚書音義上の内部の「尚書序」に「以黜：丑律反（1B8）」と「舜典（虞書第二、卷第 1）」に「黜：丑律反」の 2 条があるが、「直律反」の反切注は見当たらない。

(D) ③「緯：禹畏反」のように通志堂本には例が見いだせない場合や、⑤「陟：直律反」⑭「懷：工銜反」のように明らかに被注箇所を誤ったための書き入れである箇所も見受けられる。

(E) は觀智院本の「代：⑬音代⑮一音代計反亦作逮(3)」のように同じ字に同音注と反切注が並立する形式の注記であるが、すぐ前の行の「弗逮」に書き込まれた「音代一音大計反(2)」とほぼ同じ注記が見当たらない。これは通志堂本の「不逮：音代一音大計反（尚書音義下・周官第二十二、10B2）」に対応するもので、「周官」の篇の『經典積文』においては「代」に対する通志堂本の記述はない。字体注「亦作逮」の記述から見ると、これは「弗逮」ではなく、「代」に施されたものであり、觀智院本に用いられた『經典積文』には同様の注記があったと考えられる。

4.5 小結

以上、鎌倉時代から南北朝時代に亘る『古文尚書』の漢字音注記から現れる特徴について具体例を挙げながら述べた。

仮名音注

日本語の音韻変化を反映した m・n 韻尾の統合により、2つの韻尾において仮名音注表記の一貫性が乱れており、この例は全ての鈔本において現れている。p 韻尾字表記の場合、ハ行転呼音を反映した表記が元徳本・觀智院本・文和本から見られ、促音化表記を反映した表記が元徳本と觀智院本に見える。その他、各鈔本には呉音や百姓読みである例が見られるが、特に元徳本に多いことが確認できる。これは約 90 年亘って講読に当該資料が用いられたことから、一部の加点が後筆によって補われた可能性が想定される。

声点

全資料において六声体系を維持するが、觀智院本・文和本のように鎌倉後期から南北朝時代の加点の資料には轻声点がほぼ消滅している。上声全濁字の去声化は全資料で高いが、ただし元徳本の墨点のみ加点率が低いことが見受けられる。さらに、清原家の加点本である群

書治要と元徳本（墨点）は高い加点率を呈している。その反面、中原家と藤原家式家の二つの加点が施されている観智院本と文和本には朱点の濁声点加点率が高く、墨点の加点率は比較的低いことから、朱点に濁声点の加点率が高い加点が混入されている可能性が考えられる。

反切注・類音注

『古文尚書』加点本に書き込まれた反切注・類音注は、多くが現存の通志堂本と一致するが、一致しない部分も多く見られる。これらは現存の通志堂本が鎌倉時代から南北朝時代に使われた『経典积文』と掲出語（字）・注文の側面で異なるためであるが、誤引によるものも散見される。それ以外にも観智院本には『切韻』が用いられた痕跡が残る。

本研究では、カラー版で確認できる鈔本5種を対象にし、その漢字音注記の特徴について分析した。今後、原本調査を通じて、ほぼ完本として残っている伊勢神宮徴古館蔵本（13巻のうち、巻11・12のみ欠巻）と古版本であり且つ完本である静嘉堂文庫内野本などの未調査の資料についても研究の範囲を拡大して、各本における漢字音の傾向性についても追及したいと思う。

第5章 『孝経』の漢字音

『孝経』は儒教文化における道德の一つである、孝道を孔子と曾子の問答を通じて説く経書であり、儒教文化圏において長きに亘り重んじられてきた。ところが、抑も『孝経』という典籍は、孔安国伝の古文孝経（22章）と鄭玄注の今文孝経（18章）とがあり、成立の地である中国でも、古文・今文の真偽に関する論争が絶えなかった。そこで、唐の玄宗は、開元10年（722）に今文を主とし、古文を参考として御注孝経（開元始注）一卷を制した。更に、天宝二年（743）に開元始注の不備を補った、天宝重注が世に広く伝わったことにより、中国では夙に古文・今文が姿を消した。

一方、『孝経』が日本に伝来した時代は定かではないが、十七条憲法（604）の第1条の「上和下睦」・第4条の「其治民之本、要在礼乎」が『孝経』を基としており、「孝経・論語に通ぜざる者は、皆不第とせよ」という文武天皇の学令（701）が下されていることから、かなり早い時期において伝来されたようである。その上、天皇及び皇族が初めて師範より句読を受ける儀式である、「御書始」に最も多く用いられた漢籍であったことから、早くから至大な影響力があったことが窺える。御注孝経が日本における公式的なテキストとして定められたのは、天宝重注が定められてからも100年後のことであるが、それでも古文・今文本は兼用が許され、依然として勢力を保っていた。ところが、御注を家本とする紀伝道が漸次衰退し、古文を家本とする明経道の清原家の隆盛とともに、古文が広まった。現存する『孝経』古鈔本もその多くが古文である。

これら『古文孝経』古鈔本を材料にして、訓点の研究・諸本の系統など、様々な研究が行われてきた。本研究で取り上げる、『古文孝経』の漢字音に焦点を当てた研究としては、西崎（1991）が正安本の訓点を論じる中で、p韻尾・k韻尾の促音化、二重母音「㊦ウ」と「㊧ヨウ」の混同、臻撮合転の歯音字の表記、一音節字音の長音化、合拗音「クキヨウ」表記が存することを簡略に挙げているのみである。そのほかに、沼本（1982・1986・1997）、佐々木（2006・2009）などでは、漢音資料として『古文孝経』の一部の例を取り上げている研究も多数ある。ところが、複数の『孝経』鈔本に跨がる漢字音研究については、管見の限り、見当たらず、拙稿（2019）において、『古文孝経』7種の鈔本を収集し、それを本文の系統（関東系統・京都系統）にわけ、京都系統鈔本はより古い要素を保っており、声点の一部を関東系統には改変するなどの動きがあったということを報告した。

本研究では鎌倉期に書写・加点された（もしくは、古点本に準ずる）7種の『古文孝経』鈔本のほか、他系統に属する『孝経』古鈔本2種を加えて、各本の漢字音注記の特徴を挙げるとともに、各本における性格と異本ごとの差を明らかにすることを目的とする。かつ、経書を読むために用いられることが、当然とされてきた『經典釈文』が『古文孝経』の音注に介在したかについて考察を加えるものである。

5.1 使用資料

本研究では考察の対象にする資料として、以下の7種の『古文孝経』鈔本と他系統の『孝経』2種を調査した。上記でも挙げたとおり、『古文孝経』の鈔本については系統の問題が関わり、各本には本文および訓読の異同が存し、大きく関東の教隆の系統と、京都の良業の系統とに分けられる¹¹⁴⁾。本研究では、『古文孝経』の系統分類において最も大きな問題の一つである、字体の問題に焦点を当て、今字に改める鈔本群（関東系統）と、本文に「厶（居）」「亼（之）」「亂（始）」といった隸古字が混じる鈔本群（京都系統）と、そして他系統に属する『孝経』とに分けることにする。

古字を今字に改めた『古文孝経』鈔本

(1) 仁治本

現杏雨書屋蔵。仁治二年（1241）写。卷子装の一軸。書写者は主幸若丸、清原真人（教隆）の奥書を有する。孔安国序の前半を欠く。経伝点（一部紀伝点を含む）。仮名音注は筆跡が一定ではなく、後筆により補われた箇所が多く存する。調査には1939年便利堂より出版された影印本を用いた。

(2) 建長本

京都大学清家文庫蔵。卷子装の一軸。鎌倉後期の写本とされ、清原教隆の加点点を移点した鈔本である。本奥書に仁治二年の清原真人の跋文を掲げているため、仁治本と同じ系統の鈔本と考えられる。巻末には建長五年（1253）、前参河守がその子息である直隆に伝授したことと、また別筆で延文元年（1356）、清原教氏がその子息の豊隆に家点を伝授したことが記されている。本研究では最初の伝授識語に則り建長本と称する。調査には京都大学貴重資料デジタルアーカイブにて公開されている写真を用いた。

(3) 永仁本

壬生家旧蔵本であり、現宮内庁書陵部蔵。卷子装を綴葉装に改めている。永仁五年（1297）宋銭塘呉三郎入道写、永仁七年（1299）の清原教有伝授識語あり。聖治章第十の途中（第25張前半7行）から父母生績章第11（第27張後半3行）を欠き、前半部にも欠損箇所があり、修理の過程で鈔補している。ヲコト点は経伝点であり、声点は朱と墨を交えている。調査には宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧により公開されている写真を用いた。

古字を交える『古文孝経』鈔本

(4) 三千院本

¹¹⁴⁾ 『古文孝経』の諸本の系統については、坂本（1940）、小林（1967：1270-1273）、松本（2007：61-121、初出1987）、木島（2007）、呉（2018）を参照した。

京都三千院蔵。卷子装の一軸。建治三年（1277）金王曆が寂寂空に依頼し書写させ、それに加点を施しその後に清原家の証本により移点しているため、二系統の訓点が混在する。声点4種¹¹⁵⁾が存し、墨圈点（濃淡の別あり）と朱によるやや大きな円点のほかに、一部において朱の星点が施されている。調査には1930年古典保存会より出版された影印本を用いた。

(5) 正安本

天理図書館蔵。卷子装の一軸。正安四年（1302）年鈔本。清原家の経伝点（一部紀伝点を含む）のほかに中原家の別訓が存する。巻末奥書に「直学士清原（花押）¹¹⁶⁾」「奉受説了 政秀（花押）」とあり。喪親章（第22章）には加点がない。調査には天理図書館より申請した写真と原本調査を行った際に、作成した移点資料による。

(6) 元亨本

宮内庁書陵部蔵。卷子装の一軸。鎌倉後期写、元亨元年（1321）清原良枝自筆伝授識語が見られるが、書写者は未詳である。ヲコト点・句読・合符・声点は朱筆、仮名・一部の声点は墨筆¹¹⁷⁾を用いている。調査には宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧により公開されている写真を用いた。

(7) 元徳本

宮内庁書陵部蔵。折本仕立であったものを卷子装に改めている。元徳二年（1330）清原良賢¹¹⁸⁾写。他本とは異なり、ヲコト点は主に朱筆の紀伝点（所々墨筆あり）で施されている。声点は多くが墨で施されているが、一部において朱筆¹¹⁹⁾を用いている。調査には宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧により公開されている写真を用いた。

鄭注『孝経』

(8) 群書治要（巻第9 孝経部分）

宮内庁書陵部蔵。第3章で挙げた『群書治要』の『論語』を含め鄭注孝経を収める。第1行から第179行までが孝経部分であり、巻第9の巻末には「正嘉元年（1257）四月十二日加墨点了／前參河守清原（教隆）」とあり。句読、ヲコト点は朱点、仮名点、返読符、声点は墨点である。調査には論語と同様、宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧にて公開されている写真と複製本（古典研究会叢書漢籍之部第13巻、汲古書院、1989）を用いた。

¹¹⁵⁾ 佐々木（2006：321）は第一次朱点（大ぶりで濃い朱点）、第一次墨点（濃い墨点）、第二次朱点（小ぶりで薄い朱点）、第二次墨点（薄い墨点）に分けている。本研究では、墨点2種に関しては、複製本では判別が困難であったため、区別せずに扱ったことを断っておく。

¹¹⁶⁾ 阿部（1967：10-11）によると、正安四年の清原家の生存者としては、清原良枝、清原宗尚を挙げているが、良枝が正安二年に明経博士にあったので、「直学士」には疑いがあるとして、宗尚の可能性が高いとしている。

¹¹⁷⁾ 墨筆の声点は13例あり。

¹¹⁸⁾ 『図書寮漢籍叢考』の解説によると、清原良賢とする説があるが、年代（没年1432）が合わず誤りとしている。

¹¹⁹⁾ 朱筆の声点は9例であり、そのうち7例が孔安国序に施されている。

御注『孝経』

(9) 清家御注本

京都大学清家文庫蔵。卷子装仕立てであるが、軸を欠く。巻末が欠落しているため、書写時期・書写・加点者は不明であるが、京都大学貴重資料デジタルアーカイブでは「鎌倉後期（書写）、室町時代墨傍書、別筆書入れあり」として挙げている。紙背には建保五年（1217）、承久三年（1221）の文書あり。句読、ヲコト点は朱点、仮名点、返読符、声点は墨点である。調査には京都大学貴重資料デジタルアーカイブにて公開されている写真を用いた。

この『古文孝経』7種の古鈔本と『群書治要』は主に明経博士である、清原家の説を直接伝授している資料であるか、もしくは校点に用いるなど何らかの経緯で、加点に影響を受けている資料である。そのため、異本間の際立つ差を求めることに困難がある。しかし、清原家の『古文孝経』古鈔本における系統の別があり、かつ一資料の中にも、特に京都系統の鈔本である三千院本、正安本、元徳本のように複数の訓点が混在する資料が存するため、加点の種類を分けて詳細な検討が必要である。

本題に入る前に、各本における加点の数量的な差について触れておく。各本における正文・割注の字数と加点は欠損部分・喪親章の訓点の加点有無により、数には多寡があるが、永仁本の尾題の下に書写されている清原教有の筆「經一千八百五十字」「注八千七百六十四字」を基準にして、『古文孝経』の漢字音注記が、どれほどの比率で施されたかが確認できるため、参考までに仮名音注と声点の被注字の比率を表5-1、表5-2として挙げておく。

表 5-1 各鈔本における仮名音注の被注字数

	仁治本	建長本	永仁本	三千院本	正安本	元亨本	元徳本
正文 1850字	82 (4.4%)	72 (3.9%)	21 (1.1%)	122 (6.6%)	451 (24.4%)	119 (6.4%)	51 (2.8%)
割注 8764字	484 (5.5%)	299 (3.4%)	62 (0.7%)	356 (4.1%)	1121 (12.8%)	239 (2.7%)	100 (1.1%)

表 5-2 各鈔本における声点の被注字

	仁治本	建長本	永仁本	三千院本	正安本	元亨本	元徳本
正文 1850字	183 (9.9%)	231 (12.5%)	278 (15.0%)	385 (20.8%)	121 (6.5%)	75 (4.1%)	369 (19.9%)
割注 8764字	581 (6.6%)	524 (6.0%)	849 (9.7%)	830 (9.5%)	459 (5.2%)	201 (2.3%)	901 (10.3%)

各本から数的に差は見受けられるが、声点の加点総数は三千院本が最も多く、仮名音注は正安本が最も多く施されている。正安本の場合、喪親章に加点を行っていないことから、学習者である政秀が、加点の段階では、父母の喪に服していないことになる¹²⁰⁾。7種の資料

¹²⁰⁾ 父母の存命中には喪親章の講読を行わなかったのが、清原家の家風となっていた。喪親章における不読の慣行につ

の中でも、仮名音注が特に多いわけは、学習・読誦の利便性のためであると考えられる。孔伝本以外の『群書治要』所収の鄭注孝経（巻第9の1行から178行まで）には声点50例、仮名音注25例、唐・玄宗注本である清家御注本（残闕）には声点61例、仮名音注85例が認められる。

その他に、注意を要するのは、仁治本のように、仮名音注の筆跡が一定していないことから、後の学習者により何回に亘り、補われた後人の筆である。しかしながら、別筆を見分けることと、加点年代の推定が極めて困難であり、本研究では各資料の中で、明らかに別筆と判断される箇所には波線を引いて示すことにする。

5.2 仮名音注

仮名音注の多寡については、上記でも述べた通り諸本ごとに大きな差があり、加えて仁治本は序の一部、清家御注本は全体的に損傷が著しく、中間部分をほぼ欠いている。永仁本の場合は、後代の補鈔が行われているなど、各本の状況は区々である。更に、各本の仮名は一時期に一度で加点されたものではなく、同加点者によって幾度に亘り重層的に行われ、それに加えて本研究で扱う古文孝経7種の中に於いては、後代の加点者による補入がどの鈔本にもあるように見受けられる。

5.2.1 非鼻音化の遅れ

漢音形における問題として、明母・泥母の非鼻音化現象が挙げられるが、本研究で扱う『孝経』諸本の中に当該字の仮名表記がどのようにされているかについて検討する。鼻音が維持される字の多くが撥音韻尾字を有する字であり、撥音韻尾を持つ明母・泥母の仮名音注の事例を集め、明母のマ行音、泥母のナ行音表記について見ていく。まず、下の表5-3は撥音韻尾を持つ明母字のうち仮名音注が施されている事例をまとめたものである。

表 5-3 明母（微母）撥音韻尾字における仮名音注

ㄐ 韻尾字										
字	声・韻	仁治	建長	永仁	三千	正安	元亨	元徳	群書	御注
亡	明・陽	ハウ(2)	ハウ(1)		ハウ(3)	ハウ(6)				
明	明・庚3				メイ(1)	メイ(3)	メイ(1)			
命	明・映3					メイ(5)				
名	明・清	メイ(4)				メイ(4)				
ㄋ 韻尾字										
字	声・韻	仁治	建長	永仁	三千	正安	元亨	元徳	群書	御注
民	明・真甲				ミン(2)	ミン(4)				
旻	明・真乙	ヒン(1)	ヒン(1)	ヒン(1)	ヒン(1)	ヒン(1)	ヒン(1)	ヒン(1)		
敏	明・軫乙	ヒン(1)	ヒン(1)		ヒン(1)	ヒン(1)	ヒン(1)	ヒン(1)		
閔	明・軫乙					ヒン(1)				
文	明・文				フン(1)	フン(1)				
聞	明・文	フン(1)				フン(1)				
聞	明・問					フン(1)				

いては、林（1976：384-394）を参照されたい。

問	明・問	フン(1)			フン(1)	フン(2) ¹²¹⁾	フン(1)			
門	明・魂				モン(1)			モン(1)		
万	明・願	ハン(1)			ハン(4)					
慢	明・諫	マン(1)	マン(1)		マン(1)	マン(1)				
冕	明・彌乙	ヘン(1)	ヘン(1)		ヘン(1)			ヘン(1)		

明母字のうち、マ行音となるのは庚韻3等(メイ)、清韻(メイ)、真韻甲類(ミン)、魂韻(モン)、刪韻(マン)に属する字である。一方、バ行音となる韻は陽韻(バウ)、真韻乙類(ビン)、文韻(ブン)、元韻(バン)、仙韻乙類(ベン)に属し、『論語』諸本の中で見られた、同韻内におけるマ・バ表記の揺れは認められない。

次は、『孝経』諸本の中で、泥母(孃母)におけるナ行音・ダ行音表記がどの韻目に分布するかを見ていく。下の表5-4は泥母のうち、仮名音注が書き込まれた字の一覧と用例の数を示したものである。

表5-4 泥母(孃母)撥音韻尾字における仮名音注

ŋ 韻尾字										
字	声・韻	仁治	建長	永仁	三千	正安	元亨	元徳	群書	御注
能	泥・登					ノウ(2)				
n 韻尾字										
字	声・韻	仁治	建長	永仁	三千	正安	元亨	元徳	群書	御注
難	泥・翰				ナン(1)	ナン(2)				
m 韻尾字										
字	声・韻	仁治	建長	永仁	三千	正安	元亨	元徳	群書	御注
男	泥・覃	タン(1)				ナン(3)				
南	泥・覃					ナン(2)				
念	泥・添	テン(1)	テン(1)	テン(1)		テン(1)	テム(1)			
						テム(1)				

泥母に属する字のうち、ナ行音のみとなるのは、登韻(ノウ)、寒韻(ナン)に属する字である。ダ行音のみとなるのは添韻(テム>デン)に属する字である。ところが、覃韻に属する字のうち、仁治本の「男^{ナン}(328A)」はダ行音であるが、「南」はナ行音のみである。覃韻字のうち、仮名音注が書き込まれているのは仁治本と正安本のみであり、詳しい判断は難しいが、清原家鈔本である建武本『論語』には「南」に「ナン」を書き込む事例が見られる。また、この字の音形を窺うことができるものとしては、濁声点の加点率が高い資料(主として鎌倉時代加点の清原家鈔本)において、該当字に単点を施すか濁点を施すかという側面から、間接的に字音の音形を類推できる。まず、『孝経』諸本に施されている声点のうち、「南」に対しては声点を加えている箇所は見られない。「男」の場合は、関東系統鈔本には濁声点を施しているものは見られないが、京都系統の鈔本3種である三千院本(墨点)、正安本(墨1点)、元徳本(墨点)にすべて平声点が施されている。さらに、『論語』鈔本の中でも「南」に平声点単点(正和論語①22、嘉暦論語①20・③256・⑦115)、「男」に平声点単点(正和論語①39A・嘉暦論語①38A)などがあり、濁声点加点の事例は管見の限り見当たらない。

¹²¹⁾ 問(18)に朱筆で「フン」の付音があるを除いた。

そのため、泥母覃韻の漢音形はナ行音の「ナム（ナン）」であった可能性が高く、「タン」という字音は反切注など演繹的な方法でより、後代に確立した字音であると見られる。

5.2.2 歯音字（サ行音）における表記の揺れ

歯音声母字のうち、開口介音を有する韻母の仮名表記は、それを反映して開拗音表記となるが、一部の声母では直音となる。特に、サ行音で表記される歯音字の中には、直音と拗音表記が混在する。以下の表 5-5 は、『孝経』諸本の仮名音注のうち、同韻内におけるサ行拗音とサ行直音の分布を示したものである。

表 5-5 歯音声母・拗音韻母字における仮名音注

ア段音（陽韻）										
字	声・韻	仁治	建長	永仁	三千	正安	元亨	元徳	群書	御注
漿	精・陽		シヤウ(1)							
將	精・陽	シヤウ(1)				シヤウ(1)				
槍	精・陽	サウ(1)	サウ(1)		サウ(1)	サウ(1)				
醬	精・滂					シヤウ(1)	シヤウ(1)			
爵	精・葉	シヤク(2) シヤ(1)			シヤク(1) シヤツ(1)	シヤク(8)	シヤク(1)			
相	心・滂	シヤウ(1)				シヤウ(1)	シヤウ(1)			
祥	邪・陽	シヤウ(2)	シヤウ(1)			シヤウ(2)				
像	邪・養		シヤウ(1)		シヤウ(1)	シヤウ(1)				
象	邪・養	シヤウ(3)	シヤウ(1)			シヤウ(2)	シヤウ(1)	シヤウ(1)		
爽	生・養	サウ(1)	サウ(1)		サウ(1)	サウ(1)	サウ(1)	サウ(1)		
章	章・陽					シヤウ(3)				
酌	章・葉	シヤク(1)	シヤク(1)	シヤク(1)	シヤク(1)	シヤク(1)	シヤク(1)	シヤク(1)		
上	常・陽	シヤウ(1)				シヤウ(3)		シヤウ(1)		
常	常・陽	シヤウ(1)				シヤウ(4)				
尚	常・滂					シヤウ(1)				
傷	書・陽	シヤ(1)	シヤウ(1)			シヤウ(1)		シヤウ(1)		
商	書・陽	シヤウ(1)				シヤウ(1)				
賞	書・養	シヤウ(1)	シヤウ(1)			シヤウ(4)				
讓	日・滂	シヤウ(1)				シヤウ(2)	シヤウ(1)			
ウ段音（東韻・虞韻・尤韻）										
字	声・韻	仁治	建長	永仁	三千	正安	元亨	元徳	群書	御注
夙	心・屋	シク(1)			シク(1)	シク(2)		シク(2)		
肅	心・屋	シク(3)	シク(1)		シク(3)	シク(3)	シク(3)			
終	章・東	シウ(1)				シウ(1)				
衆	章・送					シウ(6) シユ(1)				
粥	章・屋	シク(1)	シク(1)	シク(1)	シユク(1)			シク(1)		
充	昌・東	シク(1)	シウ(1)			シウ(1)		シウ(1)		
塾	常・屋									シク(1)
淑	常・屋	シク(1)	シク(1)		シク(1)	シク(1)	シク(1)	シク(1)		
叔	書・屋				シク(1)	シク(1)	シク(1)	シク(1)		
取	清・虞	シユ(1)	シユ(1)	シユ(1)	シユ(1)	シユ(1)				シウ(1)
救	生・遇					ス(1)				
葛	初・虞								スウ(1)	
侏	章・虞	シユ(1)	シユ(1)			シウ(1)	シユ(1)			
朱	章・虞		シ(1)			シユウ(1)				
主	章・虞				シユ(2)	シユ(9)				
洙	常・虞					ス(1)		シウ(1)		
贖	常・遇 ¹²²⁾	シウ(1)	シウ(1)	シウ(1)	シユ・シウ(1)	シユ・シウ(1)	シユ(1)	シウ(1)		

¹²²⁾ 『広韻』には、「贖」の字音は船母・燭韻（漢音形「シヨク」）のみであるが、『經典積文』の巻第7（毛詩音義下）

儒	日・虞	シユ(1)				シユ(2)	シユ(1)			
修	心・尤					シウ(1)				
脩	心・尤	シユウ(1)	シウ(1)				シウ(1)			
周	章・尤	シウ(1)				シウ(4)				
醜	昌・有	シウ(1)		シウ(1)	シウ(1)	シウ(1)	シウ(1)	シウ(1)	シウ(1)	
首	書・有					シユ(1)				
柔	日・尤	シウ(1)			シウ(1)	シウ(1)	シユ(1)			
才段音 (魚韻・鐘韻・蒸韻)										
字	声・韻	仁治	建長	永仁	三千	正安	元亨	元徳	群書	御注
徐	邪・魚									シヨ(1)
序	邪・語	シヨ(1)	シヨ(1)		シヨ(1)	シヨ(2)				
楚	初・語		ソ(1)		ソ(1)	ソ(1)	ソ(1)			
踈 (疏)	生・魚	ソ(2)	ソ(2)		ソ(1)	ソ(2)	ソ(1)			
所	生・語	ソ(2) シヨ(1)			ソ(1)		ソ(1)			
恕	書・御		シヨ(1)		シヨ(1)	シヨ(1)	シヨ(1)	シヨ(1)		
庶	書・御			シヨ(1)	シヨ(1) シヨ(1)	シヨ(6)	シヨ(1)			
如	日・魚				シヨ(1)	シヨ(1)				
從	從・用	シヨウ(1)	セウ(1)	セウ(1)		シヨウ(2)	シヨウ(1)			
俗	邪・燭	シヨク(1)	シヨク(1)			シヨク(3)	シヨク(1)			
束	書・燭	ソク(1)	ソク(1)		ソク(1)	ソク(1)	ソク(1)			
辱	日・燭						□ヨク(1)		シヨク(1)	シヨク(1)
稷	精・職	シヨク(1)	シヨク(1)		シヨク(2)	シヨク(3)	シヨク(1)			
鄙	從・蒸									シヨウ・ソク(1)
側	莊・職	ソク(1)	ソク(1)	ソク(1)	ソク(1)	ソク(1)	ソク(1)			
穉	生・職	シヨク(1)	ソク(1)	ソク(1)	シヨク(1)	ソク(1)	シヨク(1)			
蒸	章・蒸	シヨウ(1) セウ(1)	シヨウ(1) セウ(1)		シヨウ(1)	シヨウ(2)	シヨウ(1)			
職	章・職	シヨク(2)	シヨク(1)		シヨク(1)	シヨク(4)				
稱	昌・蒸					セウ(2)				
稱	昌・證	シヨウ(1)				セウ(1)				
飾	書・職									シヨ(1)
承	常・蒸	セウ(1)	シヨウ(1)							
丞	常・蒸	シヨウ(1)				シヨウ(1) セウ(1)				
食	船・職	シヨク(1)			シヨク(1)	シヨク(3)	シヨク(1)			

直音表記となる字が、主として正歯音の初母と細正歯音の生母に集中するのは、他典籍と同様である。ア段音となる陽韻字のうち直音表記となっているのは、「槍」と「爽」のみである。「爽」は生母字に属し、他の韻においても直音に表記される傾向は同様である。ところが、「槍」は精母字に属する他の同音字「漿」「將」の仮名表記「シヤウ」であり、これらの字と比べて異なる様相を呈している。「槍」の場合、付音のある4種の鈔本に於いてすべて直音表記となっている。『孝経』において「槍」は「其^(の)槍^{-刈}(を)挟^{ハサン(て)}、其^(の)壘^{-畝}(を)修^(お・む)」(仁治本218行の訓点に拠る)であり、「草刈りの道具」の意を示しているが、当該字の字音が直音として伝わった理由としては、伝承した字音が『広韻』に収録されている字音とはかけ離れていた音が日本漢音として伝承していたためと見られる。その他に、傍の「倉(唐韻)」の字音を借りた所謂百姓読みが流布していたか、「倉」を音符とする諧声字であるため、母胎音において「槍」は「倉」とほぼ同様の音で発音されていた可能性

の「贖刑：音樹一音常欲反」や、卷第9(周礼音義下)の「罰贖：常戍反下一音蜀」の当該韻があったため、声母・韻母に関しては、この音注を以て演繹的に建てたものである。

が残る。さらに、この字が多音字であるため、他の韻である、初母・庚韻2等（『広韻』に「櫂槍祇星」とあり、彗星の意味。漢音形「サウ」）を借りた字音が流布していた可能性も考えられる。

次に、ウ段音となる、東韻拗音韻字および尤韻字の場合は、直音表記が見られない。一方、虞韻字の方は正安本の生母字「数」と常母字「洙」、群書治要の初母字「藹」が直音表記となっている。「数」は『孝経』の他本には付音の事例がないものの、同じく清原家加点の『論語』鈔本において事例が見られる。

「数」は多音字であるが、第3章の『論語』鈔本においても、扱ったように、上声字（麌韻）の場合は「ス（正和論語④62、⑩90、建武論語④51・⑩75）」、去声字（遇韻）の場合は「スウ（嘉暦論語①123A・建武論語⑩96）」の事例があり、直音表記が一般的に流布していた字音であると見られる。

「藹」も他の漢籍のうち、『白氏文集』鈔本において、その多くが「スウ（神田本『白氏文集』／角筆点③339・永仁本291・357）」「ス（京大本『白氏文集』③242）」などのように、直音表記となっていることから、伝承されてきた字音は直音であったと見られる。

一方、「洙」は元徳本において、拗音表記の「シユ」となっており、正安本にのみ直音表記となっている。同じく常母字の「贖」の場合は「シユ」もしくは「シウ」などの表記となっていることから、直音表記「ス」は正安本の加点者の読み癖によるものと考えられる。

オ段音となる魚韻字の直音表記としては、初母字の「楚」と生母字の「疎（疏）」は、諸本間の仮名音注の差は見られず、すべて直音表記となっている。一諸本にのみ直音と拗音表記が存在する字は、生母字の「所」と、書母字の「庶」があり、「所」は三千院本・元亨本に「ソ」の付音の事例があり、仁治本の場合は「シヨ」「ソ」両方の表記が見られる。仁治本は後筆が多く見られ、「ソ(211)」はやや大字であり、明らかな後筆であると見られるが、直音表記から5行離れたところに、若干の薄い字で「シヨ(216)」の付音がある。そのため、211行と216行の仮名音注は、それぞれ相異なる加点者によるものであると判断される。更に、600行にも「ソ」の付音が右側の若干下げて書き込まれているが、仁治本の仮名のうち、仮名の字体から判断して初期的な仮名と見られるものは、字の右から若干下に下げて仮名を施す傾向があることから、600行の仮名は比較的に初期に加点されたものであり、残りの二つは付音は後代の人による補入であると判断される。「シヨ」の字音は呉音と同形となるため、呉音の混入である可能性も疑われる。

次に三千院本の「庶(49)」の右側には「シヨ」と字のより近くに「ソ」に合点が施されている。二つの仮名音注の筆跡が相異なる人物に拠るものかは峻別が困難であるが、同本における「庶(152)」にも「シヨ」が書き込まれているが、他の字に比べてやや薄い墨筆と見られることから、49行と152行の仮名は異なる加点者にもものと見られる。

鍾韻字に属する字の中では、書母字の「束」のみが直音表記となっており、「シヨク」となる字音は見当たらない。佐々木（2009：151）では、『蒙求』諸本を分析する中で当該加点について、「平・上・去声の歯音字にソウと加点した例はない（中略）鐘韻甲歯音入声字に

「ソク」とする加点例は、平安中期以降室町時代まで、一貫して存する。よって、右の相違は、日本語サ行音の表記が揺れている、といった問題ではない。入声字に限って、拗音とならなかったものであろう。これには、呉音「ソク・ゾク」の影響が有ったものかも知れないとの見解を示している。

蒸韻字に属する字の中で、莊母字の「側」は付音があるすべての諸本において、直音表記となっている。生母の中では「穡」が直音表記と拗音表記とで分かれているが、鈔本の系統による訓点の違いによるものとは判断し難い。ところが、仁治本の「穡^{シヨク}(217A)」は後筆の加点と判断され、元亨本も同様に「穡^{シヨク}(210A)」の仮名は主なる仮名よりやや小字で書き込まれている点から、両方とも初期段階の加点ではないと思われる。三千院本の「シヨク(164A)」の場合は、仮名の新旧の判断は困難である。『論語』諸本においては「穡」と同音字である「蓄」「色」の場合、「蓄」に関してはすべて「ソク」、色に関しては「シヨク」と「ソク」の揺れが見られることについて前に述べている。また、他の漢籍のうち、『文選』『白氏文集』諸本には、生母・職韻字に関していえば、同様の揺れが見られるが、当該字「穡」に関して「ソク」の字音を施すものもあれば(宮内庁書陵部蔵『文選』角筆点94)、「シヨク」を施す場合も見られる(嘉禎本『白氏文集』59、正応本『白氏文集』110、谷村本『白氏文集』26)。なお、『群書治要』にも「穡(⑧321)」の加点例が存する。生母・職韻字に関しては「ソク」と「シヨク」の2種の仮名がほぼ同時代に混在しており、「ソク」が何らかの理由で衰退し、現代に至っては常用の字音はほぼ「シヨク」へと安定したと見られる。

従母字である「鄮(5)」は御注本のみ現れる字であるが、左側に「シヨウ」とともに「ソウ」に合点が施されている。右側には「切(以降欠)」のように、『切韻』所引の反切注があったと考えられる。「鄮」の小韻字である「繪」の反切注は『切韻』諸本において、共通的に「疾陵反」となっている¹²³⁾。「繪」は第4章の『古文尚書』にて述べた通り、『白氏文集』鈔本にも付音の事例があるが、すべて直音表記の「ソウ」で共通する。佐々木氏による『蒙求』分韻表の中でも「繪」が7種の鈔本において加点があるが、「ソウ」のみである。当該事案について佐々木(2009:167)は「「繪」も、呉音の混入例であり。ただし、長承本以下、『蒙求』訓点本ですべてソウとされる点が、他の呉音混入例と異なる。「繪」は、『蒙求』読誦の早い時期に、固定したものであろう」のように、呉音の混入と結論付けている。

清家御注本の「鄮」における「シヨウ」という加点が一度書き込まれ、後に「ソウ」を補い、合点を付すような修正が行われた理由としては、最初の段階には反切注が書き込まれ、この注記を基に演繹的に得られた字音を、後に他の御注孝経の鈔本もしくは他典籍における同音字の仮名音注を以て補われていたためであろう。前述の「槍」と同様「鄮」「繪」は諧声字であり、その音符が「曾」で共通することから、母胎音において両方が相通じていた蓋然性は十分ある。

¹²³⁾ 切韻諸本としては、切3(S2071)、王1(P2011)、王2、王3、広韻においてすべて反切注が共通する(鈴木慎吾氏による篇韻データベースに拠る)。

5.2.3 合拗音表記の残存

本節では『孝経』諸本の仮名音注において、合口字の表記が如何に表記されるかに注目する。ワ行音の介在が際立つ牙音・喉音を中心にし、キを介在するイ段合拗音と、エを介在するエ段合拗音、原則合拗音が見られない唇音を除く、歯音・舌音における止摂合口字および真韻合口・諄韻字の仮名表記を各本を比べながら見ていく。まず、以下の表 5-6 はイ段合拗音ないし表記に「キ」を介在する韻尾を対象にし、その仮名表記と数をまとめたものである。

表 5-6 イ段合口字における仮名音注（牙音・喉音声母）

通撮・曾撮／㊦キヨウ（ク）>㊧ヨウ（ク）										
字	声・韻	仁治 (0:7)	建長 (0:2)	永仁 用例無し	三千 (5:4)	正安 (9:8)	元亨 (1:0)	元徳 (1:3)	群書 (0:1)	御注 (0:1)
恭	見・鍾				クキヨウ(2)	クキヨウ(3)		ケウ(1)		
龔	見・鍾	キヨウ(1)	ケウ(1)		クキヨウ(1)	クキヨウ(1)				
供	見・鍾					クキヨウ(2)				
供	見・用	キヨウ(2)			キヨウ(1) キヨ(1)	クキヨウ(1)				
凶	曉・鍾	ケウ(2)			クキヨウ(1)	ケウ(3)		ケウ(1)		ケフ(1)
曲	溪・燭					クキヨク(1)				
兢	見・蒸	キヨウ(1)	キヨウ(1)		クキヨウ(1)	クキヨウ(1)	クキヨウ(1)		キヨウ(1)	
矜	見・蒸				キヨウ(1)			クキヨウ(1)		
極	群・職	キヨク(1)				キヨク(1)				
應	影・證				ヨウ(1)	ヨウ(4)		ヨウ(1)		
止撮／㊨キ>㊩										
字	声・韻	仁治 (2:13)	建長 (2:6)	永仁 用例無し	三千 (6:6)	正安 (22:5)	元亨 (4:3)	元徳 (2:1)	群書 (1:0)	御注 (3:1)
規	見・支	キ(1)	キ(1)		キ(1)	キ(1)				
簋	見・旨	キ(1)	キ(1)		クキ(1)		キ(1)	キ(1)		クキ・キ(1)
鬼	見・尾					クキ(3)				
貴	見・未		キ(2)			キ(4) クキ(2)				
揆	溪・旨	キ(1)	キ(1)		キ(1)	クキ(1)	キ(1)			
喟	溪・至		クキ(1)		クキ(1)	クキ(1)	クキ(1)	クキ(1)		
危	疑・支	キ(1)	キ(1)			クキ(1)				
暉	曉・微									クキ(1)
徽	曉・微									クキ(1)
威	影・微	イ(3)			キ(2) イ(1)	キ(9)	キ(1)			
維	羊・脂								キ(1)	
遺	羊・脂					キ(1)	キ(1)			
唯	羊・旨	キ(1)	キ(1)		キ・イ(1)					
遺	羊・至	イ(1)				キ(1)	キ(1)	キ(1)		
違	于・微				キ(1)					
位	于・至	イ(5) キ(1)			イ(2)	キ(3)				
臻撮／㊪キン>㊫										
字	声・韻	仁治 (2:1)	建長 (1:0)	永仁 (1:0)	三千 (2:0)	正安 (3:0)	元亨 (1:1)	元徳 用例無し	群書 用例無し	御注 (2:1)
尹	羊・準	キン(2)			キン(1)	キン(2)	イン(1)			
殞	于・軫									キン(1)
聿	羊・術	イツ(1)	イツ(1)	イツ(1)	キツ(1)	キツ(1)	キツ(1)			キツ・ユツ(1)
宕撮／㊬キヤウ（ク）>㊭ヤウ・㊮ワウ（ク）										
字	声・韻	仁治 用例無し	建長 (0:1)	永仁 用例無し	三千 用例無し	正安 (0:1)	元亨 用例無し	元徳 用例無し	群書 用例無し	御注 用例無し
匡	溪・陽		キヤウ(1)			キヤウ(1)				
曾撮／㊯キキ>㊰キ										

字	声・韻	仁治 用例無し	建長 用例無し	永仁 用例無し	三千 (0:1)	正安 用例無し	元亨 用例無し	元徳 用例無し	群書 用例無し	御注 用例無し
域	子・職				イキ(1)					

イ段合拗音のうち、比較的仮名の書き込みが多い、通撰・會撰字と止撰字を中心に見ていくと、関東系統の仁治本・建長本の場合は直音表記の、「キヨウ」「キ」などが主な表記となっている反面、三千院本・正安本のような京都系統の写本の方は、字によってバラつきはあるものの、「クキヨウ」「クキ」などといった合拗音の残存がより際立つ。

合拗音表記は時代が降るにつれ消滅するが、本研究で扱った最古の鈔本は仁治本では、よりのちの鈔本である三千院・正安本よりも合拗音表記は見られない。これは関東系統の鈔本は正文の古字を改めるとともに、仮名音注においても改編を加えたためであり、京都系統は既存の情報の伝承に、より焦点を合わせていたと考えられる。元亨・元徳本など鎌倉後期の鈔本の場合は、若干合拗音の事例は減少するようであるが、関東系統の鈔本に比べると依然として一部の合拗音表記が残る。鄭注（群書治要）の場合は、選抄本であるため分量が少なく、原音の合口性を残存する表記としては「維(156A)」のみ確認できる。御注本の場合も現存の分量は少ないが、合拗音の依然として残存するが、「^{キツ・ユツ合}聿(43A)」「^{クキ・キ左・キ合左}簋(169)」のような具合で、複数の資料を用いて、幾度に亘り加点が行われ、合点により取捨選択した箇所が見られる。「聿」の直音表記は、「イツ」ではなく「ユツ」となっている他の事例は管見に入らない。

次は、各本のエ段合拗音の仮名表記を見ていく。以下の表 5-7 はエ段合拗音ないし「エ」を介在する表記が予想される字を対象に、その仮名音注の事例と数をまとめたものである。

表 5-7 エ段合口字における仮名音注（牙音・喉音声母）

蟹撰／㊦エイ＞㊦イ										
字	声・韻	仁治 (0:2)	建長 (0:1)	永仁 (0:1)	三千 (1:2)	正安 (3:4)	元亨 (0:1)	元徳 (0:1)	群書 用例無し	御注 用例無し
閨	見・齊	ケイ(1)	ケイ(1)	ケイ(1)	ケイ(2)	ケイ(3)	ケイ(1)	ケイ(1)		
恵	匣・霽	ケイ(1)			クエイ(1)	クエイ(3)				
					ケイ(1)					
山撰／㊦エン(ツ)＞㊦エン(ツ)										
字	声・韻	仁治 (3:4)	建長 (0:7)	永仁 (0:1)	三千 (4:2)	正安 (6:6)	元亨 (1:5)	元徳 (1:1)	群書 用例無し	御注 (1:1)
吠	見・銑	ケン(1)	ケン(1)	ケン(1)	ケン(1)	ケン(1)	ケン(1)	ケン(1)		
厥	見・月									クエツ(1)
闕	溪・月					ケツ(1)				
權	群・仙	クエン(1)	ケン(1)		ケン(1)	クエン(1)				
原	疑・元		ケン(1)		クエン(1)	ケン(1)				
月	疑・月					クエツ(1)				
血	曉・屑		ケツ(1)		クエツ(1)	クエツ(1)	ケツ(1)	クエツ(1)		
宛	影・阮	エン(1)	エン(1)		エン(1)	エン(1)	エン(1)			
円	于・仙	エン(1)	エン(1)			エン(1)				
遠	于・阮					エン(1)				エン(1)
鉞	于・月	エツ(3)	エツ(1)		エツ(1)	エツ(3)	エツ・エツ(1)	エツ(1)		
梗撰／㊦エイ＞㊦イ										
字	声・韻	仁治 (1:3)	建長 (0:3)	永仁 用例無し	三千 (0:3)	正安 (1:9)	元亨 (0:3)	元徳 用例無し	群書 用例無し	御注 用例無し

兄	暁・庚					ケイ(3)				
洞	匣・迴	ケイ(1)				ケイ(1)	ケイ(1)	ケイ(1)		
役	羊・昔	エキ(2)	エキ(2)			エキ(1)	エキ(3)	エキ(2)		
榮	于・庚						エイ(1)			
當	羊・清					エイ(1)				
詠	于・映	エイ(1)	エイ(1)				エイ(1)	エイ(1)		

エ段合拗音は鎌倉時代の鈔本からも、その事例は多くなく、直音化が目立つが、比較的どの鈔本においても、山撮合口字は依然としてエ段合拗音が残っている。関東系統鈔本の仁治本の場合も、合拗音表記が散見されるが、同種の底本が用いられたとされる建長本と見比べてみると、仁治本の合拗音表記はすべて直音表記となっている。

蟹撰の「恵」の場合は、京都系統の鈔本のうち、加点時期が早い三千院本と正安本に合拗音表記「クエイ」が見られるが、同字に対して直音表記「ケイ」も散見される。梗撰字で唯一、「エ」を介在する表記となっている「詠」は仁治本・正安本のみに見られる。本研究で扱った『孝経』鈔本の加点時代である鎌倉時代には、原音の合口介音に対する意識がかなり薄れているが、特にエ段のうち「イ」「キ」などの韻尾字との共起はかなり稀であると判断される。

最後に、各本の歯音・舌音における合拗音表記について述べることにする。以下の表 5-8 はサ行（歯音）、タ行・ラ行（舌音）字のうち、止撮合口字・臻撰（真韻・諄韻）合口字に加点されている仮名音注の事例と数をまとめたものである。

表 5-8 歯音・舌音合拗音における仮名表記

止撮／㊦キ：㊦イ										
字	声・韻	仁治 (0:5)	建長 (0:3)	永仁 (0:1)	三千 (0:1)	正安 (0:5)	元亨 (0:3)	元徳 (0:3)	群書 用例無し	御注 用例無し
衰	生・脂	スイ(2)	スイ(1)			スイ(2)	スイ(1)			
水	書・旨					スイ(1)				
惛	従・至	スイ(1)	スイ(1)	スイ(1)	スイ(1)	スイ(1)	スイ(1)	スイ(1)		
累	来・紙	ルイ(1)	ルイ(1)			ルイ(1)	ルイ(1)	ルイ(1)		
類	来・至	ルイ(1)						ルイ(1)		
臻撰／㊦キン・㊦キン（ツ）：㊦ユン・㊦ン（ツ）										
字	声・韻	仁治 (1:6)	建長 (1:5)	永仁 (1:0)	三千 (1:3)	正安 (6:5)	元亨 用例無し	元徳 (1:1)	群書 用例無し	御注 用例無し
俊	精・稗	シユン(1)	シユン(1)		シユン(1)					
舜	書・稗	シユン(1)				スキン(1)				
順	船・稗	シユン(2)	シユン(1)			シユン(4) スキン(3)		シユン(1)		
術	船・術	シユツ(1)	シユツ(1)			スキツ(1)				
述	船・術		シユツ(1)		シユツ(1)	スキツ(1)				
潤	日・稗	シユン(1)	シユン(1)			シユン(1)				
忱	徹・術	チキツ(1)	チキツ(1)	チキツ(1)	チキツ・ チツ(1)			ツキツ(1)		

歯音・舌音の止撮合拗音は「㊦キ」表記は『孝経』諸本に1例も見られない。一方、臻撰の「㊦キン（ツ）」表記は正安本において最も際立つが他の鈔本に跨いで一致するわけではないことから、正安本の加点者の個人による差であるように見える。合拗音表記がすべての

鈔本で合拗音表記として共通する字は「怱」のみである。ただし、「怱」を含む「喪親章」には加点が行われていない正安本と元亨本（正文は加点が行われているが割注部分に加点を行っていない）は、「怱」への書き込みがない。三千院本の場合は直音化表記「チツ」の書き込みもあり、元徳本には「ツキツ」となっており、夕行合拗音の唯一のこの事例は京都系統鈔本の間でも表記に差が存するようである。肥爪（2019：112-113）によると「「チュン」「チュツ」が現れるのは、はやや時代が下ってからである。これらの音形は、同撮同韻の歯音字が同様の試行錯誤を経て「シユン」「シユツ」に定着したのに合わせる形で創出されたものであろう」という結論を出しているが、『孝経』諸本に現れるこの字音はやや古い語形を保っているのだろう。

5.2.4 ハ行転呼音による表記の混同

本研究で扱う『孝経』諸本は主として鎌倉期に書写・加点されたものであり、この時期の主な音韻変化の一つとしては、ハ行転呼音を挙げる事が出来る。そのうち、p 韻尾は、原則「フ」として表記されるが、形態素の第2音節以降のハ行音がワ行音へと転じる変化のため、p 韻尾の表記は「ウ」へと変じるようになる。その中で、既存「ウ」として表記される、u 韻尾、ŋ 韻尾字の中でも、この混同により「フ」表記が出現するようになる。下の表 5-9 は『孝経』諸本における、仮名音注付きの p 韻尾、ŋ 韻尾、u 韻尾字の字数における「ウ」「フ」表記を数値化したものである。

表 5-9 ハ行転呼音による表記の揺れ

		仁治	建長	永仁	三千	正安	元亨	元徳	群書	御注
p 韻尾	フ表記	2	3	2	9	27	3	0	0	0
	ウ表記	7	5	0	5	4	2	2	0	0
ŋ 韻尾	ウ表記	64	37	4	43	178	28	16	1	4
	フ表記	0	0	0	3	1	0	0	0	2
u 韻尾	ウ表記	49	30	3	49	131	34	12	2	5
	フ表記	1	0	0	2	2	0	0	0	2

まず、ハ行転呼音による表記の揺れが著しい、p 韻尾字の場合、関東系統鈔本の中では、仁治本・建長本は「ウ」表記が優勢であるが、永仁本のみ3種の韻尾におけるハ行転呼音による表記の混同は見られない。京都系統の鈔本では、比較的仮名音注の書き込みが多い三千院・正安本でも一部「ウ」表記の事例が見られるが、「フ」表記がより優勢である。鎌倉後期加点の元亨本には「フ」と「ウ」の混同が著しく、元徳本の場合はすべて「ウ」表記で統一されている。

次に、ŋ 韻尾、u 韻尾字の場合は、ハ行転呼音による「フ」表記は非常にまれであり、これはほぼ同時代に書写・加点された『論語』『古文尚書』鈔本から得られた結果と同様である。ŋ 韻尾の場合、三千院本の「恭^{クキョフ} (84A)」「朋^{ホフ} (93A)」「宗^{ソフ} (141A)」や韻尾のみを書き込んだと考えられる「曾^{ソフ} (71A)」の事例があり、正安本にも韻尾のみの表記である、「章^{ソフ} (40)」の1例が見られる。また、清家御注本にも同様の事例があり、「忠^{チフ} (77A 合)」「凶^{ケフ} (151A)」のよ

うな例が見られる。u 韻尾字の場合は関東系統鈔本である仁治本に「幼(492A)」の1例のみであり、京都系統鈔本では、三千院本に「遊(52)」「休(313A)」、正安本に「舊(429A)」「幼(432A)」の2例ずつ「フ」表記が見られる。別系統鈔本である清家御注本においては「好(102A)」「教(141)」の事例があり、仮名音注の被注字は少ないが、η 韻尾、u 韻尾字両方ともハ行転呼音による表記の混同は一部に過ぎず、混同の比率は決して高くない。

表 5-9 に挙げた p・η・u 韻尾字のほかに、合口介音を反映した「クワ」などのア段合拗音の中に、2音節以降のワ行音を、ハ行音として表記する事例が見られる。まず、関東系統鈔本には永仁本の「科(3A2)」1例が存する。仁治本には後筆による補入が一部ある鈔本もあるが、合拗音に関してはハ行転呼音による混同の事例は見られない。一方、京都系統鈔本である三千院本には「過(87A)」「寛(154A)」「和(196)」「寡(215)」の4例が「ハ」を用いた表記であり、4例すべて他の仮名とは明らかに筆跡が異なることから、後人による補入であると考えられる。なお、元亨本「寛(197A)」「鰥(276A)」や韻尾を表記しない「患(215A)」「悔(215A)」の合わせて4例がある。ほぼ、同時代に加点され、なお仮名音注が多く施されている、正安本の方は「クワ」が51例あるが、「クハ」の表記は1例もない。

その他に、i 韻尾字の中で、ハ行転呼音による混同を反映した表記があり、清家御注本に「懈(70A)」の事例がある。このような表記は時代が流れるにつれ増えると想定されるが、その他にも如何に底本を詳細に伝承していたか否かにより、もしくは学習の過程でハ行音とワ行音が区別されていない口語的な要素を、加点に反映することによりもたらされると考えられるが、これらの表記に関しては、訓点の系統の違いよりは加点者の違いにより、生じる差である可能性が高い。

5.2.5 「㊦ヨウ」と「㊧ウ」の混同

次は、『孝経』鈔本において、通撰・曾撰字「㊦ヨウ」と效撰「㊧ウ」および咸撰入声字「㊧フ」の表記に揺れが存する箇所について述べる。「㊦ヨウ」と「㊧ウ」の混同の度合いを調べるため、まずは原則「㊦ヨウ」となる鍾韻字・蒸韻字における仮名表記を以下の表 5-10 に示した。

表 5-10 鍾韻・蒸韻字における仮名音注

【通撰・曾撰】(㊦ヨウ：㊧ウ)										
字	声・韻	仁治 (12:8)	建長 (5:7)	永仁 (1:1)	三千 (17:0)	正安 (26:12)	元亨 (7:4)	元徳 (5:2)	群書 (1:0)	御注 (1:1)
恭	見・鍾				クキヨウ(2)	クキヨウ(3)		ケウ(1)		
龔	見・鍾	キヨウ(1)	ケウ(1)		クキヨウ(1)	クキヨウ(1)				
凶	曉・鍾	ケウ(2)			クキヨウ(1)	ケウ(3)		ケウ(1)		ケフ(1)
供	見・鍾					クキヨウ(2)				
供	見・用	キヨウ(2)			キヨウ(1) キヨ(1)	クキヨウ(1)				
従	従・用	シヨウ(1)	セウ(1)	セウ(1)		シヨウ(2)	シヨウ(1)			
寵	徹・腫	テウ(2)	テウ(2)			テウ(2)	テウ(2)			
容	羊・鍾	ヨウ(1)			ヨウ(2)	ヨウ(2)	ヨウ(1)			
踊	羊・腫	ヨウ(1)	ヨウ(1)	ヨウ(1)	ヨウ(2)		ヨウ(1)	ヨウ(2)		
用	羊・用					ヨウ(4)				

龍	来・鍾	レウ(1)	レウ(1)			レウ(2)	レウ(1)			
壘	来・腫	リョウ(1)	リョウ(1)			レウ(1)	レウ(1)	リョウ(1)		
兢	見・蒸	キョウ(1)	キョウ(1)		クキョウ(1)	クキョウ(1)	クキョウ(1)		キョウ(1)	
矜	見・蒸				キョウ(1)			クキョウ(1)		
鄙	従・蒸									ソウ合・ショウ(1)
蒸	章・蒸	ショウ(1) セウ(1)	ショウ(1) セウ(1)		ショウ(1)	ショウ(2)	ショウ(1)			
稱	昌・蒸					セウ(2)				
稱	昌・證	ショウ(1)				セウ(1)				
丞	常・蒸	ショウ(1)				ショウ(1) セウ(1)				
承	常・蒸	セウ(1)	ショウ(1)							
徵	知・蒸	チョウ(1) テウ(1)	テウ(1)		チョウ(3)	チョウ(3)	チョウ(2)			
應	影・證				ヨウ(1)	ヨウ(4)		ヨウ(1)		

仁治本は本研究で扱う資料の中では最も古い資料であるが、後筆が多く含まれており、それにつれて「㊦ヨウ」が「㊧ウ」に表記される混同の事例も多くなるように見られるが、関東系統の鈔本のみならず、京都系統の鈔本の中でも、「㊧ウ」の表記は散見される。ところが、三千院本は当該字の数に反して、混同例が稀である。これは、仮名注の祖点自体が、最初の底本である「狼藉本」と、建保五年（1212）清原頼尚による証本とを反映しているのは確かであるが、二種の底本が両者の表記混同が少ない、つまり他本より古い祖点に依拠した可能性が考えられる。

次の表 5-11 は、原則「㊧ウ」となる蕭韻・宵韻字および「㊧フ」となる葉韻・帖韻・業韻字において、「㊦ヨウ」との音韻統合による表記の揺れがどのように分布するかを示したものである。

表 5-11 宵韻・蕭韻・葉韻・帖韻・業韻における仮名音注

【效撰・咸撰】(㊧ウ・㊧フ : ㊦ヨウ)										
字	声・韻	仁治 (14 : 2)	建長 (9 : 3)	永仁 (2 : 0)	三千 (15 : 1)	正安 (33 : 1)	元亨 (14 : 1)	元徳 (4 : 0)	群書 用例無し	御注 (1 : 0)
驕	見・宵	ケウ(1)	ケウ(1)		ケウ(1)	ケウ(1)	ケウ(1)			
小	心・小					セウ(2)				
肖	心・笑	セウ(2)	セウ(1)			セウ(3)	セウ(2)			
詔	章・笑	セウ(1)	ショウ(2)			セウ(2)	セウ(2)			
照	章・笑	ショウ(1)	セウ(1)			セウ(1)				
朝	知・宵					チョウ(1)				
朝	澄・宵	チョウ(1)			テウ(1)	テウ(2)				
兆	澄・小	テウ(3)	テウ(3)		テウ(7)	テウ(6)	テウ(5)	テウ(1)		
條	定・蕭	テウ(1)				テウ(1)				
表	幫・小	ヘウ(1)								
廟	明・笑	ヘウ(2)	ヘウ(1)		ヘウ(2)	ヘウ(3)		ヘウ(1)		
妖	影・宵	エウ(1)	エウ(1)	エウ(1)	エウ(1)	エウ(1)	エウ(1)	エウ(1)		
要	影・笑		ヨ(1)			エウ(4)	エウ(2)			
曜	羊・笑									エウ(1)
業	疑・業				ケフ(2) キョウ(1)	ケフ(3)				
妾	清・葉	セウ(2)				セフ(3)	シヤウ(1)			
牒	定・帖		テフ(1)	テフ(1)	テフ(1)	テフ(1)	テフ(1)	テウ(1)		

「㊦ヨウ」が「㊤ウ」へと転じる例より、「㊤ウ」「㊤フ」が表記される韻母字が「㊦ヨウ」の形に転じる例は比較的に少ないようである。原則「㊤フ」となる元亨本の「姜(281)」には「㊦ヤウ」「㊦ヨウ」「㊤ウ」が結局同音に帰するための表記であるが、これは別筆であり、鎌倉後期の加点ではなく、室町以降の後筆が元亨本に紛れ込んでいると判断される。音韻統合が進むにつれて、表記の面においても、一方へ統合する事例が増えていくが、清原家鈔本が多い『孝経』鈔本では「㊦ヨウ」が「㊤ウ」へと統合されていく傾向は、関東系統であれ京都系統であれ、強いように見受けられる。

5.2.6 長母音表記

仮名音注の側面において、原則多母音となる韻母である、止撰字、遇・流撰字、果・仮撰字を対象にし、『孝経』鈔本に長母音表記がどれほどの比率で見られるかについて調べる。表 5-12 は『孝経』鈔本における仮名音注の長母音表記が見られる字を挙げ、他本における表記とその数をまとめたものである。

表 5-12 長母音表記

止撰										
字	声・韻	仁治 (0)	建長 (0)	永仁 (0)	三千 (5)	正安 (1)	元亨 (0)	元徳 (1)	群書 (0)	御注 (0)
俳	滂・尾		ヒ(1)			ヒ(1)	ヒ(1)	ヒイ(1)		
四	心・至		シ(1)		シイ(2)	シ(2) シイ(1)	シ(1)			
弑	書・志				シイ(2)	シ(1)	シ(1)	シ(1)		
唯	羊・旨	ヰ(1)	ヰ(1)		ヰイ(1)					
遇撰・流撰										
字	声・韻	仁治 (0)	建長 (0)	永仁 (0)	三千 (0)	正安 (1)	元亨 (0)	元徳 (0)	群書 (0)	御注 (0)
父	奉・慶					フ(6) フウ(1)				フ(1)
果撰・仮撰										
字	声・韻	仁治 (0)	建長 (0)	永仁 (0)	三千 (0)	正安 (0)	元亨 (0)	元徳 (0)	群書 (0)	御注 (0)

前述の『論語』『古文尚書』における仮名音注と同様、長母音表記は極めて少ない。ただし、京都系統鈔本に少数の長母音表記があるのみであり、関東系統鈔本はこういった表記は一切見られない。複数の鈔本において、同様に長母音表記が見られる字は「四」があるが、建武本『論語』のように特定の熟語に、長母音表記が集中するようなものは見られず、三千院本には「四嶽(108A)」「四方(351A)」、正安本は「四十(122A)」であり、共通点は見られない。ただし、孔伝本の第2章の「天子章」には「四海」の熟語があるが、これに仮名音注を付している鈔本としては、建長本、正安本(2例)、元亨本があるが、すべて「シ」であり、長母音表記の仮名である「シイ」が書き込まれている事例は見られない。

遇撰字の中で、唯一長母音表記が見られる正安本の「父」は、正安本に7例の仮名音注がある。正安本における「父」の仮名音注の加点例はすべて熟語であり、長母音表記が書き込

まれているのは「父子(328A)」であり、墨の音合符が書き込まれている。「父子」はもう一か所存するが、当該箇所には短母音表記の「フ(101A)」が書き込まれており、必ずしも特定の熟語に集中するものではないと見られる。

表 5-12 に挙げている 5 字のうち、「四」「弒」は去声字、「父」は上声全濁字であるため、去声で読まれていた可能性が高い。「悱」は上声字であり、建長本、永仁本朱点、三千院本朱円点、元亨本朱点は上声点が施されている。ただし、長母音表記が書き込まれている元徳本は、去声点が施されており、これが長母音表記の要因になったようである。

「唯」は上声字であるが、三千院本には朱円点の上声点があり、右側に「𠂔」、左側に「イ、」が書き込まれており、長母音表記である「イ、」は加点の最初の段階の加点ではなく、後筆であると判断される。元徳本の「悱」のように誤って「唯」に去声点を施している鈔本は管見の限り見当たらないため、「イ、」については、その加点の所以が判断し難い。

5.2.7 m・n 韻尾字の表記

元来、n 韻尾字と m 韻尾字は発音を異にしており、表記の面においても、n 韻尾字は「ン」、m 韻尾字は「ム」として書き分けられてきたが、院政期以降両者の区別は漸次消滅する¹²⁴⁾。下の表 5-13 は、『孝経』諸本における m 韻尾字における「ン表記」と n 韻尾字における「ム表記」の例であり、各本の「ム表記」「ン表記」の仮名音注の数(延べ数)を示したものである。

表 5-13 m・n 韻尾字における仮名表記の揺れ

韻尾	表記	仁治	建長	永仁	三千	正安	元亨	元徳	群書	御注
m 韻尾	ム表記	1	1	0	16	2	7	6	0	7
	ン表記	20	15	7	3	50	8	4	1	3
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0
n 韻尾	ン表記	70	49	9	41	238	35	14	2	10
	ム表記	2	5	0	5	11	8	1	0	0
	その他	1	0	0	0	0	1	0	0	0

上の例から、関東系統の諸本は音韻上の統合を反映させて、両韻尾字の大多数が「ン」へと定着している。京都系統の諸本は、正安本のように、両韻尾字の大多数が「ン」と表記される場合と、元亨・元徳本のように「ム」と「ン」が全く混同されている場合とが存する傾向がある。その中で、「ン」「ム」の書き分けが、最も規範的であるのは三千院本である。上述の「㊦ヨウ」と「㊧ウ」との混同の問題においても、三千院本は最も厳密に書き分けられていた。m・n 韻尾も同様に、時代が流れるにつれ統合するため、これらの表記が乱れる前の段階に加点された底本に則り、忠実に移点を行った結果であると判断される。

他系統の『孝経』のうち、『群書治要』は被注字数が極めて少ないが、佐々木(2009)

¹²⁴⁾ 沼本(1986: 241-245)

の『群書治要』経部（巻第1～巻第10）の分韻表を基に統計を取ると、m 韻尾の19例がム表記（うち、16例は巻第8であり、ム表記が多いのは底本の影響か）、87例がン表記である。一方、n 韻尾はン表記が261例、ム表記は1例であり、ン表記が圧倒的多数である。

『群書治要』は抑も帝王学のための書物であり、金沢文庫本の書写された鎌倉時代の為政者が関わっている点、なお、仁治本、建長本など関東系統の鈔本の底本と同様、清原教隆が関与していることから、関東系統の清原家の他の鈔本とも類似の性質があることが期待される。

清家御注本は、鎌倉後期から室町初期の加点と考えられるが、n 韻尾字は「ン」で統一され、m 韻尾字は「ン」と「ム」表記の混同が見られるものの、仮名音注が欠損した一部の例を含めても「ム」表記の方がやや多い。

5.2.8 促音化

『孝経』諸本の中には、t 韻尾字ではない、p・k 韻尾字において「ツ表記」が書き込まれている字例が散見される。これらは、一部の入声字が後続の無声子音により、促音化したものである。以下は p 韻尾字と、k 韻尾字における、促音化表記の事例である。なお、後続の子音との関係性を探るため、その字が属する熟語、もしくは後続の助詞・動詞をともに示したものである。

【深・咸摂】p 韻尾字

- ・仁治本（9例：3例）^{ハツ}法(129A 法象)、^{キツ}撰(335A シ・シ)、^{キツ}接(553A ス・る)
- ・建長本（8例：0例）
- ・永仁本（2例：0例）
- ・三千院本（14例：2例）^{タツ}答(84A 答对)、^{ハツ}法(114A 法度)
- ・正安本（31例：1例）^{キツ}撰(308A、シテ・す)
- ・元亨本（5例：3例）^{シツ}湿(210A 原湿)、^{ハツ}法(138A 法象、169A 法服)
- ・元徳本（2例：0例）
- ・群書治要 用例無し
- ・清家御注本（0例：1例）^{セツ}接(140A セス)

【通・江・宕・梗・曾摂】k 韻尾字

- ・仁治本（76例：0例）
- ・建長本（53例：0例）
- ・永仁本（18例：1例）^{カツ}学(2B2 学校)
- ・三千院本（68例：2例¹²⁵⁾ ^{シヤツ}爵(313A 爵級)、^{ヒョク・ツ}偈(126A 偈下)
- ・正安本（164例：1例）^{リツ}六(5 六合)

¹²⁵⁾ 「撃(425、427A)」に「ケツ」という加点があるが、字体が類似した「撃ケキ」に誤認し、促音化したものと考えられるが、本節では除外する。

- ・元亨本 (51 例 : 0 例)
- ・元徳本 (24 例 ¹²⁶⁾ : 1 例) 偏^{ヒョツ} (167A 偏下)
- ・群書治要 (7 例 : 0 例)
- ・清家御注本 (2 例 : 0 例)

事例は建長本、群書治要を除き、若干の例が見られる。p 韻尾字の場合は、カ行・サ行・タ行音・ハ行音が後続し、後続の字は漢字音のみならず、サ行変格動詞「ス」の活用形が続く場合も見られる。ただし、元亨本の「湿」の「シツ」以降は、句点を施しており、文の区切りの部分を示しているため、ツ表記は後続の無声音による促音化を反映したものではないと判断される。現代の漢字音の中でも、「煩^{ザツ}雑」「包^{ヒョツ}撰」のように、後続の無声音の影響がない環境のもとにおいて、単独で使用されている場合においても「ツ表記」があるように、p 韻尾字の一部の字が単字形で用いられる時も、早くから「ツ表記」として固着していたと見られる。

一方、k 韻尾字の場合、促音化の事例はすべて後続の字音が「学^{カウ}校」「爵^{キフ}級」「偏^カ下」「六^{カフ}谷」のように漢音形において無声子音のカ行音となる字である。前述の『論語』鈔本の中でも、高山寺中原本の「析 (漢音形セキ)」のみ「セツ」となる事例を除き、ほぼすべての促音化の事例はカ行音が後続する環境に限られている。

5.2.9 t 韻尾の仮名表記

t 韻尾の転写は「チ表記」と「ツ表記」が存するが、前章の『論語』『古文尚書』諸本からも分かるように、鎌倉時代以降の漢籍訓読資料内では、「チ」をもって転写する場合が極めて稀であることを述べた。同様の尺度をもって『孝経』諸本における、t 韻尾の転写における「ツ表記」と「チ表記」の度合いを処理すると、以下の表 5-14 のとおりとなる。

表 5-14 t 韻尾の仮名表記

	仁治	建長	永仁	三千	正安	元亨	元徳	群書	御注
ツ表記	28	23	3	23	63	14	8	2	5
チ表記	0	0	0	1	2	1	0	0	0
チ・ツ並記	0	0	0	0	0	0	0	0	0
零表記	0	1	0	0	2	0	0	0	0

関東系統鈔本である、仁治・建長・永仁本の場合は、「チ表記」は一例も認められず、t 韻尾の表記に関しては完全に「ツ表記」へと安定している。但し、建長本には「節^セ (152)」のように零表記と見られる箇所が一字存する。

京都系統鈔本の中でも「チ表記」はごく僅かであるが、残存の事例と思しきものとしては、三千院本「孽^{ケツ・ケチ} (225A)」、正安本「日^{シチ} (106A)」「孽^{ケチ} (292A)」、元亨本「孽^{ケチ} (288A)」であり、チ

¹²⁶⁾ 滌(416A)「テキ」という加点があるが、抹消されているため除外した。

表記は「孽」を除き、ほぼ見られないようである（ただし、元徳本は「孽^{ケツ}(299A)」）。

関東系統鈔本である、「孽」の付音は仁治本「ケツ(315A)」、建長本「ケツ(351A)」、永仁本「ケツ(24A5A)」であり、関東系統鈔本の成立の過程では、正文の字体を改め、さらに訓点を改める過程に於いて、いわゆる旧要素と見られる「チ表記」も捨象の対象になったと思われる。その他に、正安本には零表記の付音が2例あり、「没^{ホシヌルトキ}(185A)」「達^{タスルマデニ}(232A)」のようにサ行変格活用のみに現れるが、他にも「没^{ホツヌルトキニ}(236A)」「達^{タツス}(247A・323A)」のように同じ被注字に対しては、ツ表記を施している箇所も存する。

5.2.10 呉音・百姓読みの混入

以下は漢音の体系から牴牾があると判断される、呉音の混入や音符・字形の類推による百姓読み、もしくは慣用音（但し、仮名音注の一部のみを加点している部分を除く）であると判断される例である。以下は、その用例であり、後筆によって仮名音注が多く補われた仁治本と、多数の底本を用いた三千院本に最も多く施されている。以下は、呉音、百姓読みの例であり、所在番号の右には漢音形を挙げておく。

【呉音】

- ・仁治本（6例）患^{クエン}（230A・519A/クワン）、祭^{サイ}（333A/セイ）、斬^{ケン}（411A/サム）、諍^{シヤウ}（551・566A/サウ）
- ・建長本 用例無し
- ・永仁本 用例無し
- ・三千院本（7例）令^{リヤウ}（120/レイ）、宗^{シフ}（141/ソウ）、祭^{サイ}（141¹²⁷/セイ）、用^{ユウ}（167/ヨウ）、患^{クエン}（171/クワン）、物^{モノ}（186/ブツ）、斬^{ケン}（408/サム）
- ・正安本（2例）苦^ク（330/コ）、諍^{シヤウ}（491/サウ）
- ・元亨本（2例）幼^{キウ}（102¹²⁸/イウ）、争^{シヤウ}（373/サウ）、
- ・元徳本（1例）挙^{キョ}（576/キヨ）
- ・群書治要 用例無し
- ・清家御注本（1例）教^{ケウ}（5¹²⁹/カウ）

【慣用音・百姓読み】

- ・仁治本（6例）日^{ヤツ}（18/エツ）、甫^ホ（184A/フ）、祀^{レイ}（209A/シ）、原^{クケン}（216/クエン）、病^{キウ}（410/ヘイ）、兵^{キウ}（420/ヘイ）
- ・建長本（1例）日^{ヤツ}（56A/エツ）
- ・永仁本（1例）餉^{ケイ}（35B06A/キヤウ）
- ・三千院本（12例）日^{キヤツ}（41A/エツ）、顕^{シン}（90/ケン）、億^{イク}（109¹³⁰/ヨク）、壘^{チヨウ}（165/リヨウ）、祭^{サン}

¹²⁷ 「サイ」は字に近接して書き入れられており、「セイ」も施されている。

¹²⁸ 呉音形は「エウ」であるが、「エウ・ヨウ・ヤウ」の音韻統合を反映した表記であると判断される。

¹²⁹ 左側に「ケウ」と合点あり。

¹³⁰ 「イク」の他に「ヨク」も施されている。

- (236/セイ)、^{リヨク}禄 (260/ロク)、^{スイ}衰 (284¹³¹/サイ)、^{キヨウ}綬 (313/キフ)、^{ケツ}擊 (425A・427¹³²/ハク)、^{ヨウ}牖 (427/イウ)、^シ戸 (428/コ)
- ・正安本 (5例) ^{キヤツ}曰 (51A/エツ)、^{レイ}命 (374¹³³/メイ)、^シ戸 (429/コ)、^{セン}先 (448/セン)、^{ホク}役 (476/エキ)
 - ・元亨本 (2例) ^{キヤツ}曰 (48A/エツ)、^{レイ}厲 (472/レイ)
 - ・元徳本 (5例) ^{キヤツ}曰 (47/エツ)、^{ツキツ}聿 (122A/キツ)、^{ツキツ}失 (167A/シツ)、^{ケイ}刈¹³⁴ (219A/カイ)、^{レイ}厲 (472A/レイ)
 - ・群書治要 用例無し
 - ・清家御注本 (1例) ^{ユツ}聿 (43A¹³⁵/キツ)

上の例のように、全体的の仮名音注の中に比しては、呉音例・の混入は極めて少ないと判断される。第3章の論語の鈔本にも見られる、「曰：キヤツ>ヤツ」の仮名音注は6種の諸本に亘って共通的に現れることから、「エツ>エツ」は反切注に基づく仮名音注と考えられる。三千院本には字体の類似による百姓読みが見られ、「^{チヨウ}龔」は「龍」を字画の一部として持つ「^{サツ}龔」、^{サツ}祭は「^{サツ}察」、^シ戸は「^シ尸」との字体の類似により、導き出された仮名音注であろう。

三千院本には、m・n韻尾、「㊦ヨウ」と「㊧ウ」の混同例が少なく、古い体系の表記が温存されているにも関わらず、漢音の体系からずれる字音が多く含まれてる。三千院本は書写・加点の場が天台宗の寺院であり、僧侶が関わったことと、複数の底本の利用により誤読の事例が増える原因になったと判断される。

仁治本の場合は、複数の人物により重層的に加点が行われることにより、非規範的と言える字音が紛れ込むようになったのであろう。

5.3 声点

声点について取り上げる前に、各本において2種類の声点を加点している資料があるため、簡単に挙げておく。第3章で扱った、『論語』諸本とは異なり、『古文孝経』には、墨圈点以外の声点が存し、それについて挙げておきたい。永仁・元亨・元徳本は朱・墨の圈点の区別があり、「朱点」「墨点」に区別して挙げる。また、三千院本は4種類の声点があることが報告されており¹³⁶、正安本は3種類の声点があるように見受けられる。

下の図 5-1・5-2 (模写例) のように、三千院本の声点の場合は、便宜上各々を「円点」、

¹³¹ 「衰」が用いられた語は「斬衰(喪服の一種)」であり、「纒(清母・灰韻)」の通用字である。

¹³² 「擊」425行には「ケツ・ヘキ・ハク左」、427行には「ケツ・ヘキ左」が施されている。

¹³³ 「メイ」の右側に「レイ」の傍書あり。欄上に「令(レイ)」とあり。元徳本・元亨本は「令」に作る。

¹³⁴ 「ケイ」の「ケ」の右に「カ」の傍書が存する。

¹³⁵ 「ユツ合点」の他に「キツ」の加点あり。

¹³⁶ 佐々木(2006)によると、三千院本の声点の種類が「①第一次朱点一大ぶりで濃い朱点、②第一次墨点一濃い墨点、③第二次朱点一小ぶりで薄い朱点、④第二次墨点一薄い墨点」の四筆であるとされる。

「圏点（但し、濃淡の差あり）」、「星点」に区別し、正安本の声点やや大きく字画が太い圏点を「墨点1」、やや小さく整った細い圏点を「墨点2」、朱圏点を朱点として示す。

高地民

洙河行

図 5-1 三千院本の声点の種類
(朱円点・墨圏点・朱星点)

図 5-2 正安本の声点の種類
(墨1・墨2・朱)

本研究で扱う、9種の鈔本における声点の加点に『古文孝経』7種及び他鈔本2種における声点加点状況については、資料編の広韻対照表を参照されたい。

5.3.1 軽声点の加点

漢音資料の加点の時代を判断する材料としては、六声体系の保持の有無であろう。本来、漢音資料の中でも、平声と入声に各々軽重を分けて加点されたが、院政期以降から軽重の区別が難しくなり、平声・入声の軽重の区別も漸次消滅する。ところが、完本として現存最古の『孝経』訓点本は猿投神社蔵建久六年（1195）鈔本であり、鎌倉期以前に遡る資料が存しない。そのため、移点・講読などによって、軽声が継承されることはあったとしても、先行研究に則って考えると、各種の資料に加点が行われた時期には、既にその区別はほぼ失われたと判断される。

本節では、各鈔本における軽声点の加点が、どれほどの比率で残っているかを調べる。以下の表 5-15 は各鈔本における平声・入声の重点・軽点加点の状況を数（異なり数（延べ数））で示したものである

表 5-15 各鈔本における軽点の加点

声点 諸本	細分類	平声(全清・次清)		入声(全清・次清・次清)	
		平重点	平軽点	入重点	入軽点
仁治本	—	85(116)	29(38)	29(30)	14(15)
建長本	—	110(147)	14(21)	40(45)	4(4)
永仁本	墨	56(70)	5(8)	15(16)	7(7)
	朱	79(172)	0(0)	41(52)	0(0)
三千院本	円	19(19)	16(18)	5(5)	13(13)
	墨	63(81)	58(85)	40(49)	36(51)
	星	0(0)	0(0)	3(3)	1(1)
正安本	墨1	35(38)	4(4)	15(15)	8(10)
	墨2	16(17)	16(19)	17(17)	5(5)
	朱	8(9)	5(5)	0(0)	1(1)
元亨本	朱	33(38)	1(1)	24(28)	1(1)
	墨	1(1)	0(0)	1(1)	0(0)
元徳本	墨	98(218)	17(24)	61(92)	13(16)
	朱	1(2)	0(0)	0(0)	0(0)
群書治要	—	3(3)	4(4)	2(2)	0(0)
清家御注本	—	4(4)	2(2)	2(2)	1(1)

軽点の理論的な加点は、平声の場合、全清・次清字、入声の場合全清・次清・次濁字がその被注字となる。これに則って判断すると、比較的六声体系を残存させているのは、三千院本の円点・圏点、正安本の墨点2である。それに反して、永仁本朱点は四声体系であり、墨点も軽声点は極めて少ない。

本研究で扱う最も古い鈔本は関東系統鈔本の仁治本であるが、1/3ほどに軽点が施されており、半数以上が重点となっている。建長本は仁治本を底本としながらも、伝授識語から南北朝期までの加筆があったことを念頭に入れると、軽点の少なさは後代の加筆をも含むものであることから、全体の加点率は低くなっているものと見られる。

永仁本の場合は、墨点は軽点が残存するものの軽点の加点率は低く、朱声点は軽点加点が見られない。関東系統鈔本の仁治本・建長本は声点加点に、墨圏点のみを利用していることから、永仁本の朱点は、初期段階に墨圏点を加点した後に、四声体系が安着している時代の異本を用いた後筆であると考えるのが自然であると判断される。

京都系統鈔本の場合、仁治本より約30年ほど後に書写・加点された三千院本の加点の様相を見ると、円点・墨点の軽声点の加点率は仁治本より高いことから、軽点加点の側面からは最も軽点加点の伝統が保たれていると考えられる。それより20年ほど後に書写された正安本の場合も、墨2の場合は依然として軽点の比率を保っていると思われる。本研究で扱う7種の古文孝経のうち、鎌倉中期までの時点においては、京都系統鈔本がより軽点を保っていたと見られる。鎌倉後期鈔本の元亨本は軽点加点が極めて稀であり、元徳本も加点の比率は全体の1割程で低くなっており、六声体系がほぼ消滅する時期の加点を反映していると思われる。

他系統の『孝経』鈔本の『群書治要』の孝経部分は、先述の『論語』部分と『古文尚書』部分より声点加点が少ないため、詳しい判断は困難であるが、軽点が約1/3ほど保たれている資料であり¹³⁷⁾、六声体系を保つ。これは、清原教隆が共通的に加点に関わった、仁治本の加点とほぼ同様の比率である。

清家御注本は加点の数は極めて少ないが、入声軽・平声軽の事例が両方とも見られることから、六声体系であるが、他の鎌倉後期資料から勘案すると四声に近い体系であったと判断される。

5.3.2 上声全濁字の去声化

漢音資料には漢音の母胎音である長安音を反映したと考えられる、上声全濁字の去声化の問題がある。これは、漢音の母胎音である長安音からもたらされたものであるが、漢籍における加点の度合いを見ると、去声化を反映した去声点を施すか、もしくは韻書に則って、上声点を施すかという意識は、訓点の種類により甚だ異なるように見受けられる。表

¹³⁷⁾ 佐々木(2009:584)の『群書治要』経部の声点の広韻対応表に基づいて、本表5-15の基準に合わせると、平声点226(361)/平軽点112(195)、入声点143(224)/入軽点88(139)となり、『群書治要』の軽点の占める比率は約36%となる。

5-16 は上声全濁字の声点加点が、『孝経』の各本において、どのように現れるかをまとめたものである。

表 5-16 上声全濁字の加点様相

諸本	声点 細分類	上声点	去声点	その他
仁治本	—	22(31)	10(14)	0(0)
建長本	—	18(27)	12(15)	0(0)
永仁本	墨	19(26)	5(6)	0(0)
	朱	3(3)	18(31)	0(0)
三千院本	円	1(1)	9(9)	1(1)
	圈	10(14)	24(43)	1(1)
	星	0(0)	0(0)	0(0)
正安本	墨 1	2(3)	9(11)	2(2)
	墨 2	0(0)	6(11)	0(0)
	朱	0(0)	0(0)	1(1)
元亨本	朱	1(1)	10(12)	0(0)
	墨	0(0)	2(2)	0(0)
元徳本	墨	2(2)	28(67)	0(0)
	朱	0(0)	0(0)	0(0)
群書治要	—	1(1)	1(1)	0(0)
清家御注本	—	0(0)	4(4)	0(0)

建長本はその奥書から、仁治本を底本としていることが知られ、なおかつ、実際に仁治本・建長本の間に通ずる加点字が多く、上声全濁字における上声点の被注字は 23 字、去声点の被注字 11 字が一致する。仁治本には、仮名音注のごとく声点の後筆が存するという懸念も交じるが、仁治本に比べ、比較的後筆が少ないと判断される建長本と比較しても、両者における上声全濁字の去声化の比率は、上声点の被注字が数的に過半数を占めているものの、去声が施されている字も、少なからず並存するという共通性がある。

その反面、京都系統の鈔本に関しては、上声全濁字の去声化が著しいという特徴が認められる。ただし、永仁本は墨点と朱点とでその傾向を異にしており、墨点は関東系統の点本に拠った（仁治本と上声点加点では 22 字が一致し、去声点の 1 字が一致する）可能性が高い。一方、朱点は関東系統とは異なる系統の訓点であると判断されるが、三千院本の圈点・元亨本朱点と比べても、共通箇所は各々 8 字、6 字であり、共通する被注字は半分にも満たない。また、永仁本の朱点は、四声体系の加点であり、この状況から軽声が完全に消滅した時期の加点された資料に依拠したと考えられるが、関東系統の鈔本ではない、別家の点を以て施している可能性が存する。

表 5-16 のうち、去声点以外の声点が施されている字の具体的な内訳は以下の表 5-17 の通りである。

表 5-17 上声全濁字における去声点以外の加点

連番	鈔本	所在	字	声・韻	声点	反切・同音注	熟語
1	仁治	5	氏	常・紙	上	—	孔氏 ^(上)
2	仁治	57	坐	従・果	上	—	侍 ^(去) 坐 ^(上)
3	仁治	58A	象	邪・養	上	—	—

4	仁治	91A	咎	群·有	上	—	咎 _(上) 悔 _(去)
5	仁治	108A	負	並·有	上	—	負 _(上) 累 _(上)
6	仁治	114A	序	邪·語	上	—	—
7	仁治	125	兆	澄·小	上	直表反	兆 _(上) 民
8	仁治	127A	夏	匣·馬	上	—	—
9	仁治	129A	象	邪·養	上	—	法象 _(上)
10	仁治	131A	士	崇·止	上	—	—
11	仁治	144	社	常·馬	上	—	社 _(上) 稷 _(入輕)
12	仁治	157A	下	匣·馬	上	—	偏 _(入) 下 _(上)
13	仁治	197A	序	邪·語	上	—	—
14	仁治	198A	婦	奉·有	上	—	子婦 _(上)
15	仁治	207	祀	邪·止	上	—	祭 _(去) 祀 _(上)
16	仁治	229A	揆	群·旨	上	—	一揆 _(上)
17	仁治	247A	婦	奉·有	上	—	子婦 _(上)
18	仁治	312A	是	常·紙	上	—	如 _(平濁) 是 _(上)
19	仁治	314	禍	匣·果	上	—	禍 _(上) 乱
20	仁治	317A	咎	群·有	上	—	咎 _(上) 徵 _(平)
21	仁治	334	祀	邪·止	上	音似	郊 _(平) 祀 _(上)
22	仁治	345A	奉	奉·腫	上	—	—
23	仁治	375	善	常·獮	上	—	—
24	仁治	388A	動	定·董	上	—	動 _(上) 静 _(去)
25	仁治	444A	禍	匣·果	上	—	禍 _(上) 乱
26	仁治	487A	像	邪·養	上	—	—
27	仁治	487A	象	邪·養	上	—	—
28	仁治	559A	否	並·旨	上	—	可 _(上) 否 _(上)
29	仁治	560A	是	常·紙	上	—	—
30	仁治	562A	輔	奉·麋	上	—	左輔 _(上)
31	仁治	593A	父	奉·麋	上濁	—	不父 _(上濁)
32	仁治	600A	否	並·旨	上	—	—
33	建長	19	坐	從·果	上	—	侍 _(去) 坐 _(上)
34	建長	81	動	定·董	上	—	吟 _(平濁) 動 _(上)
35	建長	95	坐	從·果	上	—	侍 _(去) 坐 _(上)
36	建長	96A	象	邪·養	上	—	—
37	建長	129A	咎	群·有	上	—	咎 _(上) 悔 _(去)
38	建長	146A	負	奉·有	上	—	負 _(上) 累 _(上)
39	建長	152A	序	邪·語	上	—	—
40	建長	164	兆	澄·小	上	直表反	兆 _(上) 民
41	建長	165A	夏	匣·馬	上	—	—
42	建長	167A	象	邪·養	上	—	法象 _(上)
43	建長	182	社	常·馬	上	—	社 _(上) 稷 _(入)
44	建長	195A	下	匣·馬	上	—	偏 _(入) 下 _(上)
45	建長	235A	序	邪·語	上	—	—
46	建長	236A	婦	奉·有	上	—	子婦 _(上)
47	建長	245	祀	邪·止	上	—	祭 _(去) 祀 _(上)
48	建長	267A	揆	群·旨	上	—	一揆 _(上)
49	建長	284A	婦	奉·有	上	—	子婦 _(上)
50	建長	348A	是	常·紙	上	—	如 _(平濁) 是 _(上)
51	建長	350	禍	匣·果	上	—	禍 _(上) 乱
52	建長	353A	咎	群·有	上	—	咎 _(上) 徵 _(平)
53	建長	370	祀	邪·止	上	音似	郊 _(平輕) 祀 _(上)
54	建長	381A	奉	奉·腫	上	—	—
55	建長	411	善	常·獮	上	—	—
56	建長	424A	動	定·董	上	—	動 _(上) 静 _(去)
57	建長	479A	禍	匣·果	上	—	禍 _(上) 乱
58	建長	522A	像	邪·養	上	—	—
59	建長	522A	象	邪·養	上	—	—
60	建長	593A	否	並·旨	上	—	可 _(上) 否 _(上)
61	永仁	2A5	坐	從·果	上墨	—	侍 _(去) 坐 _(上)
62	永仁	3B6	氏	常·紙	上墨	—	孔氏 _(上墨)
63	永仁	4B6	氏	常·紙	上墨	—	叔 _(入輕) 孫 _(平輕) 氏 _(上墨)
64	永仁	6A6	動	定·董	上墨	—	吟 _(平輕) 動 _(上墨)
65	永仁	7A5	坐	從·果	上墨	—	侍 _(去墨) 坐 _(上墨)

66	永仁	7A6A	象	邪・養	上墨	—	—
67	永仁	9B1A	咎	群・有	上墨	—	咎 _(上墨) 悔 _(去墨)
68	永仁	10B2A	負	奉・有	上墨	—	負 _(上墨) 累 _(上墨)
69	永仁	11A2A	序	邪・語	上墨	—	—
70	永仁	11B5	兆	澄・小	上墨	直表反	兆 _(上墨) 民
71	永仁	11B6A	夏	匣・馬	上墨	—	—
72	永仁	12A1A	象	邪・養	上墨	—	法 _(入朱) 象 _(上墨)
73	永仁	12A3A	士	崇・止	上墨	—	—
74	永仁	13A1	社	常・馬	上墨	—	社 _(上墨) 稷 _(入軽墨)
75	永仁	16B2A	序	邪・語	上朱	—	—
76	永仁	16B4A	婦	奉・有	上墨	—	子婦 _(上墨)
77	永仁	17A5	祀	邪・止	上墨	—	祭 _(去墨) 祀 _(上墨)
78	永仁	18B3A	揆	群・旨	上墨	—	一揆 _(上墨)
79	永仁	24A2A	是	常・紙	上墨	—	如 _(平濁墨) 是 _(上墨)
80	永仁	24A4	禍	匣・果	上墨・去朱	—	禍 _(上墨) 乱 _(去朱)
81	永仁	24A7A	咎	群・有	上墨	—	咎 _(上墨) 微 _(平墨)
82	永仁	28A4	善	常・彌	上墨	—	—
83	永仁	29A2A	動	定・董	上墨	—	動 _(上墨) 静 _(去墨)
84	永仁	32B5A	禍	匣・果	上墨	—	禍 _(上墨) 乱
85	永仁	35B3A	像	邪・養	上墨	—	—
86	永仁	35B3A	象	邪・養	上墨	—	—
87	永仁	40A5A	否	並・旨	上朱	—	可 _(上朱) 否 _(上朱)
88	永仁	40B2A	輔	奉・慶	上墨	—	左輔 _(去墨)
89	永仁	42B5A	下	下・馬	上朱	—	下 _(上朱) 位 _(去朱)
90	永仁	43A1A	否	並・旨	上墨	—	—
91	三千	32	氏	常・紙	上墨	—	孔氏 _(上墨)
92	三千	53	下	匣・馬	上墨	—	下 _(上墨) 邑
93	三千	63	父	奉・慶	上墨	—	君父 _(上墨)
94	三千	101A	士	崇・止	上墨	—	—
95	三千	132A	士	崇・止	上墨	—	—
96	三千	141A	祀	邪・止	平墨	—	祭祀 _(平墨)
97	三千	153A	婦	奉・有	上墨	—	子婦 _(上墨)
98	三千	159	士	崇・止	上墨	—	—
99	三千	171A	揆	群・旨	上墨・去円	—	一揆 _(上墨) 去 _(去円)
100	三千	182A	婦	奉・有	上墨	—	子婦 _(上墨)
101	三千	262	善	常・彌	上墨	—	—
102	三千	270A	動	定・董	上墨	—	動 _(上墨) 静
103	三千	304A	禍	匣・果	上墨	—	禍 _(上墨) 乱
104	三千	331	悌	定・齊	上墨・去墨	徒礼反一音待亦反	愷悌 _(上墨) 去 _(去墨)
105	三千	371A	否	並・旨	平円・上墨	—	可 _(上円) 否 _(平円) 上 _(上墨)
106	三千	374A	輔	奉・慶	上墨	—	左輔 _(上墨)
107	三千	382A	士	崇・止	上墨	—	—
108	三千	396A	否	並・旨	上円	—	—
109	正安	309	祀	邪・止	上墨1	—	宗祀 _(上墨1)
110	正安	326	父	奉・慶	平軽墨1	—	父 _(平軽墨1) 子
111	正安	357A	動	定・董	平墨1	—	動 _(平墨1) 静
112	正安	430	悌	定・齊	上朱・去墨1	徒礼反一音待亦反	愷悌 _(上朱) 去 _(去墨1)
113	正安	486A	否	並・旨	上墨1・平朱	—	可否 _(上墨1) 平朱
114	正安	518A	否	並・旨	上墨1	—	—
115	元亨	481A	否	並・旨	上朱	—	可否 _(上朱)
116	元徳	200A	序	邪・語	上墨	—	—
117	元徳	507A	否	並・旨	上墨	—	可否 _(上墨)
118	群書	127A	臙	並・軫	上	—	—

これらの字に上声点が加点了理由を探るため、まずは中低型の回避の側面から分析していきたいと思う。上表において、音合符などによって熟語として読んでいる字（異なり 19 字・延べ 81 字）を対象に、去声点を加点了場合を仮定し、各本の声点と見比べることに

より、中低型が現れる熟語を見ていきたいと思う。

(○は低調、●は高調、◐は下降調、◑は上声調を示す、各本の声点のうち、熟語の一部加
点がない場合は、漢音声調の理論的な加点に従う)。

【熟語】	【去声】	【各本の声点】(表 5-17 の連番)
「一揆」	イツ キ	イツ キ (16・48・78・99)
「愷悌」	カイ テイ	カイ テイ(104・112)
「下位」	カ キ	カ キ (89)
「下邑」	カ イフ	カ イフ (92)
「可否」	カ ヒ	カ ヒ (28・60・87・105・113・115・117)
「禍乱」	クワ ラン	クワ ラン (19・25・51・57・80・84・103)
「咎悔」	キウ クワイ	キウ クワイ (4・37・67)
「咎徴」	キウ チョウウ	キウ チョウウ (20・52・81)
「吟動」	ギム トウ	ギム トウ (34・64)
「君父」	クン フ	クン フ (93)
「孔氏」	コウ シ	コウ シ (1・62)
「郊祀」	カウ シ	カウ シ (21・53)
「左輔」	サ ホ	サ ホ (30・88・106)
「祭祀」	セイ シ	セイ シ (15・47・77・96)
「子婦」	シ フ	シ フ (14・17・46・49・76・97・100)
「侍坐」	シ サ	シ サ (2・33・35・61・65)
「社稷」	シヤ ショク	シヤ ショク (11・43)/シヤ ショク (74)
「崇祀」	ソウ シ	ソウ シ (109)
「叔孫氏」	シク ソン シ	シク ソン シ (63)
「兆民」	テウ ミン	テウ ミン (7・40・70)
「動靜」	トウ セイ	トウ セイ (24・56・83・102・111)
「如是」	ジョ シ	ジョ シ (18・50・79)
「偪下」	ヒョク カ	ヒョク カ (12・44)
「父子」	フ シ	フ シ (110)
「不父」	フ フ	フ フ (31)
「負累」	フ ルイ	フ ルイ (5・38・68)
「法象」	ハフ シヤウ	ハフ シヤウ (9・42・72)

去声点の代わりに上声点を加点した場合、中低型の回避が可能な熟語は「一揆」「愷悌」「可否」「孔氏」「左輔」「祭祀」「子婦」「侍坐」「不父」の9例のみであり、「下位」「禍乱」「咎悔」「君父」「郊祀」「動靜」6語は上声点を加点したとしても、アクセント上の窪地が

出来る条件を改めることができない。ただし、上声点を加点することにより、むしろ中低型が形成するケースは見られない。関東系統鈔本における上声全濁字の去声化に行われた声点加点の改変の原因としては、すべて中低型の回避では説明できないが、一部の字に限っては、日本語アクセント上の制限を回避しようとする、試みがあったのではないかと推測する。

また、去声を回避する原因の一つとしては、1音節字における曲調が制限される現象を挙げることが出来る。去声点を回避し、上声もしくは平声点の加点が施される原因の1つとして、音節数の問題が関与したか否かについても検討することとする。各鈔本における上声全濁字の声点加点字を対象にして、声点の種類別に1音節字と2音節字とを分けて処理すると下の表5-18¹³⁸⁾のとおりになる。

一音節字を中心に見ていくと、京都系統鈔本の場合は、正安本の墨1点を除き、上声点よりは去声点の比率が高いが、仁治本・建長本・永仁本の墨点など関東系統鈔本の場合は、1音節字に上声点加点の事例が最も多く集中していることが分かる。

表5-17にでも挙げた118字の異なり字数は26字であり、上声点が多い関東系統鈔本の中で専ら上声点のみを加点している字は14字(揆・氏・象・咎・負・夏・士・婦・是・像・否・輔・父・坐)である。14字のうち、11字は1音節字に含まれるものであり、去声点を改変するに当たり、特に一部の字を中心に上声点加点が行われていたと考えられる。

また、上声全濁字の加点例を調べると、諸本間に差が存する箇所は、その多くが関東系統の上声点、京都系統の諸本には去声点が施されている(第5章の末尾の別表2を参照されたい)。この

ことから、関東系統の鈔本は古字が改められるほかに、声点の一部に関しても、去声点を上声点に改める作業が行われたと推定される。他系統の群書治要の孝経部分の場合は2例のみであるが、上声・去声が半分ずつであるが、『群書治要』経部全体の加点の数は上声点の方がより多い¹³⁹⁾。清家御注本の方はすべて去声点が加点されていることから京都系統の鈔本と類似している。

表5-18 上声全濁字の加点と音節数

鈔本	種類	声点	1音節	2音節
仁治	—	上声	15(16)	5(7)
		去声	3(4)	7(10)
建長	—	上声	11(15)	9(13)
		去声	3(3)	9(12)
永仁	墨	上声	13(16)	7(11)
		去声	1(1)	4(5)
	朱	上声	3(3)	0(0)
		去声	5(6)	9(16)
三千	円	上声	1(1)	0(0)
		去声	2(2)	1(1)
	墨	上声	8(11)	0(0)
		去声	9(14)	2(2)
正安	墨1	上声	2(3)	0(0)
		去声	2(3)	7(8)
	墨2	上声	0(0)	0(0)
		去声	1(3)	5(8)
元亨	朱	上声	1(1)	7(8)
		去声	3(4)	0(0)
	墨	上声	0(0)	0(0)
		去声	0(0)	2(2)
元徳	墨	上声	2(2)	0(0)
		去声	8(15)	20(52)
群書	—	上声	0(0)	1(1)
		去声	1(1)	0(0)
御注	—	上声	0(0)	0(0)
		去声	3(3)	1(1)

¹³⁸⁾ 加点の事例がない三千院本の星点、正安本の朱点、元徳本の朱点を除いた。

¹³⁹⁾ 佐々木(2009:983)

5.3.3 濁声点の加点

各本の濁声点には「〇」(濁 A) と「◦」(濁 B) の 2 種類があり、さらに、同種類の訓点であるにもかかわらず、両方の濁声点が存する場合も見受けられる。各本における濁声点の加点は次の通りに行われている。

仁治本 濁 A(99 字)	正安本/墨 1 濁 A(28 字) 濁 B(1 字)
建長本 濁 A(69 字)	正安本/墨 2 濁 A(42 字)
永仁本/墨 濁 A(54 字)	元亨本/墨 濁 A(1 字)
永仁本/朱 濁 A(25 字) 濁 B(12 字)	元亨本/朱 濁 A(9 字)
三千院本/円 ¹⁴⁰⁾ 濁 A(3 字) 濁 B(5 字)	元徳本/墨 濁 A(14 字) 濁 B(95 字)
三千院本/圈 濁 A(64 字) 濁 B(77 字)	群書治要 濁 A(6 字)
三千院本/星 濁 A(17 字)	清家御注本 用例無し

一鈔本の中でも、永仁本の朱点、三千院本の圈点、元徳本の墨点は 2 種類の濁声点が一定の比率で共存しているため、同種類の訓点の中にも、異なる系統¹⁴¹⁾の底本が用いられることによって、混在していることが予想される。更に、各本の各声点の声点は濁音の区別が厳密であるものと、濁音を区別していないものとが混じている。漢音においては、原則として次濁声母である明母(微母)・泥母(孃母)・疑母・日母(ただし、明・泥母の鼻音韻尾字は一部のみ)の四つの声母字が濁音となるが、濁音が期待される箇所を対象に濁声点がどれほど施されているかを示すと次の表 5-19 のとおりである。

表 5-19 各鈔本における濁声点加点の比率¹⁴²⁾

諸本	声点 細分類	単点	濁点	比率
仁治本	—	7	86	92.5%
建長本	—	14	60	81.1%
永仁本	墨	5	46	90.2%
	朱	13	35	72.9%
三千院本	円 ¹⁴³⁾	22	0	0%
	圈	13	122	90.4%
	星	0	20	100%
正安本	墨 1 ¹⁴⁴⁾	22	15	40.5%
	墨 2	2	49	96.1%
	朱	4	0	0%
元亨本	墨	17	8	32.0%
	朱	0	0	—

¹⁴⁰⁾ 三千院本の濁 A は朱円点に墨圈点の単点を加えたもののうち、漢音形で濁音となる明母・泥母・疑母・日母の字のみを対象とする(ただし、朱円点に墨の濁 A もしくは濁 B を加えたものは除く)、濁 B は朱円点に墨線を加えたものを指す。

¹⁴¹⁾ 小林(1967: 1284)は「明経道における清原家と中原家とが、濁音符を用いたのは無論であるが、清原家では全て「〇」、中原家では「◦」をも用いた状態を窺うことが出来る」と述べている。

¹⁴²⁾ 明母・泥母字でも声母の非鼻音化が進んでいないと判断される、以下の 9 字を除く。

【明母】慢マン・民ミン・明命名メイ・門モン、【泥母】難ナン・男ナム・能ノウ

¹⁴³⁾ 墨筆によって、濁声点が補われたと判断される箇所が 8 字あるが、それらを除いた数値である。

¹⁴⁴⁾ 墨 2 点によって、濁声点が補われたと判断される箇所が 4 字あるが、それらを除いた数値である。

元徳本	墨	30	107	78.1%
	朱	0	0	—
群書治要	—	0	2	100%
清家御注本	—	2	0	0%

表 5-19 の結果のごとく、関東系統の鈔本には濁声点の加点が高比率で施されているが、その反面、京都系統の鈔本には加点の種類が複数存し、三千院本の圈点、星点、正安本の墨 2、元徳本の墨点はかなり高い加点率を見せているが、三千院本の円点、正安本の墨 1、元亨本の墨点における濁声点の加点率は低い。

このうち、三千院本の円点、正安本の墨 1 は、各資料において比較的初期的な段階で施されたものであると判断される。異本校勘の過程を経て、三千院本は朱点の単点が施されていた箇所、更に墨筆が補われた結果、濁声点となった箇所が僅かにあり、正安本の場合も、墨 2 によって単点を追加し、同様の処置を施したと考えられる。

佐々木 (2006) は濁声点加点の頻度が学派・宗派により異なることを実証し、濁声点をよく加点する博士家・宗派として清原家・菅原家・真言宗を挙げ、濁声点をあまり加点しない博士家・宗派として藤原家・中原家・法相宗・天台宗を挙げている。正安本は中原家の別訓が施されており、墨 1 の濁声点の加点率が低い理由もなお中原家鈔本が利用されていたためであろう。正安本の他の資料においても同様、一つの資料の中に濁 B が加点されているほかに、濁声点の加点率が低い声点が施されている理由も、移点の際に中原家点に基づく底本が用いられたためであると考えられる。

最後に、漢音で濁音となる上掲 4 つの声母字以外に、全清・次清・全濁声母字において濁点が施される例が 7 種の資料ですべて認められる。以下はその例である。

- ・仁治本 (10 例) : 恕 (去濁 A)(86、書)、患 (平濁 A・去)(230、匣)、分 (去濁 A)(272・613、奉)、赫 (入濁 A)(278A、曉)、具 (去濁 A)(280・543、群)、別 (平濁 A)(335、並)、條 (平濁 A)(427、定)、父 (上濁 A)(593、奉)
- ・建長本 (7 例) 逮 (去濁 A)(23A、定)、恕 (去濁 A)(124A、書)、分 (去濁 A)(311・647、並)、赫 (入濁 A)(317A、曉)、具 (去濁 A)(319・577、群)
- ・永仁本/墨 (6 例) 分 (去濁 A)(21B02・43A04・43A06、奉)、赫 (入濁 A)(22A01A、曉)、具 (去濁 A)(22A02・39A05、群)
- ・永仁本/朱 (2 例) 恕 (去濁 A)(9A04、書)、卜 (入濁 B)(30B02、幫)
- ・三千院本/圈 (17 例) 子 (去濁 A)(5A、精)、弓 (平軽濁 A)(11A、見)、学 (入軽濁 A)(17A・25A、匣)、鈍 (去濁 B)(79・372、定)、恕 (上濁 B)(84、書)、辨 (去濁 B)(100、並)、兢 (平軽濁 A)(121、見)、当 (平濁 B)(161、端)、十 (平濁 A)(189、常)、罰 (入濁 A)(199・199)/罰 (入濁 B)(208・208、奉)、分 (去濁 A)(399・404、奉)
- ・正安本/墨 1 (4 例) 非 (平濁 A)(218、非)、暴 (去濁 A)(227・394、並)、赫 (入濁 A)(264A、曉)
- ・正安本/墨 2 (3 例) 恕 (去濁 A)(110、書)、別 (入濁 A)(308、並)、僕 (入軽濁 A)(476、並)

- ・元亨本/墨 (1例) 所^(上濁 1)(030A、生)
- ・元亨本/朱 (1例) 赫^(入濁 1)(264A、暁)
- ・元徳本 (2例) 恕^(去濁 A)(106、書)、順^(去濁 A)(127、船)
- ・群書治要／御注孝経 (0例)

上の例のように、「恕」「分」「赫」「具」などは、他本に跨いで見られることから、何らかの理由で濁声点が施され、それが伝承されたと思われる。しかし、三千院本から最も多くの例が見当たり、そのうち14例は三千院本の他には濁声点が施されていないか、もしくは声点字体が施されていない。三千院本の場合、最初の底本となっている「狼藉本」なる資料の性格は定かではないが、清原家鈔本で校点を行う前は、他博士家の点本を用いたか、もしくは書写の場である寺院において、慣れ親しんでいる加点を施していると思われる。大半は呉音形で濁音となる、「学」「疾」「辨」「十」「罰」「鈍」といった全濁字であり、また、「子(孔子)」「弓(仲弓)」といった連濁を反映させたものと考えられる箇所も含まれる。

5.3.4 非規範的な声点加点

『孝経』諸本における声点の中では、『広韻』で代表される切韻系韻書と照らし合わせてみても、その原点を見出すことができない加点が見られる。言い換えればこれらは中国の韻書における声調との違いがあることから、規範から外れる声点であるとも言える。本節では、このような声点を扱うとともに、更に多音字を加点するに当たり、各諸本から見られる加点の差という二つの側面に注目して述べていきたいと思う。以下の表5-20は、非規範的な声点が加点されている箇所をまとめたものである。

表5-20 非規範的な声点 (*は多音字、△は上声全濁字)

【平声字】56字											
番号	字	釈文音注	仁治 (15)	建長 (9)	永仁 (6)	三千 (15)	正安 (13)	元亨 (5)	元徳 (12)	群書 (0)	御注 (1)
1	先*	— 心・先		上 (6)					平軽 (5)		
2	侯	— 匣・侯		去 (7)							
3	騫	— 溪・仙		平 (14)	平朱 (1B7)	平墨 (11)	平軽 ₁ ・去 ₁ (13)	去朱 (12)			
4	長*	— 澄・陽					去墨 ₁ (28)				
5	愚	— 疑・虞				上濁墨 (50)					
6	歌	— 見・歌				上墨 (53)					
7	題*	— 定・齊									去 (27)
8	曾*	— 精・登			去 (7B2A)				平墨 (85A)		
9	和*	— 匣・戈	去 (71)	去 (109)		平墨 (76)	平墨 ₁ (99)		平墨 (93)		

10	基	一 見·之	平 (80A)	平 (118A)	平 墨 (8B5A)	上 墨 (81A)	平 墨 ₁ (106A)		平 (100A)		
11	全	一 從·仙		入 (127A)				平 墨 (106A)			
12	傷*	一 書·陽	平 (89A)	平 (127A)	平 墨 (9A6A)	平 輕 墨 (86A)	平 墨 ₁ (113A)		平 墨·去 墨 (108A)		
13	凶	一 曉·鍾							上 (110A)		
14	兼*	一 見·添	平 輕 (111A)	平 (149A)	平 朱 (10B6A)	平 輕 墨 (98A)			平 墨·去 墨 (127A)		
15	陳*	一 澄·真	平 (124A)	平 (162A)	平 墨 (11B4A)	平 墨·去 墨 (107A)	去 墨 ₁ (140A)				
16	亡	一 微·陽	平 濁 (153A)	平 濁 (191A)	平 濁 墨 (13B2A)	平 濁·平 輕 墨·上 濁 墨 (124A)			平 濁 墨 (163A)		
17	詳*	一 邪·陽	去 (172A)								
18	禁*	一 見·侵	平 (197A)		平 墨 (16B3A)	去 冂 (152A)			去 墨 (201A)		
19	兄	一 曉·庚				上 墨 (166A)					
20	陳*	一 澄·真	平 (227A)		平 墨 (18B2A)	平 墨·去 墨 (169A)		平 朱 (226A)			
21	和*	一 匣·戈							去 墨 (261)		
22	妻*	一 清·齊	平 (306)	平 (343)	平 墨 (23B4)			去 朱 (281)			
23	供*	一 見·鍾	平 (309A)	平 (346A)	平 墨·去 朱 (23B7A)	去 冂·平 墨 (221A)	去 朱 (287A)	去 朱 (284A)	去 墨 (294A)		
24	夫*	一 奉·虞	平 (311A)	平 (348A)	平 墨 (24A2A)	平 濁·平 輕 墨 (223A)	去 朱 (289A)		上 墨 (296A)		
25	齋	一 莊·皆		平 (349A)	平 朱 (24A3A)	平 墨 (223A)		平 朱 (286A)	去 墨 (297A)		
26	蔽	一 疑·蔽	上 濁 (332A)			平 濁 墨 (236A)	平 (305A)	平 朱 (302A)	平 墨 (313A)		
27	天	一 透·先						去 墨 (301)			
28	人	一 日·真	入 濁 (369)								
29	人	一 日·真	入 濁 (371)								
30	皆	一 見·皆				入 輕 冂 (262)					
31	宜	一 疑·支			平 濁 朱 (29A1A)		去 濁 墨 2 (350A)		平 濁 墨 (360A)		
32	闕*	一 微·文			平 朱 (29B6A)	去 冂 (277A)	平 濁 墨 2 (360A)		平 墨 (370A)		
33	縝	一 清·灰	平 (411A)	平 (446A)	上 墨 (30B2A)			平 朱 (364A)			
34	和*	一 匣·戈	平 (417A)	平 (452A)	平 朱 (31A1A)	平 墨 (288A)	去 墨 ₂ (374A)		平 墨 (385A)		
35	争	一 莊·耕	平 輕 (422A)	平 (457A)	平 朱 (31A6A)	去 冂·平 墨 (292A)	平 墨 ₁ (378A)	平 朱·去 墨 (373A)	平 墨 (389A)		
36	羊	一 羊·陽	平 (423A)	平 (458A)	平 朱 (31A6A)	平 墨 (292A)	上 墨 ₂ (378A)		平 墨 (390A)		
37	要*	一 係反 影·笑	去 (432)	去 (467)	去 朱 (32A1)	平 冂·去 墨 (385)	平 朱 (385)		去 墨 (398)	平 (127)	

						(297)					
38	要*	一係反影・笑	去 (433A)	平・去 (468A)	去 朱 (32A2A)	平輕 墨 (299A)	平 墨 ₁ (387A)	平 朱 (382A)	去 墨 (399A)		
39	要*	一係反影・笑			去 朱 (32A3A)				去 墨 (399A)		
40	歛	一 曉・桓					去 墨 ₁ (407A)				
41	群	一 群・文		上 (503A)	平 墨 (34A6A)		平 墨 ₂ (413A)				
42	更*	音庚見・庚			平 墨 (35A7A)	平輕 円 (328A)	上 墨 (426A)				
43	言	一 疑・元	上濁 (534A)			平濁 墨 (356A)					
44	人	一 日・真	入濁 (548A)			平濁 墨 (365A)					
45	嚴	一 疑・嚴	上濁 (548A)		平濁 朱 (39B3A)				平濁 墨 (497A)		
46	嚴	一 疑・嚴	上濁 (549A)								
47	和*	一 匣・戈	去 (559A)						平 墨 (507A)		
48	捐	一 羊・仙				上 墨 (390A)	上 朱 (509A)				
49	宜	一 疑・支	上濁 (600A)								
50	言	一 疑・元	上濁 (604A)								
51	称*	一 昌・蒸				去 墨 (394A)	去 墨 ₁ (516A)				
52	邪*	一 邪・麻	平 (603A)	平 (637A)	平 朱 (43A3A)	平 墨 (398A)	去 墨 ₂ (520A)		平 墨 (544A)		
53	喪*	一 心・唐	平・去 合 (619)								
54	衰*	一 清・脂		上 (654A)		平 墨 (410A)					
55	曹	一 從・豪		去 (661A)							
56	嚴	一 疑・嚴							去 墨 (587A)		

【上声字】45字

番号	字	积文音注	仁治 (5)	建長 (3)	永仁 (11)	三干 (15)	正安 (10)	元亨 (1)	元徳 (22)	群書 (1)	御注 (0)
57	子	一 精・止				去濁 墨 (5)					
58	魯	一 来・姥			上 墨 (2B6)	去 墨 (9)					
59	冉*	一 日・琰		上濁 (14)	上濁 朱 (1B7)	去 墨 (11)		上濁 朱 (12)	上濁 墨 (12)		
60	俳	一 敷・尾		上 (16)	上 朱 (2A2)	上 円 (12)		上 朱 (14)	去 墨 (14)		
61	子	一 精・止				去 墨 (26)					
62	死	一 心・旨	上 (28)	上 (66)	上 墨 (5A6)	上 墨・去 墨 (49)			去 墨 (56)		
63	品	一 滂・寢	上 (58A)		上 墨 (7A6A)	去 墨 (69A)			上 墨 (82A)		
64	仮*	一 見・馬	上 (58A)	上 (96A)	上 朱 (7A6A)	上 墨 (69A)	去 墨 ₁ (89A)		去 墨 (82A)		
65	仮*	一 見・馬							去 墨 (83A)		
66	右*	一 于・有	去 (62A)		去 墨 (7B3A)				上 墨 (85A)		

67	体	一 透・薺				上 墨 (92A)	上 墨 ₂ (120A)		去 墨 (116A)		
68	老	一 来・皓							去 墨 (118A)		
69	友	一 于・有	上 (101A)	上 (139A)	上 墨 (10A4A)	去 墨 (93A)			去 墨 (118A)		
70	耳	一 日・止	上濁 (121A)	上濁 (159A)	上濁 墨 (11B1A)	去濁 墨 (105A)			去濁 墨 (135A)		
71	美	一 明・旨				去濁 墨 (111A)			去濁 墨 (144A)		
72	恐	丘勇反 溪・腫								平輕 (31A)	
73	祀	一 邪・止				平 墨 (141A)	去 墨 ₂ (185A)				
74	取*	一 清・麤	上 (189A)		去 朱 (16A2A)	上 卍 (146A)					
75	美	一 明・旨			去 墨 (16B5A)		上濁 墨 ₂ (201A)		去 墨 (204A)		
76	所	一 生・語	去 (211)	去 (248)	去 朱 (17B1)	上 墨 (161)	上 墨 ₁ ・去 墨 (209)		去 墨 (212)		
77	采* (菜)	一 清・海	上 (309A)	上 (345A)	上 墨 (23B7A)	去 卍 (221A)	去 朱 (287A)		去 墨 (294A)		
78	恥	一 徹・止		上 (365A)	上 墨 (25A4A)	上 墨 (234A)		上 朱 (300A)	去 墨 (311A)		
79	典	一 端・銃				上 墨 ₁ ・去 墨 (238A)					
80	祖	一 精・姥	上 (335A)	上 (371A)		上 墨 (238A)			去 墨 (316A)		
81	父 [△]	一 奉・麤					平輕 墨 ↓ (326)				
82	子	一 精・止					平 墨 ₁ (328A)				
83	可	一 溪・苟				去 墨 (268)					
84	矩	一 見・麤			上 墨 (29A3A)	去 卍 (271A)			上 墨 (361A)		
85	止	一 章・止				上 墨 (271A)	去 墨 ₁ (352A)				
86	動 [△]	一 定・董			去 朱 (29B3A)		平 墨 ₁ (357A)		去 墨 (367A)		
87	豕	一 書・紙	去 (423A)	去 (458A)	上 朱 (31A6A)	上 卍 (292A)	上 墨 ₂ (378A)	上 朱 (374A)			
88	死	一 心・旨			去 朱 (31B6A)				去 墨 (395A)		
89	礼	一 来・薺				上 墨 (314)	上 墨 ₂ (406A)	去 朱 (404)			
90	所	一 生・語					去 墨 ₁ (428A)				
91	愷	一 溪・海					去 墨 ₂ (431A)		上 墨 (448A)		
92	死	一 心・旨			去 朱 (37A2A)				去 墨 (464A)		
93	否 [△]	一 並・旨	上 (559A)	上 (593A)	上 朱 (40A5A)	平 卍・上 墨 (371A)	上 墨 ₁ ・平 朱 (486A)	上 朱 (481A)	上 墨 (507A)		
94	采* (菜)	一 清・海			去 朱 (41A6A)						
95	友	一 于・有	上 (576A)		去 朱 (41A7A)				去 墨 (521A)		
96	可	一	去	去		上 卍	上 朱				

		溪・智	(600A)	(634A)		(396A)	(518A)				
97	美	一 明・旨	入濁 (601)				上濁 _墨 1 (519)				
98	主	一 章・麋							去 _墨 (549A)		
99	美	一 明・旨			去 _朱 (44B6A)				去濁 _墨 (565A)		
100	踊	一 羊・腫		上 (666A)	上 _墨 ・去 _朱 (45A2A)	上 _墨 (416A)			去 _墨 (568A)		
101	挙	一 見・語			去 _朱 (45B4A)				去 _墨 (576)		
【去声字】69字											
番号	字	釈文音注	仁治 (11)	建長 (8)	永仁 (11)	三千 (35)	正安 (9)	元亨 (2)	元徳 (14)	群書 (2)	御注 (1)
102	誼	一 疑・寘		去濁 (8)	去濁 _墨 (1B1)	平濁 _墨 (6)			去濁 _墨 (7)		
103	乱	一 来・換				去 _墨 (7)			平 _墨 ・去 _墨 (8)		
104	二	一 日・至				上濁 _墨 (10)			上濁 _墨 (12)		
105	二	一 日・至				上濁 _墨 ・去 _墨 (23)					
106	字	一 従・志				上 _墨 (25)					
107	問	一 微・問	去濁 (2)	去濁 (40)	去濁 _墨 (3B3)	去 _墨 ・去濁 _墨 (30)			平 _墨 ・去濁 _墨 (34)		
108	数 ^ナ	一 生・遇	去 (6)	去 (43)	上 _朱 (3B7)				上 _墨 (38)		
109	誼	一 疑・寘		平濁・去濁 (51)		去濁 _墨 (38)			去濁 _墨 (43)		
110	固	一 見・暮	去 (25)	去 (62)	去 _朱 (5A3)	去 _墨 (46)			上 _墨 (53)		
111	化	一 曉・禡				上 _墨 (61)					
112	魏	一 疑・未									平 (22)
113	自	一 従・至	上 (68A)								
114	恕	一 書・御	去濁 (86A)	去濁 (124A)	去濁 _朱 (9A4A)	上濁 _墨 (84A)	去濁 _墨 2 (110A)		去 _墨 (106A)		
115	気 ^キ	一 溪・未	去 (88A)	去 (126A)	去 _墨 (9A6A)	上 _墨 (86A)			去 _墨 (107A)		
116	夜	一 羊・禡				上 _墨 (89A)					
117	誉 ^ヨ	一 羊・御	去 (95A)	去 (133A)	去 _墨 (9B5A)	去 _墨 ・上 _墨 (89A)		去 _朱 (110A)			
118	誼	一 疑・寘				上濁 _墨 (94A)	去濁 _墨 2 (123A)				
119	暮	一 明・暮		去濁 (150A)		上濁 _墨 (99A)			去濁 _墨 (127A)		
120	勞 ^ロ	一 来・号	去 (116A)	去 (154A)	去 _朱 (11A3A)	平 _墨 (101A)			去 _墨 (131A)		
121	地	一 定・至				上 _墨 (109A)					
122	富	一	去	去	去 _朱	平 _墨			去 _墨		

		非·宥	(141A)	(179A)	(12B5A)	(118)			(153A)		
123	貴	一 見·未	去 (141A)	去 (179A)	去朱 (12B5A)	上墨 (118)					
124	懼	一 群·遇								平 (31A)	
125	慎	一 常·震								平 (31A)	
126	義	一 疑·寘				上濁墨 (128A)					
127	仲	一 澄·送				平墨 (143A)					
128	仲	一 澄·送				平墨 (144A)					
129	廟	一 明·笑					平濁墨 2 (185A)				
130	義	一 疑·寘					上濁墨 1 (207A)	上濁朱 (203A)			
131	地	一 定·至				平墨 (165A)	去墨2 (215A)				
132	暮	一 明·暮			去濁朱 (18A1A)	去墨 (165A)	上墨1 (216A)		去濁墨 (219A)		
133	故	一 見·暮	去 (227A)		去墨 (18B2A)	去母 (169A)	上墨1 (223A)	去朱 (218A)			
134	患	一 匣·諫	平濁·去 (230A)	去 (268A)	去墨 (18B4A)	去墨 (171A)	去墨1 (225A)		去墨 (228A)		
135	化	一 曉·禡				上墨 (176A)					
136	誼	一 疑·寘	去濁 (239)	去濁 (277)	去濁朱 (19A7)	去濁墨 (177)	去墨1 (233)	去朱 (229)	平墨 (236)		
137	誼	一 疑·寘	平濁 (240A)		去濁墨 (19A7A)	去濁墨 (177A)	去墨1·去 墨2 (234A)	去朱 (230A)	去濁墨 (237A)		
138	誼	一 疑·寘	平濁 (245A)		去濁墨 (19B5A)		去濁墨 1 (238A)		去墨 (241A)		
139	御	一 疑·御	去濁 (258A)	去濁 (295A)		上墨 (189A)	去濁墨 1 (248A)				
140	化	一 曉·禡				上墨 (193A)					
141	讓	一 日·漾	去濁 (266)	去濁 (303)	去濁朱 (21A3)	上濁·去 墨 (195)	去濁墨 2 (254)		去濁墨 (259)		
142	禁*	金鳩反 見·沁	平 (271)	平 (310)	平墨 (21B1)	去母·去 墨 (198)			去墨 (264)		
143	禁*	金鳩反 見·沁	平 (273A)	平 (311A)	去朱 (21B3A)	平墨 (199A)			去墨 (265A)		
144	禁*	金鳩反 見·沁	平 (273A)	平 (312A)	平墨 (21B3A)	去母 (200A)	去墨1 (260A)		去墨 (266A)		
145	利	一 來·至					平墨1 (283A)				
146	養*	一 羊·漾			上朱 (24A2A)	去母 (223A)	去朱 (289A)	上朱 (286A)	上墨 (296A)		
147	氣*	一 溪·未				上墨 (233A)					
148	御	一 疑·御	上濁 (344A)			去濁墨 (243A)	去墨1·去 墨2 (315A)	去朱 (312A)			
149	愛	一 影·代					平輕墨 1 (319)				

150	苦*	一 溪・暮	上・去 合 (362A)	上・去 合 (398A)	去 墨 (27A5A)	上 墨 (254A)					
151	位	一 于・至			去 朱 (29B1A)		平 墨 ₂ (356A)		去 墨 (366A)		
152	愛	一 影・代		平 (442A)	去 墨 (30A6A)				去 墨 (377A)		
153	刃	一 日・震	去濁 (420A)	去濁 (455A)	去濁 墨 (31A4A)	去 平・上濁 墨 (290A)	去濁 墨 2 (376A)		去濁 墨 (388A)		
154	養*	一 羊・漾		去 (442A)	上 朱 (30A6A)	上 平 (281A)			上 墨 (377A)		
155	養*	羊尚反 羊・漾		上 (457)	上 墨 (31A5)	去 平 (291)		去 朱 (373)	去 墨 (389)		
156	二	一 日・至	平濁 (429A)								
157	利	一 来・至	去 (438A)	去 (473A)	去 朱 (32A7A)	上 墨 (301A)	去 墨 ₂ (390A)		去 墨 (403A)		
158	弟*	大計反 定・霽	上 (450)	上 (485)	上 墨 (33A4)	上 墨見清 (308)			去 墨 (413)		
159	肖	一 心・笑	去 (458A)	去 (493A)		去 墨 (313A)	去 墨 ₁ (406A)	去 朱 (403A)	上 墨 (421A)		
160	醬	一 精・漾			平 朱 (35B1A)	平 輕 平 (329A)	平 輕 墨 2 (427A)		平 墨 (443A)		
161	故	一 見・暮			上 朱 (35B5A)				上 墨 (447A)		
162	治*	一 澄・志			平 朱 (37B4A)						
163	肖	一 心・笑		去 (568A)	上 朱 (38B4A)	去 墨 (356A)		去 朱 (461A)	上 墨 (485A)		
164	具	一 群・遇	去濁 (543A)	去濁 (577A)	去濁 墨 (39A5A)	去 墨 (361A)	去 墨 ₁ (473A)		上 墨 (493A)		
165	嗣	一 邪・志	去 (544A)	去 (578A)		去 平・上 墨 (362A)	去 朱 (473A)				
166	命	一 明・映	平濁 (569A)			去 墨 (369A)					
167	俺*	一 影・艶	去 (588A)	去 (622A)	去 墨 (42A4A)	上 平 (390A)	上 朱 (508A)		去 墨 (531A)		
168	知	一 知・寘	去 (610A)	去 (644A)	去 墨 (43B3A)	去 平・平 墨 (402A)	去 朱 (526A)	去 朱 (522A)			
169	陳*	一 澄・震				平 墨・去 墨 (424)					
170	御	一 疑・御			去濁 朱 (45B6A)				上濁 墨 (579A)		

【入声字】12字

通番	字	积文音注	仁治 (4)	建長 (11)	永仁 (1)	三千 (4)	正安 (2)	元亨 (0)	元徳 (1)	群書 (0)	御注 (0)
171	執	一 章・緝					平 墨 ₁ (110A)				
172	溢	音逸 羊・質				去 墨 (114)					
173	溢	音逸 羊・質				去 墨 (115A)					
174	溢	音逸 羊・質				去 墨 (117A)	去 墨 ₁ (155A)				
175	滅	一 明・薛	平濁 (176A)								
176	宅	一 澄・陌				入 墨 (142A)	入 墨 ₁ (185A)	入 朱 (180A)	去 朱 (187A)		

177	十	一 常・緝				平濁 _墨 ・入 _墨 (189A)					
178	邑	一 影・緝	入 (309A)	入 (345A)	上 _墨 (23B7A)		入濁 _墨 2 (287A)				
179	莫	一 明・鐸	上濁 (333A)			入濁 _墨 (237A)	入軽濁 _墨 2 (306A)	入 _朱 (303A)	入濁 _墨 (314A)		
180	別*	一 並・薛	平濁 (335A)			入 _墨 (238A)	入濁 _墨 2 (308A)	入 _朱 (304A)	入 _墨 (316A)		
181	墨	一 明・徳	平濁 (427A)								
182	目	一 明・屋			去濁 (577A)	入 _朱 (39A5A)				入濁 _墨 (493A)	

『孝経』非規範的な加点と判断される上表の182であり、曩に述べた第3章の『論語』7種の鈔本におけるこのような声点は228字であった。永仁本の末尾の「經一千八百五十字・注八千七百六十四字（都合10,614字）」と『論語集解』巻第3までの分量（都合10,659字、正和本論語に拠る）の分量がほぼ同様であることを勘案すると、非規範的な事例が『論語』鈔本より多いことが問題となる。これは、『論語』鈔本の加点が『經典釈文』によって、序・正文・割注が支えられている加点であり、その分、『論語』鈔本における声点加点は規範性が高いとも言えよう。しかしながら、『孝経』諸本の非規範的な加点が多く見られる原因についてまず考察してみることにする。本研究では7種の孔伝本と、副次的に扱っている他系統の鄭注本の選抄本である『群書治要』と京都大学清家文庫蔵の御注本の残闕を用いている。後述のように『經典釈文』の「孝経音義」鄭注本を基にしていることが問題になる。鄭注本の場合は孔伝本の第19章の「閨門章」がなく、体裁も一部の異同があり、なお割注は抑も異なるため、孔伝本に『經典釈文』を利用することはかなり制限があることとなる。ただし、正文については、参考にすることが可能である。そのためか、182字のうち、割注に属する字は161字であり、殆どは序および割注部分に当たる部分である。この182字に対しては、一々の事例について、取り上げることは避けるが、『經典釈文』の音注が確認可能な字と多音字を中心にして、加点が鈔本の系統により違いが生じるか否かという側面に注目して述べていく。

また、『經典釈文』の字音注を根拠として利用可能な字は僅か13字（連番37・38・39要、42更、72恐、142・143・144禁、155養、158弟、172・173・174溢）である。これらの字に対しては、各鈔本から『經典釈文』が直接的に引用されたと見られる漢文による音注が書き込まれている痕跡は見られない。諸本間の加点の比較が可能である字を中心に見ていくと、まず「要」の場合関東系統鈔本の場合は、38番のように建長本に複数加点の事例はあるものの、去声点を中心に施されている。京都系統鈔本の場合は元徳本はすべて去声点を施しているが、残りの鈔本は平声点加点が目立つ。

142・143・144番の「禁」の場合も、関東系統鈔本の方は平声点が目立つが、それに反して、京都系統鈔本は去声点を中心に加点がなされていることが確認できる。

155の「養」の場合は、『經典釈文』の直接的な被注字であり、音注「雖日用三牲之養：羊尚反」に依ると去声点が施されるべき字であり、関東系統鈔本に上声点、京都系統鈔本に去声点が施されている。しかし、同様に「紀孝行章」に属する154の「養」の場合は、京都系統鈔本では上声字として捉えていたらしく、155番とはまったく上声点・去声点が反転しているような加点の状況となっている。訓読の上では、154「致養父母」は「ヤシナフ」という動詞、155「三牲之養」は名詞と読んでいる違いが見られる。155の先行して『經典釈文』の音注が掲出されている、「養則致亦樂」の「養」に去声に当たる音注「羊尚反」があるが、実際訓点本では、「養ふときは則ち亦樂しみを致す」のように動詞として読んでいる箇所があるが、7種の『古文孝経』では当該箇所に声点の加点を施している鈔本は見られない。

158「弟」は、『經典釈文』の音注が「大計（霽韻・去声）反」であり、去声点が施されるべき字である。各鈔本の加点の様相を見ると、上声点に見消符号が加えられている三千院本を除くと、関東系統鈔本は上声点、京都系統鈔本は元徳本のみとなるが去声点が施されている。今まで取り上げた、「要」「禁」「養」「弟」は、京都系統鈔本において、『經典釈文』の音注に適った加点が施されているが、関東系統鈔本においては、他の声調で読んでいることが確認できる。これらは、京都系統鈔本における一連の本文字体および訓点の改変の際に改められていると想定される。ただし、京都系統鈔本のみにおいて、非規範的な声点が施されている、42「更」、172・173・174「溢」のような事例があるため、必ずしも京都系統鈔本が『經典釈文』に則った声点を施している証拠にはなれない。

『經典釈文』に典拠が見られない多音字の中でも、22「妻」、23「供」、77「采」のように関東・京都系統鈔本における声点の加点の差が判然としている事例も見られるが、『孝経』の中でも孔伝本は『經典釈文』利用がかなり狭められることもあり、更に小学書と言える書物であることも、鈔本によって個人差が克明に現れる原因とも言える。

個人差として認められるのは、他の鈔本では見られないが、特定の鈔本では特殊な加点を施している事例であろう。例えば、26・45・46「巖」、43・50「言」の場合、他の鈔本は平声点を施している一方、仁治本は上声点を施している。このような声点は、仁治年の時点の加点ではなく、後筆により補われた蓋然性が高いと言える。訓点の加点の目的としては伝承・保存の他にも、学習にもその目的がある。ところが、個人によって、知識の水準が異なるため、可読性を高める一環として、加点者が独自の加点を施すことになる。鈔本によって、仮名・声点の加点の差が生じるのも、このようなプロセスが裏にあったことは容易に想定される。祖本などに典拠がない場合には、漢音とは異なる日常生活において用いられる字音に基づいた加点や、辞書・韻書を用いた際に生じる誤引用による加点を加えることによって、結果として、各加点本の中には非規範的な字音点が施されることになるのであろう。

5.4 『孝経』における『經典釈文』の利用

漢字音注記としては声点・仮名音注のほかに、反切注・同音注があるが、反切注は正安本

に3例、元亨本には2例、元徳本には被注字1字に対して2つ反切が施されている。同音注は三千院本に18例、元徳本に10例¹⁴⁵⁾、元亨本に8例、正安本に4例、建長本に1例が施されている。

第3章に挙げた、清原家伝の『論語』の鈔本と比べても、表面的には中国側注釈書および韻書への依存度が低いと見受けられる。経書は加点の過程の中では、伝統的に『經典積文』のその意義・字義・字体(異本注)を依拠する。ところが、『經典積文』の「孝経音義」は鄭注本を底本としているという問題が存する。古文と今文の間には正文の異同があり、更に割注は鄭注本を基にしたために、参考にすることは困難であったはずである。

実際、『經典積文』の通行本である、通志堂本巻23の「孝経音義」の382条を基準にして、『古文孝経』の内容に直接的に関わると判断されるものは185条である。その中でも、音注が施されているものは、132条である。本研究で対象にした7種の資料における字音注を比べると、一致する字音注は、三千院本の「踊：音用(425)」のみである。

各本に施されている反切・同音注が『經典積文』から見出せないにも関わらず、これらの注記はどのような過程で施されていたのかを検討する。以下の表5-21・表5-22は各本に施されている、反切注・同音注の全例を挙げたものである。

表5-21 『古文孝経』各本の反切注

被注字	資料名	所在	反切注	広韻の反切(所属韻・小韻)
刈	元徳本	219A	魚廢反(欄上:切魚肺反)	魚肺切(廢韻・刈)
旻	元亨本	155A	武巾反	武巾切(真韻・珉)
刈	元亨本	211A	魚廢反	魚肺切(廢韻・刈)
誼	正安本	7	宜寄反	宜寄切(眞韻・議)
洙	正安本	11	市朱反	市朱切(虞韻・殊)
孽	正安本	292A	魚列反	魚列切(薛韻・孽)

表5-22 『古文孝経』各本の同音注(×(声)-声母不一致、×(韻)-韻母不一致)

被注字	資料名	所在	同音注	切韻系韻書の小韻と一致	被注字	資料名	所在	同音注	切韻系韻書の小韻と一致
樂	建長本	487	音岳	○	傷	正安本	113A	音章	×(声)
膚	三千院本	85	音夫	○	修	正安本	116A	音周	×(声)
脩	三千院本	89A	音周	×(声)	樂	正安本	401A	音角	○
較	三千院本	106A	音角	○	濕	元亨本	210A	音集	×(声)
鰥	三千院本	215	音官	×(韻)	鰥	元亨本	276A	音官	×(韻)
禘	三千院本	238A	音帝	×(声)	禘	元亨本	304A	音帝	×(声)
攻	三千院本	254A	音公	○	攻	元亨本	326A	音公	○
劓	三千院本	294A	音義	○	樂	元亨本	398	音岳	○
荆	三千院本	294A	音非	なし	樂	元亨本	428A	音洛	○
樂	三千院本	309	音岳	○	龔	元亨本	476	音共	○
醬	三千院本	329A	音將	○	參	元亨本	476	音心	○
樂	三千院本	332A	音洛	○	間	元徳本	81	音閑	×(声)
爽	三千院本	338A	音早	×(声・韻)	揆	元徳本	227A	音鬼	×(声・韻)
充	三千院本	348A	音焮	×(声・韻)	鰥	元徳本	285	音官	×(韻)
龔	三千院本	367	音共	○	禘	元徳本	316A	音帝	×(声)
侏	三千院本	390A	音朱	×(声・韻)	攻	元徳本	340A	音工	○
樂	三千院本	413	音岳	○	劓	元徳本	393A	音義	○

¹⁴⁵⁾ 「樂:音楽」(564A)は除外した。

衾	三千院本	422	音今	×(声)	醕	元徳本	444A	音胤	○
踊	三千院本	425	音用	×(韻)	楽	元徳本	448A	音洛	○
膚	正安本	111	音夫	○	龔	元徳本	501	音共	○

反切注と同音注は、主として三千院本・正安本といった京都系統の鈔本に多く施されている。本研究で用いた7種の資料のうち、関東系統の鈔本には、建長本の「楽：音岳(487)」1例が施されているのみであり、ほとんど表面的には現れない。

反切注の場合は、切韻系韻書と反切法が同様であり、元徳本の「刈(219)」の欄上の注記「切魚肺反」のように『切韻』の出典注記で施され、その利用が明示されている。他本における反切注も、全て切韻系韻書と反切法が同じか、もしくは体系的な齟齬がないため、切韻系韻書が利用された可能性が高い。反切注が施されている部分は孔安国序・割注部分であり、『經典釈文』の利用自体が不可能である部分に利用されたと考えられる。

一方、同音注は切韻系韻書に照らし合わせても、不一致の箇所が少なからずあり、これらの同音注が、どの出典からもたらされたものであるかが不明である。原本『經典釈文』は逸失されているため、当該箇所が原本釈文に依拠する可能性は十全にあるが、これらの注記の一部には中国の韻書に拠るもののほかに、一部においては、久しきに亘り経書の講読・伝授に携わった清原家の師範が『古文孝経』の字句に合わせて学習の便宜を図るために、施したと判断される。

その他に、三千院本には、加点者が任意的に施したと判断されるものが一部あり、「爽(339)：音早」や「充(349)：音爍」のように、切韻系韻書の体系からと比べて、大きなずれがあるものの、日本漢字音では同音となるような、和製の音注と思しきものが僅かながら存する。

一方、現存の通志堂本『經典釈文』「孝経音義」の底本は鄭注本である。鄭注本の古訓点本の完本は現存せず、『群書治要』の孝経部分は鄭注本の訓点を研究する上では重要な資料である。しかしながら、群書治要の孝経部分には反切注・同音注が全く書き込まれていない。また、同じく巻第9に当たる『群書治要』の論語部分にも「車(217)：音居」「悪(438)：烏路反」が書き込まれているのみであり、他の巻と比べ、反切注・同音注の書込みが省略されている。同じく清原家鈔本のうち、博士家に属する加点者によって、直接加点がなされている『論語』鈔本と区別すると、極めて異例であるといえる。『孝経』『論語』は幼学書であり、帝王学の書である『群書治要』を学ぶ階層の者は、既に巻第9に当たる内容に関する素養があるためであると推測される。

清家御注本の場合は残闕であり、その分加点の全体状況を観察するのは困難であるが、『孝経』諸本の中で確認された反切注の38例(被注字は34字)、同音注は4例に書き込まれている。この反切注は『經典釈文』ではなく、「郟(3)」の右側には「切徒甘反」という反切注から、一部が『切韻』(切韻系韻書)から直接的に引用された可能性がある。反切上字・下字の欠損がなく、全体が判読できる反切注35例・同音注4例を『切韻』逸文及び『広韻』

および切韻残卷¹⁴⁶⁾と比較した結果を以下に示す。

【反切注】

(A) 切韻系韻書と反切が一致する……………25例(71.4%)

- 鄂：五各反(2) (広韻・唐韻・王2・王3・Dx1372+Dx3703：五各反(切))
郟：徒甘反(3) (広韻・王2・王3・S.2071：徒甘反(切))
陝：失冉反(4) (広韻・王1・王2・王3・P.3693：失冉反(切)・S.2071：失^(ママ)舟反)
咀：慈呂反(8) (広韻・王1・王2・王3・S.2071：慈呂反(切))
紬：直由反(8) (広韻・王1・王2・王3・S.2071：直由反(切))
堙：於隣反(9) (広韻：於眞切／王3・S.2071：於隣反)
瀛：以成反(13) (広韻・王2・王3・S.2071：以成反)
頒：布還反(14) (広韻・王3：布還反(切)／S.2071：巾^(ママ)還反)
鬻：胡盲反(20) (広韻：戸盲切／王1・王2・王3・S.2071：胡盲反)
塾：殊六反(20) (広韻・唐韻・王2・王3・S.2071：殊六反(切))
垠：語巾反(20) (広韻・王3・S.2071：語巾反(切))
職：之翼反(24) (広韻・唐韻・王2・王3・Dx1372+Dx3703：之翼反)
窒：陟栗反(25) (広韻・唐韻・王1・王2・王3・S.2071：陟栗反(切))
又丁結反(25) (広韻・唐韻・王2・王3・S.2071：丁結反(切))
晞：香衣反(26) (広韻：香衣切／王1・王3・S.2055・S.2071：虚機反)
墜：直類反(59A) (広韻・王2・王3・P.2011：直類反(切))
悖：蒲昧反(148) (広韻・唐韻：蒲昧反(切)／王1・王2・王3・P.3696：薄背反)
藏：昨郎反(158) (広韻・王1・王2・王3・S.2071：昨郎反(切))
恣：於豈反(162) (広韻・王2：於豈反(切)／王1・TIVK75、100b 依豈反／S.2071：衣豈反)
醜：胡讒反(164A) (広韻・王1・王2・王3・S.2071：胡讒反(切))
棺：古丸反(168) (広韻・王1・王3・S.2071：古丸反(切))
簠：方矩反(169) (広韻：方矩切／王2・王3・S.2071：方主反／王1：方^(ママ)反)
簠：居洧反(169) (広韻・王1・王3・S.2071：居洧反(切)／王2：居^(ミマ)義反)
甕：必益反(170) (広韻・唐韻・王1・王2・王3・S.2071：必益反(切))

(B) 切韻系韻書と反切は異なるが、体系は一致する……………5例(14.3%)

- 哲：智^(知母)烈^(薛韻)反(4) (広韻・王2・王3・S.2071・唐韻：陟^(知母)列^(薛韻)反(切))
垠：五^(疑母)斤反(20) (広韻・王3・S.2071：語^(疑母)斤反(切))
籀：除^(澄母)救^(有韻)¹⁴⁷⁾反(24) (広韻・唐韻・P.2011・王3：直^(澄母)祐反(切)／P.3694：直^(澄母)右^(有韻)反／王2：直^(澄母)又^(有韻)反)

¹⁴⁶⁾ 切韻残卷のデータは鈴木慎吾氏の「篇韻データベース」を利用した。

¹⁴⁷⁾ 反切下字「枚」のような字体であるが、「救」の誤りと考えられる。

徽：許韋_(微韻)反(28) (広韻・王1・王3・S.2071・S.2055：許歸_(微韻)反(切))
 參：所林_(侵韻)反(34) (広韻・P.2014・王2・王3：所今_(侵韻)反(切) / S.6187：所金_(侵韻)反)

(C) 切韻系韻書と体系が異なる・・・・・・・・・・・・・・・・・・5例(14.3%)

郟：許_(曉母)逆反(3) (広韻・唐韻・王2・王3・S.2071：綺_(溪母)載反(切))
 哲：他_(徹母)結_(屑韻)反(4) (広韻・王2・王3・S.2071・唐韻：陟_(知母)列_(薛韻)反(切))
 紬：勅_(徹母)鳩_(尤韻)反(8) (広韻・王1・王2・王3・S.2071：直_(澄母)由_(尤韻)反(切))
 䟽：新_(心母)據反(12) (広韻：所_(生母)去反 / 王1・王2・王3・唐韻：所_(生母)據反)
 搔：蘇造_(皓韻・号韻)反(141A) (広韻・王1・王2・S.2071：蘇遭_(豪韻)反(切) / 王3：蘇刀_(豪韻)反)

反切注の8割強は切韻系韻書の体系と一致することから、多くは『切韻』が用いられたことは明らかである。しかし、郟(3)「許_(曉母)逆反」(切韻系韻書は見母もしくは溪母)、搔(141)「蘇造_(皓韻・号韻)反」(切韻系韻書は豪韻・平声)のように、切韻系韻書と反切注が一致しないものの中には、体系がずれるものが混淆していることから、音注の書き込みに用いられた辞書・韻書は複数種類があったことが想定される。次は同音注の例を見ていく。

【同音注】

(A) 切韻系韻書と小韻字と一致する・・・・・・・・・・・・・・・・・・2例(50%)

宸(小韻字：辰)：音辰(小韻字：辰)(25)
 睦(小韻字：目)：音目(小韻字：目)(101)

(B) 切韻系韻書と小韻字が異なる・・・・・・・・・・・・・・・・・・2例(50%)

咀(小韻字：咀)：音序(小韻字：敘)(8)
 樞(小韻字：樞)：音朱(小韻字：朱)(10)

「咀」は從母・語韻、精母・語韻、影母・黠韻に属する多音字であるが、「序」は邪母・語韻であり、『切韻』の体系から見ると声母が一致しない。「樞」は昌母・虞韻であり、同音注の朱は章母・虞韻で、なお声母の違いが見られる。

このように、反切注・同音注などの書き込みの多くは『切韻』が利用されていることが確認できるが、『切韻』以外に引用した韻書・辞書は未詳である。書き込まれている箇所もお偏りがあり、序と親喪章に集中している。その中で、『經典釈文』には序部分が所収されおらず、更に、辞書・韻書が利用されていることが想定される。これは古文『孝経』のように、反切注・同音注を『經典釈文』から利用することに、限界があり、御注『孝経』が残巻でありながらも、古文『孝経』より積極的に『切韻』が用いられたことが考えられる。御注『孝経』の古訓点本の姿を比較できる三条西本などの鈔本にも同様の反切注・同音注が一部書き込まれていることを確認しているが、完本ではあるものの、本研究の段階では原本調

査に至らず、江戸時代の跋文を持つ模刻本（早稲田大学蔵）を用いたが、加点は五刑章第十一から見られないため、反切注・同音注の全体像を窺い知る資料を欠くのが現状である。遺存資料の限界のため、これ以上の追及は困難であるが、少なくとも切韻系韻書から見出せないこれらの漢字音注記は、清家御注本が用いた底本に書き込まれており、それを踏襲した可能性も当然想定されるものである。しかし、その一部が中国語音韻学の体系から逸脱し、日本人の音韻体系を基にして書き込まれた、類音字や和製反切注などが一部持ち込まれたのではなかろうかと推測するのみである。

5.5 小結

以上、鎌倉時代加点の『古文孝経』7種の鈔本と鄭注本・御注本の鈔本1種ずつを対象に、漢字音注記における特徴について考察した。そのうち、『古文孝経』7種の系統関係を交えて検討した結果、以下のような特徴が見られた。

仮名音注

- ・合口字の仮名表記の側面では、京都系統の鈔本により、原音の要素が残っており、「クキヨウ・クキヨク」といった表記は京都系統の鈔本にのみ現れる。
- ・m 韻尾・n 韻尾の区別の場合、関東系統はほぼ「ン」に統合にされているが、京都系統の鈔本は一樣ではない。
- ・全資料において「㊦ヨウ」と「㊧ウ」の混同などが見られるが、系統による違いは目立たないが、表記の揺れが最も少ないのは三千院本であり、祖点が古い可能性が考えられる。
- ・全資料において、呉音の混入・慣用音の混入が極めて少ないが、後筆が多く含まれる仁治本と三千院本に用例が多く見られる。

声点

- ・軽声点の区別は全資料で六声体系を維持しているにもかかわらず、平軽・入軽が各々平重・入重へと統合している加点が多い。その中でも、軽声の残存の程度には差があり、京都系統の三千院本の円点・圏点、正安本の墨点2は六声体系を比較的保存されている。関東系統の鈔本のうち、唯一、複数の声点を有する永仁本の朱点は四声体系として安定していることから、墨点より後代の資料を以て、移点が行われた可能性が高い。
- ・上声全濁字は去声化の比率は、関東系統の鈔本が京都系統に比して低く、上声点を施す字が半数を超える。関東系統と京都系統の諸本の差が存する箇所は、前者が上声点・後者は去声点が施されていることから、清原教隆は隸古字を改める作業以外にも、声点を改める作業も行った可能性が高い。
- ・濁声点の加点の比率は、関東系統の鈔本は極めて高いように見受けられるが、京都系統の鈔本には声点の種類ごとに差が著しい。京都系統の鈔本にこのような問題が生ずるのは、

他の博士家である中原家点を捨象せずに残存させている可能性がある。濁声点の「^{◦◦} (濁 A)」と「[◦] (濁 B)」が混在している加点に関しても、同様の理由が混合されたためであると考えられる。

反切注・同音注

・関東系統の鈔本にはほぼ施されず、京都系統の鈔本には僅かながら、施されている。しかし、1例を除き、これらを『經典釈文』の「孝経音義」から見出すことができない。抑も『經典釈文』は鄭注本を基としているため、利用は制限的であった。反切注は切韻系韻書が用いられていると判断される。同音注の場合、出典が確かではないが、講読・伝授の過程で、字句の文脈に合わせて、任意的に施されたと判断されるものが存する。

以上のことから、京都系統の鈔本は別系統の訓点を捨象せず、すべて取り入れるなど複雑な様相を呈しており、漢字音の側面においても、伝統的な加点を継承・保存しようと努めている意識を窺うことができる。その反面、関東系統鈔本の漢字音には、隸古字を通行の字に改めるとともに、反切注・同音注の捨象、音韻的な変化に合わせる表記を施し、声点の面においても韻書に則り、改変を加えている。このように、関東系統鈔本からは、漢字音注記のいわば「旧要素」というべきものに対して、改変が伴われたと考えられる。

最後に、他系統である2種の鈔本のうち、鄭注本を選抄した『群書治要』の場合、加点者の清原教隆が仁治本・建長本の底本と同様であるため関東系統の鈔本と仮名音注・声点の面では類似点が見られる。御注本では、反切注・同音注が多く見られるものの、『經典釈文』の利用は認められず、7割が切韻系韻書からの引用である。ただし、残りの3割がどのような出典に拠ったものであるかは明らかではない。

別表2 『古文孝経』上声全濁字（諸本間の不一致加点箇所）

- ・完全に一致する箇所において、諸本の声点加点が異なる場合のみを示す。
- ・薄い色の升は上声加点、濃い色の升は去声加点を示す。

声字	所在	仁治	建長	永仁		三千		正安		元亨		元徳
				墨	朱	円	圈	墨1	墨2	墨	朱	
動	孔序		上 (81A)	上 (6A6A)			去 (59A)					去 (68A)
象	1章	上 (58)	上 (96)	上 (7A6)			去 (69)					去 (82)
咎	1章	上 (91)	上 (129)	上 (9B1)		去 (87)					去 (107)	
負	1章	上 (108)	上 (146)	上 (10B2)			去 (97)					
序	2章	上 (114)	上 (152)	上 (11A2)			去 (100)					
兆	2章	上 (125A)	上 (164A)	上 (11B5A)		去 (108A)		去 (185A)				
象	2章	上 (129)	上 (167)	上 (12A1)			去 (109)			去 (138)		去 (142)
祀	4章						平 (141)		去 (185)			
兆	4章			去 (15B1)			去 (142)	去 (185)			去 (180)	
婦	5章	上 (198)	上 (236)	上 (16B4)			上 (153)					去 (202)
揆	7章	上 (229A)	上 (267A)	上 (18B3A)		去 (171A)	上 (171A)					去 (227A)
是	9章	上 (312)	上 (348)	上 (24A2)			去 (223)				去 (286)	
禍	9章	上 (314A)	去 (350A)	上 (24A4A)	去 (24A0A)		去 (224A)				去 (287A)	去 (298A)
咎	9章	上 (317)	上 (353)	上 (24A7)			去 (227)				去 (287)	去 (301)
祀	10章	上 (334A)	上 (370A)				去 (237A)					去 (315A)
祀	10章							上 (309A)				去 (317A)
奉	10章	上 (345)	上 (381)				去 (244)					去 (325)
善	12章	上 (375A)	上 (411A)	上 (28A4A)			上 (262A)					去 (350A)
動	12章	上 (388)	上 (424)	上 (29A2)			上 (270)		去 (351)			去 (361)
動	12章				去 (29B3)			平 (357)				去 (367)
禍	14章	上 (444)	上 (479)	上 (32B5)			上 (304)	去 (443)				去 (512)
像	16章	上 (487)	上 (522)	上 (35B3)			去 (330)	去 (428)		去 (425)		去 (445)
象	16章	上 (487)	上 (522)	上 (35B3)		去 (330)					去 (425)	去 (445)
祀	17章		上 (546)			去 (345)						去 (466)
是	20章	上 (560)					去 (372)					去 (508)

別表3 『古文孝経』の非次濁字の濁声点加點箇所

- ・下の表は漢音では原則的に濁音となる明母・泥母・疑母・日母以外の字に濁声点が施されている箇所を示し、『古文孝経』他本の加點と比較を示すためのものである。
- ・濁声点加點箇所は灰色の升で示す。

声字	所在	仁治	建長	永仁		三千		正安		元亨		元徳
				墨	朱	円	圈	墨1	墨2/朱	墨	朱	
子	孔序	卷頭欠					去濁 A (5A)					上 (6A)
弓	孔序	卷頭欠	平 (15A)	平 (02A01A)			平輕濁 A (11A)					平輕 (13A)
速	孔序	卷頭欠	去濁 A (23)									
学	孔序	卷頭欠					入輕濁 A (17A)					入 (20A)
学	孔序	卷頭欠					入輕濁 A (25A)					入輕 (49A)
所	孔序									上濁 A (30)		
鈍	1章	去 (78)	去 (115)	去 (08B02)			去濁 B (79)					去 (98)
恕	1章	去濁 A (86)	去濁 A (124)		去濁 A (09A04)		上濁 B (84)		去濁 A (110)			去濁 A (106)
順	2章				去 (10B06)							去濁 A (127)
辨	2章	去 (114)	去 (152)		去 (11A02)		去濁 B (100)	去 (132)				去 (130)
兢	3章	平 (149A)	平 (186A)	平輕 (13A05A)			平・平輕濁 A (121A)	平 (158A)				平 (159A)
当	5章						平濁 B (161)					
非	6章	平 (222)	平 (260)	平 (18A04)			平 (167)	平濁 A (218)				
患	7章	平濁 A・去 (230)	去 (268)	去 (18B04)			去 (171)	去 (225)				去 (228)
暴	7章	去 (231)	去 (270)		去 (18B06)	去 (174 _円)		去濁 A (227)				去 (230)
十	8章						平濁 A・入 (189)					
罰	8章						入濁 A (199)				入 (255)	
罰	8章						入濁 A (199)					
分	8章	去濁 A (272)	去濁 A (311)	去濁 A (21B02)		去 (199 _円)			去 (259 _朱)		去 (255)	去 (265)
赫	8章	入濁 A (278)	入濁 A (317)	入濁 A (22A01)		入 (203 _円)		入濁 A (264)			入濁 A (264)	入 (270)
具	8章	去濁 A (280)	去濁 A (319)	去濁 A (22A02)			去 (204)		去 (265 _朱)			去 (271)
罰	9章						入濁 B (208)					
罰	9章						入濁 B (208)					
別	10章	平濁 A (335)					入 (238)		入濁 A (308)		入 (304)	入 (316)
卜	13章				入濁 B (30B02)							入 (380)

条	14章	平濁 A (427)	平 (462)		平 (31B04)		平 (294)	平 (382)			平 (378)	平 (394)
暴	14章	去 (443)	去 (478)		去 (32B05)		去 (304)	去濁 A (394)				
具	19章	去濁 A (543)	去濁 A (577)	去濁 A (39A05)				去 (475)			去 (391)	去 (408)
僕	19章				入 (39B02)		入軽 (364)		入軽濁 A (476)			入 (497)
鈍	20章	去 (560)	去 (595)		去 (40A07)		去濁 B (372)	去 (487)				去 (508)
父	20章	上濁 A (593)										
分	21章	去 (604)	去 (638)	去濁 A (43A04)		去 (399 _頁)	去濁 A (399)		去 (521)			去 (545)
分	21章	去濁 A (613)	去濁 A (647)	去濁 A (43B06)		去 (404 _頁)	去濁 A (404)	去 (528)		去 (524)		去 (552)

第6章 おわりに

以上のように、本研究は、現存点数が多い3種の典籍・21種の資料の経書類典籍の中でも、主として鎌倉時代から南北朝時代に加点がなされている資料を対象にしたものであり、各資料に書き込まれている漢字音注記を精査し、その分析の結果を報告したものである。漢音資料の中には、様々な性格の資料が存するが、「漢籍」というカテゴリーに限っても、本研究の対象資料は所謂四部分類の「経部」のうち、極一部分に過ぎない。そのため、以上まで述べてきた結果は、全体の漢音資料を跨いで一般化することができない部分も多く存するだろう。以後は、経部の他資料のみならず、「集部」「史部」「子部」の漢籍資料に対象を広げることにより、本研究の不備を纒かながら補完することを目指す次第である。

最後にこの21資料から得られた漢字音注記の加点の傾向を総合し、図表化して示す上で、その結果をかいつまんで述べることにする。各表の作成に当たっては、清原家鈔本と中原家鈔本を分けて示した。以下は、各鈔本のリストである。

清原家鈔本 (*は清原教隆の加点本・もしくは底本として利用された鈔本)

正和論語*・嘉暦論語*・建武論語・高清論語・群書論語*・群書尚書*・群書孝経*
仁治孝経*・建長孝経*・永仁孝経・三千孝経・正安孝経・元亨孝経・元徳孝経
(天理尚書・清御孝経は清原家鈔本に推定)

中原家鈔本

文永論語・高中論語・元徳尚書
(観智尚書・文和尚書は藤原家点を含む)

6.1 仮名音注

6.1.1 非鼻音化の遅れ

- ・明母字の東韻・江韻・庚韻(開拗)・清韻・青韻・真韻(甲類)・魂韻・桓韻・先韻・仙韻(甲類)はマ行音となる。
- ・明母である真韻・仙韻の乙類、微母である陽韻・文韻・元韻字はバ行音となる。
- ・非鼻音化の度合いが声調により異なり、相補分布を為していると思しき韻母が存する。
庚韻開口直音・刪韻字はマ・バ行音が混在するが、平声「盲」「蛮」のみバ行音表記であり、上声・去声はマ行音表記となる。撥音韻尾を有しない、灰韻の去声字「昧」はマ行音表記となるが、灰韻の上声字「毎」はバ行音である。
- ・東韻(直)は「モウ」が一般的な字音であり、「ボウ」という字音は、人為的な読みか。

表 6-1 明母(微母)撥音韻尾字および蟹韻字一覧

0 韻尾字			
鈔本	清原家鈔本	中原家鈔本	仮名

韻母	マ行音表記	ハ行音表記	マ行音表記	ハ行音表記	
東直(明)	蒙 ^平 (3)	幪 ^平 (1)	蒙 ^平 (2)		モウ・ボウ
江(明)	扈 ^平 (1)				マウ
陽開(微)		亡 ^平 (15)、罔 ^上 (3)、望 ^去 (1)			バウ
庚開直(明)	孟 ^去 (10)	盲 ^平 (3)	猛 ^上 (3)、孟 ^去 (1)		マウ・バウ
庚開拗(明)	明 ^平 (14)、盟 ^平 (2)、命 ^去 (35)		命 ^去 (2)		メイ
清(明)	名 ^平 (11)				メイ
青(明)			冥 ^平 (1)		メイ
n 韻尾字					
鈔本	清原家鈔本		中原家鈔本		仮名
韻母	マ行音表記	ハ行音表記	マ行音表記	ハ行音表記	
真甲(明)	民 ^平 (9)				ミン
真乙(明)		旻 ^平 (7)、敏 ^上 (17)、閔 ^上 (6)		敏 ^上 (1)	ピン
文(微)		文 ^平 (33)、聞 ^平 (6)、問 ^去 (16)、聞 ^去 (5)、汶 ^去 (2)		文 ^平 (1)、聞 ^平 (1)、問 ^去 (1)	ブン
魂(明)	門 ^平 (5)				モン
元(微)		万 ^去 (6)、曼 ^去 (1)			バン
桓(明)	埴 ^去 (3)				マン
刪(明)	慢 ^去 (6)	蛮 ^平 (4)	慢 ^去 (3)	蛮 ^平 (2)	マン・バン
先(明)	暎 ^去 (1)				メン
仙甲(明)	湏 ^去 (1)、面 ^去 (2)		面 ^去 (1)		メン
仙乙(明)		冕 ^上 (19)、免 ^上 (1)		冕 ^上 (5)、勉 ^上 (2)	ベン
i 韻尾字					
鈔本	清原家鈔本		中原家鈔本		仮名
韻母	マ行音表記	ハ行音表記	マ行音表記	ハ行音表記	
佳(明)		売 ^去 (2)			バイ
灰(明)	昧 ^去 (2)	每 ^上 (2)	昧 ^去 (1)		バイ・マイ

- ・泥母字の冬韻・青韻・登韻・先韻字はナ行音表記となる。
- ・添韻はダ行音表記となる。
- ・寒韻・覃韻字の多くはナ行音表記となるが、稀にダ行音が見られる。鎌倉時代の多数の漢籍の加点を基に考えると、これらの字音は「ナ行音」が多く、ダ行音表記はより後代に生じた字音であると考えられる。

表 6-2 泥母（孃母）撥音韻尾字一覧

ŋ 韻尾字					
鈔本	清原家鈔本		中原家鈔本		仮名
韻母	ナ行音表記	タ行音表記	ナ行音表記	タ行音表記	
冬(泥)	農 ^平 (2)		農 ^平 (1)		ノウ
青(泥)	寧 ^平 (4)、佞 ^去 (21)、寔 ^去 (2)		佞 ^去 (5)		ネイ
登(泥)	能 ^平 (11)		能 ^平 (2)		ノウ
n 韻尾字					
鈔本	清原家鈔本		中原家鈔本		仮名
韻母	ナ行音表記	タ行音表記	ナ行音表記	タ行音表記	
寒(泥)	難 ^平 (1)、難 ^去 (10)		難 ^去 (1)	難 ^去 (1)	ナン・ダン
先(泥)	年 ^平 (2)				ネン
m 韻尾字					
鈔本	清原家鈔本		中原家鈔本		仮名
韻母	ナ行音表記	タ行音表記	ナ行音表記	タ行音表記	

覃(泥)	南 ^平 (4)、男 ^平 (7)	男 ^平 (1)			ナム・ダム
添(泥)		念 ^平 (6)			テム

6.1.2 歯音字（サ行音）における表記の揺れ

- ・拗音介母を有する歯音声母字のうち、直音表記は原則、二等韻に配置される莊母・初母・崇母・生母（表 6-3 の灰色の部分）に集中するが、生母字の中に東韻（拗音）・尤韻・蒸韻からは直音・拗音が混在する。
- ・その以外の声母の中でも、「槍」「躑」「繪」「鄮」のように字画の一部に「倉」「曾」のような直音表記がされる部品に類推した百姓読みとも考えられるが、これらは諧声字であるため、本来の母胎音に基づいて伝承されてきた可能性が存する。入声字の一部「削」「足」「束」は拗音表記の事例がなく、伝承された字音は直音である。

表 6-3 歯音声母・拗音韻母字における仮名音注

陽韻字（拗音：シヤウ・シヤク／直音：サウ・サク）					
声母	清原家鈔本		中原家鈔本		仮名
	拗音表記	直音表記	拗音表記	直音表記	
精	将 ^平 (3)、漿 ^平 (1)、 将 ^去 (1)、醬 ^去 (2)、 爵 ^入 (17)	槍 ^平 (4)	爵 ^入 (1)、雀 ^入 (1)		シヤウ／シヤク
清		躑 ^平 (2)			サウ
從	墻 ^平 (7)		墻 ^平 (3)		シヤウ
心	襄 ^平 (6)、相 ^去 (12)	削 ^入 (2)	襄 ^平 (3)、廂 ^平 (1)、 相 ^去 (1)	相 ^去 (1)、削 ^入 (1)	シヤウ・サウ／サ ク
邪	祥 ^平 (5)、翔 ^平 (3)、 庠 ^平 (1)、像 ^上 (3)、 象 ^上 (8)		祥 ^平 (2)、庠 ^平 (1)		シヤウ
莊	莊 ^平 (1)	莊 ^平 (12)		莊 ^平 (3)	サウ
初		創 ^去 (3)		創 ^去 (1)	サウ
生		爽 ^上 (6)		爽 ^上 (4)	サウ
章	章 ^平 (10)、掌 ^上 (1)、 繳 ^入 (1)、酌 ^入 (7)		繳 ^入 (1)、酌 ^入 (1)		シヤウ／シヤク
昌	昌 ^平 (2)、綽 ^入 (11)		昌 ^平 (1)、綽 ^入 (1)		シヤウ／シヤク
常	常 ^平 (9)、尚 ^平 (1)、 裳 ^平 (3)、上 ^去 (6)、 尚 ^去 (1)				シヤウ
書	傷 ^平 (5)、商 ^平 (4)、 賞 ^上 (8)、向 ^去 (5)、 餉 ^去 (2)		傷 ^平 (1)		シヤウ
日	攘 ^平 (1)、壤 ^上 (2)、 讓 ^上 (10)、弱 ^入 (5)、 若 ^入 (3)		攘 ^平 (1)、弱 ^入 (1)、 蕩 ^入 (1)		ジヤウ／ジヤク
東韻字（拗音：シユ・シウ(シユウ)・シク(シユク)／直音：スウ・スク）					
声母	清原家鈔本		中原家鈔本		仮名
	拗音表記	直音表記	拗音表記	直音表記	
精	蹶 ^入 (4)				シク
心	夙 ^入 (6)、肅 ^入 (22)、 宿 ^入 (4)		肅 ^入 (2)、宿 ^入 (2)		シク(シユク)
生	躑 ^入 (4)				シク(シユク)
章	終 ^平 (4)、衆 ^去 (16)、 祝 ^入 (7)、粥 ^入 (5)		祝 ^入 (2)		シウ・シユ(シユ ウ)／シク(シユク)
昌	充 ^平 (4)				シウ
常	淑 ^入 (7)、孰 ^入 (4)、 塾 ^入 (1)、熟 ^入 (6)		塾 ^入 (1)、熟 ^入 (1)		シク(シユク)
書	叔 ^入 (24)		叔 ^入 (1)		シク(シユク)

日	戎 ^平 (1)、肉 ^入 (1)		戎 ^平 (3)、肉 ^入 (1)		ジウ・ジユ／ジク (ジユク)
虞韻字 (拗音：シユ・シウ(シユウ)／直音：ス・スウ)					
鈔本 声母	清原家鈔本		中原家鈔本		仮名
	拗音表記	直音表記	拗音表記	直音表記	
精		足 ^去 (5)			スウ
清	取 ^上 (6)				シユ・シウ
從	聚 ^上 (4)		聚 ^上 (3)		シウ(シユウ)
心	須 ^平 (1)	須 ^平 (4)			ス・スウ・シユ
初		藟 ^平 (1)			スウ
生		数 ^上 (4)、数 ^去 (3)			ス・スウ
章	侏 ^平 (4)、朱 ^平 (2)、 主 ^上 (18)				シユ・シウ
常	樹 ^去 (2)、洙 ^平 (1)、 贖 ^去 (7)	洙 ^平 (1)			シユ・シウ(シユウ)
書	戍 ^去 (1)				シウ
日	儒 ^平 (6)、孺 ^去 (1)、 乳 ^去 (1)				ジユ・ジウ
尤韻字 (拗音：シユ・シウ(シユウ)／直音：ス・スウ)					
鈔本 声母	清原家鈔本		中原家鈔本		仮名
	拗音表記	直音表記	拗音表記	直音表記	
精	酒 ^上 (3)				シユ
清	鱸 ^平 (4)		鱸 ^平 (2)		シウ
從	就 ^去 (1)				シウ
心	修 ^平 (3)、脩 ^平 (8)		脩 ^平 (2)、叟 ^平 (1)、 羞 ^平 (1)		シウ(シユウ)
邪	袖 ^去 (2)		囚 ^平 (1)		シウ・シユ
莊	緞 ^平 (4)	緞 ^平 (1)、鄴 ^平 (3)			シウ・シユ・ス・ スウ
生	廋 ^平 (3)				シウ
章	周 ^平 (29)、洲 ^平 (1)、 咒 ^去 (2)		周 ^平 (2)		シウ(シユウ)
昌	醜 ^有 (7)、臭 ^去 (3)				シウ
常	受 ^上 (8)、寿 ^上 (3)		受 ^上 (2)、綬 ^上 (1)	受 ^上 (1)	シユ・シウ(シユウ)・スウ
書	手 ^上 (1)、首 ^上 (5)、 首 ^去 (2)、守 ^去 (1)、 獸 ^去 (2)		手 ^上 (3)、首 ^上 (2)		シユ・シウ(シユウ)
日	柔 ^平 (9)		柔 ^平 (3)		ジウ・ジユ
魚韻字 (拗音：シヨ／直音：ソ)					
鈔本 声母	清原家鈔本		中原家鈔本		仮名
	拗音表記	直音表記	拗音表記	直音表記	
清	沮 ^平 (7)、睢 ^平 (6)		沮 ^平 (1)、睢 ^平 (2)		シヨ
邪	徐 ^平 (1)、叙 ^上 (2)、 序 ^上 (6)、緒 ^上 (1)		叙 ^上 (1)、緒 ^上 (1)		シヨ
莊		俎 ^上 (3)			ソ
初		楚 ^上 (7)			ソ
崇	助 ^去 (1)	助 ^去 (1)		助 ^去 (2)	ソ・シヨ
生	所 ^上 (1)	蔬 ^平 (6)、疏 ^平 (5)、 疎 ^平 (8)、所 ^上 (4)	蔬 ^平 (1)	蔬 ^平 (2)、疏 ^平 (3)	ソ・シヨ
章	諸 ^平 (5)				シヨ
昌	処 ^去 (2)		杵 ^上 (1)		シヨ
書	舒 ^平 (2)、書 ^平 (5)、 暑 ^上 (2)、黍 ^上 (4)、 庶 ^去 (16)、恕 ^去 (9)	庶 ^去 (3)	庶 ^去 (1)、恕 ^去 (2)		シヨ・ソ
日	如 ^平 (24)		如 ^平 (1)		ジヨ
鐘韻字 (拗音：シヨウ(Wセウ)・シヨク／直音：ソウ・ソク)					
鈔本 声母	清原家鈔本		中原家鈔本		仮名
	拗音表記	直音表記	拗音表記	直音表記	
精	縱 ^去 (1)、從 ^去 (1)	足 ^入 (2)			シヨウ／ソク
從	從 ^平 (1)、從 ^去 (11)		從 ^去 (2)		シヨウ(セウ)

邪	松 ^平 (1)、誦 ^去 (7)、 訟 ^去 (4)、俗 ^入 (12)、 統 ^入 (1)	俗 ^入 (1)	誦 ^去 (1)、俗 ^入 (3)		シヨウ/シヨク・ ソク	
章	鐘 ^平 (1)、種 ^上 (3)、 属 ^入 (3)	属 ^入 (1)	種 ^上 (2)、属 ^入 (1)		シヨウ(セウ)/シ ヨク・ソク	
常	属 ^入 (3)	属 ^入 (1)	蜀 ^入 (1)、属 ^入 (2)		シヨク・ソク	
書		束 ^入 (8)	春 ^平 (1)		シヨウ/ソク	
日	辱 ^入 (3)		辱 ^入 (2)		ジヨク	
蒸韻字（拗音：シヨウ（セウ）・シヨク/直音：ソウ・ソク）						
声母	鈔本	清原家鈔本		中原家鈔本		仮名
		拗音表記	直音表記	拗音表記	直音表記	
精		稷 ^入 (20)		稷 ^入 (4)		シヨク
從		鄮 ^平 (1)	鄮 ^平 (1)		繪 ^平 (1)	ソウ・シヨウ
莊			側 ^入 (8)、仄 ^入 (1)、 辰 ^入 (1)		仄 ^入 (1)	ソク
初			側 ^入 (1)			ソク
生		色 ^入 (4)、穉 ^入 (3)	色 ^入 (6)、畜 ^入 (4)、 穉 ^入 (3)	色 ^入 (1)	色 ^入 (2)	ソク・シヨク
章		蒸 ^平 (8)、職 ^入 (10)		職 ^入 (1)		シヨウ(セウ)/シ ヨク
昌		称 ^平 (17)、称 ^去 (4)		称 ^平 (1)、称 ^去 (2)		シヨウ(セウ)
常		丞 ^平 (4)、承 ^平 (2)、 殖 ^入 (3)				シヨウ(セウ)/シ ヨク
書		勝 ^平 (1)、升 ^平 (5)、 式 ^入 (4)、飾 ^入 (7)		飾 ^入 (1)、式 ^入 (1)		シヨウ/シヨク
船		乘 ^平 (1)、乘 ^去 (5)、 食 ^入 (29)		食 ^入 (1)		シヨウ/シヨク
日		仍 ^平 (1)		仍 ^平 (1)、苻 ^平 (2)		ジヨウ(ゼウ)

6.1.3 合口字の表記

- ・イ段合口字の場合、開拗音・合拗音を併せ持つ「クキヨウ」「クキヤク」などの表記は、一部温存されているが、その多くが、開拗音「キヨウ」「キヤク」となるか、合拗音「クワク」になる。
- ・音韻構造が単純な「クキ」のような表記は、より長く持続される。
- ・エ段合口字は、蟹撰「㊦エイ」・梗撰「㊦エイ・㊦エキ」のような表記は、山撰「㊦エン・㊦エツ」より少ないと判断される。
- ・拗音仮名を用いた表記は見られない。

表 6-4 イ段合口字におけるワ行音の残存度合い

資料名	加點時期	通撰・曾撰		止撰		臻撰		宕撰		曾撰	
		㊦キヨウ	㊦ヨウ	㊦キ	㊦	㊦キン	㊦ン	㊦キヤウ	㊦ヤウ	㊦キキ	㊦キ
高清論語	鎌倉初期か	1	2	8	0	2	0	1	0	3	0
群書尚書	1253	1	3	7	0	0	0	0	0	0	0
群書孝經	1257	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0
群書論語	1257	1	0	3	0	1	0	0	0	1	0
三千孝經	1277	5	4	9	8	2	0	0	0	0	1
永仁孝經	1299	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0
正安孝經	1302	9	8	22	5	3	0	0	1	0	0
元亨孝經	1321	1	0	4	3	1	1	0	0	0	0
嘉暦論語	1328	4	3	8	0	1	2	0	1	1	1
元徳孝經	1330	1	3	2	1	0	0	0	0	0	0
正和論語	1333	5	16	20	11	3	1	3	9	0	4
清御孝經	鎌倉後期か	0	1	3	1	2	1	0	0	0	0
天理尚書	鎌倉後期か	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0

建長孝経	1253～1356	0	2	2	6	1	0	0	1	0	0
仁治孝経	1241～南北朝期か	0	7	2	13	2	1	0	0	0	0
建武論語	1337～室町中期か	4	26	12	54	1	2	2	10	4	1
文永論語	1270	0	1	3	0	1	0	0	0	1	0
高中論語	1303	0	7	6	0	3	0	1	0	2	0
観智尚書	1323～1354	0	0	5	1	0	1	0	0	0	0
文和尚書	鎌倉後期か～1354	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
元徳尚書	1330～室町中期か	1	2	4	2	0	0	0	1	0	0

表 6-5 エ段合口字および歯音・舌音声母字におけるワ行音の残存度合い

資料名	加点点時期	蟹撰		山撰		梗撰		止撰(歯/舌音)		臻撰(歯/舌音)	
		㊦エイ	㊦イ	㊦エン	㊦ン	㊦エイ	㊦イ	㊦キ	㊦イ	㊦キン	㊦ユン
高濂論語	鎌倉初期か	4	0	5	0	0	0	0	2	0	8
群書尚書	1253	0	0	1	4	0	2	0	1	1	4
群書孝経	1257	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
群書論語	1257	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0
三千孝経	1277	1	2	4	2	0	3	0	1	1	3
永仁孝経	1299	0	1	0	1	0	0	0	1	1	0
正安孝経	1302	3	4	6	6	1	9	0	5	6	5
元亨孝経	1321	0	1	1	5	0	3	0	3	0	0
嘉暦論語	1328	2	1	1	8	1	1	1	7	1	4
元徳孝経	1330	0	1	1	1	0	0	0	3	1	1
正和論語	1333	2	4	5	14	0	4	5	8	1	8
清御孝経	鎌倉後期か	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0
天理尚書	鎌倉後期か	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
建長孝経	1253～1356	0	1	0	7	0	3	0	3	1	5
仁治孝経	1241～南北朝期か	0	2	3	4	1	3	0	5	1	6
建武論語	1337～室町中期か	1	26	7	25	0	11	2	9	2	32
文永論語	1270	1	0	5	3	0	0	0	1	1	1
高中論語	1303	3	0	10	3	0	0	0	5	1	2
観智尚書	1323～1354	0	5	2	2	0	0	0	5	0	1
文和尚書	鎌倉後期か～1354	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0
元徳尚書	1330～室町中期か	0	1	0	4	0	1	0	4	2	5

6.1.4 ハ行転呼音による表記の混同

- ・ハ行転呼音により、鎌倉時代の経書類にも、p 韻尾の場合は、フ・ウ表記の混同が著しいが、資料により千差万別である。
- ・ŋ・u 韻尾がフ表記となることは稀であるが、混同例は鎌倉初期試料から見られる。

表 6-7 ハ行転呼音による表記の混同

資料名	加点点時期	p 韻尾		ŋ 韻尾		u 韻尾	
		フ表記	ウ表記	ウ表記	フ表記	ウ表記	フ表記
高濂論語	鎌倉初期か	4	11	93	6	89	4
群書尚書	1253	3	0	22	0	21	0
群書孝経	1257	0	0	1	0	2	0
群書論語	1257	2	0	6	0	11	0
三千論語	1277	9	5	43	3	49	2
永仁孝経	1299	2	0	4	0	3	0
正安孝経	1302	27	4	178	1	131	2
元亨孝経	1321	3	2	28	0	34	0
嘉暦論語	1328	9	5	56	8	60	12
元徳孝経	1330	0	2	16	0	12	0
正和論語	1333	13	20	175	8	105	17
清御孝経	鎌倉後期か	0	0	4	2	5	2
天理尚書	鎌倉後期か	2	0	6	0	2	0

建長孝経	1253～1356	3	5	37	0	30	0
仁治孝経	1241～南北朝期か	2	7	64	0	49	0
建武論語	1337～室町中期か	29	13	461	1	345	1
文永論語	1270	2	1	22	1	24	0
高中論語	1303	11	3	67	2	50	4
観智尚書	1323～1354	3	5	28	1	23	2
文和尚書	鎌倉後期か～1354	0	1	13	0	5	0
元徳尚書	1330～室町中期か	0	2	46	3	25	3

6.1.5 「㊦ヨウ」と「㊧ウ」の混同

- ・鎌倉初期史料は混同の事例が少ないが、鎌倉後期資料からは両者の混同が著しくなる。
- ・鎌倉時代までの時点では、「㊧ウ・㊧フ」から「㊦ヨウ」へ同化する事例より、「㊦ヨウ」から「㊧ウ」に同化する比率がより高い。

表 6-8 「㊦ヨウ」と「㊧ウ」の混同

資料名	加點時期	通撰・曾撰		效撰・咸撰	
		㊦ヨウ表記	㊧ウ表記	㊧ウ表記	㊦ヨウ表記
高濤論語	鎌倉初期か	15	0	19	0
群書尚書	1253	6	0	6	0
群書孝経	1257	1	0	0	0
群書論語	1257	1	0	7	0
三千論語	1277	17	0	15	1
永仁孝経	1299	1	1	2	0
正安孝経	1302	26	12	33	1
元亨孝経	1321	7	4	14	1
嘉暦論語	1328	11	7	19	2
元徳孝経	1330	5	2	4	0
正和論語	1333	28	14	40	3
清御孝経	鎌倉後期か	1	1	1	0
天理尚書	鎌倉後期か	0	0	0	0
建長孝経	1253～1356	5	7	9	3
仁治孝経	1241～南北朝期か	12	8	14	2
建武論語	1337～室町中期か	58	14	65	12
文永論語	1270	1	1	4	1
高中論語	1303	12	8	13	6
観智尚書	1323～1354	6	1	6	0
元徳尚書	1330～室町中期か	7	2	4	1
文和尚書	鎌倉後期か～1354	2	2	2	0

6.1.6 長母音表記

- ・経書類における長母音表記は極めて稀である。比較的に多く現れる鈔本は後筆が多く、鎌倉時代までの経書類の仮名音注の中にはほぼ登場しない。
- ・長母音表記が加點される字は曲調である、平声軽・去声（上声全濁字を含む）に集中する。
- ・長母音表記は一部の鈔本において、一部の熟語に集中して加點される。以下に被注字および熟語を示す。

平声字（平軽）

「^{キイ}姫」高中論語 1 例（熟語なし）

「^{キイ}希」文永論語 1 例、高中論語 1 例（熟語なし）

「夫^{フウ・フゝ}」建武論語 8 例（夫子 8 例）

「烏^ウ」正和論語 1 例（烏獲 1 例）

上声字

「侈^{シイ}」観智尚書 1 例（驕侈 1 例）

「排^{ヒイ}」元徳孝経 1 例（排々 1 例、去声点加点）

「唯^{イゝ}」三千孝経 1 例（熟語なし）

「旅^{リヨウ}」建武論語 1 例（軍旅 1 例）

「舞^{ブウ}」建武論語 1 例（韶舞 1 例）

上声全濁字

「父^{フウ・フゝ}」建武論語 5 例（父母 5 例）、「父^{フウ}」正安孝経（父子 1 例）

去声字

「四^{シイ}」建武論語 5 例（四方 4 例、四時 1 例）、三千孝経（四嶽 1 例、四方 1 例）、
正安孝経 1 例（四十 1 例）

「食^{シイ}」建武論語 2 例（蔬食 2 例）

「至^{シイ}」建武論語 2 例（至徳 2 例）

「是^{シイ}」建武論語 3 例（熟語なし）

「弒^{シイ}」建武論語 1 例（熟語なし）

「殺^{シイ}」建武論語 2 例（熟語なし）、正安孝経 2 例（熟語なし）

「噫^{イゝ・キイ}」建武論語 3 例（熟語なし）

「喟^{キイ}」建武論語 1 例（喟然 1 例）

「牙^{カア}」文永論語 1 例（鮑叔牙 1 例）

「富^{フゝ}」建武論語 1 例（富貴 1 例）

6.1.7 m・n 韻尾字の表記

- ・ 経書類における m・n 韻尾の区別は鎌倉中期鈔本からは多く混同している。
- ・ m 韻尾の表記は「ン表記」へと統合する資料が多く、鎌倉時代以降に加点された鈔本には、よりその傾向が顕著である。
- ・ n 韻尾の表記はほぼ「ン表記」に安定している。

表 6-9 m・n 韻尾字の表記

資料名	加点時期	n 韻尾		m 韻尾	
		ン表記	ム表記	ム表記	ン表記
高清論語	鎌倉初期か	107	0	29	0
群書尚書	1253	29	0	1	10
群書孝経	1257	2	0	0	1
群書論語	1257	12	0	0	5
三千論語	1277	41	5	16	3
永仁孝経	1299	9	0	0	7
正安孝経	1302	238	11	2	50
元亨孝経	1321	35	8	7	8
嘉暦論語	1328	62	4	3	19

元徳孝経	1330	14	1	6	4
正和論語	1333	86	127	40	16
清御孝経	鎌倉後期か	10	0	7	3
天理尚書	鎌倉後期か	2	5	0	1
建長孝経	1253~1356	49	5	1	15
仁治孝経	1241~南北朝期か	70	2	1	20
建武論語	1337~室町中期か	588	32	21	59
文永論語	1270	29	0	0	14
高中論語	1303	85	6	9	12
観智尚書	1323~1354	29	0	1	10
文和尚書	鎌倉後期か~1354	9	1	0	2
元徳尚書	1330~室町中期か	35	5	1	7

6.1.8 促音化

- ・ k 韻尾の促音化は、p 韻尾字より稀である。
- ・ 熟語のみならず、無声音である、サ行変格活用動詞「す」（以下の実例には「サ変」として示した）、助詞「と」「は」などに後続する場合にも見られる。
- ・ 後続音に有声音があっても、促音表記となる字が「執」「湿」の2字存する。このような字は、仮名は語形が促音としてある程度、安定した状態であり、独立した状態でも、促音に読まれていたと見られる（「執^{シツ}礼」「執^{シツ}夷」「原^{シツ}湿」）。
- ・ 経書類からは「早^{サツ}急」「牛^{キツ}車」など u 韻尾字の促音表記は認められない。

p 韻尾字

「揖^{イツ}」 正和論語 2 例（サ変 2 例）、嘉暦論語 1 例（サ変 1 例）、建武論語 3 例（サ変 3 例）

「盍^{カッ}」 群書論語 1 例（助詞「は」1 例）

「雑^{サツ}」 観智尚書 2 例（雑繪 1 例、雑采 1 例）

「集^{シツ}」 正和論語 1 例（集解 1 例）、建武論語 1 例（集解 1 例）

「執^{シツ}」 正和論語 2 例（執鞭 1 例、執礼 1 例）、建武論語（執鞭 1 例、執礼 1 例）

元徳尚書 1 例（執夷 1 例）

「十^{ジツ}」 建武論語 1 例（十室 1 例）、高中論語 1 例（十世 1 例）

「湿^{シツ}」 元亨孝経 1 例（原湿 1 例）

「撰^{セン}」 正和論語 2 例（サ変 1 例、助詞「と」1 例）、建武論語 1 例（サ変 1 例）

高中論語 1 例（サ変 1 例）、仁治孝経 1 例（サ変 1 例）、正安孝経 1 例（サ変 1 例）

「接^{ケツ}」 正和論語 1 例（サ変 1 例）、仁治孝経 1 例（サ変 1 例）

「葉^{エツ}」 建武論語 3 例（葉公 3 例）

「答^{タツ}」 元徳尚書 1 例（助詞「は」1 例）、観智尚書 1 例（答拝 1 例）、

三千孝経 1 例（答対 1 例）

「法^{ハツ}」 建武論語 1 例（法度 1 例）、仁治孝経 1 例（法象 1 例）、三千孝経 1 例（法度 1 例）

元亨孝経 2 例（法象 1 例、法服 1 例）

k 韻尾字

「学^{カッ}」 永仁孝経 1 例（学校 1 例）

- 「^{ケツ}撃」正和論語 1 例（撃磬裏 1 例）
- 「^{ヤツ}析」高中論語 2 例（サ変 1 例）
- 「^{シヤツ}爵」三千孝経 1 例（爵級 1 例）
- 「^{トツ}篤」正和論語 1 例（篤行 1 例）、高清論語 2 例（篤敬 2 例）、高中論語 1 例（篤敬 1 例）
- 「^{ハツ}百」建武論語 3 例（百官 2 例、百工 1 例）
- 「^{ヒョツ}偏」三千孝経 1 例（偏下 1 例）、元徳孝経 1 例（偏下 1 例）
- 「^{リツ}六」正安孝経 1 例（六合 1 例）

6.1.9 t 韻尾の仮名表記

- ・鎌倉時代における経書類における t 韻尾は原則「ツ」表記となる。
- ・少数ある「チ」表記のほとんどは前接母音が前寄り母音の「イ段音」「エ段音」に集中する。

表 6-10 t 韻尾字の仮名表記

資料名	加點時期	ツ表記	チ表記	チ・ツ並記	零表記
高清論語	鎌倉初期か	57	0	0	0
群書尚書	1253	14	0	0	0
群書孝経	1257	2	0	0	0
群書論語	1257	9	0	0	0
三千論語	1277	23	1	0	0
永仁孝経	1299	3	0	0	0
正安孝経	1302	63	2	0	2
元亨孝経	1321	14	1	0	0
嘉暦論語	1328	31	0	0	0
元徳孝経	1330	8	0	0	0
正和論語	1333	78	1	0	0
清御孝経	鎌倉後期か	5	0	0	0
天理尚書	鎌倉後期か	1	0	0	0
建長孝経	1253～1356	23	0	0	1
仁治孝経	1241～南北朝期か	28	0	0	0
建武論語	1337～室町中期か	168	5	4	0
文永論語	1270	14	0	1	0
高中論語	1303	26	1	0	0
観智尚書	1323～1354	10	0	0	0
文和尚書	鎌倉後期か～1354	7	0	0	0
元徳尚書	1330～室町中期か	25	0	0	0

6.1.10 呉音・百姓読みの混入

- ・『經典釈文』所引の反切・同音注を伴う字は、呉音・百姓読みが加點される比率が高くなる。
- ・呉音形が混入される字の多くは、生活においてよく利用される常用度が高い字に集中する
- ・韻書の体系からずれる非規範的な字音は、字画の一部による類推、字体の類似により混同、多音字における捉え方の誤謬などの多様な原因による。
- ・「^{キヤツ}日・^{ヤツ}日」（于母・月韻合、演繹的な字音「エツ」）は非規範的な字音でありながら、複数の経書類鈔本において同様の字音が見られる。

6.2 声点

6.2.1 轻声点の加点

- ・系統に関係なく、鎌倉初期から中期までの資料は平声・入声の軽重は混同は激しいものの、六声体系を保っている。
- ・鎌倉後期以降の資料は六声体系を保つものと、四声体系へと安着するものとが存するが、六声体系は底本により忠実な移点によるものであり、軽重の区別はほぼ消滅すると見られる。

表 6-11 平声・入声の轻声点

資料名	加点時期	加点種類	平重点	平軽点	入重点	入軽点	体系
高清論語	鎌倉初期か	—	22	24	4	7	六声
群書尚書	1253	—	29	33	36	11	六声
群書孝経	1257	—	3	4	2	0	六声
群書論語	1257	—	24	10	17	5	六声
三千孝経	1277	円	19	18	5	13	六声
		墨	81	85	49	51	六声
		星	0	0	3	1	四声に近い
永仁孝経	1299	墨	70	8	16	7	六声
		朱	172	0	52	0	四声
正安孝経	1302	墨1	38	4	15	10	六声
		墨2	17	19	17	5	六声
		朱	9	5	0	1	四声に近い
元亨孝経	1321	墨	38	1	28	1	四声に近い
		朱	1	0	1	0	四声
嘉暦論語	1328	—	338	64	169	95	六声
元徳孝経	1330	墨	218	24	92	16	六声
		朱	2	0	0	0	四声
正和論語	1333	—	230	41	161	21	六声
清御孝経	鎌倉後期か	—	4	2	2	1	四声に近い
天理尚書	鎌倉後期か	朱	2	0	0	2	四声
		墨	0	0	0	0	不明
建長孝経	1253～1356	—	147	21	45	4	六声
仁治孝経	1241～南北朝期か	—	116	38	30	15	六声
建武論語	1337～室町中期か	—	343	17	141	46	六声
文永論語	1270	—	22	25	12	30	六声
高中論語	1303	—	47	35	17	23	六声
観智尚書	1323～1354	朱	27	0	11	1	四声に近い
		墨	5	1	3	4	六声
文和尚書	鎌倉後期か～1354	朱	21	0	7	2	四声に近い
		墨	3	0	3	1	四声に近い
元徳尚書	1330～室町中期か	朱	4	1	0	2	四声に近い
		墨	1	2	3	1	六声

6.2.2 上声全濁字の去声化

- ・中原家鈔本における上声全濁字は、高い比率で去声点が施されている。
- ・孝経鈔本の場合、京都系統鈔本より関東系統鈔本の方が上声点加点の比率が高い。
- ・清原家鈔本における、上声全濁字の上声点加点の比率の原因としては、一音節字の去声化、中低型の回避などの複数の原因があると判断されるが、孝経のうち関東系統鈔本（主とし

て清原教隆の影響がある)のように、韻書に基づいた字音に修正が加わっている可能性が高い。

- ・特に、清原教隆が加点に直接・間接的に関わっている仁治孝経・建長孝経・群書治要（尚書・孝経・論語）・正和論語・嘉暦論語は、上声全濁字に去声点を加点する比率が比較的
に低い。なお、教隆の孫、教有が関わった、永仁孝経のうち、特に墨点は教隆加点本の伝承による加点であると見られる。

表 6-12 上声全濁字の去声化

資料名	加点時期	加点種類	上声点	去声点	その他	去声点の比率
高清論語	鎌倉初期か	—	1	14	1	87.5%
群書尚書	1253	—	3	6	0	66.7%
群書孝経	1257	—	1	1	0	50.0%
群書論語	1257	—	4	3	0	42.8%
三千孝経	1277	円	1	9	1	81.8%
		墨	14	43	1	74.1%
		星	0	0	0	—
永仁孝経	1299	墨	26	6	0	18.6%
		朱	3	31	0	91.2%
正安孝経	1302	墨1	3	11	2	68.8%
		墨2	0	11	0	100%
		朱	0	0	1	0%
元亨孝経	1321	朱	1	12	0	92.3%
		墨	0	2	0	100%
嘉暦論語	1328	—	17	82	2	82.8%
元徳孝経	1330	墨	2	67	0	97.1%
		朱	0	0	0	—
正和論語	1333	—	15	48	1	75.0%
御注孝経	鎌倉後期か	—	0	4	0	100%
天理尚書	鎌倉後期か	朱	1	3	0	75.0%
		墨	0	0	0	—
建長孝経	1253～1356	—	27	15	0	35.7%
仁治孝経	1241～南北朝期か	—	31	14	0	31.1%
建武論語	1337～室町中期か	—	9	109	2	90.8%
文永論語	1270	—	1	16	2	84.2%
高中論語	1303	—	2	15	0	88.2%
観智尚書	1323～1354	朱	1	4	0	80.0%
		墨	0	3	0	100%
文和尚書	鎌倉後期か～1354	朱	0	3	0	100%
		墨	1	7	0	87.5%
元徳尚書	1330～室町中期か	朱	0	2	0	100%
		墨	2	0	0	0%

6.2.3 濁声点の加点

- ・清原家鈔本のうち、主として墨筆の声点に集中して、濁声点の比率が高い。特に清原教隆が関与した（もしくは教隆加点本を底本とした）鈔本は、殆どが9割以上の高い比率で濁声点が施されている。
- ・清原家鈔本の中でも、加点者の所属する集団が関わるか、濁点表示が仮名へする移行する表記の変化、中原家点の混入などの要因により、濁声点の加点に影響があったと考えられる。

- ・ 中原家鈔本は一概に言えないが、清原家鈔本の加点を用いて加点する資料（高中論語・元徳尚書）があり、濁声点の比率が高い資料は清原家点の利用によるものであると推定される。
- ・ 漢音形において、原則濁音となる声母（明母・泥母・疑母・日母）以外の字の中で濁声点
が施される事例が散見されるが、これらの多くは全濁字に属する。また、僅かであるが、
一部は、連濁を反映したために、濁声点が施されたと疑われる字がある。

表 6-13 各鈔本における濁声点の加点の比率

資料名	加点時期	加点種類	単点	濁点	濁点の比率
高清論語	鎌倉初期か	—	19	2	10.5%
群書尚書	1253	—	5	56	91.8%
群書孝経	1257	—	0	6	100%
群書論語	1257	—	0	19	100%
三千孝経	1277	円	22	0	0%
		墨	13	122	90.4%
		星	0	20	100%
永仁孝経	1299	墨	5	46	90.2%
		朱	13	35	72.9%
正安孝経	1302	墨1	22	15	40.5%
		墨2	2	49	96.1%
		朱	4	0	0%
元亨孝経	1321	朱	0	0	—
		墨	17	8	32.0%
嘉暦論語	1328	—	13	255	95.1%
元徳孝経	1330	墨	30	107	78.1%
		朱	0	0	—
正和論語	1333	—	16	168	91.3%
清御孝経	鎌倉後期か	—	2	0	0%
天理尚書	鎌倉後期か	朱	4	0	0%
		墨	0	0	—
建長孝経	1253～1356	—	14	60	81.1%
仁治孝経	1241～南北朝期か	—	7	86	92.5%
建武論語	1337～室町中期か	—	201	24	10.7%
文永論語	1270	—	28	14	33.3%
高中論語	1303	—	22	64	74.4%
観智尚書	1323～1354	朱	4	12	75.0%
		墨	4	3	42.8%
文和尚書	鎌倉後期か～1354	朱	2	9	81.8%
		墨	5	2	28.6%
元徳尚書	1330～室町中期か	朱	2	0	0%
		墨	1	4	80.0%

6.2.4 非規範的な声点

- ・ 本研究における、非規範的である声点として分類したものとしては、以下のような諸原因
によって、生じるものと考えられる。
 - ①まず、『經典釈文』に掲出されない被注字に集中する。特に、『經典釈文』の利用に限
界があった『孝経』諸本には、典拠が不明な加点が多く現れる。
 - ②多音字の場合、博士家・個人により一部の字の読み方を異にすることにより、加点の仕
方にも影響を与えている。
 - ③呉音声調が混入されていると疑われる事例が一部含まれる。

- ④『經典積文』に複数の字音がある場合は、通常最初に掲出される音注が加点に用いられる。ところが、一部の字は、2番目以降の音注に依拠して読まれ、同系統の鈔本において、それが伝承されてきたためであると判断される。
- ⑤被注字が上声字であるが、『經典積文』所引の反切下字が上声全濁字であり、去声点として誤認することにより、上声字に去声点が施されている事例が僅かでありながら、確認される。

6.3 各典籍における『經典積文』の利用

- ・現存本の通志堂本『經典積文』と各本に書き込まれた音注とを比較すると、大部分は相通ずる。ただし、注記の形式・順序・反切用字が異なる事例も多く存し、通志堂本には所収されていない音注が各鈔本で散見される。これは通志堂本が、各鈔本に利用された『經典積文』に比べて、内容・形式が多く改編されたことを物語るものである。
- ・『論語』『古文尚書』の各本には『經典積文』を用いて書き込まれた反切注・同音注が含まれ、声点・仮名点との有機的関係を持つ。
- ・『經典積文』の音注の書き込みは特に、多音字・難読字にその書き込みが集中する。
- ・『古文孝経』（孔安国伝）の場合、『經典積文』の「孝経音義」が鄭注本を底本にして作成されたため、その利用は『論語』『古文尚書』ほどの有機的なものではない。また、他系統の孝経鈔本である、御注孝経の中の反切注・同音注を調べた結果、その7割以上が切韻系韻書を典拠としていることが確認できた。
- ・『經典積文』に利用された、鄭注本『孝経』の訓点資料としては、群書治要所収本が唯一であるが、反切注・同音注はまったく見いだせない。群書治要の『論語』も反切注1例・同音注1例のみである。これは『群書治要』が帝王学にその書写の目的があり、小学書である『論語』『古文尚書』は既に学習が先行されているためであると判断される。

第 2 部 資料篇

第1章 各資料における声点の『広韻』対照表

【凡例】

- ・灰色の升は数量的に優勢であることを示す。
- ・太線は漢音声調の理論上の加點箇所である。
- ・括弧無しは異なり字数、括弧の中は延べ字数を示す。
- ・多音字の場合、異なり字数では別字として扱う。
- ・1つの被注字に複数の同種声点を施す場合は省く。
- ・複数加點例は基本的に除くが、複数加點の際に片方に合点が付されている場合は、合点が付されていない声点を捨象するが、両方に合点が付されている場合は複数加點例として扱い、下の表においては除外する。

1.1 論語

(1) 正和本（完本）

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	121 (190)	32 (40)	86 (148)	80 (123)	1 (1)		1 (1)	1 (1)	2 (2)		2 (2)	3 (3)				2 (2)
平輕	21 (31)	7 (10)	6 (7)	6 (6)												
上	2 (2)	1 (1)		2 (2)	70 (115)	17 (28)	12 (15)	52 (81)	3 (3)		4 (4)	4 (4)				
去	7 (7)		2 (2)	3 (4)	6 (7)	2 (2)	34 (48)	3 (3)	129 (225)	27 (40)	73 (153)	61 (126)				1 (1)
入輕													11 (12)	1 (1)	6 (6)	7 (8)
入				1 (1)							1 (1)		56 (103)	12 (18)	35 (57)	29 (40)

(2) 嘉曆本（完本）

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	150 (281)	37 (58)	94 (194)	85 (175)	2 (2)		2 (2)	1 (1)	3 (3)		4 (4)	4 (4)				
平輕	42 (58)	8 (8)	10 (10)	5 (6)	1 (1)						1 (1)					
上	3 (3)		1 (1)	1 (1)	80 (168)	18 (33)	12 (17)	55 (96)	6 (7)	4 (4)	4 (4)	6 (11)				
去	4 (4)		2 (2)	1 (1)	11 (11)	2 (2)	40 (82)	12 (22)	143 (314)	31 (50)	82 (194)	65 (157)	1 (1)			
入輕											1 (1)		42 (63)	8 (10)	27 (35)	14 (22)
入			1 (1)										53 (98)	9 (14)	29 (50)	29 (57)

(3) 建武本 (完本)

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	160 (279)	39 (65)	102 (221)	86 (167)			2 (2)	1 (1)	3 (3)	2 (2)	2 (2)	3 (4)				
平輕	15 (17)		1 (1)	1 (1)												
上	2 (2)	3 (4)	1 (1)	2 (2)	88 (161)	20 (46)	7 (9)	57 (91)	4 (5)		4 (5)	5 (9)				
去	4 (4)		1 (1)	3 (4)	7 (7)	4 (5)	55 (109)	5 (8)	159 (449)	41 (72)	88 (257)	68 (216)	2 (2)		1 (2)	1 (1)
入輕													22 (28)	4 (5)	5 (5)	12 (13)
入											1 (1)		55 (84)	9 (14)	40 (70)	26 (43)

(4) 高山寺清原本

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	14 (19)	3 (3)	24 (30)	17 (30)			1 (1)	1 (1)				1 (1)	1 (1)		2 (2)	
平輕	20 (22)	2 (2)		1 (1)	1 (1)						1 (1)					
上			1 (1)		16 (21)	4 (4)	1 (1)	6 (7)				1 (1)		1 (1)		
去		1 (2)	1 (2)	2 (3)	3 (4)	2 (2)	14 (14)	1 (1)	40 (71)	8 (10)	28 (41)	20 (34)			1 (1)	
入輕													5 (5)		2 (2)	2 (2)
入					1 (1)								1 (1)		5 (5)	3 (3)

(5) 群書治要卷第9/論語部分

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	17 (20)	3 (4)	11 (14)	7 (8)	1 (1)	1 (1)						2 (3)				
平輕	6 (9)	1 (1)	1 (1)	1 (1)												
上			1 (1)		8 (9)	1 (1)	4 (4)	5 (9)			1 (1)	1 (1)				
去				1 (1)	1 (1)		3 (3)		22 (30)	7 (7)	8 (15)	12 (25)				
入輕													1 (3)	2 (2)	1 (1)	
入													5 (12)	2 (2)	3 (3)	3 (3)

(6) 文永本

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	16 (16)	5 (6)	22 (27)	22 (27)			1 (2)	1 (1)								
平輕	18 (20)	4 (5)	1 (1)					1 (1)	1 (1)							
上	2 (3)			1 (1)	17 (22)	5 (6)	1 (1)	9 (9)	1 (1)				1 (1)			
去			2 (2)		3 (3)	1 (1)	14 (16)	1 (1)	34 (53)	9 (10)	20 (30)	22 (43)				
入輕													14 (18)	3 (6)	4 (6)	5 (6)
入													3 (5)	2 (2)	12 (13)	5 (5)

(7) 高山寺中原本

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	29 (36)	9 (11)	25 (38)	30 (66)		1 (1)		1 (1)	1 (2)		5 (6)	2 (2)				1 (1)
平輕	23 (25)	9 (10)	5 (5)	1 (1)												
上	1 (1)		3 (3)	1 (1)	22 (36)	6 (7)	2 (2)	10 (12)	3 (3)	2 (2)		1 (1)			1 (1)	
去	5 (6)		1 (1)	2 (3)	3 (3)	1 (1)	12 (15)	3 (3)	40 (62)	6 (9)	26 (46)	28 (53)	1 (1)			1 (1)
入輕									1 (1)				12 (13)	3 (3)	5 (7)	5 (7)
入													8 (10)	1 (1)	9 (11)	4 (6)

1.2 古文尚書

(1) 群書治要卷第2

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	15 (20)	6 (9)	28 (33)	36 (50)					1 (1)			1 (1)				
平輕	22 (29)	4 (4)	3 (3)	1 (2)												
上			1 (1)		15 (21)	6 (7)	3 (3)	8 (8)	1 (1)			1 (1)				
去	1 (1)				1 (1)	2 (2)	5 (6)	1 (1)	27 (35)	2 (2)	21 (38)	26 (33)				
入輕													4 (4)	1 (1)	1 (1)	6 (6)
入													16 (18)	8 (9)	7 (7)	9 (9)

(2-1) 天理本／朱点

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	1 (1)	1 (1)	6 (8)	2 (2)												
平輕																
上					2 (2)	1 (1)	1 (1)	1 (1)								
去			1 (1)				3 (3)		5 (5)		3 (9)	2 (3)				
入輕													2 (2)			
入															1 (1)	

(2-2) 天理本／墨点

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平																
平輕																
上																
去											2 (2)					
入輕																
入																

(3-1) 観智院本／朱点

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	19 (23)	3 (4)	8 (21)	14 (17)					2 (4)							
平輕																
上			2 (2)		4 (5)	2 (2)	1 (1)		1 (1)		2 (2)	1 (1)				
去				1 (1)	2 (2)		2 (4)	1 (1)	14 (23)	1 (1)	8 (11)	10 (17)				
入輕																1 (1)
入													3 (5)	2 (2)	6 (7)	4 (4)

(3-2) 観智院本／墨点

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	3 (3)	2 (2)	10 (12)	1 (1)					1 (1)			1 (1)				
平輕		1 (1)														
上					4 (6)	2 (2)		3 (3)			1 (1)					
去					1 (1)		3 (3)	1 (1)	11 (16)	2 (2)	12 (19)	8 (10)				
入輕													2 (2)	1 (1)		1 (1)
入													3 (3)		1 (1)	

(4-1) 元徳本／朱点

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	3 (3)	1 (1)	8 (8)	4 (4)												
平輕	1 (1)															
上	1 (1)				2 (10)	3 (3)		1 (1)								
去	1 (1)						2 (2)		5 (6)	1 (1)	9 (13)	7 (7)				
入輕													2 (2)		1 (1)	
入																

(4-2) 元徳本／墨点

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	1 (1)		1 (1)													
平輕	2 (2)															
上					1 (1)		2 (2)			1 (1)						
去							1 (1)	2 (2)	2 (2)		2 (2)	7 (8)				
入輕													1 (1)			
入														2 (2)		1 (1)

(5-1) 文和本／朱点

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	13 (17)	2 (4)	2 (2)	3 (4)					1 (1)			1 (2)				
平輕																
上					4 (4)	2 (2)		3 (3)	1 (1)							
去					2 (2)		1 (3)	1 (1)	7 (13)	1 (1)	3 (4)	8 (8)				
入輕																2 (2)
入													3 (5)	1 (1)	3 (3)	1 (1)

(5-2) 文和本／墨点

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	2 (2)	1 (1)	2 (2)	2 (2)												
平輕																
上					5 (5)		1 (1)	1 (1)								
去					1 (1)		5 (7)		9 (11)	1 (2)	4 (4)	6 (6)				
入輕																1 (1)
入													3 (3)		1 (1)	

1.3 孝經

(1) 仁治本

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	73 (97)	12 (17)	30 (41)	37 (52)					1 (3)			3 (4)			1 (1)	2 (2)
平輕	27 (34)	3 (4)	5 (5)	1 (1)												
上				3 (6)	33 (51)	9 (11)	23 (32)	24 (28)			2 (2)	1 (1)				1 (1)
去	1 (3)		2 (3)		2 (2)	1 (1)	11 (15)	1 (1)	63 (108)	10 (14)	38 (96)	41 (70)				
入輕													8 (8)	1 (1)	3 (3)	5 (6)
入				1 (3)				1 (1)					18 (18)	1 (1)	4 (4)	11 (12)

(2) 建長本

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	91 (122)	18 (22)	30 (43)	34 (46)					2 (4)							
平輕	13 (18)	1 (3)	2 (3)	2 (2)												
上	1 (1)	1 (1)	1 (1)		32 (48)	11 (13)	19 (28)	23 (25)			1 (1)	1 (1)				
去	1 (1)		3 (3)		2 (2)	1 (1)	13 (16)		66 (107)	11 (16)	41 (95)	42 (67)				1 (1)
入輕													2 (2)	1 (1)		1 (1)
入			1 (1)										25 (27)	2 (2)	8 (8)	13 (16)

(3-1) 永仁本／墨点

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	49 (60)	6 (6)	30 (39)	23 (27)					1 (3)							
平輕	6 (9)			1 (1)												
上		1 (1)			21 (33)	5 (5)	20 (27)	19 (19)			1 (1)	1 (1)	1 (1)			
去	1 (1)						5 (6)	2 (2)	41 (58)	8 (11)	24 (43)	25 (39)				
入輕													3 (3)			4 (4)
入													6 (6)	2 (2)	3 (3)	7 (8)

(3-2) 永仁本／朱点

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	67 (104)	12 (68)	21 (32)	20 (32)					1 (1)		1 (1)					
平輕																
上					23 (38)	8 (10)	3 (3)	11 (15)	3 (3)			1 (2)				
去	2 (4)		1 (1)		3 (4)	2 (2)	18 (31)	3 (3)	48 (150)	3 (3)	24 (82)	29 (51)				
入輕																
入													27 (37)	6 (7)	16 (20)	8 (9)

(4-1) 三千院本／円点

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	19 (19)	1 (1)	13 (14)	8 (9)			1 (1)									
平輕	12 (13)	4 (5)	1 (1)						1 (1)							
上					13 (13)	6 (7)	1 (1)	6 (8)	1 (1)			1 (1)				
去	3 (3)				1 (1)	2 (2)	10 (10)		19 (40)	4 (6)	21 (55)	23 (37)				
入輕													10 (10)			3 (3)
入													3 (3)		3 (3)	2 (2)

(4-2) 三千院本／墨点

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	54 (72)	8 (8)	31 (51)	41 (79)			1 (1)		3 (3)		2 (3)	2 (2)				
平輕	48 (70)	11 (16)	6 (6)	3 (3)												
上	3 (3)			2 (2)	35 (74)	6 (8)	11 (15)	26 (37)	3 (5)	2 (3)	3 (3)	7 (7)				
去	1 (1)	1 (1)			1 (2)	2 (2)	25 (47)	5 (5)	53 (135)	7 (10)	36 (76)	30 (61)				1 (3)
入輕													19 (27)	4 (6)	6 (9)	14 (19)
入													21 (27)	7 (7)	17 (21)	12 (15)

(4-3) 三千院本／星点

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平			1 (1)	7 (12)												
平輕				1 (1)												
上							2 (2)									
去			1 (1)		1 (1)				3 (3)		2 (2)	1 (2)				
入輕																1 (1)
入															1 (1)	3 (3)

(5-1) 正安本／墨点 1

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	31 (34)	5 (5)	16 (22)	16 (22)	1 (1)		1 (1)		1 (1)			1 (1)	1 (1)			
平輕	3 (3)	1 (1)					1 (1)		1 (1)							
上	1 (1)				11 (16)	1 (1)	2 (3)	6 (6)	1 (1)			2 (2)				
去	1 (1)	1 (1)	2 (2)		3 (3)		11 (13)		26 (35)	5 (7)	17 (34)	14 (24)				1 (1)
入輕													5 (7)	1 (1)	3 (3)	2 (2)
入													11 (11)	1 (1)	5 (5)	4 (4)

(5-2) 正安本／墨点 2

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	14 (15)	2 (2)	8 (8)	18 (28)								2 (2)				
平輕	13 (16)	3 (3)	1 (1)						1 (1)							
上				1 (1)	12 (19)	3 (4)		3 (6)								
去		1 (1)	2 (2)	1 (1)		2 (2)	7 (12)		23 (31)	4 (4)	17 (18)	13 (20)				
入輕													3 (3)		1 (1)	2 (2)
入													10 (10)	3 (3)	3 (3)	4 (4)

(5-3) 正安本／朱点

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	8 (8)	1 (1)	4 (4)	2 (2)			1 (1)									
平輕	5 (5)															
上				1 (1)	3 (3)	2 (3)	1 (1)	2 (2)	1 (1)							
去	1 (1)					1 (1)		1 (1)	6 (8)	1 (1)	10 (17)	7 (10)				
入輕													1 (1)			
入															2 (2)	

(6-1) 元亨本／朱点

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	30 (34)	5 (5)	11 (12)	8 (11)												
平輕	1 (1)			2 (2)												
上					11 (13)	6 (6)	1 (1)	3 (3)				2 (2)				
去	1 (1)	2 (2)					11 (14)	1 (1)	26 (38)	8 (8)	18 (37)	19 (28)				
入輕																1 (1)
入													15 (19)		14 (14)	9 (9)

(6-2) 元亨本／墨点

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	1 (1)		1 (1)													
平輕																
上					2 (2)											
去		1 (1)					2 (2)		2 (2)		2 (2)	1 (1)				
入輕																
入													1 (1)			

(7-1) 元徳本／墨点

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	83 (142)	15 (77)	41 (67)	35 (71)					1 (1)			1 (1)				
平輕	14 (20)	3 (4)														
上	1 (1)		1 (1)		28 (59)	9 (16)	2 (2)	22 (31)	4 (5)		1 (1)	3 (4)				
去	4 (6)		1 (1)	1 (1)	6 (9)	5 (5)	30 (74)	5 (8)	58 (243)	10 (14)	44 (137)	44 (105)				
入輕													8 (11)	2 (2)	1 (1)	3 (3)
入													36 (60)	9 (11)	26 (42)	16 (21)

(7-2) 元徳本／朱点

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	1 (2)		2 (2)													
平輕																
上					1 (1)											
去												1 (1)			1 (1)	
入輕																
入															2 (2)	

(8) 群書治要卷第9/孝經部分

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	3 (3)		1 (1)	3 (3)							2 (2)					
平輕	3 (3)	1 (1)	1 (1)			1 (1)										
上					1 (4)	2 (2)	1 (1)									
去							1 (1)		4 (5)		4 (11)	5 (9)				
入輕																
入													2 (2)			

(9) 清家御注本

広韻 声点	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁
平	4 (4)		9 (9)	1 (1)								1 (1)				
平輕	2 (2)															
上					1 (1)	1 (1)		2 (2)								
去			1 (1)				4 (4)		9 (15)	1 (1)	4 (10)	4 (4)				
入輕													1 (1)		1 (1)	
入													1 (1)	1 (1)		

第2章 分紐分韻表¹⁴⁸⁾

<凡例>

- 被注字のうち、一括して扱うべき、異体字は、被注字の次に () を以て表す。
例) 諡(諡)
- ①②のように、○で囲んだ数字はは巻数を表す。
- アラビア数字は行数である。
- 仮名音注、声点 ()、反切 (□□反)、類音注 (音□) の順序で表す。
- 同行に同注記を有する同字が重複して出現する場合は、行数を出現数の通りに記す。
例) 永²³⁰、230(入軽)
- 当該字が多音字であり、他声母・他韻母に属する場合には(→)に他の声母・韻母に属することを表示する。
- 以下のような略称を用いて、小字で加点の詳細を表す。
角-角筆、墨-墨筆・朱-朱筆、合-合点、左-左側 (仮名音注)、右-右側 (反切・同音注)、
注-割注形式の音注、見消-見せ消ち、抹-抹消
- 濁声点の種類は以下のように区別する、但し、紙面の割愛のために声点の種類が1種類の資料については特記しない。
濁A-濁声点「◦◦」、濁B-濁声点「◦-」
- 『広韻』未収録字である被注字には「×」印を付し、被注字は収録されているが、当該の声韻である場合は「△」印を付する。未収録字の場合、他の字と包摂可能である場合は「⇒「○」」で表す。
- 不審箇所は[ママ]を付す。
- 漢字音注記は判読可能であるが、本文が著しく欠損した場合は取り上げない。
- 同音注を表す「音・六・十・上・と」といった表示は一括して「音」に翻字する。

2.1 論語諸本分紐分韻表

清原家本：群^群群書治要論語部分、清^清高山寺清原本、正^正正和本、嘉^嘉嘉暦本、建^建建武本
 中原家本：文^文文永本、中^中高山寺中原本

01 通撰				
01	東(直)	董(直)	送(直)	屋(直)
幫				ト 正 ^正 ①71A ホク、嘉 ^嘉 ①70A(入濁A)
並			鳳 正 ^正 ⑨168(去)、嘉 ^嘉 ⑨169(去)、建 ^建 ⑤41 ホウ、⑨140(去)	
明	蒙 正 ^正 ⑧83 モウ(平)、正 ^正 ⑧146 モウ、⑧146A(平)、嘉 ^嘉 ⑧146、⑧146A(平)、建 ^建			木 正 ^正 ①84A、⑦137(入濁A)、嘉 ^嘉 ①83A、②128、③26A(入濁A)、⑦136 ホク、

¹⁴⁸⁾ 本分紐分韻表に含まれている『群書治要』の巻第2 (尚書)・巻第9 (論語・孝経) については、既に佐々木 (2009) 氏による著書にて公開されており、大方の部分は一致することを断っておく。

	⑧120 モウ、 甲 ⑧93、 ⑧ 93A モウ			建 ②108、⑦114、⑩38 ボク 沐 清 ⑦64、⑦65A ホク、 正 ⑤198A ホク、 嘉 ⑤199A 音目、⑦258 ホク、 建 ⑤171A 音目、⑦216 ホク、 文 ⑦184 ホク
端	東 清 ⑦14A トウ、 正 ①9(平)、 嘉 ①8(平軽)、 建 ①7 トウ(平)、⑤200、⑧120、⑨28 トウ、			
透	通 正 ①39A、②124A トウ(平)、①58A(平軽)、⑥223A、⑥223A、⑨125、⑩113A トウ、 嘉 ①38A、②124A(平)、①57A(平軽)、 建 ⑨104 トウ	侗 正 ④216 トウ(平・上 ^キ)勅動反一音通、 嘉 ④216 トウ(平・上 ^キ)勅動反一音通、 建 ④180 トウ(上)勅動反・普通、④180A(上)、 甲 ④122 トウ(去)勅動反一音通	痛 建 ⑩94A トウ(去)	
定	同 清 ⑧95A トウ、 正 ①27(平軽)、②212A(平)、 嘉 ①26、②212A、⑦122、⑦122、⑦122A(平)、 建 ①23 トウ、④97、⑥134、⑦101、⑦102 トウ、⑥114 トウ ^左 (上)、⑦102A(平)、 甲 ④62A(平) 童 清 ⑧142 トウ、 建 ④85、⑥122、⑦293、⑧213 トウ、 甲 ④53 トウ、④54A、⑧164(平)	動 清 ⑧113A トウ、 正 ⑥18A(上)、 建 ⑥18A(上)	働 正 ⑥36 トウ(去)徒送反、 嘉 ⑥36(去)徒送反、 建 ⑥29 トウ(去)音洞、⑥29、⑥30、⑥31 トウ、⑥31 トウ(去)	匱 正 ⑤77 徒木反、⑤78A トク(入)、 嘉 ⑤77 徒木反、⑤78A トク(入軽)、 建 ⑤66 徒木反、⑤67A トク(入軽) 積 群 ④51A(入)、 清 ⑧89A トク、 正 ⑧158 音独、⑧159A トク(入)、 嘉 ⑧158 音独、 建 ⑧130 音独・音読、 文 ⑧118A トク、 甲 ⑧101A トク(入軽) 漬 清 ⑦53 トク(入)、⑦54A トク、⑧115A、⑧135A トク、 正 ③231A 徒木反、⑦243、⑧211A トク(入)、 嘉 ⑦242 トク(入軽)、⑦243A トク、 建 ③195A 徒木反、⑦203(入)、⑧175A トク(入)、 文 ⑦171、⑧160A トク(入軽) 獨 清 ⑧136(入)、 嘉 ⑦41A(入)、 建 ⑧205(入) 讀 (讀) 正 ②118A トク、 嘉 ②118A(入) 續 群 ④72A トク
見	公 清 ⑧104A コウ ^キ 、⑧104A コウ、 正 ①60A(平)、 嘉 ①59A、①185、②10、②52A、②88、③3、③42A、③241A、③241A、⑦46、⑦69、⑦85(平)、 建 ①158、②8、②74、③1、③2、③170、④11、④165、⑤140、⑤181、⑥54、⑥76、⑦70、⑦75、⑦185、⑦210、⑧1、⑧2、⑧162、⑧199、⑧198、⑧198、⑩116 コウ、③65A(平)、 文 ⑦175 コウ、 甲 ④34A(平軽)、⑧124 コウ 功 清 ⑧43A コウ、 正 ④244A コウ、 嘉 ⑦56A(平)、 建 ④190 コウ(平)、⑨32 コウ、⑩116 コウ ^左 工 清 ⑧28(平軽)、 正 ②9A コウ、⑧43 コフ、⑩26(平軽)、 嘉 ②9A(平)、⑩26(平軽)、 建 ⑧35(平)、⑩21 コウ(平)、⑩22A コウ		貢 清 ⑦41A コウ、⑧28 コフ、 正 ①82 コウ(去)、①108、①112(去)、 嘉 ①83A、⑦225A(去)、 建 ①69 コウ、①71A、⑤28(去)、⑥9 カウ、 文 ⑦157A コウ	穀 正 ④201 コク ^左 ・公豆反 ^上 、④202A コク(入)、⑦149 コク(入濁A)、 嘉 ④201 コク ^左 、④202、⑦148(入軽)、⑦31A(入)、 建 ④168A、⑦125、⑧94、⑧168 コク、⑦124 コク(入軽)、⑧93 コク(入)、 文 ⑦100、⑦101 コク(入軽)、 甲 ④113A コク(入軽) 穀 正 ⑤252A コク(入)古木反、 嘉 ⑤253A(入軽)古木反
溪	空 正 ①25 コウ(平)、⑥78A コウ、 嘉 ①24(平)、 建 ①21、⑤38 コウ、⑥63A(平) 控 正 ④217 コウ(平)音空、 嘉 ④217(平)、 建 ④181 コウ ^左 (平)音空、 甲 ④122 コウ ^左 (平)音空、④123A、④123A コウ	孔 正 ①21、⑦171A(上)、 嘉 ③71、③72A(上)、 建 ①3、⑧2 コウ		哭 正 ④28 コク(入)、⑥35 コク、 嘉 ④27(入軽)、 建 ④22 コク・コク ^左 、⑥29 コク
清	聰 群 ④86(平軽)、 清 ⑧127 ソウ(平)、 正 ⑧232(平)、 嘉 ⑧233(平軽)、 建 ⑧193(平)、 甲 ⑧148 ソウ			

従				族 清⑦117A ソク、正⑦103 ソク、嘉⑦103(入)、建⑦85 ソク
心				速 正②214、③41 ソク、⑩64A(入)、嘉⑩65A(入軽)、建②181A、⑩54A ソク
影				屋 正①58A ヲク(入)、嘉①57A(入軽)
匣	紅 建⑤158 コウ			斛 建⑤45A コク、正⑩135A コク(入)、嘉⑩135A(入軽)、建③130A(入)
来	籠 群②88A(平)、正⑤95A ロウ・魯東反、嘉⑤95A ロウ・魯東反、建⑤82A(平)魯東反			禄 清⑧62、⑧73A、⑧108、⑧109A ロク、正①32 ロク、①33(入軽)、嘉①31(入)、①32、①178、①179A、①184(入軽)、建①27、①27、①157、⑧85、⑧161、⑩97 ロク、①152 ロク(入軽)、文⑦100A(入軽)、甲⑧66 ロク
01	東(拗)	董(拗)	送(拗)	屋(拗)
非	風 清③81A フ、嘉②35A、⑦24A(平)、建⑥123 フウ			
敷	豊 正④246A ホウ、嘉④246A(平軽)、建④205A ホウ			覆 正①99A、⑤98、⑨100 芳服反、嘉①98A(入)芳服反、⑨101 芳服反、建①84A(入軽)芳服反、⑤84 芳服反
奉				復 正①99(入軽)、⑥21A、⑥168A フク、嘉①98(入軽)、建①84 フク _左 ・符福反、⑤139 フク(入)、⑥140A(入) 服 清⑦94、⑦95A、⑧33、⑧96 フク、正①188 フク、嘉①186、①187、①188A(入軽)、①189、⑦34(入)、建①159、①160、①162、④200、④206、⑤258、⑤169、⑤189、⑤200、⑤210、⑥122、⑦28、⑦257、⑧41、⑧142、⑧144、⑩73 フク、文⑦222(入)
明				目 正⑥173A ボク、嘉②33、③66A(入濁 A)、建②27 ボク、⑩133A ボク _左 穆 正②50A(平)、嘉②10(入濁 B)、②50A、⑩112A(入濁 A)、建②8 ボク
知	中 正①10、①34、①35(平軽)、③194 一音丁仲反、③225、③226、⑦110、⑦111A(平)、嘉①12(平軽)、①33、①34、②81A、③261、③263A、⑦110、⑦111A(平)、建①28(平軽)、②68A、③221、③36(平)、③164 チウ・丁仲反、⑦92 チウ(平軽)、文⑦71A(平)(→去声) 忠 清⑧127(平軽)、嘉①72A、①76、①190、①193、②91、②191(平)、⑦97(平軽)、建①45、①162、⑧194 チウ(平)、①65、①165、②162、③76、③112、④74、⑥189、⑥206、⑦80、⑦147 チウ、甲③149(去)		中 清⑦111A(去)、正②77A、③165A、⑥56、⑥64A、⑥76、⑦23、⑨223 丁仲反、②209A、⑤155A、⑦336A(去)丁仲反、⑥5A チウ(去)丁仲反、嘉②209A、⑥5A(去)丁仲反、⑤155A、⑥64A、⑦23、⑦24(去)、⑦335A、⑨224 丁仲反、建②177A、⑥46、⑥46A、⑥66A、⑦134A、⑨186、⑨186、⑨189(去)、③139A、⑤83A(去)丁仲反、⑤133A 丁仲反(去)、文⑦2、⑦243A(去)(→平声)	
澄	冲 嘉①32(平)、建①28 チウ		仲 清⑧108A チウ、正⑨218(去)、嘉①135A、②102、②103、③17A、③79(去)、建①150A、②96A、③68、③143(去)、②86、③67、⑦158、⑦166、⑨182 チウ(去)、③116、⑥9、⑥84、⑦180、⑦190、⑦195、⑦211、⑧47、⑨188、⑨203 チウ、文⑦137(去)、甲④	

			81A(去)、⑧125A チウ		
見	宮 ㊦⑦1(平)、㊦①11(平軽)、㊦①10、㊦④207、㊦⑦136、㊦⑩74 キウ 弓 ㊦③17A(平)、㊦③116、㊦⑥9 キウ 躬 ㊦⑤163 キウ、㊦⑤163 キウ(平軽)、㊦⑤140、㊦⑤144、㊦⑤149 キウ、㊦⑦76、㊦⑦142A(平)			鞠 ㊦⑤162 キク・九六反、㊦⑤162(入)九六反、㊦⑤140 キク・九六反、㊦⑤144、㊦⑤149 キク	
群	窮 ㊦⑦2A キウ(平)、㊦⑦7、㊦⑧8、㊦⑧8、㊦⑧9A、㊦⑧9A、㊦⑧13A キウ、㊦⑧⑧12、㊦⑩117 キウ、㊦⑧12(平)、㊦⑦137A(平)、㊦⑧9 キウ(平)、㊦⑧9、㊦⑧10、㊦⑩97 キウ、㊦⑦112A キウ(平)、㊦⑧⑦7キウ、㊦⑧7、㊦⑧12A(平)、㊦⑧8A キウ(平)				
精				躐 ㊦⑤153 シク(入)子六反、㊦⑤172 シク、㊦⑤153(入軽)、㊦⑤132 シク・子六反、㊦⑤148 シク	
心				宿 ㊦④96 息六反、㊦④98A、㊦⑥243 シユク、㊦④97 息六反、㊦④80(入)息六反、㊦⑥202 シユク 左、㊦⑥202A(入)、㊦⑨171 シク・シユク 左、㊦④50(入)息六反、㊦④50A シユク 合、㊦④50A シク(入)、 肅(肅) ㊦④64A シク、 ㊦⑧100A、㊦⑧101A、㊦⑧101A シク、㊦①26 シク(入)、㊦③141A シク、㊦③180A シク(入)、㊦①25(平・入)、㊦③180(入軽)、㊦①21 シク・シユク、㊦③119(入)、㊦③149A シク、㊦③136A ク[ママ](入)、㊦③115 シク	
生				縮 ㊦⑤175 シユク・シク・色六反、㊦⑤175 シク・色六反、㊦⑤151 シク(入)色六反、㊦⑤151 シク	
章	終 ㊦⑤46A シフ、㊦⑩51A シウ、㊦⑩42A(平)		衆 ㊦③36、㊦③37、㊦③38A、㊦④496(去)、㊦③58 シウ(去)、㊦⑤58、㊦⑤58A(去)、㊦①68、㊦⑤12、㊦⑤120A、㊦⑥296A、㊦⑦50A、㊦⑧97、㊦⑧97(去)、㊦①121 シウ、㊦②36A、㊦③265、㊦⑤12、㊦⑤120A、㊦⑥295A、㊦⑦50A、㊦⑦51A、㊦⑧96(去)、㊦⑤129A シフ、㊦①57、㊦①104、㊦⑤10、㊦⑥243、㊦⑨31、㊦⑩116 シユウ、㊦③224、㊦⑩9 シユウ(去)、㊦⑤12 シユ(去)、㊦⑤103A、㊦⑦42A、㊦⑧79A(去)、㊦⑥245 シユ、㊦⑧78 シウ(去)、㊦⑧79A、㊦⑩127 シウ、㊦⑦23A(去)、㊦⑧11A シ[ママ]、㊦⑧61(上)		祝 ㊦⑦60 シク(入軽)、㊦③210 シク(入)、㊦⑦254 シク(入)之大[ママ]反、㊦③210 シク(入)、㊦⑦253 シク(入軽)之六反、㊦③177 シユク(入軽)、㊦⑦212 シユク(入)之六反、㊦⑦179 シク 左(入軽 合)
書				叔 ㊦⑦1A、㊦⑦11、㊦⑦13A、㊦⑦29、㊦⑦43A、㊦⑦55、㊦⑦59、㊦⑧110A、㊦⑧133 シク、㊦②8A、㊦③72A シク、㊦②73A(入)、㊦⑦227A シユク、㊦②61A、㊦⑦191A(入)、㊦③95、㊦④42、㊦⑦151、㊦⑦173、㊦⑦211、㊦⑧200、㊦⑨204、㊦⑩71 シユク、㊦⑨182、㊦⑨194、㊦⑨204、㊦⑩71 ク[ママ]、㊦⑦124 シク	
常				孰 ㊦②4A シク(入)、㊦⑥226 シク(入濁 B)、㊦②4A シク(入軽)、㊦⑥226A(入)、㊦②3A シク・音叔、㊦⑥188A(入) 淑 ㊦⑨72A(入)受六反、㊦⑨71A(入)受六反、㊦⑨59A シク(入)受六反	

				熟 正④220A シク、⑤204A シク、嘉⑤205A シュク(入軽)、⑤229 シク(入軽)、建④184A シク、⑤176A(入)、⑤197 シュク(入)、甲④124A シク(入軽)
影				郁 正②68 イウ[ママ]・於六反、嘉②68(入)於六反、建②57 イク
曉				畜 建⑤195A 許竹反
羊	融 正①23、①39A(平)、建①19 ヨウ			育 建⑤91A イク
于	熊 正②78A イウ、嘉②78A イウ(平)、建②65A(平)			
日	戎 清⑧103A シウ			肉 嘉④44 シュク ^平
来				六 正①60A(入)、嘉①59A(入)、建①113、③114、④151、⑥108、⑥109、⑥122、⑨43、⑨43 リク、⑥122 ロク 戮 正③7 リク・音六、嘉③7□ク(入)、建③6 リク・音六 陸 清⑦3A リク、嘉⑦165 リク
02	冬		宋	沃
並				僕 嘉⑦49 ホク(入軽濁A)、建⑦40□ク・ホク・ホク ^平 (入)
端				篤 清⑧16、⑧17 トツ、正⑥85 トク、⑧24 トツ、嘉⑥85 トク、建⑥70、⑧20、⑧21 トク、文⑧10(入軽)、甲⑧15 トク(入軽)、⑧16 トツ、
透			統 正①176A トウ(去)、①211A トウ、嘉①175A トウ(去)、①210A トウ、建①149A トウ(去)、①179(去)	
泥	農 群①88A(平軽)、正①23(平)、嘉①22、⑦30(平)、建①19、⑦24 ノウ、文⑦7 ノウ			
見	攻 正①175A コウ・カウ ^平 、嘉①174A コウ(平)、⑦145A(平軽)、建①149A(平軽)			告 正②82 コク(入)古篤反、⑥297 古毒反、嘉②82 コク(入)古篤反、⑥297 古毒反、建②68 コク(入)古篤反、⑥247(去)
精	宗 清⑦111 ソウ、正①103(平軽)、②9A ソウ、嘉①102(平軽)、①103、②9A、③16A、⑦102(平)、建①87 ソウ(平)、①88A(平)、⑤128、⑥133、⑦85、⑦212、⑦279 ソウ、⑥114 タウ			
心			宋 正②43、③210、⑤33A、⑥184A ソウ、嘉②43(去)、建②36 ソウ(去)、③178 ソウ	
03	鍾	腫	用	燭
非	封 清⑦102A ホウ(平軽)、正②24A、②121A、⑨238A(平)、嘉②24A、②121、⑨239A(平軽)、建②102 ホウ、⑨199A(平)(→去声)		封 正①60A ホウ(去)甫用反、嘉①59A(去)甫用反、⑦44A(平)、建①50A(去)甫用反、⑦36A(平)(→平声)、文⑦19A(平軽)	
奉		奉 清⑦43A ホウ、建⑦192A、⑩104A(去)、文⑦160A(去)		
知		冢 清⑦113 シヤウ、建⑦338 テウ、嘉⑦338 テウ(去)、建⑦283 チョ		
澄	重 清⑧106A チョウ、正⑧191A(平)、嘉⑧187A(平)、建⑧158A(平)、		重 正④26A、124A 直用反、④187A、⑩7A(去)、嘉④124A 直用反、④187A テ	

	文⑧144A(平)直龍反、甲⑧122A テウ(平)直龍反(→去声)		ウ(去)、⑤138A(平)、⑩7A(去)、隹④103A、④156A、⑤145A(去)、⑩5A テウ(去)、甲④10A 直用反、④65A、④106A(去)、④105A テウ(去)(→平声)	
見	共 隹①9 キヨウ(平軽)音恭(→群母・去声) 恭 群②42、382、486、495(平軽)、495(平)、清⑧127(平軽)、正①111 クキヨウ(平)、①46A キヨウ(平)、①87、①101、⑨37(平)、③77、③118 ケウ、嘉①10、①86、②198A、③77、⑦96、⑨37(平)、①45A ケウ、隹①73、①85、⑧193 キヨウ(平)、③65 キヤウ(平)、③100 ケウ、④120、⑨30 キヨウ、⑦80 キヨフ(平)、⑨31 キヤウ _左 (平)、⑩85 キヤウ _左 、文⑧178(平)、甲④78(平)、④82(平軽)、⑧148 キヨウ	拱 正⑨204 クキヨウ(上)居勇反、嘉⑨205(上)居勇反、隹⑨171 キヨウ・クキヨウ・居勇反	供 隹⑤255(去)九用反、⑤257A(去)、嘉⑤256、⑤258A(去)、隹⑤220 クキヨウ(去)九用反一音恭、⑤222A(去)	
溪				曲 清⑧134A クキヨク
群			共 群②03 クキヨウ(去)、203A(去)、正①122 クキヨウ(去)求用反・俱勇反、嘉①121 クキヨウ(去)、隹①104 ケウ(去)求用反・音拱(→見母・平声)	
疑				獄 正⑨154 キヨク(入軽濁A)、隹⑨129A(入軽)音玉 隹⑤66、⑦229、⑧28、⑧130 ギヨク、甲⑧22(入軽)
精			從(從) [△] 正②118 子用反、②118A ショウ、嘉②118A(去)、隹②99A(平)→「縦」 縦(縦) 正②118A ショウ(去)、⑤34、⑤73 子用反、嘉②118A(平・去)、隹②99A、②101A(去)、⑤30 子用反	足 清⑧75A ソク、隹⑦20 ソク、文⑧94A(入軽)、甲⑧82A(入軽)
從	從(從) 清③66A ショウ、隹①114 音縦、⑧91A(平)(→去声)		從(從) 清⑦43A ショウ(去)、⑧5(去)、正②124 ショウ(去)在用反、③25、⑥6、⑥36、⑥277A、⑦230A 才用反、③251A ショウ(去)、⑧8(去)才用反、⑨198 在用反、嘉②1231、③252A(去)、⑦228A、⑨26A 才用反、⑧8(去)在用反、⑨199 在用反、隹②104 ショウ(去)在用反、②104A、⑥231、⑦192A(去)、③21、⑨21A 才用反、⑥29 ショウ(去)、⑧6 シュウ(去)、文⑦160A 才用反、甲⑧71A セウ(去)(→平声)	
邪	松 正②95(平)、嘉②94(平)、隹②79(平)、⑤110 ショウ		訟 正③131 在用反、③131A セウ(去)、嘉③131 在用反、③131A(去)、隹③111 在用反、③111A セウ(去) 誦 正①40A ショウ(去)、①40A ショウ、④67A シフ、嘉④67A(去)、⑤126 セフ、⑦39 セフ(去)、隹①33A セウ(去)、④56A ショウ(去)、⑤108 ショウ、⑦32 シュ、文⑦14(去)、甲④33A ショウ(去) 頌 正②9A ショウ、②77A ショウ(去)、嘉②9A、②77A、②78A(去)、隹②7A ショウ、②65A、⑥48A(去)、⑤73 セウ(去)	俗 清⑧56A ショク、正②65A ソク、④125A、⑥7A、⑨65A ショク、隹②54A、⑧76A、⑨73A(入)、④104A、⑦133A ショク、文⑧65A ショク(入)、甲④66A ショク、⑧59A ショク _採

章	鐘 隹⑨63 ショウ(平)	種 清⑧74A ショウ(上)、 正⑤82A、⑧129A ショウ、 ⑨191A 章勇反、屬⑨192A 章勇反、隹⑤70A 章勇反、 ⑧105A(上)、文⑨93A セウ (上)、甲⑧81A セウ ^左 ・章 勇反 種 隹⑤153A 章勇反		屬(屬) 正④98A ソク・ 音燭、屬④98A 音燭、隹 ④81A ショク・音燭、甲 ④50A(入)音燭 ^右 (→常母・ 入声)
書				東 正④19 ソク、屬③ 41、④19(入)、隹③34、④ 15 ソク、⑨61A(入)
常				屬(屬) 清⑧81A、⑧85A シヨク、正④156A ソク、 ⑧142A シヨク、甲④ 86A(入軽)、⑨90A シヨク、 ⑨95A(入)(→章母・入声)
影	嘗 正①33 ㄱヨウ(平)於 恭反、屬①32 ㄱヨウ(平) 於恭反、隹①27 イユウ・ 於恭反 雍 正②8(平軽)於容反、 ③17 ヨウ、③136、⑥ 181(平軽)、④148A ヨウ (平)、屬②8 ㄱヨウ(平)於 容反、②12A、④148A(平)、 ③17 ヨウ(平軽)、⑥181(平 軽)、隹②6 ㄱヨウ(平)於 容反、②7A、③13、④ 124A(平)、③114 ヨウ、③ 115、⑥151 ヨウ(平)、甲④ 81A ヌウ(平)			
曉	凶 正⑤245 ケウ、屬⑦ 121A(平)、隹⑤210 ケウ			
羊	容 正③6(平)、⑤178章 勇反、⑤241 苦百反・羊 凶反、屬③6、④170(平)、 隹③5、⑤153、⑥15 ヨウ、 ③6A、⑤20A(平)、④142 ヨ ウ(平)、甲④94 ヨウ(平)、 ④95A ヨウ 庸 清⑧81A ヨウ(平)、⑧ 84A ヨウ、正①9、③261 ヨウ(平)、③262A、⑨ 222A(平)、⑧141A ヨウ、 屬①8、③263A(平)、③261 ヨウ(平)、隹①7 ヨウ、③ 221 ヨウ(平)、⑧116A(平)、 甲③94A ヨウ(平)	勇 清⑦24 ヨウ、正③ 28、③208A、⑥129、⑨54A ヨウ、⑦201(上)、屬③27 ㄱヨウ(上)、③29A、③ 31A、⑦200(上)、⑤133 ヨ フ ^兼 、⑦161 ヨフ、隹③ 23、④163、⑥107 ヌウ、 ④27A、⑨109 ヨウ、④127 ユウ・ヨウ ^左 、⑤115 ヌウ (上)、⑦135 イユウ、⑦168 ユウ(上)、⑨50 ヨウ・ユウ ^左 、 文⑦139(上)、甲④84 ヨフ	用 群①87(去)、清⑧30A ヨウ(去)、④108A、正① 64、①94、①161A、⑥ 221(去)、④194A ヨウ、屬 ①63、①93、①166A、③ 14A、⑥220、⑦69A(去)、 隹①54、①80、⑥183 ヨウ (去)、①137A、①142A、⑦ 56A(去)	慾 清⑦24 ヨク、正③60 ヨク・音欲或羊住反、屬③ 59(入軽)音欲或羊住反、 隹③50 ヨク・音欲、⑥ 214(入)、⑦167 ヨク、⑨ 109A 音欲、文⑦138 ヨク (入) 欲 清⑦22A ヨク、正③ 237A ヨク(入軽)、⑦ 152(入)、屬③237A、⑦ 196A(入軽)、⑦151 ヨク (入軽)、隹②125、⑦ 164A(入)、③200A、⑥ 214A(入軽)、⑥213、⑦126 ヨク、文⑦102、⑧111(入 軽)、甲③53、⑧95(入軽) 浴 清⑦64、⑦65A ヨク、 正⑤198A ヨク、⑥148 ヨ ク・音欲、隹⑥123(入)、 ⑦216 ヨク、文⑦184 ヨク
日				辱 隹⑨186(去)
02 江摂				
04	江	講	絳	覺
幫	邦 清⑦100A コク[マ マ]、⑧84 ハウ(平軽)、⑧ 99、⑧141、⑧143、⑧143、 ⑧144A ハウ、正②109、 ③95 ハウ、屬②96A(平)、 ②109、③95(平軽)、隹② 92、②93、③91、④170、 ④171、⑤191、⑧212、⑧ 214、⑨83、⑩89 ハウ、③ 80、⑧120、⑧147 ハウ (平)、甲⑧93、⑧163、⑧ 165 ハウ、⑧165 ハ□			
並				樸 [△] 正⑦138A ハク(入 軽)普剝反、屬⑦137A ハ ク(入)、隹⑦115A ハク・ 普剝反、文⑦91A ホク・ ハク ^左 (入)
知				琢 正①113 タク(入)涉 [ママ]角反、③51A タク・ 陟角反、屬①112(入軽)涉 [ママ]角反、③51A(入)、隹 ①96 タク(入軽)涉[ママ] 角反、③43A タク 卓 正⑤61 タク(入軽)陟

				角反、⑤63A タク、 嘉 ⑤61 タク(入)、 隸 ⑤52 タク・陟角反
澄				濁 正 ⑤131A、⑨49A タク、 嘉 ⑤131A ダク、 隸 ⑤113A、⑨40A タク(入)
見		講 正 ①18 カウ・古項反、 嘉 ④8(上)、 隸 ①15 カウ(上)、④6 カウ		
溪				愨 正 218A コク(入)苦角反、 嘉 ④217A(入)苦角反、 隸 ④181A カク・コク _左 ・苦角反、 甲 ④123A カク(入)古角反 _右 ・音角 _右
疑				樂(樂) 清 ⑧34 カク、 嘉 ②6A、②10A、②15、②116、②121、②131A、②133A、⑤86A(入濁A)、②116、④46(入濁A)音岳、④44 カク、④192、⑦22、⑨120 音岳、 隸 ②5、②99A、②101A(入)、②7A、⑨197A 音岳 _右 、②12、④160、⑤73、⑤74A、⑧172、⑨137 カク、②98 ガク(入)音岳 _右 、④36、④38、⑥2、⑥3、⑥111、⑦18、⑧42、⑧151、⑧152、⑨62、⑨82 ガク、⑨93、⑨99 カク(入)、 正 ②6A(入)、②116、④46、④192、⑦22 音岳、④44(入濁A)、⑧207(入濁A)音岳、⑨119 カク・音岳、 文 ⑧32A(入濁A)、⑧157 音岳、 甲 ④20、④21、④120A(入濁A)、④21A、⑧83A カク、④107 音岳、⑧33 カク _左 (→来母・鐸韻、疑母・效韻)
崇				泥 清 ⑦3A サク、 正 ⑦166A サク・仕角反、 嘉 ⑦165A サク、 隸 ⑦138(入)、 文 ⑦113A サク・シヤク(入)軽)
生				敎(數) 正 ②214 色角反・世主反・色具反、②214A サク(入)、②214A(入)軽)、②214A(入)、③20A サク(入)軽)色角反、⑤244A、⑨13A 色角反、⑥76A 音朔、⑨182A 所角反、 嘉 ②214 サク(入)軽)、214A(入)、③20(入)軽)色角反、⑤245 色角反、⑥76A 音朔、 隸 ②181 色角反、②181A サク(入)軽)、181A サク、②181、③16A(入)軽)、⑤210A(入)色角反(→生母・麌韻、生母・遇韻) 朔 正 ②82、⑤197A サク、 嘉 ②82 サク(入)軽)、 隸 ②69 サク(入)
匣			巷 正 ③190 カウ(去)戸降反、⑤5 カウ(去)、 嘉 ③190(去)戸降反、⑤5(去)、 隸 ③161 カウ・戸降反、⑤4 カウ(去)	学(學) 清 ⑧65A カク、 正 ③37(入)来)、①75(入)、④219 カク、 嘉 ①36、③73(入)軽)、①39A、①74、①75A、①104A、①106、①129、④8(入)、 隸 ①64、①111、③62、③113、③122、③123、③124、④6、④170、⑥19、⑥20、⑨46、⑨47、⑨48 カク、①91、⑥10、⑥18、⑦227、⑦254、⑩17 ガク、④183 カク・カク _左 、 甲 ④114A カク、④124(入)
03 止攝				
05	支(開甲)	紙(開甲)	寘(開甲)	
幫	卑 正 ②52A ヒ、⑦179 ヒ(平)軽)婢支反、 嘉 ②		臂 正 ④59A ヒ・ヘイ _来 、 嘉 ④59A(去)、 隸 ④49A ヒ	

	52A(平)、⑦178 ヒ(平軽)、 ㊦②43A(去)、⑦149 ヒ、 ㊦⑦122 ヒ _左 、⑦125A		(去)、㊦④29A ヒ(去)	
滂		警 ㊦⑨64A ヒ、㊦⑨64A ヒ		
並			避 ㊦③99A、⑦316、⑨172A、⑨175 辟音避、⑨187 辟音避 _合	
群	祇 ㊦④136 祁支反、㊦④136 祁支反、㊦④113 キ・ギ、㊦④73 キ・キ _左 ・折支反 _右			
精		紫 ㊦⑤184、⑨98A(上)、㊦⑤184、⑨99A(上)、㊦⑤158 シ(上)、⑨81A(上)		
清	雌 ㊦⑤255 シ、㊦⑤255(平)、㊦⑤219 シ	侈 ㊦①65A 尺氏反昌氏反、③85A 昌氏反又式氏反 _右 、㊦①64A 尺氏反昌氏反、㊦①55 尺氏反、③71A 昌氏反 此 ㊦③12A、⑤24A シ(上)、④238A(上)、㊦③12A、④237A、⑤24A(上)、㊦②85A、⑤21A(去)、③9A(上)、④198A シ、	刺 群 ㊦263A シ、㊦④154A シ、⑨66A 七賜反 _備 上、㊦⑨66 七賜反、㊦④129 シ・七賜反、⑨55A(去)、㊦④84A シ(去)七四反 _右	
心	斯 ㊦④238A(平)、⑨165A シ(平)、㊦④237A、⑨166A(平)、㊦④198A シ(平)、⑨138(平)音之		賜 群 ㊦515(去)、㊦⑧9 シ、㊦①85A、②84、③13、③45、⑥75、⑦287、⑨139A、⑩89、⑩130A(去)、①115、⑧14 シ(去)、㊦①84A、①114、②84、③13、③45、③46、③63、⑥75、⑦287、⑨140、⑩89、⑩130A(去)、㊦①71A、③10、③38、③53、⑥61、⑧11、⑨116 シ(去)、②71 シ(去)、③39、③145、⑦239、⑩74 シ、⑩108A(去)、㊦⑦206(去)、㊦⑧8 シ(去)	
章			伎 ㊦⑤124A シ(去)、⑤125A シ、㊦⑤123 之致反、⑤124A(去)、㊦⑤106 之致反、⑤107A、⑤108A シ(去)	
書	施 ㊦①201A シ(去)、④118A シ(平)、㊦①200(平・去)、④118A シ(平)、㊦①171A(平)、④98A シ(平)、㊦④62A シ(平)(→上声・去声)	施 [△] 群 ㊦523A(平)、㊦⑨239A シ(上)詩紙反・詩支反 _備 上、㊦⑨240 詩紙反、⑨240A(上)、㊦⑨199A シ(上)(→平声・去声)	施 ㊦③264 如[ママ]跋反、㊦③223(去)始跋反(→平声・上声)	
常		氏 清 ⑦17、⑦37A、⑧110A、⑧128A シ、㊦①20 シ(去)、㊦①19、①19、②3、⑦7(上)、②94(去)、㊦①16、①16、②2、②79、⑥53、⑦5、⑦158、⑦270、⑧113、⑨25、⑨133、⑩55 シ、②87 シ(去) 是 清 ③41A シ、㊦①108A、⑥85、⑧64A シ、⑨27、⑩166A(去)、⑨181 シ(去)、㊦①107A、⑨26、⑩167A(去)、④30 シ _左 、⑥85 シ、㊦①92A、⑨22、⑩139A(去)、⑥70、⑨151 シイ、⑨151 シイ(去)、㊦④51(去)、⑧41A(上)		
羊	移 ㊦⑤140A イ(平)、㊦⑤140A イ(平) 移 群 ㊦251A イ(平)、㊦③148A イ(平)、㊦③149A(平)		易 群 ㊦221A イ(去)、221A、222A(去)、㊦⑦20、⑦115(去)、㊦②18、②57A、⑦73、⑦129、⑦194、⑦341、⑧48A、⑨24、⑨185 以跋反、②19A、②19A イ(去)、②20(去)、④202 以跋反 _備 上、㊦②19A、②19A、②20A、⑦73(去)、④201、⑦193、⑨24、⑨186 以跋反、㊦②15 以跋反、②15 イ、②16A、②48A、⑦107、⑦110、⑦162、⑦284、⑨20A(去)、⑤11A、⑦61(去)以跋反、㊦⑦	

			41(去)以致反、⑦84、⑦85A、⑦134、⑦247、⑦247A(去)、 甲 ④113 以致反(→羊母・音韻甲)	
来	離 清 ⑧98 リ(平)、⑧99A リ、 正 ⑧177A リ、 建 ⑧145 リ、 ㊦ 58A(平)、 甲 ⑧112 リ(平)、⑧113A リ			
日		爾 正 ④136(上濁 A)、⑤61、⑥142 シ(上濁 A)、⑥125、⑨20 シ、 嘉 ④136、⑤61、⑥142(上濁 A)、 建 ④113、⑥118、⑨16 シ(上)、⑤52 ジ(去濁)、⑥103 シ(上)、 甲 ④73 シ(上濁 A) 邇 正 ⑨67 音爾、⑨67A シ(上濁 A)、 嘉 ⑨66 音尔、 建 ⑨56A(上)		
05	支(開乙)	紙(開乙)	寘(開乙)	
並	皮 正 ⑤197A ヒ、 建 ②64A、⑤170A、⑥168A(平)	被 清 ⑦51A(去)、 建 ⑦200A(去)		
知	知 正 ①13(平)、①179 如字又音智、③98、④102、④102A 知左、⑤43A 知、 嘉 ①12(平輕)、①178(平・去)、③91、③98、④102 知左、 建 ①11、④84 知、⑤37A、⑦192A、⑧94(平)、 文 ⑦160A(平輕)、⑧83(平)、 甲 ⑧74(平)、⑧145A 知		知 正 ③85、③105、③228、③39、⑧108(去)音智、③228A 音智右、③230(去)、④86A 知音智右、⑧68A 音智、 嘉 ③85A、③105、③231、③234、③39(去)、③228A(去)音智、③229、④86A 音智、⑦228A 中志反、 建 ①151 知・又音智、③72、⑤113 知(去)音智、③77、③192A 音智、③89、③89 知(去)、③193、③197 知、③195(去)、③198A(去)、 文 ⑧76、⑧78(去)、 甲 ⑧69A(去)→「智」 智 清 ⑧65(去)、 正 ②139、⑨17、⑨140、 ㊦ 103 知音智右、③227A(去)、⑤132、⑥285、⑦199、⑦220A、⑦285 知音智、⑨12(去)知音智右、⑨54A 知音智右、 嘉 ⑩104 知音智、 建 ②117、⑥237、⑥241、⑦166、⑧32、⑧88、⑧89、⑧91、⑨9、⑨117、 ㊦ 87 知、②121 知(去)、 文 ⑦138(去)、 甲 ④43A 知、⑧43 知(去)、⑧68 知左(去)、⑧70、⑧71(去)	
見	奇 正 ①60A 居宜反、 嘉 ①59A キ(平)、 建 ①50A(平)居宜反		寄 正 ④182 キ	
群		伎 正 ⑤42A キ(去濁 B)、 嘉 ⑤42A(去)其綺反 倚 正 ⑨204A イ(上)其綺反、 建 ⑨170A イ(上)→「倚」 技 建 ⑤36A キ(去)其綺反	騎 正 ①34(去)、 嘉 ①33(去)、 建 ①28 キ	
疑	儀 正 ②122A(入)、⑦321A(入濁 A)、 嘉 ②121、③42A、⑦321A(平濁 A)、 建 ②64A、⑦268A(平)、②102 キ 宜 正 ④234A(平濁 A)、 建 ④195A、⑥32A(平)		義 清 ⑦70A、⑧42 キ、 正 ①26、①63A、①77A(去濁 A)、 嘉 ①62A、①172A、②192(去濁 A)、①159A、③64A、④9(上濁 A)、②13A、②176(上濁 B)、 建 ①22、①29、①84、②162、③66、③194、④7、⑥224、⑦27、⑦171、⑦178、⑧195、⑧197、⑨110、⑨175、⑨176、⑨179、 ㊦ 3 キ、①53A、⑤206A、⑥107A、⑨111(去)、①65A(去濁 A)、①182 キ(去)、②149 キ(上)、④49、⑥190 キ、⑧56 キ(去)、 甲 ④29 キ、⑧44、⑧50(去濁 A)、⑧60A、⑧89A(去)	
影		倚 清 ⑧20A(平輕)、 正 ④17A イ(上)於綺反、⑧29 於		

		綺反、 嘉 ④17A イ(上)於綺反、 ⑧ 29 於綺反、 ⑨ 205A(上)於綺反、 隸 ④イ(上)於綺反、 甲 ④5A(上)、 ⑧ 18 於綺反 騎 正 ⑤252A イ(上)、 嘉 ⑤252A イ(上)於倚反又居綺反、 隸 ⑤217A(上)於倚反居綺反		
曉	犧 正 ③165A キ、 嘉 ③165A 許宜反 _左 、 隸 ③139A 許宜反 _左 義 清 ⑧81A(平)、 正 ①35(去濁 A)、 嘉 ①34(平濁 A)、 ⑧ 141A 許宜反、 隸 ⑧116A(平)			
05	支(合甲)	紙(合甲)	真(合甲)	
溪	闕 正 ⑩89 起規反			
邪	隨 正 ⑨244(平濁 A)、 嘉 ⑨245(平濁 A)、 隸 ⑨204 スイ			
常			瑞 正 ⑤49A スキ(平濁 A・B)、 嘉 ⑤49A(去)、 隸 ⑤43A(去)	
影	憲 正 ⑦311A 一睡反、 嘉 ⑦310A 一睡反、 文 ⑦224A 一睡反			
05	支(合乙)	紙(合乙)	真(合乙)	
疑	危 清 ⑧36A クキ(平)、 正 ①184A キ(平)、 ④ 204、 ⑧ 54A クキ、 嘉 ①183A クキ(平)、 ⑦ 157A(平)、 隸 ①156A、 ④ 170、 ⑦ 132A クキ(平)、 ⑧ 45A(平)、 文 ⑦107A クキ(平)			
影		委 正 ③117A イ、 隸 ③99A(上)		
曉		毀 群 ⑤14A(上)、 正 ②50A クキ(上)、 ⑨ 137 クキ、 嘉 ②50A(上)、 隸 ②42A、 ④ 133A、 ⑨ 114A クキ(上)		
于	為(爲) 清 ⑦36A、 ⑦ 38A、 ⑧ 15A(平)、 ⑦ 102A、 ⑧ 14 ㄱ(平)、 ⑧ 15A(平)、 正 ④46A イ(平)、 ⑦ 320A(平)、 嘉 ④46A(平)、 隸 ①102、 ⑧ 17 イ、 ① 104A、 ④ 38A、 ⑦ 182A、 ⑦ 184A、 ⑦ 267A(平)、 文 ⑦154A、 ⑦ 231A(平)、 甲 ⑧13 ㄱ(→去声)		為(爲) 清 ⑦3A、 ⑦ 37A、 ⑦ 72、 ⑦ 73、 ⑧ 74、 ⑧ 105A(去)、 正 ①31、 ④ 48、 ⑨ 146A(去)、 ① 53、 ② 50A、 ② 111、 ② 207A、 ③ 149、 ③ 270A、 ④ 48A、 ⑧ 130、 ⑧ 144A、 ⑨ 59A(去)于偽反、 ③ 178、 ④ 24A、 ④ 116、 ⑤ 47A、 ⑤ 173A、 ⑤ 241A、 ⑥ 38、 ⑥ 67、 ⑦ 94、 ⑦ 273、 ⑨ 108A、 ⑨ 130A、 ⑨ 179 于偽反、 嘉 ①30、 ② 110、 ② 107A、 ③ 271、 ④ 48A、 ⑥ 38(去)、 ② 50A、 ③ 149、 ⑧ 129、 ⑨ 59A(去)于偽反、 ④ 24A、 ④ 116、 ⑤ 173A、 ⑨ 131A 于偽反、 隸 ①16、 ② 41A、 ② 45A、 ② 93、 ③ 152A、 ③ 229A、 ④ 39、 ④ 39A、 ④ 46、 ④ 97、 ⑤ 199A、 ⑥ 31、 ⑥ 31、 ⑥ 54、 ⑥ 55A、 ⑦ 78、 ⑦ 182A、 ⑦ 182A、 ⑦ 228、 ⑦ 228、 ⑧ 105、 ⑨ 103A、 ⑨ 108A、 ⑨ 122A(去)、 ① 45、 ③ 126、 ③ 151、 ④ 20A、 ⑤ 41A(去)于偽反、 ⑤ 19、 ⑤ 207A 于偽反、 ⑤ 149A、 ⑨ 90A(去)于偽反 _右 、 文 ⑦58、 ⑦ 113A、 ⑦ 152A、 ⑦ 194、 ⑦ 195、 ⑦ 195A、 ⑧ 106A(去)、 ⑧ 93 于偽反 _右 、 甲 ④10A、 ④ 22、 ⑧ 92A(去)于偽反、 ④ 21 如字・本或作嬌音居危反 ④ 23A ㄱ(去)、 ④ 27、 ④ 61、 ⑧ 119A、 ⑧ 121A(去)、 ⑧ 81 于偽反(→平声)	

05	脂(開甲)	旨(開甲)	至(開甲)	
幫		比 𠄎⑦81A ヒ(上・去)、 𠄎⑨148(上)、𠄎④4(上)、 𠄎⑨124 ヒ(上)、𠄎⑦ 207A(上)(→去声、並母・ 去声)	比 𠄎⑥128 必利反、𠄎 ⑥106、⑥110(去)(→上声、 並母・去声)	
並			比 𠄎⑧48A、⑧58A ヒ (去)、𠄎①170(去)毗志反、 ②176 毗志反、⑧79A ヒ (去)、𠄎①169、②176(去) 毗志反、①170A、① 170(去)、𠄎①145(上・去) 毗志反、①145A、⑧ 64A、⑧79A(去)、①145 ヒ(上)、②149 ヒ(上)毗至反、 ④2 ヒ、𠄎⑧53A 毗志反 、⑧68A(去)、𠄎⑧50A 毗 志反、⑧61A ヒ(去)毗志 反(→幫母・上声、幫母・ 去声)	
定			地 𠄎⑦3A、⑧94A チ、 𠄎①59A、①59A、𠄎① 58A、①58A(去)、𠄎① 50A(去)、⑦265 チ、𠄎④ 43A(平)	
見	飢 𠄎⑥127 キ・音機、⑥ 220 居其反、𠄎⑥127 音 機、𠄎⑥105 キ(平)			
溪			𠄎 𠄎⑦121、⑦ 122A(去)、𠄎⑦97(去)	
精	齊(齊) △ 𠄎⑤50、⑤167 シ(平)音咨、⑤168A、⑤ 242 シ(平)、𠄎⑤50 シ(平) 音咨、⑤168A、⑤243 シ (平)、𠄎⑤43 シ(平)音咨、 ⑤143(平)、⑤145A シ、⑤ 208 シ(平)⇒「齋」			
清			次 𠄎②229(去)、𠄎②156A シ、⑨231A(去)、𠄎⑨ 232A(去)、𠄎①14(平)、② 132、⑨192A シ(去)、⑨ 192A(去)	
從			自 𠄎②143A(去)	
心	私 𠄎⑨119A(平)		四 𠄎②115、⑨204A シ、 ⑦30、⑦33、⑦84、⑨87、 ⑩112 シイ 肆 𠄎⑦96 シ(去)、⑦97A シ、𠄎⑦312 シ、⑦ 313A(去)、⑨93 シ(去)、𠄎 ⑦311 シ、⑦313A、⑨ 92(去)、𠄎⑦260、⑨77 シ (去)、𠄎⑦225(去) 駟 𠄎⑧132 シ(去)、⑧ 133A シ、𠄎⑥215 シ(去)、 ⑧240(去)、𠄎⑥216、⑧ 240(去)、𠄎⑥179、⑧199 シ(去)、𠄎⑧153、⑧154A シ	
章	祇 𠄎⑥232 シ・音之、⑥ 233A シ(平)、𠄎⑥233A シ (平)、𠄎⑥194A シ(平)		擊 𠄎④211、⑨230 シ (去)音至、⑨231A(去)、𠄎 ④211、⑨231(去)音至、⑨ 232A(去)、𠄎④176 シ 、(去)音至、⑨192 シ(去) 音至、⑨193A(去)、𠄎④ 119 シ(去)音至、④ 120A(平輕)、④120A シ (去) 至 𠄎③268A(去)、𠄎④ 122、④201 シイ、𠄎④80、 ④82A シ	
船			諡(諡) 𠄎②09A、224A シ、𠄎⑦31A シ(去)、𠄎① 137A、①144A、⑩87A シ、 ①187、③73A、⑦ 211A(去)、②89A シ(去)、 𠄎①136、③72A シ(去)、 ①186A、①191A、②89A、 ⑦210A、𠄎①116A、③61A シ(去)、①122A、①159A、 ②75A、③68A、⑦	

			175A(去)	
書	戸 正 240 シ(平)、嘉 5 241 シ(平)、隳 5 206 シ(平)			
常		視 清 8 33A シ(去)、正 2 69A、10 159A シ(去)、嘉 2 69A シ(去)、10 159A(去)、 隳 8 42A、10 133A(去)、文 8 32A シ	嗜 正 7 123A 時志反	
影	伊 群 3 37(平)、隳 6 245 イ			
羊	夷 清 7 44A、7 52A、7 118A、8 133 イ、正 5 81、 5 81A イ、7 348A(平)、嘉 7 348A(平)、隳 2 16、4 42、5 70、7 81、8 200、 9 182、9 182、9 188 イ、 3 95 イ(平)			
来	黎 正 3 163 リ・利之反、 嘉 3 163 リ(平軽)、隳 3 138 リ(平)	履 正 10 120 リ(上)、嘉 10 120(上)、隳 10 100 リ(上)	利 清 8 30A リ(去)、8 57A(平)、8 92A(去)、正 5 3 リ、嘉 2 180、2 181A、 2 192(去)、隳 2 121 リ (去)、2 153A、2 163、5 3、7 73、7 171、9 83、10 124、10 124 リ、4 69A、8 38A、8 136A(去)、甲 8 29A リ(去)、8 60A リ 苙 正 8 111 音利、文 8 79 音利又音類、甲 8 70 音 利又音類 _右	
日			二 正 1 7、1 8、1 14、1 14、1 16(去濁 A)、嘉 1 3、 1 13、2 12A、2 13A、2 35、(去濁 B)、2 35A シ(去 濁 B)、2 68、7 109A(去濁 A)、隳 1 3、1 6、1 6、1 6、1 11、1 12、1 13、2 56、2 105、3 39、4 69、 5 61、6 35、8 124、9 172 ジ、1 102 シ	
06	脂(開乙)	旨(開乙)	至(開乙)	
幫	悲 隳 9 88 ヒ(平)而禱 反、9 90A、9 91A(平)	鄙 正 3 217、4 171、6 87A、9 86 ヒ、5 38、5 44 ヒ(上)、嘉 5 38、5 44(上)、 隳 3 184A、6 71A(上)、4 143、5 33、5 38、6 71 ヒ、 文 7 237(上)、甲 4 95 ヒ (去)	費 群 4 52 ヒ(去)、清 8 90 ヒ、正 3 177 ヒ・音秘、 6 113 ヒ(去)悲位反 _{欄上} 、 8 161 ヒ(去)、9 28(去)、 嘉 8 161 悲位反、9 28(去) 悲位反、隳 3 149 ヒ(去)音 秘、6 93、8 132 ヒ、9 23 ヒ(去)悲位反、文 8 120 ヒ 左・悲位反、甲 8 102 ヒ(去) 悲位反、8 102A ヒ	
並		否 正 2 151A ヒ(去)、3 257 備鄙反、6 298 ヒ、嘉 2 151A ヒ(去)、6 297 ヒ、 隳 2 128A ヒ(去)		
明		美 清 8 34A ヒ、正 3 166、6 251 ヒ、9 121A(上 濁 A)、嘉 2 33、2 130、2 132(去濁 A)、2 37A、2 144A、4 45A(上濁 A)、隳 2 27 ヒ(上)、2 110、2 111、 3 178、4 166、5 66、10 119、10 121 ヒ、3 141A、 4 37A、4 206 ヒ、6 209 ヒ (上)、9 100A(上)、10 76(去 濁 A)、文 8 32A(上)、甲 4 21A(上濁 A)、4 86A ヒ (上)、4 110 ヒ _合 (上)、4 121A(平)、8 33A ヒ(上濁 A・去)	媚 正 2 62 美記反、9 90A 武襄反 _{欄上} 、嘉 2 62 美記反、隳 2 52 美記反、 9 75A ヒ(去)	
知			致 清 8 12A チ、正 8 18A チ、隳 8 14A チ(去)、 文 8 4 チ(去)、甲 8 11A チ	
透	絺 正 5 186 チ(平)勅之 反 _{欄上} 、5 186A チ、嘉 5 186 チ(平)、隳 5 160 チ(平)			
澄	遲(遲) 嘉 1 136、7 29(平)、隳 1 117 チ(平)、 1 119、6 231、6 238 チ	雉 嘉 5 256(上)、隳 5 219 チ(去)		
孃	尼 隳 10 73、10 79 チ			

見			驥 清⑦88 キ(去)、正⑦297 キ(去)、屬⑦297 キ(去)音冀、隸⑦248 キ(去)音冀、文⑦214(去)音冀	
溪			器 清⑧30A(去)、正③15A キ、屬③14A(去)、隸②86A、③11A(去)、匣③29A キ	
心		死 正⑤237 シ、屬③146、⑦243A、④170、⑥38、⑥38、⑥42、⑥162、⑥175、⑦139、⑦190 シ、⑤23 シ(上)、匣④114 シ		
邪		兇 群④50 シ(上)、清⑧89 シ(去)、正⑧157 シ(上)徐履反、屬⑧157 シ・徐履反、隸⑧129 ジ(去)、文⑧117 シ(去)徐里反、匣③100 シ(上)徐里反		
生	師 清⑧72A、⑧78、⑧78 シ、正⑥72 シ、屬①164、①165A、①179A(平)、隸①22、①140、②97、④65、④176、⑥51、⑥51、⑥52、⑥59、⑧100、⑧111、⑧111、⑨128、⑨192、⑨196、⑩55、⑩70 シ、②98A、⑧107(平)、⑥105 シ(平)、匣④119、④120A(平)、④120 シ(平輕)			
章		指 正②57A シ 旨 正①134A シ、⑨121A シ(上)、屬①133A、⑨121A(上)、隸⑨100A(上)		
書		矢 正③259A シ、屬③260A シ(上)、隸③219A シ(上)		
影			懿 正①136 イ・イ(上・去)、①143A イ、屬①135、①142A キ(去)、①136(去)、隸①115 イ(去)、①116A イ 饒 正⑤201 イ(去)於異反・央位反央冀反、⑤201A イ、屬⑤201 イ(去)於冀反、隸⑤173 イ・於異反、⑤173(去)	
06	脂(合甲)	旨(合甲)	至(合甲)	
見			季 屬①189、①191A、②3、②6A(去)、⑦7(上)、隸①162 キ(去)、①163A(去)、②2、②18、③103、③143、③149、⑥10、⑥17、⑥53、⑥210、⑦5、⑦257、⑧113、⑧114、⑧115、⑨133、⑨133、⑨137、⑨204、⑨204 キ、⑥36 シ[ママ]、匣④81A(去)	
心	綏 正⑤250 スキ(平)音雖、⑩108 音雖、⑩110A スイ(平)、屬⑤250 スイ(平)音雖、⑩111A スイ、隸⑤215 スイ・音雖、⑩90 音雖、⑩92A スキ(平)			
從			萃 正⑤19A スイ(去)似醉反、屬⑤19A スイ(去)、隸⑤17A(去)似醉反	
邪			燧 正⑨113 スイ・音遂、屬⑨114 スイ(上)音遂、隸⑨94 スイ(去)音遂	
昌			出 群⑤64A スイ(去)、正⑤48 尺遂反、⑩161 尺遂反、屬⑩161 尺遂反、⑩162A スイ(去)、⑩136A(去)	
常	誰 正②4A、⑥226A スイ(平)、屬②4A(平)、隸②3A(平)見佳反、⑥188A(平)			

羊	惟 正 201A ㄱ、嘉 197 ㄱ、 ①200A(平)、 ㄱ 170 イ、 ⑤167 イ(平)位悲反 遺 ㄱ 715A ㄱ、 ㄱ 169 ㄱ(平)、 嘉 68A(平)、 ㄱ 58A イ(平)、 ⑦ 156A(平)(→去声)	唯 正 2189 イ(上)維癸反、 嘉 2189 ㄱ(上)維癸反、 ㄱ 2160 ㄱ(上)	遺 正 5224A、⑨5A 唯季反、 嘉 5224A 唯季反、 ㄱ 94A 唯季反(→平声)	
来		臺 正 113 リユㄱ(上)力軌反、 嘉 12 ルイ(上)力軌反、 ㄱ 12(上) 誄 正 4136 ルㄱ(上)力軌反、 嘉 4136 ルㄱ・力軌反、 ㄱ 4113 ルㄱ(上)力軌反、 ④114A ルイ、 ㄱ 73 ルイ(上・去)力軌反、 ④ 73A ルイ	類 清 874、⑧74A ルイ(去)、 ㄱ 2169A、⑧128、 ⑨64A(去)、 ㄱ 2211A、 ② 169A、 ②212A、 ④25A、 ⑧ 128、 ⑨ 64A(去)、 ㄱ 180A、 ②143A、 ④21A、 ⑧ 105A、 ⑩39A(去)、 ⑧104 ルイ(去)、 ㄱ 893A ルイ、 ㄱ 410A ルイ、 ⑧81A ルイ(去)	
06	脂(合乙)	旨(合乙)	至(合乙)	
定			鑿 正 1080 直類反	
見	龜(龜) 清 889 クㄱ(平輕)、 正 82A クㄱ、 ㄱ 130 ㄱ、 ㄱ 100 クㄱ(平濁A)	羸 正 316A キ(上)音軌、 嘉 316A 音軌、 ㄱ 13A クㄱ(上)		
溪			嗜 正 554 クㄱ(去)苦位反又 ㄱ[ママ]反、 ⑥152 クㄱ(去)、 嘉 554(去)苦位反又 苦ㄱ反、 ⑥ 152 クㄱ(去)、 ㄱ 547 キイ(去)苦位反又 ㄱ反、 ⑥126 キ	
群			廣 群 451A クㄱ(去)、 清 90A クㄱ(去)、 ㄱ 578A クㄱ(去)、 ⑥76A 其位反、 ㄱ 578A クㄱ(去)、 ⑧ 159A(去)、 ㄱ 67A キ(去)求位反、 ⑧131A(去)具位反 壘 ^x ㄱ 118A(去)其位反 →「廣」 積 正 8159A クㄱ(去) 箕 群 287 クㄱ(上)、 清 7102A、 ⑦106A クㄱ(去)、 ㄱ 594 クㄱ(去)求位反、 ⑤95A クㄱ、 ⑦321A クㄱ(去)其位反、 ⑦327A キ(去)、 ㄱ 594 クㄱ(去)求位反、 ⑦321A(上)其位反、 ⑦327A(去)、 ㄱ 581 キ(去)求位反、 ⑤ 81A、 ⑦ 268A(去)、 ⑤84 キ、 ⑦273A クㄱ(去)、 ㄱ 7232A クㄱ(去)其位反、 ⑦237 クㄱ(去) 饋 正 5223 其位反、 嘉 5223 其位反、 ㄱ 5192 其位反	
生	衰 正 965A スㄱ、 ㄱ 4A スイ		帥 群 321A スイ、 正 5119、 ⑥255A スイ(去)、 ⑥ 254 所類反一音所律反、 嘉 5119(去)、 ⑥ 254A スイ(去)、 ㄱ 5102 スイ(去)色類反、 ⑥212A スイ(去)	
書		水 清 869、 ⑧70(上)、 ㄱ 897、 ⑧98(上)		
羊			饋 [△] ㄱ 5192 唯季反	
于	唯 正 5193 イ・位悲反、 ⑤194A イ、 嘉 5194 位悲反		位 嘉 1179A(去)	
来	縑(縑 ^x) 正 33 ルイ(平)力追反、 嘉 33 ルイ(平)、 ③5A(平)、 ㄱ 32 ルイ(平)力追反			
07	之	止	志	
知			置 群 210(去)、 正 1189A チ(去)、 ⑨226A(去)、 嘉 1188A、 ⑨227(去)、 ㄱ 1160 チ(去)、 ⑨189A チ(去)	
澄	治 清 713A チ(平)、 正 161A、 ⑦183A(平)、 嘉 1		植 正 9203 音值又市力反、 ⑨204A チ(去)、 嘉 9	

	60A、①174A(平)、⑦182A、 隹 ①149A、⑥233A、⑦153A(平)、 夂 ⑦125A(平・去)(→去声)		204 音值又市力反、⑨205A 子(去)、 隹 ⑨170 音值又市力反、⑨170A 子・シヨク 夂 (去)(→常母・職韻) 治 群 329A(去)、 清 ⑦114A 子(去)、⑧94A 子、 正 ①86A 子・直吏反、④231、⑥124A、⑦317、⑧21 直吏反、⑥280 子(去)、⑦339A、⑨186A(去)直吏反、 歸 ①85A、④231、⑦317A、⑧21、⑨187A 直吏反、⑥280A(去)、 隹 ①73A、④192(去)直吏反 夂 、①76A、③219A、⑦265A、⑦283A、⑧139、⑨156A(去)、③116A、⑤112A 直吏反、⑧17 直吏反(去)、 夂 ⑦246A(去)、 田 ⑧13 直吏反、⑧107A 子・直吏反(→平声)		
見	基 正 ①48A(平軽)、 歸 ①47A(平)、 隹 ①41A キ(平) 姬 正 ④119A キ、 歸 ④119 ヒ[ママ]、119A キ、 隹 ④99A キ(平)、④99A キ、 田 ④62A キイ(平軽)、④63A キ 箕 正 ⑨148(平)、 歸 ⑨149(平軽)、 隹 ⑨124 キ(平)、⑨125A、⑨125A、⑩110A(平)	己 正 ⑦328 音紀、⑨215 音紀一音以、 隹 ⑦328 音紀			
溪		杞 正 ②42 キ(上)、 歸 ②42 キ(上)、②44A(上)、 隹 ②35 キ(上)音起 起 正 ④156 □ (上)、④191A キ(上)、⑤53、⑧9A(上)、 歸 ④156A、④191A(上)、 隹 ④130A、④159A キ(上)、⑤46A、⑤213A、⑥12A、⑧7A(上)、 田 ④86A キ、④107A キ(平)、⑧5A キ(上)	亟 正 ⑨11 去冀反、 歸 ⑨11 去漁[ママ]反、 隹 ⑨9 去異反		
群	期 群 562(平)、 正 ④115、⑦55A キ、⑦54 音基、⑨110(平)音基、⑨113(平)居宜反、⑩159(平)、 歸 ④115、④120 キ、⑦54 キ(平)、⑨114 居宜反、⑩159(平)、 隹 ④95、⑨91、⑨94、⑩134 キ(平)、④100 キ、⑦44 キ(平)音基、 田 ④60 キ(平・去)		忌 清 ⑦95A キ(去)、 正 ①137A キ、⑦153 キ(去)、 歸 ①136A、⑦152A キ(去)、⑦309A キ、 隹 ①116A、⑦258A キ(去)、 夂 ⑦90A、⑦103A(去)		
精	茲 正 ⑤24A シ(平)、 歸 ⑤24A(平)、 隹 ⑤21A シ(平)	子 正 ①15、①16、①39A、①43、①70、①81、①82、①94、①108、①112(上)、④84、⑥104、⑥106A、⑥253、⑥256、⑥261、⑥261 シ、 歸 ①3、①4、①14、①38A、①42、①62A、①80、①81、①135、①143A、①189、②7、③71、③256、⑦13、⑦46(上)、①169(平軽)、⑦302 シ、 隹 ①3、①3、①4、①12、①32、①36、①36、①44、①56、①59、①69、①73、①74、①83、③54、③73、③78、③116、③122、③126、③137、③143、④70、⑤2、⑥8、⑥9、⑥10、⑥10、⑥13、⑥18、⑥18、⑥39、⑥56、⑥70、⑥93、⑥107、⑥111、⑥122、⑥126、⑥129、⑥176、⑥178、⑥210、⑥213、⑥217、⑥217、⑦10、⑦10、⑦12、⑦151、⑦152、⑦174、⑦207、⑦252、⑦293、⑧2、⑧204、⑨137、⑨172、⑩1、⑩32、			

		⑩84、⑩86 シ、①32A、①162、①167、③91(上)、①115 シ(上)、④97、⑦168 ジ、④23A、④27A、④53(上)、⑧117 シ		
従	慈 𠄎214(平)、𠄎1194、①194A(平)、𠄎1193(平)、①193A(平軽)、𠄎1164 シ		字 𠄎855A、⑧77A シ(去)、𠄎873A、⑧110A、⑨69A(去)、𠄎885A シ(平)	
心	悵 𠄎7140(平)音絲、𠄎7139(平)音絲、𠄎7116 シ・音之、⑦117 シ(平)、𠄎793 シ(平軽) 司 𠄎123、①25(平)、𠄎122、①24(平)、⑦8 シ(平)、𠄎119、④146、⑥152、⑥155、⑦6 シ、①21、④93、⑩135 シ(平)、𠄎59A、④64A(平)、④97 シ(平) 思 𠄎883 シ、⑨187A シ(平) 絲 𠄎513A シ(平)、𠄎513A(平)、𠄎511A(平)	意 𠄎261A シ(上)、𠄎152 シ(上)絲里反、𠄎152 絲里反、𠄎4127 シ(上)絲里反、𠄎483 シ(上)思里反、④83A シ(去) 象 𠄎5123A シ(上)思里反、𠄎5123A(上)思里反、𠄎5106A シ(上)	思 𠄎8126(去)、𠄎202A シ、③156(去)、𠄎202A(平)、③155(去)、𠄎2171A、③133、⑧192(去)、③132 シ(去) 筭 𠄎3189A シ・息嗣反、𠄎3189A 息嗣反、𠄎3160A 息嗣反	
邪	辭(辭) 𠄎3158、③179、③180A、④171、④174A シ、𠄎3158(平)、𠄎3134 シ、③151 シ(平)、④143 シ、𠄎495 シ、④96A シ(上)	祀 𠄎252A、⑦220A シ、𠄎243A(上) 藉 𠄎9178A 音似 欄上	食 𠄎1152 シ(上 ^音 ・去)音嗣、③189、⑤215 シ(去)音嗣、③192A(去)、⑤199A、⑤231、⑥135A シ、⑤200、⑨206 音嗣、𠄎151、①152A(去・入軽)、③189 シ(去)音嗣、⑤200 音嗣、⑤215(去)音嗣、⑦190 シヨク・シ ^{合左} 、⑧11A(入軽)、⑨207 音嗣、𠄎1127A(去)音嗣、①129、⑤185 シ(去)音嗣、③160 シ(去)音嗣、③162A(去)、④47 シ・シヨク ^左 ・シイ ^左 (去)音嗣、④204、⑧84、⑧103、⑨172 シ、⑤171 シ(入)、⑦159 シイ・シヨク ^左 ⇒「飼」	
莊	緇 𠄎512A シ、⑤187 シ(平)側基反、⑨47 側其反、𠄎5187(平)側基反、⑨47 側其反、𠄎511A シ(平)、⑤161 シ ^年 ・側其反、⑨39 側其反			
崇		仕 𠄎610A シ 士 𠄎826 シ、𠄎21(去)、⑥66A シ、𠄎19、①25、②173、④38、⑦100(去)、𠄎117、④31、⑧33、⑧37 ジ、①21、④154、⑥221、⑦85、⑦116、⑦117、⑦130、⑨128、⑨157、⑨157、⑩55 シ、②146、⑨203、⑩2 シ(去)、⑦130(去)、𠄎823、⑧27(去)、𠄎825、⑧29 シ	事 𠄎714A シ、𠄎789 シ、𠄎715A、⑦55A、⑦89(去)、𠄎288、⑦45A、⑨44A(去)、③171、④200、⑥9、⑦74 ジ、⑤33、⑥147A、	
生		史 𠄎3217(上)、⑧32、⑧90 シ、𠄎3218、⑦47A(上)、𠄎3184、⑧26 シ、𠄎816 シ、𠄎356 シ(上)、⑧57 シ、⑧97A(上)	使 𠄎713A シ(去)、⑦73、⑦76、⑦76、⑦76A(去)、𠄎3149、⑤174A、⑤223A、⑦40、⑦101 所史反、⑦184A、⑦279(去)所史反、𠄎3149、⑤174A、⑤223 所史反、⑦183A、⑦278(去)所史反、𠄎3126、⑤149A 所史反、③152A、⑤192A、⑦84、⑦153A、⑦229、⑦233、⑦233A(去)、𠄎763 所史反、⑦126A、⑦196(去)	
侯		俟 𠄎7118A シ(去)、𠄎7348A シ(去)、𠄎7348 シ(去)、𠄎7291A シ(去)		
初			劇 𠄎4245A シ(去)音思、𠄎4245A(去)音思、𠄎4204A シ(去)音思	
章	之 𠄎841A シ、𠄎16、⑤135A、⑨32A(平)、①	止 𠄎9191A(上)、𠄎25A(去)、⑨192A(上)、𠄎	志 𠄎826 シ(去)、𠄎212A、⑧40(去)、𠄎276A、	

	117Aシ(平)、③204シ、 嘉 ①5、①116A、⑤135A(平)、 建 ①4シ(平)、③172シ、⑤116A(平)、⑨26A(上)、 甲 ⑧41Aシ	②21A、③165A、⑨160A(上)	②212A、⑧40(去)、 建 ④12Aシ、⑧33シ(去)、 甲 ⑧25シ、⑧27Aシ(去)	
昌		齒 (齒) 清 ⑦18A(去)、 甲 ⑦192Aシ、 建 ⑦160A(上)、 文 ⑦132Aシ(去)		
書	詩 清 ⑧137、⑧137、⑧138シ、 正 ①112(平)、 嘉 ①114、①116A、②40、⑦39(平)、 建 ①95、①105、②33、④54、④134、④158、⑦32、⑧206、⑧207、⑧207、⑨52、⑨53シ、①98シ(平)、 甲 ④32、④89A(平軽)、⑧159シ合	始 正 ④213Aシ(上)、⑩51Aシ、 嘉 ④213A(上)、 甲 ④120Aシ(上)、	絨 正 ③92シ(去)申志反、④76A、⑥111シ(去)音試、④207A(去)音試、 嘉 ③92(去)申志反、④75A、④207A(去)音試、⑥111、⑦228A(去)、 建 ③78シイ _左 (去)申志反、④63A、⑦217(去)試 正 ⑤41Aシ(去)、 嘉 ⑤41A(去)、 建 ⑤36Aシ(去)	
常	時 清 ⑦29Aシ、 建 ⑦87シ	市 清 ⑦96シ、 嘉 ⑦311シ、 建 ⑦260シ	侍 正 ①34、①35(去)、 嘉 ①33、①34(去)、 建 ①28、⑥99シ、①29シ	
影	噫 正 ⑥33、⑦108イ(平)於其反、⑩43イ・於其反、 嘉 ⑥33イ(平軽)、⑦108イ(平)、⑦109A(平)、⑩43イ、 建 ⑥27イ、イ _左 (平)於其反音依、⑦90キイ(平)、⑩35イ、(平)、 文 ⑦69イ _左 ・於其反 医(醫) 正 ⑦116イ・於其反、 嘉 ⑦116於其反、 建 ⑦97イ・イ _左 (平)於其反、 文 ⑦75イ(平)		意 建 ②16A(上)	
曉	僂 正 ②52Aキ、 嘉 ②52Aキ(平)			
辛	恰 正 ⑤169イ、⑤169(平)以之反、⑦140イ(平)以之反、 嘉 ⑤169(平)以之反、⑦139イ(平)以之反、⑦139イ、 建 ⑤146イ(平)以之反、⑦116、⑦117、⑦117、⑦117イ、 文 ⑦93イ(平)、⑦94A(平)	以 正 ①161A(上)、 嘉 ①160A、④19(上)、 建 ①137A(上)、 甲 ④7イ 已 建 ⑨143A(上)	異 清 ⑧98A、⑧135(去)、⑧143イ(去)、 正 ①27(去)、④75A、⑥106Aイ、 嘉 ①26、①174(去)、 建 ①23、⑧204、⑧214イ、①148イ(去)、⑧146A(去)、 甲 ④38Aイ、⑧112Aイ(上)、⑧157イ _左 (去)、⑨165イ _左	
来		理 正 ①77A(上)、 嘉 ①172A(去)、 建 ④194A(上)、⑨187A(平) 里 清 ⑦12、⑧84Aリ、 正 ①60A、①61A、①62A(上)、 嘉 ①59A、①61A、②137(上)、 建 ①50A、①65(上)、②115、③136、④152、⑦152リ、 甲 ⑧16リ(上) 鯉 清 ⑧137、⑧138、⑧138、⑧139リ、 正 ⑥28リ・良士反、⑧247音里、 建 ⑥23、⑧206、⑧207、⑧208、⑧209リ、 甲 ⑧158音里		
日	楯 正 ③84Aシ(平濁A)音而、 嘉 ③83A(平濁A)音而、 建 ③71A(平濁)音而而 群 ①80(平濁)、 正 ①37(上濁A _朱)、 嘉 ①36(平濁A)、 建 ④1シ	耳 正 ③200Aシ(上濁A)、 嘉 ③66A(去濁A)、③200A(上濁A)、 建 ③169シ(上)		
08	微(開)	尾(開)	未(開)	
見	幾 正 ⑥78Aキ(→群母)			
溪			氣(氣) 清 ⑧119、⑧120キ、 正 ④171キ、 建 ④143、⑤144、⑤146A、⑤179、⑧181、⑧183キ、⑧181キ(去)、 甲 ④95(上)、④96A、⑧139キ	
群	幾 正 ②196A、⑦72Aキ(平)、 嘉 ②196A、⑦71、⑦72A(平)、 建 ②165Aキ、⑦59A(平)、 文 ⑦40A(平)(→見母)			
疑	沂 正 ⑥148キ(平)音其、	顛 正 ①35キ(上濁A・去)	毅 群 ②66キ(去濁)、⑨	

	⑥150A キ、 嘉 ⑥148(平)音其、 建 ⑥123 キ(平)魚依反、⑥125A キ	濁 A)魚起反、 嘉 ①34 キ(上濁 A)魚起反、 建 ①29 ギ・キ(上濁)魚起反	266A キ、 正 ④186 キ(去濁 A)魚氣反、⑦137 キ(去濁 A)魚既反、⑨83A キ(去濁 A)、 嘉 ④185 キ(去濁 A)魚氣反、⑦136 キ(去濁 A)、 建 ④155 ギ(去)魚氣反 _右 、④156A キ、⑦114 ギ _左 (去)魚既反 _右 、⑨69A(去)音義、 文 ⑦90(去)魚既反、⑦91A(去)、 甲 ④104 キ(去濁 A)魚氣反、④104A(去濁 A)、④104A キ(去濁 A)	
影	依 正 ②181A イ(平)、④17A(平)、 嘉 ②181A、④17A(平)、 建 ②153(平)、④14A イ(平)、 甲 ④5A イ 衣 正 ④247、⑤50、⑤187A、⑤187、⑥135A イ、 建 ②147、③105、④205、⑤44、⑤161、⑤161、⑤162、⑤170 イ、⑤161 イ _左 ・朱位反、⑩129 イ(平)(→去声)		衣 正 ③155、⑤121、⑥140A、⑥150A、⑨117 於既反、 嘉 ③155 於既反、 建 ③131(去)於既反 _右 、⑤104(去)於既反、⑤105、⑤157A、⑤159A、⑥116A(去)、⑤201A、⑨97 於既反(→平声)	
曉	希 清 ⑨103A キ、 正 ⑤3A キ(平)、⑧186A キ、 嘉 ⑤3A(平)、 建 ⑤3A(平)、⑧154A 音幾、 文 ⑧140A キイ(平輕)、 甲 ⑧119A キイ(平)		籛 正 ②82 キ(去)許氣反、 嘉 ②82 キ(去)許氣反、②83A(去)、 建 ②69 キ(去)許氣反、②69A(去)	
08	微(合)	尾(合)	未(合)	
非	非 清 ⑧9A ヒ、 正 ④118A(平)、 嘉 ①107A、①135A、④118A、⑦68A(平)、 建 ①92A、①123A、④98A、⑧11A(平)、 甲 ④62A(平)			
敷		斐 正 ③108 ヒ(上)芳匪反 _上 、 嘉 ③108 ヒ(上)、 建 ③92 ヒ(上)芳匪反 排 正 ④22 ヒ(上)芳匪反、 嘉 ④22 ヒ(上)、 建 ④17 ヒ(上)芳匪反、④19A(上)、 甲 ④8 ヒ(上)芳匪反、④9A ヒ(上) 菲 群 285A(平)、 正 ④245 芳匪反、④246A ヒ(上)、 嘉 ④245 芳匪反、 建 ④204 芳匪反、④205A ヒ(上)	費 正 ⑩145A 芳味反	
奉	肥 正 ①192A ヒ、 嘉 ①191A ヒ(平)、 建 ①163A ヒ			
微	微 清 ⑦49A、⑦51A、⑧104A ヒ、⑧110 ヒ(平濁 A)、 正 ①134A、②196A ヒ(平濁 A)、③30A、③68A、③114、⑤121A、⑦238A ヒ、⑧200(平濁 A)、 嘉 ①133A、②196A、③30A、③114、⑦240A(平濁 A)、③68A(平)、 建 ②165A、③97 ヒ、③25A、③97A、⑤104A、⑧154A、⑩111A(平)、③58A(平濁)、⑦244、⑨124 ビ、⑧165 ヒ(平)、 文 ⑦169A、⑧150(平)、 甲 ⑧127(平)		味 正 ⑤201A ヒ、 嘉 ⑤202A(上濁 A) 未 正 ⑤142 音味、⑦125(上濁 A)、 嘉 ⑦124(去濁 A)、 建 ⑤123 音味、 文 ⑦81(上・去)	
見	緜(歸) 正 ②105、②106A(平)、⑥170A クキ、 嘉 ②104、②106A(平)、 建 ①67、①149A、④202A、⑥141 キ、②88 キ(平)、②89A(平)、⑩61 クキ(平)	鬼 建 ①181、③194、④205、⑥37、⑥37 キ	貴 建 ⑥163 キ、 甲 ⑧133A クキ	
疑	魏 群 272(平濁)、 正 ④221 クキ(平濁 A)魚威反、 嘉 ④221(平)魚威反、 建 ④184 キ(平)魚威反、④187、④190、④190 ギ、 甲 ④125 クキ(平濁 A)魯[ママ]威反、④127(平)		魏 清 ⑦20(去)、 正 ⑦195 ギ、 建 ⑦163 ギ	
影	威 群 560 キ、 正 ④144 イ、 嘉 ①74(平)、 建 ①63 イ、④119 イ(平)、⑩123		尉 正 ①3 キ、①10、①36 キ(去)、 嘉 ①2 キ(去)、①35(去)、 建 ①8、①30 イ	

	斗・イ ^左 、 甲 ④77 斗			
曉	揮 清 ⑦14A ク斗、 正 ⑦185A キ(平)許歸反、 嘉 ⑦184A ク斗(平)許歸反、 建 ⑦154A ク斗(平)、 文 ⑦126A ク斗(平輕)		諱 建 ④99A(去)	
于	章 正 ①6 斗(平)、 嘉 ①5(平)、 建 ①5 イ(平輕)			
04 遇撰				
09	魚	語	御	
知		著 正 ⑤123A チヨ(去)竹呂反、 嘉 ⑤123A(去)竹呂反、 建 ⑤106 チヨ(去)竹呂反(→去声)	著 正 ④230 チヨ、 嘉 ④230A チヨ(上)、 建 ③55A 知慮反、④192A チヨ(去)(→上声)	
澄	除 群 551A(平)、 正 ⑤193A、⑩144A チヨ(平)、 嘉 ⑤193A チヨ(平)、⑩144A(平)、 建 ⑤166A、⑩120(平)	杼 正 ③94A チヨ(去)直呂反、 嘉 ③94A チヨ(去)直呂反、③79A チヨ(去)直呂反		
孃		女 嘉 ②37A、②106A(上濁A)、 建 ⑨119 ゼヨ、⑨136 チヨ		
見	居 清 ⑧42、⑧130 キヨ、 正 ①59A(平)、①105(平輕)、④11 キヨ、 嘉 ①58A、①104、②139A、④11、⑦96(平)、 建 ①50A(平)、①89 キヨ(平)、④9、⑦80、⑦130、⑧54、⑧197、⑨99、⑨188 キヨ、 甲 ④2(平輕)、⑧42 キヨ(平輕) 車 群 217 キヨ(平)音居、 正 ①204 キヨ・音居、⑥26 音居、⑦233 キヨ、 嘉 ④203 音居、①204A キヨ、 建 ①173 キヨ・音居、①174A キヨ、⑦194 キヨ・キヨ	拳(擧) 清 ⑦101A、⑧12A、⑧39A、⑧49 キヨ、 正 ⑦318A(上)、⑧18A、⑧80(去)、 嘉 ①63A キヨ(去)、⑦9、⑦10、⑦10、⑦12A(上)、 建 ①54、⑧49A(上)、⑤217、⑦7、⑦8、⑧65 キヨ、⑥243、⑥245、⑦7 キヨ ^左 、 甲 ⑧11A キヨ 莒 清 ⑦43A、⑦44A キヨ、 正 ⑦86 キヨ(上)居呂反、⑦230A、⑦231A キヨ、 嘉 ⑦86(上)居呂反、⑦228A キヨ(上)、 建 ⑦72 キヨ(上)音呂反 ^右 ・音拳 ^左 、 文 ⑦51、⑦160A キヨ(上)、⑦161A(上)	抛(據) 正 ④17A キヨ(去)、 嘉 ④17A キヨ(去)、 建 ④13A(去) 踞 清 ⑦118A キヨ(去)、 正 ⑦348A キヨ(去)音抛、 嘉 ⑦348A(去)音抛、 建 ⑦291A(去)、 文 ⑦253A キヨ(去)、⑦253A(上)	
溪		去 正 ②82、⑤192、⑥207、⑥218A、⑦57 起呂反、⑤193A(上)、 嘉 ②82、⑦57 起呂反、⑤193A(上)、 建 ②68、②70、②130、⑤166、⑤181A、⑥181A、⑦47(上)、⑤166A(去)、⑤180A 起呂反、 文 ⑦29(上)起呂反(→去声)	去 正 ④109A(去)、 嘉 ④109A(去)、 建 ②129A、④90A(去)、 甲 ④57A キヨ	
群	蓬 清 ⑦73 キヨ(平)、⑦74A、⑧23 キヨ、 正 ⑦47A キヨ(平)其居反、⑦275、⑧35 キヨ(平)、⑦277A(平)、 嘉 ⑦47A キヨ(平)其居反、⑦274 キヨ、⑦276A キヨ(平)、 建 ⑦38A(平)其居反 ^右 、⑦229 キヨ(平)其居反 ^右 ・音渠、⑧28 キヨ、 文 ⑦20A キヨ ^左 (平)其居反、⑦196 キヨ、⑧18 キヨ(平)、 甲 ⑧22 キヨ(平輕)	距 正 ⑩11 音巨	遽 建 ②133A(去)	
疑	魚 建 ⑧203 ギヨ、 文 ⑧16(平)、 甲 ⑧20、⑧157(平濁A)、⑧157A キヨ	圍 群 240A キヨ(上濁)、408(上濁)、 清 ⑦60 キヨ、 正 ③72、⑦253 キヨ(上濁A)魚呂反、 嘉 ③72A キヨ・魚呂反、⑦252 キヨ(上濁A)魚呂反、 建 ③61A(上)魚呂反、⑦211 ギヨ(上)魚呂反、 文 ⑦179(上)魚呂反 禦 正 ③18 魚呂反、 嘉 ③18 魚呂反、 建 ③15 魚呂反 語 清 ⑦120A コ・キヨ ^左 (上)、 正 ①7、①13(上濁A)、 嘉 ①3(去濁A)、①50(上濁A)、 建 ①1、①2、①6、①10、①26、⑥9 ギヨ、⑥169A、⑦294A(上)、 甲 ④54A キヨ(上濁)(→去声)	御 群 358(上濁)、 正 ⑤9、⑤22A(去濁A)、 嘉 ⑤9、⑤22A(去濁A)、 建 ①117 ギヨ(去)、⑤8、⑤8 ギヨ 語 正 ②116、②127A、③226、④25A、⑤46A、⑤100、⑤110、⑥48A、⑦91、⑦269A、⑨54、⑨210、⑩86 魚拋反、③179 魚慮反、⑥176A、⑥203A キヨ、 嘉 ③179A、④25A、⑦91、⑨54、⑩86 魚拋反、 建 ②97、③191(去)魚拋反、⑤86(去)魚拋反音御、②106A、④20A、⑩71(去)、③152A 魚拋反、⑤40(上)魚拋反、⑤95 ギヨ(去)魚拋反、⑥39、⑥146(上)、 甲	

			④10A 魚拋反 ^平 (→上声)		
清	沮 清⑦102A シヨ、 𠄎 ⑦320A シヨ・七餘反、 𠄎 ⑦176 シヨ(平)七餘反、 𠄎 ⑦320A シヨ(平)七餘反、 𠄎 ⑦177(平輕)七餘反、 𠄎 ⑦268A、 𠄎 ⑦150 シヨ、 𠄎 ⑦147 シヨ(平)七餘反七予反、 𠄎 ⑦231A シヨ ^平 (平)七餘反 雖 𠄎 ②92 シヨ(平)七餘反、 𠄎 ④212 シヨ・七餘反、 𠄎 ②91、 𠄎 ④211 シヨ(平)七餘反、 𠄎 ②77、 𠄎 ④176 シヨ(平)七餘反、 𠄎 ④119 シヨ・七餘反、 𠄎 ④121A シヨ(平)				
邪		叙 𠄎 ①13(上濁 A)、 𠄎 ①2(上・去)、 𠄎 ①2 ジヨ、 𠄎 ④10A シヨ 序 𠄎 ①1 ジヨ			
莊		俎 清⑧3 ヌ(上)、 𠄎 ⑧4 ヌ(上)側呂反、 𠄎 ⑧4 側呂反、 𠄎 ⑧3 ヌ(上)側呂反			
初		楚 清⑦16A ヌ、 𠄎 ⑨139、 𠄎 ⑨192 ヌ			
崇			助 清⑧48A ヌ(去)、 𠄎 ⑤48A(上)、 𠄎 ⑥15A シヨ(去)、 𠄎 ⑧78A(去)、 𠄎 ⑧78A(去)、 𠄎 ⑥12A(去)、 𠄎 ⑧52A(去)、 𠄎 ④23A ヌ(去)、 𠄎 ⑧50A(去)		
生	蔬 清⑦17(平輕)、 𠄎 ④57 ヌ・所居反 ^平 、 𠄎 ⑦31A ヌ、 𠄎 ⑦191 所居反、 𠄎 ④57(平)、 𠄎 ⑦31A ヌ(平)、 𠄎 ⑦190 所居反、 𠄎 ④47、 𠄎 ⑦25A ヌ(平)、 𠄎 ⑦159 ヌ・所居反、 𠄎 ⑦8A(平)、 𠄎 ④28 ヌ ^平 (平輕)所居反、 𠄎 ④29A ヌ 疏(疏) 清⑧123A ヌ(平)、 𠄎 ⑤215、 𠄎 ⑧226A ヌ、 𠄎 ⑤215、 𠄎 ⑧226A ヌ、 𠄎 ⑤185 ヌ、 𠄎 ⑧187A(平)、 𠄎 ⑦131 ヌ・ ^平 、 𠄎 ⑧172A ヌ、 𠄎 ⑧144A ヌ				
章	諸 𠄎 ①30、 𠄎 ①117A(平)、 𠄎 ①29(平・上)、 𠄎 ①116A、 𠄎 ②21(平)、 𠄎 ①25、 𠄎 ②17、 𠄎 ⑥134、 𠄎 ⑦194、 𠄎 ⑧152 シヨ、 𠄎 ①99(平輕)				
昌		処(處) 𠄎 ②138 昌呂反、 𠄎 ②117 昌呂反(→去声)	処(處) 𠄎 ⑨51A(去)昌慮反、 𠄎 ⑨179A 昌慮反、 𠄎 ⑦96(上)、 𠄎 ⑤172A 昌慮反、 𠄎 ⑥231、 𠄎 ⑨42A、 𠄎 ⑨43A(去)、 𠄎 ⑦80、 𠄎 ⑨99 シヨ、 𠄎 ⑧98A 昌慮反、 𠄎 ⑧85A 昌慮反(→上声)		
書	書 清⑧55A シヨ、 𠄎 ①35(平・去)、 𠄎 ①34(平輕)、 𠄎 ①197(平)、 𠄎 ①29 シヨ(平)、 𠄎 ①168、 𠄎 ④54、 𠄎 ⑦279 シヨ、 𠄎 ④31A シヨ、 𠄎 ④32(平輕) 舒 𠄎 ④12A シヨ、 𠄎 ④12A(去)、 𠄎 ⑤170 シヨ、 𠄎 ④42A シヨ	暑 𠄎 ⑤185 シヨ(上)、 𠄎 ⑤185(上)、 𠄎 ⑤160 シヨ 黍 𠄎 ③15、 𠄎 ⑨206 シヨ(上)、 𠄎 ③15A シヨ(上)、 𠄎 ③12A(上)、 𠄎 ⑨172 シヨ	庶 𠄎 ⑥78A、 𠄎 ⑨126A シヨ、 𠄎 ⑦50A、 𠄎 ⑨149A シヨ(去)、 𠄎 ⑥78A シヨ、 𠄎 ⑦50A シヨ(去)、 𠄎 ⑧194 ヌ、 𠄎 ⑦42、 𠄎 ⑨104A、 𠄎 ⑨125A(去)、 𠄎 ⑧160 ヌ・シヤ[ママ]、 𠄎 ⑦23A、 𠄎 ⑦24(去)、 𠄎 ⑧124 シヨ 恕 清⑧50 シヨ(去)、 𠄎 ②191 シヨ(去)音庶、 𠄎 ②191(去濁 A)音庶、 𠄎 ②162 ジヨ、 𠄎 ⑧67 シヨ(去)、 𠄎 ⑧57 シヨ ^平 (去)、 𠄎 ⑧52 シヨ(去)		
影	於 𠄎 ④7A ヨ(平)、 𠄎 ④7A ヨ(平)				
曉	虛 𠄎 ⑥78A キヨ、 𠄎 ⑥64A(平)				
羊	予 𠄎 ②41 ヨ(平)、 𠄎 ⑤29A ヨ(上)、 𠄎 ②41A、 𠄎 ⑤29A(平)、 𠄎 ②34A ヨ(平)、	予 𠄎 ③49 ヨ(上)羊汝反或音余、 𠄎 ⑨122 ヨ ^平 (上)、 𠄎 ⑨126 ヨ(上)、 𠄎 ⑨128A(上)、	与(與) 𠄎 ①85A、 𠄎 ②59、 𠄎 ④222、 𠄎 ⑤26、 𠄎 ⑦68、 𠄎 ⑧37A 音預、 𠄎 ④222 音預、 𠄎 ①		

	<p>⑤26A(上)(→上声) 与(與) ㊦⑦47、⑦98、 ⑦98、⑧135(平)、⑦102A ヨ(平)、㊦①50、①83、① 114、②23、③25、③53、 ③56、③107、③108、③ 170、④185、⑤32、⑤123、 ⑥64、⑥85、⑥103、⑥159、 ⑥241、⑥281、⑦235、⑦ 314、⑦324、⑦353、⑧15、 ⑧22、⑧58、⑧136、⑧144、 ⑧244、⑨14、⑨71、⑨80、 ⑨221、⑩13 音餘、③ 247(上)、⑤101、⑨181 音 余、⑤112 ヨ(平)、⑤ 153(平)、⑨86 音餘^上、 ㊦②23、④186 音餘、⑤ 112、⑤153(平)、㊦① 42(平)音余^右、①70、⑤106 音餘、①75、③91、④154、 ⑥53、⑥70、⑥85、⑥91、 ⑥132、⑥133、⑥201、⑦ 268A、⑩10、⑩13(平)、① 96、⑤87(平)音餘、⑤97 ヨ、⑤132 ヨ(平)音餘、③ 21、③44、③47、③144(平) 音余、⑤28 音余、㊦⑦227、 ⑧106 音余、⑦257(平)、⑧ 99 音與[ママ]、㊦⑧13、 ⑧37、⑧101(平)、⑧86、⑧ 91、⑧156 音余(→上声、 去声) 譽(譽) ㊦⑧86 音餘、㊦ ⑧69(平)、㊦⑧54 音余(→ 去声) 輿 ㊦⑧18、⑧20A ヨ、 ㊦⑦321A 音餘、⑧29、⑨ 180(平)音餘、㊦⑧28 ヨ(平) 音餘、⑨166 音餘、⑨179 ヨ(平)、㊦⑤215 音餘、⑧ 23 ヨ(平)音餘、⑨139、⑨ 150 ヨ(平)、⑨140A(平)、 ㊦⑧13 ヨ(平)、㊦⑧18(平 音餘) ㊦①69(平)、①203A ヨ、㊦①68、②147A、③ 241A(平)、㊦①58、① 173A、④166 ヨ、③142 ヨ (平)、⑤184(平)</p>	<p>㊦③49 ヨ(上)、③56(平)、 ⑨123 ヨ^左、⑨127、⑨ 129A(上)、建③41 ヨ(上)羊 汝反、③44、③47 ヨ、⑨ 101、⑨105 ヨ(上)(→平声) 与(與) ㊦④32 皇音餘、 ⑨195、⑨195 又音餘、㊦ ⑦20A(平)、㊦④14 音余 (→平声、去声)</p>	<p>72A、④185 (去)音預、② 50、③98、③136、④ 186(去)、⑤23、⑧30A 音 預、㊦⑦37 音預、㊦④ 125(去)音預、⑧23(去)(→ 平声、上声) 譽(譽) ㊦⑥269A ヨ (去)、㊦⑥268A(去)、㊦⑥ 223A(去)(→平声) 豫 ㊦⑥243A ヨ、㊦⑥ 203A(去)</p>	
来		<p>旅 ㊦⑦61、⑧3、⑧4A リ ヨ、㊦②22 リヨ(上)音呂、 ②23A、⑥127 リヨ、⑧6 リ ヨ(上)、㊦②22 リヨ(上)音 呂、⑧5(上)、㊦②18 リヨ (上)音呂、⑥105 リヨ(上)、 ⑦212 リヨ、⑧4 リヨウ (上)</p>	<p>慮 ㊦⑧12A リヨ(去)、㊦ ⑧18A リヨ、⑨224(上)、 ㊦⑧14(去)、⑨187 リヨ、 ⑨187A リヨ(去)、㊦⑧ 11A リヨ</p>	
日	<p>如 ㊦⑧41A シヨ、㊦② 118、⑤29A シヨ、㊦② 117、④11(平濁A)、②118、 ②119(平濁B)、⑦19 シヨ (平濁A)、㊦②98、④9、 ⑤38、⑤132、⑤149、⑤ 151、⑥40、⑥40、⑥41、 ⑦117 シヨ、②99、②100、 ②101、⑤127、⑤130、⑤ 132、⑦15、⑦117 シヨ、 ㊦⑧42(平濁A)、㊦⑧41A シヨ(平濁A) 女[△] ㊦⑨69、⑨117 音 汝、㊦②23、③14、③44、 ③195、④70 音汝、㊦③ 164、③169 音汝→「汝」</p>	<p>汝 ㊦①177、②23、③47、 ⑨52 女音汝、③14、③44、 ④70 女[△]音汝、㊦①131 女音汝</p>		
10	虞	虞	遇	
非	<p>夫 ㊦⑦65、⑦91(平)、㊦ ①32、①58A(平)、①82(平 音輕)、④163、⑤48、⑦262 音扶助、⑨124 音符、㊦① 31、①32、①57A、①57A、 ①81、③258A、⑤119(平)、 ④163、⑧162、⑧199 音扶、</p>	<p>府 ㊦⑥53 フ、㊦⑥ 53(上)、㊦⑥43 フ 父 ㊦③102A(上)音甫、 ⑦86 音甫、㊦③102A(上)、 ㊦③87A(上)音甫、⑦72 ホ・フ^左(上)音甫、㊦⑦ 51(上)(→奉母・上声)</p>	<p>傅 ㊦①5 フ(去)、㊦①4 フ 賦 ㊦⑥68A フ、㊦① 58A、①59A(去)、③35、③ 35A(上)、㊦①50A フ、③ 29 フ(去)、③30A(去)</p>	

	<p>⑦241 フン、隸①27、①28、⑤38、⑤102、⑥24、⑥107、⑥129、⑦163、⑦202、⑧212、⑧214、⑨72 フ、①49A フ_左(平)、①69、①74、③54、④39 フウ、①73、⑥126、⑥178、⑧123 フ、⑦219 音扶(→奉母・平声) 膚 群③01、302A(平)、531 フ(平)、正⑥200 フ(平)方于反、⑥202A、⑥203 フ、⑩66(平)方于反、嘉⑥200(平)方于反、⑩66 フ(平)、建⑥167 フ(平)、⑥168A(平)、⑩55 フ(平)方于反</p>	<p>甫 正⑥138 フ、⑥114 ホ_左・音父 簞 正③16A フ(上)音甫、嘉③16A(上)音甫、隸③13A フ(上)音甫</p>		
敷	<p>桴 正③24 芳符反、③26A フ(平)、嘉③24 芳符反、③25A(平)、隸③20 芳符反、③21A フ(平)、③22A(平)</p>		<p>仆 群③27 フ、正②157A 音赴、⑥264A フ(去濁 A)撫遇反、嘉②157A 音赴、⑥264A フ(去濁 A)撫遇反、隸⑥220A フ_左(去)撫遇反</p>	
奉	<p>夫 清⑦59、⑧83、⑧92、⑧96(平)、正③186、③255、⑤91、⑤105、⑤143、⑥38、⑥191、⑥250、⑥270、⑦36、⑦117、⑦174、⑦252、⑦288、⑦301、⑧22、⑧29、⑧93、⑧145、⑨33、⑨63、⑨116 音符、⑥113、⑥154 音符、⑧163、⑧199、⑨179 音扶、嘉③186、④30、⑧145、⑨32、⑨63 音符、③255(平)、⑦36(平軽)、隸③157、③215、⑤78(平)音符、③227、⑨150 音符、④25、④136、⑤90、⑤91、⑤123、⑥31、⑥35、⑥45、⑥93、⑥97、⑥127、⑥159、⑥208、⑥227、⑦240、⑧135、⑧142(平)、⑤42(平)音符_右、田④14、⑧18 音符、⑧58、⑧92(平)音符、⑧102(平)(→非母・平声)</p>	<p>父 隸①60 フウ(去)、①121、②165、⑨102 フウ、⑤76、⑥73、⑥77 フ、⑥13 フ、⑨49A(去)、⑨126A(上)、反⑦175A、⑦176(平)(→非母・上声) 腐 正③51A(上)房甫反、嘉③50A(上)、隸③43A(上)房甫反 釜 正③150 フ(去)音父、嘉③150(去)音父、隸③127 フ(去)音父</p>	<p>附 清⑧81A フ(去)、⑧84A フ、隸⑥55、⑧116A(去)、反⑧104A(去)、田⑧94A フ 駙 正①35 フ(去)、嘉①34 フ、隸①29(去)</p>	
微	<p>巫 正④115 フ・音無、⑦116 フ・音無、嘉④120 フ、⑦116(平濁 A)音無、隸④95 フ(平)、④99 フ、⑦97 フ_左・音无、田④60、④63 フ、反⑦74 フ 無 清⑧14 フ、正②22A フ(平濁 A)、④215A ム、⑤72A フ、⑤117、⑦5 母音無、⑥298 母音无、⑦333A(平濁 A)、嘉⑦229A フ、⑦333A(平濁 A)、隸①65 母音无、②18A(平)、⑥215、⑦210、⑧17 フ、田④66A フ(平濁 A) 母 正③159、⑤16、⑦87 音無、隸③135(平)音無、⑤14 音无、⑤15、⑤16、⑤16(平)、⑤100 音無 誣 正⑩49 音無、隸⑩40 音無</p>	<p>侮 正⑧227 亡甫反、嘉⑧227 亡甫反、隸⑧188 亡甫反、田⑧144 亡甫反 儻 正②78A フ、隸⑥123 フ(上) 憮 正⑨192 フ(上濁 A)亡甫反_上、嘉⑨193(上濁 A)、隸⑨160 フ(上)亡甫反 武 嘉②132(去濁 A)、②133A(上濁 B)、③32(上濁 A)、⑦335 フ、隸①121 フ(上)、②65A、⑩71 フ、②111 フ(上)、③88、③168、④193、⑦180、⑨15、⑦166、⑨196、⑩66、⑩68 フ、反⑦137(上) 舞 清⑧34 フ、正⑥148、⑥278 フ、嘉②78A(去濁 A)、隸⑥231 フ、⑧42 フウ、田⑧33A フ</p>		
知	<p>誅 清⑦97A チウ、正③53A チウ、⑦313A(平)、嘉③53A(平)、⑦312A チウ、隸③45A(平)、⑩110A チウ 邾 清⑦37A、⑦37A チウ、正⑦129A チウ(平)、嘉⑦217A チウ(平)、217A チユ、隸⑦183A チユ(平)、反⑦153A チウ(平)</p>		<p>註 正①25(去)之戍反又張住反、嘉①24(去)之戍反又張住反、隸①21 チウ</p>	
見	<p>拘 正③6A 音俱、隸③4A 音俱、反⑦90A(平)</p>	<p>矩 正①135A ク(去)、嘉①134A ク(去)、隸①115A ク(上)</p>	<p>句 正①8、①20(去)、嘉①7(去)、隸①6、①16 ク、②29A、②29A(去)</p>	
溪	<p>區 正⑩46 羌于反、嘉⑩</p>			

	47 羌于反			
群				具 正⑤257A(去濁 A)、 嘉⑤258A ク(去濁 A)、 ⑤222A、⑥119A(去)、⑥89 キウ(去) 懼 甲④77A ク
疑	愚 正②171A、⑨56(平濁 A)、⑥70 ク(平濁 A)、 嘉②171A、⑥70(平濁 A)、 ①133、③90、⑨14 ク、① 135、⑥58、⑨80、⑨80 グ、③89、⑨46 ク(平)、 甲④40A ク(平濁 A) 虞 正④196、⑨182、⑨ 188 ク 隅 正⑨95A(平濁 B)、 嘉⑨94A ク(平)、 建④20A(平)、⑨79A ク(平)、 甲④10A ク(上)			
精				足 群②44 スウ(去)、 正③118 スウ(去)將樹反、 嘉③118 スウ(去)、 建③100 スウ・ソク 左(去)、 ③100A(去)
清				娶 建④96 七住反、 甲④61 七住反
從		聚 正⑧82A シウ、⑧99A シウ(去)、 正⑥67 シウ(去)、 嘉⑥67、⑧144A(去)、 建⑥55 シユウ(去)、 ⑧118A、⑧146A(去)、 甲⑧92A シウ(去)、 ⑧113A シウ		
心	須 群③29A ス(平)、 正①140A ス・思與反、 ⑦32(平)、 嘉①139A スウ(平 輕)、 ⑦32 スフ(平)、 建①119 シユ 左(平輕)			
生		数(數) 正④62、⑩90 ス (上)色主反、 ⑥78A 色主反、 嘉④62(上)色主反、 ⑥78A 色主反、 ⑦110A(去)、 ⑩90(上)色主反、 建④51 ス(上)色主反、 ⑥64A(上)、 ⑦91A(上)色主反 右、 ⑩75 ス・色主反、 正⑦70A(去)、 甲④30 口主反(→去声・ 生母・覺韻)	數(數) 正①212A(去)、 嘉①123A スウ(去)、 ①211A(去)、 建①105A、 ①180A(去)、 ⑩96 スウ(去)(→上声・ 生母・覺韻)	
章	朱 正⑨98A(平)、 建⑨81A(平)、 ⑨182 シユ(平)	主 正⑦100A、 ⑦120A シユ、 正②76(上)、 嘉①76、 ①77A、 ②50A、 ②76(上)、 建①65、 ②63、 ⑥189 シユ(上)、 ②42A、 ②64A(上)、 ⑤100、 ⑧120 シユ、 正⑧108A(上)、 甲⑧93A(上)		
書				成 正⑧186A シウ
常				樹 正②110(去)、 嘉②109、 ②110、 ②113A(去)、 建②92 シユウ・シウ、 ②92 シユウ、 ⑥231A(去)
影	莊 正⑦16 於于反、 ⑦16A ウ(平)、 嘉⑦16A、 ⑦20A(平)、 建⑦13A ウ(平)、 ⑦16A(平)			
羊	兪 建③88A ユ・羊朱反 喻 正③104A ユフ・羊 朱反、 嘉③104A ユウ・羊 朱反→「兪」、 建③66 ユ 左・音兪⇒「踰」 愉 正⑤179 ユ(平)羊朱 反、 嘉⑤179 イウ(平)羊朱 反、 ⑤180A(平)、 建⑤154 ユウ(平)羊朱反 榆 正⑨114A(平)、 嘉⑨115A(平)、 建⑨95A ユ(平) 龠 正⑨79 踰音兪 與 群④44(平)、 清⑧80、 ⑧81、 ⑧83、 ⑧90、 ⑧100 ユ(平)、 ⑧84A ユ、 正⑧139 ユ・音踰、 嘉⑧139 音踰、	庚 正③152 イウ・ユ(上) 喻甫反、 嘉③152 イウ(上) 喻甫反、 建③128 ユ(上)喻 甫反 愈 正③44A ユウ(上)、 ⑥64 以主反、 ⑥65A ユ(上)、 嘉③44A ユウ(上)、 ⑥65A イウ、 建③37、 ⑥52 以主 反、 ③37A、 ⑥53A ユ(上)	喻 正②193A ユウ(平)、 嘉②193A イウ(平)、 建②163A ユ(去)	

	<p>隼 ⑧114 ヌウ^左(平)音兪、 ⑧115、⑧119、⑧132 ヌ、 ㊦⑧102(平・上)音瑜、㊦ ⑧88 ヌ(平)音瑜、⑧ 114(平) 隼 隼⑨67A(平)</p>			
于	<p>于 正①201A ウ(平)、① 201A(平)、嘉①200A ウ (平)、隼①170A ウ(平) 𠄎(𠄎*) ㊦⑥148 ウ・音 于、⑥278 ウ(平)、嘉⑥149 音于、⑥278(平)、⑥278A ウ、隼⑥123 ウ(平)、⑥231 ウ</p>	<p>禹 清⑦4 ウ、正①18 ウ (平)、嘉①17(上)、隼①14、 ④185 ウ(上)、④203、④ 208、⑦140、⑩99 ウ 羽 清⑦12 ウ(上)、正③ 203A ウ、隼⑦151 ウ</p>		
来			<p>屨 正③19 力具反^右、③ 20A リヨ(去)、⑥77A ル (去)、嘉③19 力具反、③ 20A ル^平(去)、⑥78A ル (去)浪遇反、隼③15 力具 反、③16A ルユ(去)、⑥63A リュ(去)</p>	
日	<p>儒 正③197 シユ、隼③ 166 シユ(平濁)</p>		<p>乳^ム 正⑨245A(去濁 A) 如注反又如主反、嘉⑨ 246A(去濁 A)如注反、隼 ⑨204A シウ(去) 孺 正⑨105(去濁 A)而拊 反、嘉⑨107(去濁 A)而樹 反、隼⑨88 シユ、⑨90A、 ⑨91A(去)</p>	
11	模	姥	暮	
幫		<p>圃 正⑦30 ホ(上)居古反 又音布、嘉⑦30(上)居古 反音布、⑦31、⑦31A(上)、 隼⑦24 ホ・ホ(上)居古反 布古反又音布、⑦25 ホ、 ㊦⑦8、⑦9A(上)</p>	<p>布 正⑤12A ホ、⑤ 12A(去)、⑤198 ホ(去)、嘉 ⑤12A ホ、⑤12A、⑤ 198(去)、隼⑤11A、⑤ 11A(去)、⑤170 ホ(去)</p>	
並	<p>蒲 清⑧134 ホ(平)、正⑧ 242A ホ、隼⑧201A ホ (平)、㊦⑧186A ホ、㊦⑧ 155A ホ(上)</p>			
明			<p>慕 正②202A ホウ(去濁 A)、④16A ホ(去)、嘉② 202A、④16A(去濁 A)、隼 ②171A(去)、④12A ホ(去) 暮 正⑥146 莫音暮、隼 ⑥121 𠄎</p>	
端	<p>都 正①36(平)、嘉① 35(平)、隼①30 ト</p>			
透		<p>土 清⑧94A ト、正② 96A(去)、⑤95A ト、嘉② 178、③51(上)、隼②151 ト、③43 ト(上)</p>		
定	<p>𠄎(圖) 正⑤48 ト(平)、 ⑤246A ト、嘉⑤48(平)、 隼⑤41 ト(平) 徒 隼⑥135A(平) 菟 正③87A ト(平)音塗、 嘉③87A(平)音塗、隼③ 74A ト(平)音塗</p>		<p>渡 正⑨179A ト、嘉⑨ 149A(去) 塗 正⑨7 音徒、⑨7A ト (平)、嘉⑨7 音徒、隼⑨5A ト(平) 度 正④219A ト(去)、⑤ 16A ト、嘉②130A、④ 219A(去)、隼④182A、⑤ 15A(去)、⑩112 ト、㊦④ 123A(去)(→定母・鐸韻)</p>	
泥	<p>奴 正⑨148(平濁 A)、嘉 ⑨149、⑨152A(平濁 A)、 隼⑨124(平)</p>	<p>怒 正①43A ト(上濁 A)、嘉①42A(上濁 A)、 隼①36A ト(上濁)</p>		
見	<p>姑 正④50A コ(平)、嘉 ④50A(平)、隼④41A コ (平)、㊦④23A テン[ママ] (平) 孤 正③113A コ、④181 コ(平)、嘉④181(平)、隼④ 151 コ(平)、㊦④101 コ(平 輕) 沽 正⑤78A コ(去)、嘉 ⑤78A(去)、⑤208 音姑、 隼⑤67 音古、⑥67A(去) 狐 正③243 コ(平)音孤、 嘉③243 コ(平)音孤、隼③ 205 コ(平)音孤、③205、③ 206、③206 コ</p>	<p>古 正①12、①14、① 24(上)、嘉①11(上)、隼① 10、①11、①17、①20 コ 瞽 辟④75 コ(上)、清⑧ 118 コ(上)、⑧118A コ、正 ⑤51 コ(上)古、⑤243 コ ⑧216(上)音古、嘉⑤ 51(上)音古、⑧216 音古、 隼⑤44 コ(上)音古、⑤209 コ、⑧179 コ^平(上)音古、 ㊦⑤138 コ(上)音古、⑧ 138A コ、㊦⑧164 コ(上) 音古 鼓(鼓) 正⑥57 コ(上)、 ⑨233(上)、嘉⑥57、⑨235</p>	<p>固 清⑦88A コ、正① 76A(去)、④141A コ、嘉① 75A(去)、⑦296A コ、㊦④ 76A コ(去) 故 清⑦36A コ、⑦118A コ(去)、正⑥244A コ、嘉 ①24(去)、隼④129、⑨201 コ、⑦290A(去)、⑨201 コ (去)、㊦④85 コ、④ 86A(去) 顧 正③31A、⑤161 コ、 ⑤251 音故、嘉③31A(去)、 ⑤161(去)、隼③26A コ (去)、⑤139(去)赤占[ママ] 反</p>	

		(上)、 隹 ⑥47、⑨63 コ、⑨194 コ(上)		
溪		苦 隹 ③197A(上)音古		
疑	呉 隹 ⑧7A コ、 止 ⑤33A コ、 嘉 ④116(平濁 A)、 隹 ④96 コ(平)、④97 コ、⑤29A(去濁)、 田 ④61、④62A コ(平濁 A)、④61、④63A、④63A(平濁 A) 吾 嘉 ⑦229A キヨ[ママ]	五 止 ①89A(去濁 A)、 嘉 ①209A、②76A、②117A(去濁 A)、 隹 ①111、③129、⑥109 コ、④51、④192 コ	忤 止 ⑧37A 五故反、 嘉 ⑧37A 五故反、 隹 ⑧30A 五故反	
精		祖 嘉 ①213A(上)		
清			惜 群 ②10A ソ(去)、 止 ⑦25 錯七故反 錯 止 ①188 七路反 <small>欄上</small> 、①188A ソ(去)、⑥287 古[ママ]故反、⑥290 七故反、 嘉 ①187A ソ(去)、⑥286、⑥290 七故反、 隹 ①159 七路反、①160A ソ(去)、⑥238(去)、⑦20(去)七故反	
從			昨 止 ⑤220 ソ(去)才故反、 嘉 ⑤220 ソ(去)才故反、 隹 ⑤190 ソ(去)七故反	
心			翹 群 ③01(去)、 隹 ⑦94 ソ(去)、 止 ⑥200 ソ(去)先故反、⑥203、⑦308A ソ、⑦307 ソ(去)悉路反、 嘉 ⑥200(去)先故反、⑦307 ソ(去)悉路反、⑦307A ソ、 隹 ⑥167 ソ(去)、⑥169 ソ、⑦256 ソ(去)悉路反音素、 又 ⑦221 ソ(去)悉路反音素 止 ⑤187 ソ、⑥7A(去)、 嘉 ⑥6A(去)、 隹 ⑤161 ソ、⑥5A ソ(去)	
影	嗚 止 ②26 烏 圻 嘉 ③51 音鳥、③52A フ・ウ <small>左</small> (平)、 隹 ③43 音鳥、③44A ウ 惡 (惡 ^x) 止 ②153 音鳥、 嘉 ②153 音鳥、 隹 ②130(平)(→去声、影母・鐸韻) 枋 止 ③51A 圻音鳥、③52A フ(平) 於 止 ③87A(平)音鳥、 嘉 ③87A(平)音鳥、 隹 ③74A フ(平輕)音鳥 汚 嘉 ⑨49A 一音鳥 烏 止 ④76A ウ・ヲウ <small>左</small> 、 隹 ④63A ウ(平)、 田 ④38A フ(平輕)		惡 (惡 ^x) 群 ①16A(去)、438(去)鳥路反、 隹 ⑧58(去)、⑧59A フ(去)、 止 ②145、②158、③94A、⑥117、⑥229、⑦126、⑧97、⑨97、⑨135、⑨145、⑩72 鳥路反、②146 一音鳥路反、④107A 鳥路反 <small>欄上</small> 、⑥231A フ(去)、⑧99A(去)、 嘉 ②145A、⑥231A(去)、⑦125、⑨98 鳥路反、 隹 ②123A フ(去)、②127、②129A、②135、②136A、③79A、④89A、⑤108A、⑥97、⑥192A、⑧78、⑧80A、⑨81、⑨82、⑨83、⑨112、⑨113、⑨114、⑨114、⑨121、⑨122A、⑩60(去)、②134 鳥路反、③95 フ、 又 ⑦82、⑦83、⑦84A、⑦84A、⑧68A(去)、 田 ④56A(去)鳥路反、⑥60 鳥路反、⑧62A フ(去)(→平声、影母・鐸韻)	
曉	呼 止 ②26 平	虎 隹 ⑧89、⑧105A コ、 止 ②78A、④35、⑤20A、⑤22A、⑥217、⑧182A コ、⑧157 キヤク <small>合</small> 、 嘉 ②78A コ、④34 コ(上)、⑥216(上)、 隹 ④28 コ(上)、⑥181、⑧129 コ、⑨3A(上)、 田 ④16A、⑧121A、⑧122A コ、⑧100 コ(上)		
匣	乎 隹 ⑦77A、⑦106、⑦107 コ、 止 ②68、④212、⑦328 コ、③200A コ(平)、 嘉 ②68 コ、③200A(平)、 隹 ②57、④177、④187 コ、③169A、⑦233A、⑦274 コ(平)、 田 ④119 コ(平輕)、④121A コ 狐 止 ⑤122、⑤191 コ、	戶 隹 ③181 コ	互 止 ④102 コ(去)戶故反、④104A コ、 嘉 ④103 コ(去)戶故反、 隹 ④85 コ(去)戶故反 狐 止 ③190A コ(平輕)、⑨51A コ戶故反、 嘉 ⑨50A 戶故反、 隹 ⑨42A(去)戶故反	

	<p>建⑤105、⑤165 コ(平) 瑚 正③15(平)音胡、嘉③15(平)音胡、建③12 コ(平)音胡</p>			
来		<p>魯 清⑧81A、⑧84A、正①9、①11、①14、①17(上)、嘉①186A(上)、建①2、①7、①9、①9、①20、②97、③8、③203、⑥43、⑥58、⑦35、⑦181、⑨151、⑨198 ロ、①14 ロ(上)、②75A、③4A(上)、甲④62A ロ</p>	<p>路 群266A(平)、清⑧32 ロ、建③103、⑤64、⑥10、⑥21、⑧114 ロ、⑧40 ロ・音路、⑨5A(去)、甲④105A、⑧31 ロ(去) 輅 群425 ロ(去)、正⑧49 ロ(去)音路 補上、嘉⑧49 ロ、文⑧30 ロ</p>	
0 5 蟹撰				
12	齊(開)	齊(開)	霽(開)	
端			<p>帝 正①22(去)、嘉①20(去)、建①18、⑩101、⑩105 テイ、⑩117A(去)</p>	
透		<p>体(體) 正②143A テイ、⑨201(上)、嘉①159A、②76A、②143、④16A(上)、建①136、④13A(上)、⑨168 テイ(上)、甲④5A、④88A テイ</p>		
定		<p>弟 嘉①3、①198、①200A、⑦44(去)、建①3、①56、①169、③121、④109、④132、⑤7、⑥13、⑥18、⑥85A、⑥161、⑥164、⑦36、⑦117 テイ</p>	<p>悌 清⑦118 テイ(去)、正①44、⑦103 大計反、①67 テイ・弟音悌、⑦349 火[マ]計反、嘉①43、①66、⑦103(去)、建①37 テイ(去)大計反、①41、⑦86、⑦291 テイ、①57 テイ(去)、文⑦65(去)大計反 棣 正⑤138 テイ(去)大計反・大内反、⑤140 テイ、嘉⑤138 テイ(去)大計反、建⑤119 テイ(去) 禘 正②48 テイ(去)大計反、②50A(去)、嘉②48 テイ(去)大計反、②50A、②53(去)、建②40 テイ・テイ(去)大計反、②41A(去)、②44 テイ(去) 第 清⑦41A テイ、建①102、②115、③114、⑤2 テイ、甲④81A(去) 逮 建①122A(去)直例反</p>	
泥			<p>泥 正⑩17 乃細反、⑩18A テイ(去濁 B)、嘉⑩14A テイ(去)</p>	
溪		<p>啓 正③207A、④22、④159A ケイ(上)、嘉③207A、④159A(上)、④22 ケイ(上)、建④17 ケイ(上)、④133A(上)、甲④87A ケイ(上)</p>	<p>契 清⑦106A ケイ(去)、正⑦327A ケイ(去)苦計反又苦結反、嘉⑦327A(去)苦計反又苦結反、建⑦273A(去)苦計反、文⑦237A(去)</p>	
疑	<p>靦 群217 ケイ(平濁 A)、正①204 ケイ(平濁 A)五兮反・五支反、①205A ケイ(平濁 A)、嘉①203 ケイ(平濁 A)五兮反・五支反、①204A(平濁 A)、建①173 ケイ(平濁)五兮反音倪、①174A ケイ_左 麤 正⑤188 米低反、建⑤162 菓位[ママ]反</p>		<p>羿 清⑦2 ケイ(去)、正⑦164(去濁 A)音詣、嘉⑦163 ケイ(去濁 B)音詣、建⑦137 ケイ(去濁)音詣、文⑦112、⑦112A ケイ(去)</p>	
精	<p>濟[×] 建②43A 子兮反→「躋」 躋 正②52A 千兮反</p>		<p>濟(濟) 正④172A セイ(上)子礼反、⑨179A セイ、嘉④172A(上)子礼反、⑨180A(去)、建④144A(上)子礼反、⑨149A(上)、甲④95A セイ(上)子礼反</p>	
清			<p>妻 正③3、⑥22 七細反、建③2 七細反、③3(去)</p>	
從	<p>齊(齊) 清⑦38A、⑦43A、⑦65A、⑧133 セイ、正①7、①11、①13、①17、①24(平)、①18、③10A、③92、③149、④43 セイ、嘉①6、①17、③239、③242A(平)、③10(入)、④43 セイ(平)、建①5、①10、</p>			

	①14、①20、③95、③126、③130、③202、④42、④44A、⑥195、⑧199、⑧200、⑨132、⑨136、⑨182、⑨192 セイ、①9、①15、③8A、③78、④36、④39A セイ(平)、⑦187 サイ、 甲 ④20(平)、⑧153、⑧154 セイ			
心	栖 清 ⑦86 セイ、 止 ⑦294 セイ(平)、⑨12A(平)、 嘉 ⑨12A(平)、 隹 ⑦245、⑨10 セイ(平)、 文 ⑦211(平) 西 清 ⑦16A セイ、 嘉 ③42A(平)、 隹 ④109、⑥76、⑦156 セイ			
曉	龔 正 ③116 呼西反、 嘉 ③115 呼西反、 隹 ③98 呼西反			
来	黎 正 ⑥184A レイ(平)力兮反、 嘉 ⑥184A レイ(平)力兮反、 隹 ⑥153A レイ(平) 黎 正 ④82A レイ(平)、 嘉 ④81A レイ(平)、 隹 ④68A レイ(平)、 甲 ④42A レイ(平)	礼(禮) 正 ①94(上)、⑧5A レイ、 嘉 ①207A、②6A、②184(上)、④20A(去)、 隹 ①80、①94、①110、①120、①120、①121、①177、①177、②12、②13、②14、②31、②35、②36、②60、②62、②71、②73、②91、②97、②97、②154、②155、②156、④54、④93、④95、④97、④98、④126、④160、⑤10、⑤12、⑤51、⑥2、⑥3、⑥111、⑥130、⑥139、⑥141、⑥144、⑥164、⑦18、⑦284、⑧57、⑧92、⑧152、⑧172、⑧208、⑧209、⑧210、⑧211、⑨60、⑨92、⑩138 レイ、①82 レイ(上)、①85、②95A、⑤210A(上)、 甲 ⑧72 レイ	戾 正 ④174A レイ・力計反、⑨95 レイ(去)力計反、 嘉 ④174A レイ(去)力計反、⑨95 力計反、 隹 ④145A レイ(去)力計反、⑨79 レイ(去)力計反力弟反、 甲 ④96A レイ(去)力計反	
12	齊(合)	齋(合)	霽(合)	
見	圭 正 ⑤179A ケイ、⑥19 ケイ(平)、 嘉 ⑥19(平)、 隹 ⑤149 ケイ、⑤154A、⑥15 ケイ(平) 珪 正 ⑨74A ケイ(平)、 隹 ⑨61A ケイ(平)			
匣			惠 群 495(去)、 清 ⑦15、⑦90A、⑧38 クエイ、 正 ②180 ケイ(去)、⑨37、⑨219(去)、 嘉 ②180 クエイ(去)、②180A、③268A、⑨37(去)、⑦239A ケイ(去)、 隹 ②152 ケイ・クエイ、③66、⑦155、⑧48、⑩125 ケイ、⑨31、⑨128、⑨182、⑨186 ケイ(去)、⑨33 ケイ左、 甲 ⑧38 クエイ 慧 清 ⑨42 クエイ、 正 ⑧67 クエイ、 隹 ⑧55 ケイ、 文 ⑧44 クエイ、 甲 ⑧43 クエイ	
13			祭(開甲)	
幫			蔽 群 498 へイ、 正 ①124 必世反、①125A へイ、⑨53 へイ(去)必世反、⑩125 必世反、 嘉 ①75A(去)、①123、⑨53 必世反、①124A へイ(去)、 隹 ①106 必世反、⑨44 へイ(去)必世反、⑨44A(去)	
並			弊 正 ①76A(去)、 嘉 ①64A へイ(平)	
明			袂 正 ⑤189 面世反、 嘉 ⑤189 面世反、 隹 ⑤162 面世反	
疑			藝 清 ⑦25 ケイ、 正 ③175 ケイ、 嘉 ③175、④18A、④18A(去濁A)、 隹 ③148 ケイ(去)、④14 ケイ、④15A(去)、⑤6A、⑤	

			30A(去濁)、⑤35、⑤162 ゲイ、⑦168 ゲイ(去)、㊦⑦139(去)	
精			祭 ㊦⑤231 サイ、㊦⑩137 セイ(去)、㊦⑤231、㊦⑩137(去)、㊦⑥178 セイ、㊦⑤181 セイ _左 、㊦⑤185 セイ、㊦⑤199 セイ・サイ、㊦⑥148 セイ・サイ _左 (去)、㊦⑩115 セイ(去)	
章			制 ㊦⑧107A セイ(去)、㊦①63A、㊦⑧193A(去)、㊦①62A、㊦②129A(去)、㊦①53A、㊦④192A(去)、㊦⑧123A セイ	
書			世 ㊦⑦5A、㊦⑦11、㊦⑧108 セイ(去)、㊦⑧91、㊦⑧103、㊦⑧104A、㊦⑧109A、㊦⑧109 セイ、㊦⑧104(去)、㊦①206、㊦①210、㊦⑦60、㊦⑦61A(去)、㊦⑤131A セイ、㊦①175、㊦⑦50、㊦⑧133、㊦⑧153 セイ、㊦①179、㊦⑦151 セイ、㊦⑧156(去)、㊦⑧118、㊦⑧120、㊦⑧121A セイ 勢 ㊦①212A セイ(去)、㊦①211A(去)、㊦①180A セイ(去)	
常			誓 ㊦③259A セイ(去)、㊦③260A セイ、㊦③260A セイ(去)、㊦③219A(去)、㊦③220A セイ 逝 ㊦③250A、㊦⑤91A セイ、㊦⑤90(去)、㊦③251A、㊦⑤90(去)、㊦③212A セイ(去)、㊦⑤77 セイ _左 (去)	
来			厲 ㊦⑤30(去)、㊦⑦108、㊦⑦109A レイ、㊦⑦330、㊦⑩31 レイ(去)、㊦⑨78A、㊦⑩34A レイ、㊦⑦157A、㊦⑦329 レイ(去)、㊦⑩32(去)、㊦⑩32A レイ、㊦⑦132A(去)、㊦⑦276、㊦⑨65A レイ(去)、㊦⑩26(去)音例、㊦⑦107A、㊦⑦239 レイ(去)	
13			祭(開乙)	
澄			歳 ㊦①144A テイ(上・去)直例反、㊦①143A テイ(去)直例反、㊦①122A テイ	
溪			揭 ㊦⑦108、㊦⑦109A ケイ(去)、㊦⑦330 ケイ(去)起例反、㊦⑦331A 起例反、㊦⑦329 ケイ(去)起例反、㊦⑦276 ケイ(去)、㊦⑦239 ケイ(去)起例反	
13			祭(合甲)	
心			歳 ㊦④202A セイ、㊦④169A セイ、㊦④103A(去)、㊦④113A セイ	
書			祝 ㊦③11A セイ、㊦⑥68A セイ(去)始鋭反、㊦⑥222A セイ(去濁 B)舒鋭反、㊦⑥68A セイ _疾 (去)如鋭反、㊦⑥222A(去)舒鋭反、㊦⑥56A(去)、㊦⑥185A セイ(去)	
13			祭(合乙)	
于			衛 ㊦②35A エイ、㊦②35A、㊦②122A、㊦⑦12(去)、㊦④213A エイ _左 、㊦③88A、㊦④178A(去)、㊦④39 エイ(去)、㊦⑤72、㊦⑦10、㊦⑦36、㊦⑦38、㊦⑦40、㊦⑦210、㊦⑦272、㊦⑧1、㊦⑧2、㊦⑩64、㊦④22 エ(去)、㊦④120A エイ(去)	
			泰(開)	
幫			沛 ㊦②29 ハイ(去)、㊦②156 ハイ(去)音貝、㊦②	

			156(去)、 隹 ②132 ハイ(去)	
端			帶(帶) 韻 ⑧21A タイ、 正 ③41、⑤234A タイ、⑧32A タイ、 嘉 ③41、⑤234A(去)、 隹 ③34、⑧26A タイ(去)、⑤201A タイ	
透			天 [△] 正 ②104A 音泰一音他賀反、⑨229 音泰、 嘉 ⑨231 音泰⇒「太・泰」 太 正 ①5、②51A、②69 大音泰、①22 大音泰、①23、①25(去)、③142、③240A、④148A、④198A、⑤31、⑤236 音泰、③156A 音泰或音吐賀反、 嘉 ①4(去)大音泰、①20、①22、①24、②51A、②69、③241A、④49A、④148、④198 音泰、 隹 ①4、①19、①21、②58、②60、⑤203 タイ、②87A、④40A、(去)、③101A 音泰、③119A タイ・音泰、③132A 吐貝反音泰、④165A 音泰 _右 、⑤27 タイ(去)音泰、⑨191 タイ(去)音泰 _右 、 匣 ④81A 音泰 泰 正 ②151A タイ(去)、 嘉 ②22、②151A(去)、 隹 ②18、221、④121、④122 タイ、②128A(去)、⑤12 タイ(去)、⑤14A(平)、 匣 ④80(去)	
定			天 韻 ⑧21A タイ(去)、⑧68(去)、 正 ①32、①60A、①95(去)、 嘉 ①31、①32、①59A、①123A、①203、⑤234A、⑦71A、⑦89(去)、 隹 ①18、①27、①27、①173、②97、④153、⑥24、⑥85、⑥104、⑥136、⑥148、⑦74、⑧77、⑨201、⑩128 タイ、①81 タイ(去)、①105A、①136A、②43A、③93A、⑧26A、⑧94(去)	
泥			奈 韻 ⑧41A タイ、 正 ⑤30A タイ(上)、⑧64A タイ(去濁A)、 嘉 ⑤30A(上)、 隹 ⑤26A タイ(上)、⑧52A(上)、 匣 ⑧41A タイ(去)、 匣 ⑧41A タイ(去濁A)	
清			蔡 韻 ⑦37A セイ(去)、 正 ③81、③83A、⑩132A サイ、⑥8、⑦220A、⑨231(去)、 嘉 ③81、⑦218A サイ(去)、③83A(上)、⑥7、⑨233(去)、 隹 ③69、⑥6、⑦183A、⑨193 サイ、⑩110A サイ(去)、 匣 ⑦153A サイ(去)	
匣			害 韻 ⑦37A、⑧27、⑧27A カイ、 正 ①175、③213A、⑥79A、⑦160A(去)、③166A カイ(去)、 嘉 ①174、③214A、⑥79A、⑦159A(去)、 隹 ①148 カイ(去)、③140A、⑤107A(去)、 匣 ⑧24A(去)、 匣 ⑧26 カイ _平 、⑧27A カイ(去)	
14			泰(合)	
見			膾 正 ⑤200 古外反、 嘉 ⑤201 古臥[ママ]反、 隹 ⑤173 古外反	
疑			外 正 ⑥202A クワイ、 嘉 ②112A、⑤189A(去濁A)	
匣			会(會) 韻 ⑧11A、⑧99A クワイ(去)、⑧113A(去)、	

			正⑥300、⑧18A(去)、嘉②113A、⑥300(去)、建②95A、⑧14A、⑧146A(去)、⑥114、⑥134、⑥248 クワイ 絵(繪) 正②36 エ、②36A クワイ(去)、嘉②36 エ、②36A(去)、建②30A クハイ(去)	
15	佳(開)	蟹(開)	卦(開)	
並		罷 正⑤60 皮買反一音皮、建⑤51 音皮		
明			亮(賣) 正⑤78A ハイ(去濁A)、嘉⑤78A(去濁A)、建⑤67A ハイ(上)	
見		解 正①28 カイ(上)、①32 佳買反、嘉①27、①27、①36(上)、①31 佳買反、建①23、①24 カイ、①26 カイ・佳買反	懈 正⑥248A 古賣反、嘉⑥248A 古賣反	
初	差 正⑦357A 初佳反・一音初賣反 欄上、嘉⑦357A 初佳反(→去声)		差 建⑤59A 初賣反(→平声)	
崇	崇 正⑥70 サイ(平)仕佳反、嘉⑥70(平)仕佳反、建⑥57 シイ・サイ 左(平)仕佳反			
生			洒 正⑩38 サイ(去)色賣反、⑩49A サイ、嘉⑩39 セイ(去)、建⑩32 セイ・サイ(去)色賣反、⑩41A(去)	
匣		解 清⑦110A(上)、正⑥15A、⑦334A 音蟹、建③25A(去)音蟹、⑥50A、⑩20A(去)		
15	佳(合)	蟹(合)	卦(合)	
見			卦 正⑤50A クワ(去)、⑦119A(去)、嘉⑤50A、⑦119A クワ(去)、建⑤43A クワ(去)、⑦99A(去)、文⑦77A クワ	
匣			画(畫) 正③51A クワク[ママ]、建③43A クワ・平卦反(→匣母・麦韻)	
16	皆(開)	駭(開)	怪(開)	
幫			拜(拜) 建⑤12、⑤12、⑤191、⑤192 ハイ、⑤206、⑨5 ハイ(去)	
見	階 正⑤220 カイ(平)、嘉⑤221(平)、建⑤190 カイ(平)、⑧108、⑧108 カイ		誡 正④162A カイ、甲④89A カイ(去)	
莊	齊(齊)△ 建②55 サイ、清⑦65A サイ、⑦65A セイ、正⑤182 サイ(平)側皆反、⑤182A(平)、⑦261A 側皆反、嘉④42 サイ 合(平)、⑤182A サイ(平)側皆反、⑦261A サイ・側皆反、建⑤186 サイ・側皆反、⑤186A、⑦218A サイ、文⑦185A サイ(平)⇒「齋」 齋(齋) 正④42 セイ・サイ(平)側皆反、⑤197、⑤199、⑤216 サイ・側皆反、⑤209A サイ(平)、嘉⑤182A(平)、⑤198 サイ・側皆反、⑤210A サイ(平)、⑤216 側皆反、建④35 セイ(平)側皆反、⑤157A サイ(平)側皆反、⑤157A、⑤171A、⑤180A サイ、⑤170 サイ・側皆反、甲④19 サイ 合			
生			殺(煞) 清⑧103A(去)、正⑤194 色介反、嘉⑤167(去)色介反(→生母・黠韻)	
匣	諧 正②119A カイ、嘉②			

	119A カイ(平)、 ㊦ ②100A カイ			
16	皆(合)	駭(合)	怪(合)	
見			壞(壞) ㊦ ①12 音怪、 ㊦ ①11 音怪、 ㊦ ①10 音怪 怪(怪) ㊦ ④75 クワイ (去)、 ㊦ ④74 クワヒ(去)、 ㊦ ④62 クワイ(去)、 ㊦ ④ 37、④38A クワイ(平)	
溪			𪛗 ㊦ ④49A クワイ(去) 苦怪反、 ㊦ ④49A クワイ (去)、④49A マウ[ママ]・ クワイ _左 、 ㊦ ④40A クワ イ(去)苦怪反、 ㊦ ④23A ク ワイ(去)苦怪反、④ 23A(去)	
疑			𪛗 ㊦ ④49A クワイ(去 濁 A)五怪反、 ㊦ ④49A ク ワイ(去濁 A)五怪反、④ 49A クワイ、 ㊦ ④40A ク ワイ・ケイ(去)五怪反、 ㊦ ④23A クロイ(平・去濁 A) 五怪反、④23A(去)	
匣	懷(懷) ㊦ ②178A クワ イ、 ㊦ ②178A(平)、 ㊦ ⑨ 103A(平) 槐 ㊦ ⑨115A(平)音懷、 ㊦ ⑨116A 音懷、 ㊦ ⑨ 96A(平)			
17			夫(開)	
並			敗 ㊦ ⑦14A ハイ、 ㊦ ④ 112 ハイ(去)、 ㊦ ④ 112(去)、 ㊦ ④93、⑦154A ハイ(去)、④101A ハイ、 ㊦ ⑦127A(去)、 ㊦ ④58 ハ イ(去)、④59A(平)、④64A ハイ(平)	
影			𪛗 ㊦ ⑤201 アイ(去)烏 賣反、⑤201A アイ、 ㊦ ⑤ 201 アイ(去)烏賣反、 ㊦ ⑤ 173 アイ(去)烏邁反・烏賣 反 _右 、⑤173A(去)	
18	灰	賄	隊	
幫			輩 ㊦ ⑥3A 必内反	
滂			配 ㊦ ⑨59A(去)	
並	陪 ㊦ ⑧105 ハイ(平)、⑧ 106A ハイ、 ㊦ ②24A ハイ (平濁 A)、⑧190 ハイ・蒲 回反、⑧191A(平)、 ㊦ ② 20A ハイ、②24A(平)、 ㊦ ⑧157 バイ・ハイ _左 (平)蒲 廻反、⑧158A(平)、 ㊦ ⑧ 143 ハイ(平濁 A)蒲廻反、 ⑧144A(平)、 ㊦ ⑧121 ハイ (平濁 A)蒲廻反、⑧122A ハイ		佩 ㊦ ⑤166(去)	
明		每 ㊦ ⑥78A ハイ(上濁 A)、 ㊦ ⑥78A(上濁 A)、 ㊦ ⑥63A ハイ(上)		
端			对(對) ㊦ ⑩32 タイ(去)	
透			退 ㊦ ⑦114A(去)、 ㊦ ⑥ 109A(去)、⑩32 タイ	
定	難 ㊦ ④81 タイ(平)徒雷 反、⑥189A タイ・徒回反、 ⑥194A タイ、 ㊦ ④80 タ イ(平)徒雷反、⑥188A タ イ・徒回反、 ㊦ ④67 タイ (平)徒雷反徒回反、⑥ 157A(平)、⑥161 タイ、 ㊦ ④41 タイ(平)徒雷半音 臺、④41A タイ			
泥		𪛗 ㊦ ⑧63A タイ(上)、 ㊦ ⑤202 奴罪反 _上 、⑤203A タイ(去)、⑧105 奴罪反、 ⑧107A タイ(上濁 A)、 ㊦ ⑤203A タイ(去)、⑧104 奴 罪反、⑧105A タイ(上濁 A)、 ㊦ ⑤174 タイ _左 (去)奴	内 ㊦ ⑤64A タイ(去濁)、 ㊦ ⑧99 タイ、 ㊦ ①32、① 36、②63A(去濁 A)、⑥ 203A、⑧178 タイ、⑩162A タイ(去濁 A)、 ㊦ ①35、② 63A、②113A(去濁 A)、③ 130(上)、⑩162A タイ(去)	

		罪反、⑤174 タイ、⑧86A タイ(去)、㊦⑧73 奴罪反、⑧75A タイ(上)、㊦⑧66 奴罪反、⑧67A タイ(去)	濁A)、㊦①27、①30、⑧147 タイ、②53A(去)、	
溪	恢 ㊦⑧123A クワイ(平軽)、㊦⑧226A クワイ(平) 苦廻反、㊦⑧226A クワイ・苦固[ママ]反、㊦⑧187A(平) 苦廻反、㊦⑧172A クワイ(平)、㊦⑧144A クワイ(平)			
清	崔 ㊦③92、③96、③97 サイ、㊦③92(平)、㊦③78、③81 サイ 衰 △ ㊦⑤50 サイ(平)七雷反、⑤242 サイ・七雷反、㊦⑤243 サイ・七雷反、⑤50 サイ(平)七雷反、㊦⑤43 サイ(平)七雷反、⑤208 サイ・七雷反⇒「續」			
從		罪 ㊦⑩105A(去)		
影			譚 ㊦⑦10A(去)、㊦④106A クワイ(去)音會、⑦177 古對反、㊦④107A クワイ(去)音會、⑦176 古對反、㊦④88A クワイ(去)音會、⑦148A(去)、㊦④55A クワイ(去)	
匣	回 ㊦①156 クワイ、㊦①156A、③45(平)、㊦①132、③38 クワイ(平)、①135、③37、③162、⑥10 クワイ、③159、⑤86(平)			
19	哈	海	代	
並		倍 ㊦④172 ハイ(去)蒲悔反、㊦④172(去)蒲悔反、㊦④143 ハイ(去)、㊦④95 ハ□ ¹⁴⁹⁾		
定	臺 ㊦③170 タイ	待 ㊦⑦118A タイ、㊦⑦13(上)、⑦348A タイ(去)、㊦⑦348A(去)、㊦⑦10 ㊦⑦10 ㊦⑦10 ㊦⑦10 殆 ㊦⑧36A タイ、㊦①174 音待 ^{欄上} 、①184A タイ(去)、⑧54A タイ、㊦①183A タイ(去)、㊦①147 音待、①156A タイ(去)、⑧45A(去)、㊦⑧34A タイ(去)	代 ㊦⑧53 タイ(去)、㊦②68(去)、㊦②56 タイ、⑧71 タイ(去)、㊦⑧55(平) 速 ㊦②206 音代又大計反、⑧198 音代一音弟、㊦②206 音代又大計反、⑧198 音代、㊦②175 音代、㊦③126 音代音弟(一定母・霽韻)	
見		改 ㊦⑩77A カイ(上)、㊦⑩77A(上)、㊦⑩64A(上)		
溪	開 ㊦③21、④159A カイ(平)、㊦③21、③22A、④159A(平)、㊦③17 カイ(平)、④133A(平)、㊦④88A カイ(平軽)			
精	哉 ㊦③32A、③200A サイ、㊦③32A、③200A(平)、㊦③169A サイ(平)	宰 ㊦⑦113、⑧82A サイ、㊦⑤31 サイ、⑨20A(上)、㊦③38、③49、⑦7(上)、㊦②79、③133、③150、③150、③168、⑤27、⑥9、⑥93、⑦5、⑦72、⑦283、⑨101 サイ、③32、③41 サイ(上)、⑨34A(上)	再 ㊦⑤191 サイ	
清		彩 ㊦③65A サイ(上)、㊦③65A サイ(上)、㊦③55A サイ(上)	業 ㊦⑤215、⑦31A サイ、㊦⑤215 サイ、⑦31A(上)、㊦④49A、④57A、⑤185 サイ(去)、㊦⑦8A(去)、㊦④29A、④34A サイ	
從	才 ㊦⑦61A、⑧87A サイ、㊦③211A サイ、④199、⑦132A(平)、㊦④199、⑦9、⑦131A(平)、㊦④196、⑤52、⑥22、⑥22、⑦7 サイ、㊦⑧63A、⑧97A サイ	在 ㊦⑥100A(去)、㊦⑥100A(去)		

149) 反切注欠損のため判読不可。

	材 𠄎 439A サイ(平)、𠄎 ⑧59A さい、𠄎 ③28 サイ(平)音才一音哉、③29A(平)、𠄎 ③28 サイ(平)、③29A、③32A(平)、𠄎 ③23 サイ・音才又哉 裁 𠄎 499 サイ、𠄎 ③109 サイ(平)、⑨57A(平)、𠄎 ③109(平)、𠄎 ③92 サイ(平)、⑨47A(平) 財 𠄎 ⑥77A サイ、𠄎 ⑩125A、⑩135A(平)			
影	哀 𠄎 ①186 アイ、𠄎 ①185(平・平軽)、②20A、②202A、④28A(平)、𠄎 ①158、③121、⑦217、⑩3、⑩44、⑩57 アイ、②16A、⑩94A(平)		愛 𠄎 ⑦9、⑦15A、⑧28A アイ、𠄎 ①65A、⑨126(去)、𠄎 ①64A、①67、⑨127(去)、𠄎 ①54、①57 アイ(去)、①55A、①61A、②71(去)、②71、⑥190、⑦147、⑨19 アイ、⑨105 アイ(去)	
暁		海 𠄎 ③21、⑨197 カイ		
来	来 𠄎 ①116(平)、𠄎 ①115、①117A(平)、𠄎 ①98 ライ		来 △ 𠄎 ⑦178A(去)力代反、𠄎 ⑦177A 力代反、𠄎 ⑦148A(去)⇒「徠」 賚 𠄎 ⑩129 力代反、⑩130A ライ(去)、𠄎 ⑩130 ウイ(去)、𠄎 ⑩108 力代反、⑩108A ライ(去)	
20			廢(合)	
			廢(廢) 𠄎 ⑨227 方肺反、𠄎 ⑦263 ハイ	
06 臻撮				
21	真(開甲)	軫(開甲)	震(開甲)	質(開甲)
幫	賚 𠄎 ⑦60、⑦120A ヒン、𠄎 ③41(平)、𠄎 ⑤139 ヒン(平・去)、⑥148、⑦211 ヒン		擯 𠄎 ⑤155 ヒム・必刃反、𠄎 ⑤155(去)、𠄎 ⑤134 ヒン(去)必刃反 殯 𠄎 ⑤237(去)必刃反、𠄎 ⑤238(去)必刃反、𠄎 ⑤204 ㄋ[ママ] (去)必刃反	畢 𠄎 ④233A ヒツ、𠄎 ④194A ヒツ
滂				匹 𠄎 ⑧133A ヒツ、𠄎 ③94A、⑤119、⑧241A ヒツ、𠄎 ⑦241 ヒツ、𠄎 ⑤102 ヒツ(入)、⑦202、⑦202 ヒツ、𠄎 ⑧154A ヒツ(入軽)
明	民 𠄎 ⑩137(平)、𠄎 ⑥95、⑨181 ミン、𠄎 ⑩114 ミン			
見				吉 𠄎 ⑧122A キツ、𠄎 ①10(入)、④83A キツ、𠄎 ①9、⑦120(入)、𠄎 ①8、⑤169 キツ、𠄎 ④43A キツ(入)
精	津 𠄎 ⑨179A(平)、𠄎 ⑨180A(平)、𠄎 ⑨149A シン(平)		晉(晉) 𠄎 ⑦21A(去)、⑦38 シン、𠄎 ⑦185 シン、⑨34A(去)、𠄎 ④23A シン(去) 進 𠄎 ⑤58A シム、𠄎 ⑤104A、⑦114A(去)、𠄎 ⑥5、⑩32 シン	
清	親 𠄎 ①68、①78A、⑥199A(平)、𠄎 ①67、①77A、①103A、①193A、⑥199A(平)、𠄎 ①57、①66A(平)、①87、④129、⑥236、⑨199、⑩109 シン、⑩50 シン(平)、𠄎 ④85 シン(平軽)、④86A(平軽)			七 𠄎 ①114、⑦267 シツ、⑥108 シチ・シツ ^左
從	秦 𠄎 ⑨232 シム、𠄎 ⑨194 シン(平)	尽(盡) 𠄎 ①73A、②87、②130、④63A、④248、⑦169A 津忍反、⑤171A シム、𠄎 ④63A、④248、⑦168 津忍反、𠄎 ①61A 津忍反 ^右 、②72、②110(上) 津忍反、②111、②111、④207 津忍反、𠄎 ⑧32 津忍反、𠄎 ④31A、⑧33A 津忍反		疾 𠄎 ②55(入軽)、𠄎 ③46A シツ、𠄎 ①108A、④42 シツ(入)、①144A シツ、𠄎 ①107A、④42(入)、①143A(入軽)、𠄎 ④35 シツ(入)、𠄎 ⑧47A シツ
心	新 𠄎 ③68A(平)、𠄎 ⑨93 シン		信 𠄎 ④95(去)、𠄎 ⑦96A、⑦112A、⑧73A(去)、⑧	漆 𠄎 ③21 シツ(入軽)音七、𠄎 ③21(入軽)音七、𠄎

			72A シン(去)、 正 ①63、①64A、③22、④3、④171、④217、⑥242A、⑨37(去)、 嘉 ①62、①63A、①67、①73、①76、①98、①99A、①202A、③22、③55、③128、④3、④171、④217、⑥242A、⑦4A、⑦38A、⑦59A、⑦104、⑧125A、⑨37(去)、 隹 ①46、①53、①57、①62、④2、⑥172、⑩4 シン(去)、①54、①85A、⑦3A、⑦281A、⑧102A、⑧102A(去)、①65、①84、①172、③18、③46、③112、④74、④143、④170、⑦87、⑦181、⑦243、⑧20、⑧57、⑨30、⑨32、⑩27、⑩28 シン、③109、⑩27 シン _左 (去)、④181、⑥175 シン _左 、⑩28 シツ[ママ] _左 、 文 ⑦30A(去)、 甲 ④114 シン(去)、④122、⑧79A シン、⑧45、⑧79A(去) 迅 正 ⑤248 音信又音峻、 隹 ⑤213 音信又音峻	③17 シツ・音七
章		續 正 ⑤185 音軫、 隹 ⑤160 之忍反		質 清 ⑧43 シツ、 正 ①207A、③218A、⑧69(入)、②77A シチ、⑦138A シツ、 嘉 ①206A、①210A(入軽)、③65A(入)、⑦137 シツ、 隹 ②65A(入)、③183、⑥177 シツ(入)、③184、③185、④74A、⑥180、⑥224、⑧56 シツ、 文 ⑧46 シツ、 甲 ④45A、⑧44 シツ
船	神 正 ④75(平)、 嘉 ①213A、②51A、②58A、②58A、④74(平)、 隹 ②49 シン(平)、②49、③194、④62、④113、④205、⑥37 シン、 甲 ④38A(平)、④73 シン			寔(質) 清 ⑦63A、⑦63A、⑧117A シツ、⑧75A シツ(入軽)、 正 ⑨101A(入)、 嘉 ⑦36A(入)、⑨102A(入軽)、 隹 ⑨84A(入)、 甲 ⑧82A シツ(入)、⑧137A(入)
書	申 正 ③59、④11 シム、 嘉 ③59 シン(平)、④11(平)、 隹 ③49 シン(平)、④9 シン・シム、④9 シン 紳 群 422 (平軽)、 清 ⑧21 シン、⑧21A シン(平軽)、 正 ⑤233 シム・音申、⑧31 シン(平)音申、 嘉 ⑤233 音申、⑧31(平)音申、 隹 ⑤200 シム(平)音申、⑤201A、⑧26A(平)、⑧26 シン、 文 ⑧15 シン _左 (平軽) 身 隹 ⑤164 シン、 文 ⑧25A(上)、 甲 ④107A(去)	晒 正 ⑥129 式忍反、⑥130A シム、 嘉 ⑥130 式忍反、⑥130(上)、 隹 ⑥108A シム		矢 清 ⑧103 シツ(入軽)、⑧104、⑧105 シツ、 正 ①30、②208、⑥100A(入)、⑥73A シツ、 嘉 ②19A、②208(入)、⑥100A(入軽)、 隹 ①25 シツ(入軽)、②176 シツ、⑥81A、⑧153、⑨74(入)、⑥163 シツ(入)、⑧89A ツ[ママ]、 甲 ④75A、⑧120 シツ、⑧121A シツ _左 室 清 ⑦50A、⑧82A、⑧108 シツ、 嘉 ③37(入)、⑦46(入軽)、 隹 ③31 シツ(入)、③112、④207、⑤120、⑥49、⑦38、⑧162、⑩75 シツ、③171 シツ(入軽)、⑥68 シツ _左
常	晨 清 ⑦103、⑦103A シン(平)、 文 ⑦233 シン(平)、 正 ⑦322(平)、 嘉 ⑦322(平)、 隹 ⑦269(平) 臣 正 ①33、①33、①36(平)、 嘉 ①32、②9A、②13A、②24A、63A(平)、 隹 ①27、①28、①29、①30、④192、④193、⑤56、⑤58、⑤59、⑥85、⑥90、⑦206、⑧122、⑧124、⑧157、⑨200、⑩53 シン、 甲 ④116A 音神 辰 正 ①121(平)、③82A シム、 嘉 ①120(平)、 隹 ①103 シン、③69A(平)		慎 正 ①64A(平)、④162A、⑤174A シン、 嘉 ①63A シム(平)、 隹 ①54A、⑤150A(去)、 甲 ④83 シン、④89A シム(去)	
影	因 正 ①102A イン(平)、①103A、⑥54A(平)、 嘉 ①101(平)、 隹 ①88A、⑥44A(平)			一 清 ⑧11、⑧12A、⑧12A イツ、 正 ①16、①16、⑧17、⑧19A(入)、②188 イツ、 隹 ①13、②159、③38、

				⑧13 イツ、①105、②138、⑦57、⑩86 イチ
羊				俵 𠩺471(入)、𠩺⑧115、⑧115A イツ、𠩺②142A イツ(入軽)音逸、⑧210 イツ(入軽)、𠩺②142A 音逸、⑧210 イツ、𠩺②120A(入軽)音逸、②177A(入)音逸、⑧174、⑨181 イツ、⑨182 イツ(入) 侷 𠩺②23 イツ・音逸、𠩺②3(入軽)音逸、②5A(入軽)、𠩺②2 イツ・音逸 溢 𠩺236A イツ、𠩺⑧8A イツ(入)、⑧9A イツ 𠩺②209A イツ(入)、⑧13A イツ、𠩺②209A(入)、⑧13A イツ(入)、𠩺⑧10 イツ(入)、𠩺⑧7A イチ(去)、⑧8A イツ(入軽) 逸 𠩺②35A、⑨218(入)、⑤140A、⑨217 イツ、𠩺②35A(入)、𠩺②30A、⑨183A(入)、⑨188 イツ、⑩114 イツ(入)
来	隣 𠩺⑧17A、⑧17A リン、𠩺②113A リン、⑤174A リム、𠩺②113A(平)、𠩺②95A(平)、③136 リム、𠩺⑧12A(平)、𠩺⑧17A リン		吝(吝*) 𠩺564 リン(去)、𠩺④199 カ刃反又カ慎反、⑩161 カ刃反旧カ慎反、⑩162A リム(去)、𠩺④199 カ刃反又カ慎反、⑩161 カ刃反旧カ性[ママ]反、⑩162A リン(去)、𠩺④166 カ刃反又カ慎反、⑩136A リン・カ刃反 悋(悋*) 𠩺④112A カ刃反又カ慎反 磷 𠩺⑨47 カ刃反、⑨48(去)、𠩺⑨45 カ刃反、𠩺⑨38 カ刃反、⑨39A リン(去)	栗 𠩺②95(入)、𠩺②95、②97A(入)、②96(入軽)、𠩺②80、②80 リツ(入)、④144A リツ
日	人 𠩺②107A(平)、⑦204(去)、𠩺①195A、②121、⑦115(平濁 A)、②213A(平濁 B)、𠩺①145、②151、②161、③167、④43、④74、④76、④86、④118、④192、④194、④197、④197、⑤56、⑥31、⑥67、⑥95、⑥122、⑥122、⑦96、⑦118、⑦151、⑦166、⑦267、⑧33、⑧161、⑧185、⑧188、⑧212、⑨65、⑨166、⑩108、⑩110、⑩111 ジン、②102、⑥2、⑦26、⑧186 シン、③191(上)、④64 ジン・ニン _左 、⑨202 ニン、𠩺④25、④40A、④43A、④47、④53、⑧26、⑧35A、⑧83A、⑧166(平濁 A)、⑧73(平) 仁 𠩺⑧27(去)、⑧27A(平濁 A・去)、⑧28 シン、𠩺①49、①50A、①68(平濁 A)、𠩺①48、①49A、①50、①67、②158、②158、③17、④17(平濁 A)、②137、②140、②142A、②169、②171A、③266(平濁 B)、③266(平)、𠩺①43、①58、②130、②134、②138、③77、④44、⑥250、⑦127、⑦146、⑧100、⑨30 シン、②12、②115、②116、②117、②118、②121、②124、②131、②134、②135、②135、②143、③16、③27、③30、③36、③76、③14、③83、③141、③196、③198、③208、③225、③225、③227、③228、④14、④129、④164、⑤3、		勿 𠩺⑩90 シム(去濁 A)、𠩺⑩91(去濁 A)、𠩺⑥153A、⑩77A(去)、⑩75 ジン(去)音神 訥 𠩺⑥183 而軫反、⑥184A シム(去濁 A)	日 𠩺⑧138 シツ、𠩺③68A(入濁 A)、𠩺③68A、⑤206A(入濁 A)、𠩺②138、⑧6 シツ、③142 シツ _左 、⑤183 シツ・ニチ _左 、⑥100、⑧208、⑨137、⑨172 ジツ

	⑥139、⑦50、⑦114、⑦190、⑦195、⑧33、⑧37、⑧88、⑧90、⑨7、⑨127、⑩126 ジン、④107 ジン(平)、⑦136 ジム、⑦145 ジン _左 、又⑧24A(平)、⑧86 シン、 甲 ④45、④26、④26、④86A、④106A、④109、⑧26、⑧27A、⑧27A、⑧27(平濁A)、④25、④58(平)			
21	真(開乙)	軫(開乙)	震(開乙)	質(開乙)
幫	彬 正 ③218 ヒン(平)彼貧反、 屬 ③219(平)彼貧反、 隸 ③185 ヒン(平)彼貧反			
並	貧 隸 ⑥32A、⑧86 ヒン、 甲 ④109A ヒン			腭 正 ⑨41(入)音弼、 屬 ⑨40 音弼、 隸 ⑨33 ヒチ・ヒツ(入)音弼、⑨36 ヒツ・ヒチ(入)
明		敏 群 ②40、495(上濁)、 正 ①108A ヒム(上濁A)、③73 ヒム、⑨37(上濁A)、⑨39 ヒン、 屬 ①107A、③73、⑨37(上濁A)、④72 ヒン、 隸 ①91A、③63A(上)、③62 ビン(上)、④61、⑥146、⑥151、⑨30、⑨32 ビン、⑩116 ビン _左 、 甲 ④37 ヒン(上) 閔 隸 ③149 ビン(上)、⑥8、⑥13、⑥39、⑥43 ビン		恣 清 ⑧81A ヒツ、 正 ⑧141A(入濁A)音密又音服、 屬 ⑧141A(入濁A)音密、 隸 ⑧116A ヒツ、 甲 ⑧89A 音密 密 正 ③10A ヒツ(入濁A)、 屬 ③10A(入濁A)、 隸 ③8A(入)
知				窒 群 ⑤15A チツ(入)、 正 ⑨138 珍栗反、⑨139A チツ _左 (入)、 屬 ⑨139A 珍栗反、⑨140A(入輕)、 隸 ⑨115A チツ(入輕)
澄	陳 清 ⑦65A、⑦97A(去)、⑧5(平)、 正 ①25(平)、 屬 ①24、①83A(平)、 隸 ①21、③91、⑥6、⑦216、⑦217、⑧203、⑧210、⑩84 チン、①71A、⑧8A(平)、③78、④93、⑧6 チン(平)、又⑦226A(平・去)、 甲 ⑧4、⑧156(平)(→去声)		陳 清 ⑧2、⑧2A(去)、 正 ⑧3(去)直刃反、 屬 ⑧3(去)直刃反、 隸 ⑧2 チン・音陣、⑧2A(去)、 甲 ⑧1(去)(→平声)	
泥				昵 正 ②64A 女乙反、⑤238A チツ(入濁A)女乙反、 屬 ②64A 女乙反、⑤239A 女乙反、 隸 ⑤205A 女乙反
群			鐘 正 ⑥127 キム・其斬反、 屬 ⑥127 其斬反、 隸 ⑥105 キン(去)	
疑	闇 正 ⑤152、⑥48 キム(平濁A)魚巾反、 屬 ⑤152、⑥48(平濁A)魚巾反、 隸 ⑤131 キン(平濁)魚巾反、⑤131、⑥40 キン、⑥39 キン _左 (平濁)魚巾反			
曉				𪔐(𪔐*) 正 ⑨41 キツ(入)許宓反、 屬 ⑨40 キツ(入)許密反、 隸 ⑨33 キツ(入)許蜜反音吉、⑨36 キツ(入)
21	真(合)	軫(合)	震(合)	質(合)
生				帥 隸 ⑥103 ソチ(入)
22	諄	準	稕	術
透				黜 正 ⑨154 勅律反、 屬 ⑨155 勅律反
見	均 清 ⑧94A、⑧95A クキン、 正 ⑧168A クキン、 屬 ⑧168A(平)、 隸 ⑧126A クキン、 甲 ⑧107A、⑧109A クキン 鈞 正 ④76A クキン(平)、 屬 ④75A クキン・キン、 隸 ④63A クキン(平)、 甲 ④38A クキン(去)			
精				卒 正 ⑩50 子恤反、 隸 ⑩

				41 子植反
心	恂 正⑤147 シユム・音荀又音荀、嘉⑤147 シユン(平)音荀又音荀、建⑤127 シユン・音荀又音荀 荀 正①35(去)、嘉①34 シユン(平)、建①29 シユン			
邪	循 正⑤57、⑥83A シユン(平)音巡、嘉⑤57、⑥83A(平)音巡、建⑤49 シユン(平)音巡る、⑥68A(平)音巡			
生				率 正⑥125 ソツ
昌	春 建⑥121 シユン			出 清⑦37A、⑦43A、⑦44A、⑧106A ヒツ、建⑩30 シユツ、甲⑧122A(入)
船	楯 清⑧99A ヒン(去)、正⑧178A シユン(去濁 A)食允反、嘉⑧178A(去)、建⑧147A スキン(去)、文⑧134A シキン(去)、甲⑧113A シキン(去)食允反音順	順 清⑧24A ヒン、正①22、④174A、⑦159A(去)、嘉①20、④174A、⑦158A(去)、①45A シユム、建①18 シユン(去)、①39A、⑦17、⑧30A、⑨12A(去)、文⑧20A(去)、甲④96A シユム、⑧23A シユン(去)		述 建④1 シユツ
書		舜 嘉③267(去)、建③225、⑥243、⑦289、⑩96、⑩99 シユン、④185 シユン(去)、甲⑧34A ヒン		
常	純 正②118、⑥7A シユン(平)、⑤11 順倫反、⑤13A スキム(平)、⑨227A(平)、嘉②118 シユン(平)、⑤13A スキン(平)、⑥6A(平)、建②99 シユン(平)、⑤10(平)順倫反、⑥5A スキン(平)、⑨189(平)			
羊		尹 群③37 イン(上)、正③86 平ム、建③73 イン(上)、③74、⑥245 イン、⑦157A(上) 允 正⑩117A イン(上)、嘉⑩117A イム(上)、建⑩98A イン(上)		
来	倫 正⑨223(平)、嘉⑨224(平)、建⑨178、⑨186 リン(平)、⑨187A(平) 論 正①7、①11、①13、①13、①14、①14、①17、①19(平)、嘉①13(平軽)、建①1、①2、①5、①7、①9、①9、①10、①10、①11、①11、①16、①17、①20 リン			
日		潤 清⑦12 ヒン、正⑥200 シユム、⑥203 シユン、建⑥166 シユン(去)、⑦152 シユン、文⑦125(去)		
23	臻			櫛
生				瑟 嘉⑨108 シツ、建⑥47、⑥117、⑥119 シツ、⑨89 シツ(入)
24	文	吻	問	物
非			冀 正③51(去)弗問反、嘉③51(去)弗問反、建③43 フン(去)弗問反	黻 群⑨283、⑨285A フツ、正④247 フツ(入)音弗、嘉④247 フツ・音弗、建④206 フツ(入軽)音弗
敷		忿 正⑧234 芳粉反、甲⑧149 芳粉反(→去声)	忿 正⑨95 フン(去)、建⑨79 フン(去)(→上声)	
奉	分 清⑧98 フン(上)、正⑧175 フン、⑨202 鄭扶問反、嘉④242A(平濁 A)、建④200 ブン(平)、⑧145 フン、文⑧132(去)(→去声) 焚 正⑤225 扶云反、嘉⑤226 扶云反、建⑤194 扶云反	憤 正④21 フム(上)房粉反、④71(上濁 A)扶粉反、嘉④21 フム(上・去)房粉反、④71 扶粉反、建④17 フム(去)房粉反又戸問反、④19A(去)、④59 扶粉反、甲④8(去)、④9A フン(去)、④9A フン、④35 扶粉反	分 正③148A(去)符問反、⑩165A 扶問反、嘉③148A(去濁 A)符問反、建③125A(去)(→平声)	

微	<p>文 清⑧33A、⑧75A フン、正①13、①69、①69、①207A、③164A、③254、⑩52A、⑩122A(平濁A)、③84A モム、③218A(平)、⑧50A(平軽)、嘉①12、①68、②36A、②45、②68(平濁B)、①68A、③65、③71、④234A(平濁A)、③65A モン、正①10、③54、③63、③73、③184、③184、④74、④103、④191、⑤21、⑤23、⑤25、⑥10、⑦173、⑦185、⑦207、⑧47、⑧73、⑩66、⑩68 プン、①58、③68、③78 プン(平)、②30A、③139A、⑩102A(平)、②38 フン(平)、②57、③61、③215、⑤51、⑥177 フン、正⑧31A、⑧95A(平濁A)、正④66A、⑧57、⑧82A(平濁A) 聞 清⑧111 フン、⑧136 フン(去)、正⑧168 プン_左、⑧204 フ[ママ]、正⑧189(平濁A)、正⑧129 フン、⑧157(平濁A)(→去声)</p>		<p>汶 正③181 フン・ヒム・音問、③182A(去濁B)、正③181(去濁A)音問、正③153 フン(平濁)音問 聞 正⑥269、⑥274 フム(去濁A)、正⑥269(去濁A)、正⑥224、⑥227 プン(去)(→平声) 問 正①13、①15、⑥105、⑥105(去濁A)、③74、④34A、⑤174A、⑥96A フム、正①12、①14、④34A、⑥105(去濁A)、③73、⑦147 フン、③75A(去)、正①11、①12、③62、⑦123 プン、④28A、⑤150A、⑥79A、⑥87、⑥88A(去)、⑥87 プン(去)、正⑦99(去濁A)、正④15A フム(去)</p>	<p>勿 正⑦270(去[ママ]) 物 正⑩162A フツ、正①211A(入濁A)、③173A(入濁A)、正⑨87 フツ</p>
見	<p>君 清⑧141 クン、正①41、②109、②111(平)、正①36 クム、②92、②93、⑥70、⑥111、⑦84、⑧212、⑧213 クン、正④76(平) 軍 清⑦60 クン、正①6(平)、①34 クン(平軽)、正①5、①33、④32(平)、正①4 クン・キン_左、①28 クン、⑦212 クン</p>			
群	<p>群 清⑧42 クン、⑧48 クン(平)、正①25 クン(平軽)、⑤19A クム(平濁B)、⑧78(平軽)、⑨65、⑨193(平)、正②50A、⑤19A、⑧77(平)、⑦279 キン、⑨65(平軽)、正①21 クン・キン、⑧54、⑧63 グン、⑨54 グン(平)、⑨162 グム(平)、正⑧42、⑧49(平)</p>		<p>郡 正①22 クキン(去)、正①20 クキン(去)、正①18 クン</p>	
影		<p>緇 正⑤122 ウム(上)紆粉反、正⑤122、⑤123A(上)、正⑤105 ウン(上)紆粉反、⑤106A(上) 韞 正⑤77 紆粉反、⑤78A ウム(上)、正⑤77 紆粉反、⑤78A(上)、正⑤66 紆粉反、⑤67A ウム(上)</p>	<p>愠 正①43A ウム(去)紆問反、③88 紆問反、⑧11 紆運反、正①42A ヨン・ウン(去)、③88 紆問[ママ]反、⑧11 紆運反、正①35、③75 紆問反、①36A(去)、⑧8 紆運反</p>	<p>鬱 正②51A ウツ、正②51A ウツ</p>
曉	<p>勳 清⑦38A クン、正⑦221A クン、正⑦219A クン、正⑦184A クン、正⑦153A クン 薰 正⑤209A クム(平)、正⑤210A(平)、正⑤180A 香云反</p>		<p>訓 正①21 クキン(去)、①28、⑦224A(去)、正①19、①27、①27、⑦225A(去)、正①17、①19、①23、①23 キン、正⑦156A(去)</p>	
手	<p>芸 正⑨204 音雲、⑨204A ウム・音雲_合、正⑨170 音云、⑨170A(平)音雲</p>			
25	欣	隱	焮	迄
見		<p>謹 正②17A キム、正④181A キン、正④122A キン</p>		
群	<p>勳 正⑨202A キン、正⑨169A(平)</p>	<p>近 清⑧69A(去)、正⑦72A、⑨67A(去)、正②63A、⑦72A(去)、正②53A、⑦59A、⑨56A(去)、正⑦40A(去)(→去声)</p>	<p>近 正①84(去)(→上声)</p>	
影	<p>殷 清⑦111A、⑧32、⑧32A イン、正①207、②95、④4A(平)、正②36 イム(平)、②79 イム、④200 イン(平)、⑧40、⑨127 イン</p>	<p>隱(隱) 群④74(上)、清⑧104A、⑧130 イン、⑧117 イン(上)、⑧117A(入[ママ])、正③215、⑨207(上)、正③215、⑨208(上)、正④23A(上)、⑧178、⑨173 イン(上)、⑧197、⑨188 イ</p>		

		ン、 文 ⑧163(上)、 甲 ⑧137 イ口(上)		
26	魂	混	恩	没
幫	奔 清 ⑦37A、⑦43A、⑦ 44A、⑧106A ホン、 嘉 ⑦ 217A(平)	本 嘉 ①47A(上)、 建 ① 41A ホン(上)		
並				勃 正 ⑤156A ホツ(入)歩 忽反、⑤165(入)、 嘉 ⑤156 ホツ(入)歩忽反、⑤ 165(入)、 建 ⑤135 ホツ、 ⑤142、⑤151 ホツ(入)
明	門 清 ⑦102A モン(平)、 正 ②190(平)、⑦321A モ ン、 嘉 ②110、②110(平)、 ②113A(上濁 A)、 建 ⑥7 モン			没 正 ①90(入濁 A)、⑤ 23 ホツ、⑤171A ホツ(平 濁 A)、 建 ①77 モツ(入軽)、 ⑤21 ホツ、⑤21A ホツ、 文 ⑦131(入軽)
定	豚 正 ⑨5 徒門反、 嘉 ⑨5 徒門反、 建 ⑨4(平)、⑨4A ト _左		鈍 正 ②211A、⑦ 138A(去)徒頓反、⑥ 72A(去)、 嘉 ②211A(去濁 A)、⑥72A トン(去)、⑦ 137A(去)徒頓反、 建 ② 178A(去)徒頓反、⑥59A ト ン(去)、⑦115A(去)	突 正 ⑨244 トツ・徒忽 反、 嘉 ⑨245 徒忽反、 建 ⑨ 203 トツ・他骨反
泥				訥 正 ②210 奴忽反、② 211A トツ(入軽濁 A)、⑦ 137(入濁 A)奴忽反、 嘉 ② 211 トツ、⑦136 トツ、 建 ②178A トツ(入濁)、⑦114 トツ・奴忽反、 文 ⑦91 ト ツ・奴忽反
見	昆 正 ⑥17 コム、 建 ⑥13 コン			
溪			困 正 ⑤90A コム(去)、⑩ 116 コン(去)、 嘉 ⑤90A コ ン(去)、⑩116(去)、 建 ⑤ 77A、⑧191A、⑩97 コン (去)、⑩98(去)、 甲 ⑧147A コン(去)	
疑				軌 群 ②17 コツ(入濁)、 正 ①204 コツ(入濁 A)五忽 反又音月、①206A(入濁 A)、 嘉 ①203 コツ(入濁 A) 五忽反、①205A(入濁 A)、 建 ①173 ゴツ・五忽反又音 月、①175A(入軽)
清			寸 正 ③83A ソン、 建 ⑨ 149A(去)	
從	存 嘉 ①62A(上濁 A)、 建 ①53A(平)、④146 ソン			
心	孫 清 ⑦14A、⑦23A、⑦ 31A、⑦44A、⑦60、⑦94、 ⑦97A、⑧91、⑧100、⑧ 110A、⑧110A ソン、⑧ 110A ソン(平)、 正 ① 33(平)、 嘉 ①32、①136A、 ①179A、①191A、② 61(平)、 建 ①27 ソン(平)、 ①117、⑧134、⑩71 ソン、 ①163A(去)、③65A、③ 69A(平)、	損 清 ⑧111、⑧112、 嘉 ① 208(上)、 建 ①177、④ 206A、⑧168 ソン(上)、① 178、⑧170、⑧171、⑧175 ソン、 文 ⑧155(上)、 甲 ⑧ 129、⑧135A ソン、⑧131、 ⑧134 ソン(上)	孫 正 ⑧69(去)、 建 ④ 116 ソン(去)⇒「遜」 異 正 ⑤112 ソム(去)音 遜、⑤113A ソム、 嘉 ⑤ 112(去)、 建 ⑤97 ソン(去) 音遜、⑤98(去) 遜 清 ⑦118 ソン、⑧44 ソン(去)、 正 ④139 ソム・ 孫音遜、④140 孫音遜、⑦ 159 孫音異、⑦159A ソン、 ⑦349(去)孫音遜、⑨141 孫音遜 _右 、⑨144 孫音遜 合 _右 、 嘉 ④139、④140 孫音 遜、⑦158A、⑦349、 建 ④ 116 ソン _左 、⑦133A(去)、 ⑦291、⑧57、⑨117、⑨120 ソン(去)、 文 ⑦108A ソン 角(去)、⑦254(去)、⑧46 ソ ン(去)、 甲 ④75 ソン(去)、 ④75 ソン、⑧45A(去)	
影	温 群 ④86(平軽)、 清 ⑧ 127 ラン(平)、 正 ①86、⑩ 31 ラン(平)、①165 烏門 反、①166A ウム(平)、④ 143 ラム(平軽)、⑤148A ラ ン、 嘉 ①85(平)、①164 烏 門反、①165A ラン(平)、 ④143、⑩31(平軽)、 建 ① 73 ラン(平)、①140 烏門 反、①140A ラム(平)、④ 119 ラン、⑧193、⑩25 ラ			

	ン(平)、 文 ⑧178(平)、 甲 ④77ラン(平軽)、⑧148ラン(平)			
曉	婚 正 ④119A コム、 嘉 ④119A コン(平)、 建 ④99A コム、 甲 ④63A コン(平軽) 聞 清 ⑦103A コン(平軽)、 正 ⑦323A コン(平)、 嘉 ⑦322A コン(平軽)、 建 ⑦269A コム(平)、 文 ⑦233A(平)			忽 清 ⑦42、⑦45A、⑦54A コツ、 正 ⑤56 コツ、 嘉 ⑦226 コツ、 建 ⑤48 コツ(入)、⑦189、⑨203 コツ、 文 ⑦158 コツ
匣				紇 清 ⑦23A コツ(入)、⑦37A、⑦38A コツ、 正 ②73A コツ(入)恨發反、⑦200A コツ、⑦220A コツ(入)、 嘉 ②73A コツ(入)恨發反、⑦199A 恨發反、⑦218A(入)、⑦219A コツ、 建 ②61A(入)戸没反、⑦167A コツ(入)恨發反、⑦183A コツ、 文 ⑦138A コツ・コチ(入)恨發反、⑦153A、⑦154A コツ(入)恨
来			論 清 ⑦11 ロン ^左 、 正 ⑥85(去)、⑦181 ロン(平)、 嘉 ⑥85(去)、⑦180(平)、 建 ⑥70 ロン、⑦151 ロム、 文 ⑦124 ロン	
27	痕	很	恨	
影	恩 嘉 ②180A、③268A(平)			
匣			恨 正 ③125A(去)、 嘉 ③125A(去)、 建 ③106A(去)	
07 山撰				
28	元(開)	阮(開)	願(開)	月(開)
見				計 正 ⑨142 居謁反・紀列反、 嘉 ⑨144 居謁反
疑	言 清 ⑧57A(平)、 正 ②196A(平濁 A)、④65A、④65A、⑧95 ケム、 嘉 ①50、①145A、②196A、③30A(平濁 A)、①168A、①184A(去濁 B)、 建 ①105 ゲン(平)、⑥9、⑦57、⑦62、⑦63、⑦69、⑧76、⑨43、⑩36 ゲン、⑥200 ケン ^左 、⑧66、⑩86 ケン、 甲 ④32A、④54(平濁 A)、④116A、⑧59 ケン(平濁 A)、⑧60A ケン			
影		偃 正 ①146A エン(平)、③202、⑥264A エム(上)、⑥263 於偃反、⑨23 エン(上)、 嘉 ①145A エン(上)、③202、⑥264A、⑨23(上)、 建 ①124A エン(上)、③171、⑨18、⑨21 エン、⑥220A(上)		
曉			憲 正 ③157 ケイ・ケン ^左 、⑦149 ケン、 嘉 ⑦147 ケン、 建 ⑦123、⑦124 ケン、 文 ⑦100(去) 献(獻) 正 ②46 ケン(去)、②114A ケン、⑤178 ケム、 嘉 ②46、②113A(去)、 建 ②38 ケン(去)、②95A、⑤153A(去)	
28	元(合)	阮(合)	願(合)	月(合)
非		反 群 β19(上)、 正 ①100A、③204、⑥20A、⑥168A ハム、②111、④23、④219A ハン(上)、⑤139、⑤143A、⑥252 ハム(上)、 嘉 ②111、④219A、⑤139、⑤143A、⑤143A、⑥252(上)、④23、⑥20A ハン(上)、 建 ②93、③172、⑤120、⑥209 ハン(上)、②94、④18 ハン、④182A ハ		発(發) 正 ①159、③57A、④22 ハツ、 嘉 ①158、①159A(入軽)、④22(入)、 建 ②34A、④28A ハツ、③48A(入軽)、④18 ハツ(入)

		ム(上)、⑤124A、⑤124A、⑤124A、⑥16A、⑥140A(上)、④49(上)、④123A ハン(上) 坂 清⑧134A ハン(去)、 正⑧242A ハン・音反 <small>欄上</small> 、 嘉⑧201A(上)音反、甲⑧155A(上)		
奉	樊(樊*) 群 329A ハン(上)、正①137 ハム、①140A ハン、嘉①136(平・平軽)、⑦29、⑦32(平)、建①117 ハン(平)、①119 ハム、⑥230、⑥238 ハン	飯 清⑦17(去)、正④57 符晚反、⑤231 ハム(去)、⑦191(去)扶晚反、⑨230 ハン(去)扶晚反、⑨231(去)、嘉⑤231、⑦190、⑨231(去)扶晚反、⑨232(去)、建④47 ハン(去)、⑤199 ハン・扶晚反、⑦159(去)扶晚反、⑨192 ハン(去)扶晚反、⑨193 ハン(去)、⑨193 ハン、文⑦131(去)、甲④28(去)扶晚反		伐 清⑧102、⑧102、⑧104A ハツ、正②133A ハツ、⑦152(入)、嘉②133A(入)、⑦151 ハツ(入軽)、建⑦126、⑧151、⑧152 ハツ、文⑦102 タイ[ママ] (入)、甲⑧118 ハツ、⑧119A 筏 正③26A ハツ・音伐、嘉③26A ハツ(入)、建③22A ハツ・音伐 罰 正①127A ハツ、嘉①126A、⑦24A、⑦24(入)、⑦23 ハツ(入)、建⑦18、⑦20 ハツ、⑦19A(入)
微			曼 正④50A ハム(去)音万、嘉④50A(去)音万、建④41A(去)音万、甲④23A(去)音万 万(萬) 建⑩106 ハン	
溪			闕 正⑦19、⑦351 ケツ、嘉⑦19 ケツ(入)、建⑦15、⑦293、⑧73 ケツ、文⑦256 ケツ、⑦256A(入軽)、⑧62 ケツ、甲⑧57 クロツ	
疑	元 正③68A クエン(平濁A)、嘉③68A(平濁A)、甲④66A(平濁A) 原 建③132 ゲン(平)、⑦290 ゲン、⑨67(平)		愿 正④216 クエン(去濁A)音願、④217A(去濁A)、嘉④216(去濁A)音願、④217A(去濁A)、建④180 クエン・音願、④181A ゲン(去)、甲④122 クエン <small>左</small> (去濁A)音願、④122A クエン(去濁A)	月 嘉④44、⑦54(入濁A)、建③141 ケツ・ゲツ <small>左</small> 、③142 ケツ <small>左</small> 、④36 ケツ、⑤169、⑦44 ゲツ
影	怨 正⑦303 於袁反又於願反(→去声)		怨 清⑧40A エン、正⑦152(去)、⑦293A 紆万反又於袁反、⑧62A エン、嘉⑦151 エン(去)、建⑦126 エン、⑨55A(去)、文⑦102 エン(去 <small>合</small> ・入軽 <small>母</small>)、⑧40A エン、甲⑧40A エン(去)(→平声)	
于		遠 清⑧122 エン、嘉①40、④189A(上)、①34、⑥170、⑧142 エン、甲④105A エン(上)、⑧110、⑧143A エン(→去声)	遠 清⑧36A(去)、正①101、⑥87A、⑦160A、⑧52、⑧61、⑧255、⑨16、⑨144 千万反、④170 千万反 <small>右</small> 、⑥293 又于万反、⑦16A(去)、嘉①100、⑧52、⑧254、⑨16 千万反、⑦16A、⑦20A(去)、建①86、⑨13 千万反、①86A、⑦13A、⑦16A、⑦133A、⑧45A、⑧50(去)、③194、④142(去)千万反、文⑦108A(去)、⑧40(去)千万反、甲④94(去)千万反、⑧34、⑧40A(去)、⑧40(去)千万反、⑧163 千万反(→上声)	日 群 540 ヤツ、清⑧41A キヤツ(入)、⑧41A キヤツ、正①15、⑧63A ヤツ、⑥136 音越、嘉①14、⑥51(入)、建①12 キヤツ・ヤツ、⑧52A(入)、文⑧41A ヤツ、甲⑧41A、⑧41A キヤツ
29	寒	旱	翰	曷
端	単(單) 正⑥150A タム(平)音丹、嘉⑥150A(平)音丹、建⑥124A(平軽)音丹 單 正③189 タム(平軽)音丹、嘉③189(平軽)音丹、建③160 タン(平)音丹、③160A(平)		旦 甲④112A タン	
透		坦 正④142 タム(去)吐但反、嘉④142 タン(去)吐但反、建④118 タン(上・去)吐但反、甲④76(上)吐但反、④77 タン	歎 建⑥126 ダン <small>左</small>	
定	壇 正⑥278A タム(平)徒丹反、嘉⑥278A(平軽)徒		檀 正①78、⑤117 徒旦反、①79A タム(去)、嘉①	達 清⑦71、⑦71、⑦92、⑧75、⑧75A、⑧131 タツ、

	丹反、 隹 ⑥231A(平) 檀 正 ⑨115A(平)、 嘉 ⑨ 116A(平)、 隹 ⑨96A(平)		77 徒旦反、①78A タン (去)、 隹 ①66、⑤101 徒旦 反、①66A タム(去)	正 ③172 タツ(入)、③ 269(入)、 嘉 ③269(入軽)、 ⑦40(入)、⑦88 タツ、 隹 ③146 タツ(入軽)、③227、 ⑤4、⑤193、⑥222 タツ (入)、⑥221 ツ(入)、⑥224、 ⑥224、⑥227、⑥227、⑥ 238、⑦33、⑦73、⑦227、 ⑦227、⑦254、⑨203 タツ、 ⑧106 タツ・タツ ^左 、 文 ⑦53(入)、 田 ⑧82、⑧82A タツ
泥	難 正 ⑥184A ナム、 隹 ⑥ 153A(平)(→去声)		難 群 487(去)、 清 ⑦ 117A(平・去)、⑧6A(去)、 ⑧41A、⑧128 ナン(去)、 正 ①79A、④164A ナム (去)乃旦反、③248A ナム (去)、⑥122A 乃旦反、⑦ 332 又乃旦反、⑦ 347A(去)、⑧10A、⑧ 234(去)乃旦反、⑧65A ナ ン、 嘉 ①78A、⑧10A、⑧ 234(去)乃旦反、③248A、 ⑦347A(去)、④164A、⑧ 65A 乃旦反、 隹 ①66A(去) 乃旦反、③209A、④ 137A(去)乃旦反 ^右 、⑥ 101A、⑧8A、⑧53A、⑩ 14A、⑩136A(去)、⑦ 290A(平)、⑧194 ナン(去) 乃旦反、 文 ⑧43A、⑧ 179(去)、 田 ④90A ナン (去)乃旦反、⑧149 タン ^合 ^左 (去)乃旦反(→平声)	
見	乾(軋 [*]) 清 ⑧104A カ ン、 正 ⑧188A カン(平)音 干、 嘉 ⑧155A(平)、 文 ⑧ 142A カン ^合 、 田 ⑧120A カン ^左 ・音干 干 群 463 カン(平)、 清 ⑧99 カン(平軽)、⑧99 カ ン、⑧113A(平)、 正 ① 180A、⑧177 カム(平)、⑧ 178A、⑨148、⑨230 カン (平)、 嘉 ①179A カン(平)、 ⑨231(平)、 隹 ①153A カン (平軽)、⑧147、⑨124、⑨ 192 カン(平)、⑨125A、⑨ 193A(平)、 田 ⑧113 カン (平) 奸 正 ⑥260A カム(平)、 嘉 ⑥260A カ□ 罕 正 ④97A カム・音干、 嘉 ④97A 音干、 隹 ④80A カン(平軽)、 田 ④50A カン (平軽)			葛 正 ⑤187A カツ、 嘉 ⑤ 187A(入)、 隹 ⑤161A カツ (入)
溪			侃 正 ⑤151、⑥50 カム (去)苦旦反、 嘉 ⑤151(去) 苦旦反、⑥50 カン(去)苦 旦反、 隹 ⑤130 カン(去)苦 旦反、⑥41 カン・カン ^左 (去)苦旦反、⑥41 カン	
疑			嗔 正 ⑥73 カム(去濁 A) 五旦反、 嘉 ⑥73 カン ^平 (去 濁 A)五旦反又魚變反、 隹 ⑥60 ガン(去)	
從	殘(殘) 群 362(平)、 正 ⑦ 57 サン(平)、 嘉 ⑦57 サン (平)、⑦58A(平)、 隹 ⑦47 サン・サン ^左 (平)、 文 ⑦28 サン(平)			
心		散 正 ①33、④234A(上)、 嘉 ①32(上・去)、④233A 息 但反、 隹 ①28 サン、④ 195A(上)、⑩58A(去)		
曉		罕 正 ⑤3 呼但反、⑤3A カム、 嘉 ⑤3 呼但反、⑤3A カン(上)、 隹 ⑤2 カン、⑤ 3 呼但反、⑤3A(上)		
影	安 清 ⑧96A(平軽)、 正 ① 17(平)、①21、①34(平軽)、			

	②178A(上)、 嘉 ①16(平軽)、②178A(平)、 隹 ①14、①28 アン、②150A(平)			
曉			漢 正 ①23(去)、⑨235 カン、 隹 ①2 カン、①19、⑨196 カン(去)	
匣	寒 隹 ⑦3A カン			
30	桓	緩	換	末
幫			半 隹 ⑤164 ハン	
並	槃 嘉 ⑤157A ハン(平) 盤 正 ⑤157A ハム(平)、 隹 ⑤136A 歩于反		𪔵 [△] 正 ⑥74A ハム・普半反、 嘉 ⑥74A 普半反→「畔」 畔 隹 ⑥60A ハン	
明			瓊 正 ③52A マム(去)末且反又末丹反、 嘉 ③52A マン(去) 樓 [△] 隹 ③44A マン(去)→「樓・樓」	末 隹 ⑦110A ハツ(入)、 正 ⑦333A ハツ(入)、 嘉 ⑦333A(入濁 A)、 隹 ⑦278A ハツ、 文 ⑦241A ハツ
端	端 正 ①84A(平)、 嘉 ①83A、①174(平)、 隹 ①148 タム(平)、⑤117A、⑤138A、⑥116A(平)、⑥114 タン(平)	短 隹 ③123 タン(上)、⑥19 タン	斷(斷) 正 ③171A タム(去濁 B)丁乱反、④187A タム・丁乱反、 嘉 ③171A(去)、④187A 丁乱反、 隹 ③144A 丁乱反、④156A(去)、 甲 ④104A(去)丁乱反	
見	冠 正 ⑤195 クワム、 隹 ⑤168 クワン、⑩129 クワン(平)→去声 棺 正 ⑥29 クワム、 隹 ⑥23 クワン(平) 官 隹 ⑦113(平軽)、⑧15A クワン、 嘉 ②106A、②122A(平)、 隹 ②88、②99A(平)、⑦282、⑩76、⑩112 クワン、 甲 ④59A(平)	管 嘉 ②102、②103(上)、⑩132A(平)、 隹 ②85、⑦157 クワン(上)、②87、⑦190、⑦194 クワン、⑩110A(上)	冠 正 ⑥140A 古乱反、⑥147 クワム(去)古乱反、 嘉 ⑥147(去)古乱反、 隹 ⑥122 クワン(去)、⑥124A(去)→平声 灌 正 ②49 クワン(去)、②51A ク□□、 嘉 ②48 クワン(去)古乱反、②51A、②51A(去)、 隹 ②40 クワン・古乱反、②42A、②43A(去) 貫 隹 ⑧11 クワン(去)、 正 ②188 古貫反、⑧17(去)古乱反、 嘉 ②188(去)古乱反、⑧17(去)、 隹 ②159、⑧14 クワン・古乱反、⑥43 クワン(去)、 甲 ⑧10 クワン・古乱反	适 隹 ⑦1(入軽)、 正 ④234A、⑦163 クワツ(入)古活反、⑨243 クワツ・古活反、 嘉 ④234A クワツ・古活反、⑦162A(入軽)古活反、⑨244 古活反、 隹 ④195A クワツ・古活反、⑦136 クワツ(入)、⑦143(入軽)、⑨203 クワツ(入軽)古活反 ^右 ・音括、 文 ⑦111、⑦116A(入軽)
溪	寬 隹 495、547(平)、 正 ③141A、④143A、⑩139 クワム、⑨37(平)、 嘉 ④143A クワン(平)、⑨37(平)、⑨38 クワン、 隹 ②113 クワン ^左 、⑨30、⑨31 クワン、⑩116 クワン(平)			
精	鑽 正 ⑤55 子官反、⑨113 子官反、 嘉 ⑨114 子官反、 隹 ⑨94 子官反			
心			筭(算) 正 ②32A 悉乱反、⑦109 悉乱反 ^{欄上} 、⑦110A サン、 嘉 ⑦109 悉乱反、⑦110A(去)、 隹 ⑦90 悉緩反、⑦91A(去)、 文 ⑦69 悉緩反、⑦70A サン	
匣	完 正 ⑦48 音丸、 嘉 ⑦48 音丸 桓 隹 ⑦40、⑦64(平)、⑧101A、⑧110A クワン、 正 ②7A クワン、④81、⑦260(平)、 嘉 ②7A(平)、④80 クワン(平)、 隹 ④67 クワン(平)、④68A(平)、⑦187、⑦189、⑧165、⑨137 クワン、 文 ⑦184 クワン ^{角左} 、 甲 ④41、④41A クワン(平)、⑧116A クワン、⑧121A(平)		煥 隹 ②76 クワン(去)、 正 ④229 クワン・音喚、 嘉 ④229 クワン・音喚、 隹 ④191 クワン(去)	越 隹 425A クワツ、 隹 ⑧32A クヱツ、 正 ⑧49A クワツ・戸括反、 嘉 ⑧49A クワツ・音括、 隹 ⑧41A クワツ ^左 ・戸括[ママ]反、 文 ⑧30A クワツ・戸括反
来			乱(亂) 隹 ⑧36A ラン、 正 ④75、⑤208(去)、⑨61 ラム、 嘉 ①46、③258A、④74、⑤208、⑨228A、 隹 ①40 ラン(去)、③218A、⑨40A、⑨68A(去)、④62、④128、④163、④164、④177 ラン、④193 ラン ^左 、	

			⑨50 ラン(去)、 甲 ④38、 ④109(去)、④38A ラム、 ④84 ラン(去)	
31	刪(開)	潛(開)	諫(開)	黠(開)
幫		板 建 ⑤211 ハン 版 正 ⑤245 ハム(上)、 嘉 ⑤246 ハン		八 嘉 ②3(入軽)、 建 ②2、 ⑨203 ハツ
明	蚤(蟹) 清 ⑧16 ハン、 正 ⑧25 ハム(平濁 A)、 嘉 ⑧ 25(平濁 A)、 建 ⑧20 ハム (平)、 文 ⑧10(平濁 A)、 甲 ⑧15 ハン(平濁 A)		慢 正 ④170 マム(去)、⑦ 229A、⑩153 武諫反、 嘉 ④170(去)、⑦227A 武諫 反、 建 ④142 マン(去)、⑨ 31A(去)、 文 ⑦160A(去)、 甲 ④94 マン(去)、④96A マ ン(平)、	
見			姦 群 325 カン(平軽)	
疑	顔 嘉 ①51A、①150A(平 濁 A)、④33A(平濁 B)、 建 ④142、⑤146 カン、⑥8、 ⑥21、⑧179 ガン、⑥26 ケ ン、 甲 ④94 カン			
生			訕 群 514A(去)、 正 ⑨137 所諫反、⑨137A サン(去)、 嘉 ⑨138 所諫反、⑨138A サン(去)、 建 ⑨114A サン (去)所諫反	殺(煞) 群 324、325、 362(入軽)、561(入)、 正 ⑥ 261 セツ、⑦57 サツ(入)、 ⑩157(入)、 嘉 ⑦57 サツ(入 軽)、⑦58A(入)、⑦58A、 ⑩157(入軽)、 建 ⑥215 サ ツ ^平 (入)、⑥217 サツ(入 軽)、⑦47 サツ(入)、 文 ⑦ 29、⑦29A、⑦29A(入軽)
影			晏 正 ①36(去)、⑦65 於 諫反、 嘉 ①35、①36、③ 79(去)、⑦65 於諫反、 建 ①30 アン、③67 アン(去)、 ⑦54 於諫反	
31	刪(合)	潛(合)	諫(合)	黠(合)
見	関(關) 正 ①32、① 36(平)、②92 クワン(平)、 ④212 クワン、 嘉 ①35、② 91(平)、 建 ①27、①30 ク ワン、②77 クワム(平)、④ 176 クワン(平)、 甲 ④119 クワン(平軽)			
初			纂 正 ⑦165A 初患反、 嘉 ⑦164A 初患反	
匣		堯 正 ⑨20 クワム(去)華 板反、 嘉 ⑨20 クワン(去) 花板反、 建 ⑨16 クワン ^平 (去)華板反	患 群 236A クワン、 正 ②209A クエン(去)、③ 248A クエム、④164A ク エン、 嘉 ②209A クワン (去)、③248A(去)、③268A クワン、 建 ②177A クワ ン、③209A(去)、 甲 ④90A クエン	
32	山(開)	産(開)	禰(開)	鑑(開)
滂			盼(盼 ^平) 正 ②33 ハム (去)普覓反・匹回反・匹覓 反、②34A(去)、②37A ハ ン、 嘉 ②33 ハン(去)、② 34A、②37A(去)、 建 ②27 ハム(去)普覓反、② 28A(去)	
並				拔(拔) 清 ⑦31A ハツ、 正 ⑦210A ハツ(入)皮八 反、 嘉 ⑦210A(入)彼八反、 建 ⑦175A ハツ(入)皮八 反、 文 ⑦146A 皮八反
見	間 嘉 ⑤69A(平)、 建 ⑤58 音諫才	簡 清 ⑦63 カン、 正 ③ 108 カム、 嘉 ③108、⑦ 258(上)、 建 ③92、③117 カ ン(上)、③118、③120A カ ン	間 群 282、284、 285A(去)、 正 ⑥18A、⑨ 98A(去)、 嘉 ⑨99A(去)、 建 ④204A、⑨81A(去)	
初				祭 清 ⑧58、⑧58、⑧59A サツ、 正 ⑧97、⑧98(入)、 建 ①138、⑧78 サツ、 文 ⑧ 67 サツ(入)、 甲 ⑧61 サツ
生	山 正 ⑧146A(平濁 A)、 嘉 ②22、②24A(平)、 建 ② 18 セン、②22 サン、⑨23、 ⑨25 ザン	産 清 ⑦12 サン、 正 ③ 75A サム、 建 ③64、⑦152、 ⑦155 サン		
匣	閑 正 ⑩36A(平)、 建 ⑩	限 嘉 ⑤164A カン(上)、	間 ^平 正 ④244 カム、④	

	30A(平)	建⑤142A カン(上)諧眼反	245A カン(去)、嘉⑥18A(去)、建④203、④209 カン(去)、⑥13(去)⇒「閑」	
33	先(開)	銑(開)	霰(開)	屑(開)
幫	邊 正④174、建④145 へム、甲④97 へン(平軽)、④97A へン			
滂			片 正⑥240 へム(去)、嘉⑥240(去)、建⑥200 へム(去)	
並	駢 清⑦17 へン(平)、正⑦180 へン(平)薄田反又薄亭反、嘉⑦189(平)薄田反又薄亭反、建⑦159 へム(平)、文⑦131 へン(平)蒲田反			
端	顛 群②29、279A(平)、正④234A テン(平)、嘉②156、④233A(平)、建②132 テン(平)	典 甲④33A テム(上)	殿 正③205 テム(去)都練反、嘉③205(去)、建③174 テン・都練反	
透	天 嘉①131(平)、建②55A(平)、③217、③217、⑥27 テン、⑤25 テム _{合左} 、⑤26A テム			
定	田 正①61A(平)、嘉①60A(平)			絰 正⑦244A テツ(入)、嘉⑦243A テツ(入軽)、文⑦172A チツ
泥	年 清⑦18A ネン、正①92(平軽)、建⑥110 ネン			涅 正⑨47 乃結反、嘉⑨47 乃結反、建⑨39 乃結反、⑨39A ネツ・テツ _左 (入)
見			見 正⑤99A(去)(→匣母・去声)	潔 正④246A ケツ、⑨227A(入)、建④205A ケツ、⑨189(入)
精				節 清⑧113 セツ、④83A、④102、④120A、⑧132 セツ、正①64、①97(入)、嘉①63、①72A、①97A、②119A(入)、建①54、①82、③70、④153、⑧172、⑨176 セツ
清	千 正①59A(平軽)、嘉①58A、③37(平)、建①47 セン、①50A(平)、甲④38A(平軽)		倩 正②33 セン(去)七練反、②34A(去)、②37A セン、嘉②33 セン(去)七練反、②34A、②37A(去)、建②27 セン(去)七練反、②28A、②31A(去)	切 正①113(入)、⑦140(入)音絶、⑨66A セツ、嘉①112(入)、⑦139(入)音絶、建①95、⑦116 セツ、⑦117A(入)、文⑦93(入)
從	前 正①6(平)、嘉①5(平)、建①4 セン(平)、⑩133A セン _左			
心	先 嘉①94(平・平軽)、①152、③263A(平)、建①80、①130、⑥5、⑦296 セン		先 正⑥125A 悉薦反、建⑥104A(去)、⑧180A(去)	
影			宴 清⑧115 エン(去)、嘉⑧211 エン、建⑧174 エン、甲⑧134 エム(去)、⑧134A エン 燕 正④11 エム(去)於見反、嘉④11(平・去)、建④8 エン(去)音宴、甲④2 於見反	
曉		顯(顯) 建⑨205A(上)、⑩94A(去)		
匣	絃 建⑨15 ケン _左 (平)音卷 賢 清⑦99、⑧30A、⑧39A ケン、正①6、②47A、②171A、⑨19A(平)、①70 ケム _左 ・ケム _左 、嘉①5、②47A、②171A、②193、⑦9(平)、①69、①69 ケン _左 、建①5、②163、③161、④43、⑦7、⑦243、⑧48、⑩9、⑩10 ケン、①59、①59 ケン _左 、②39、⑩11(平)、③159 ケン(平)、甲④81A、⑧38 ケン		見 清⑧13A、⑧75、⑧80(去)、正②122、③66A、③138A、④205、⑤180A、⑥139A、⑥289、⑧11、⑧131、⑧139、⑨169A、⑨206 賢遍反、④103、⑤24A(去)賢遍反、嘉③138A、④204、⑥289、⑧11、⑧20、⑧131、⑧139 賢遍反、④103、⑤180A(去)賢遍反、建②102(去)賢遍反 _右 、②104、②104、②105A、④85、④87A、④171、⑥240、⑧16A、⑧114(去)、③55A(去)賢遍反、⑤22A 賢遍反 _右 、⑤155A 賢遍反、文⑧6(去)、	

			⑧95 賢遍反、 甲 ④53、④115、⑧6(去)賢遍反、⑧12A、⑧83 賢遍反、⑧88(去)(→見母・去声)	
来			練 正 ⑤183A レム(去)、 嘉 ⑤183A レン(去)、 建 ⑤157A(去)	
33	先(合)	銑(合)	霰(合)	屑(合)
見				決 正 ③171A ケツ、 建 ③144A、④156A(入軽)、 甲 ④104A ケエツ 譎 清 ⑦39A クエイ、 正 ⑦222 古穴反、223A ケツ(入)、 嘉 ⑦220 古穴反、⑦221A(入)、 建 ⑦185 古穴反、⑦185A ケエツ、 文 ⑦154 古穴反、⑦155A ケエツ(入)
溪		犬 嘉 ①146(上)、 建 ①125 ケン		
影	淵 正 ①157A エン、③122 エン、 嘉 ①156A(平)、 建 ⑧8 エン、 甲 ④12、④100A エン			
曉			絢 正 ②33 呼縣反、②34 ケム(去)、 嘉 ②34A(去)、 建 ②28A ケエン(去)	血 清 ⑧119、⑧120 ケエツ、⑧140 クエ、 正 ⑧218 ケエツ、 建 ⑧181 ケツ(入)、⑧181、⑧183 ケツ、 甲 ⑧139 ケツ
匣	玄 正 ①7、①24、⑤195 ケム、 嘉 ①6、①23(平)、 建 ①5、①20 ケン、⑤168、⑩100 ゲン		銜 建 ⑤69A 古縣反玄遍反	
34	仙(開甲)	獮(開甲)	線(開甲)	薛(開甲)
幫	編 正 ③26A 必綿反、 嘉 ③26A 必綿反、 建 ③21A 必綿反 鞭 正 ④38 へム・必綿反 音吾古反、 嘉 ④38(平軽)、 建 ④31 ベン(平)必綿反、 甲 ④17 必綿反五孟反			
滂	偏 正 ⑤139 音篇、⑥242A へん(平)、 建 ⑤120 音篇、⑥201A へん(平) 篇 正 ①8、①24(平)、①8、①14、①16、①16(平軽)、 嘉 ①3、②9A、②12A(平)、 建 ①3、①6、①6、①11、①12、①13、①13、①20 へん、①105A(平)、 甲 ④52A へん			
並	便 清 ⑧111、⑧112A、⑧112A へん、⑧112 へん(平)、 正 ③118A へム(平濁B)、⑤149(平)婢綿反、⑧204(平・平軽)婢綿反 <small>偏上</small> 、 嘉 ⑤149(平)婢綿反、⑧204 へん(平)婢綿反、 建 ③100A、⑤129A へん、⑤128 ベン・婢綿反、⑤129 ベン、⑧169 ベン(平)、⑧169A(平)、⑧170 へん(去)、 文 ⑧153(平)、⑧155(去)、 甲 ⑧130(平 合・去)、⑧130A へん(平)、⑧131 へん(去)、⑧131A へん(平 合・去)(→去声)		便 嘉 ⑤190A 婢面反、 建 ⑤163A 婢面反(→平声)	
明			面 建 ③115 メン(去)、⑧18 メン	滅 正 ③201 へツ、 嘉 ③201(入軽濁A)、 建 ③170 へツ(入軽)、 文 ⑧104A(入)、 甲 ⑧90A(入)
清	邊 群 ②51A(平)、 正 ③148A セム(平)、 嘉 ③148A(平)、 建 ③125A セン(平)	淺(淺) 清 ⑧69A セン、 建 ⑧96A(上)		
從		踐(踐) 正 ⑥83A セム(去)、 嘉 ⑥83A(去)、 建 ⑥68A(去)	賤(賤) 嘉 ③10(去)、 建 ③7 セン(去)、 甲 ④109A セン	
心		鮮 清 ⑦14A、⑧12(上)、 正 ①45、②208、③262 似		契 群 ②77A セツ、 正 ④231A セツ(入)息列反、

		善反、①45A セム(上)、⑧20 上声、 嘉 ①44A(上)、②208 仙善反、 建 ①38 セム(上)仙善反、②176、③221 仙善反、⑧16(上)、 田 ⑧12 仙善反		嘉 ④231A セツ・息列反、 建 ④193A セチ・ツ・息列反(→溪母・霽韻開) 繼 正 ③4 セツ(入)息列反、 嘉 ③4 セツ(入軽) 綫 建 ③2 セツ・セツ・息列反 薛 清 ⑦21 セツ、 正 ⑦196 セツ(入)、 嘉 ⑦195 セツ(入軽)、 建 ⑦163 セツ(入)息列反、 文 ⑦135 セツ 夔 正 ⑤184 息列反、 嘉 ⑤184 息列反、 建 ⑤158 息列反
章			戰(戰) 群 255(去)、 正 ②96 セム、④42 セム(去)、 嘉 ②96(去)、④42 セン(去)、 建 ②80、④134、⑤151 セン(去)、④35 セム(去)、 田 ④20 セン、④88 セン(平・上 ^合)	折 正 ⑥241 之舌反
常		璋 正 ⑥278A セム(去)音善、 嘉 ⑥278A(去)音善、 建 ⑥231A(去) 善 清 ⑧11A、⑧12A、⑧34A、⑧112、⑧114、セン、 正 ⑥261 セム、⑦81、⑧18A(去)、 嘉 ①174A、①194、①195A、②76A、②131、②131A、②132、②139A、②196A、⑦81、⑦82、⑦84A(去)、 建 ①165、②110、③106、⑩10 セン(去)、②64、③126A、⑨36(去)、②113、⑥14A、⑥67、⑥217、⑧170、⑧172、⑧195、⑩108 セン、⑥247 セン ^左 、⑦68、⑦118、⑩59 セン、 文 ⑦84A、⑧157(去)、 田 ④47、④113A セン(去)、④65A、④114、⑧11A、⑧33A セン、⑧133(去)	擅 正 ⑩125A 市戦反、 嘉 ⑩125A 市戦反	
来	連 建 ⑨183 レン(平)、⑨186 レン	捷 正 ③15(上)力展反、 嘉 ③15(上)力展反、 建 ③12 レン(上)力展反		列 清 ⑧2A レツ、 正 ⑩116A レツ、 嘉 ②5A(入軽) 烈 清 ⑧87 レツ(入軽)、 正 ①26(入軽)、 嘉 ①25、③80A、⑤249(入軽)、 建 ①22、⑧126 レツ、⑤213 レツ ^左 (入)、⑤214A(入)
日	然 清 ⑦4、⑧18 セン、 正 ①117A、③48 セン、 嘉 ①116A、①172A、③48A、⑦105(平濁 A)、②143A(平濁 B)、 建 ③92、④209、⑤49 セン、④203、⑤47、⑥84、⑥126、⑦139、⑨161、⑩25、⑩130 セン、⑥42 セム			
34	仙(開乙)	獮(開乙)	線(開乙)	薛(開乙)
幫			變(變) 正 ⑩30(去)、 嘉 ①207A、③240、⑩30(去)、 建 ①176A(去)、③202、③203、⑩25 ヘン(去)、⑤171、⑤208、⑤212 ヘン	別 正 ①148、②113A、⑤130A、⑥219A、⑥227A、⑩166A 彼列反、⑩47 ヘツ・彼列反、 嘉 ①147、②112A、⑤130A、⑥227A 彼烈反、⑩47(入)彼列反、 建 ①125 彼列反、⑤112A(入)、⑩39 ヘツ(入)
並		辨 群 ③14A ヘン(上)、 清 ⑦97A ヘン ^左 、⑧112A ヘン、 嘉 ⑤150A、⑧206A(去)、 建 ⑧171A(去)、 文 ⑧155A(去)、 田 ⑧131A ヘン(去)	卞 清 ⑦24(去)、 正 ⑦201 ヘン ^左 (去)皮彦反、 嘉 ⑦200 ヘン(去)彼彦反、⑦201A ヘン、 建 ⑦167 ヘム(去)皮彦反、 文 ⑦139、⑦139A ヘン(去) 弁 正 ⑤197A(入濁 A)、 建 ⑤170A(去)	
明		俛 建 ⑤137A 音勉 免 建 ④206 ヘン(上) 冕 群 284、426 ヘン(上濁 A)、285A(上濁 A)、 清 ⑧33 ヘン(上)、⑧75(上)、		

		<p>正④247 へム(上濁 A)音免、⑤11 へム(上濁 A)、⑤50 へム(上濁 A)音勉、⑤243 へム、⑧50 へん(上濁 A)、⑧131(上濁 A)、嘉④247 へん(上濁 A)、⑤11、⑤50、⑧50、⑧131(上濁 A)、固⑤10 ベム、⑤44 ベン、⑤209、⑧110 へん、⑧41、⑧107 ベン(上)、文⑧31 へん、田⑧32(上濁 A)、⑧83、⑧83A、⑧85 へん</p>		
知		展 群④30A テン、固⑧39A テン(上)、正⑧60 テン、固⑧49A テン(上)、文⑧38A テン、田⑧38A テン		
徹				徹 群③310 テツ(入軽)、正②8 テツ ^キ (入)直列反、⑥222 テツ(入)直列反、固②8(入)直列反、②9A(入)、⑥221(入軽)直列反、固②6 テツ(入)直列反、②7A(入)、⑤180 直列反、⑤180A(入軽)、⑥184 テツ(入)、⑥186 テツ ^左 (入)
澄				徹 正⑤209 直列反、⑤209A テツ(入)、嘉⑤209A(入軽)
溪	<p>愆 固⑧116A ケン、正⑧212 起虔反、⑧213A エム・ケン^左(平)、嘉⑧213A(平)、固⑧176A(平)、文⑧161(平軽)音絹、⑧161A ケン、田⑧135(平軽)起連反、⑧136A ケン(平)養 正⑦331A(平軽)養 正③176 起虔反、⑥11(平)、固③176(平軽)起虔反、固③149 ケン(平)起虔反、⑥8、⑥13、⑥39 ケン</p>			揭 正⑦331A 起列反
群				築 固⑦102A ケツ、正⑦320A ケツ(入)、⑨176、⑩122A、⑩126A ケツ、嘉⑦320A、⑩122A ケツ、固⑦268A ケツ(入)、⑨147 ケチ(入)、⑨152、⑩102A ケツ、⑩105A(入)、文⑦231A ケツ(入)
影	<p>焉 正①163、②105、②138、③11、③18、③91、⑤107、⑥46、⑥261、⑦9、⑧155、⑨21、⑨50、⑨155、⑩6、⑩48、⑩79、⑩51 於虔反、③133(平)於虔反、③200A エム(平)、⑤56 エム、嘉①162、②105、⑨21 於虔反、③200A、⑦37(平)、③60 於虔反^右、固①138 於虔反^右、②117、③16、⑦30、⑩4、⑩40(平)、③9、⑤92(平)於虔反、③15、③50(平軽)、③77、③113 於虔反、③169A エン(平)、⑤49 エン、田⑧99 於虔反</p>			
34	仙(合甲)	獮(合甲)	線(合甲)	薛(合甲)
見			<p>狷 正⑦111 ケン(去)音絹、固⑦111(去)音絹、固⑦92 ケン(去)音見音絹、⑦94 ケン、文⑦71 ケン(去)、⑦72、⑦73A(去)</p>	
溪				<p>缺 正⑨232(入)窺悅反、⑨233A ケン(入)、固⑨233 窺悅反、固⑨193 クエツ(入軽)窺悅反、⑨194A(入)</p>
心	宣 固⑧108A(平軽)		<p>選 正⑥293 息変反息転反</p>	

章	專(專) 正④211A セム、 ⑦41A セン、嘉⑦ 41A(平)、文⑦16A セン、 甲④119A(平) 韻 群302A セン(平軽)、 444(平)、韻⑧80、⑧81、 ⑧83、⑧90、⑧100 セン (平)、⑧84A セン、正① 180A セム(平)音専、⑧139 セン・音専、嘉①179A セン (平軽)音専、⑧139(平) 音専、建①152 音専、⑧114 セン ^左 ・音専、⑧115、⑧ 119、⑧132 セン、文⑧102 セン(平軽 ^合)、⑧103 セン (上)、⑧104A(上)、甲⑧88 セン ^左 (平軽)音専、⑧ 89(平 ^合 ・上)、⑧89A(上)、 ⑧114 セン			祝 正③83 セツ(入)、嘉 ③83A セツ(入軽)、建③70 セツ(入軽)章悦反、③71A セツ
昌	川 嘉②24A(平) 穿 韻⑧56A セン(平)、正 ③111 セム(平)音川、④ 100A セム、⑧94A セン (平)、嘉③110A(平)音川、 ④100A セン(平)、建③ 94A セン(平)音川、④83A セム(平)、⑧76A セン(平)、 ⑨66 セン ^合 (平)音川、文 ⑧65A セン、甲④51A、⑧ 59A セン(平)			
書				説 正①21(入軽)、嘉① 17、①26、①26、⑦87A(入 軽)、①29、②53、②54(入)、 建①15、①19、①22、①22、 ①25 セツ、①18 セツ・セ ツ、②44 ツ、②45 セツ(入 軽)、③152A(入軽)、③ 219A 始銳反、甲⑧105A セツ
羊	捐 正⑤94A 悦全反、建 ③80A 悦全反 縁 正⑤182A 悦絹反、嘉 ⑤182A 悦絹反			悦 正①38、⑦86、⑦130 説音悦、①40A エツ、⑦ 4A 音悦、⑨30 説音悦 ^合 説 正③23、③193、③ 256、⑤113、⑥14、⑩140 音悦、嘉①39A エツ(入)、 ③23、⑥14、⑨30 音悦、 ⑨102A 音悦 ^合 、建①32、 ③216、⑤97、⑦3A、⑦108 音悦、①44A 音逸、③ 163(入軽)音悦、⑥11(入) 音悦、⑦71 音悦 ^右
来	攀 正③6A レン(平軽)力 専反、嘉③6A レン(平軽) 力専反、建③4A レン			
34	仙(合乙)	獮(合乙)	線(合乙)	薛(合乙)
知				轅 正⑨190 張劣反、⑨ 191A テツ(入)、嘉⑨191 張 劣反、⑨192A(入軽)、建⑨ 159 張劣反、⑨159A テフ (入)
澄	伝(傳) 正①17、①55、⑤ 30A、⑦352A、⑨86A、⑩ 44 直専反、建①5、⑤26A 直専反、①46 直専反 ^右 (→ 去声)		伝(傳) 正③138A(去)、 嘉①4、③138A(去)(→平 声)	
見		卷 正⑧36 眷勉反、文⑧ 19 眷勉反、甲⑧23 眷勉反		
群	權(權) 群⑤44、 545A(平)、正⑤140A ケ ム、⑨227、⑩135A(平)、 ⑩134 クエン(平)、嘉⑤ 140A、⑨228 ケン(平)、⑩ 134、⑩135A(平)、建⑤ 121A 音玄、⑤125A、⑨ 190A、⑩113A(平)、⑨189 ケン(平)音券 ^右 、⑩112 ク エン(平)		倦 正④6、⑥247、⑩45 其眷反、⑦5 其眷反、嘉④ 6、⑥247 其眷反、建⑦4 其 眷反	
崇		僕 韻⑦56 セン(去)、⑦ 56 セン、正⑦248 セン(去) 士免反、⑦249A(去)、嘉⑦ 247 セン(去)士免反、⑦	僕 正①153 セム(去)七 眷反、⑤247 セム、嘉① 152(去)七眷反、①152A、 ⑤248(去)、建①130 セム	

		248A(去)、 隹 ⑦207 仕免反音善、 ㇿ ⑦207A(去)、 ㇿ ⑦174(去) 撰 正 ⑥143 セム(去)土勉反、 𪛗 ⑥144(去)、 隹 ⑥119 セン(去)土勉反	(去)七眷反、⑤171A セン、⑤212 セン(去)	
于			撥 隹 ⑦74A エン(去)、 隹 ⑦47A エン(平)于眷反、 ㇿ ⑦277A エム(去)、 𪛗 ⑦47A エン(平)于眷反、 ㇿ ⑦276A エン(去)、 隹 ⑦38A エン(去)于眷反、 ㇿ ⑦231A エン(去)、 ㇿ ⑦20A エン ^左 (去)于眷反、 ㇿ ⑦197A エン(去)	
08 效撮				
35	蕭	篠	嘯	
端	彫 正 ③21 テウ(平)丁條反、③50、⑤129 丁條反、③31A(平)、 𪛗 ③21 テウ(平)丁條反、③50 丁條反、③51A テウ(平)、 隹 ③17 テウ(平)丁條反、③43A テウ(平)、⑤111 丁條反 雕 隹 ③42 丁條反	鳥 正 ④98A テウ、 隹 ⑤41、⑨161 テウ	弔 正 ⑤195 テウ(去)、 𪛗 ⑤195(去)、 隹 ⑤168 テウ 釣 正 ④96 テウ(去)音弔、④97A(去)、 𪛗 ④96(去)音弔、④97A テウ(去)、 隹 ④79 テウ・テウ ^左 、④80A(去)、 𪛗 ④49 テウ・音弔、④50A(去)	
透			覘 正 ⑥139A 吐弔反	
定	条(條) 正 ⑥173A デウ、 隹 ⑥144A(平) 調 隹 ⑦89A テウ、⑧56A(平)、 𪛗 ⑦298A テフ、 隹 ⑦249A(平)、 ㇿ ⑦215A テウ、 𪛗 ⑧58A テウ		篠 正 ⑨199 徒弔反 ^{補上} 、⑨200A ゼフ(去濁 B)、 𪛗 ⑨200 徒弔反、⑨201A テウ・セウ ^右 (去)、 隹 ⑨167A テウ(去)、⑨166 徒弔反篠	
見	徹 群 ⑤16A(平)、 正 ⑨140 古堯反古卯反、⑨140A ケウ(平)、 𪛗 ⑨141 古堯反、⑨141A ケウ(平)、 隹 ⑨116 古堯反、⑨117A ケウ(平)	繳 正 ②119 ケウ(上)古了反、 𪛗 ②119 ケウ(上)、 隹 ②100 ケウ(上)古了反		
疑	疑 正 ①15 キョウ(平濁 A)、③266(平濁 A)、 𪛗 ①14(平濁 B)、③267(平濁 A)、 隹 ①12、③225、④187 ギョウ、④186 ギョウ(平)、⑦289、⑩96 ゲウ			
心	蕭 群 ④64A セウ、④64(平)軽、 隹 ⑧100、⑧100A セウ、 正 ①16 ショウ(上)、⑧179 セウ(平)、 𪛗 ①15(平)、⑧180 セウ、 隹 ①14 セウ、⑧148 セウ(平)、 ㇿ ⑧135、⑧136A シク、 𪛗 ⑧114、⑧115A シク			
曉		曉(曉) 正 ②193A ケウ(上)、 𪛗 ②193A(上)、 隹 ②163 ケウ(上)		
来	寮 隹 ⑦94A、⑦96、⑦97A レウ、 正 ⑦307 力彫反、 𪛗 ⑦307 レフ・力彫反、 隹 ⑦256 レウ(平)、 ㇿ ⑦221 レウ ^左 (上)力彫反	了 隹 ⑧69A レウ、 正 ⑧117A レウ、 隹 ⑧95A、⑧96A(上)、 ㇿ ⑧84A リョウ(上)、 𪛗 ⑧74A リョウ(上)、⑧74A リョウ口 繚 正 ⑨231 リフ(上)音了、⑨233A(上)、 𪛗 ⑨232(上)、 隹 ⑨193 レウ(上)音了、⑨194A(上)		
36	宵(甲)	小(甲)	笑(甲)	
滂			剽 群 ⑤34 ヘウ(去) 漂 正 ⑩70A ヒフ・匹昭反、 𪛗 ⑩70A ヘウ(去)、 隹 ⑩58A(去)	
並	瓢 正 ③189 ヘウ(平)婢遙反、③190A(平)、 𪛗 ③189(平)婢遙反、③190A(平)軽、 隹 ③160 ヘウ(平)			
心		小 隹 ⑧43A、⑧43A(去)、⑧57(上)、⑧143 セウ、 正 ①95、⑥163、⑨22A、⑨28A(上)、 𪛗 ①203、⑥164、⑦9、⑨27A(上)、 隹 ①81 セウ(上)、①173 ショウ、③91(上)、⑥56 ウ、⑥114、⑥135、⑧214、⑩127 セウ、	笑 正 ⑥130A セウ(去)、 𪛗 ⑥130A(去)、 隹 ⑥108A セウ(去)	

		⑧77 セウ(上)、⑨22、⑨52(上)、 田 ④97A(上)、⑧43A ショウ		
章	昭 隹 ④93 セウ(平)、⑦188A(平)、 田 ④58(平軽)、④59A(平)(→常母)			
書		少 隹 ⑧103A セウ(去)、 正 ①45A(上)、 嘉 ①44A(上)、 隹 ①38A(上)、⑧154A(去)、 文 ⑧140A(去)、 田 ⑧119A(去)(→去声)	少 田 ③129、④148A、⑤37、⑤52、⑦208A、⑧208A、⑧218、⑨235 詩照反、⑨219(去)詩照反、 嘉 ④148A、⑦166A、⑦207 詩照反、⑤108A(上)、⑨220(去)詩照反、 隹 ③109 セウ・詩照反、④124A、⑦139A、⑦173A、⑨196(去)、⑤32、⑤93A 詩照反、⑤45、⑨182 セウ(去)、⑨186 セウ、 田 ④81A(去)詩照反、④102A 詩照反、⑧139(去)(→上声)	
常	昭 △ 正 ②50A 常遙反、 嘉 ②50A 常遙反、 隹 ②42A(平)(→章母) 韶 群 ④26(平)、 隹 ⑧34、⑧34A セウ、 嘉 ②130(平)、④44 時召反、 正 ②130 セウ(平)常遙反、④44 時召反、⑧51 セウ、 嘉 ②130(平)、④44 時召反、 隹 ②110 セウ(平)常遙反、④36 セウ(平)時昭反、⑧42 セウ(平)、 文 ③32(平)、 田 ④20 セウ(平軽)時昭反、④21A ショウ、⑧33(平)		召 群 ⑦279A(去)、 隹 ⑦42(去)、⑦45A セウ(去)、⑦54A セウ、 田 ④233A セウ・時照反、⑦227 詩照反、 嘉 ④233A 時照反、⑦226 詩照反、 隹 ④194A セウ・時照反、⑦189 セウ、 文 ⑦158(去) 邵 正 ⑨69 セウ・稱照反、 隹 ⑨59 ショウ・音少、⑨58 セウ、⑨59A(去)	
影	要 隹 ⑦36 エウ(平)、⑦38A エウ(平軽)、 正 ⑦217(平)一遙反、 嘉 ⑦215 一遙反、 隹 ⑦181 ヨウ(平)、⑦185A(平)、 文 ⑦151(平軽)一遙反、⑦154A(平軽)(→去声)		要 隹 ⑦28(平・去)、 正 ⑦72A ヨフ(去)、⑦221A(去)、 嘉 ⑦72A、⑦205、⑦220A(去)、 隹 ⑦59A(去)、⑦172 ヨウ(去)(→平声)	
羊	搖(搖) 正 ⑨235 エフ、 隹 ⑨196A ヨウ 陶 群 ②278A、336 エウ(平)、 正 ④231A エウ・音遙、⑥293 エウ、 嘉 ④231A エフ・音遙、⑥293 エウ・音遙、⑥296A ヨウ、 隹 ④193A(平)音遙、⑥244 ヨウ・音遙			
日		擾 正 ⑨28 セウ(上濁 A)而小反、 嘉 ⑨28(上濁 A)而小反、 隹 ⑨23 セウ・セウ(去濁 B)而小反		
36	宵(乙)	小(乙)	笑(乙)	
明			廟(廟) 隹 ⑦60 ヘウ、 正 ②50A(去濁 A)、 嘉 ②7A、②9A、②70、③16A(去濁 A)、②83A(去濁 B)、 隹 ②42A、②42A、②58A(去)、②58 ヒヤウ(去)、②60 ヒヤウ、⑤128、⑤203、⑥114、⑥133、⑦212 ベウ	
知	朝 正 ③210 張遙反、 嘉 ③210 張遙反、 隹 ③178 テウ・張遙反(→澄母・平声)			
徹	超 正 ⑨219A テフ、 隹 ④40A テウ(去)、⑨183A(去)			
澄	朝 隹 ⑦64、⑦97(平)、 正 ②83A 直遙反又張遙反、③41、⑨164、⑩78(平)直遙反、⑤149、⑩86 直遙反 <small>欄上</small> 、⑤150 テウ、⑥140A、⑦64、⑦223A、⑦250A、⑦259、⑦312、⑨222A 直遙反、 嘉 ②83A、⑦64A、⑩78(平)、③41、⑦64、⑨165(平)直遙反、 隹 ②70A、⑤133A、⑤169、⑤169、⑤190A、⑤195A、⑤195A、⑤200、⑤201A、⑤201A、	兆 正 ④208A(去) 趙 正 ④49A、⑦195 テウ、⑨41(去)、 隹 ⑦163、⑨34A テウ(去)、 田 ④23A テ□		

	⑥ 116A、⑥ 236、⑨ 138A(平)、③35 テウ(平)直遙反 _右 、⑤128、⑨185A(平)直遙反、⑤129、⑤189、⑤194、⑦53、⑦216、⑦260、⑨137、⑩72 テウ(平)、 文 ⑦155A、⑦176A、⑦184、⑦225(平)(→知母・平声)			
見	驕 群 1471(平)、清 ⑧114 ケウ、 正 ②142A ケフ(平)、②209A ケウ(平)、⑤15A、⑧209 ケウ、 嘉 ②142A ケウ(平)、②209A(平)、 隸 ②120A(上)、②177A ケウ(平)、⑧173 ケウ、 文 ⑧158(平軽)、 甲 ⑧133 ケウ(平軽)			
群	僑 群 242A ケウ(平)、 正 ③77A ケウ・其驕反、 嘉 ③65A ケウ(平)其驕反			
影	天 群 279A エウ、 正 ④12 エウ(平)於驕反、 嘉 ④11 エウ(平軽・上)、 隸 ④9 ヨウ(平)於驕反音腰(→上声)	天 正 ④234A エウ(上)、 嘉 ④233A エウ・於表反、 隸 ④195A ヨウ(上)於表反(→平声)		
37	肴	巧	効	
幫	包 隸 ①16 ハウ(平) 苞 清 ⑦41A ハウ、 正 ①20(平)、 嘉 ①18(平)、 隸 ⑦188A(平)		豹 正 ②78A、⑥217 ハウ、 嘉 ②78A(去)、⑥216(去)北教反、 隸 ②66A ハウ(去)、⑥181 へウ(去)	
並	匏 正 ⑨50 ハウ(平軽)薄交反、 嘉 ③190A(平軽)、⑨49 薄交反、 隸 ⑨41 ハウ(平)薄交反	匏 清 ⑦43A ハウ(去)、 嘉 ⑦227A ハフ、 隸 ⑦191A(去)		
明	茅 文 ⑦157A ハウ(平濁A)、 嘉 ⑦225A(平濁A)、 隸 ⑦188A(平)		貌 嘉 ④170(去)、 隸 ④142 ハウ(去)、⑤20A(去)、 甲 ④94、④95A ハウ	
見	交 正 ④237A カウ、⑩8A カフ、 隸 ④198A カウ、⑩6A カウ(平) 膠 正 ①19 カウ(平)、 嘉 ①8 カウ(平)、 隸 ①17 カウ(平)	絞 群 263 カウ(上)、502(上)、 正 ④154 カウ(上)古卯反 _右 、⑨60 カウ(上)交卯反、 嘉 ④154 古卯反、⑨60(上)交卯反、 隸 ④128 カウ(上)古卯反 _右 、⑨50 カウ(上)交卯反、 甲 ④84 カウ(上)古卯反、④84A カウ(上)、④84A(上)	教 清 ⑧74 カウ、⑧95A カウ(去)、 正 ④77A、⑩140A カフ、⑧128(去)、⑨72A カウ、 嘉 ①125A、②129A、③242A、⑦43A、⑧127(去)、④107A カウ、 隸 ①48A、②109A、③204A、④88A(去)、⑧104 カウ・ケウ _左 、 文 ⑧92(去)、 甲 ④55A(去)、⑧81 カフ 校 正 ④178A カウ(上)、 嘉 ④178A(上)、 隸 ④149A カウ(上)、 甲 ④99A カウ(去)(→匣母)	
溪		巧 清 ⑧57 カウ(上)、 正 ⑧95 カウ、 隸 ⑧76 カウ(上)、 文 ⑧65 カウ、 甲 ⑧59 カウ(上)、⑧60A カウ		
疑			藥(藥) 清 ⑧113 カク、 正 ③234 五教反、⑧207 カウ(去濁A)五教反、⑧207、⑧211、⑧211A カウ(去濁A)、⑨131A 五教反 _右 、 隸 ③197 音岳又五教反、⑧171、⑧172 カウ・ラク _左 、 文 ⑧156 ラク・音岳又五教反、 甲 ⑧132 音岳又五教反(→疑母・覺韻、來母・鐸韻)	
初	抄 群 516A(去)、 正 ⑨140A サウ(平)初交反、 嘉 ⑨141A サウ・初交反、 隸 ⑨117A サウ(平)初交反			
生	簞 文 ⑦69 サウ _{疑左} ・所交反、⑦69A サウ(平軽)、 正 ⑦108 サウ(平)所交反、⑦109A(平)、 嘉 ⑦108 サウ(平)所交反、⑦109A(平)、 隸 ⑦90 サウ・セウ _{疑左} (平)所交反			
曉			孝 嘉 ①43、①66、①92、①193、①193A、①198、①200A、①200A、①213A、	

			⑦103(去)、 建 ①37、①57、①117、①131、①168 カウ(去)、①41、①79、①121、①123、①124、①164、①168、④205、⑦85、⑩52 カウ、②171(去)、⑥13 カウ _左	
匣			校 正 ①3 カウ・戸教反、 嘉 ①2 カウ(去)戸敢[ママ]反、 建 ①2 カウ・戸口反(→見母)	
38	豪	皓	号	
幫			報 群 330A(去)、 清 ⑦90、⑦90、⑦90 ホウ、 正 ④178A ホウ(去)、⑨127A(去)、 嘉 ④178A、⑨128A(去)、 建 ④149A、⑦250 ホウ、⑦250 ホフ、⑨106A(去)、 甲 ④99A ホウ(去 _合)	
並	袍 正 ⑤122 ハウ(平)蒲交反、 嘉 ⑤122(平)、 建 ⑤105 ハウ(平)蒲交反	抱 建 ⑨103A ハウ(去)	暴 群 362A(去濁)、562(去)、 正 ④34(去)、④36A、④170 ホウ、⑩158 ホウ(去)、 嘉 ④34 ホフ(去)、④170(去)千万反、⑦58A ホウ(去)、⑩158(去)、 建 ④28 ボウ(去)、④142 ホウ、⑩133 ホウ(去)、 甲 ④15、④16A ホウ(去)、④94 ホウ(去濁B)、④96A ホウ	
端		禱 正 ②66 丁老反又都報反、④133 丁老反一音都報反、④136 タウ(上)、 嘉 ②66 丁老反、④134 丁老反亦都報反、④136(上)、④137A タウ、 建 ②55 丁老反、④113 タウ(上)、 甲 ④71(上)丁老反一音都報反、④72、④73、④73A タウ(上)、④74、④74A(上)		
透	滔 正 ⑨184 タウ・吐刀反、 嘉 ⑨185(平)吐刀反、 建 ⑨154 タウ(平)吐刀反、⑨155A(平) 縹 正 ③9A タウ(平)吐刀反、 嘉 ③9A クワツ・タウ _左 (平)吐刀反、 建 ③7A タウ(平)吐刀反	討 清 ⑦11、⑦13A、⑦64 タウ、 反 ⑦124、⑦125A タウ、⑦185(上)、 正 ⑦181 タウ(上)、⑦183A タフ、⑦261(上)、 嘉 ⑦180 タフ(上)、⑦260(上)、 建 ⑦151 タウ、⑦217 タウ _左	盜 建 ⑨111 タウ _左	
定	鞞 正 ⑨234 タウ(平)徒刀反、 嘉 ⑨235 タウ(平)徒刀反、 建 ⑨195 タウ(平)	道 清 ⑦70A タウ、⑧53 タウ(去)、 正 ①13、①108A、⑨7A(去)、 嘉 ①12、①105、①201A、③271A、⑧137A(去)、 建 ①11、2159、③56、③164、⑤64、⑥215、⑥216 タウ、①90 タウ(去)、①171A、③165A、③219A、⑤83A、⑨5A(去)、⑦210 タウ、⑩13 タウ・タウ _左 (去)、 甲 ③54A、⑧55 タウ	導 清 ⑧78A タウ(去)、 正 ①56 音導 _上 、①61A(去)、①126 道音導 _右 、③229A、⑦4A、⑩108 道音導、⑧137A(去)道音導、 嘉 ①60A(去)、⑦4A 音導、 建 ⑧112A(去)、 甲 ⑧86A タウ 悼 清 ⑧109A(去)、 正 ⑧199A タウ(去)、 嘉 ⑧199A タウ、 建 ⑧165A タウ(去)、 甲 ⑧127A タウ(去) 蹈 正 ⑧121 徒報反、 甲 ⑧76 徒報反	
見	皐 群 277A カウ(平)、 正 ④231A、⑥293 カウ、 嘉 ④231A カフ、⑥293 カウ _平 (平軽)、⑥295A カウ、 建 ④193A、⑥244 カウ 羔 正 ⑤187 カウ(平)、⑤195、⑥71A カウ、 嘉 ⑤187 カウ(平)、 建 ⑤161、⑤168、⑥93 カウ 高 嘉 ③114(平)、 建 ⑦279 カウ、 甲 ④126A(平)		告 正 ①117A カウ(去)、 嘉 ①116A(去)、 建 ①100A(去)、④100 コウ _左 、 甲 ④63(入軽)	
溪		考 正 ③239A カウ(上)、 嘉 ②205A(上)、③239A カウ(上)、 建 ①182A(去)		
疑			鼻 清 ⑦2 カウ(去)、⑦3A カウ、 正 ④76A カウ(去濁A)五報反、⑦165(去濁A)五教反、 嘉 ④75A カウ(去濁A)五報反、⑦164(上濁A)五教反、⑦165A カウ、	

			<p>建④62 カウ(去)五行反五報反、⑦137 ガウ、文⑦112 カウ(去濁 A)五報反、⑦113 カウ(去)、甲④38A カウ(去濁 A)五報反</p>
精		<p>棗 止⑨114A サウ(上)、嘉⑨115A サウ(上)、建⑨95A サウ(上) 藻 止③83 音早 <small>欄上</small>、③84A サウ(上)、嘉③84A(上)、建③71A サウ(上)</p>	<p>糞 止②62 サウ(去)、②63A(上)、嘉②62 サウ(去)、建②52 サウ(去)、②53A サウ 躁 群④73 サウ(去)、清⑧117、⑧117A サウ(去)、止⑧214 サウ(去)早報反、嘉⑧214 サウ(去)、建⑧177 サウ(去)早報反、⑧177A(去)、文⑧162 サウ(去)、甲⑧136 ソウ<small>音</small>(去)、⑧136A サウ(去)</p>
清	操 止 ⑧71A サウ	草 清 ⑦10 サウ、 建 ⑦149 サウ	造 群 ②28(去)、 止 ②132 サウ(去)七報反、②155 サウ(去)七報反 <small>音</small> 、②156 サウ、 嘉 ②155(去)
從	曹 清 ⑧6A サウ、 止 ①35 サウ(平)、⑧10A サウ、 嘉 ①34、⑧10A(平)、 建 ①29 サウ	皂 止 ⑨48A サウ、 嘉 ⑨48A(上)、 建 ⑨39A サウ(去)在早反	
心			掃 止 ⑩38 サウ・素報反、⑩50A サフ、 嘉 ⑩39 サウ、 建 ⑩32 サウ(去)素報反、⑩41A(去)
影			奧 止 ②62 アウ(去)烏報反、⑥85A(去)、 嘉 ②62、②63A、⑥85A(去)、 建 ②52 アウ、⑥69A(去)
曉		好 止 ②113A(去)、⑩90 如字舊呼報反、 嘉 ②113A(去)、⑩90 如字舊呼報反、 建 ②95A(去)(→去声)	好 清 ⑦115(去)、⑧59A カウ(去)、 止 ①45、①71A、①107、①111、②111、②144、②158、③27、③73、③144、③223、④3、④37、④73、④195、④204、⑤92、⑥22、⑥258A、⑥270、⑦33、⑦125、⑦340、⑧97、⑨11、⑨55、⑩20 呼報反、④41(去)呼報反、⑨136A 呼報反 <small>欄上</small> 、 嘉 ②145A、④41(去)、④37、④72、④195、④205、⑥258A、⑥270、⑧56 呼報反、 建 ①37、①60A、③189 呼報反、①39A、①39、②93、②123A、②134、②134、③24A、③62、③123、③189、④30、④34、④34A、④60、④163、④170、⑤79、⑥18、⑥20、⑥224、⑦27、⑦284、⑧80A、⑩17(去)、①91、①94 呼報反 <small>音</small> 、③23、③62、③122、④2、⑤79(去)呼報反、 文 ③36、⑧68、⑧68A(去)、 甲 ④17、④19、⑧61 呼報反、④37、⑧36、⑧43(去)呼報反、④114(去)、⑧62A カウ(去)(→上声)
匣		昊 止 ⑨128A カウ(上)胡老反、 嘉 ⑨128A(上)胡老反、 建 ⑨106A(去)	号(號) 清 ⑦14A カウ(去)、⑧144A カウ、 止 ④237A カウ(去)、⑦185A(去)、 嘉 ②130A カウ(去)、④237A、⑦184A(去)、 建 ②109A、⑦154A、⑧216A(去)、④197A カウ(去)、④198A カウ、 甲 ⑧167A(去)
来	勞(勞) 群 ②61(去)、 止 ⑦3(平)孔如字鄭力報反、④151、⑦5A(平)、 嘉 ⑦3、⑦4A、⑦5A(平)、 建 ③197A、⑨169A(平)、④126 ラウ(平)、⑦2 ラウ、 甲 ④83 ラウ(平)(→去声) 牢 止 ⑤40 ラウ(平)輕力刀反、 嘉 ⑤40 ラウ(平)力	老 清 ⑦22A ラウ、 止 ⑨199A(上)、 嘉 ⑦31、⑨200A(上)、 建 ③108、④3、⑦24、⑦25、⑦163 ラウ、⑨167A(上)、 文 ⑦134(上)、 甲 ④4A ラウ	勞(勞) 群 ③40、341A、529、552、555(去)、 清 ⑦9 ラウ(去)、 止 ③126、⑩33、⑩150(去)、⑦176 力報反、 嘉 ②197、③126、⑩33、⑩150(去)、⑦175 力報反、 建 ③107、⑩22、⑩126 ラウ、⑥234A(平)、⑦147 ラウ(去)力報反、⑦

	刀反、 隹 ⑤35 ラウ・カ刀反		148A(去)、⑩27 ラウ(平)、 文 ⑦121A(去)(→平声)	
09 果撮				
39	歌	哥	箇	
端	多 清 ⑧111 タ、 正 ④177 タ(平)、 嘉 ④177(平)、⑦51A(平軽)、 隹 ④148、⑤33 タ、 甲 ④98 タ(平軽)			
透	他 清 ⑧138 タ、 隹 ③80 タ(平)、⑤191、⑧207、⑩52、⑩80 タ		拖 正 ⑤233 徒我反一音勅佐反 <small>欄上</small>	
定	𪛗 群 409 タ、 清 ⑦60 タ(平)、 正 ③210 タ(平)徒多反、⑦254 タ(平)徒何反、 嘉 ③210(平)徒多反、⑦253(平)徒何反、 隹 ③177 タ・徒多反、⑦212 タ(平)徒可反音駄、 文 ⑦179 タ <small>左(平)</small>			
泥	𪛗 正 ⑤220 乃多反、⑤221A タ(平濁 A)、 嘉 ⑤220 乃多反、⑤221A タ(平濁 A)、 隹 ⑤189 乃多反、⑤190A タ(平)			
見	歌 隹 ⑨16 カ、 甲 ④65(平)			
溪		可 正 ①110、①203、⑨113(上)、 嘉 ①202、⑦6A、⑦54(上)、 隹 ①93、①172、②145、⑨94、⑨191 カ(上)、③85A、③118、⑥202A、⑩34A(上)、③86、③117、③119、④76、④77、⑥32、⑥89、⑦45、⑦104、⑦222、⑦270、⑩30、⑩32 カ、⑩3 カ <small>左(上)</small> 、⑩8 カ <small>左</small> 、 文 ⑦26、⑦81、 甲 ④47 カ、④48 カ <small>右</small>		
疑		我 正 ②41A、③57A カ、④7A カ(上濁 A)、 嘉 ②41A、④7A(上濁 A)、②94、⑤30A(去濁 A)、 隹 ②34A、⑤26A(上)、②79A、⑥9、⑨101 カ	𪛗 清 ⑧64A カ、 正 ⑧107A カ(去濁 A)、 嘉 ⑧105A(去濁 A)我作[ママ]反、 隹 ⑧86A(去)、 文 ⑧75A(去)、 甲 ④26A(去濁 A)、⑧67A カ(去濁 A)我佐反	
清	𪛗 正 ①113 サ(上)七多反、⑥301A 七何反、⑨66A サ・七何反、 嘉 ①112 サ(平)七多反、⑥301A 七何反、 隹 ①96 サ(平)七多反右、⑨54A 七河反			
影	阿 清 ⑧58A ア(平)、 嘉 ①170A(平)、 隹 ③79A(平)、 甲 ⑧61A ア			
匣	何 清 ⑦95A、⑧41A、⑧41 カ、 正 ①36(平)、⑤29A カ、 嘉 ①35、①36、①136A(平)、 隹 ①30 カ、①116A カ(平)、⑤26A、⑤26A、⑥185A(平)、⑧52 カ <small>左</small> 、 文 ⑧42(平濁 A)、 甲 ⑧41A カ(平)、⑧41A カ河 清 ⑦40A、⑧134A カ、 正 ⑨233(平)、 嘉 ④35 カ(平)、⑨234(平軽)、 隹 ④28 ガ、⑤41 カ、⑨195 カ(平)、 甲 ④15 カ	荷 清 ⑦102A カ(平)、 正 ⑦321A カ(平)胡我反、⑨199 何可反又音何 <small>欄上</small> 、⑦320(平)、 隹 ⑦268A(平)、⑨166 河可反又音何、 文 ⑦236 故[ママ]我反又音河		
来	羅 正 ④98A ラ、 隹 ④81A ラ(平)、 甲 ④50A ラ(平)			
40	戈(直合)	果(直合)	過(直合)	
幫			播 正 ⑨234 ハ(去)波佐反、 嘉 ⑨235 ハ(去)彼佐反、 隹 ⑨195 ハ(去)波佐反、⑨196A(去)、 文 ⑦115A(去)	
滂		𪛗 正 ①8 破可反、 嘉 ①7 破可反、 隹 ①6 破可反		
明	磨 正 ①113 ハ(平濁 A)末			

	多反、⑥20A 音摩、⑨46 末多反、 隹 ①96 バ(平濁 A)			
定		塿 止 ③248A 徒果反	惰 止 ⑤100 徒臥反、 隹 ⑤86 徒臥反	
見	戈 群 463 クワ(平)、 清 ⑧99 クワ(平軽)、⑧99A クワ、 匣 ⑧177 クワ(平)、⑧178A クワ、 群 ⑧147 クワ(平)、 匣 ⑧134 クワ、 匣 ⑧113 クワ、⑧114A クワ(平) 過 清 ⑦55A(平)、 隹 ⑦205A(平)(→去声)	果 清 ⑦109、⑦110A クワ、 止 ③170、⑦332(上)、⑦138A クワ(上)、 羸 ③170、⑦332(上)、⑦137A クハ、 隹 ③144、⑦277 クワ(上)、⑦114A、⑨115(上)、 匣 ⑦91A、240(上)	過 清 ⑧60、⑧116A クワ(去)、 止 ①182A、⑧102、⑧213A(去)、 羸 ①181A、⑧101(去)、⑦9 クワ(去)、 隹 ①154A、②144A、④53A、⑧82、⑩105A(去)、⑦7 クワ、 匣 ⑧64(去)、⑧136A クワ(→平声)	
溪	科 止 ②80 苦禾反、 羸 ②67 苦禾反			
從			坐 清 ⑧76 サ(去)、⑧77A サ、 止 ⑥120 才臥反、⑧133(去)、 羸 ⑥120 才臥反、⑧133(去)、 隹 ⑤172 サ(去)在臥反、⑥99 サ、⑦230 サ _左 、⑧109 サ(去)、⑧110A(去)、 匣 ⑧84 サ(去)才臥反、⑧85A サ・才臥反	
曉		火 清 ⑧70、⑧70(上)、 隹 ⑧97、⑧98(上)	貨 止 ⑥75 クワ(去)、⑥77A クワ、⑨3(去)、 羸 ⑥75(去)、 隹 ⑥44A、⑨2A(去)、⑥61、⑨2 クワ(去)	
匣	和 群 197、199(平)、 清 ⑧95(平)、 止 ①94、①96、①96、①98、⑦122(平)、④12A クワ、⑤4(去)、 羸 ①93、②76A、③263A、④12A、⑦121、⑦122、⑦122A(平)、⑤4A(去)、 隹 ①80、①82、①82、⑦101、⑧140 クワ(平)、①83A、⑤3A(平)、⑦102 クワ、 匣 ⑧128(平)、 匣 ⑧108 クワ(平)、⑧109A クワ(→去声)	禍 清 ⑧41A クワ(去)、 止 ②209A、⑥202A(去)、⑧65A クハ、 羸 ②209A(去)、 隹 ②177A、⑧53A(去)、 匣 ⑧43A(去)、 匣 ⑧42A クワ(去)	和 止 ④123(去)戸臥反、 羸 ④124(去)戸臥反、 隹 ④103 クワ・ワ _左 (去)戸臥反、④103A(去)、 匣 ④65(去)戸臥反(→平声)	
10 仮撰				
41	麻(直開)	馬(直開)	禡(直開)	
幫			霸 清 ⑦49 ハ、 止 ⑦237 ハ(去)、 羸 ⑦236 ハ(去)、 隹 ⑦198 ハ(去)	
明	麻 止 ⑤11 ハ(平濁 A)、 羸 ⑤11(平濁 A)、 隹 ⑤9 バ	馬 止 ①22、①39A(上濁 A)、 羸 ①21、①34、①146(上濁 A)、 隹 ①19、①30、①125、③105、④95、④99、⑤205、⑥152、⑥156 バ		
見	加 止 ③62A(平)、 羸 ③62(平) 家 止 ①30 カ(平)、 羸 ①29、②13A(平)、 隹 ①25、②6、②9、⑩75 カ、⑨83 カ(平)、⑩89 カ・カ _左	賈 清 ⑦30(上)、⑦31、⑦60 カ、 止 ②61 カ(上)、 羸 ②61、②64A、⑦253(上)、 隹 ②51、⑦174 カ(上)、⑦212 カ、 匣 ⑦144 カ(上)(→去声)	嫁 羸 ②106A(去)、 隹 ②89A(去) 稼 清 ⑦4、⑦5A カ(去)、 止 ⑦29 カ(去)音嫁、⑦168(去)、 羸 ⑦29 カ(去)、⑦31A、⑦37、⑦167(去)、 隹 ⑦24、⑦31、⑦140 カ(去)、 匣 ⑦7(去)音嫁、⑦13(去) 賈 隹 ⑤66 音嫁(→上声) 駕 止 ⑤235 カ、 隹 ⑤202 カ(去)、⑤203A(去)	
疑	牙 清 ⑦43 カ(平)、 羸 ⑦227A カ、 隹 ⑦191A(平)、 匣 ⑦159A カア(平) 芽 止 ⑦226A(平濁 A)	雅 止 ④65A カ、 羸 ②78A(上濁 B)、 隹 ⑤73 カ、⑨82 カ(上)、⑨83A(上)、 匣 ⑧34A(平軽)、 匣 ④32A カ(去)		
莊			詐 清 ⑦39 サ(去)、 止 ⑤67 側嫁反、⑦223A ソ(去)、 羸 ⑤68 側嫁反、⑦221A サ(去)、 隹 ⑤58 側嫁反、⑦186 サ(去)、⑨80(去)、 匣 ⑦155A(去)	
影			𠂔(亞) 止 ⑨230 ア(去)於嫁反、⑨231A(去)、 羸 ⑨231(去)於嫁反、⑨232A(去)、 隹 ⑨192 ア(去)於嫁反	
匣		下 清 ⑧38 カ、 羸 ②81A、③75A、⑦87A(去)、③73 カ(去)、 隹 ②46、③62、④113、	下 清 ⑦71 カ、 止 ③248A カ、⑥271 遐嫁反、 羸 ③248A(上)、③253A(去)、 隹	

		④192、④200、⑦254、⑧48、⑨14、⑨114、⑨128、⑨182、⑨185、⑩60カ、②68A、②102A(去)、④185カ(去)(→去声) 夏 𠄎424(去)、𠄎72A、⑦3A、⑧31カ、𠄎15(上)戸雅反、①70カ(去)戸雅反、①208戸雅反、②94(去)、𠄎14、②21、②42、②94(去)、①69カ、①207(上・去)戸雅反、𠄎14カ(上)戸雅反、①59カ・戸雅反 _右 、①177カ(去)戸雅反、②17、②35、⑥10、⑨204、⑩6、⑩7カ、②79、⑧39カ(去)(→去声)	⑥225(去)(→上声) 夏 𠄎847(上)、𠄎830(去)(→上声) 暇 𠄎7288 行訝反、𠄎7288 行訝反	
41	麻(拗開)	馬(拗開)	禡(拗開)	
精			借 𠄎56A(去)、𠄎75A(去)、𠄎63(去)子夜反、𠄎57(去)子夜反	
清		且 𠄎4167A(去)		
邪	邪 𠄎334A、509(平)、𠄎1125、⑥73A、⑨98A 似嗟反、①189A(平)似嗟反、⑨90A 似嗟反 _{欄上} 、𠄎188A(平)似嗟反、⑥73A、⑨99A 似嗟反、𠄎1106 似嗟反、①161A(平)似嗟反 _右 、⑥59A シヤ、⑨75A シヤ(平)		謝 𠄎95A シヤ、𠄎4A(去)	
章		者 𠄎747、⑧76A、⑧118A シヤ、𠄎139A(上)、𠄎38A、①104A、②60A、②124、③58、③234、⑦60、⑦112、⑦113(上)、𠄎33A(上)、②104、③108、③109、③197、③199、③208、③227、⑤28、⑤44、⑤187、⑤209、⑤209、⑥29、⑥97、⑥122、⑦228、⑦267、⑦295、⑧6 シヤ、⑤78 シヤ _左 、⑨173 ジヤ、𠄎138A シヤ	祐 𠄎9115A シヤ(去)章夜反、𠄎9116A シヤ(去)章夜反、𠄎95A(去)章夜反	
昌	車 𠄎217 シヤ(平)、𠄎1204、①206A シヤ、𠄎158A シヤ(平)、①203 シヤ(平軽)、①205A、⑤240 シヤ、𠄎1173、③104、⑤205 シヤ			
船			射 𠄎72(平軽)、𠄎498A シヤ(去)、𠄎498A、⑤9(去)、𠄎481A シヤ(去)、⑤8 シヤ、𠄎450A シヤ(去)(→船母・昔韻)	
書		舍 𠄎892(上)、𠄎164、⑤91、⑥142、⑦11、⑧164、⑨186A 音捨、④30 音赦一音捨、𠄎711(上)、⑧163 音捨、𠄎3139、④24 音捨、⑥118、⑧135、𠄎104 音捨		
常		社 𠄎293(去)、②96A(上)、𠄎278、⑧122 シヤ、⑥95 シヤ(去)、𠄎94 シヤ		
羊	瑯(瑯 [*]) 𠄎19ヤ(平)以嗟反也差反、𠄎18(平)以嗟反、𠄎17 ヤ・以嗟反音耶 耶 𠄎211A ヤ	也 𠄎214A、⑨214A ヤ、𠄎114 ヤ 冶 𠄎33(上)音也、𠄎33ヤ(上)音也、𠄎31 ヤ、③2 ヤ・音也 野 𠄎710 ヤ ¹⁵⁰ 、𠄎216、⑦17(上)、𠄎217、⑦17、⑦18A(上)、𠄎183 ヤ(上)、⑥2、⑦14 ヤ	夜 𠄎578 ヤ(去)、⑨204 ヤ	
41	麻(直合)	馬(直合)	禡(直合)	

¹⁵⁰ 欄上に「野ヤニ」が補写されている。

見	瓜 正⑤215 クワ・古華反、⑨50 クワ(平)古華反、 嘉⑤216(平)古華反、⑨49 故花反、建⑤185 クワ・ワ・ 古華反、⑨41 クワ・故花 反 驕 正⑨244 クワ(平)古 花反、嘉⑨246(平)古花 反、建⑨204 クワ	寡 清⑧143、⑧144A ク ワ、正④177、⑩152 クワ、 嘉④177(去)、⑧255(上)、 建④148、⑧214、⑩127 ク ワ、正④98 クワ(上)、⑧ 165、⑧167A クワ		
曉	化 嘉①80A、③241A、⑦ 35A(去)、建①68A、④ 131A(去)、正④39A クワ、 ④86A クワ(去)			
匣	華 正③149(平軽)、嘉③ 42A、③149(平)、建③ 126(平)、④109、⑥76 ク ワ、正④69 クワ(→去声)		華 文⑧186A 又音化、正 ⑧155A(去)又云化(→平 声)	
1 1 宕撮				
42	陽(開)	養(開)	漾(開)	藥(開)
知	張 正①15、①16、①18、 ①19、⑨218、⑩55(平)、 嘉①14(上)、①17、⑩ 55(平)、建①12、①14、① 152、⑩45 チヤウ、①13(平 軽)、⑨182 チヤウ(平)	長 正⑥120、⑦349、⑨ 210(上)丁丈反、嘉⑥121、 ⑨211(上)丁丈反、⑦349 丁 丈反、建⑥100 チヤウ、⑥ 101A(上)、⑦291 チヤウ (上)、⑨176(上)丁丈反、正 ⑦118(上)(→澄母・平声、 澄母・去声)		
徹			啓 正②51A チロウ(去) 敕亮反、嘉②51A チヤウ (去)勅亮反、建②42A チヤ ウ	
澄	長 正③3、④142(平)、嘉 ③3、③5A、④142(平)、建 ③1、③2、④118、⑥43、 ⑨147、⑨149 チヤウ、文 ⑦231A(平)、正④76(平)、 ④124A(上)(→知母・上声、 澄母・去声)	丈 清⑦102A チヤウ、正 ⑦321A、⑨199 チヤウ、建 ⑨166 チヤウ、⑨166A、⑨ 168(去) 杖 正⑤218 チヤウ、嘉 ⑤218(去)、建⑤187 チヤ ウ・チヨウ(→去声)	杖 △ 正④17A チヤウ (去)直亮反、嘉④17A(去) 直亮反、建④13A(去)直亮 反(→上声) 長 正⑤190 直亮反、建 ③70A(去)、⑤164(去)直亮 反(→澄母・平声、知母・ 上声)	著 正④98A 直略反
見	儻 正②157A 居良反、嘉 ②157A 居良反、建②133A 居良反	纒 建⑦30 キヤウ(上)、 文⑦13 キヤウ(上)、⑦ 14A(上) 襪 正⑦37 キヤウ(上)居 又[ママ]反、嘉⑦37、⑦ 39A(上)		繳 正④98A シヤク(入)、 嘉④98A 章略反、④ 98A(入軽)、建④81A シヤ ク(入軽)、正④50 章略反、 ④50A シヤク(入軽) 脚 清⑦120A キク(入 軽)、建⑦293A キヤク (入)、文⑦255A キヤク
群	強 正⑥51A キヤウ、⑨ 19A 其丈反、嘉⑥51A キ ヤウ、⑨19A 其丈反、建 ⑥41(平)、正④104A キヤ ウ(平軽)			
疑		仰 清⑧70A(平)		虐 正⑩158 キヤク(入軽 A)、嘉⑩158 キヤク(入軽 濁A)、建⑩132 キヤク
精	將(將) 正⑤35(平)、嘉 ⑤35(平)、⑦14A(去)、建 ⑤30 シヤウ(→去声)		將(將) 正①6(平)、④ 34A(去)子匠反、⑤25 息浪 反、⑤120A(去)、嘉① 5(平)、④34A、⑤120A(去) 子匠反、建①4 シヤウ、④ 27A、⑤103A(去)子匠反、 正④15A 子匠反(→平声)	爵 清⑧109A キヤク、正 ⑧197A(入)、嘉②112A、 ③244A シヤク(入)、② 114A(入)、建⑨125A(入)、 文⑧149A シヤク、正⑧ 126A(入)
清	踰 正④172 サウ(平)七 良反、嘉④172(平軽)七良 反、建④144 シヤウ・サウ 合聲・七郎反、正④95A サ ウ(平)七良反			
從	牆(牆) 正④64(平)、清⑧ 100 シヤウ(平)、⑧100A、 ⑧101A シヤウ、正⑧179 シヤウ(平)、⑩89(平)、嘉 ⑧180 シヤウ、⑩89(平)、 建⑧148 シヤウ(平)、⑩74 シヤウ、文⑧136A シヤ ウ、正⑧115 シヤウ(平)、 ⑧115A シヤウ			
心	相 正⑧81(去)(→去声) 襄 清⑦36A、⑧108A シ ヤウ、正⑧196A、⑨236 シ ヤウ、嘉⑦217A シヤウ、		相 正④449(去)、清⑦2A、 ⑦48、⑧78A シヤウ(去)、 ⑧78、⑧82A、⑧88、⑧ 88A(去)、正①6 シヤウ	

	建⑨197 シヤウ(平)音章、 ⑨198A(平)、文⑦159A シヤウ、 田⑧125A シヤウ		(去)息亮反、②10、⑦165A、⑧137 息亮反、⑥138、⑦236、⑧156(去)息亮反、⑧137A(去)、嘉①15、⑦235、⑧156(去)息亮反、②10、⑦164A 息亮反、⑥138、⑧137A(去)、建①15 シヤウ(去)息亮反、⑥115、⑦197 シヤウ(去)、⑥117A、⑥137A、⑦138A、⑧111、⑧118(去)、⑥136、⑧128 シヤウ、文⑧100、⑧100A(去)、⑧116(去)息亮反、田⑧86(去)息亮反、⑧86A シヤウ(去)、⑧92A、⑧111(去)、⑧99 サウ(去)息亮反(→平声)	
邪	翔 正⑤254A シヤウ(平)、嘉⑤255A シヤウ(平)、建⑤218A シヤウ(平)			
莊	莊(莊) 清⑦24 シヤウ、⑧47A サウ(平軽)、正①193A、⑥86 サウ(平)、④173A、⑩62 サウ、⑦201(平)、嘉①192A サウ(平)、④144A サウ、⑥86(平)、⑦200 サフ(平)、建①164A、⑥70 サウ(平)、⑦167、⑩51 サウ、文⑦139 サウ、田④96A、⑧49A サウ		壯(壯) 文⑧166(去)	
初			創 清⑦10 サウ、正⑦179(去)初向反 ^{欄上} 、嘉⑦178 サフ(去)、建⑦149 サウ(去)、文⑦122 サウ(去)	
章	璋 正⑨74A(平)、建⑨61A(平) 章 正①18(平)、①15、①20、124(平軽)、嘉①17(上)、①14、②35A、②48A、③65、③65A(平)、②69A(平軽)、建①6□ヤウ、①12、①16、①20、③55、③92、④191、⑥114 シヤウ、②29A、⑨194A(平)	掌 清⑦13A シヤウ(上)、建⑦183A(上)、文⑦126A(上)		
昌	昌 正①10、①17(平)、嘉①19、①16(平)、建①18、①14 シヤウ、田④82 シヤウ(平軽)			絳 清⑦20、⑦21A、⑦22A、⑦23A、⑦24A シヤク、嘉⑦194 シヤク・昌略反、⑦200A シヤク(入軽)、建⑦162 シヤク(入)、⑦167 シヤク、⑦195 シヤク・昌略反、⑦201A シヤク(入)、文⑦134 シヤク(入軽)、⑦138、⑦138A(入軽)
書	傷 建④133A シヤウ(平) 商 正①71A、②40(平)、⑥195(平軽)、嘉①70A(平)、②40、⑥194(平軽)、建①59A(平)、②33、⑥162 シヤウ(平)、⑥51、⑥51 シヤウ	賞 嘉⑥256 シヤウ、建⑥213 シヤウ	尙 正①3 シヤウ(去)舒尙反、嘉①2 キヤウ・シヤウ(去)舒尙反、建①2 シヤウ・舒尙反(→曉母)	
常	常 正①26、①34、①210A シヤウ、③262A シヤウ(平)、嘉①25、①33、①209A、③263A、⑦68A(平)、②200A(平軽)、建①21、①28 シヤウ、②169A(平) 尙 正①35(平)、嘉①34(平・去)、建①29 シヤウ・上羊反、⑥219(平) 裳 田⑤51 シヤウ、建⑤44 シヤウ、⑤167 シヤウ(平)	上 正③226、④20、⑤174 時掌反、嘉④19(上)、建③191(去)時掌反、③193A、④17A(上)、④16(去)、⑤150 時掌反、田④7 時掌反(→去声)	上 清⑦71 シヤウ、嘉②81A(去)、建②96A、③71A(去)(→上声)	
影		鞅 正④49A ヤウ(上)、嘉④49A ワウ・アウ(上)於丈反、建④40A ヤウ(上)、田④23A(上)於丈反		約 清⑦29A ヤク、正②208、③254、⑥168A ヤク、⑤59 ヤク(入)、嘉②208 ヤク(入)、②209A、③254、⑤59(入)、⑦207A ヤク、建②119、③215、⑤51、⑥

				207 ヤク、②176 ヤク(入)	
曉	郷 正①34、⑤147 キヤウ、④103 ケイ・キヤウ _左 、⑦124(平軽)、⑨81 如字又許亮反、⑨83A(平)、 嘉 ①33 キヤウ(平軽)、⑦103、⑦123(平軽)、⑦124、⑨82A(平)、 隸 ①28、③136、⑤126、⑤127、⑤187、⑤189、⑦86 キヤウ、④85 キヤウ・キョウ _左 、⑦103 キヤウ(平)、⑨69A(平)、 文 ⑦80 キヤウ	享 正②27A 許丈反、②83A キヤウ、⑤178 キヤウ(上)許丈反、 嘉 ②27A 許丈反、②83A(上)、⑤178(上)計丈反、 隸 ②22 許丈反、②70A、⑤153A(上)、⑤153 キヤウ(上)許丈反	向 正⑨73A 許亮反、⑨83A(去)、 嘉 ⑨82A(去)、 隸 ⑨69A(去)(→書母) 嚮 正⑥289 許亮反、 嘉 ⑥289 許亮反		
羊	洋 正④212 ヤウ・音羊、 嘉 ④212 音羊、 隸 ④177 ヤウ _左 ・音羊、 甲 ④119 ヤウ(平)音羊、④121A ヤウ羊 正②82 ヤウ、 隸 ②69 ヤウ陽 清⑦40A ヤウ、⑧106A(平軽)、正⑨3(平)、 隸 ⑧201、⑨196、⑩55 ヤウ、⑨2 ヤウ(平)、 甲 ⑧121A、⑧122A ヤウ	養 正①65A(上)、 嘉 ①64A(上)(→去声)	養 正①147 羊尚反、 隸 ①124 羊尚反(→上声)		
来	梁 嘉②73A(平)、 隸 ⑤219 リヤウ、 甲 ④34A(平)糧 正⑧8 音良 _上 、 隸 ⑧6 音良良 清⑦89A、⑧56A リヤウ、 正 ①87(平)、⑧93A リヤウ、 嘉 ①86(平)、 隸 ①73 リヤウ(平)、 甲 ⑧58 リヤウ、⑧96A(平)	尙(兩) 嘉②110(上)、 隸 ②93 リヤウ	量 群⑤44、⑤45A(平)、 正 ②103A、⑤208、⑩134 音亮、⑩100(去)音亮、⑩101A、⑩135A(去)、 嘉 ②102、⑩100、⑩101A、⑩135A(去)、⑤208 音亮、 隸 ②86A、⑩84A、⑩112、⑩113A(去)、⑤179 音亮、⑩83 リヤウ(去)音亮諒 清⑦111A、⑧72A、⑧79A リヤウ(去)、 正 ⑦334 音亮、⑦336A、⑧203(去)、⑧125A リヤウ(上)、⑩65A リヤウ(去)、 嘉 ⑦334 音亮、⑦336A リヤフ(去)、⑧125A(上)、⑧203、⑩65A(去)、 隸 ⑦281A、⑧102A(去)、⑩54A リヤウ、 文 ⑦171 音亮、⑦243A(去)、⑧90A リヤウ	略 正③141A、③217 リヤク	
日	弱 清⑦49、⑧104A シヤク、 正 ⑦238A、⑧187A シヤク、 嘉 ⑦237A シヤク(入濁A)、 隸 ⑦199A(入)、 甲 ⑧119A シヤク攘 正⑦92 如羊反、⑦93A シヤフ(平濁A)、 隸 ⑦92 如羊反、⑦93A(平濁A)、 隸 ⑦77 如羊反、⑦77A(平)、 文 ⑦56 如羊反、⑦57A シヤウ(平濁)	壤(壤) 清⑦117 シヤウ(上)、 正 ⑦347(上濁A)而丈反、 嘉 ⑦347(上濁A)而丈反、 隸 ⑦290 ジヤウ(上)、 文 ⑦252(上)而丈反	讓(讓) 正①87、②182(去濁A)、②30、③159A シヤウ、 嘉 ①86、②30(去濁A)、⑥158A(平濁A)、 隸 ①73、②154、②155 ジヤウ(去)、②24 ジヤウ(去濁)、③135、⑥131A(去)	若 正①44A(入濁A)、 嘉 ①43A、⑥220 シヤク、③12A(入濁A)、 隸 ⑥183 シヤク	
42	陽(合)	養(合)	漾(合)	藥(合)	
非	方 清⑦81、⑦81A ハウ、 正 ①59A、①61A、②200、⑨233(平)、③203A、③271A ハウ(平)、⑦286(平軽)、 嘉 ①40、①58A、②200A、②212A(平)、①60A ホフ(平)、⑦286(平軽)、 隸 ①34 ハウ、①50A、②169、②169A、③172、③229A(平)、⑥108、⑥132 ホウ、⑦30、⑦33、⑦84、⑩106 ハウ、⑦239、⑨194 ハウ(平)、 文 ⑦205 ハウ(平軽)	放 正②180 方往反、②181A ハウ(上)、 嘉 ②180 方往反、②181A(去)、 隸 ②153A(上)芳往反、②153(上)(→去声)	放 正⑨226A(去)、 嘉 ②16、⑨227A(去)、 隸 ②13 ハウ、②22 ハウ(去)、⑨188A(去)(→上声)		
並	防 清⑦35、⑦37A、⑦38A ハウ、⑦36A(平)、 正 ⑦216(平)音房、 嘉 ⑦215(平)音房、 隸 ⑦180 ハウ _左 ・音房、 文 ⑦151 音房				
微	亡 正②22A、②127A ハウ、④94 音如字一音無、 嘉 ②22A、②127A(平濁A)、 隸 ②18A、③157A(平)	罔 正①172 ハウ(上濁A)亡丈反、①173A ハウ、 嘉 ①171(上濁A)亡丈反、①172A(上濁A)、 隸 ①146 ハ	妄 正①144A 亡尚反、 隸 ①122A 亡尚反望 正①6、④233A(去濁A)、 嘉 ①5、③31A、④233A		

		ウ(上)亡丈反	(去濁 A)、 隸 ①4 バウ(去濁 A)、④194A(去)	
見				隸 ⑤157 キヤク・クワク・駒略反、 嘉 ⑤157 クヤク(入)駒略反、 隸 ⑤135 クキヤク(入)駟碧反・音鏤右、⑤142 キヤク(入)
溪	匡 止 ⑤20、⑦238A キヤウ、⑥99 キヤウ(平)、 嘉 ⑤20、⑤20A、⑥99(平)、 隸 ⑤17、⑥82 キヤウ(平)、⑤25 キョウ(平)			
群	狂 隸 ⑦102A ワウ、 止 ③108 クキヤウ、④215 キヤウ(平)求匡反、⑦111 キヤウ(平)軽、⑨62 キヤウ(平)、⑨92 キヤウ、 嘉 ④215 求匡反、⑦111、⑦112、⑨62、⑨92(平)、 隸 ③91、④179、⑦92、⑨51 キヤウ(平)、⑦93、⑨77、⑨139 キヤウ、 甲 ④121 クキヤ(平)求匡反			
影		枉 群 ③34A(上)、 止 ①188、⑥287、⑥288A、⑨157 紆往反、①189A(上)、 嘉 ①187(去)紆往反、①188A ワウ・タウ(上)、⑥287、⑨158 紆往反、 隸 ①160、⑨131 紆往反、①161A ワウ _左 (上)紆往反、⑥239A(上)		
曉		况 止 ⑤57A クワウ・キヤウ _左 、 嘉 ⑤56A 況住反、 隸 ⑤49A クキヤウ(上)況生[ママ]反		
于	王 隸 ⑦114A(平)、 止 ①9、①13、①26、①63A、⑨72A(平)、 嘉 ①8、①62A、①94、②61、③263A(平)、 隸 ①7、①8、①9、①11、①21、①80 ワウ、⑨60A(平)(→去声)	往 止 ①116、④109A(上)、③251A、⑤91A ワウ、 嘉 ①115、①116A、③251A、④109A(上)、 隸 ①115、①116A、③251A、④109A(上)、98 ワウ(上)、①100A(上)、③212A ワウ、 甲 ④57A ワウ	王 群 ③63(去)、 隸 ⑦5(去)、 止 ⑦60、⑦171A(去)于況反、⑦61A(平・去)、 嘉 ⑦60(平・去 _合)、⑦61(平・去)、⑦170A(去)于況反、 隸 ⑦49(平)、⑦50A、⑦142(去)、 文 ⑦30(去)于況反、⑦31A、⑦116A(去)(→平声)	
43	唐(開)	蕩(開)	宕(開)	鐸(開)
幫			謗 群 ⑤14A(去)、 止 ⑨137A(去)、⑩35 布浪反、 嘉 ⑨138A(去)、 隸 ⑨114A ハウ(去)	搏 甲 ④16A 音搏
明				莫 甲 ④66 ハク(入)軽濁A)、 止 ②175 武博反鄭音慕、④125 ハク(入)濁B)、 嘉 ④125 バク、 隸 ④104 バク、④104A(入)軽
端	当(當) 隸 ⑧116A(平)(→去声)	党(黨) 隸 ⑧48、⑧58A(上)、 止 ⑥277、⑧78(上)、 嘉 ①170A、②168、②169A、⑦91、⑦103、⑧77(上)、 隸 ②143、③91、③136、④96、④96、⑤126、⑦76、⑦78、⑦86、⑦293 タウ、⑤4、⑤127、⑧63 タウ(上)、⑥230A(上)、⑧79A(去)、 文 ⑦256A(去)、⑧52(上)、 甲 ④60、⑧49、⑧61A タウ(上)	当(當) 止 ①125A(去)、②171A、③148A、⑦193A、⑦256A 丁浪反、 嘉 ①124(去)下浪反、⑦192A 丁浪反、 隸 ①106A(去)丁浪反 _右 、②145A(去)、③125A 丁浪反(→平声)	
透	湯 止 ⑥294 タウ、 隸 ⑥244 タウ、⑩101A(去)、⑩103A(平)		盪 止 ④76A、⑦165 吐浪反、 嘉 ④75A、⑦164 吐浪反、 隸 ④62A、⑦137 吐浪反、 文 ⑦112 吐浪反、 甲 ④38A 吐浪反	
定	唐 隸 ④196、⑤119 タウ堂 嘉 ②11(平)、 隸 ②9 タウ、⑤144、⑥49 タウ、⑩47 タウ(平)	蕩 群 ⑤00(去)、 止 ④142(上)徒党反、④226 タウ、⑨58 タウ(去)、⑨94(去)、 嘉 ④142(上)徒党反、④226(平)、⑨57、⑨93(去)、 隸 ④118 タウ(去)徒党反、④188 タウ・トウ _左 (去)、⑨47、⑨78 タウ		度 止 ⑥77A タク(入)待洛反、⑦132A、⑧154A 待洛反、 嘉 ⑥77A(入)軽、 文 ⑦86A(入)、 甲 ⑧98A 待洛反(→定母・暮韻) 鐸 止 ②129 タク・直洛反、 嘉 ②128 タク(入)直洛反、 隸 ②108 タク(入)直洛

		(去)、⑨78A(去)、 甲 ④76(去)徒堂反		反
泥				諾 正 ④51、⑥243 タク(入濁 A)、⑥244A タク、⑨15(入濁 A)、 嘉 ④51 タク(入濁 A)、⑥243、⑨15(入濁 A)、 隸 ④42 タク ¹⁵¹⁾ 、⑥202 タク・ダク _左 (入)、⑨12 ダク(入)、 甲 ④24 タク
見	亢 清 ⑧135、⑧136A、⑧140 カウ、 正 ①84A カウ(平)音剛又苦浪反、⑧244 カウ・音剛又苦浪反、⑧253 カウ、 嘉 ①83A カウ(平)、①84A カウ、⑧244 音剛、 隸 ①71A カウ・音剛、①72A(平)、⑧203 カウ(平)音剛苦浪反 _右 、⑧210 カウ、 文 ⑧188 カウ、 甲 ⑧156 カウ・音剛又苦浪反 剛 群 ⑤03 カウ(平)、 正 ③58、⑨54A カウ、⑦137(平軽)、 嘉 ③58、⑦136 カウ(平)、③60(平)、⑥51A カウ、 隸 ③50、⑦114 カウ(平)、⑥41(平)、 文 ⑦90(平軽) 綱 正 ①210A カウ、④96(平)音剛、④97A(平)、 嘉 ④96(平)音剛、④97A(平)、 隸 ①178A(平)、④79 カウ _左 ・音剛、 甲 ④49 カウ _合 (平)音剛、④50A カウ(平)、④50A(平)			各 隸 ⑤207 苦白反羊凶反
溪	康 正 ⑦45A カウ、 嘉 ①189、①191A(平)、 隸 ①162 カウ(平)、③143、⑤192、⑥18、⑥210 カウ、⑦210 ガウ			
精	臧 清 ⑦38 サウ、 正 ③81 サウ(平)作郎反、⑤124 作郎反、⑤124A(平)、 嘉 ③81(平軽)、⑤124A(平)、⑦198 サウ(平軽)、 隸 ③68 サウ(平軽)作郎反、③69A、⑤107A(平)、⑤107 作郎反、⑦166、⑦180 サウ、⑧47 サウ(平)、 文 ⑦137(平軽)		葬 正 ⑤74A サウ	作 清 ⑦11A、⑦101、⑦102A サク、④51(入軽)、 正 ④46A、⑤19A サク、 嘉 ④3(入軽)、④46A(入)、 隸 ④2、④38A、⑦267 サク、⑦96(去) 柞 正 ⑨115A サク(入)子各反、 嘉 ⑨116A サク・子各反、 隸 ⑨96A サク _左 (入)
從	臧(藏) 正 ⑤78A サウ(去)、 嘉 ⑤78A(去)		臧(藏) 隸 ⑥44A(平)	作 清 ⑦62A サク(平)、 正 ⑦257 音作、⑦257A(入)、 嘉 ⑦256 音作、⑦257A ク(入)、 隸 ⑦215A サク(入)、 文 ⑦182 在洛反、⑦182A サク(入軽) 酢 正 ②114A サク(入)在洛反、 嘉 ②113A サク(入)、 隸 ②95A サク(入) 鑿 清 ⑧56A シヤク、 正 ③111A サク(入)在洛反、④100A サク、⑧94A サク(入軽)、 嘉 ③111A(入)在洛反、④100A サク(入)、 隸 ③94A サク(入)在洛反、④83A サク、⑧76A サク(入)、 文 ③65A サク、 甲 ④51 サク(入)、⑧59A サク(上)
心	喪 正 ⑨125 サウ(平)、⑩137 サウ(去)、 嘉 ⑩137 サウ、 隸 ①68(平)、⑨104 サウ、⑩115 サウ(平) 桑 正 ③138 サウ・子郎反、⑨115A(平)、 嘉 ③138 子郎反、 隸 ③116 サウ・子郎反、⑨95A サウ(平)		喪 清 ⑦59(去)、 正 ②126 息浦[ママ]反、②127A、⑤183A サウ、③185A サウ(去)息浪反、⑥34、⑦76、⑦253 息浪反、 嘉 ②127、③185A(去)、⑤25 息浪反、 隸 ②106(去)烏浪反、②107A サウ(去)、③157A、	

151) 「タク」の「タ」に上濁点あり。

			⑤ 22(去) 息浪反、⑤ 26A(平)、⑦63、⑦211(去)、⑦67 セン、㊦⑦49(去)、⑦178 息浪反	
影				<p>惠(惠[×]) 𠄎 319、329A、330、331、390A、513、513A、550A(入)、𠄎 ⑧ 130A アク、𠄎 ② 173、② 173、③ 113、③ 184、④ 174A、④ 198A、⑥ 199A、⑥ 282、⑦ 128A、⑧ 237A、⑨ 18A、⑨ 136、⑨ 136A、⑨ 136A、⑩ 73、⑩ 74A、⑩ 143、⑩ 157(入)、④ 56A、④ 107A、⑥ 252、⑥ 280A アク(入)、⑥ 192A アク(入軽)、⑦ 128A ヲ(入)、𠄎 ② 146(去)、② 173、② 173、④ 56A、④ 107A、④ 174A、⑦ 127A、⑦ 128A、⑨ 95A、⑨ 137、⑨ 137A、⑨ 137A、⑩ 73、⑩ 143(入)、③ 112、⑥ 192A、⑥ 199A、⑥ 251、⑥ 280A、⑥ 282、⑨ 18A、⑩ 157(入軽)、𠄎 ② 147、② 147、⑩ 120、⑩ 131 アク、③ 84A(入軽)、④ 46A、④ 89A、⑥ 233A、⑨ 116(入)、⑥ 209、⑥ 235、⑥ 235、⑨ 113、⑩ 61 アク(入)、㊦ ⑦ 84A、⑦ 84A、⑧ 182A(入)、𠄎 ④ 27A(入)、④ 56A アク、④ 111A(去) (→影母・模韻、影母・暮韻)</p>
匣	<p>行 𠄎 ③ 2A(平)、𠄎 ⑧ 4A(平) 戸剛反、𠄎 ⑧ 4A(平) 戸剛反、𠄎 ⑧ 2A(平) (→去声、匣母・庚韻開 2、匣母・映韻開 2)</p>		<p>行 𠄎 ⑥ 49(去) 胡浪反、𠄎 ⑥ 49(去) 胡浪反、𠄎 ⑥ 40 カウ(去)、⑥ 41A(去)、㊦ ⑦ 105A(去) (→平声、匣母・庚韻開 2、匣母・映韻開 2)</p>	<p>貉(貉) 𠄎 ⑤ 122 カク・戸洛反、⑤ 191 カク・戸各反、𠄎 ⑤ 191 戸各反、𠄎 ⑤ 105 カク、⑤ 165 カク・戸各反</p>
来	<p>榔 𠄎 ① 9 ラウ(平) 音郎、𠄎 ① 8 ラウ(平) 音郎、𠄎 ① 7 ラウ・音郎</p>			<p>樂(樂) 𠄎 471 ラク、𠄎 ⑦ 32、⑧ 114、⑧ 115 ラク、𠄎 ① 41 音洛^{欄上}、① 111、③ 191、③ 224、③ 237、④ 58、④ 71、⑥ 50、⑥ 76A、⑦ 78、⑦ 213、⑨ 119 音洛、② 117A カク、⑤ 85、⑤ 86A、⑨ 163(入濁 A)、⑤ 151A ラク、⑧ 209(入) 音洛、𠄎 ④ 71 音洛、⑤ 151A、⑧ 207 ラク、⑧ 209、⑨ 120 音洛、𠄎 ① 35、② 77、② 120、③ 161、③ 189、③ 201、④ 48、④ 59、⑥ 41 音洛、① 94、⑤ 130A、⑨ 99 音洛右、⑧ 172 ガク^左、⑧ 173、⑧ 175 ラク、㊦ ⑧ 148(入)、⑧ 158 音洛、⑧ 159 ラク、𠄎 ④ 28、④ 35 音洛、⑧ 133 ラク・音洛、⑧ 134 ラク (→疑母・覺韻、疑母・効韻)</p>
43	唐(合)	蕩(合)	宕(合)	鐸(合)
幫				<p>博 𠄎 ① 26(入)、⑨ 130(入濁 B)、𠄎 ① 19(入)、① 25(入軽)、⑨ 130 ハク、𠄎 ① 17、① 21 ハク、⑨ 108 バク</p>
並				<p>薄 𠄎 ⑨ 48A(入)、𠄎 ④ 205 白、⑨ 39A(入)</p>
見	<p>光 𠄎 ① 32、① 33(平)、𠄎 ① 31(平軽)、𠄎 ① 27、① 27 クワウ</p>	<p>広(廣) 𠄎 ④ 143A(上)、𠄎 ④ 189A(上)、𠄎 𠄎 356 キヤウ(去)</p>	<p>広(廣)[△] 𠄎 ④ 249A 光曠反、⑨ 178A 古曠反、𠄎 ④ 249A 光曠反、𠄎 ④ 208A、④ 208A(去)、⑨ 149A 古曠反</p>	<p>𠄎[*] ⑧ 161A クワク⇒「郭」、𠄎 ⑧ 102 クワク(入軽) 榔 𠄎 ⑥ 27A クワク・音郭、𠄎 ⑥ 27A クハク、𠄎 ⑥ 21、⑥ 24 クワク、⑥ 22 A(入) 古郭反、⑥ 23 クワク(入) 郭 𠄎 ⑧ 90A クワク、𠄎 ⑧ 133A クワク</p>
溪			<p>曠 𠄎 ④ 77A クワウ 續 𠄎 ④ 26A クワウ(去)、 清 ⑧ 33A クワウ(去)、𠄎</p>	<p>𠄎 ⑥ 217 苦郭反、⑥ 218 A クワク、𠄎 ⑥ 181(入)、⑥ 182A クワク</p>

			⑧51A クワフ(去)音曠、 嘉 ⑧51A カウ(去)音曠、 隸 ⑧42A クワウ(去)、 文 ⑧31A(去)、 甲 ⑧32A クワウ _左 (去)音曠	
曉	荒 清 ⑧115A クワ ^平 、 止 ⑧211A クワウ、 隸 ⑧175A(平)、 文 ⑧160A クワウ(平濁 A)、 甲 ⑧135A クワウ(平) 郷 群 387 キヤウ			
匣	皇 建 ⑩101 クワウ 黃 隸 ⑤162 クワウ			
1 2 梗攝				
44	庚(直開)	梗(直開)	映(直開)	陌(直開)
幫				伯 清 ⑦17、⑦94、⑧23、⑧133 ハク、 嘉 ③32(入)、 隸 ①121、③95、③116、③154、④42、④121、④122、⑥9、⑦158、⑦229、⑦256、⑧28、⑧200、⑧203、⑨181、⑨203、⑨203、⑩73 ハク、③27(入) 栢 嘉 ②95(入)、 隸 ②80、⑤110 ハク 百 止 ①59 A、①61 A(入)、 嘉 ①58A(入軽)、①122、①210、③37、⑦15A(入)、 隸 ①105、①179、③31、③134、④152、⑥187、⑥187、⑦32、⑦47、⑦159、⑦288、⑨87、⑩111 ハク、⑦282、⑩21、⑩76 ハツ 迫 止 ⑥127A ハク、 隸 ⑥106A ハク
並	彭 止 ④4 ハウ、 嘉 ④4 ハウ(平)、④5A(平 ^平)、 隸 ④3 ハウ・普庚反			帛 隸 ⑨61 ハク ^平 、⑨61A(入) 白 清 ⑦43A ハク、 隸 ⑥15 ハク
明	盲 清 ⑧76A ハウ、 止 ⑧132 ハウ(平濁 A)、 嘉 ⑧131A(平濁 A)、 隸 ⑧107A ハウ(平)、 文 ⑧95A(平)	猛 甲 ④78 マウ ^平 (上)	孟 清 ⑦20、⑦37A マウ、 止 ①63A(去)、 嘉 ①62A、①135(去)、 隸 ①53A(去)、①115 マウ(去)、①117、①121、③172、④97、④138、⑨133、⑩51 マウ、 甲 ④61(去)、⑧128A マウ	貉(狛) 清 ⑧16 ハク、 止 ⑧25 ハク・亡白反、 嘉 ⑧24(入軽 A)亡白反、 隸 ⑧20 ハク・音陌、 文 ⑧10(入軽)、 甲 ⑧15(入)亡白反
見	更 止 ⑨114A 古衡反又古孟反、⑩77 音庚、⑩77A カウ(平)、 嘉 ⑩77A カウ(平)、 隸 ②95A(平)音庚、⑩64A(平) 羹 止 ⑤215 カウ、 嘉 ⑤216 カウ、 隸 ⑤185 カウ(平)			格 止 ①129 加白反、①129A カク、 嘉 ①128 加白反、 隸 ①110 加百反
溪				客 清 ⑦60 カク、 嘉 ③42(入軽)、 隸 ⑦212 カク
澄	振 止 ③59 タウ(平)直康[ママ]反、 嘉 ③59 タウ(平)、 隸 ③49 タウ・チヤウ _左 (平)直庚反、③50 タウ			宅 止 ①12(入軽)、 嘉 ①11(入)、 隸 ①10 タク(入軽)
生	牲 止 ②82A、⑤212 セイ、 嘉 ②82A(平)、 隸 ②69、⑤182A(平) 生 清 ⑧27、⑧31A セイ、 止 ①10 セイ(平軽)、①26、②58A(平)、①153、③236A、④163A セイ、⑥47(平軽)、 嘉 ①9、①25、①152、②58A(平)、③114、⑥47(平軽)、 隸 ①7、①22、①130、③97、③199A、⑤92、⑥38、⑥162、⑦244、⑦296 セイ、⑤91A(平)、⑧33 セイ(平軽)、 文 ⑦143(平軽)、 甲 ⑧26 セイ			
曉	亨 止 ③68A キヤウ(平)許庚反、 嘉 ③68A カウ(平)許庚反、 隸 ③57A カウ	杏 止 ⑨114A キヤウ(去)、 嘉 ⑨115A カウ(去)、 隸 ⑨95A カウ(去)		

匣	<p>行 止 ③ 102A、⑦ 182(平)、嘉 ③ 102A、⑦ 181(平)、健 ③ 86A、⑦ 153A(平)、⑦ 151A カウ(平)(→平声、匣母・唐韻開、匣母・宕韻開)</p> <p>衡 清 ⑧ 19 カウ(平)、⑧ 19A、⑧ 20A カウ、正 ① 206A カウ(平)、⑤ 251A カウ、⑧ 29 カフ(平)、⑧ 30A(平)、嘉 ① 205A、⑧ 29(平)、健 ① 175A(平)、⑧ 24 カウ(平)、文 ⑧ 14(平)、田 ⑧ 18 カラ[ママ]、⑧ 19A カウ(平)</p>		<p>行 群 189、237、258A、304A、420、421(去)、圖 ⑦ 58A、⑧ 16 カウ(去)、⑧ 16 カウ、正 ① 68、① 91、① 185、② 170A、② 210、③ 12A、③ 55、③ 103A、③ 271A、④ 7A、④ 89、④ 110A、④ 157A、④ 206A、⑤ 4A、⑥ 87A、⑥ 233A、⑦ 104、⑦ 155A、⑦ 158、⑦ 283、⑧ 24、⑨ 152A、⑩ 52A(去)下孟反、① 201A、② 207A、③ 57A、④ 80、④ 138A、④ 157A、⑥ 73A、⑥ 205A、⑦ 106、⑦ 110、⑦ 159、⑦ 251A、⑧ 34A、⑨ 223、⑨ 225A(去)、③ 140 一音下孟反、④ 56A カウ(去)下孟反、⑥ 10、⑥ 274、⑦ 100、⑨ 146A 下孟反、⑨ 219A(去)下孟反_右、嘉 ① 67(去)下孟[反]、① 90、① 168A、① 184、① 184A、① 200A、② 207A、② 210、② 211A、③ 55、③ 56、③ 57A、③ 271A、④ 56A、④ 138A、⑤ 4A、⑥ 10、⑥ 74、⑥ 87A、⑥ 205A、⑦ 100、⑦ 104、⑦ 106A、⑦ 110、⑦ 154A、⑦ 157、⑦ 158、⑦ 250A、⑦ 283、⑧ 25、⑨ 220A、⑨ 224、⑩ 52A(去)、② 170A、④ 89、④ 110A、⑥ 87A、⑥ 233A(去)下孟反、③ 103、⑧ 24A、⑨ 153A(平)、④ 7A(去)下孟反_右、④ 206A、⑨ 147A 下孟反、健 ① 58 カウ・下孟反_右、① 77 カウ・下孟反、① 78A、① 157A、① 171A、② 179A、③ 87A、④ 5A、④ 46A、④ 91A、④ 115A、④ 131A、④ 131A、④ 172A、⑥ 60A、⑥ 71A、⑥ 194A、⑦ 129A、⑦ 209A、⑧ 28A、⑨ 122A、⑨ 183A、⑨ 187A、⑩ 43A(去)、① 155、③ 118 下孟反、① 157、③ 46 カウ(去)下孟反、② 144A、③ 229A、⑤ 4A(去)下孟反、② 178、④ 74、⑥ 8、⑦ 87、⑦ 236、⑧ 20、⑧ 21、⑨ 186 カウ(去)、③ 10A 下孟反_右、③ 47、⑦ 92、⑦ 131、⑦ 132 カウ、文 ⑦ 67A、⑦ 70、⑦ 177A、⑦ 203、⑧ 18A(去)、田 ④ 27A(去)干□反、④ 40A カウ_奇、④ 44、④ 74、④ 86A、④ 116A、⑧ 14(去)、④ 45、④ 86A、⑧ 15、⑧ 21A、⑧ 45A(去)下孟反、④ 57A(上・去)下孟反、⑧ 16 カフ(去)(→平声、匣母・唐韻開、匣母・宕韻開)</p>	
44	庚(拗開)	梗(拗開)	映(拗開)	陌(拗開)
幫	<p>兵 清 ⑧ 90A へイ(平輕)、嘉 ③ 35A(平・去)、健 ③ 30A(平)、⑥ 172、⑥ 173、⑦ 194 へイ、田 ⑧ 102A へイ</p>	<p>秉 正 ③ 153 へイ(上)音丙、嘉 ③ 153(上)音丙、健 ③ 129 へイ・音丙、③ 130A(上)</p>		
並	<p>平 嘉 ⑦ 109(平)、健 ③ 67 へイ(平)、⑤ 84 へイ、文 ⑦ 143(平輕)</p>		<p>病 清 ⑦ 117A、⑧ 46A へイ、正 ① 144A、④ 133、⑥ 192A、⑧ 75 へイ、⑤ 65、⑦ 347A(去)、嘉 ① 143A へイ(去)、⑤ 65、⑦ 347A(去)、健 ① 123A、⑩ 28(去)、④ 111 へイ(上)、⑤ 56 へイ(去)、田 ④ 71 へイ(去)、⑧ 47A へイ</p>	
明	<p>明 清 ⑧ 127 メイ(平)、嘉 ① 159A、② 120、③</p>		<p>命 清 ⑦ 98、⑦ 98、⑧ 105、⑧ 122A メイ、正 ⑤ 3 メイ、</p>	

	65A(平)、 隹 ③55A(平)、③170、⑤170、⑥167、⑧6、⑧193、⑨172 メイ、⑥166 メイ(平) 盟 清 ⑦11A メイ(平)、 正 ⑦181A メイ、 嘉 ⑦151A(平)音明		嘉 ①131、②129A(去)、⑦178 メイ、 隹 ①113、③123、④152、⑤139、⑤202、⑥19、⑥61、⑥162、⑦84、⑦149、⑦171、⑦262、⑦263、⑦263、⑦294、⑧157、⑧185、⑨89、⑩2、⑩99、⑩137 メイ、③157、⑤3 メイ(去)	
見	荆 嘉 ⑦46、⑦46A(平)、 文 ⑦20A(平)	景 清 ⑦94 ケイ、⑧132(上)、 隹 ⑥195、⑧199、⑨132、⑩73 ケイ、⑦257 ケイ(上)	敬 清 ⑦1A、⑧16、⑧66 ケイ(去)、⑦116A(去)、⑧17、⑧101A、⑧128 ケイ、⑧66A ケイ ^合 、 嘉 ①63A、①103A、①190、①192、①192A、②61A、②134、②197、②198A(去)、 正 ①64A、②134、②197(去)、 隹 ①53 ケイ ^左 、①68A、①88A、①127A、⑤150A、⑤152A、⑤152A、⑤196A、⑤208、⑥149(去)、①125、①162、②113、②166、③66、③67、③118、③194、⑦27、⑦80、⑧91 ケイ(去)、①164、④138、⑥48、⑦286、⑧20、⑧21、⑧103、⑧194、⑩3 ケイ、⑥163 ケイ ^左 、 文 ⑧91(去)、 甲 ④91、⑧71 ケイ、⑧15、⑧80(去)、⑧71A ケイ(去)	戟 清 ⑧99A ケキ、 正 ⑧178A ケキ(入軽濁A)、 嘉 ⑧178A ケキ、 隹 ⑧147A ケキ(入)、 文 ⑧135 ケキ、 甲 ⑧114A(入軽)
溪	卿 清 ⑦21A キヤウ、⑦66A、⑧110A ケイ、 正 ①9 ケイ(平軽)、①192A、⑥66A ケイ、 嘉 ①8(平軽)、①191A(平)、 隹 ①7 ケイ ¹⁵²⁾ 、①163A、③32A(平)、⑤75、⑦219 ケイ、 甲 ④53(平軽)			綌 正 ⑤186 ケキ(入)去逆反 ^士 、⑤186A ケキ、 嘉 ⑤186 ケキ(入)、 隹 ⑤160 ケキ・去逆反
疑				逆 正 ②52A ケキ(入濁A)、③99A、⑥112A、⑨243A ケキ、 隹 ②43A(入)、③84A(入軽)、⑨202A ケキ(入)
44	庚(拗合)	梗(拗合)	映(拗合)	陌(拗合)
曉	兄 正 ⑨150 ケイ、 嘉 ①198、⑦44(平)、 隹 ①169、⑤76、⑥73、⑥77、⑥161、⑥164、⑦36、⑦117 ケイ、⑨125A(平)			
于	榮 (榮) 隹 ④195A(平)、⑩94A エイ(平)		詠 隹 ⑥123 エイ	
45	耕(開)	耿(開)	諍(開)	麦(開)
見	耕 正 ③183 カウ、 隹 ③155A(平)、⑨148 カウ ^左 (平)			革 正 ①59A カク、 嘉 ①58A カク、 隹 ①49A カク
溪	經 清 ⑦107 カウ(平軽)、 正 ⑦104 カウ(平軽)苦耕反、⑦328 カウ(平)苦耕反、 嘉 ⑦104 カウ(平)苦耕反、⑦328(平)苦耕反、 隹 ⑦90 カウ(平)苦耕反音江、⑦274 カウ(平)苦耕反音江 ^右 ・音坑、 文 ⑦66 カウ(平軽)苦耕反、⑦238 カウ(平軽) 經 正 ⑥142 カウ(平)苦耕反、 嘉 ⑥142(平)、 隹 ⑥118 カウ(平)、⑥120A(平)			
莊			争 (争) [△] 隹 ②24(去)、②26 側逆反⇒「諍」	責 正 ③53A サク(入)、③131A セキ、⑦142A サク・七洛反、 嘉 ③53A サク・セキ ^左 (入軽)、⑦141A 七洛反、 隹 ③45A、③111A サク(入軽)、⑦117A サク(入)、 文 ⑦94A サク(入軽)
影				扼 清 ⑧19A、⑧20A ヤク、 隹 ⑤216 ヤク(入)、⑧

152) 反切注欠損。

				24A ヤク 梶 𠩺⑤251A ヤク・於革反、⑧30A ヤク(入)輓音梶、⑧31A ヤク、 𠩺 ①205A ヤク(入軽)、⑤252A 於革反、⑧30A 音厄、 𠩺 ⑧14A ヤク(入軽)輓音梶、 𠩺 ⑧19A ヤク 輓 𠩺218A ヤク(入)、 𠩺 ①206A ヤク(入)音厄 ^上 、 𠩺 ①174A ヤク・音厄、 𠩺 ⑧19A ヤク
匣		幸 𠩺 ③123 カウ(去)、⑥19 カウ		
45	耕(合)	歌(合)	諍(合)	麦(合)
匣	𠩺 𠩺 𠩺279A カウ(平軽)、 𠩺 ④234A クワウ(平)音宏、 𠩺 ④233A クワウ(平軽)音宏、 𠩺 ④195A クワウ ^平			獲 𠩺④76A クワク、 𠩺 ④75A クワク、 𠩺 ④63A クワク、 𠩺 ④38A クワク 𠩺 𠩺 𠩺236A(入)、③195 音獲、③195A クワク、 𠩺 ②36A、③51A クワク(入軽)、③195 音獲、③195A(入軽)、 𠩺 ②30A(入)、③165 音獲
46	清(開)	静(開)	勁(開)	昔(開)
幫		𠩺 𠩺 𠩺551A(平)、 𠩺 ⑧100A、⑧101A へイ、 𠩺 ②113A へイ(上)、⑧180A、 𠩺 ⑩144A(上)、⑧181A へイ、 𠩺 ⑩143 音丙、 𠩺 ②113A(上)、⑧180A(平)、 𠩺 ⑩143 音丙、 𠩺 ⑩144A(上)、 𠩺 ②95A、⑧149A へイ(上)、 𠩺 ⑩120A(上)、 𠩺 ⑧115A へイ		𠩺 𠩺 𠩺210 へイ・キ・必亦反、 𠩺 ②10(入)必亦反、 𠩺 ②8 へキ・必亦反(→滂母・入声、並母・入声)
滂			𠩺 𠩺 𠩺5174A、⑤178A へイ、 𠩺 ⑤174A へイ(去)、⑤178A へイ、 𠩺 ⑤154A、⑤154A(去)	𠩺 𠩺 𠩺244A へキ(入)、 𠩺 ⑥72 へキ・匹亦反、 𠩺 ⑥72 匹亦反 𠩺 𠩺 𠩺659 へキ(入)(→幫母・入声、並母・入声)
並			𠩺 𠩺 𠩺8112 へキ、 𠩺 ③118A へキ・婢亦反、⑧204 へキ・婢亦反 ^上 、 𠩺 ③118A 婢亦反、 𠩺 ⑧154 婢亦反、 𠩺 ⑧130 へキ 𠩺 𠩺 𠩺8204 婢亦反、 𠩺 ③100A 婢亦反、⑧169 へキ(入)(→幫母・入声、滂母・入声)	
明	𠩺 𠩺 𠩺131 メイ(平軽)、⑤7A メイ、 𠩺 ①25 メイ			
知	𠩺 𠩺 𠩺872A テイ(平)、 𠩺 ⑧125A テイ(平)、 𠩺 ⑧125A(平)、 𠩺 ⑧101 テイ ^左 、⑧102A(平)、 𠩺 ⑧79A テイ(平)			
徹		𠩺 𠩺 𠩺5169 勅井反、 𠩺 ⑤145 呈勅井反		
澄			𠩺 𠩺 𠩺711A テイ、⑧35(去)、⑧33、⑧34 テイ、 𠩺 ①24(去)、 𠩺 ①23、①32(去)、 𠩺 ①19、①28、⑧43、⑧43、⑧82 テイ	
溪	𠩺 𠩺 𠩺5138A(平)、 𠩺 ③105 ケイ、 𠩺 ⑩5A(平)			
精	𠩺 𠩺 𠩺1173A(平)、 𠩺 ①148A(平)	𠩺 𠩺 𠩺158A セイ(上)、①61A、③246、④249A(上)、 𠩺 ①57A、①57A、①60A、①61A、③246、④249A(上)、 𠩺 ①49A セイ ^左 (上)、④208A セイ、④208A(上)		𠩺 𠩺 𠩺5153 セキ(入)子亦反、⑤172 セキ、 𠩺 ⑤153(入軽)、 𠩺 ⑤132 セキ・子亦反、⑤148 セキ・音跡 𠩺 𠩺 𠩺683 子亦反、⑥84A セキ、 𠩺 ⑥83 子亦反
清	𠩺 𠩺 𠩺9227(平)、 𠩺 ⑨228(平)、 𠩺 ⑨189 セイ(平)、⑨189(平)			
從	𠩺 𠩺 𠩺8117A セイ(平)、 𠩺 ⑦35A(平)、 𠩺 ⑧178A(平)、 𠩺 ⑩57 ジヤウ、 𠩺 ⑧137A セイ	𠩺 𠩺 𠩺8113A、⑧117A セイ、 𠩺 ⑥18A(去)、 𠩺 ⑥18A(去)、 𠩺 ⑧177A(去)		𠩺 𠩺 𠩺4100A、⑤246A セキ、 𠩺 ⑤247A セキ、 𠩺 ④83A セキ(入)、⑤212A(入)、 𠩺 ④52A セキ

心		省 正①53 悉井反、建①45 悉井反	姓 清⑦87A セイ、⑧77A、⑧81A セイ(去)、正①30 セイ(去)、①84A(去)、⑧141A セイ、嘉①83A、②105A、③22A(去)、④119A セイ、建①25、⑥187、⑥188、⑦288 セイ、①71A、①133A、②89A、③14A、③19A、⑧110A、⑧116A(去)、④97、⑩111 セイ(去)、正④62A(去) 性 清⑦22A セイ(去)、正②142A、⑩54A(去)、③66 セイ _左 、嘉②142A、⑩54A(去)、③66 セイ、③66 セイ、建③56、⑨13 セイ(去)、③202A、④68A、⑥109A、⑦164A、⑩45A(去)	
邪				席 清⑧76 セキ _音 、⑧76 セキ、正⑤228 セキ、建⑤196、⑧108、⑧108 セキ
章	征 清⑦41 セフ[ママ]、⑧102、⑧102、⑧104A セイ、嘉②133A(平)、建⑧151 セイ(平)、⑧152 セイ、正⑧118、⑧119A セイ		政 清⑧94、⑧95A セイ(去)、正⑥253(去)、⑦62(平)、嘉①56A、①200A、③242A、⑥253、⑦55A、⑦55A(去)、建①48A、①171A、②53A、②108A、③204A(去)、①102、⑥9、⑦5 セイ、⑥211 セイ(去)、正④102A、⑧107A セイ、⑧109A(去) 正 正②04、207、320(去)、清⑦49A、⑧72A、⑧144A セイ(去)、正④125A セイ(去)、①130A、⑥253、⑧125A、⑧260A、⑩32A(去)、嘉①124A、④213A、⑥253、⑧125A、⑩32A(去)、建①107A、③139A、④54A、⑤132A、⑦199A、⑧102A、⑧216A、⑩26A(去)、⑥211 セイ(去)、正⑦167A(去)、正④70(去)、⑧79A、⑧167A セイ	
昌				尺 正④181、④249A セキ、建④151 セキ、正④101 セキ 赤 清⑧108A セキ、正③40、③151A セキ、⑥95(入)、嘉③41(入)、⑥95(入軽)、建③34、③34、③130、⑥78、⑥133、⑥135 セキ、正⑧125A セキ
船				射 正④96 食亦反、嘉④96 食且反、建④80 食亦反、正④50 食且[ママ]反(→船母・禡韻)
書	声(聲) 清⑧34 セイ(平軽)、⑧35(平軽)、建⑧43 セイ、⑧43 セイ、⑨82 セキ(平)、⑨83A(平)、正⑧34、⑧34、⑧34A セイ		聖 正③266、⑤35 セイ、嘉③266(去)、建③225、④74、④107、⑤28、⑧186、⑩42 セイ、④68A(去)、⑤30 シヤウ・セイ _左 、正④42A、④68、④69A セイ、④64A(去)	爽 正④233A シヤク _釋 (入)音釋、嘉④233A セキ・音釋、建④194A セキ・音釋
常	城 清⑧90A(平)、正①58A、①59A(平)、⑧161A セイ、嘉①57A、①57A、①58A(平)、建①50A(平)、③168、⑨15 セイ 成 正①17、⑩158(平)、⑩159A セイ(平)、嘉①16、②44A、⑦56A、⑩158(平)、建①5、④13A、⑥176、⑦166、⑦170、⑦216 セイ、②37A(平)、④190、⑩132 セイ(平) 誠 正①64A、②147A(平)、嘉①63A、②147A(平)、建①54A、②124A(平)		盛 正⑤247、⑥292A、⑨65A セイ、嘉④45A、⑤247(去)、建④37A、⑥243A(去)、⑤212 セイ(去)	昔 清⑦102A セキ(平)、建⑦269 セキ、正④23A(入) 碩 正②35A セキ、嘉②35A(入)、建②29A(入)

影	嬰 正③80A エイ、嘉③80A(平)、隹③68A エイ(平)			益 清⑦108A、⑦121A、⑦123A、⑧61、⑧111、⑧113、⑧114 エキ、正③151 エキ、⑦5、⑨103A(入)、⑧202 エキ(入)、嘉⑤104A、⑦5、⑦6(入)、隹①177、①178、③128、④63A、④193A、⑦295、⑦297、⑧83、⑧169、⑧171、⑧173 エキ、⑦3、⑧167 エキ(入)、⑦275、⑨86A(入)、甲④39A、⑧129 エキ(入)、⑧65、⑧129、⑧131、⑧133 エキ
羊	襍 正②112A エイ、③84A 音盈、嘉②112A エイ(平)、③84A 音盈、隹②94A エイ(平)、③71A 音盈			奕(弈) 正⑨130 エキ・音亦、嘉⑨131 エキ、隹⑨108 エキ・音亦 懌 正①40A エキ・音亦、嘉①39A エキ・音亦、隹①34A 音亦 易 群⑤23(入)、正④62 エキ、⑦119A(入)、⑦120A(入軽)、⑨239A(入)音亦、嘉④62 エキ、⑦4A、⑦119A、⑦121A(入)、⑨240A(入)音亦、隹④51 エキ(入)、⑤172A、⑦99A(入)、⑨199A(入)音亦、文⑦77A(入)、甲④31A エキ、⑧143A 又以致反(→羊母・寘韻開甲) 繹 正①166A、⑤113 音亦、②120(入)、嘉①165A 音亦、②120 エキ(入)、隹①141A、⑤97 音亦、②101(入)
来	令 正①51、③180A、③253A、⑨109A 力呈反、嘉①50、③253A 力呈反、隹①44A、③152A 力呈反(→去声)	領 正①34(上)、⑤182A レイ、嘉①33 レイ(上・去)、隹①28 レイ	令 群③23A、357、357、358、562(去)、正⑥258A レイ(去)、⑦42、⑩159(去)、⑨114A レイ、嘉⑦42、⑦43A、⑩159(去)、⑨115A リヤウ、隹①43 力鄭反、③73 レイ(去)力鄭反、③74、⑩133 レイ、⑥214A、⑦157A、⑨95A(去)、⑦34、⑦35 レイ(去)、文⑦17、⑦17(去)(→平声)	
46	清(合)	静(合)	勁(合)	昔(合)
心	驛 正③164A セイ(平)、嘉③164A セイ(平)、隹③138 息宮反、③139A セイ(平)			
羊				役 正②80A、③238A エキ、嘉②80A エキ、③238A エキ、隹③201A エキ(入軽) 疫 正⑤221A エキ(入)音役、嘉⑤221A(入軽)音役、隹⑤190A(入)音役
47	青(開)	迥(開)	徑(開)	錫(開)
端				嫡 清⑧144A テキ、正⑧260A テキ・丁歴反、嘉⑧260A テキ・丁歴反、隹⑧216A(入)、甲⑧167A テキ・丁歴反
透			聽(聽) 清⑧33A テイ(去)、隹⑧42A テイ(去)、文⑧32A テイ(去)、甲⑧33A テイ	適 正②175、⑨58A 丁歴反、⑤135A、⑤155A、⑥233A、⑨32A テキ(入)、嘉⑤135A、⑤155A、⑥233A テキ(入軽)、⑨58A 丁歴反、隹②148、⑨48A 丁歴反、⑤116A テキ、⑤133A(入)、⑥194A(入軽)、⑨26A テキ(入)
定	亭 正①34 テイ(平)、嘉①33(平)、隹①29 テイ庭 隹⑤128 テイ・徒侯反、⑤154A(平)		定 清⑧108A(去)、嘉②88(去)、隹②74、⑦56 テイ 廷 正⑤149 徒侯反	狹 清⑦52A テキ、正②20 テキ、隹②17 テキ(入)、⑦81 テキ 覲 正⑤179 直歴反、⑤180 テキ(入)、嘉⑤179 直歴反、⑤180A テキ(入軽)、

				建⑤154 直歴反、⑤155A テキ(入軽)
泥	寧 清⑧96A ネイ、⑧109A(去)、正⑤72A、⑤72A、⑧171A ネイ、嘉⑤72A(平)		佞 清⑦87、⑧112、⑧113A ネイ、正③17 ネイ(去)、③210、⑥117、⑥275A、⑧206A ネイ、⑧52(去)乃貞反、⑧206A 乃定反 欄上、嘉③17 ネイ(去)、③18、③19(去)、建③14、③16、③178、⑦246、⑦247、⑧43、⑧43、⑧170、⑨65A ネイ、③15、⑥97 ネイ(去)、又⑧155 ネイ、甲⑧34、⑧131 ネイ(去)、⑧131 ネイ 穽 正③104 ネイ・乃定反、嘉③103、③104A(去)、建③88 ネイ(去)乃定反	溺 清⑦102A テキ、正⑦321A テキ・シヤク、⑨176 テキ(入濁 A)乃歴反、嘉⑦320A テキ、⑨177 テキ(入軽濁 A)、建⑦268A テキ(入)、⑨148(入)乃歴反、⑨152 テキ、又⑦232A テキ
見	經(經) 清⑦54A イ[ママ]、嘉①161A(平軽)、建①137A(平)		徑(徑) 正③201 古定反、嘉③201 古定反、建③170 古定反	擊 清⑦120A ケキ(入)、正⑦351A ケキ(入軽)、⑨236 ケツ、嘉⑦351A ケキ(入)、建⑦293A ケキ(入)、⑨197 ケキ・切古歴反、又⑦255A ケキ(入軽)
溪			馨 清⑦105 ケイ(去)、⑦106 ケイ、正⑦325 ケイ(去)、嘉⑦325(去)、建⑦272、⑦273 ケイ、⑨197 ケイ(去)切口定反、又⑦235 ケイ	
精				績 正⑤12A セキ(入)、嘉⑤12A(入軽)、建⑤11A(入)
清				感 正②202A セキ 戚 正②19A、④50A 千歴反、④142 セキ(入)千歴反、嘉②19 セキ _左 、②20A、②202A(入)、④28A(入軽)、④49A セキ(入)千歴反、④142(入)千歴反、建②15 千歴反、②16A セキ、④41A セキ(入軽)、④118 セキ(入軽)千歴反、甲④23A セキ _左 ・千歴反、④77 セキ(入軽)千歴反
心	星 建①104 セイ 腥 正⑤229 音星、嘉⑤229 音星、建⑤197 音星			誓 正⑥119 セキ・音赤、嘉⑥119 音赤、⑥153 テツ[ママ]、建⑥98 セキ・音赤、⑥127 セキ・セキ _左 (入)、⑥127 セキ 析 清⑧98、⑧99A セキ、正⑧176 セキ・星歴反、⑧177A セキ(入)、嘉⑧176 星歴反、建⑧145 セキ、又⑧132 セキ、甲⑧112 セツ・キ _左 ・星歴反、⑧113A セツ
匣	刑 清⑦97A ケイ、正②179、⑦24A(平)、嘉①126、①126A、②179、③7、⑦24A、⑦58A(平)、⑦23 ケイ、建①108、②151 ケイ(平)、③6、⑦18、⑦20 ケイ、⑦19A(平)、⑦38 ケイ(平) 形 正③65A、④17A、④90 ケイ、嘉③65A(平)、建③55A、④13A ケイ(平)、④74A ケイ、甲④45A(平)		脛 清⑦120A、⑦120A ケイ、正⑦351 戸定反、⑦351A ケイ(去)、嘉⑦351 戸定反、⑦351A、⑦351A(去)、建⑦293A ケイ、又⑦255 戸定反、⑦255A ケイ(去)	
来	靈(靈) 正③258A レイ、嘉③259A(平)、建⑦210、⑧1、⑧2 レイ、甲④23A レイ			曆(曆) 正⑩115 レキ 歴(歴) 建⑩96 レキ、甲④81A レキ
13 曾撰				
48	蒸	拯	證	職(開)
並	憑 正④35 へウ(平)皮氷反、嘉④35 ヒヨウ(平)、建④28 へウ・ヒヨウ・皮水[ママ]反、甲④15 へウ			

	左(平・平軽 音)皮泳反			
知	微 正②44A テフ、嘉②44A(平)、建②37A チヨウ(平)音重			
澄				直 清⑧21、⑧43A、⑧123A チヨク、⑧22 チヨク左、⑧53 チヨク(入)、建③97、③186、④128、④179、⑥224、⑦250、⑧26、⑨49、⑨80、⑨118 チヨク、⑥239 チヨク左、文⑦58、⑧153(入)、甲④84 チヨク左、④121、⑧129(入)、⑧20、⑧55、⑧144A チヨク
孃				匡 正①164A チヨク(入濁 A)女力反、③120 女力反、嘉①163A チヨク(入軽濁 A)女力反、③120、④86A 女力反、建①139A チヨク左(入軽)女力反、③102、④71A 女力反、甲④43A、⑧137A 女力反
見	競 正④161 居陵反、嘉④161(平軽)居陵反、建④161 キヨウ左(平)居陵反、甲④88 キヨウ(平)居陵反、清⑧47A キヨウ、⑧47A(平)、正④173A、⑨78A ケウ、⑧77A キヨウ(平)、⑨94 クキヨウ(平)、⑩12 居陵反、⑩69(平)、嘉④173A クイヨウ(平軽)、⑨78A、⑩12 居陵反、⑨94(平)、⑩69 キヨウ、建④144A クキヨウ(平)、⑨65A、⑨78、⑨79 キヨウ(平)、⑩57 キヨウ・キヤウ(平)、文⑧52A キヨウ(平)、甲④96A キヨウ(平)、⑧96A(平)			棘 正⑥212 ソク・紀力反、嘉⑥212 キヨク 棘・紀力反、建⑥176 キヨク(入軽)紀力反
群				極 正③196A キヨク、⑤138A キヨク(入)、嘉⑤138A(入軽)、建③165A、③210A(入)、⑩98 キヨク
精				樓 清⑦4 シヨク・シヨク左、⑦5A シヨク左、⑦5 シヨク、正③15A、④231A シヨク、嘉③15A シヨク(入軽)、④184A、④231A、⑦169A シヨク、建③12A ク、⑥95、⑦140、⑧122 シヨク、甲④102A、⑧94 シヨク
莊				側 正③204A ソク、建③173A(入)、甲④11 初[ママ]力反
初				側 正④28A ソク・初力反
生				普 群⑤64A ソク、正⑩162A ソク(入)、嘉⑩162A ソク(入)、建⑩136A ソク(入) 色 清⑦12 シヨク、正④171、⑥86 シヨク、嘉①51A、②36A(入)、建④142、⑤146、⑤151、⑤153、⑧179 ソク、⑥70 ソノ[ママ]、⑦152 シヨク・ソク左、甲④94 シヨク(入軽)、⑧138A ソク
章			證 正⑦93(去)、嘉⑦93(去)、建⑦77(去)	職 清⑦22A シヨク、正②107A(入軽)、④40 シヨク、嘉②107A(入軽)、④40A(入)、甲④119A シヨク
昌	称(稱) 清⑦22A シヨ、⑦88、⑧135A(去)、⑧110A、嘉⑦103、⑦103、⑨127A(平)、建③33A(平)、④123、⑦86、⑦248、⑧202、⑨113 シヨウ、		称(稱) 群⑤45A(去)、清⑧141、⑧142 シヨウ、⑧144A、⑧144A シヨウ(去)、正①39A、④223A、⑩135A(去)尺證反、④227A、⑧259A(去)、⑤189A、⑧	

	⑦85 ショウ(平)、⑦248 ショウ(去)、⑧61 セウ(平)、⑧200、⑧212、⑧213 セウ、 文 ⑧187(平)、 甲 ⑧47 ショウ、⑧154(平軽)、⑧156(平)(→去声)		255 尺證反、 嘉 ①38A(去)尺證反、④233A、⑤189A、⑧255 尺證反、④227A、 甲 ⑩135A(去)、⑤82A(上)、 隹 ①33A、④186A、④189A、⑧215A、⑧216A、⑨113A、 甲 ⑩113A(去)、⑤163A(去)尺證反、 文 ⑧202A、⑧202A(去)、 甲 ④126 ショウ ^平 (去)尺證反、⑧164 ショウ、⑧166A(去)尺證反、⑧167A(去)(→平声)	
船	乘 隹 ③20 ショウ(→去声)		乘 隹 ①56(去)繩證反、①61A、①62A(去)、③34(去)時證反、③93、⑥125、⑦180A 時證反、 嘉 ①55、①61A、③34(去)、③37(平)、③92(去)時證反、⑦179A 時證反、 隹 ①47 ショウ・時證反、③29、③78 ショウ(去)時證反、③31、⑥104 ショウ(去)、③33A(去)(→平声)	食 隹 ⑦18A ショク、 隹 ①104、①154A、②174、④26、④71、⑤199、 甲 ⑩137(入)、①153A ク(入)、②51A、④59A、④59A、⑤214、⑤227、⑥206 ショク、④57、④245 ショク(入)、⑤207 ショク・摺音似、⑦191 ショク・シ ^左 ・又音似、 嘉 ①103、②50A、②155、④71、⑤199(入)、①153A、④26(入軽)、④57(去・入)、④245 シ、⑤208 ショク・摺音似、 隹 ①130、②42A、⑤175、⑤178、⑤199A(入)、②131、②147、④21、④48A、④49A(去)、④59、⑥171、⑥175、 甲 ⑩63、 甲 ⑩114 ショク、⑤185 ショク ^合 (入)、⑤196 シ(入)、⑤198 ショク(入)、⑨108 ショク ^左 、 甲 ④28 シ、④29A、④29A、④35(入軽)、④34A ショク ^左 、⑧80(入)
書	升 隹 ⑤12A セウ(平軽)、 嘉 ③151A、⑤12A セウ(平)、③244 ショウ(平)、⑦110A(平)、 隹 ⑤11A セウ 勝 隹 ①5(平・去 ^合)音升又升證反、⑤173、⑦57 音升、 嘉 ①4(平・去)音升又升勝[ママ]反、⑤173 音升、 隹 ①4 ショウ・音升 ^右 ・又升證反、⑤149 音升(→去声)		勝 隹 ③45A、⑥65A(去)、 嘉 ③44A、⑥65A(去)、 隹 ③37A(去)(→平声)	式 隹 ⑤245 ショク(入)、 嘉 ⑤246 ショク(入軽)、 隹 ⑤211 ショク(入)、⑤211 ショク 識 嘉 ④227A(入) 飾(飭 [*]) 隹 ⑦12 ショク、 隹 ⑤181A、⑦182 ショク、 嘉 ⑦181 ショク、 隹 ⑤156 ショク ^合 、⑦152 ショク、 文 ⑦124 ショク ^左
常	丞 隹 ①6(平)、 嘉 ①5(平)、 隹 ①5 セウ			殖 隹 ⑥75 ショク・市力反、⑥77A ショク(入)、 嘉 ⑥75 市力反、⑥77A(入軽)、 隹 ⑥61 ショク ^左 (入)市力反、⑥63A(入)
影			応(應) 隹 ③55A(去)、 隹 ③117A、⑦36A、⑨40A、⑨224、⑨225A(去)、⑥118A ヨウ、 甲 ⑩39(去)於證反、 嘉 ③116A、⑦36A、⑨225A、 甲 ⑩39(去)、 隹 ③99A、⑥98A、⑦29、⑨32A、⑨187A(去)、 甲 ⑩32 ヨウ(去)、 文 ⑦12A(去)	億 隹 ⑥77A ヲク、 隹 ⑥63A ヲク 億 隹 ⑥75、⑦291 於力反、 嘉 ⑥75、⑦290 於力反 抑 隹 ①83 於力反、④129 於力反 ^下 、 嘉 ④130 於力反、 隹 ①70、④108 於力反
曉	興 隹 ⑦111A キョウ、 隹 ②78A ケウ、④156A、④191A ケウ(平)、⑧9A コフ(去)、 嘉 ②78A、④191A(平)、④156A(平軽)、 隹 ④130A キョウ・コウ ^合 、④159A(平軽)、 甲 ④86A ケウ(去 ^合)、④107A ケウ(平)、⑧5A キョ(去)(→去声)		興 隹 ⑨64 許應反、 隹 ⑨53、⑨53A(去)(→平声)	
羊				弋 隹 ④96 ヨク(入)羊職反、④98A ヨク、 嘉 ④96 ヨク(入)羊職反、 隹 ④80 ヨク(入)羊職反音翼、 甲 ④50 ヨク(入軽)羊職反・羊威反 ^右 、④50A ヨク(入軽) 翼 隹 ⑤160 ヨク・エキ

				左、 建 ⑤138 ヨク(入)、⑤147 ヨク _左
来	凌 止 ③62A(平)、 嘉 ③62A(平) 陵 止 ⑩97(平)、 嘉 ⑩97(平)、 建 ⑩81 リウ[ママ](平)			方 清 ⑦3A、⑧87A リヨク、 止 ①69、②80A リヨク、④75 リヨク(入)、 嘉 ①68、④74(入)、②80A リヨク(入)、 建 ①58 リヨク、④62 リヨク(入)、 甲 ④38(入)、⑧98A リヨク
日	仍 止 ⑥54A セウ(平)、 建 ⑥44A(平)			
48				職(合)
暁				沍 群 284 ㄱキ、 清 ⑦5A ㄱキ、 止 ④249 イキ(入)呼域反、⑦170A(入)呼域反、 嘉 ④248 イキ・呼域反、⑦169A ㄱキ(入)況域反、 建 ④207 ㄱキ(入)呼域反、④208A ㄱキ、⑦141A ㄱキ・況域反、 文 ⑦115A クㄱキ(入)
于				域 清 ⑧84、⑧84A、⑧93、⑧94A ㄱキ、 止 ⑧147、⑧148A イキ、 建 ⑧120 イキ(入) 關 △ 止 ⑤164 音域、⑤164A イキ、 建 ⑤141 于通反音域、⑤142A ㄱキ
49	登(開)	等(開)	嶝(開)	徳(開)
幫	崩 清 ⑧98、⑧99A ホウ(平)軽、 止 ⑧175 ホウ、 建 ⑧145 ホウ(平)、⑧146(平)、 文 ⑧132 ホフ(平)軽)、 甲 ⑧112 ホウ(平)軽)			北 嘉 ①120(入)、 建 ①103 ク
並	朋 止 ①40 蒲弘反、①42A(平)軽、①54(平)、①73 ホウ、 嘉 ①53、①72、②214(平)、 建 ①34 蒲弘反、①35A、①62 ホウ(平)、①46、②181、③109、⑤203、⑦117 ホウ			
明				墨 建 ⑩103A(入) 黙(嘿 [*]) 清 ⑦112A ホク(入)軽、 止 ④5、亡北反、⑦336A ホク(入)濁A)、 嘉 ⑦336A ホク(入)濁A)、 建 ④4 亡北反、⑦281A ホク、 文 ⑦244A ホク(入)軽)
端		等 建 ③218A(上)、⑤145 トウ		得 清 ⑧121A、⑧121A トク、 止 ①29(入)、 建 ①25 トク、 文 ⑧168(入)軽)、 甲 ⑧141 トク(入)、⑧141 トク 徳 清 ⑦6(入)軽)、⑦90A トク、 止 ①89A(入)軽)、①108A(入)、 嘉 ①78、①120、③262(入)軽)、①80、③263、⑦38A(入)、 建 ①67、①109、③221、④6、④13、④122、④201、④201、⑥189、⑥218、⑥232、⑥234、⑦133、⑦135、⑦144、⑦248、⑦249、⑦250、⑨141、⑩4、⑩29 トク、⑥8 トツ、 甲 ④5A トク
透				憲 群 329 トク(入)、329A トク(入)軽)、331 トク、 止 ⑥279 トク(入)吐得反、⑥280A、⑥283 トク(入)、 嘉 ⑥279 A トク(入)軽)吐得反、⑥280 A(入)軽)、⑥283 ノク[ママ](入)軽)、 建 ⑥232 トク _左 (入)吐得反、⑥233 A(入)、⑥235 トク(入)
定	滕 止 ⑦196 徒登反、 嘉 ⑦195 徒登反、 建 ⑦163 徒登反 藤 清 ⑦21(平) 騰 文 ⑦135 トウ・徒登反			特 清 ⑧58A トク(入)、 止 ⑧98A トク(入)、 嘉 ⑧79A(入)、 文 ⑧68A(入)
泥	能 清 ⑦83 フウ、⑦84A			

	ナウ(平)、⑧44 ノウ(平)、 𠄎⑦290(平)、𠄎④176、⑦ 289、⑦290A、⑧71(平)、 𠄎①166、④147、⑤28、⑤ 31、⑤33 ノウ、⑧58 ノウ (平)、⑧58 ノウ(平)、⑩10 □ウ、𠄎⑦208(平)、𠄎④ 98 ノウ(平)、④98 ノウ、 ⑧46(平)			
溪			肯 𠄎③251A(去濁 A)	刻 𠄎③51A コク(入軽)、 ③ 84A コク、𠄎③ 51A(入)、𠄎③43A、③71A コク 剋 𠄎⑤21A、⑤21A コ ク、⑦151(入)、𠄎⑦150 コク(入軽)、𠄎⑤19A(入)、 ⑦126 コク、𠄎⑦102 (入 軽)
精	増 𠄎⑥15A ソウ、𠄎⑥ 13(平) 曾 𠄎①52 ソウ、①153 音増、②26 側登反、𠄎① 51(平)、𠄎①44 ソウ(平)、 ②159(平)、⑥98 ソウ(→從 母)			則 𠄎④127A ソク(入軽)
從	曾 𠄎⑤21A 才能反、𠄎 ①152 音増、𠄎①130 音増 (→精母)			賊 𠄎⑥113、⑨59 ソク (入)、⑦350、⑨81、⑨84A、 ⑩160(入)、𠄎⑥113、⑦ 350、⑨59、⑩160(入)、𠄎 ⑥93、⑨48 ソク(入)、⑦ 292 ソク、⑨67 ソク(入)、 ⑨70A(入)、⑩134 ソク
心				塞 𠄎⑤15A(入)、𠄎⑨ 139A ソク(入)、𠄎⑨116A ソク(入)
匣	恒 𠄎⑥236A コウ(平)、 ⑦114A コウ、⑦119A(平)、 𠄎⑥236A、⑦119A、⑦ 259(平)、⑦114A コウ(平)、 𠄎⑦95A(平)、⑦217 コウ、 𠄎⑦73A コウ(平)、⑦77A コウ			
49	登(合)	等(合)	嶷(合)	徳(合)
見	𠄎④58 國弘反、④ 59A コウ、𠄎④59A コウ (平)、𠄎④48 國弘反、④ 49A コウ、𠄎④28(平軽)國 弘反、④29A(平)			国(國) 𠄎①60A(入軽)、 𠄎①59A、②113A(入)、𠄎 ⑥104 コク
曉	𠄎⑦113 コウ、𠄎④ 49A、⑦337 コウ、𠄎④49A コウ(平軽)、⑦337 コウ、 𠄎⑦282 コウ(平)、𠄎⑦ 245(平軽)、𠄎④23A コウ (平)			
匣	弘 𠄎④155 コウ、𠄎④ 104 コウ(平)、④104A(平)			惑 𠄎⑦95(去)、𠄎⑦285 音或、⑨146A コク、𠄎⑨ 122A コク
1 4 流攝				
50	尤	有	宥	
幫	不 𠄎①77A(平軽)、𠄎③ 8(平)	不 𠄎⑧41A、⑧144A フ (上)、⑧41A フ、𠄎⑥ 256(去)、𠄎①194、②140、 ⑦82、⑦109A(上)、① 194(平)、𠄎②118、③123、 ⑥19、⑥19、⑥146、⑦68、 ⑨23、⑩10 フ、⑧52A、⑧ 216A、⑨35(上)、𠄎④29 フ、④66A(上)	富 𠄎⑥40A(去)、⑥292A フ(去)、𠄎②148、⑥40A、 ⑥292A(去)、𠄎②127A、 ⑥32A、⑥243A(去)、⑥163 フ、	
奉		婦 𠄎⑦52 フ、𠄎② 89A(去)、④197、⑦202 フ 負 𠄎③56 フ(上)、𠄎⑤ 245 フ、⑦37 フ(去)、𠄎⑤ 246 フ、⑦37(去)、𠄎⑤211 フ・ヒ(平)、⑦30 フ、𠄎⑦ 13(去)	復 𠄎⑦13A、⑦68A、⑧ 72A(去)、𠄎②74A、② 99A、②159A、③31A、③ 180A、⑥61、⑦184A、⑨ 157A、⑨226A 扶又反、⑧ 124A(去) 扶又反、𠄎② 159A、③149、④244A、⑦ 183A 扶又反、𠄎②62A、 ②63A、②83A、②84A、② 84A、②135A、③26A、③ 153A、④11、④11A、④ 21A、⑥45A、⑥50A、⑦	

			222A、⑦224A、⑧101A、 ⑨ 131A、⑨ 143A、⑨ 145(去)、③26A、③126A、 ③152A(去)扶又反、④19 フク _左 (去)、④204A 扶又 反 _右 、⑤109A(去)扶又反、 ㊦⑦126A、⑦189A、⑦ 191A、⑧89A(去)、㊦④ 3(去)扶又反、⑧78A(去)	
明	牟 ㊦⑨44(平濁A)音毛、 ㊦⑨44音毛、㊦⑨36ボウ _平 (平)音毛 謀 ㊦⑦11A ホウ、⑧57 ホ(平濁A)、㊦⑦181、⑧ 96(平濁A)、㊦⑦180A ホ ウ、⑧95ボウ、㊦⑧77ボ ウ(平)、⑧78A(平)、㊦⑧ 66ホウ(平)、㊦⑧60ホウ (平濁B)			
知			昼(晝) ㊦③49 竹救反・ 竹救反 _{欄上} 、㊦③41(去)竹 救反、⑤78 チウ	
澄		紂 ㊦④242A チウ・直久 反、⑨149A チフ、⑨150A 直又反、㊦④241、⑨151A 直久反、⑨150A チウ、㊦ ④201A チウ・直又反、⑨ 125A、⑨ 125A、⑨ 126A(去)、⑩59 チウ		
見		九 ㊦⑦117A キウ、㊦③ 134、④197、⑤2、⑤70 キ ウ 久 ㊦⑦171 キウ、㊦④ 124A(上)	厥 ㊦⑤225 音救、㊦⑤ 225 音救、㊦⑤194 久又反 疾 ㊦⑥191 九又反、⑥ 192A キウ(去)、㊦⑥191 九 又反、⑥191A キウ(去)、 ㊦⑥159 キウ(上) 救 ㊦②25A キウ(去)、㊦ ②25A(去)	
溪	丘 ㊦⑦86、⑧93 キウ、 ㊦⑩96(平)、㊦⑩97(平)、 ㊦③100、③112、③113、 ④72、④100、④114、⑤ 193、⑥47、⑦245、⑧137、 ⑨153、⑨164 キウ、⑨ 151(平)、⑩80 キウ(平)、 ㊦④44(平軽)			
群	仇 ㊦⑩86A キウ・音求、 ㊦⑩87 音求 _左 、㊦⑩ 72A(平)音求 求 ㊦⑦25、⑧82、⑧ 83A、⑧86、⑧91、⑧97 キ ウ、㊦①180A、③36、③ 174、⑧143、⑧145A キウ、 ⑥66、⑧152(平)、㊦① 179A キウ(平)、③36、⑥ 67、⑧145A、⑧152(平)、 ㊦①153A(平)、③30、③ 147、⑥54 キウ(平)、③ 148、⑧134(平)、⑥77、⑥ 79、⑥85、⑥108、⑥110、 ⑦168、⑧117、⑧125、⑧ 144 キウ、⑥89 ギウ、㊦ ⑧107A キウ _合 、⑧ 121(平)、㊦⑧91、⑧ 104(平)、⑧96 キウ 裘 ㊦③124 キウ、⑤195 キフ、㊦③105、⑤168 キ ウ	咎 ㊦⑧40A キウ、㊦② 100 其久反、⑧62A キウ・ 其九反、㊦⑧51A(去)其九 反、㊦⑧40A キウ(上)其九 反、㊦⑧40A キウ _左 ・其 九反	旧(舊) ㊦⑦29A キウ、 ⑦118A キウ(去)、㊦⑦ 87A(去)、㊦③95、④129 キ ウ、⑦290A(去)、⑨93、⑨ 201 キウ(去)、㊦④85、④ 86A キウ	
疑	牛 ㊦③163(平濁A)、㊦ ③138、③154、⑥9、⑥152、 ⑥156 ギウ			
精		酒 ㊦⑤218 シユ、㊦① 151、⑤218(上)、㊦①129、 ⑤187 シユ		
清	緡 [△] ㊦③21A シウ、㊦ ⑦47A シウ(平)音秋、⑧ 33A シウ(平軽)音秋、㊦⑦ 47A チウ[ママ](平)音秋、 ⑧33A 音秋、㊦⑦38A シ ウ(平)音秋、⑧27(平)音 秋、㊦⑦20A シウ(平)音 秋、⑧16A シウ(平)音秋→			

	「歟」			
従			就 正⑥260A シウ(去)、 嘉⑥260A(去)、建⑥ 216A(去)	
心	修 清⑦12 シウ(平)、嘉 ⑦181 シウ 脩 群③29A(平)、正④19 シウ・音周、⑥280A シユ ウ(平)、⑦182 シユウ、嘉 ④19、⑥280A(平)、建④ 15 シユウ(平)音周、⑦151 シウ、文⑦124 シウ 合左、 甲④7 シユ(平軽)			
邪			袖 正⑤182A シウ、建⑤ 156 シウ(去)	
莊	緇 正⑤181 シユ(平)莊 由反・子旬反 欄上、⑤181A シウ、嘉⑤181 シウ(平)、 建⑤156 ス・シウ(平)子釣 反・庄由反 右 郷 正②71 スフ(平)側留 反、嘉②71 スウ(平)側留 反、②73A(平)、建②60 ス ウ(去)側留反			
生	慶 正①163 所留反、① 164A シウ(平)、嘉①162 所 留反、①163A シウ(平)、 建① ⁵³ ①138 所留反、① 139A シウ(平)			
章	周 清⑧58A(平)、⑧104A シウ、正①20、①26、① 62A、①170(平)、嘉①18、 ①170A、①208、①210、 ②67、②68、③241A(平)、 ①25(上)、①169、①170、 ②95、③80A(平軽)、建① 16、①22、①145、①177、 ②56、②57、②80、④11、 ④165、⑥54、⑧41、⑧125、 ⑨28、⑨58、⑨198、⑩108 シユウ、①144 シユウ(平 軽)、①179 シユウ(平)、③ 132 シウ 左、③139A、③ 139A、⑧79A(平)、④201、 ⑨57、⑨203、⑩109 シウ、 文⑦18A、⑧112(平軽)、甲 ⑧61A シウ 左、⑧96 シユ ウ(平軽) 州 甲⑧16(平) 洲 建⑩72A シウ(平)		呪(咒*) 正③260A シウ (去)州又反 右、嘉③ 261A(去)、建③220A シウ	
昌			莫 正⑤201A シウ(去)、 嘉⑤202A シウ(去)、建⑤ 173A シウ(去)	
書		手 建⑦20 シユ 首 清⑧133、⑧134A シ ウ 合・シユ、甲④213A シ ユ(上)、嘉④213A(上)、建 ④178A(上)、⑧201 シユ、 甲④120A シユ(上)、⑧155 シウ	守 正①22(去)手又反、 ③82A 手又反、嘉①20(去) 手又反、建①18 シユ(去) 手主反、③69A 手又反(→ 上声) 獸(獸) 建⑨56 シウ (去)、⑨161 シユウ(去)、 ⑨162A(去) 首 正⑤232 シユ・手又 反、嘉⑤233 手又反、建⑤ 200 シユウ(去)手又反、⑤ 201A(去)	
常		受 清⑧68 シウ(去)、⑧ 68 シウ、正⑥200 シウ (去)、⑥202A、⑥203 シウ、 嘉⑥200(去)、建⑥167 シ ユウ(去)、⑧94 シユ(去)、 ⑧94 シユ、甲⑧73 スウ 合、⑧74A シウ 寿(壽) 正②205A、③ 239A、⑥52A シウ、嘉② 205A(去)	授 建⑤151(上)	
影	優 清⑦20 イウ(平軽)、			

¹⁵³ 建武本の本文の字体は「瘦(生母・宥韻)」に作るが、正和本、嘉暦本、通志堂本『經典釈文』は「慶」に作るため、「慶」と同字として扱う。

	<p>正⑩52 音憂 憂 正②209A イウ(平)、 ③249A イウ 稷 正⑨190A 音憂 上、 ⑨191A イウ(平)、正⑨ 159(平)音憂、159A イウ (平)</p>			
曉		<p>朽 正③50 香久反、③ 50A キウ(上)、嘉③50 香 久反、③50A(上)、正③42 香久反、③42A キウ(上)</p>	<p>嗅 正⑤255 許又反、正 ⑤220 呼又反</p>	
羊	<p>由 清⑧12 イフ、正① 162A、①176、③25、③34、 ④194A、⑨52 イウ、③ 169、⑥241、⑨42(平)、嘉 ①161A、①175、③25、③ 27、③34、⑥241、⑦17、 ⑦20A、⑨42(平)、④194A ユウ、正①137A、⑤106 イ ウ(平)、①150 イユウ(平)、 ③21、⑥129 イユウ、③23、 ⑤58 ヌウ(平)、③143(平)、 ⑥42、⑥47、⑥60、⑥85、 ⑥201、⑨35 ヌウ、⑥76、 ⑥80 イウ、甲④108A ヌ 遊(游) 清⑦13 イウ、⑧ 115、⑧115A イフ 命、正 ①145、③198 イウ、② 213(平)、④19A イウ(平)、 正①123 イユウ、⑥10、⑩ 36 ヌウ、⑧174 イユウ(平)</p>	<p>稽 △ 正⑨115A ケウ・羊 久反、嘉⑨116A ヌ(上)羊 久反、正⑨96A イウ(上)⇒ 「稽」 牖 正③184 由久反、⑤ 233A イウ・由久反、嘉③ 184 由久反、⑤234A イフ (上)由久反、正③155 由久 反、⑤201A イウ(上) 誘 正⑤58A イウ(上)、⑤ 64A イウ、嘉⑤58A イウ (上)、正⑤50A(上)、⑤55A イウ(上)</p>		
于	<p>尤 正①182A イウ(平)、 嘉①181A イウ(平)、正① 154 于求反、①154A(平)</p>	<p>友 清⑧30A、⑧111 イ ウ、⑧111 イウ(去)、正① 54 イウ(上)、①73、①199 イウ、嘉①53、①72、① 198、①200A、②214(去)、 正①46、①169 イユウ (去)、①62 イウ(去)、②181 ユウ、③109、⑦117、⑧ 168、⑧173 イユウ、甲⑧ 30A、⑧129 イフ、⑧ 133(去) 有 清⑦2A イウ、⑦7A イフ、正①43、①60A、① 94、①106(上)、④61A イ ウ、⑨141A ウ(上)、嘉① 42、①59A、①105、②23、 ⑦7(上)、①43A イウ、正 ①36、②18、④146、⑥40 イユウ、①90、④39、⑥10、 ⑥75、⑥183、⑥216、⑦6、 ⑦40、⑦53、⑧114、⑧132 ユウ、①110、⑤164、⑩135 イウ、文⑦114(去)、甲④ 97(上)</p>		
来	<p>劉 嘉①12 リウ、正①2 □ ウ 流 正④97A(平)、嘉④ 97A(平)、正④80A、⑨114 リウ(平)、⑨152A、⑨ 155A(平)、⑩60 リウ</p>	<p>柳 清⑧38 イウ(上)、正 ⑨153(上)、嘉⑨154(上)、 正⑧48、⑨182 リウ、⑨128 リウ(上)</p>		
日	<p>柔 清⑧24A、⑧112 シ ウ、正⑧37A(平濁 A・上)、 ⑧205 シウ、⑨78A シウ (平濁 A)、正⑧170 シユウ (平)、⑨65A、⑨65(平)、文 ⑧20A、⑧154 シユ(平濁 A)、甲⑧23A シ□(平濁 A)、⑧130 シユ</p>			
51	侯	厚	候	
明		<p>畝 清⑦86、⑦87A ホ、 正⑦293 ホ(上)、嘉⑦292 ホ(上)、正⑦244 ホ、文⑦ 210(上) 母 正④234A ホ(上濁 A)、嘉②199(上濁 B)、④ 234A(上濁 A)、正①60 ホ (上)、①121、②165、②169、 ⑥13 ホ、⑨103 ホ 牡 正⑩120 ホ(上濁 A 命) 音某、⑩122A ホ(去濁 A)</p>		

		茂后反、 嘉 ⑩120(去濁A)、 ⑩ 122A ホ(去濁A)、 ㊦ ⑩100 ボ(上)茂古反		
端		斗 𠄎 545A(上)、 𠄎 ③152A 下、⑦108、⑦109A、 ⑩ 135A(上)、 嘉 ⑦108、⑦109A、 ⑩ 135A(上)、 ㊦ ⑦90 ト	𠄎 𠄎 478(去)、 𠄎 ③120 トウ、 𠄎 ③87A トウ(去)、 ⑧ 220 トウ(去)丁豆反、 嘉 ③87A(上濁A)、 ⑧ 220(去)丁豆反、 ㊦ ③73A、 ⑧ 182 トウ(去)、 ㊦ ⑧167(去)、 ㊦ ⑧140 トウ ^ㄩ (去)丁豆反	
透	儻 𠄎 ④156 他侯反、 嘉 ④156 他侯反、 ㊦ ④130 他侯反、 ㊦ ④86 他侯反	𠄎 𠄎 426A トウ(上)、 𠄎 ⑧33A トウ(上)、 𠄎 ⑧51A トウ(上)、 嘉 ⑧51A チウ(上)吐口反、 ㊦ ⑧42A トウ(上)吐口反、 ㊦ ⑧31A トウ(上)、 ㊦ ⑧32A トウ ^ㄩ (上)吐口反		
定	投 𠄎 ③248A、③251A、③253A トウ、 嘉 ③248A、③253A トウ(平)、③252A(平)、 ㊦ ③210A、③212A、⑥120A(平)		豆 𠄎 ⑧3 トウ(去)、 𠄎 ④174 トウ、 ⑧ 4 トウ(去)、 嘉 ④174(平軽)、 ⑧ 4(去)、 ㊦ ④146 トウ、 ⑧ 3 トウ(去)、 ㊦ ④97 トウ(平)、 ④ 97A トウ	
泥		穀 𠄎 ③87A トウ(上濁A)奴斗反、 嘉 ③87A トウ(平)如斗反、 ㊦ ③74A トウ(上)奴斗反		
見	溝 𠄎 284 コウ(平)、 𠄎 ⑦5A、⑦53、⑦54A コウ、 嘉 ④248 コウ(平軽)、④249A、⑦169A(平軽)、⑦242 コフ(平軽)、⑦243A コフ、 ㊦ ④207、⑦141A、⑦203 コウ(平)、④208A コウ、④208A コウ、④249A、⑦170A、⑦243(平)、 ㊦ ⑦115A コウ、⑦171A コウ(平軽)	苟 𠄎 ②147A コウ(上)、 嘉 ②147A コウ(上)、 ㊦ ②124A コウ(上)		
溪	搥 𠄎 ⑤168A 苦侯反、 ㊦ ⑤145A 苦侯反	𠄎 𠄎 ⑧57A(上)、 ㊦ ③15 コウ、 ⑨ 83 コウ(上)、 ㊦ ⑧60A コウ 叩 𠄎 ⑦119(去)、⑦120A コウ(上)、 𠄎 ⑤45、⑦350A 音口、⑦351A コウ(上)、 嘉 ⑦350 音口、⑦351A(上)、 ㊦ ⑤39 音口、⑦293A コウ(上)、 ㊦ ⑦255A コウ(上)	寇 𠄎 ③158A コウ、 嘉 ③158A コウ(去)、 ㊦ ③133A(去)	
疑		耦 𠄎 ⑨177 コウ(上濁A)五口反、 嘉 ⑨178(上濁A)五口反、 ㊦ ⑨147 グウ ^ㄩ (上)音偶、⑨149A コウ(上)		
精			奏 嘉 ②117A(去)	
匣	侯 𠄎 ①5 コフ(平)、①17、①19、①32、①34(平)、①36 ウ(平)、①60A コフ(平)、 嘉 ①4、①16、①33、①59A、②78A(平)、 ㊦ ①4、①14、①16、①27、①29、①30、⑥134、⑦194、⑧153 コウ	厚 𠄎 ④157A コウ、 ㊦ ④131A コウ(去)、 ㊦ ⑦173A(去)、 ㊦ ④86A コウ(去) 后 𠄎 ⑦2A、⑦3A コウ、 嘉 ②94(去)、⑦166A コフ、 ㊦ ②79 コウ(平)、 ⑩ 101 コウ(去)、 ⑩ 102A(去) 後 𠄎 ⑦5A、⑦36A、 ⑧ 91 コウ、 𠄎 ③233A(去)、 嘉 ⑤26(去)、 ㊦ ⑤22 コウ(去)、⑤92、⑧133 コウ		
来			陋 𠄎 ⑦88 ロウ、 𠄎 ③190、④141A ロウ(去)、⑦296A ロウ、 嘉 ③190(去)、④141A ロウ(去)、⑦296A ロウ、 ㊦ ③160 ロウ、④117A ロウ(去)、 ㊦ ⑦213A へイ[ママ]、 ㊦ ④76A ロウ(去) 鏤 𠄎 ③84A ホウ、 嘉 ③84A(去)、 ㊦ ③71A ロウ(去)	
52	幽	勳	幼	
見		糾 (^糺 ・ ^糾) 𠄎 ⑦42、⑦44A、⑦48 キウ、 𠄎 ⑦		

		227 キウ(上)居黝反、 嘉 ⑦226 キフ・チウ ^音 (上)居黝反、 ⑦ 229A キフ、 隸 ⑦189、 ⑦ 197 キウ、 文 ⑦158 キウ(上)、 ⑦ 161A キウ		
影	幽 清 ⑧103A イウ、 甲 ⑧119A イウ		幼 嘉 ④181A エウ(去)、 隸 ⑦291 ヨウ ^左 、 ⑨ 176 イウ・ヨウ ^左 (去)、 甲 ④101A イフ	
15 深摂				
53	侵(甲)	寢(甲)	沁(甲)	緝(甲)
精			浸 群 301 シン(去)、 正 ⑥200 シム(去)子鳩反、 ⑥ 203 シム、 嘉 ⑥200(去)子鳩反、 隸 ⑥166 シン ^左 (去)	
清		寢 正 ③49 七寝反		
從				集 正 ①32 シツ(入軽)、 嘉 ①31(入軽)、 ① 36 ツ(入)、 隸 ①26 シツ
心	心 隸 ⑧146A(平)			冊 隸 ⑨121 シシユウ
邪	尋 正 ①166A(平)、 嘉 ①165A(平)、 隸 ①140A(平軽)			習 隸 ①33A シフ(入)
章			枕 正 ④58 之鳩反、 隸 ④48 之鳩反、 甲 ④28 之鳩反	執 正 ④38、④65 シツ、④67A シフ、 嘉 ②64A シウ、④38 ツ(入)、④65 ツ・シウ ^左 、 隸 ②53A(入軽)、④31 シツ、④54 シツ・シフ ^左 、 甲 ④32 シフ、④33A(入)
書	深 清 ⑧69A シム ^音 、 ⑧ 122A シム、 嘉 ③68A(平軽)、 甲 ⑧143A シム	審 正 ⑤254A シム	深 正 ④249A 尸鳩反、 嘉 ④249A 尸鳩反、 隸 ④208A、④208A(去)	
常	謹 正 ⑦179 シム(平)市針反、 嘉 ⑦178 シン(平)、 隸 ⑦149 シム(平)、 文 ⑦122 シン ^左 (平)市針反、 ⑦ 125A シン			十 清 ⑧103、⑧104A シフ、 正 ①7、①8、①16(入)、 嘉 ①3、①59A、①130、③46(入)、 隸 ①3、①6、①6、①13、①110、①113、①175、③39、③78、④51、④193、⑤93、⑥109、⑧153 シフ、①112、①114 シウ、③112 ジフ、 甲 ④30 シウ ^音 、⑧118 シツ 仕 群 311A(入)
影				揖 正 ②30 イウ、④115 イフ(入)一入反、⑤157、⑤175 イツ、⑤159A イフ、 嘉 ②30 イフ(入)、②31A イフ、④115 イフ(入軽)、⑤157 イツ、 隸 ②24 イフ(入)、④95 イツ(入)一入反、⑤136、⑤150 イツ、 甲 ④60 イフ(入軽)一入反
羊	淫 清 ⑧35 イム(平)、 ⑧ 36A、⑧115A イム、 正 ②92 イム、⑦24A(平軽)、 ⑧ 53、⑨99A(平)、 嘉 ②92、③258A(平)、⑦24A(平軽)、 隸 ②77、④201A イン、③180A、⑦19A、⑨82A、⑨109A(平)、⑧43 イン(平)、 文 ⑧160A イン(平)、 甲 ⑧34 イン ^左 、⑧135A イン			
来	林 嘉 ②16(平)、 隸 ②13、②22 リン、⑨162A(平)			立 清 ⑦36A、⑧38A リウ
日	任 清 ⑧86 シム、 正 ③137A(去濁 A)音壬又而鳩反、④186(平濁 A)、 ⑧ 152(去濁 A)音壬、 嘉 ③137A(去濁 A)音壬又而鳩反、④185(平濁 A)、 隸 ③116(去)音壬而鳩反、④155 シン(去濁)、④157 ジン(去)、⑧125 ジン(平)、⑧126A(平)、 文 ⑧112(平濁 A)音壬、 甲 ④105A(去)、④106A(去濁 A)、⑧96 シン(平濁 A)音壬、⑧96A(平)	任 正 ⑨78 而審反、⑨78A シン7、 嘉 ⑨77 而審反、 隸 ⑨64 而審反、⑨65A シム(去) 飪 正 ⑤204 シム(上濁 A)而甚反、 嘉 ⑤204(上濁 A)而甚反、 隸 ⑤175 ジン(上)而審反	任 群 343、448、496、564A(去濁)、 清 ⑦61A、⑧15A シム(去)、 正 ⑦132A、⑧23A、⑨39、⑩163A(去濁 A)、 嘉 ③9A、⑦8A、⑦69A、⑦131A、⑩163A(去濁 A)、 隸 ③7A(去 ^音)、⑦6A、⑦56A、⑦110A、⑦213A、⑧18、⑨32、⑩136A(去)、 文 ⑦86A(去)、⑧32A シン(→平声) 枉 清 ⑦51A シム(上)、⑦51 シム、 正 ⑦240A(去濁	入 甲 ⑧134A シウ(平濁 A)、 正 ③216A、⑤181A シウ、 嘉 ③216A(入軽濁 A)、 隸 ⑩30 ジフ

	(→去声)		A)、 嘉 ⑦239A シン(去濁A)而審反、 隄 ⑦200A シム(上)、 ⑦ 201 シン(上)、 文 ⑦168A シン(上濁A)、 ⑦ 169 而審反	
53	侵(乙)	寢(乙)	沁(乙)	緝(乙)
澄	沈 清 ⑧115A チム、 正 ⑧211A チム、 隄 ⑧175A チム(平)、 文 ⑧160A チン(平)、 甲 ⑧135A チム(平)	朕 正 ⑩127 チン、 嘉 ⑩127 チム、 隄 ⑩106 チム _左		
見			禁 正 ⑤209A キム、 隄 ⑤180A(去)	急 正 ③155 キウ、 隄 ②132A(入)、 ③ 132 キウ・キウ _左 給 正 ③19 キウ(入)、 ⑥ 118A キウ、 嘉 ③18(入)、 隄 ③15 キウ(入)、 ③ 17A キフ
溪	袞 正 ④160A キム・苦今反、 嘉 ④160A 苦今反			
群	禽 清 ⑧38A キム(平)、 正 ①82(平)、 ⑨ 238A(平濁A)、 嘉 ①81(平軽)、 隄 ①69 キン(平)、 ⑨ 199A(平)、 ⑩ 84 キン、 文 ③38A(平)、 甲 ③38A キン(平)			
生	參 (參) 清 ⑧18 シム、 正 ①53 所金反又七南反、 ② 188 シム(平)所金反、 ⑧ 28 シム・所金反 _{補上} 、 嘉 ①52A(平軽)所金反又七南反、 ② 188 シム(平)所金反、 ⑧ 28 シム・所金反、 隄 ①44A(平)所金反、 ② 159 シム・所金反、 ⑥ 58 シム、 ⑧ 23(平)音心所金反、 文 ⑧13 シン _左 (平軽)所金反			
莊			諧 (諧 *) 匪 ③01(去)、 隄 ⑦37A(去)、 ⑦ 94A シム(平・去)、 正 ⑥200 シム・側鳩反、 ⑥ 203 シム、 ⑦ 219A シン、 ⑦ 308A シン(去)側鳩反、 嘉 ⑥200(去)側鳩反、 ⑦ 217A(去)莊鳩反、 ⑦ 308A セン(去)側鳩反、 隄 ⑥167、 ⑦ 257A シム(去)、 ⑥ 169 シン、 ⑦ 182A(去)、 文 ⑦152A シン _左 、 ⑦ 222A 側鳩反	
影	陰 清 ⑦112A イム、 隄 ⑨119A イム(平)、 ⑩ 54A イン、 文 ⑦242(平) 音 嘉 ②117A(平)	飲 正 ①153A(上)、 ③ 189 イム(上)、 ④ 245、 ⑤ 217 イム、 嘉 ①152A、 ③ 189(上)、 隄 ①130(上)、 ③ 160 イン(去)、 ④ 204 イン(上)、 ⑤ 187 イン(→去声)	飲 正 ②30 於鳩反、 隄 ②25、 ② 25A、 ② 26A(去)(→上声)	邑 清 ⑦17、 ⑦ 25A、 ⑦ 36A、 ⑦ 38A イウ、 ⑧ 91A イフ、 正 ①10 イフ(入軽)、 ② 73A イフ、 ③ 37 イウ、 ③ 177A(入)、 嘉 ①9、 ② 73A、 ② 122A、 ③ 37、 ③ 38A、 ③ 38A、 ⑦ 87A(入)、 隄 ①8、 ⑦ 159 イユウ、 ③ 31 ユウ(入軽)、 ③ 112 イフ、 文 ⑦131(入軽)
曉				翕 正 ②117 キフ(入濁A)許及反、 嘉 ②117 キフ(入)、 ② 118A キウ、 隄 ②98 キフ(入)許及反
16 咸撮				
54	覃	感	勘	合
端				答 (答) 正 ①118 タウ、 嘉 ①117A(入)、 隄 ①100A、 ② 91A、 ⑥ 79A(入)
透	探 正 ⑧236 吐南反、 嘉 ⑧236 吐南反、 甲 ⑧150 吐南反 貪 清 ⑧92A タム(平)、 ⑧ 121A タム、 正 ⑤125A タム(平)、 ⑧ 165A、 ⑧ 221A タン、 嘉 ⑤125A タン _秣 、 ⑤ 125A タン _秣 (平)、 ⑦ 128A(平)、 隄 ⑧136A、 ⑧ 184A(平)、 文 ⑦103A(平軽)、 ⑧ 123A タン、 ⑧ 168A タン(平)、 甲 ⑧105A タン			

	(平)、⑧141A タン ^平 (平)			
泥	南 正①22(平)、嘉①20、 ③256、⑦115(平)、建①18、 ③115、⑥15、⑨57 ナン 男 正①39A(平)、嘉① 38A(平)			
見		感 清⑧35A カム、正⑧ 54 A カム、建⑨140 A (上)、田⑧34A カン	紺 正⑤181 カム(去)古 暗反、⑤182A コン、嘉⑤ 181(去)古暗反、建⑤156 カン(去)古暗反、⑤ 157A(去)	
清	三 [△] 正④240 七南又音 三⇒「麥」			
従				雜(雜) 正③164A サウ、 建③139A(入)
影			闇 正⑩65A(去)、嘉⑩ 65A(去)、建⑩54A アン (平・去)	
匣			憾 正③125 戸闇反、③ 125A カム(上)、嘉③125A (上)、建③105 戸闇反、③ 106A カム(上)	合 正②51A カウ、嘉② 50A(入濁A)
55	談	敢	鬮	盍
定	澹 正③201 タム(平)待 甘反、嘉③201(平)待甘 反、建③170 タン(平)徒甘 反音談			
見		敢 群⑤14 カン、嘉③ 171A(上)、⑦33(去)、⑦ 137A カン、正③171A、⑦ 138A カン(上)、⑨138 カ ン(去)、建③144、⑦ 115A(上)、⑨115 カン(上)、 文⑦91A(上)		
従	暫 清⑦62A サム、正⑦ 258A サム(平濁A)、嘉⑦ 257A サン(平)、建⑦215A サム(平・去)、文⑦182A サ ン(平)			
心	三 清⑧141 サム ^音 、正 ①59A、①92、②121A(平 軽)、嘉①58A、②78A、② 104、④32(平)、②121A(平 軽)、建④200、⑥110 サン、 ⑦32(平)(→去声)		三 正①53 如字又息暫 反、③101、⑤255、⑥19、 ⑨154 息暫反又如字、嘉⑨ 155 息暫反、建①45 息暫 反、③74、③74、④122、 ⑥15、⑨129(去)、③85(去) 息暫反、⑤220(去)息暫反 又如字 ^平 (→平声)	
匣				盍 群③10A カツ(入)、正 ③123 戸臘反、⑥221 胡臘 反、⑥222A カウ(入)、嘉 ⑥221 胡臘反、⑥222A(入 軽)、建③104 戸臘反
来			濫 清⑧8 ラム(去)、⑧ 8A、⑧9A ラム、正⑦ 24A(去)力暫反、⑧13 ラム (去)力暫反、嘉⑦24A(去)、 ⑧13 力暫反、建⑦19A ラ ン(去)力暫反、⑧10A ラム (去)力暫反、文⑦3A(去)、 田⑧7 ラム(去)口口反、⑧ 7A ラム ^平 、⑧8A(去)	
56	塩(甲)	琰(甲)	艷(甲)	葉(甲)
精				接 清⑦102A セウ、正⑤ 192A セツ、⑦321A、⑨ 166(入)、⑩9A セウ(入)、 嘉⑦321A(入)、⑨167A(入 軽)音接 ^平 、建⑤165A(入)、 ⑦268A セウ(入)、⑨139 セ フ・セウ、⑩7A セウ、文 ⑦232A セフ
清				妾 清⑧144A セウ(上)、 正⑧260A セウ、嘉⑧ 260A セウ、田⑧167A セ ウ ^左
従				捷(捷) 正③20A セフ (入軽)、④166A セフ(入)以 [ママ]接反、嘉③20A セフ (入軽)、④166 セウ・似接 反、建③17A セフ(入)、④ 139A セフ(入軽)、田④

				92A セフ(入)似接反
章	瞻 建⑩130 セム			
昌	禱 正⑤158 セム(平)赤古[ママ]反、嘉⑤158(平)赤如反、⑥160A セン(平)、建⑤137 セン(平)赤占反、⑤138A(平)			
書				撰(攝) 正②105、⑥127A セツ、嘉②60A、②105、②106A(入)、建②88 セツ(入)、④152A(入)、⑥106A セフ、甲④102 セツ葉 群③77 セフ、正④67、⑦85 セフ(入)舒涉反、⑦91 セフ、嘉④67 セウ ^合 (入軽)、⑦85 セフ(入軽)、⑦91 セフ(入)、建④56 セウ・セツ ^左 ・音撰・舒涉反 ^右 、④57A セウ、⑦70 セツ・舒涉反音撰 ^右 、⑦75 セツ、文⑦50 セフ(入軽)舒涉反、甲④33 セフ・舒涉反、④34A セフ(入軽)、④34A セフ
影		厭 正③257 於琰反又於艷反(→去声)	厭(厭) 清⑦31(去)、正④6、④130、⑦212 於艷反、⑤200 於艷反 ^上 、嘉④6、④130、⑦211 於艷反、建④4、⑤172 於艷反、⑦177(去)、甲④69(去)(→上声)	
羊			艷 清⑧75A エム(去)、正⑧131A ン[ママ]・以驗反、嘉⑧131A(去)以驗反、文⑧95A 以驗反、甲⑧82A エン(去)以驗反	
来	廉 正⑨94(平)、嘉⑨94(平)、建⑨78 レム(平)		敝 清⑧82A レム ^平 (去)、正⑥67 レム(去)、⑧144A レン、嘉⑥67、⑧144A レン(去)、建⑥55 レン(去)、⑧119A(去)、甲⑧92A レム(去)	
日		冉 正②23 セン(上濁A)、⑧139 セム(上濁A)、嘉②23、③18A(上濁A)、②25A(上濁B)、建②18、③163 セン、③14A(去濁)、③126 ゼン(上濁)、③129、⑥9、⑥10、⑥40、⑥75、⑥85、⑦40、⑦42、⑦53、⑦168、⑧114、⑧132 ゼン、③155A(上濁)、④39 ゼム		
56	塩(乙)	琰(乙)	艷(乙)	葉(乙)
知				輒(輒 [×]) 正④48A テウ(入)、④49A テウ、嘉④48A テフ(入軽)、建④40A テウ、甲④23 ロフ、④23A、④24A テフ(入軽)
徹		諂 正①109、①213、②87 勅檢反、嘉①212、②87 勅檢反、建①92、①181、②73 勅檢反		
群		儉(儉) 群②21(上)、清⑧32A ケム、正①87(上)、②18、④139 ケム(上)、②209A、⑤50A ケム、嘉①86、②19A、②105(去)、②18 ケン(上・去)、②103 ケン(去)、②104A ケン(上)、④139、⑤11(上)、④141A ケン、建①73、②86、⑤10 ケン(去)、②15 ケン ^左 、②16A、②87A、③41A(去)、②88、④116 ケン、甲④75 ケン、④76A ケム、⑧32 ケン(去)		
57	添	忝	楛	帖
端		玷 正②111 テム(去)丁念反、②112A(去)、⑥20A		

		丁簞反又丁念反、 嘉 ②111 テン(去)丁念反、 隸 ②93 テム・丁念反、②94 テム、 ②96A(去) 点(點) 正 ⑥118A テム、 ⑥141 テム(上)、⑥ 152(上)、 嘉 ⑥119A、⑥ 141、⑥152(上)、 隸 ⑥99A、 ⑥126 テン(上)		
見	兼 正 ②106A(平)、 嘉 ② 106A(去)			
溪	謙 清 ⑧144A ケム、 正 ② 167A ケン(平)、④129A ケ ム、⑧260A ケム、 隸 ② 141A、④107A、⑥81A、⑥ 109A(平)、 文 ⑧202A(平 軽)、 甲 ④69A(平軽)、⑧ 167A ケン(平)			
精			僭 正 ②7A セム(去)子念 反、②114A(去)、③83A セ ム・子念反、④69A セム (去)、④141A セム、 嘉 ② 7A セン(去)子念反、② 114A、④69A(去)、③83A 子念反、④141A セン、 隸 ②5(去)職鳩[ママ]反、② 96A、④57A(去)、③70A 子 念反、④117A セム(去)、 甲 ④34、④76A セム(去)	
58	咸	賺	陷	洽
見				裕 正 ⑥150A カウ、 嘉 ⑥ 150A カウ・古合反、 隸 ⑥ 124A 古洽反
匣				裕 正 ②50A カウ(入)戸 夾反、 嘉 ②50A(入)戸夾 反、 隸 ②41A カフ(入)
59	銜	檻	鑑	狎
見			監 正 ②67 古暫反、② 69A カム(去)、 嘉 ②67 古 暫反、②69A カン _平 (去)	甲 清 ⑧90A カウ(平)、 正 ⑧161A カウ、 甲 ⑧102A カフ
崇			謹 清 ⑦96A サム、 正 ⑦ 310A(去)、 嘉 ⑦310A サ ン(去)、 文 ⑦224A サン	
匣		檻 群 ④51A カン(去)、 清 ⑧89A カム(去)、 正 ⑧ 159A カン(上)、 嘉 ⑧ 159A(上)戸覽反、 隸 ⑧ 131A カム(去)戸覽反、 文 ⑧118A カン(去)戸覽反、 甲 ⑧101A カム		押 群 ④50 カフ、 清 ⑧89 カフ、⑧89A カウ、 正 ⑧ 158 カフ(入)戸甲反、 嘉 ⑧ 158 カフ(入)戸甲反、 隸 ⑧130 カフ(入)戸甲反、 文 ⑧117 カウ(入)戸甲反、 甲 ⑧100 カフ(入)戸甲反 押 正 ⑤242、⑧226 戸甲 反、 嘉 ⑤243、⑧226A 戸 甲反、 隸 ⑤208 戸甲反、 甲 ⑧144A 戸甲反
60	嚴	儼	醜	業
疑	嚴(嚴) 嘉 ①192A(平濁 A)、④144A ケン、 隸 ① 164A(平)、④144A ケン (平)、⑤186A ケム、⑩26 A ケン(平)、 甲 ④96A ケ ン(平)	儼 群 ⑤59 ケン(上濁)、 正 ⑩30 ケン(上濁A)魚檢 反、⑩155(上濁A)宜檢反、 嘉 ⑩31、⑩155(上濁A)、 隸 ⑩25 ケン、⑩130 ゲン (上)		業 嘉 ①39A(入輕濁A)
61	凡	范	梵	乏
非				法 清 ⑧2A ハウ、 正 ④ 226A ハウ、⑤110 ハフ、 嘉 ①56A、①125A、① 135A、②129A(入)、 隸 ① 48A ハウ、⑤95、⑨158A ハフ、⑩112 ハツ
敷		汎 正 ①68 字劔反、⑩15 芳鋏反、 嘉 ①67 字劔反、 隸 ①57 字劔反		
奉	凡 正 ⑤131A ハム、 嘉 ⑤ 131A ハン			

2.2 尚書諸本分紐分韻表

清原家本：群書治要卷 24、天理本卷 11、

中原家本：元徳本 6、中原家本（+藤原式家本）：觀智院本卷 11、文和本卷 4

O 1 通攝				
01	東(直)	董(直)	送(直)	屋(直)
幫				漢 元 140 ボク・音ト ¹⁵⁴⁾
明	幪 群 21 ホウ			
端		董 群 55(上)		
透	通 觀 128A(平 ^朱)			
定	侗 觀 128 下ウ(平 ^朱)音同 ^上 、130A トウ 同 觀 182A、191、192A、194、194A、194、195A、196、197A、199、200A(平 ^朱) 桐 群 204A(平)	動 元 210A トウ、群 80A(上)		獨 元 109 トク
見	功 元 220A(去 ^朱)、232 コウ		貢 觀 136 勅用反 ^上	穀 群 52(入)
清	聰(聰) 群 B(平 ^朱)、文 57 ソウ(平 ^朱)、57A(平 ^朱)			
從	叢 群 133 ソウ(平)			
心				速 文 44A(入 ^墨)
來				藎 群 15 ログ(入 ^朱) 鹿 元 223 ログ
01	東(拗)	董(拗)	送(拗)	屋(拗)
敷	豊 元 173 ホウ・芳弓反、 觀 154 芳弓反 ^右			覆 群 175A フク(入)、483A(入)、文 23A(入 ^朱)
奉				復 文 B(入 ^朱)(→奉母・宥韻) 服 群 19(入)、32、88A、272、337 フク、觀 233(入 ^朱)、文 37A(入 ^朱)、51 フク(入 ^墨)
微				晦 元 128 ボク・音茂、莫六反 ^上 、129 ホク、215 ホク ^左 牧 群 324 ホク(入 ^朱 濁 A)、元 125、129 ホク 睦 天 28A ホク ^左 、觀 14A ホク 穆 群 14(入 ^朱 濁 A)
知	中 群 61、389(平 ^朱)、觀 91(平 ^朱)如音或丁仲反(→去声)		中 觀 141(去 ^墨)音仲 ^右 、162A(去 ^墨)丁仲反 ^右 、164A(去 ^墨)、文 127 音仲 ^右 、127(去 ^墨)(→平声)	
徹				審 天 46 敷六反、觀 35 敷六反
孃				忸 群 153 チク(入 ^朱 濁 A)女六反
見	弓 觀 163 キウ			鞠 觀 237(入 ^墨)
溪				麴(麴*) 群 276(入)起六反
群	窮 群 40A(平)			
心				肅(肅) 天 61 シク、觀 53 シク(入 ^墨)、文 9A(入 ^墨)
章			衆 天 B6A(去 ^朱)、文 95A(去 ^朱)	祝 元 106A シク(入 ^朱 濁 A)
崇	崇 群 24(平 ^朱)			
常				塾 觀 166 シク(入 ^朱)音 ^朱 執 ^朱 音 ^朱 口 ^朱 一音 ^朱 育、167(入 ^墨)音 ^朱 執 ^朱 一音 ^朱 育 ^朱 合 ^朱 右、168A シク
于	熊 元 159 イウ、觀 227 イフ ^左 ・音雄			
來				戮 元 100、116、164A リク
日	戎 元 9A シユ、126 シ			肉 元 148A シク

¹⁵⁴⁾ 仮名音注の「ク」に入声点あり。

	ウ、140A シウ			
02	冬		宋	沃
端				督 群]56A トク
透			統 大]26A、31A トウ、 元]184A、193 トウ、 189A(上 墨)、觀]12A トウ	
定	彤 觀]117 トウ・徒冬反、 119A、179 トウ、180A ト ウ(平 朱)			毒 元]64、100 トク
見				告 群]39 コク(入)(→見 母・号韻)
溪				酷 群]179A コク、元]16 コク・苦毒反、97A コク、 99A コク(入 墨)
精	宗 群]151(平 輕)、觀 145(平 朱)			
影				沃 文]119、122A ヲク
03	鍾	腫	用	燭
知		冢 觀]11 テウ、元]183 テ ウ		
徹		寵 群]461(上)、元]34A テ ウ、文]80、112 テウ		
澄	重 觀]125(平 墨)直龍反 右(→去声)		重 觀]157 直用反、168A 直勇反右・直用反 下、元 92A 直用反右(→平声)	
見	供 觀]148(平 朱)音恭右、 197(平 朱)音恭右、197A(平 朱) 共 群]23 (平 輕)、觀 164A(平 墨)音恭右 恭 群]13A、101A(平 輕)、 513A ク 平ヨウ、觀 65A(平 朱)、文]56A(平 朱) 龔 文]56 ク 平ヨウ	拱 元]232 居勇反、233A キヨウ 谷墨、文]123 キヨ ウ(上 墨)		
精			縦 群]208(去)、文]44(上 朱)	
從	從(加*) 大]93 七容反、 觀]89 ショウ(平 朱)七容 反、元]46 才容反		從 大]43A(去 墨)	
邪				続(續) 群]132A ショク (入)
書	春 元]218A ショウ			
常				屬(屬) 觀]21(入 朱)朱音、 156A ショク、元]140A シ ョク 蜀 元]139 ショク
影	雍 觀]160A 於口反			
曉	凶 文]99、100A(平 朱)			勗 元]84 許玉反、85A ク キョク、156 許必反
羊	壻 觀]140A ユフ 容 群]337、338A ヨウ、 元]221 ヨウ 庸 群]19 ヨウ(平)、元 139 ヨウ	勇 元]127A ヨウ	用 群]52(去)	慾 文]44(入 輕 朱) 欲 群]208(入)
日				辱 元]212A ショク、文 18A ショク
0 2 江 攝				
04	江	講	絳	覺
幫				剝 元]67A ハク
明	龐 觀]46 武江反、47A ウ (平 朱)、文]56A マウ(平 朱)			邈 群]484 ハク
溪				慝 群]101A カク(入)
影				幪 觀]139A 於角反、 140A ヲク・於白反 右
匣			巷 元]223A カウ	
0 3 止 攝				
05	支(開甲)	紙(開甲)	寘(開甲)	
幫	卑 觀]230 必利反甫至反 左、元]105A ヒ			
明		敝 群]427 ヒ(上濁 A)		
群	岐 元]119A キ			
章	枝 觀]150A シ			
昌		侈 群]343A シ(去)、		

		459(上)、 大 51A(上 ^平)、 元 19 シ(上 ^平)尺氏反、 觀 40 式氏反又尺氏反、41A シイ(上 ^平)		
書	施 元 225A シ(平 ^平)			
常		諛 文 8A シ(去 ^平)		
羊			易 群 347A イ(去)	
来	離 群 312(平)、 元 74 リ 麗 大 62A リ・力皮反 _左 、 觀 54A リ _左 (平 ^平)音吏、 126 力馳反 _左			
日		遯 文 31 シ(上 ^平)		
05	支(開甲)	紙(開甲)	眞(開甲)	
幫	熊 元 159 ヒ・彼皮反 _左 、 觀 227 ヒ _左 ・彼皮反 _右 、 228 ヒ 跛 元 19 ヒ・彼皮反 _右 、 20A ヒ _合	俾 大 63 必尔反 _左 、 元 152 必尔反 _左 、205 必尔反 _右 、 觀 55 必尔反、141 必尔反 _右		
並	皮 元 175A ヒ		被 觀 115 皮義反扶為反 _左	
澄	池 元 19 チ			
群	奇 元 104 キ	技 元 104 キ、105A(去 ^平)		
疑	宜 元 43 キ(平 ^平)	蛾 觀 178 魚綺反	義 群 13A(去濁 A) 元 36 キ	
影		倚 大 92 於綺反、 觀 240A イ(上 ^平)於綺反、 文 6A イ(上 ^平)		
曉	犧 元 29 キ(平輕 ^平)		戲 群 124A キ(去)	
05	支(合甲)	紙(合甲)	眞(合甲)	
常	垂 觀 163 スイ _平 、174 スイ _左 、175 スイ、 元 233A スイ _合			
来		累 觀 126 ルイ、 元 111A ルイ		
05	支(合乙)	紙(合乙)	眞(合乙)	
疑	危 群 25、108A(平)、 元 212A グキ		偽(偽) 觀 42A キキ	
影		委 群 497(上)		
曉	麤 元 133 許危反			
于			為(爲) 元 33A 于偽反 _右 、209A 于偽反 _左 、 文 105(去 ^平)、105(去 ^平)	
06	脂(開甲)	旨(開甲)	至(開甲)	
幫		妣 群 27(上)		
並	猊 元 159 ヒ _平 ・音毗 _右 、 160A(平 ^平)音毗 _右		比 群 195 ヒ(去)、 308(去)、 元 57 ヒ・毗志反、 141 扶至反	
澄			地 元 96A チ _合	
見		几 觀 150、151A、156A、 184 キ		
群	耆 群 195(平)			
精	黍 元 29 シ(平 ^平)音咨			
清			次 觀 240(去 ^平)、 元 50 シ _合	
心	私 觀 156A シ、 文 96A シ		肆 群 83A(去)、 元 146A シ、 文 12A シ	
章			贄 觀 212A 音至 _右	
書	尸 觀 204 音師			
影	夷 群 32、164(平)、 觀 53、 54A、159 イ、 元 140A 半、 160A イ			
羊			施 [△] 觀 220A 以鼓反 肄 觀 126 以至反 _下 ・以自反 _上 ・以至反又以制反 _右	
来	黎 群 308 リ(平)力私反 _左 、 力兮反 _上 、 元 57 リ _左 ・ 力私反又力兮反 _右 、 57A(平 ^平)		莅 觀 36 音利又音類 _右	
06	脂(開乙)	旨(開乙)	至(開乙)	
滂	丕 觀 87 普悲反 _右			

明		美 文 58A(去濁 B [*])	媚 群 513 ヒ(去)	
澄			稚 群 196、428 チ	
孃	悞 群 153 チ(平濁 A)女 姫反 _左			
見			冀 群 148 キ(去)	
群			暨 元 183 其器反	
疑			劓 群 367 キ(去濁 A)魚 器反	
生	師 文 47(平 [*])			
章		底 觀 152 之履反 青蒲 反 _右 、153A シ、225 之履 反、元 43、195 之履反		
06	脂(合甲)	旨(合甲)	至(合甲)	
見		癸 元 131A、170、212 ク キ、觀 147 クキ		
群		揆 群 13 クキ(去)、 434(去)、天 12 キン(去 [*])		
從			萃(萃 [*]) 元 201 スイ(去 朱)	
邪			遂 觀 205A スイ(去 [*])	
羊	維 群 435A キ、天 13A キ		遺 觀 219(去 [*])唯季反	
06	脂(合乙)	旨(合乙)	至(合乙)	
澄			墜 群 151 ツイ(去)、文 22A ツキ	
見		兗 群 329 クキ、天 98 音 軌、元 152 キ・音軌、 153A(上 [*])、觀 94 キ _左 ・ 音軌 _右		
群	夔 群 126 クキ(平) 戮 觀 174 クキ(平 [*])音 遠几羸反 _右 、175A クキ(平 [*])		匱 元 20A 其愧反	
生			帥 元 139A スイ(去 [*])色 類反 _右	
07	之	止	志	
澄	治 觀 17A(平 [*])、天 31A(平 [*])(→去声)		治 群 60、102A、128A、 222、267、313、412(去)、 天 9A、9、10A、26A、77、 78A、94(去 [*])、元 75A(去 [*])直吏反 _右 、232 直吏反、 233A(去 [*])、觀 11A、11(去 [*])、12A、23A、71A、71、 72A、90A(去 [*])、111 直吏 反、文 65(去 [*])(→平声)	
見	箕 元 103A キ	己 群 211A キ、元 68 音 紀、145A キ・音紀、文 48A キ(去 [*])		
群	期 群 16A(平)、元 6A キ 、觀 40 キ(平 [*])、40A、 41A(平 [*]) 慕 觀 170 キ _左 (平 [*])音 其 _右 ・音文			
疑		擬 天 19A キ		
精	孜 天 80 音茲 _右 、元 107 シ _左 ・音滋、觀 74(平 [*]) 音茲 _右			
從	慈 群 13A(平)			
心	絲 元 208A シ			
邪		巳 元 171 シ 祀 元 29A(去 [*])、文 36 シ		
崇		卮 觀 171(去 [*])、171A シ(上 [*])		
章	之 觀 55 シ	止 文 26(上 [*])		
常			侍 群 140A(去)	
羊			異 觀 194、195A(去 [*])	
日		耳 群 112(上濁 A)	則 群 367 シ(去濁 A)如 志反	
08	微(開)	尾(開)	未(開)	
見	幾 群 108(平)音機、129 キ、觀 122 音機音畿 _左 、 137(平 [*])			

	機 [文]24 キ、25A(平 畢)、 67A(平 采)			
溪			氣(氣) [觀]73A キ	
疑			毅 [群]102 キ(平濁 A)、 [元]114 キ・牛既反	
影		辰 [觀]148(上 采)於豈反、 149A イ		
08	微(合)	尾(合)	未(合)	
非		匪 [元]208A ヒ		
微	微 [群]11、71、72A、108A、 129A、143A(平濁 A)、[元] 139 ヒ、[觀]190A(平濁 B 采)		未 [元]178、179A ヒ	
見	婦(歸) [觀]69A(平 采)、 [文]97(平 采)采合			
影	威 [群]361、361 半		畏 [觀]88、129、190(平 采)、136(平 畢)	
曉		旭 [群]157 ク半(上)		
于	違 [元]48A イ(平 采) 韋 [觀]170A 半		緯 [大]21A 禹畏反	
0 4 遇攝				
09	魚	語	御	
知			著 [元]119A チヨ(去 采)	
見	居 [觀]63A(平 采) 車 [群]119 キヨ(平 輕)、 20A、485 キヨ、119 キヨ・ 音居、[元]126、126A、126A シヤ(→昌母・麻韻開 3)	拳(擧) [元]81A キヨ、[觀] 47(去 采)		
溪		丟 [觀]240A 羌呂反		
群		巨 [元]223 キヨ		
疑			御 [群]62(去濁 A) 馭 [群]144 キヨ(去濁 A)	
從		沮 [觀]101A 在汝反 右		
邪		叙 [群]113A シヨ 兼合左 緒 [群]151 シヨ、[文]69 シ ヨ 兼合左(上 畢)		
崇			助 [元]33A ソ	
生	疏 [文]61A(平 采)			
昌		杵 [元]217 昌呂反、218A シヨ(上 采) 処(處) [觀]8A 昌慮反、 202A 昌呂反		
影	於 [文]95A ヨ(平 采)			
羊	余(餘) [大]62A ヨ	予 [群]180 ヨ	恣 [群]136 ヨ 豫 [群]461(去)、[觀]74(去 采)、[文]55A ヨ	
來	廬 [觀]240A ロ 閭 [元]221 リヨ	呂 [觀]142 リヨ 旅 [群]79A リヨ、87 リヨ (上)		
10	虞	麌	遇	
非	夫 [元]109 フ	斧 [觀]149A(上 采) 輔 [觀]148 音甫音補 右、 150、240A フ	傅 [大]23 フ、[觀]4、8(去 采)	
敷	敷 [群]18 フ(平 輕) 痛 [元]100 フ 左・音敷又 普胡反 右			
奉	扶 [大]62A フ	腐 [群]144A フ(上) 輔 [元]67 フ		
微	巫 [文]124 フ	侮 [群]394A フ(上濁 A)		
見			駒 [△] [觀]54A ク 左(去 畢) 俱 [△] 反・俱付反 右・口付 反 [△] 下	
群	瞿 [觀]174 ク 左(平 畢)其 俱反音懼・巨于反、175A ク(平 畢)		懼 [群]314A ク	
疑	虞 [群]11(平濁 A)、[文]24 ク 隅 [群]103A(平濁 A)			
精			足 [群]513A スウ	
從		聚 [元]202A シフ(上 畢)		
章	朱 [群]122(平)			
曉	吁 [群]523A ク		酗 [元]58 ク 左(去 采)況付 反 右	

羊	逾 𧇗 129 ヨ 采合・音餘		額 𧇗 60 音餘、61A ヨ (去 采)	
11	模	姥	暮	
幫	通 𧇗 58A ホ・布呉反 ^右 、 149 ホ(平 采)			
並			歩 𧇗 127A、154、171A ホ	
明			墓 𧇗 31A ホ(去 采)	
透		吐 𧇗 34A ト、𧇗 21A ト (上 采) 土 𧇗 21A ト		
定	𧇗 (圖) 𧇗 501(平) 塗 𧇗 159 ト(平)		度 𧇗 45、125A、137、 208、416(去)、𧇗 56 ト 左(去 采)、𧇗 146 ト(去 采) 旧音杜洛反 ^右 ・音杜 𧇗 上、 𧇗 25A、25A(去 采)、44(去 采) (→定母・鐸韻)	
泥	奴 𧇗 103A、222A ト	弩 𧇗 25A ト(上濁 B*)		
見	姑 𧇗 59 コ ^左 、59A コ 孤 𧇗 40A(平)、𧇗 23 コ、 𧇗 8 コ	股 𧇗 112(上)	故 𧇗 83(平) 顧 𧇗 112 工戸反 ^左 ・工 戸反 ^上 ・音固 ^右	
溪	割 𧇗 295 口孤反 ^右 、𧇗 21 クワ・口孤反	苦 𧇗 135A コ		
疑		五 𧇗 23 コ 午 𧇗 5、50 ゴ	悟 𧇗 131 五故反	
從	徂 𧇗 27 ソ(平)才枯反、 77A(平)		昨 𧇗 165 ソ ^左 ・才故反、 181 ソ	
影			惡(惡) 𧇗 79A、106A 烏 路反、𧇗 225A(去 采)	
曉	呼 𧇗 61A コ	虎 𧇗 127、175A コ、159 コ ^左		
匣	平 𧇗 144 コ(平輕)、 153(平)	戸 𧇗 149A コ	互 𧇗 199A 音護	
來	盧 𧇗 139 リヨ			
05 蟹撮				
12	齊(開)	薺(開)	霽(開)	
泥	泥 𧇗 160A(平濁 A)			
見	鷄(鷄) 𧇗 143 ケイ ^左			
溪		稽 𧇗 212(上 采)		
疑			羿 𧇗 138 ケイ(去濁 A)	
精	濟 𧇗 177 子西反・子詣 反	濟 𧇗 78 セイ(上)子礼 反、78 セイ	濟(濟) 𧇗 211 セイ・子 計反子礼反	
清	妻 𧇗 18A セイ			
從	齊(齊) 𧇗 226(平 采)(→ 去声)		噴 𧇗 198 才細反 ^右 齊(齊) 𧇗 198A (上 采)(→平声)	
心			細 𧇗 356(去)	
來	黎 𧇗 9、97、118 レイ (平)、136 レイ	禮 𧇗 276 レイ	隸 𧇗 222A レイ(去 采)	
12	齊(合)	薺(合)	霽(合)	
見	圭 𧇗 180、181A、195A ケイ、210、211A(平 采)			
匣			惠 𧇗 97(去)	
13			祭(開甲)	
並			幣 𧇗 210 ヘイ 采合	
澄			滯(滯) 𧇗 503A テイ(去)	
疑				
精			祭 𧇗 191、195A(去 采)、 195A セイ(去 采)、198A(去 采) 采合	
章			制 𧇗 89(去 采)	
常			誓 𧇗 7 セイ、142 セイ	
來			例 𧇗 158A レツ[ママ] (去 采) 励(勵) 𧇗 157A レイ 戾 𧇗 49A(去) 礪 𧇗 252 レイ(去)力世 反 ^左	
13			祭(合甲)	
羊			銳 𧇗 176 エイ 采合(去 采) 以税反 ^右	

日			納 𠂔]140 セイ(去濁 A) 内 𠂔]117 セイ _左 ・如銳 反 _右 120 セイ、元]3 イ(去 _墨)如銳反 _右	
13			祭(合乙)	
知			緜 𠂔]139 テイ(去 _墨)丁 衛反、139A テイ、148 テ イ(去 _墨)、152 テイ _左 、 153A、165 テイ(去 _朱)	
于			衛 元]179 エイ	
14			泰(開)	
幫			貝 𠂔]152、162A ハイ、 153A ハイ(去 _朱)、162 ハ イ(去 _墨)	
透			太 𠂔]340(去)	
14			泰(合)	
定			兂 𠂔]163 タイ _左 (去 _墨) 徒外反 _右	
15	佳(開)	蟹(開)	卦(開)	
見		解 𠂔]2A 佳賣反	懈 𠂔]134A(上)	
崇	柴 元]181 サイ(平 _朱)			
15	佳(合)	蟹(合)	卦(合)	
匣			画(畫) 𠂔]149A(去 _墨)胡 卦反 _右 、154 エ _朱 合 _左 (去 _墨)、154A クワ(去濁 B _墨)	
16	皆(開)	駭(開)	怪(開)	
見	階 𠂔]88(平輕)、𠂔]181 カイ		介 𠂔]180 カイ 戒 𠂔]116A カイ、𠂔] 22A(去 _墨)	
匣	諧 元]38A カイ(平)			
16	皆(合)	駭(合)	怪(合)	
見			壞(黷) 𠂔]222 音恠 怪(恠) 𠂔]123A クワイ (去)	
匣	懷(囊) 𠂔]68A 工衛反			
18	灰	賄	隊	
幫			背 元]57A ハイ _左	
滂			配 文]70A ハイ	
明			昧 元]129 マイ _左 ・音妹 _右 、214 マイ _左 ・音每 _右 、 文]20 マイ	
透			退 元]222A タイ	
定			慙 𠂔]368 徒對反 _下	
溪	魁 元]202A クワイ・苦 廻反			
疑				
心			碎 𠂔]134A スイ(去)	
曉		賄 𠂔]64A ワイ、𠂔]55 ワイ _左 (上 _墨)忽罪反・凶 倍反 _右 、63 ワイ(上 _朱)忽 罪反・凶倍反	誨 𠂔]252A(去) 頽 𠂔]115(上 _朱)音悔 _上 、116A クワイ(去 _墨)	
19	咍	海	代	
並		倍 𠂔]436(去)、𠂔]14 ハ イ(去 _朱)		
端			戴 𠂔]93A(去)、文]54A タイ	
透	給 元]57A タイ _左 ・他乘 反又音怡			
定	臺 元]18、223 タイ	怠 𠂔]50A タイ(去)、390 タイ、𠂔]36A タイ	代 𠂔]3 音代[ママ] _上 ・一 音大計反 速 𠂔]2 音代一音大計反 耐 元]98A 乃代反	
泥				
見		改 文]125A(去 _朱)		
溪		凱 𠂔]14A(上)		
疑			礙 𠂔]503A カイ	
精	戡 元]173 音載、173A サ イ・音才 災 文]46A サイ、100、 101A(平 _朱)	宰 𠂔]25(上 _朱)	載 𠂔]18 サイ	

清		采 群]114 サイ(上)、元 205A サイ、觀]151A サイ		
從	才 觀]113 音哉			
影	哀 群]532 アイ			
匡		亥 元]131A ガイ、212 カ イ		
来	来 群]50(平)		賁 元]224 力代反・音来	
20			廢(開)	
疑			又 群]105 ケイ(去濁 A)、 天]56A ケイ、觀]70 音刈、 文]124 ケイ・カイ 朱合(去)	
20			廢(開)	
非			廢(廢) 群]50A(去)、觀 80(去 朱) 朱合	
影			穢 元]47 エイ、60 エイ・ 於廢反 右	
06 臻撰				
21	真(開甲)	軫(開甲)	震(開甲)	質(開甲)
幫	賁 群]14、15A(平輕)			畢 觀]58、59A ヒツ
並		牝 元]143 ヒン・頻引反 又扶忍反		
見				吉 文]100A(入 朱)
溪				詰 天]31 起一反、觀]18 起一反
精	津 元]4A シム		進 觀]54A(平 朱)	
清	親 文]60 シン 左、61、 61A、61A(平 朱)			
從		尽(盡) 觀]213A 子忍反		
心			信 觀]124A(去 朱)	漆 觀]156 音七・七利反
章	振 群]87 シン(平輕)		震 元]210A シン	質 群]513A(入)
書				失 元]48A シツ
常	辰 元]169 シン		慎 天]42A(去 朱)、觀]53 シン 左、54A シム(去 朱)、 55、131A シム	
影	因 觀]151A(平 朱)			一 文]98(入 朱朱合)、102、 107(入 朱)、110(入 朱)
辛			胤(胤) 觀]161 イン(上 朱 朱合・去 朱)	逸 群]136(入)、378A イ ツ、觀]42 イツ 朱合(入 朱)、 文]55A イツ
来				慄 觀]131A 音栗 右 栗 群]101(入)
日	人 天]81 シン	忍 觀]99A シン 朱合(去 朱)	勿 群]356 シン(上) 刃 觀]158A、171 シム	
21	真(開乙)	軫(開乙)	震(開乙)	質(開乙)
並	貧 元]224A ヒン			
明				密 文]31 ヒツ
澄	陳 元]146A(平 朱)、觀]64 チン(→去声)		陳 觀]168A(去 朱)、元 132A(去 朱)直刃反 右、 213(去 朱)直刃反・音塵 右(→平声)	
孃				昵 群]268 チツ・女乙反、 308(入)、元]57 チツ・女乙 反 右
群			親 觀]27A、151A(去 朱)	
疑	龔 群]196A キン(平濁 A)、479A キン、天]100A キム、觀]97A(平濁 B 朱)魚 巾反 右			
22	諄	準	稕	術
見	均 觀]12A キム			
徹				黜 群]33 チツ(入輕)、天 3 勅律反、觀]27(入 朱)直 律反 右・丑律反
精			俊 群]7(去) 駿 文]21(去 朱) 元]180A シユン	卒 元]4A シユツ(入輕 朱)
心		筍 觀]155 息允反 右・息 允反 上、156 シユム		戌 元]181 シユツ
邪	循 群]77A シユン、141 シケン(平)、元]53A スキ ン(平 朱)		徇 群]52 似俊反 右、53A シユン(去 朱) 殉 群]194A シユン(去)	

章		準 大]19A シユム 純 觀]150 之允反又之潤 反		
昌		蠢 群]79A シユン(上)、 80A(上)		出 觀]80(入 ^平)、138 如 音尺遂反 ^右
船		楯 元]142A スキン・食 允反又音允		
書			舜 群]11(去)	
羊		尹 群]127(上)		
来				律 元]92A シン・リツ ^平 合
24	文	吻	問	物
滂	紛 觀]155(平 ^平) 芬 大]79A フム			沸 群]49(入)
並	墳 觀]163A フム 賁 觀]162 フン(平 ^平)扶 云反 ^右		分 觀]100A(去 ^平)	
明	文 觀]153A フン ^平 (平濁 B ^平)		聞 群]7A(去濁 A)	
見				屈 群]103A(入)
群	群 元]185 グン			
曉	助 群]5 クン(平軽)許云 反 ^右 勳 群]84(平)、元]23、190 クン 纏 觀]180A(平 ^平)許云 反 ^右		訓 群]146(去)、觀]70、 124(去 ^平)、129 キム、158 クキム、188 クキン、 22A(去 ^平)、28A(去 ^平)、 120 クキン(去 ^平)	
影				鬱(鬱) 群]153(入)
25	欣	隱	焮	迄
群			近 群]161A(去)、 31A(去 ^平)、元]170A(去 ^平)	
曉	欣 文]54 キン			
26	魂	混	懇	没
幫	賁 元]127 ホン ^平 ・音奔 右、觀]121A ホン・音奔			
明				殍 觀]62(入 ^平) 沒 觀]57(入軽濁 B)、109 ホツ ^平 (入濁 B ^平)
見	昆 元]148A コン	袞 群]115A コン(上) 緜(緜) 群]25 コン(上)		骨 元]148A コツ
溪			困 文]51 コン(去 ^平)、 52A(去 ^平)	窟 元]202A クツ ^平 ・口 忽反
疑				杌 群]26A コツ(入濁 A)
精	尊 觀]143A(平 ^平)			卒 元]127A、139A ソツ
影	温 群]102(平軽)			
曉	昏 群]80A、174(平軽)、 元]146A コン			忽 天]47 コツ、觀]35 コ ツ
来	論 群]157A(平)			
07 山攝				
28	元(開)	阮(開)	願(開)	月(開)
群			健 元]160A ケン(平 ^平)	
疑	言 觀]135A(平 ^平)			
曉			獻(獻) 群]118(去)	
28	元(合)	阮(合)	願(合)	月(合)
非	蕃 觀]211A 方表反 ^右	反 觀]29、140A(平 ^平)、 30A ハン		發(發) 群]329(入軽)、 24、197、223 ハツ、153 ハ ツ ^左
奉	燔 元]182 音煩			伐 元]82 ハツ ^平 、156 ハ ツ 罰 文]53 ハツ、54A ハツ
疑	元 群]31(平濁 A)		愿 群]101 クエン(去濁 A)音願	
影		琬 觀]158 エン ^平 ・紆晚 反 ^右 、159A エン(上 ^平)	怨 元]61A エム(去 ^平)	
于	爰 文]95A アイ(平 ^平)	遠 元]134A(上 ^平)(→去 声)	遠 元]35A(去 ^平)、 文]9A 于方反(→上声)	鉞 元]132 エツ ^平 ・音越 右、觀]173 音越 ^右
29	寒	旱	翰	曷
端	丹 群]122(平軽)	覃 元]13 丁但反 ^右 、 129 タン(上 ^平)、129 タム		旦 元]145A タツ・丹達 反
透			炭 群]160 タン(去) 元]185A タン	

定				達 觀]127(入 ^平)
泥	難 觀]133(平 ^平)(→去声)		難 觀]81A(去 ^平)(→平声)	
見	干 群]49A、88 カン(平 軽)、元]142A、175A カン、 觀]142 カム、144A カン			葛 群]163 カツ(入軽)
溪				渴 元]55A 苦葛反又苦蓋 反
精			讀 觀]193A(去 ^平)	
心			散 元]223 サツ・西旦反	
從	殘(殘) 群]179A サン、 元]19、82 サン			
影	安 觀]133A(平 ^平)			遏 群]28A アツ、元]203 烏未反
匣			駢 天]62A カム・戸旦反、 觀]54A カン(平 ^平)戸旦反 備上	曷 群]152A(入軽)
30	桓	緩	換	末
幫			半 觀]195A ハム	
並	盤 群]137 ハン ^平			
明				末 觀]190A ハツ
端	端 觀]44A タン	斷(斷) 元]106A タン 左(上 ^平)丁管反 ^平 (→去声)	斷(斷) 群]417A(去)、天] 49 丁乱反 ^平 、50A(去 ^平)、 觀]38 丁乱反 ^平 、92A(去 ^平) 丁乱反(→上声)	
透				脱 文]28A タツ
見	官 文]104A(平 ^平) 莞 觀]154A(平 ^平)音官一 音關 ^右	盪 觀]116A クワン(去濁 B ^平)音管股音灌		括 文]24A 故活反
溪	寬 群]63、100、163、 377A(平)、觀]89、89A(平 ^平)			
曉	謹 群]24 クワン(平軽)呼 端反、98 クワン(平)			
匣	桓 元]159 クワン、159 ク ワン ^平		暄 群]209A クワン、文] 46A クワン(去 ^平)	
来			乱(亂) 群]101 ラン(去)、 觀]31A、47A(去 ^平)	
31	刪(開)	澗(開)	諫(開)	黠(開)
明	蠻 群]32 ハン(平濁 A)、 元]140A、204 ハン		慢 群]394A(去)、元]32A マン	
見	姦 觀]18 カム、19A(平 平)		諫 元]67 チム・カン ^平 、 99A カン	
疑	顔 群]153(平濁 A)			
初				察 群]100A(入)
生				殺 群]61A、61A(入)、天] 32A(入軽 ^平)、元]16A、 67A、68A、100 サツ
31	刪(合)	澗(合)	諫(合)	黠(合)
疑	頑 群]195(平濁 A)、479A クワン、天]100 クワン ^平 、 100A クワム、觀]96 クワ ン(平濁 B ^平)、97A(平濁 B 平)			
32	山(開)	産(開)	禪(開)	鐺(開)
見	艱 觀]133(平 ^平)	簡 群]102(上)		
32	山(合)	産(合)	禪(合)	鐺(合)
見	鰥 群]360 クワン(去)			
33	先(開)	銑(開)	霰(開)	屑(開)
幫	邊 元]179 音邊 ^平			
明			暝 群]254 メン(去)莫遍 反	箴 觀]150 ヘツ(入軽 ^平) 眠結反 ^平 ・莫結反眠列反 左、150 ヘツ
透				養 群]25A テツ(入)
定		疹 元]113 徒典反	旬 元]179 テン、天]6 田 遍反 奠 觀]126 徒練反、181A テン ^平 、212A テム ^平	跌 群]401A テツ・田節 反
從	前 觀]166A セン			
心	先 文]56(平 ^平)			
影			宴 觀]156A エム	

暁		顯 元231A ケン、文20A ケン		
匣	賢 群70A(平)		見 觀211A 賢遍反	
来	隣 元46A レム			
33	先(合)	銑(合)	霰(合)	屑(合)
見				決 觀36A ケツ(入 ^奉)
影	淵(困) 元201 エン			
曉				血 元217 ケツ
匣	眩 群254 ケン(去)玄遍反			
34	仙(開甲)	獮(開甲)	線(開甲)	薛(開甲)
並			便 觀182A(去 ^奉)	
明		涵 群293 メン(去)、元15 メン ^左 (去 ^奉)面善反 ^右	面 觀166A メン	滅 元61A ヘツ
清	遷 群99A(平)			
心				襲 元105A セツ・息列反
章			戰(戰) 觀130A セム、元137A セム	
常		單(單) 文120 セン(去 ^奉)、121A(去 ^奉) 善 觀85A、100A、102A(去 ^奉)、文101A、108A、108A(去 ^奉)		
34	仙(開乙)	獮(開乙)	線(開乙)	薛(開乙)
幫			變(變) 文28(去 ^奉 來 ^奉 合)	別 觀100A 彼列反 ^右
並		辯 文79(去 ^奉)	下 ^右 觀186 皮彦反扶變反 弁 觀169 (去 ^奉)皮彦反扶變反 ^右 、171A(上濁 ^奉)	
明		冕 元205A ヘン、文37 音勉 勉 元85A ヘム、157A ヘン		
知				惹 群96 テツ、403 テツ(入)
徹				徹 觀201A 丑列反直列反
溪	愆 群16A エン(平)、63A エン、196 ケン、元154 去乾反			
群				桀 文88A ケツ
疑			彦 文21 ケン(去 ^奉)、22A(去濁 ^奉)	孽 文46A ケツ(入 ^奉) 孽 群209A ケツ、276(入濁 ^奉)魚列反
34	仙(合甲)	獮(合甲)	線(合甲)	薛(合甲)
清	悛 群297A セン、元27 七全反、28A セン(平 ^奉)			
邪	還 大4 音旋・音全 ^右			
羊	緣 觀150A 悅絹反			悅 觀114A エツ 說 群250、257、272 エツ
来				劣 元37A レツ
34	仙(合乙)	獮(合乙)	線(合乙)	薛(合乙)
澄	伝(傳) 觀146A 直口反			
08 效攝				
35	蕭	篠	嘯	
端	彫 觀154 テウ			
見	釧 觀133 善[ママ]遼反之肴反又音昭 ^右 ・姜遼反之肴反 ^上 、136 ケフ			
36	宵(甲)	小(甲)	笑(甲)	
滂			漂 元217 匹妙反・敷妙反	
明			妙 觀189 ヘウ ^左 (去 ^奉) 弥小反	
心			削 [△] 觀158A(去 ^奉)音笑 ^右 ⇒「鞘・鞞」(→心母・葉韻開)	
章	昭 群9(平 ^奉)		照 元117 セウ	

書			小 [△] 𠄎 23(去 ^朱)詩照反 右⇒「少」	
常			少 𠄎 8 詩照反 召 𠄎 111(平 ^朱) 邵 𠄎 204A セウ・上照 反 ^右	
影			要 𠄎 437A(去)、𠄎 15A(去 ^朱)	
羊	繇 𠄎 58 エウ(平)、𠄎 74 音由、177 音由 ^右			
日		擾 𠄎 102 セウ(上濁 A) 而小反音饒、𠄎 13 而小反 音饒・而小反音饒 ^{備上}		
36	宵(乙)	小(乙)	笑(乙)	
明	苗 𠄎 25、77(平濁 A)		廟(唐) 𠄎 113(去濁 B ^墨)	
知	朝 𠄎 18 テウ ^左 、𠄎 97 陟遙反 ^右 、213(平 ^朱) (→澄母)			
澄	朝 𠄎 24、26(平 ^朱)、 24A(平 ^墨)、116A 直遙反、 212A 直遙反 ^右 、𠄎 3A(平 ^墨)、 36(平 ^朱)直遙反、36A、 39(平 ^朱)	兆 𠄎 74 タウ、189A テ ウ	召 𠄎 208A(去)、𠄎 44A テウ(平 ^朱)	
見	驕 𠄎 40 音僑、41A ケウ			
群	喬 𠄎 223 ケウ			
影	妖 𠄎 123A エウ(平 ^墨)			
37	肴	巧	効	
幫	苞 𠄎 99A ハウ			
明		卯 𠄎 145 ハウ		
孃			撓 𠄎 103A タウ(去濁 A)	
見	郊 𠄎 81A、131、131A カ ウ、103 カウ ^左 、𠄎 67A カウ		教 𠄎 12A、59、 281A(去)、𠄎 19A、70A、 79A、126(去 ^朱)、127 カウ	
溪		巧 𠄎 98 カウ(上)、𠄎 104 カウ・苦孝反、 105A(上 ^朱)、𠄎 44A カウ		
38	豪	皓	号	
幫		保 𠄎 47(上 ^朱)	報 𠄎 224 ホウ	
並			暴 𠄎 175 ホウ(去)、𠄎 32A ホウ	
明	旄 𠄎 133 音毛 ^右		冒 𠄎 293(去濁 A)、𠄎 136 亡報反 ^{備上} 、𠄎 15 ホウ(去濁 A ^墨)莫報反 ^右 、 16A(去濁 A ^墨) 瑁 𠄎 181 ホウ ^{朱合} (去濁 B ^朱)莫報反、182A、191 ホウ	
端	刀 𠄎 158 タウ	倒 𠄎 216 丁老反		
透	洮 𠄎 115(平 ^朱)音逃 ^右 、 116A タウ(平輕 ^墨) 饒 𠄎 25A タウ(平)	討 𠄎 321A タウ		
定	桃 𠄎 150A タウ、𠄎 167A、177A タウ、176 タ ウ ^右 構 𠄎 26A タウ(上) 逃 𠄎 209A タウ、𠄎 58A タウ ^{墨合左} 、149 タウ 陶 𠄎 153(平)		盜 𠄎 29 タウ 蹈 𠄎 90A タウ(去)	
見	咎 𠄎 58 カウ(平輕)		告 𠄎 158A カウ(去)、𠄎 124A(去 ^墨)(→見母・沃韻) 誥 𠄎 157(去)、𠄎 204(去 朱合)	
疑	𠄎 [△] 𠄎 127 ケウ・カウ (平濁 B ^朱)五羔反 ^右 、 127A(平濁 B ^墨) 敎 𠄎 123 カウ(平濁 A)、 124A(平濁 A)、340 五羊反			
曉		好 𠄎 75、76A(上)(→去 声)	好 𠄎 104 呼報反(→上 声)	
來		老 𠄎 57 ラウ ^左 、𠄎 86A(上 ^朱)	勞(勞) 𠄎 135 ラウ、𠄎 43(去 ^朱)、128(平 ^墨)	
09	果撰			
39	歌	哿	箇	
見	歌 𠄎 213A(上 ^朱)			

溪		可 [文]72A(上 ^平)		
精		左 [文]104(上 ^平)		
影	阿 [文]6A(平 ^平)			
匣	何 [群]152A(平)		賀 [觀]53(去 ^平)	
40	戈(直合)	果(直合)	過(直合)	
定			惰 [群]50A、134A 夕(去)、 [元]96A 夕・徒臥反、[觀]36A 夕、[文]56A 夕	
見	戈 [元]142A、175A クワ 過 [元]66A (平 ^輕)	果 [群]102A(去)、[元]114 クワ		
清		脛 [群]133 サ(去)		
從			坐 [觀]151A(去 ^平)才臥 反、155A(去 ^平)	
曉			賃 [群]160 クワ(去)	
匣	和 [觀]163 クワ(→去声)	禍 [群]50A(去)	和 [群]9(去)、[觀]89(去 ^平) (→平声)	
1 0 仮撮				
41	麻(直開)	馬(直開)	禡(直開)	
見	嘉 [群]37(平)			
疑	牙 [文]25A 方	豸 [觀]129 五賀反 雅 [天]86A(上 ^平)		
影			亞 [元]137 ア	
匣		夏 [天]30A(去 ^平)、[觀] 16A(去 ^平)	暇 [群]377A カ(去)	
41	麻(拗開)	馬(拗開)	禡(拗開)	
邪	邪 [群]47(平)、[元]101A 似 嗟反 ^右		榭 [元]101A 音謝 ^右	
昌	車 [觀]162A シヤ・尺遮 反 ^{補上}			
船			射 [元]175A(去 ^平)	
羊		野(羣 [×]) [元]215 ヤ ^左		
41	麻(直合)	馬(直合)	禡(直合)	
見		寡 [群]361 クワ、[觀]222 クワ ^左		
知			咤 [觀]191(去 ^平) ^{知(來合)} 陟嫁 反又猶夜反 ^{補上} ・下故反又 音託 ^{補上}	
匣	侷 [群]486 クワ(平)苦瓜 反、487A クワ(平)		華 [元]167A、177A、 197A(去 ^平)、176(去 ^平)胡 化反胡瓜反 ^右	
1 1 宕撮				
42	陽(開)	養(開)	漾(開)	葉(開)
知		長 [群]127A、189、263、 283A、283A、309A(上)、 [天]13A 丁丈反 ^右 、[元]68A、 126A、177A(上 ^平)丁丈反、 92A(上 ^平)丁丈反、128A、 138、139、150、150A(上 平)、[觀]15A(上 ^平)、99A(上 平)誅丈反丁丈反 ^右 、 121A(上 ^平)丁丈反 ^右 、[文] 114(上 ^平)(→知母・平声、 澄母・去声)		著(着 [×]) [元]219A 張略 反
徹			暢 [文]120A チヤウ(去 ^平)	
澄	長 [觀]52A 直良反 ^右 (→ 知母・上声、澄母・去声)	杖 [元]132 直亮反	長 [觀]19A (上 ^平)(→澄 母・平声、知母・上声)	
見	量 [元]81A キヤウ			
溪	羌 [元]139 キヤウ ^左 ・起 良反 ^右			
群	彊 [群]103 キヤウ(平)			
疑				虐 [群]123 キヤク(入 ^輕 濁 A)、236 キヤク ^左 、[元]16 ギヤク、99A(入 ^濁 A ^平)、 [文]89(入 ^濁 B ^平)
精			將(將) [元]85A(去 ^平)子 匠反、157A(去 ^平)	雀 [觀]169 シヤク
心	廂 [觀]156 シヤウ		相 [天]21A(去 ^平)息亮反 ^右 、 [元]33 息亮反 ^右 、211 息亮反、[觀]6 息亮反 ^右 、 112、147A(去 ^平)、116A(去 平)、147(去 ^平)息亮反 ^右 、 [文]14(去 ^平) ^{知(來合)} 、15(去 ^平)、	削 [群]474A サク(入)、[觀] 89A サク(入 ^平)、93A サク (→心母・笑韻甲)

			129、129A(去 ^平)	
邪	庠 𠄎 331A シヤウ、 <u>元</u> 175A シヤウ 祥 <u>元</u> 72 シヤウ、 <u>文</u> 100 シヤウ	象 𠄎 114(上)、 <u>觀</u> 167A(去 ^平)		
莊				𠄎 <u>元</u> 97 側略反又七略反
生		爽 <u>元</u> 129、214 サウ、 <u>文</u> 20 サウ、20A サウ(上 ^平)		
章	璋 𠄎 194 音章 ^右 章 𠄎 8(平輕)		障 <u>元</u> 20A 之亮反	酌 𠄎 192A シヤク
昌			倡 𠄎 22(去 ^平)尺亮反、22A(去 ^平)、35 尺亮反	
書	傷 <u>元</u> 67A シヤウ		餉 𠄎 163A シヤウ ^合 左(去)、165A シヤウ	
常	裳 𠄎 178(平 ^平)	上 <u>大</u> 41A(上 ^平)時掌反、 <u>元</u> 92A(上 ^平)時掌反、180A 時掌反 ^右 、 <u>觀</u> 30A 時掌反 ^右 (→去声)	上 𠄎 17(去)(→上声)	
曉	香 <u>大</u> 77 キヤウ	亨 <u>元</u> 103 キヤウ ^左 享 <u>文</u> 94A キヤウ(上 ^平) 饗 𠄎 198A(上 ^平)	嚮 𠄎 166A キヤウ ^左 ・ 許亮反 ^右	
羊	揚 <u>元</u> 81A ヤフ	養 <u>元</u> 177A ヤウ(→去声)	養 <u>元</u> 230A 羊亮反(→上声)	
来	良 <u>元</u> 123 リヤウ、 <u>觀</u> 86(平 ^平)			略 <u>元</u> 204A リヤク
日		壤(壤) 𠄎 211 如丈反		弱 𠄎 153A シヤク ^左 ・ 音弱 ^右
42	陽(合)	養(合)	漾(合)	藥(合)
非	方 𠄎 209(平 ^平)	放 𠄎 5(上)(→去声)	放 𠄎 99A(去)、 <u>文</u> 3A(去 ^平) ^{朱合} (→上声)	
奉	防 𠄎 162 ハウ			
微	亡 𠄎 168(平濁 A)、172 ハウ ^合 、 <u>觀</u> 41A(平濁 B ^朱) 明 𠄎 41A(平濁 B ^朱)		望 <u>元</u> 181 ハウ(去 ^平)、 <u>文</u> 25A(去濁 B ^朱)	
見			誑 𠄎 405A(去)	
溪	筐 <u>元</u> 208A キヤウ・音 匡 ^右			
于	王 𠄎 50(平)(→去声)		王 𠄎 172、240、358(去)、 <u>元</u> 188(去 ^平)、189A(去 ^平)、 <u>觀</u> 160(去 ^平)、230A 于況反、 <u>文</u> 96A(去 ^平)(→平声)	
43	唐(開)	蕩(開)	宕(開)	鐸(開)
並	旁 <u>元</u> 169 歩光反、170A ハウ、 <u>文</u> 21A ハウ ^左 (平 ^平)			毫 𠄎 59 ハク ^左 ・歩各反 ^右 、 <u>文</u> 122 ハク
端		党(黨) <u>元</u> 61A タウ	当(當) <u>文</u> 94A(平 ^平)	
定		蕩 𠄎 484(去)		度 𠄎 14(入)、 <u>大</u> 86A 待洛反、 <u>觀</u> 33A 待洛反、81A 待洛反 ^左 、 <u>元</u> 36 待洛反、 <u>文</u> 25A タク ^左 (→定母・暮韻)
見	綱 𠄎 149 カウ(平)			
溪				恪 𠄎 101A カク(入)
精			葬 𠄎 204A サウ	作 𠄎 42 サク ^左 、 <u>大</u> 4(入輕)
清				錯 𠄎 455A サク
從				酢 𠄎 195 サク ^左 (入 ^平) 才各反、195A サク、196A サク(入 ^平)
心			喪 <u>元</u> 106 蘇波反、106A(去 ^平)、 <u>觀</u> 212A 息浪反	索 <u>元</u> 144 西洛反、144A サク
影				惡(惡 ^平) 𠄎 124A(入)、 <u>元</u> 23(入輕 ^平)、 <u>觀</u> 18A、19A、96A(入 ^平)、 <u>文</u> 100A(入 ^平)(→影母・暮韻)
来				藥(藥) 𠄎 46 音洛又音岳、54A 音洛、137A、379A ラク
43	唐(合)	蕩(合)	宕(合)	鐸(合)
見	光 𠄎 188 クワウ			
莊	莊(莊) 𠄎 101A(平)			
昌	昌 𠄎 168A(平輕)			

曉	荒 𠂔 50A、146、151、389(平)、𠂔 238A クワウ			
匣	黃 𠂔 132 クワウ			
1 2 梗攝				
44	庚(直開)	梗(直開)	映(直開)	陌(直開)
幫				柏 𠂔 119A ハク
滂				魄 𠂔 169 ハク・普白反、 𠂔 113(入輕 𠂔)普白反 _右
並	彭 𠂔 139 ハウ			帛 𠂔 208A ハク _{見滂}
明		猛 𠂔 128A、160A マウ		𠂔 62A ハク・孟白反、 𠂔 204 亡白反 _右 、𠂔 54A 孟白反 _右 ・孟白反 _{𠂔上}
澄				宅 𠂔 199 殆枚反 _右 澤 𠂔 202A タク
見	廣 𠂔 132A カウ(去)加孟 反皆行反 _{𠂔上}			
疑				額 𠂔 124 カク(入輕濁 A)
生	牲 𠂔 29 セイ(平輕 𠂔) 生 𠂔 53、247(平輕)、𠂔 178A セイ、𠂔 39A、112、 116A(平 𠂔)			
匣	行 𠂔 13A(去 𠂔)(→去声) 衡 𠂔 6A(平 𠂔)		行 𠂔 26A、57A、100、 100A、102A、473A(去)、 78A(去 𠂔)下孟反 _右 、𠂔 6A、84A(去 𠂔)下孟反 _右 、 𠂔 100A(去 𠂔)、𠂔 103(去 𠂔)(→平声)	
44	庚(拗開)	梗(拗開)	映(拗開)	陌(拗開)
並	平 𠂔 8、57A(平) 萃 𠂔 153A ヘイ _左			
明	明 𠂔 3(平)、𠂔 20A、 57A(平 𠂔)、57(平 𠂔)		命 𠂔 42 メイ、𠂔 22 メ イ、205 メイ _{𠂔合左} 、𠂔 141(去 𠂔)、𠂔 87(去 𠂔)	
見			敬 𠂔 18、61A、67、 90A(去 𠂔)、61(去 𠂔/𠂔合)	戟 𠂔 142A ケキ
溪	卿 𠂔 18A ケイ _{𠂔合}			
群	倣 𠂔 191A ケイ			
疑	迎 𠂔 208A ゲイ ¹⁵⁵⁾			
生		𠂔 22A セイ(上)		
44	庚(拗合)	梗(拗合)	映(拗合)	陌(拗合)
見		𠂔(尙 [*]) 𠂔 502 ケイ (上)		
45	耕(開)	耿(開)	諍(開)	麦(開)
莊				債 𠂔 27 セキ
初				冊 𠂔 183 サク 策(𠂔) 𠂔 146、146A サ ク
46	清(開)	静(開)	勁(開)	昔(開)
幫				辟 𠂔 7 必亦反、𠂔 63 必 亦反(→並母・入声)
並				辟 𠂔 94 扶亦反、𠂔 90 扶亦反(→幫母・入声)
明	名 𠂔 7(平)			
知	貞 𠂔 229(平輕)			
精				迹 𠂔 188 セキ
從	誠 𠂔 86(平)			
章	征 𠂔 77、163(平輕)		政 𠂔 71A セイ _{𠂔合} 正 𠂔 17、59、129A(去)、 𠂔 78A(去 _{𠂔/𠂔合})	
昌				斥 𠂔 130A 昌亦反
書				𠂔 117 セキ _左 ・音釋 _右
常	成 𠂔 57A、106A(平)、𠂔 205 セイ _{𠂔合左} 盛 𠂔 29 セイ(平 𠂔)音成		盛 𠂔 168A(去)	
羊				𠂔 114 音亦 _{𠂔上} 、114A 工キ 𠂔 60 音亦、𠂔 52 音

¹⁵⁵⁾ 仮名音注「ケイ」の「ケ」に平濁点あり。

				赤 ^下 繹 觀 81 音亦
来		領 群 119A レイ(上 ^平)、 119A レイ	令 群 98、452(去)、 ^大 41(去 ^平)、 ^元 92A(去 ^平) 力政反 ^右 、 ^觀 29 力政反 ^右 、 30A、31A、64、65A、66A、 116A(去 ^平)、104A(去 ^平)、 ^文 69(去 ^平)、69A(去 ^平)	
46	清(合)	静(合)	勁(合)	昔(合)
群	惇 群 394A ケイ(平)			
羊	嘗(嘗) 觀 63A(平 ^平)			役 ^元 161 エキ、 ^文 72A エキ
47	青(開)	迴(開)	徑(開)	錫(開)
並	屏 觀 149A(平 ^平) ^歩 反・ ^歩 経反 ^右 、231 ^へ イ(上 ^平)			
明	冥 ^元 130A メイ(平 ^平)			
端	丁 ^元 178 テイ、 ^文 119 テイ			
透				剔(勢) 群 295 他歴反、 ^元 21 テキ ^平 ・他歴反 遯 ^元 133 他歴反、 134A(入 ^平)
定	庭 觀 206A テイ		定 觀 24A(去 ^平)	狄 群 164(入)、 ^觀 148 テ キ、 ^元 140A テキ 迪 群 90A テキ(入)、 ^元 114 徒歴反、115A テキ(入 軽 ^平)
泥			佞 群 32A ネイ、 99A(去)、 ^觀 35A ネイ	
清				績 群 32 セキ(入)、 106(入 ^軽)
曉	馨 ^大 77、79A ケイ			
匣	刑 群 64(平 ^軽)		脛 ^元 98 戸定反	
来	靈(靈) ^元 112 レイ			
13 曾撰				
48	蒸	拯	證	職(開)
並	馮(憑) 觀 115 皮冰反 ^右 、 151A ヒヨウ、184 皮氷反			
知				陟 群 33 チヨク(入)、 ^大 39 チヨク・直律反、 ^文 126A チヨク
徹				敕 群 466 チヨク
澄	懲 ^元 31 直承反 ^右			
見	競 群 107 キヨウ(平 ^軽) 矜 群 70A(平 ^軽)、 ^元 46A キヨフ			殫 群 25 キヨク(入)紀力 反
群				極 觀 2A(入 ^平)、 ^文 80A(入 ^平)
疑	凝 群 106A キヨウ(平)			
精				稷 ^元 179A、186A ショ ク
從	繪 觀 150A ソウ			
莊				側 群 357 ソク 仄(辰) 群 111 ソク(入 軽)、401 ソク、 ^觀 176 ソ ク(入 ^平)
生				色 ^元 16 ソク
章	蒸 ^元 200(平 ^軽 ^平)			
昌	称(稱) ^大 26A(平 ^平)、 ^觀 11A(平 ^平)([→] 去声)		称(稱) ^元 128A(去 ^平)尺 證反 ^右 ([→] 平声)	
船			乘 觀 209 繩證反	
書	勝 ^大 58A(平 ^平)			式 ^元 221 シヨク
影	応(應) 觀 206 (平 ^平)([→] 去声) 膺 觀 107 於矜反		應 群 16A、44A、121、 121A、473A(去)、 ^元 210A(去)、 ^觀 79A(去)([→] 平声)	抑 群 399(入)、400A ヨ ク
曉				億 ^元 38 ヨク
羊			孕 ^元 21 ヨフ・以證反 ^右	翼 群 93A(入)
日	仍 觀 150(平濁 B ^平)、154 シヨウ ^平 苻 觀 151A、152 シヨウ			

49	登(開)	等(開)	嶺(開)	徳(開)
幫	崩 元 24A ホフ ^左			
並	朋 元 59 ホウ			
明				墨 群 198(入軽濁 A)
端	登 元 115 トウ			徳 群 31A、252 トク、 <u>觀</u> 1、98 トク
透				憲 群 447 トク(入)、 <u>因</u> 31 トク・吐得反、 <u>觀</u> 18 トク ^左
定				特 群 441A(入)、 <u>因</u> 23A(入 ^本)
泥	能 群 70A、268(平軽)、 <u>觀</u> 46、48、100A(平 ^本)			
溪				刻 <u>觀</u> 89A コク、154A コク ^左 、 <u>天</u> 93A コク
從				賊 元 67 ソク
心				塞 群 103 ソク(入)、103A(入)
曉				黒 <u>觀</u> 150A、156A コク
49	登(合)	等(合)	嶺(合)	徳(合)
見	肱 群 112(平)			
匣	弘 <u>觀</u> 87(平 ^本)、133(上 ^本)			
1 4 流撮				
50	尤	有	宥	
幫		否 元 36A フ・ヒ ^本 ・方有反 ^右 、 <u>觀</u> 101A ヒ(去)音鄙又方九反		
奉	浮 元 66A フ	婦 元 22A フ 負 元 37A フ 阜 天 35 音負、 <u>觀</u> 22 音負	復 元 147 扶又反、178A(去 ^本)扶又反、 <u>觀</u> 149A 扶又反(→奉母・屋韻)	
明	矛 <u>觀</u> 176A(平濁 B ^本) 謀 <u>觀</u> 35(去 ^本)			
徹	繆 <u>觀</u> 124A 勅留反			
澄			胃 群 264(去)	
孃		狃 <u>觀</u> 94 女尤反、 <u>天</u> 98 女尤反		
見			救 文 47 キウ(去 ^本)	
群	仇 群 153A(平)、165A キウ(平)、元 60 音求、61A(平 ^本) 球 <u>觀</u> 159(平 ^本)音口 ^右	咎 文 120 キウ(去 ^本)、121A(去 ^本)	柩 天 66A キウ、 <u>觀</u> 59A 其久反 ^右	
心	羞 元 212A シフ 叟 [△] 元 140A シウ・所求反			
邪	囚 群 526A(平)、元 103A シユ(平 ^本)、222 シユ ^{聯合}			
章	州 群 21A(平) 調 元 225A 音周			
書		守 狃 ^{欄上} <u>觀</u> 25A 手又反 ^右 ・音手 文 42 シユ(平 ^本 ・ ^{朱合})、49A シユ、49A シユ ^左	首 <u>觀</u> 140A(去 ^本)手又反 ^右	
常		受 元 15 シウ 綬 <u>觀</u> 156A シウ ^左 ・音受 ^右		
影	優 群 171A(平)、元 37A イウ			
曉	休 群 55、55A(平)、元 72 キフ、 <u>觀</u> 43 許虬反、108(平 ^本)、219(平 ^本)許虬反	朽 <u>觀</u> 109A 許久反 ^右		
羊	猷 群 432 イウ(平) 遊 群 45(平)、137 イウ ^左	牖 群 149A イウ・音酉、149 音酉 ^右 姜 <u>觀</u> 217 羊九反 酉 <u>觀</u> 147、148A イウ		
于		友 群 13A(上) 右 文 104(上 ^本)	佑 元 32(去 ^本)音又、33A イフ(去 ^本) 又 天 37 音宥、 <u>觀</u> 24(去 ^本)音宥 ^右 宥 <u>觀</u> 91 イフ(去 ^本)	
来	劉 元 186 リウ、 <u>觀</u> 172 リウ(平 ^本) 流 群 21、122A(平)			

日	柔 群]101(平濁 A)			
51	侯	厚	侯	
滂		剖 元]98 普口反		
明	蒙 [△] 元]139 モウ・茂侯反		懋(懋) 大]76 音茂、觀]70 音茂 戊 群]389A(去濁 A)、元]5、50 ホ、文]125A ホ	
端	兜 群]24 トウ(平)丁侯反、98 トウ(平)			
定			豆 元]179 トウ	
見		垢 觀]99A 工口反		
溪			寇 觀]17 コウ ^宋 、18A コウ	
精			奏 群]18 ソウ	
心		藪 元]201 ソウ・素口反		
匣			厚 群]153 コウ(去)	
来			鏤 觀]154A ロウ ^平 (去 ^平) 来豆反 ^右	
52	幽	黝	幼	
影	幽 群]33(平)			
曉	侏 文]41(平 ^平)			
1 5 深摂				
53	侵(甲)	寢(甲)	沁(甲)	緝(甲)
清		寢 觀]140A(上 ^平)、145A □ム		
章				執 元]160A シツ
常	忱 群]182A シン(平)			
影	淫 群]46、124(平)、397A イン			揖 觀]239 イフ ^宋 左
来	林 元]176 リン 臨 元]117 リン ^左 霖 群]253 音林	廩 群]144 リン、313 リン(上)、元]86 リン・力甚反 ^右		
日	任 群]81 (平濁 A)、大]57(平 ^平)(-去声) 壬 元]169 シン		任 群]8、46、223A、439A、443A(去濁 A)、大]21A、26A(去 ^平)、元]229A(去 ^平 ・去濁 A ^平)、觀]12A、186A(去濁 B ^平)、49A(去 ^平)、文]66(去濁 B ^平)、103(平濁 B ^平)、104A(平 ^平 ・去 ^平)(-平声)	入 觀]80(入 ^平)
53	侵(乙)	寢(乙)	沁(乙)	緝(乙)
澄	沈 群]293(平)、元]15 チン(平)			
見	金 群]82A キン		禁 觀]82A キン	伎 觀]142 居及反 ^右 、144A キウ
群	禽 群]146(平)			
影				邑 元]209 ユウ
1 6 咸摂				
54	覃	感	勘	合
端	耽 群]382 シム			答 元]146A タツ、觀]197A タウ、199 タツ
透	貪 群]107A タン(平)			
溪	戡 觀]219 音勘			
從				雜(雜) 觀]150A、153A サツ
影			闇 群]160A アン(去)	
55	談	敢	闞	盍
心			三 觀]96A(去 ^平)	
匣	酣 群]379A カン			
来			濫 元]18A ラム	
56	塩(甲)	琰(甲)	艷(甲)	葉(甲)
精	殫 元]113 子廉反			接 元]149A ショウ 楫 群]253 セフ(入)音接・音集
清	儉 群]516 セン(平)息廉反			
從		漸 文]71A(去 ^平)		
章	占 元]73A セン			

影			獸 觀]53A 於艶反	
羊	塩(鹽) 群]277(平)	琰 觀]158 エン・以再反右、159A エン(上 ^平)		
来	廉 群]103(平)、觀]171A レン			蠶 觀]210A 力輒反右
56	塩(乙)	琰(乙)	艶(乙)	葉(乙)
幫		貶 元]222A ヘン		
群		儉(儉) 觀]41 ケン(去 ^平)		
曉		險(險) 群]160A ケン(上)		
57	添	忝	楝	帖
透		忝 文]18A(上 ^平)		
溪	謙 群]85(平輕)			
心				變 群]439 セフ(入)、因]20 セフ・素協反、觀]5 セウ(入輕 ^平)
章			僭 群]115A セン(去)	
匣				協 群]9 ケフ(入)、因]28A ケフ ^平 、觀]14A ケウ
58	咸	賺	陷	洽
見				夾 觀]155 カフ ^平 (入輕 ^平)工洽反音類右、156A カフ、163A カウ、171A 工洽反右
匣	咸 文]83(平 ^平)、124 カン 鹹 群]277A(平)			
59	銜	檻	鑑	狎
見	監 觀]67A(平 ^平)工銜反(→去聲)		監 文]9(去 ^平)、10 カン(去 ^平)(→平聲)	
匣				狎 文]31A カウ
60	嚴	儼	嚴	業
疑				業 群]107(入濁 A)
61	凡	范	梵	乏
奉	凡 因]81 ハン			

2.3 孝経諸本分組分韻表

清原家本関東系統（孔伝本）：仁仁治本、建建長本、永永仁本、

清原家本京都系統（孔伝本）：三三千院本、正正安本、亨元亨本、徳元徳本

清原家（鄭注本・御注本）：群群書治要卷第9 孝経部分、京京都大学蔵御注孝経

01 通撰	東(直)	董(直)	送(直)	屋(直)
幫				ト 仁]411A ホク、建]446A ホク、因]30B2A(入濁 B ^平)、三]284A ホク ^平 、正]369A ホク、徳]380A(入)
明				目 仁]543A ホク、建]577A ホク(去濁 A)、因]39A5A(入 ^平)、三]105A(入 ^平)、正]138A、473A ホク、徳]493A(入濁 B)
透	通 仁]88A、314A(平輕)、561A トウ、建]35(平)、98A、126A、351A(平輕)、因]9A6A、40A5(平 ^平)、24A5(平 ^平)、三]26(平輕 ^平)、225A トウ、正]84、112A、139A、487A トウ、徳]84A(平輕)、85A、108A、471、473A、506(平)			
定	同 仁]599A トウ(平)、因]40A6、40A6、40A6(平 ^平)、三]372A、372A(平 ^平)、正]486A(平 ^平)、徳]507A、507A(平)	動 仁]388A トウ(上)、建]81、424A(上)、因]6A6、29A2A(上 ^平)、29B3A(去 ^平)、三]59(去 ^平)、270A トウ(上 ^平)、275 トウ、正]74、352A トウ、351A(去 ^平)、		

		357A トウ(平 ^{墨1})、 亨 69 トウ、 徳 68、361A、 367A(去)		
見	公 仁 562A コウ、 正 169A、273 コウ 功 仁 29(平)、 建 637A コウ、 永 5A6(平 ^墨)、 正 61、134A、145A、216A、 271A、330A、330A コウ、 330A コウ(平 ^朱)、			穀 仁 218A コク、 正 165A コク(入 ^墨)、 正 215A コク 貢 仁 345A コウ(去)、 建 381A(去)、 正 244A コウ、 正 316A コウ
溪		孔 仁 69A(上 ^墨)、 徳 6、 36、81A、85A、87A(上)		哭 永 45A2A(入 ^朱)、 正 416A(入 ^墨)、425 コク、 厚 550 コク、 徳 559、568A (入)、579 コク、 原 161 コ ク
徒				族 仁 84A、101A、400 ソ ク、 建 153A、436A ソク、 永 9A1A、10A3A、 29B6A(入 ^朱)、 正 83A、 277A、339A ソク、93A、 101A ソク(入 ^墨)、 正 108A ソク(入 ^墨 り)、 122A、133A、360A、441A ソク、 厚 102A ソク、 徳 103A ソク、118A、 371A(入)、
心			送 建 683A(去)、 原 46A3A(去 ^朱)、 正 428A(去 ^墨)、 徳 582A(去)	
来				禄 仁 207、209A、574A ロク、 正 101A(入 ^墨)、139、 141A、381A ロク、 正 133A、182、206、207A、 498A ロク、261A リヨク
01	東(拗)	董(拗)	送(拗)	屋(拗)
非	風 仁 36(平)、452(平 ^墨)、 452A フウ、 建 60、74(平 軽)、487(平)、 永 4B7、5A1、 5B6、33A5、33A6A(平 ^朱)、 正 44、54、99A、309(平 ^墨)、 278A フウ、 正 59、 68、130A フ、 徳 51、54、 415(平 ^墨)、64、67(平 ^朱)、 127A(平)、 群 132(平 ^墨)(→ 去声)		風 仁 37、37(去)、 建 75(去)、 永 5B7、5B7(去 ^墨)、 正 55、55 フ、 正 69 フ(中本去声)、69 フ(→平 声)	福 仁 128A フク、 原 20A7A(入 ^墨)、 正 226A、 234A(入 ^墨)、 正 143A、 246A、293A、523A フク、 303A フク(入 ^墨 り)、 厚 289A、299A(入 ^朱)
敷				豊 建 534A(平)
奉				伏 正 429A(入 ^墨)、 正 52 フク、 徳 48(入) 復 仁 137A(入 ^墨)、 正 180A フク(入 ^墨 り)、 徳 181A(入)(→奉母・有韻) 服 建 108A フク、 永 8A3A、45B1A(入 ^朱)、 正 140(入 ^墨)、411(入 ^墨)、 正 98A、165、165、166A、 166A、167、184A、315A、 457A フク、 徳 92A、165、 165A、475、561A、562A、 573A(入)
微				睦 仁 71 ホク(入濁 A)、 268(入 ^墨 濁 A)、 建 109、 306 ホク(入濁 A)、 原 8A4(入濁 A ^朱)、21A6(入 ^墨 濁 A ^墨)、 正 76(入 ^墨 朱1)、 197 ホク ^朱 (入濁 B ^墨)、 正 99 ホク、256 ホク(入濁 A ^墨)、 厚 92 ホク、252 ホク (入濁 A ^朱)、 徳 93 ホク(入 濁 B)、261(入 ^墨 濁 B)、 原 101 音目 穆 仁 127A(入濁 A)、 建 165A(入濁 A)、 正 142A ホ ク、 厚 136A ホク
知	中 仁 14(平 ^墨)、 建 52(平)、 原 4A7(平 ^墨)、 正 26、421A(平 ^墨)、 正 402A(平 ^墨 り)、 徳 44、 563A(平)、 原 158 チウ 忠 仁 71A、585A(平 ^墨)、 建 109A(平 ^墨)、 原		中 徳 13(去)(→去声)	竹 正 23(入 ^墨)

	8A4A(平 ^墨)、17A3、38B6A(平 ^朱)、 三 76A、128A、388A、406(平 ^墨 軽 ^墨)、 正 166A、199、200A、201A、208A、272A チウ、460(平 ^墨 軽 ^墨 1)、517A(平 ^墨 2)、 徳 93A、208、486A(平)、 京 77A チフ ^{合左} (→平声)			
澄			仲 健 14(去)、 三 11、69(去 ^墨)、143A、144A、 正 14 チウ、88、187A(去 ^墨 2)、 徳 81(去)、 京 31(去)	
見	宮 仁 427A キウ(平 ^墨 軽)、455A キウ、 健 462A(平)、 永 31B3A(平 ^朱)、 三 294A(平 ^墨)、 正 381A キウ(平 ^墨 2)、 徳 393A(平) 弓 健 15(平)、 永 2A1(平 ^墨)、 三 11 キウ ¹⁵⁰ (平 ^墨 濁 ^墨 A ^墨)、 正 14 キウ、 徳 13(平 ^墨 軽)			
群	弱 仁 96A キウ(平)、 健 133A(平)、 永 9B5A(平 ^墨)、 三 90A キウ(平 ^墨)、 正 1118A キウ、 厚 111A(平 ^朱)、 徳 113A(平)			
心				夙 仁 94A シク、 三 143 シク、 正 117A、186 シク、 徳 112A シク(入 ^墨 軽)、188 シク 肅 (肅) 仁 259A、354A シク、412A シク(入)、 健 447A シク(入)、 永 20B3A(入 ^墨)、30B4A(入 ^朱)、 三 190A シク、250A、285A シク(入 ^墨)、 正 249A シク(入 ^墨 2)、323A、370A シク、 厚 245A シク、319A、366A シク(入 ^朱)、 徳 253A、332A、381A(入)
章	終 仁 410A シウ(平)、 健 445A(平)、 永 30B2A(平 ^墨)、 三 284A(平 ^墨 軽 ^墨)、 正 368A シウ		衆 仁 31、117A、197A、304A、470A(去)、 健 69、156A、340A、504A(去)、 永 5B1、11A5A、16B2A(去 ^朱)、20B7A、23B2A、34B1A(去 ^墨)、 三 51、103A、152A、202A、218A、218A、218A(去 ^墨)、 正 63、135A、251A、262A、265A シウ、198A シウ(去 ^墨 2)、296A シウ、 徳 58、132A、200A、255A、268A、269A(去)、	粥 仁 633A シク(入)、 健 667A シク(入)、 永 45A3A シク(入 ^朱)、 三 417 シュク(入 ^墨)、 徳 569A シク
昌	充 仁 518A シウ(平)、 健 552A シウ(平)、 永 37B4A(平 ^朱)、 三 348A(平 ^墨 軽 ^墨)、 正 453A シウ(平 ^墨 1)、 厚 449A(平 ^朱)、 徳 471A シウ(平)			
崇	崇 健 494A(平)			
書				叔 仁 20(入 ^墨 軽)、 健 58(入)、 永 4B6(入 ^墨 軽 ^墨)、 三 43 シク(入 ^墨 軽 ^墨)、 正 54 シク、 厚 50 シク、 徳 49 シク(入)
常				塾 京 20 シク(入 ^墨 軽 ^墨 殊 ^墨 六 ^墨 反) 淑 仁 401 シク(入 ^墨 軽)、 健 437 シク(入)、 永 29B7A(入 ^朱)、 三 278 シク(入 ^墨)、 正 361 シク、 厚 357 シク、 徳 372 シク(入)
影				煖 仁 81A イク(入)、 健 119A イク(入)、 三 82A イク(入 ^墨 軽 ^墨 朱1)、 正 107A イク、 厚 100A イク、 徳 101A イク(入 ^墨 軽)

¹⁵⁶⁾ 仮名音注に声点「キウ(平濁平)」あり

来				六 [三]415A(入 ^墨)、[正]5 リツ、42、117A リク 陸 [三]216A リク、[建] 254A リク、[三]164A リク (入 ^軽 ^墨)、[正]214A リク(入 軽 ^墨 1)、[厚]210A リク(入 朱)
02	冬		宋	沃
並				僕 [仁]548A ホク、[困] 39B2A(入 ^朱)、[三]364A(入 軽 ^墨)、[正]476A ホク(入 ^軽 濁A)、[徳]497A(入)
見	攻 [仁]362A コウ(平)、[建] 398A コウ(平)、[困]27A5A コウ、[三]254A コウ(平 ^朱 1)音公、[厚]326A(平 ^朱)音 公、[徳]340A 音工			
精	宗 [仁]336(平 ^軽)、[建] 372A(平 ^軽)、[困]110A3A(平 ^朱 1)、15A7A(平 ^墨)、[三]69(平 ^墨 墨)、93A、140、239(平 ^軽 墨)、141A ソフ、[正]87、 185A(平 ^軽 墨2)、122A、 307A ソウ、183 ソウ(平 ^軽 墨2)、309 ソウ(平 ^墨 3)、[厚] 305(平 ^朱)、[徳]80、118A、 187A(平)			
03	鍾	腫	用	燭
敷		捧 [京]139A(上)		
奉		奉 [仁]345A(上)、[建] 381A(上)、[徳]276A、325A、 529A(去)、[困]42A1A(去 朱)、[三]244A(去 ^墨)、 388A(去 ^朱 1)、[正]270A、 316A ホウ、[徳]276A、 325A、529A(去)		
徹		寵 [仁]287A、587A テウ (上)、[建]323A、621A テウ (上)、[困]22B1A(上 ^墨)、 42A3A(上 ^朱)、[三]207A(上 墨)、389A(上 ^朱 1)、[正]269A テウ(上 ^墨 2)、507A テウ(上 朱)、[厚]266A テウ(上 ^朱)、 503A テウ、[徳]530A(上)、 [群]102A(上)		
見	供 [仁]309A、610A(平)、 [建]346A、644A(平)、[困] 23B7A(平 ^墨 ・去 ^朱)、 31A7A(去 ^墨)、[三]221A(去 朱1・平 ^墨)、403A(平 ^墨)、 [正]287A クキヨウ(去 ^朱)、 379A クキヨウ(去 ^墨 1)、[厚] 284A(去 ^朱)、 294A(去)(→去声) 恭 [仁]86A、223A(平)、[建] 28、124A、261A(平)、[困] 2B6、18A6A(平 ^墨)、 9A3A(平 ^朱)、[三]21 クキ ヨウ、84A クキヨフ(平 ^軽 墨)、168A(平 ^軽 墨)、[正]26、 110A、219A クキヨウ、[徳] 24 ケウ(平)、105A(平) 龔 [仁]552 キヨウ(平 ^軽)、 [建]586 ケウ(平)、[困] 39B6(平 ^朱)、[三]367 クキ ヨウ(平 ^軽 墨)音共、[正]480 クキヨウ(平 ^墨 1)、[厚] 476(平 ^軽 朱)音共、[徳]501 音共		供 [仁]400A(去)、424A キ ヨウ(去)、439A キヨウ、 [建]436A、459A(去)、[正] 360A クキヨウ、391A(平 ^墨 1・去 ^朱)、[三]277A キヨ ウ(去 ^墨)、293A キヨ(去 ^朱 1)、302A(去 ^朱 1)、[困] 29B6A(去 ^墨)、[厚]375A(去 朱)、[徳]371A、391A(去)	
溪		恐 [群]31A(平 ^軽)		曲 [困]29A3A(入 ^朱)、[三] 270A(入 ^墨)、[正]351A ク キヨク(入 ^墨 2)、[徳] 361A(入)
從			從(從) [仁]585A シヨウ (去)、[建]619A セウ(去)、 [困]38A1A セウ、42A2A(去 墨)、[三]351A(去 ^墨)、 388A(去 ^朱 1)、[正]457A シ ヨウ、506A シヨウ(去 ^朱)、 [厚]502A シヨウ(去 ^墨)、[徳]	

			476A、529A(去)	
邪				俗 仁 453A ショク、建 487A ショク、丞 33A6A(入朱)、33A6A(入墨)、三 44(入墨)、正 55、60、401A ショク、厚 55 ショク、徳 51、415、416A(入)
書				束 仁 93A ソク、建 131A ソク、丞 9B3A(入朱)、三 89A ソク(入軽墨)、116A ソク(入軽墨)、109A ソク(入朱)、徳 112A(入)
暁	凶 仁 91A、517A ケウ、375(平軽)、丞 28A5、37B2A(平朱)、三 87A クキョウ、262(平軽墨)、正 114A、342A ケウ、341 ケウ(平墨)、343A(平墨)、厚 337(平朱)、徳 110A ケウ(上)、350、470A(平)、原 151A ケフ			
羊	容 仁 387 ヨウ ^{合左} 、建 423(平)、丞 29A1(平朱)、三 269 ヨウ(平墨)、410A(平墨)、428A ヨウ、正 350 ヨウ(平墨)、351A ヨウ、356A(平墨)、厚 346 ヨウ、徳 360(平)	踊 仁 645 ヨウ(上)、建 666A(上)、679 ヨウ、丞 45A2A(上墨・去朱)、45B7A ヨウ(上朱)、46A2A(上朱)、正 416A、427A(上墨)、425 ヨウ ^左 (上朱)音用、427A ヨウ(上朱)、厚 550 ヨウ、徳 568A ヨウ ^左 (去)、579 ヨウ(上)、581A、581A(上)	用 仁 221、223A、344A、458A、531A(去)、建 259、261A、380A、493A、565A(去)、丞 18A3、18A5A(去朱)、18A6A、20A5A、38B2A(去墨)、三 167A ヨウ(去墨)、168A(去朱)、168A、186A、312A、355A(去墨)、正 217、219A、315A ヨウ、219A、405A(去墨)、244A ヨウ(去墨)、464A(去墨)、厚 402A(去朱)、徳 221、222A、223A、324A、420A(去)	欲 徳 343A(入)
来	龍 仁 41(平)、476A レウ(平)、建 511A レウ(平)、丞 6A4(平墨)、正 72、419A レウ、厚 67 レウ	麗 仁 218A リョウ(上)、建 256A リョウ(上)、丞 18A1A(上朱)、三 165A チョウ(上墨)、正 215A レウ、厚 211A レウ、徳 219A リョウ(上)		
日				辱 徳 98A ヨク、群 48A ショク、原 81A ショク ^合
02 江摂				
04	江	講	絳	覚
幫	邦 仁 23 ハウ、丞 5A1(平朱)、三 45 ハウ、56 ハウ(平墨)、正 56、71 ハウ、徳 52 ハウ(平)、65(平)			
見		講 建 29(上)、丞 2B6 カウ、三 21(上朱)、正 26 カウ、厚 24(上朱)、徳 24(上)		覚(覺) 仁 320A カク、建 356A カク、丞 229A(入墨)、正 295A カク、厚 292A(入朱)、徳 303A(入角)、三 455A カク、正 404A カク、較 仁 124A カク(入軽)、建 162A カク(入)、丞 11B4A(入朱)、三 106A カク(入軽 ^{朱1})音角、正 140A カク、厚 134A カク、徳 138A カク(入軽)
疑				嶽 仁 126A カク(入濁A)、建 164A カク(入濁A)、丞 11B6A(入濁A墨)、三 108A カク(入濁B ^{朱2})、正 142A カク(入軽濁A墨)、厚 136A カク、業(樂) 仁 22 カク(入軽濁A)、453A(入軽濁A)、456A カク、建 487 音岳 ^左 、488A(入)、491A カク(入濁A)、526A カク、662 カク ^{合左} 、丞 4B7 カク(入軽濁A墨)、33A7A(入濁A墨)、33B2A カク(入濁A墨)、44B5 カク ^{合左} (入濁A朱)、三 44(入軽濁A墨)、

				48(入濁 A ^{来2})、54、310A(入濁 B ^来)、196、197A(入軽濁 B ^来)、309 音岳、413(入濁 A ^来)音岳、 正 55、58、67、68、77 カク、401A 音岳、402A(入濁 A ^{来2})、 平 398 音岳、 徳 62、71(入濁 B)、565 カク ^来 (入濁 B)音楽[ママ]
生				数(數) 仁 329A サク(入軽)、 建 365A サク(入)、 函 25A4A サク(入軽 ^来)、 三 234A(入軽 ^{来1})、 正 302A サク(入軽 ^来)、 厚 299A サク(入 ^来)、 徳 311A サク(入)(→生母・遇韻)
匡				学(學) 水 2B2 カツ、 三 17、25(入軽濁 A ^来)、37(入 ^{来2})、42(入軽 ^来)、 正 22 カク、217A(入 ^{来1})、 徳 20、43(入)、49(入軽)
0 3 止撰				
05	支(開甲)	紙(開甲)	寘(開甲)	
幫	卑 仁 114A ヒ(平)、 建 152A ヒ(平)、 函 11A2A(平 ^来)、 三 100A、171A(平 ^来)、125A(平軽 ^来)、 正 132A、166A ヒ、224A ヒ(平 ^{来1})、 原 89A ヒ			
心			賜 仁 460A シ(去)、 函 33B5A(去 ^来)、 三 313A シ(去 ^来)、 正 407A シ	
書	施 仁 395A シ(平)、 建 431A シ(平)、 函 29B2A シ(平 ^来)、 三 274A シ(平 ^{来1})、 正 356A シ(平 ^{来1})、 厚 352A シ、 徳 366A(平)	豕 仁 423A シ(去)、 建 458A シ(去)、 函 31A6A(上 ^来)、 三 292A シ(上 ^{来1})、 正 378A シ(上 ^{来2})、 厚 374A チヨ(上 ^来)、 徳 390A シ		
常		氏 仁 5(上)、280A シ、 水 3B6、4B6(上 ^来)、 三 32(上 ^来)、 正 40、54、265A シ、 徳 36(去) 是 仁 312A、560A シ(上)、 建 348A(上)、 函 24A2A(上 ^来)、 三 223A シ(去 ^来)、372A(去 ^来)、 正 289A、487A シ、286A(去 ^来)、482A シ、 徳 508A(去)		
羊	移 水 33A6A(平 ^来)		易 仁 454A、491A、491A イ(去)、 建 489A、526A イ(去)、526A(去)、 函 33A7(去 ^来)、35B7A イ(去 ^来)、35B7A(去 ^来)、 三 402A、431A イ(去 ^来)、431 イ(去 ^{来1})、 三 310A イ(去 ^{来1})、332A イ(去 ^{来1} ・去 ^来)、332A(去 ^来)、 厚 399A、428A(去 ^来)、 徳 417A、449A(去)、448A イ(去)、 原 97A(去)(→羊母・昔韻)	
日	児(兒) 仁 44(平濁 A)、 建 82(平濁 A)、 函 6A6(平濁 A ^来)、 三 60 ヒ(平濁 A ^来)、61(平濁 ^来)、 正 75、76 シ、 厚 70 シ、 徳 69(平濁 B)			
05	支(開乙)	紙(開乙)	寘(開乙)	
並		被 仁 642A(去)、 建 676A(去)、 函 45B5A(去 ^来)、 三 423A ヒ(去 ^{来1})		
知			知 仁 610A(去)、 建 644A(去)、 函 43B3A(去 ^来)、 三 402A(平 ^来 ・去 ^来)、 正 526A(去 ^来)、 厚 522A(去 ^来)⇒「智」	
疑	儀 仁 185A(平濁 A)、 建 233A(平濁 A)、 水 15B4A(平 ^来)、 三 144A(平濁 A ^来)、 正 188A、351A		義 仁 58A、71A、579(去濁 A)、 建 96A、109A(去濁 A)、 水 7A6A、8A4A(去濁 A ^来)、39A6A、41B3(去 ^来)、	

	キ、 徳 423A(平) 宜 仁 216A、240A、 241A、605A(平濁A)、600A キ(上濁A)、 建 254A、 278A、639A(平濁A)、 困 17B6A、17B7A、29A1A(平 濁A ^平)、19A7A、19B1A、 43A5A(平濁A ^平)、 三 164A、165A、178A、178A、 399A(平濁A ^平)、 正 214A、 234Aキ、215A(平濁A ^平)、 235A(平濁A ^平)、350A(去 濁A ^平)、 亨 230A(平 ^平)、 徳 217A、218A、237A、 238A、360A、545A(平濁B)		亨 203A(去濁A ^平)、 三 69A(去濁 ^平)、128(上濁B ^平)、 正 87(去濁A ^平)、 126A、133A、168A、188A、 189A、197A、349A、501A キ、207A、357A(上濁A ^平 ¹)、 徳 80、82A、82A(去濁 B)、102A(去)、 正 57(去濁) 誼 仁 7、581、589キ(去 濁A)、19、166A、239、 245A、359(平濁A)、240A キ(平濁A)、245A(平濁A)、 建 8、45、58、277、395(去 濁A)、51(平濁A・去濁A)、 永 11B1、4B5、14B1A、 19A7A、19B5A、25A3A、 27A2、42A5A(去濁A ^平)、 19A7、28B7(去濁A ^平)、 21A2キ、41B5(去 ^平)、 三 6(平濁 ^平)、33キ(去濁B ^平 ¹)、38、79A、132A、177、 177A、386(去濁B ^平)、94 キ(上濁B ^平)、194、233A (去 ^平)、252(去 ^平 ・去濁 A ^平)、268(去濁A ^平)、 435(去 ^平)、 正 7キ・宜寄 反、41(去 ^平)、47、53、 429A、503、509キ、103A、 173A、233、302Aキ(去 ^平 ¹)、123A、238A、349キ(去 濁A ^平)、234A、253(去濁 A ^平)、253Aキ(去 ^平)、 327キ(去 ^平 ・去 ^平)、 亨 7、38、116A、323A、345、 505キ、229、230A、 299A(去 ^平)、499キ(去 ^平)、 徳 7、38、43、98A、174A、 237A、310A、336、446A、 526A、532(去濁B)、49、 172A、236、241A、258A、 358、591(去) 議 三 15(去 ^平 ・去 ^平)	
05	支(合甲)	紙(合甲)	眞(合甲)	
見	規 仁 389Aキ(平)、 建 425Aキ、 困 29A3A(平 ^平)、 三 271Aキ(平 ^平)、 正 351Aキ、 亨 347Aキ、 徳 361A(平)			
来		累 仁 108Aルイ(上)、 建 146Aルイ(上)、 困 10B2A(上 ^平)、 正 127Aル イ、 亨 121Aルイ、 徳 124A ルイ		
05	支(合乙)	紙(合乙)	眞(合乙)	
疑	危 仁 122Aキ(平)、 建 160Aキ(平)、 困 11B2A(平 ^平)、 三 105A(平 ^平)、 正 138Aグキ、 徳 136A(平)			
于			為(爲) 仁 253A、519A、 633A(去)、 建 291A、533A、 667A(去)、 困 20A6A、 45A3A(去 ^平)、20A6A、 37B4A(去 ^平)、 三 186A、 186A、187A、349A、 423A(去 ^平)、 正 454A(平 ^平)、 亨 240A、449A(平 ^平)、 徳 472A、569A(去)	
06	脂(開甲)	旨(開甲)	至(開甲)	
並			比 永 45A6A(去 ^平)、 原 22(去)	
定			地 三 3(去 ^平)、109A(上 ^平)、165チ(平 ^平)、 正 117A チ、215A(去 ^平)、 徳 112A(去)	
精	諮 建 20シ(平軽)、 三 15 シ(平 ^平)、 正 18シ、 亨 17シ(平 ^平)、 徳 17(平) 資 仁 189Aシ(平)、 建 227Aシ(平)、 困 16A2Aシ (平 ^平)、 三 31(平軽 ^平)、			

	146A シ(平 ^墨)、 正 39(平 ^朱)、192A シ(平 ^{墨1})、 徳 36(平)			
従			自 仁 68A(上)、 健 15(去)、 正 14、73、153A、320A シ、 厚 13(去 ^朱)	
心			四 健 158 シ、 仁 108A シイ(去 ^{朱2})、351A シイ、 正 122A シイ、137、137A シ、 厚 131 シ 酒 健 12(去)、 永 1B5(去 ^墨)、 仁 9(去 ^{朱1})、 正 11 シ、 厚 11 シ、 徳 11 シ(去)	
章			至 仁 63(去)、 健 15、101(去)、 永 7B4(去 ^朱)、 正 14、132A、132A、271A シ、93 シ(去 ^{墨2})、 徳 13、86、450(去)	
書	戸 仁 402A シ(平軽)、487A シ(平)、487A(平)、487A、587A シ、586A(平軽)、 健 438A、620A シ(平軽)、519A、522A(平軽)、 永 30A1A、35A7A、35B2A、42A2A(平 ^朱)、 仁 279A、330A シ、328A シ(平軽 ^{朱1})、329A シ(平軽 ^墨)、389A(平軽 ^墨)、 正 361A シ(平 ^{墨2})、426A シ(平 ^{墨1})、428A(平 ^{墨1})、507A、507A シ、 厚 358A、425A、503A シ、423A シ(平 ^墨)、 徳 372A、444A、445A、530A(平)、443A シ(平)			
采			利 仁 112A、438A リ(去)、215(去)、 健 150A リ(去)、253、473A(去)、 因 10B7A(去 ^墨)、17B5、32A7A(去 ^朱)、 仁 99A(去 ^墨)、301A(上 ^墨)、 正 130A、149A、149A、213、242、282A、287A リ、283A(平 ^{墨1})、390A リ(去 ^{墨2})、 徳 128A、216、403A(去)	
日			二 仁 429A(平濁 A)、 仁 10(上濁 A ^{朱2})、23(上濁 A ^{朱2})、 正 12、28、100A、383A シ、 徳 12(上濁 B)、95A(去濁 A) 弍(貳) 徳 119A(去)	
06	脂(開乙)	旨(開乙)	至(開乙)	
幫	悲 仁 412A(平軽 ^墨)		秘(祕) 仁 14(去)、 健 37ヒ(去)、52(去)、 永 4A7(去 ^墨)、 仁 27ヒ(去 ^{朱1})、 正 34、48ヒ、 厚 31(去 ^朱)、 徳 31、44(去)	
並		否 仁 559A、600A ヒ(上)、 健 593A ヒ(上)、 因 40A5A ヒ(上 ^朱)、43A1A ヒ(上 ^墨)、 仁 371A ヒ(平 ^{朱1} ・上 ^墨)、396A(上 ^{朱1})、 正 486A ヒ(上 ^{墨1} ・平 ^朱)、518A ヒ(上 ^{墨1})、 厚 481A ヒ(上 ^朱)、514A ヒ、 徳 507A ヒ(上)		
明		美 仁 84A(上濁 A)、601ヒ(入濁 A)、 健 635ヒ、 因 9A2A(上濁 A ^墨)、16B5A(去 ^墨)、44B6A(去 ^朱)、 仁 83A(上濁 B ^墨)、111A(去濁 B ^墨)、397ヒ、411(上 ^墨)、 正 109A ヒ(上濁 A ^{墨2})、145A ヒ、201A ヒ(上濁 A ^{墨2})、519ヒ(上濁 A ^{墨1})、 厚 515ヒ、 徳 104A(上濁 A)、144A(去濁 A)、204A(去)、565A(去濁 B)		
知			致 仁 103A チ(去)、 健 141A チ(去)、 因 10A5A(去 ^墨)、 仁 94A チ(去 ^墨)、 正	

			123A 子・子 ^左 、 厚 117A 子、 徳 119A 子(去)	
澄	遲 (遲) 仁 76A(平)、 健 115A 子、 永 8B2A 子(平 ^墨)、 三 79A(平 ^墨)、 正 1103A 子、 厚 96A 子、 徳 98A 子(平)			
孃	尼 三 69(平濁 B ^墨)、70A(平濁 A ^墨)、 正 88 子(平濁 A ^{墨2})、90A、90A、91A(平濁 A ^{墨2})、 徳 81、84A(平濁 A)、83A(平濁 B)			
群			警 仁 518A キ(去)、 健 552A キ(去)、 永 37B4A キ(去 ^墨)、 三 348A キ(去 ^朱 1)、 正 454A キ(去 ^墨 1)、 厚 449A(去 ^朱)、 徳 472A キ(去)	
疑			勗 仁 426A キ(去濁 A)、427A キ、 健 461A キ(去濁 A)、 永 31B3A キ(去濁 A ^墨)、31B4A(去 ^朱 1)、 三 294A キ ^左 (去濁 B ^朱 1)音義、 正 381A キ(去濁 A ^{墨2})、382A キ(去 ^墨 2)、 厚 377A(去濁 A ^朱)、378A キ、 徳 393A(去音義)、394A(去)、 厚 127A キ(去濁)	
心			死 仁 28(上)、 健 66 シ(上)、 永 5A6(上 ^墨)、31B6A、37A2A(去 ^朱)、 三 49(上 ^墨 ・去 ^墨)、292A(上 ^墨)、 正 61 シ、 徳 56、395A、464A(去)	
生	師 仁 27、64A(平)、 健 32、65、102A(平)、 永 3A3、5A5、7B4A(平 ^墨)、 三 24(平 ^輕 朱 ¹)、44、48、203(平 ^墨)、 正 30、54、60、104A、110A、265A、265A シ、264(平 ^輕 墨 ²)、 徳 27、55、87A、99A、105A(平)			
章		旨 三 414A シ(上 ^墨)		
06	脂(合甲)	旨(合甲)	至(合甲)	
群		揆 仁 229A キ(上)、 健 267A キ(上)、 永 18B3A(上 ^墨)、 三 171A キ(去 ^朱 1・上 ^墨)、 正 224A クキ、 厚 220A キ、 徳 227A(去)音鬼		
從			粹 仁 409A スイ(去)、 健 444A スイ(去)、 永 30B1A スイ(去 ^墨)、 三 283A スイ(去 ^朱 1)、 正 367A スイ(去 ^墨 1)、 厚 363A スイ、 徳 379A スイ(去)	
心	綏 三 197A(平 ^輕 墨)			
羊	維 群 156A 子、 三 92A(平 ^墨)、 正 120A 子(平 ^墨 1)、 厚 113A 子(→去声)	唯 仁 623A 子(上)、 健 658A 子(上)、 三 410A 子・イ、 ^左 (上 ^朱 1)、 徳 561A(上)	遺 仁 2 イ(去)、 健 41(去)、 永 3B3(去 ^朱)、 三 30(去 ^朱 1)、 正 37 子、 厚 33 子、 徳 34 子(去)(→平声)	
来			類 仁 58A(去)、417A ルイ(去)、 健 96A、452A(去)、 永 7A6A(去 ^朱)、31A1A(去 ^墨)、 三 288A(去 ^墨)、 徳 82A ルイ(去)、83A、385A(去)	
06	脂(合乙)	旨(合乙)	至(合乙)	
澄			鑿 原 59A 直類反	
見		羸 仁 643 キ(上)、 健 677 キ(上)、 永 45B5(上 ^朱)、 三 424 クキ(上 ^墨)、 厚 548 キ、 徳 578 キ(上)、 原 169 クキ・居消反		
溪			嗜 健 21 クキ(去)、 三 16 クキ(去 ^朱 1)、 正 19 クキ(去 ^墨 1)、 厚 18 クキ(去 ^朱)、 徳 18 クキ(去)	

生	衰 仁24、453A スイ(平)、 健61 □イ(平)、488A スイ (平)、永5A2、33A6A(平 朱)、三310A(平墨)、正57 スイ、402A スイ(平墨1)、 亨52 スイ、399A(平朱)、 徳52、416A、558A(平)			
書		水 正214A スイ		
子			位 仁157A、586A、 587A、597A イ、178 イ (去)、395A キ、健216(去)、 永15A5(去墨)、29B1A、 42B5A(去朱)、三139、 274A イ、正182、507A、 516A キ、356A(平墨2)、徳 366A(去)	
07	之	止	志	
知		微 仁456A チ(上)、健 490A チ(上)、永33B2A チ (上墨)、三311A チ(上朱 1・上墨)、正404A チ(上 朱)、亨401A チ(→知母・ 蒸韻)	置 仁650A(去)、健 684A(去)、永46A4A(去 朱)、三429A チ(去墨)	
徹		恥 仁329A チ、健365A、 永25A4A チ(上墨)、三 234A チ(上墨)、正303A チ(去墨2)、亨300A チ(上 朱)、徳311A(去)		
澄	持 仁66A チ(平)、 136A(平)、健104A(平)、 174A チ(平)、永7B6A(平 墨)、三113A(平朱1・平軽 墨)、正95A、149A チ、亨 88A チ、徳88A、148A(平)		値 仁582A チ(去)、健 616A チ(去)、永41B6A チ (去朱)、三386 チ(去墨)、 正504 チ、亨500A チ、 徳527A(去) 治 仁83A、116A、152A、 290A、459A、530、 531A(去)、健121A、159A、 326A、473A、476A、494A、 565A(去)、155A、564 チ (去)、160A チ、永11A4A、 11B1A、11B2A、32A4A、 32A7A、32B3A、33B5A、 38B1(去朱)、13B1A、 22B3A、38B2A(去墨)、 37B4A(平朱)、三82A、 102A、105A、123A、188、 299A、301A、303A、355、 355A、358A(去朱1)、102A チ(去墨)、209A(去墨)、 313A(去朱1・去墨)、正 108A、134A、161A、271A、 390A チ、138A、464 チ(去 墨1)、406A チ合(去朱)、 468A(去朱)、亨268A、 383A、386A、389A、 458A(去朱)、徳103A、 131A、136A、400A、403A、 406A、421A、482、482A、 原95(去)	
見	基 仁80A キ(平)、健 118A キ(平)、永8B5A(平 墨)、三81A(上墨)、正106A キ(平)、徳100A キ(平)	紀 仁118A キ(上)、健 156A キ(上)、永11A5A(上 朱)、正135A キ、徳 133A(上)		
疑	疑 仁562A キ(平濁A)、 健596A キ(平濁A)、永 40B1A(平濁A朱)、三 373A(平朱1・平濁B墨)、 正488A(平濁A墨1)、亨 484A キ、徳509A(平濁 B)、群156A(平濁)			
精		子 永34A6A、35B1A、 39B1(上朱)、三5(去濁A 墨)、8、52、63、67、69、 69A、175、211(上墨)、26(去 墨)、正9、13、13、80、 83、145A、199A、224A、 274、328A シ、88、217A、 413A(上墨2)、326(平墨1)、 476 シ(上墨2)、徳87A、 227A、425A、429A、443A、 496(上)、原124A シ合		

徒	慈 仁230A(平)、552シ、 健586シ、永18B5A、 39B6(平朱)、三172A(平 朱)、367(平朱)、正480シ (平朱)、厚476シ(平朱)、 徳229A(平)		字 健27、31(去)、夙 2B5(去朱)、三23シ(去 朱)、25(上朱)、正25、29、 31シ、徳26(去)	
心	司 仁440Aシ(平)、609A シ、健475A(平)、夙 32B2A(平朱)、三302Aシ (平朱)、正525Aシ、徳 405A(平)、原11(平軽)			
邪		祀 仁180A、400A、512A シ、207(上)、209Aレイ、 334シ(上)、健245、 370(上)、546A(去)、夙 17A5(上朱)、三141Aシ (平朱)、214A、238A、238A、 239シ、237シ(去朱)、 277A、431A(去朱)、345A シ(去朱)、正185A、308A、 308Aシ(去朱)、186A、 206、208A、210A、307、 310A、369A、438A、449A シ、309シ(上朱)、厚 180A、275A、306、365A、 444Aシ、304シ(去朱)、 徳315、317、371A、 585(去)、466Aシ(去)、夙 132(去)	嗣 仁544Aシ(去)、健 578Aシ(去)、三362Aシ (去朱・上朱)、正473Aシ (去朱) 食△ 仁574Aシ、夙 45A3A(去朱)、正498Aシ (去朱)、徳520A、569A(去)	
崇		仕 仁103シ(去)、夙 10A5A(去朱)、三94Aシ (去朱)、正123Aシ左 士 仁131A(上)、576シ、 健154Aシ、夙12A3A(上 朱)、三101Aシ(上朱)、 132A、159、382A(上朱)、 正53、133A、145A、174A、 206、207Aシ、徳23(去)	事 仁62Aシ(去)、 309A(去)、385シ、健 346A(去)、夙7B3A(去朱)、 29A1A(去朱)、三221A(去 朱)、正36、92A、219A、 287Aシ、349シ(去朱)、 350A(去朱)、徳85A、 359A(去)	
生			使 仁11(去)、健 478A(去)、夙3B2(去朱)、 正36シ	
俟		涖 原13□里反		
章		止 仁387(上)、389Aシ、 健423(上)、夙29A1(上 朱)、三269、271A(上朱)、 正350シ(上朱)、351Aシ、 352Aシ(去朱)、356A(上 朱)	志 仁576Aシ	
書	詩 正70、158シ	始 健24(上)、夙2B3(上 朱)、正22シ	弑 健8(去)、夙1B2(去 朱)、1B2(去朱)、三7、7 シイ、正8シ、厚7シ(去 朱)、徳7シ(去)、8(去) 思 仁11、629A(去)、健 663A(去)、夙44B6A(去 朱)、原24(去) ¹⁵⁷⁾	
常	時 仁297Aシ、正63、 118Aシ、徳58(平)		侍 仁57(去)、健19、35、 95(去)、夙2A5、7A5(去 朱)、三14、69(去朱)、26(去 朱)、正18、33、92Aシ、 88(去朱)、徳17、81(去)	
羊		以 仁392Aイ(上)、392A イ、健428Aイ(上)、428A イ、夙29A6Aイ(上朱)、 29A6Aイ、三273A(上 朱・上朱)、273Aイ(上朱)、 正354Aイ(上朱)、354A イ(上朱)、厚350Aイ(上 朱)、350Aイ、徳364A、 364A(上)		
日		耳 仁121A(上濁A)、健 159A(上濁A)、夙 11B1A(上濁A朱)、正 105A(去濁B朱)、正138A シ、徳135A(去濁B)		
来		理 仁67A(上)、健 110(上)、夙7B7A(上朱)、 16B1A、16B4A(上朱)、正 95A、100Aリ、徳94A、	吏 仁3リ(去)、三30リ (上朱)、正38リ、厚33 リ、徳34リ(去)	

¹⁵⁷⁾ 反切注「徐枚反」が書き込まれているが、存疑。

		200A、203A(上)、 原 96リ 合左、143Aリ 里 三 189A、417A(上 ^墨)、 正 248Aリ		
08	微(開)	尾(開)	未(開)	
見	機 仁 565A キ(平)、 隼 599A キ(平)、599A(平)、 永 40B4A(平 ^朱)、 三 375A(平 ^墨)、 正 490A キ、 厚 486A キ、 德 512A(平)			
溪			氣 (氣) 仁 88A(去)、396A キ(去)、 隼 126A キ(去)、363A キ、432A(去)、 永 9A6A、29B3(去 ^墨)、 三 86A キ(上 ^墨)、233A(上 ^墨)、275A(去 ^墨)、 正 112A、301A キ、357A キ(去 ^墨 2)、 德 107A(去)	
影	依 三 409A(平 ^墨) 衣 仁 388A、410A(平)、 隼 424A、445A(平)、 永 29A3A、30B1A(平 ^墨)、270A、283A(平 ^墨)、351A、368Aイ	悠 原 162イ・於豈反		
曉	晞 原 26香衣反			
08	微(合)	尾(合)	未(合)	
非	荆 * 仁 426A ヒ(去)、428A ヒ、 隼 461A ヒ(去)、 三 31B3A ヒ(去 ^朱)、31B5A(去 ^朱)、 三 294A ヒ(去 ^朱 1)音非、295A ヒ(去 ^墨)、 正 381A ヒ(去 ^墨 2)、382A ヒ、 厚 377A、378A ヒ(去 ^朱)、 德 393A、394A(去) 非 三 222A(平)、560A ヒ(平)、577A、584A ヒ、 隼 260A(平)、 三 18A4A(平 ^墨)、18A5A、40A7A、40B2A(平 ^朱)、 三 167A、372A、374A、388A(平 ^墨)、383A(平 ^輕 墨)、 正 218A ヒ(平濁A ^墨 1)、219A、487A ヒ、489A ヒ・ヒ ^合 、 厚 485A、495A、501A ヒ、 德 222A、508A、522A、528A(平)			
敷		排 隼 16 ヒ(上)、 三 2A2(上 ^朱)、 三 12(上 ^朱 1)、 正 15 ヒ、 厚 14 ヒ(上 ^朱)、 德 14 ヒイ(去)	費 原 53A ヒ(去)	
微	微 德 418A(上濁A)			
見		鬼 三 223(上 ^墨)、 正 289、442 ク ^半 、289A ク ^半 (上 ^墨 2)	貴 仁 141A、458A(去)、 隼 179A(去)、194A キ、493A キ(去)、 三 12B5A(去 ^朱)、33B4A(去 ^墨)、 三 27、313A(去 ^墨)、118(上 ^墨)、 正 34、406A ク ^半 、154A、166A、166A、302A キ	
疑			魏 原 22(平)	
影	威 仁 259A、609Aイ、276A イ(平)、388A(平)、 隼 424A(平)、 永 20B3A(平 ^朱)、29A2A(平 ^墨)、 三 190Aイ、201A 半 ^左 (平 ^墨)、243A 半、270A(平 ^墨)、 正 189A、262A、263A、314A、323A、351A、408A、525A 半、249A 半(平 ^輕 墨2)、 厚 521A 半、 德 253A(平)			
曉	微 原 28ク ^半 (平)許葦反 暉 原 23ク ^半 (平)			
于	達 三 409A 半、 德 560A(平)			
04	遇撰			
09	魚	語	御	
知			著 仁 505A チヨ(去)、 隼	

			539A チヨ(去)、 水 36B6A チヨ(去 ^来)、 三 340A チ ウ・チヨ ^{合左} (去 ^来)、 四 443A チヨ(去 ^来)、 厚 438A チヨ(去 ^来)、 德 460A(去)	
嬢		女 三 427A(上濁 B ^来)、 正 302A チヨ		
見	居 仁 57(平)、376A キヨ (平軽)、 建 10、95(平軽)、 412A(平)、 水 7A5、 28A5A(平 ^来)、 三 8、69(平 軽 ^来)、 正 110 キヨ、88(平 軽 ^来)、341A キヨ(平 ^来)、 德 81(平)	拳(擧) 仁 158A(上)、 310A キヨ、389A キヨ (上)、 建 425A(上)、641A キヨ、 水 13B7A(上 ^来)、 29A3A(上 ^来)、45B4A(去 来)、 三 222A、271A(上 ^来)、 398A キヨ(上 ^来)、403A(上 来 ¹)、 正 167A、287A、524A、 527A キヨ、352A キヨ(上 来 ¹)、 厚 162A、284A、523A キヨ、 德 362A(去)、576 コ (去)		
疑		語 三 275A(上濁 A ^来)、 正 357A キヨ、 德 368A(上 濁 B)	御 仁 258A キヨ(去濁 A)、344A キヨ(上濁 A)、 建 295A(去濁 A)、 水 45B6A(去濁 B ^来)、 三 189A(上濁 B ^来)、243A(去 濁 A ^来)、425A キヨ ¹⁵⁸⁾ 正 248A、315A キヨ(去濁 A ^来)、 厚 312A(去 ^来)、 德 579A(上濁 B)	
従		咀 原 8 慈呂反		
邪	徐 原 4 シヨ(平)	叙 三 82A(去 ^来)、 四 107A(去 ^来) 序 仁 114A シヨ(上)、 197A(上)、 建 152A シヨ (上)、235A(上)、 水 11A2A(上 ^来)、16B2A(上 来)、36B4A(去 ^来)、 三 100A シヨ(去 ^来)、 正 132A、198A シヨ ^合 、 德 200A(上)、 459A(去)		
初		楚 仁 28(上)、 建 66 ソ (上)、 三 49 ソ(上 ^来)、 正 61 ソ、 德 56 ソ		
生	疎(疏・疎) 仁 328A ソ (平)、504A ソ、 建 364A ソ (平)、538A ソ、 水 25A 4A(平 ^来)、36B4A(平 ^来)、 三 233A ソ(平軽 ^来)、 339A(平 ^来)、 正 302A、 411A ソ、 厚 299A ソ(平 来)、 德 459A(平)、 原 12 新 據反 ^右	所 仁 211 ソ(去)、216A シヨ(上)、600A ソ、 建 248(去)、254A(上)、 水 17B1(去 ^来)、17B6A(上 ^来)、 三 161 ソ(上 ^来 ・去 ^来 ^来)、 164A(上 ^来)、 正 209(上 ^来 1・去 ^来 ^来)、428A(去 ^来 ^来)、 厚 30(上濁 A ^来)、205 ソ、 德 212(去)		
章	諸 德 37(平軽)			
書	書 仁 14(平軽)、 建 52(平)、 水 4A7(平 ^来)、 德 21(平軽)		庶 仁 197A(去)、 建 67、 235A(去)、 水 5A7(去 ^来)、 6A7 シヨ、16B2A(去 ^来)、 三 49 ソ ^合 ・シヨ、152A シヨ(去 ^来)、 正 62、75、 145A、218、232A シヨ、 198A シヨ(去 ^来 ^来)、 厚 140A シヨ、 德 57、69、201A(去) 恕 仁 86A(去濁 A)、 建 124A シヨ(去濁 A)、 水 9A4A(去濁 A ^来)、 三 84A シヨ(上濁 B ^来)、 正 110A シヨ(去濁 A ^来 ^来)、 厚 104A シヨ、 德 106A シヨ(去)	
曉	虚 仁 534A キヨ、 建 568A キヨ、 正 466A キヨ			
羊	余 仁 49(平)、 建 87 ヨ、 三 64(平 ^来)、 正 80 ヨ(平 来 ¹)、 德 173(平) 餘 建 16(平)、50 ヨ、 水 2A2(平 ^来)、 正 15、46 ヨ、 厚 14 ヨ、 德 14(平)		譽 仁 95A ヨ(去)、 建 133A ヨ(去)、 水 9B5A(去 来)、 三 89A(去 ^来 ¹ ・上 ^来)、 正 117A ヨ、 厚 110A(去 来)、 德 113A ヨ	
来		呂 仁 125 リヨ(上)、 建 163 リヨ(上)、 水 11B5(上 来)、 三 107(上 ^来)、 正 141		

158) 仮名音注「キヨ」の「キ」に上濁点あり。

		リヨ		
日	如 仁312A(平濁A)、建348A(平濁A)、永24A2A(平濁A ^準)、正223Aシヨ、正289Aシヨ(平濁A ^準)			
10	虞	麌	遇	
非	夫 健19(平)、永2A3(平 ^準)、正13(平 ^準)、正9、16、144Aフ(→奉母・平声) 膚 仁219Aフ(平)、健125(平)、257Aフ(平)、永9A4、18A1A(平 ^準)、正85(平 ^準)音夫、165Aフ、正111フ(平 ^準)音夫、216Aフ、厚104フ、212Aフ、徳106フ(平) 鉄 仁274Aフ(平)、275A、277Aフ、健313Aフ(平)、永21B4A(平 ^準)、正200Aフ(平 ^準)、201Aフ、正260A、263Aフ、262Aフ(平 ^準)、厚257Aフ、徳266Aフ(平)	俯 仁388Aフ(上)、640Aフ、健424Aフ(上)、永29A3A(上 ^準)、正270Aフ(上 ^準)、正351Aフ(上 ^準)、厚347Aフ、徳361A(上)、575Aフ 父 仁189A(上 ^準)、正248Aフ(→奉母・上声) 甫 仁184Aホ(上)、健221Aフ(上)、永15B3A(上 ^準)、正143Aフ(上 ^準)、144A(上 ^準)、正187Aフ(上 ^準) 簠 仁643フ(上)、健677フ(上)、永45B5(上 ^準)、正424フ(上 ^準)、厚548フ、徳577フ(上)、原169フ ^合 ・方矩反	傳 群156Aフ(去)	
奉	夫 仁311A(平)、健348A(平)、永24A2A(平 ^準)、正223A(平 ^準 ・平 ^準)、正289Aフ(平 ^準)、徳296A(上)(→非母・平声) 扶 仁66Aフ(平)、永7B6A(平 ^準)、正95Aフ、厚88Aフ、徳88Aフ(平)	父 仁593A(上濁A)、正63(上 ^準)、166A(去 ^準)、正82、83、101A、108A、111、210Aフ、326(平 ^準)、328Aフウ、原145フ ^合 左(→非母・上声) 輔 仁562Aフ(上)、健596Aフ、永40B2A(上 ^準)、正374Aフ(上 ^準)、正488Aフ、群156A(去)	祐 仁411Aフ(去)、健446Aフ(去)、永30B3Aフ(去 ^準)、正284Aフ(去 ^準)、正369Aフ(去 ^準)、厚365Aフ、徳380Aフ(去)	
微	亡△ 正494、496フ(平 ^準)、厚485フ、492Aフ(平 ^準 濁A ^準)⇒「無」 無 仁39A、90A(平濁B ^準)、132A、374Aフ、正117A、118A、125Aフ、342Aフ(平濁A ^準)、523A(平濁A ^準)、永14B1A、14B1A(平濁A ^準)、28A6A(平 ^準)、厚119Aフ、490Aフ(平濁A ^準)、徳112A(平濁A)、113A、174A、174A(平濁B)	武 仁52(上濁A ^準)、53(上濁A ^準)、正66、66フ、徳61(上濁B)		
知	誅 仁604Aチウ(平)、健638A(平)、永43A5A(平 ^準)、正521Aチウ、厚518Aチウ			
見		矩 仁389Aク、健425Aク、永29A3A(上 ^準)、正271A(去 ^準)、正351Aク、厚347Aク、徳361A(上)	句 仁415A(去 ^準)	
群			具 仁280A、543A(去濁A)、健319A(去濁A)、577Aク(去濁A)、永22A2A、39A5A(去濁A ^準)、正204A(去 ^準 ・去 ^準)、361A、363A(去 ^準)、正265Aク ^合 (去 ^準)、473Aク ^合 (去 ^準)、475A(去 ^準)、徳271A(去)、493A(上) 懼 群31A(平)	
疑	愚 正50(上濁A ^準) 虞 仁411A、537Aク(平濁A)、健446A(平濁A)、571Aク、永30B3A(平濁B ^準)、正284Aク(平 ^準 ・平濁B ^準)、359Aク(平濁B ^準)、正369A、469Aク(平濁A ^準)、厚365Aク、徳380A(平濁B)			
精			足 仁223A(去)	
清		取 仁189Aシユ(上)、健227Aシユ、永16A2Aシユ(去 ^準)、正146Aシユ(上 ^準)、正192Aシユ、		

		京 74A シウ		
昌	樞 京 10 音*			
初	翳 群 72A スウ(平軽)			
生			數 仁 6(去)、隼 44(去)、 永 3B7(上 ^朱)、正 41 ス、 徳 38(上)(→生母・覚韻)	
章	侏 仁 588A シユ(平)、隼 622A シユ(平)、永 42A4A(平 ^墨)、三 390A(平 ^墨)音朱、正 508A シウ、厚 504A シユ、徳 531A(平)朱 仁 12(平)、隼 50 シ(平軽)、永 4A5(平 ^墨)、三 37(平軽 ^墨)、正 46 シユウ、徳 42(平)	圭 仁 82A(上)、隼 120A(上)、永 20A1A(上 ^墨)、33A7A、33B6A(上 ^朱)、三 151A シユ、183A シユ(上 ^墨)、314、376(上 ^墨)、正 107A、198A、198A、240A、270A、270A、294A、402A、415A シユ、徳 416A、423A、560A(上)、549A(去)		
書			輸 原 14 成反	
常	洙 隼 12(平)、永 1B5(平 ^墨)、三 9(平 ^朱)、正 11 ス(平 ^墨)市朱反、徳 11 シウ(平)		贖△ 仁 127A シウ(去)、隼 165A シウ、永 11B7A シウ(去 ^墨)、三 108A シユ・シウ ^左 (去 ^朱)、正 142A シユ・シウ ^左 (去 ^墨)、厚 136A シユ、徳 140A シウ(去)	
于		雨 仁 81A ウ(上)、隼 119A(上)、永 8B6A(上 ^墨)、正 107A ウ、徳 102A ウ(上)		
目	儒 仁 6 シユ、588A(平濁 A)、隼 622A(平濁 B)、永 42A04A(平濁 A ^墨)、三 25(平濁 A ^墨)、32(平濁 A ^朱)、390A(平濁 A ^墨)、正 40 シユ、508A シユ(平濁 A ^墨)、厚 504A シユ、徳 531A(平濁 B)			
11	模	姥	暮	
幫			布 仁 264A ホ(去)、隼 302A ホ(去)、永 21A2A(去 ^朱)、三 194A ホ、正 253A ホ(去 ^墨)、徳 258A(去)	
明			暮 仁 112A ホ(去濁 A)、隼 150A(去濁 A)、257A ホ、永 10B7A、18A1A(去濁 B ^朱)、三 99A(上濁 B ^墨)、165A(去 ^墨)、正 130A ホ、216A(上 ^墨)、徳 127A(去濁 A)、219A(去濁 B)	
端	都 仁 543A ト(平)、隼 577A ト(平)、永 39A5A(平 ^朱)、三 361A ト(平軽 ^墨)、正 38、473A ト、徳 493A(平)			
定	塗 京 24(平)徒 仁 547、549A ト、隼 39B2(平 ^朱)、三 10、364 ト(平 ^墨)、正 12、476 ト、徳 496(平)		度 仁 137、166A、390A、395A(去)、388 ト(去)、隼 175 ト(去)、204A、423、425A、431A(去)、隼 14B1A、29A2、29A4A(去 ^朱)、29B2A(去 ^墨)、三 114 ト、114A ト ^左 、132A、271A、274A(去 ^墨)、270 ト(去 ^朱)、正 150、151A、351、356A ト、174A、352A、352A ト(去 ^墨)、厚 145、347、348A、352A ト、169A ト(去 ^朱)、徳 149、175A、362A、367A(去)、群 112(去)、原 54A ト	
見	孤 仁 569A コ(平)、隼 603A コ(平)、三 378A(平 ^墨)、正 493A コ 辜 仁 124A コ(平)、隼 162A コ、隼 11B3A(平 ^朱)、三 106A コ(平軽 ^朱)、正 140A コ、厚 134A、381A コ、徳 138A コ(平)	古 正 188A コ	固 仁 25(去)、423A コ(去)、隼 62(去)、458A コ、永 5A3、31A6A(去 ^朱)、三 46、292A(去 ^墨)、正 58 コ、378A コ(去 ^墨)、厚 374A(去 ^朱)、徳 53(上)、390A(去) 故 仁 277A(去)、277A コ(去)、隼 265A(去)、隼 18B2A、18B2A(去 ^墨)、35B5A(上 ^朱)、三 169A(去)	

			米 ¹ 、169A コ(去 ^{米1})、331A コ、 正 223A コ(去 ^{米1})、223A(上 ^{米1})、430A コ、 厚 218A コ(去 ^{米1})、218A(去 ^{米1})、 徳 447A(上)、 群 82A コ	
溪			苦 仁 362A コ(上・去 ^苦)、 健 398A コ(上・去 ^健)、 函 27A5A コ(去 ^函)、 三 254A コ(上 ^函)、 正 330A ク、 厚 326A コ	
疑		五 三 189A(上濁 ¹)		
精		祖 仁 103、302A、335A(上)、411A ソ(上)、 健 142、446A ソ(上)、146A ソ、371A(上)、 灰 10A7、23B1A、30B2A(上 ^精)、37A6A(上 ^精)、 三 95、96A、141A、284A、428A(上 ^精)、224A ソ、238A ソ(上 ^精)、 正 125、126A、127A、185A、281A、290A、369A ソ、 厚 118(上 ^精)、 徳 121、380A(上)、316A(去)		
清			措 仁 646 ソ、650A(去)、 健 680 ソ(去)、684A(去)、 永 46A1A ソ(去 ^永)、 三 426A、428A ソ(去 ^永)、 厚 551 ソ、 徳 580 ソ(去)、583A(去)	
從			祚 原 2 ソ	
心			素 仁 622A(去)、 健 656A(去)、 永 44A7A(去 ^永)、 三 410A(去 ^素)、 徳 560A(去)	
影			惡 (惡 ^ク) 仁 271 ラ(去)、271A(去)、 健 309、310A(去)、 灰 21B1(去 ^影)、21B1A(去 ^影)、 三 98、98A(去 ^影)、198、199A ラ(去 ^影)、 正 258 ラ(去 ^影)、260A(去 ^影)、 厚 255A ラ(去 ^影)、256A(去 ^影)、 徳 179、263、264A、544A(去)、 群 68 オ(去)、 原 45、48A、67、67A、102(去)(→影母・鐸韻)	
匣	胡 仁 43(平)、 灰 6A5(平 ^匣)、 三 59 コ(平 ^匣)、61(平 ^匣)、 正 74、76 コ、 徳 68、70(平)	戸 三 428A シ		
來		魯 仁 560A ロ、 健 12 ロ、 灰 2B6(上 ^來)、 三 9(去 ^來)、372A(上 ^來)、 正 26、487A ロ	路 仁 4(去)、 健 42(去)、 永 3B5(去 ^來)、 徳 35(去)	
05 蟹撰				
12	齊(開)	薺(開)	霽(開)	
端			帝 仁 333A、484A テイ、 三 236A テイ、 正 38、306A、310 テイ、51 テ、426A(去 ^端)	
透		体 (體) 仁 86(上)、89A テイ、567A テイ(上)、 健 124、601A(上)、 灰 9A4、9A6A、40B6A(上 ^透)、40B6A(去 ^透)、 三 84、92A、377A(上 ^透)、 正 111、120A テイ(上 ^透)、113A、492A テイ、 厚 104、113 テイ、488A テイ(上 ^透)、 徳 106、108A、514A(上)、116A(去)		
定	蹄 徳 267A(去) 題 原 27(去)	弟 健 14(去)、 灰 10A3A、34A3A、35B1A、38B6A(去 ^定)、 正 104A、110A、122A、146A テイ、217A、413A(去 ^定)、 徳 12、85A、118A、425A、443A(去) 悌 仁 490(去)、 健 525(去)、 永 35B6、	弟 仁 204(去)、450(上)、481A テイ、 健 485(上)、 永 17A2A、33A4A、33A4A、33A5A、35A3、35A4A、38A6、38A7A、39B1A(去 ^定)、33A4(上 ^定)、 三 308(上 ^{見清})、308A、354 テイ、 正 203 テイ(去	

		35B7A(去 ^朱)、 仁 331 テイ(上 ^墨 ・去 ^墨)、 正 430 テイ(上 ^朱 ・去 ^墨 1)、431A テイ(去 ^墨 2)、 徳 447、448A(去)(→去声)	墨1)、204A、204A、399、400A、411A、422、463A、475A テイ、405A(去 ^墨 2)、475A テイ合、 亨 199(去 ^朱)、456、458A、471A、471A テイ、 徳 207、207A、207A、351A、413、413A、414A、415A、426A、439A、480、481A、486A、495A(去) 悌 仁 71A(去)、 隕 109A(去)、 永 8A4A(去 ^墨)、 三 76A(去 ^墨)、128A テイ(去 ^墨)、 正 98A、168A テイ、 徳 92A テイ(去)、 辟 132(去)(→上声) 禘 仁 335A テイ(去)、 隕 371A(去)、 三 238A テイ(去 ^墨)音帝、 正 307A テイ(去 ^墨 1)、 隕 304A(去 ^朱)音帝、 徳 316A(去)音帝 第 建 242(去)、 三 156、157A(去 ^墨)、 徳 80(去) 速 建 23(去濁A)	
清	妻 仁 306 セイ(平)、547 セイ、 隕 343(平)、581 セイ、 灰 23B4(平 ^墨)、39B1(平 ^朱)、 三 219 セイ、 正 284、302A、477A セイ、476A セイ(平 ^墨 2)、 亨 281 セイ(去 ^朱)、299A セイ、 徳 310A、496(平)、 隕 115 セイ			
莊	齊(齊) [△] 隕 115A 側皆反 ⇒「齋」			
匣			繫 京 11 ハム・ケン ^合	
来		礼(禮) 仁 71A(上)、268A レイ、 隕 109A(上)、 永 8A4A(上 ^墨)、39A5A(上 ^朱)、 三 6、128A、132A、314、361(上 ^墨)、56、259 レイ、 正 7 イ、70、121A、174A、256 レイ、338 レイ(上 ^墨 2)、352A、406A(上 ^墨 2)、 亨 404(去 ^朱)、 徳 116A、493A(上)	隸 建 34 レイ(去)、 灰 3A4 レイ(去 ^朱)、 三 25 レイ(去 ^朱 1)、 正 31 レイ、 隕 29 レイ(去 ^朱)、 徳 29(去 ^朱)	
12	齊(合)	齋(合)	齋(合)	
見	聞 仁 536A ケイ(平)、542(平)、 隕 570A ケイ(平)、 灰 38B6A ケイ(平 ^朱)、39A4(平 ^朱)、 三 358A ケイ(平 ^輕 朱1)、361 ケイ、361(平 ^輕 墨)、 正 468A、474A ケイ、472 ケイ(平 ^墨 1)、 隕 463A ケイ、468(平 ^朱)、 徳 487A ケイ(平)、492(平)			
匣			惠 仁 82A ケイ(去)、 隕 32、120A(去)、 灰 3A2(去 ^朱)、8B7A(去 ^墨)、 三 24 クエイ(去 ^墨)、172A、209A(去 ^墨)、 正 29 ケイ、108A クエイ(去 ^墨 2)、225A、272A クエイ、 徳 27、103A、228A(去)	
13			祭(開甲)	
並			弊 仁 453A ヘイ、 建 488A ヘイ(去)、 灰 33A6A(去 ^朱)、 三 310A(去 ^墨 1)、 正 402A ヘイ、 亨 399A(去 ^朱)、 徳 416A(去) 斃 京 166A ヘイ	
疑			藝 仁 94A ケイ、 三 89A(去濁B ^墨)、 正 117A ケイ(去濁B ^墨 1)、 隕 110A(去 ^朱)、 徳 112A(去濁B)	
精			祭 仁 207(去)、209A セイ、333A サイ、 建 245(去)、 灰 15A7A(去 ^朱)、17A5(去 ^墨)、 三 141A セイ(去 ^墨)、	

			236A サツ(去 ^畢)、238A セイ、 正 185A セイ(去 ^畢 2)、186A セ、206、208A、210A セイ、306A、308A セイ(去 ^畢 2)、 厚 180A セイ、 德 186A、314A(去)、 京 114A セイ	
章			制 仁 136 セイ ^平 (去)、335A セイ(去)、434A、575A セイ、 健 154A、175A セイ、174 セイ(去)、371A(去)、 泳 12B1、14A1A(去 ^畢)、14B2A、29A1A、32A3A、32B2A、45B4A(去 ^來)、 三 113、114A、113A、269A(去 ^畢)、127A、299A セイ、302A セイ(去 ^畢)、 正 134A、150、167A、174A、308A、387A、392A、498A セイ、150A(去 ^畢 2)、350A セイ(去 ^畢 2)、 德 167A、175A、316A、359A、400A、405A、520A、562A、572A、576A(去)	
書			世 泳 38B5(去 ^來)、 正 108A、467 セイ、 厚 103A、486(去) 勢 泳 31B5A(去 ^來)、 德 395A(去)	
来			厲 健 551A レイ(去)、553A(去)、 三 347A レイ(去 ^畢)、349A レイ(去 ^來 1)、 正 452A、454A レイ(去 ^畢 1)、 德 470A レイ(去)、472A レキ(去) 癘 仁 517A、519A レイ(去)、 泳 37B2A、37B4A(去 ^來)、 厚 447A、449A レイ(去 ^來)	
13			祭(合甲)	
日			丙 睽 67A セイ(去濁)	
14			泰(開)	
定			大 仁 238A(去)、 健 21、276A(去)、 泳 2A7、19A6A(去)、三16 タイ(去 ^來 1)、95(去 ^畢)、176A タイ(去 ^畢)、 正 20 タイ ^來 、109A、124、133A、187A、232A タイ、306A タイ(去 ^畢 2)、 厚 18、228A(去 ^來)、 德 18、130A、229A、236A(去)	
見			蓋 仁 124A カイ(去)、 健 162A カイ(去)、 泳 11B3A(去 ^來)、 三 106A(去 ^畢)、 正 140A カイ、 德 137A(去)	
匡			書 仁 135A、170A、313(去)、438A カイ(去)、519A カイ、 健 173A、553A カイ、208A、350、473A(去)、 泳 14B4A、32A7A、37B5A(去 ^來)、 三 134A(去 ^畢)、224 カイ(去 ^畢)、301A(去 ^來 1)、 正 149A、454A カイ、290 カイ(去 ^畢 2)、391A(去 ^畢 1)、 厚 171A、287、387A(去 ^來)、 德 403A、472A(去)	
14			泰(合)	
疑			外 三 233A グワイ、 正 302A クワイ(去濁 A ^畢 2)、 德 310A(去濁 B)	
匡			会(會) 泳 4B5 クワイ、 三 43(去 ^畢)、 正 53 クワイ、 德 49(去)	
15	佳(開)	蟹(開)	卦(開)	
明			懈 京 70A カヒ	

16	皆(開)	駭(開)	怪(開)	
見	皆 仁 280A カイ(平)、 建 319A(平)、 22A2A(平朱)、 262(入軽朱)、 265A カイ(平朱)、 261A(平朱)、 徳 271A(平)		介 仁 627A(去)、 建 661A(去)、 灰 44B5A(去朱)、 三 413A(去)、 徳 564A(去) 戒 群 31A(去)	
生			殺(煞) 正 493A(去朱)	
荘	斎(齋) 仁 312A サイ、 412A、512A サイ(平)、 建 349A、447A、546A サイ (平)、 永 24A3A(平朱)、 30B3A(平)、 37A5A サイ(平朱)、 三 223A、345A サイ(平)、 285A サイ(平朱)、 正 289A、370A、448A サイ、 厚 286A、444A サイ(平朱)、 365A サイ、 徳 297A(去)、381A サイ、 466A サイ(平)、 群 169A サイ			
16	皆(合)	駭(合)	怪(合)	
匣	懷(懷) 仁 587A クワイ (平)、 建 621A クワイ(平)、 永 42A3A(平朱)、 三 389A(平朱)、 正 507A、 507A クワイ、 厚 503A クワイ、 徳 530A(平)			
18	灰	賄	隊	
滂			配 仁 331 ハイ(去)、333A ハイ、 建 367(去)、 三 25A6(去)、 235、236A ハイ(去)、 238A、239 ハイ、 正 305 ハイ(去)、 306A ハイ(去)、 307、 308A、309 ハイ、 厚 301(去朱)、 徳 314A ハイ、 316、 318(去)	
並			悖 仁 370 ハイ(去)、 建 406 ハイ(去)、 灰 27B7 ハイ(去)、 28A2A(去)、 三 258 ハイ(去)、 260A(去)、 正 337 ハイ (去)、 338、339A ハイ、 345A ハイ(去)、 厚 332 ハイ(去)、 333、334A ハイ、 徳 346 ハイ(去)、 348A(去)、 群 104、104A ハイ(去)、 原 148 ハイ 蒲味反	
端			対(對) 仁 86A タイ(去)、 624A(去)、 建 124A タイ (去)、 658A(去)、 三 9A3A(去朱)、 44B1A(去朱)、 三 84A タイ(去)、 410A(去)、 正 110A タイ、 徳 105A(去)、 原 8 イ・タイ	
透			退 仁 387(去)、 建 423(去)、 永 29A2(去)、 三 270(去)、 正 350 タイ (去)、 351A タイ、 352A(去)、 厚 346(去朱)	
泥			内 仁 345A タイ(去濁A)、 三 233A タイ、 428A(去濁B)、 正 302A タイ(去濁A)、 315A タイ、 徳 311A、324A(去濁B)	
清	緘 仁 411A サイ(平)、 建 446A サイ(平)、 灰 30B2A サイ(上)、 三 408A(平軽)、 412A サイ(平朱・平軽)、 厚 364A サイ(平朱)、 徳 563A サイ(平)、 原 163A サイ 衰 仁 620A、626A サイ、 建 654A(上)、660A サイ、 永 44A5A サイ、 三			

	284A スイ(平軽 ^ホ 、 ^ホ 410A(平 ^ホ 、 ^正 369A サイ、 ^徳 380A サイ(平)⇒「續」			
匣	回 ^建 14(平)、 ^泳 117(平 ^ホ)、 ^正 13 クワイ、 ^徳 12(平)		悔 ^仁 91A(去)、 ^建 129A クワイ(去)、 ^泳 91A(去 ^ホ)、 ^三 87A 火イ(去 ^ホ)、 ^正 114A クワイ、 ^厚 107A クワイ(去 ^ホ)、215A クハ、 ^徳 110A クワイ	
来	雷 ^仁 81A ライ(平)、 ^建 119A(平)、 ^泳 86A(平 ^ホ)、 ^正 107A ライ、 ^厚 100A ライ、 ^徳 102A ライ(平)			
19	哈	海	代	
定		特 ^泳 3A4、4A6(去 ^ホ)、 ^三 25 タイ(去 ^ホ)、 ^厚 28 タイ、 ^徳 28 タイ(去)		
見		改 ^正 404A カイ		
溪	開 ^仁 69(平軽 ^ホ)、 ^正 87(平軽 ^ホ 2)、 ^徳 80(平)	憎 ^仁 490 カイ(上)、491A カイ、 ^建 525 カイ(上)、 ^泳 35B5 カイ(上 ^ホ)、 ^三 331 カイ(上 ^ホ)、 ^正 430 カイ、431A(去 ^ホ 2)、 ^徳 447、448A(上)		
精	災 ^仁 313 サイ(平軽)、506A サイ、 ^建 350(平軽)、540A サイ、 ^泳 24A4(平 ^ホ)、 ^三 224 サイ(平 ^ホ)、341A サイ、 ^正 290 サイ(平 ^ホ)、 ^厚 287 サイ(平 ^ホ)、 ^徳 298(平)	宰 ^仁 34(上)、 ^建 72(上)、 ^泳 5B4 サイ(上 ^ホ)、 ^三 53(上 ^ホ)、 ^正 66 サイ、 ^厚 61 サイ、 ^徳 61(上 ^ホ)	再 ^原 8(去) 載 ^仁 539A サイ(去)、 ^建 573A サイ(去)、 ^泳 39A2A(去 ^ホ)、 ^三 359A(去 ^ホ)、 ^正 470A サイ(去 ^ホ)	
清		采(業 [△]) ^仁 309A サイ(上)、574A サイ、 ^建 345A サイ(上)、609A サイ、 ^泳 23B7A(上 ^ホ)、41A6A(去 ^ホ)、 ^三 221A サイ(去 ^ホ)、 ^正 287A サイ(去 ^ホ)、498A サイ、 ^厚 283A、493A サイ、 ^徳 294A、520A(去)		
從	才 ^三 175(平 ^ホ)、 ^正 523A サイ 財 ^建 261A サイ、 ^泳 18A5A(平 ^ホ)、 ^三 168A(平 ^ホ)、 ^正 219A サイ、 ^徳 223A(平)	在 ^仁 395A サイ、 ^泳 29B1A(去 ^ホ)、 ^三 274A サイ(去 ^ホ)、 ^正 356A(去 ^ホ)		
影	衰 ^建 443(平)、 ^三 282、413A(平 ^ホ)、415(平軽 ^ホ)、 ^正 367、369A アイ、 ^厚 363、537 アイ		愛 ^仁 188、358A(去)、552 アイ、 ^建 149A、156、586 アイ、226、394A(去)、442A(平)、 ^泳 11A6、16A1、20B6、22B4、23A2A、23B3A、28A1A、39B6、40A3A、46B3(去 ^ホ)、30A6A(去 ^ホ)、 ^三 98、150A、193A、251A、333A、367、405(去 ^ホ)、 ^正 129、130A、135、191、192A、193A、198A、251、272A、282A、283A、287A、326A、366A、480 アイ、194、251A、283A アイ(去 ^ホ 2)、319(平軽 ^ホ)、 ^厚 123 アイ、 ^徳 126、133、193、255、278A、283A、290A、327A、347A、377A、411、504A、588(去)、 ^原 157 アイ ^合	
曉		海 ^建 158 カイ、 ^三 104(上 ^ホ)、 ^正 137、137A、312、315A カイ、 ^厚 131、308 カイ		
来	来 ^正 108A ライ、 ^徳 103A(平)			
20			廢(開)	
			刈 ^仁 218A カ口(去)、 ^建 256A カイ(去)、 ^泳 18A1A(去 ^ホ)、 ^三 165A カイ(去 ^ホ)、 ^正 215A カイ(去 ^ホ)、 ^厚 211A カイ・魚廢反、 ^徳 219A(去)魚廢反、219A ケイ・カ(去)魚肺反	

06 豫撰				
21	真(開甲)	軫(開甲)	震(開甲)	質(開甲)
幫			殯 ㄅ 46A3A(去 ^平)、ㄅ 428A ヒン(去 ^平)、ㄅ 582A(去)	必 ㄅ 343A、344A、344A ヒツ、ㄅ 379A ヒツ、ㄅ 315A、315A ヒツ、ㄅ 323A(入)
滂				匹 ㄅ 17(入)、永 2A3(入 ^平)、ㄅ 13 ヒツ(入 ^平)、ㄅ 16 ヒツ、ㄅ 15 ヒツ、ㄅ 15 ヒツ(入 ^平)
並		贖 ㄅ 127A ヒン(上)		
明	民 ㄅ 145(平)、ㄅ 119、143A(平濁 ^平)、186A、362A ミン、197A、215、434(平 ^平)、ㄅ 130A、141、187A、279 ミン			
見				吉 ㄅ 447A(入)、ㄅ 284A(入 ^平)、412A(入 ^平)
精			進 ㄅ 387(去)、ㄅ 423(去)、ㄅ 29A2(去 ^平)、ㄅ 270(去 ^平)、ㄅ 350 シン(去 ^平)、351A シン、352A(去 ^平)	
清	親 ㄅ 193A、605(平)、255A(去)、552 シン、ㄅ 19、639A(平)、ㄅ 2A5、9B6、10B6A、10B7、11A1A、11A2A、11A6、16A5A、16A5A、16A5A、16A5A、16B7、17A1A、18A6A、21A1A、23B1A、23B2A、23B2A、23B7A、24A1、24A3A、27B6、27B7、28A1A、28A6A、28A6A、29A7A、29A7A、30A4A、30B2A、30B5、30B6A、30B6、32A2、32A5A、32A6A、32B4A、33A1、33A2A、33A2A、36B3A、36B4A、37A3、38A4、38A5A、38B3A、39A7A、39A7A、39B6、43A6、44A5、44A6A、45A2A、46B2A(平 ^平)、20A7A(平 ^平)、ㄅ 98、99、100A、193A、258、284A(平 ^平)、400(平 ^平)、ㄅ 108A、119、120A、122A、129、129A、136、195A、201A、203A、219A、286、336、355A、368A、371A、440A、441A、522A シン、241A シン(平 ^平)、ㄅ 518A シン、ㄅ 16 シン(平)、103A(平 ^平)、114、115A、126、126A、128、129A、130A、134、197A、203A、203A、204A、206A、206A、223A、255、257A、257A、289A、290A、294A、295、296A、326、328、345、346、347A、351A、352A、365A、375、379A、382、383A、383、401A、407A、411、411A、412A、458A、459A、478、479A、494、495A、501、504A、546、547A、568A、588A(平)、399(去)			七 ㄅ 563A シツ、ㄅ 13(入 ^平)、ㄅ 123A シツ
從	秦 ㄅ 18(平 ^平)、ㄅ 22 シン			疾 ㄅ 76A シツ(入)、ㄅ 114A シツ、ㄅ 8B2A(入 ^平)、ㄅ 79A シツ(入 ^平)、ㄅ 103A シツ、ㄅ 96A シツ、ㄅ 97A(入)
心			信 ㄅ 58A、68A、71A、175A(去)、ㄅ 96A、106A、109A、213A、ㄅ 7A6A、15A3A、28B5(去 ^平)、8A1A、8A4A、15A2(去 ^平)、ㄅ 69A、76A、128A(去 ^平)、ㄅ 89A、96A(去 ^平)、122A、	

			168A、180A、181A シン、 347A シム(去 ^{準1})、 <u>正</u> 176A シン、 <u>徳</u> 82A、82A、90A、 93A、118A、182A、 357A(去)		
章				質 <u>三</u> 409A(入 ^準)	
船	神 <u>仁</u> 315A(平)、 <u>建</u> 351A(平)、 <u>夙</u> 24A5A、 37B5A(平 ^準)、 <u>三</u> 225A(平 準)、 <u>正</u> 34、291A、442 シ ン、 <u>徳</u> 299A、436A、472A、 472A(平)			実(實) <u>夙</u> 38B4A(入 ^準)、 <u>正</u> 34、52 シツ、405A(入 準 ²)、 <u>徳</u> 31(入 ^準)、47、 484A(入)	
書	身 <u>正</u> 111 シン(平 ^準)			室 <u>建</u> 606A シツ、 <u>正</u> 496A シツ 失 <u>仁</u> 157A シツ、 <u>建</u> 195A、605A シツ、 <u>夙</u> 23B74(入 ^準)、 <u>三</u> 126A、 157A、173A(入 ^準)、 <u>正</u> 167A、205 シツ(入 ^準)、 227A、236A、236A シツ、 319A シツ(入 ^準)、 <u>徳</u> 167A ツキツ[ママ]、208、 211A、294A(入)	
常	宸 <u>京</u> 25 音辰 臣 <u>永</u> 34A2、35B1A(平 準)、 <u>三</u> 210 シン、274A、 364、373(平 ^準)、 <u>正</u> 78、 80、83、107A、197A、270A、 273、488 シン、476 シン (平 ^準)、476A シム ^合 、 <u>徳</u> 443A(平) 辰 <u>正</u> 106A シン		慎 <u>群</u> 31A(平)		
影	埶 <u>京</u> 9 イン ^準 ・於隣反 姻 <u>仁</u> 84A イン(平)、 <u>建</u> 122A イン(平)、 <u>夙</u> 9A1A イン(平 ^準)、 <u>三</u> 83A イン (平 ^準)、 <u>正</u> 108A イン、 <u>亨</u> 102A イム、 <u>徳</u> 103A イン (平)				
辛			觴 <u>仁</u> 486A イン ^見 、 <u>建</u> 521A イン(去)、 <u>夙</u> 35B2A イン(去 ^準)、 <u>正</u> 427A イン (去 ^準)、 <u>亨</u> 424A イン(去 準)、 <u>徳</u> 444A(去)音胤	溢 <u>三</u> 114、115A、 117A(去 ^準)、 <u>正</u> 155A(去 準 ¹)	
日	人 <u>仁</u> 369、371、548A(入 濁 A)、401、587A(平濁 A)、 <u>夙</u> 35B1A(平濁 A ^準)、 <u>三</u> 3、27、82A(平濁 A ^準)、 51、75A、107、109A、136A、 365A(平濁 B ^準)、57、 403A(平濁 A ^準)、 <u>正</u> 63、 145A、187、218、429A シ ン、 <u>徳</u> 3、443A(平濁 B) 仁 <u>仁</u> 71A(平濁 A)、 <u>建</u> 109A シン(平濁 A)、 <u>夙</u> 8A4A(平濁 A ^準)、 <u>三</u> 128A、 301A(平濁 B ^準)、 <u>正</u> 98A、 168A、390A シン		刃 <u>仁</u> 420A シン(去濁 A)、 <u>建</u> 455A(去濁 A)、 <u>夙</u> 31A4A(去濁 A ^準)、 <u>三</u> 290A シム(去 ^準 ・上濁 B ^準 、去 濁 A ^準)、 <u>正</u> 376A シム(去 濁 A ^準)、 <u>亨</u> 372A シム、 <u>徳</u> 388A(去濁 A ^準)	日 <u>三</u> 415(入 ^準 濁 B ^準)、 <u>正</u> 106A シチ、490A シツ	
来	隣 <u>三</u> 417A(平 ^準)			栗 <u>仁</u> 392A リツ、 <u>三</u> 273A リツ(入 ^準)、 <u>正</u> 354A リツ(入 ^準)、 <u>亨</u> 350A リツ	
21	真(開乙)	軫(開乙)	震(開乙)	質(開乙)	
並				弼 <u>仁</u> 562A ヒツ(入)、 <u>建</u> 597A ヒツ(入)、 <u>夙</u> 40B2A(入 ^準)、 <u>三</u> 374A ヒ ツ(入 ^準)、 <u>正</u> 488A ヒツ (入 ^準)、 <u>亨</u> 484A ヒツ(入 準)、 <u>徳</u> 510A(入)、 <u>群</u> 156A ヒツ	
明	曼 <u>仁</u> 149A ヒン(平濁 A)、 <u>建</u> 187A ヒン(平濁 A)、 <u>夙</u> 13A6A ヒン(平濁 A ^準)、 <u>三</u> 122A ヒン(平 ^準 ・平 ^準 濁 B ^準)、 <u>正</u> 159A ヒン(平 濁 A ^準)、 <u>亨</u> 155A ヒン・ 武巾反、 <u>徳</u> 160A ヒン(平 濁 B)	敏 <u>仁</u> 76 ヒン(上濁 A)、 <u>建</u> 114A ヒン、 <u>夙</u> 8B2A(上 濁 A ^準)、 <u>三</u> 79A ヒン(上 濁 B ^準)、 <u>正</u> 103A ヒン、 <u>亨</u> 96A ヒン、 <u>徳</u> 97A ヒン (上濁 B) 閔 <u>建</u> 14(上濁 A)、 <u>夙</u> 1B7(上濁 A ^準)、 <u>三</u> 11(上濁 A ^準)、 <u>正</u> 13 ヒン、 <u>亨</u> 12(上 濁 A ^準)、 <u>徳</u> 12(上濁 B)			

疑	垠 原 20 コン ^合 ・語巾反 又五巾反			
知				鑿 原 25 テツ・チツ ^合 ・ 砒栗反又丁結反
澄	陳 仁 124A、227A(平)、 264A チン(平)、健 162A (平)、302 A チン 困 11B4A、18B2A(平 巽)、 21A2A(平 朱)、仁 107A(平 巽・去 朱 ²)、169A(平 巽・ 去 巽)、194A(平 巽)、正 140A チン(去 巽 ¹)、223A チン、253A チン(平 巽 ¹)、 厚 249A チン(平 朱)、德 226A(平 朱)、258A(平)、 原 21 チン ^{合 左} 、 170A(平)(→去声)		陳 仁 424(平 巽・去 巽)、 424A(去 朱 ¹)(→平声)	
21	真(合)	軫(合)	震(合)	質(合)
于		殞 原 166A キン(上)		
22	諄	準	棼	術
徹				怵 仁 655A チキツ、健 689A チキツ、困 46B2A チ キツ(入 朱)、仁 432A チキ ツ(入 輕 巽)、德 588A ツキ ツ(入)
精			俊 仁 488A シュン(去)、 健 523A シュン(去)、仁 330A シュン(去 巽)、正 429A(去 巽 ¹)、厚 426A(去 朱)、德 446A(去)	
昌				出 仁 5(入)
書			舜 仁 537A シュン、仁 359A(去 巽)、正 469A ス キン	
船			順 仁 67A、204、230A、 417A、495A、528(去)、 529A シュン、585A シュ ン(去)、健 242、269A、 452A、530A、562(去)、 619A シュン(去)、困 7B7A、31A1A(去 巽)、 10B6A、17A2、17A3、 18B5A、36B2、38A6、 38A7A、38A7A、38B6A、 40A3A、42A2A(去 朱)、仁 156、173A、288A、338、 353(去 巽)、335A(去 巽・ 去 朱 ²)、正 130A、204、 208A、227A シュン、 374A、(去 巽 ²)、399、435A、 506A スキン、德 90A、 207、207A、208、229A、 352A、385A、452A、457、 480、480A、481A、486A、 529A(去)、127A(去濁 A)、 458A シュン ^左	術 仁 610A シュツ、健 644A シュツ、正 526A ス キツ 述 仁 106A(入)、健 144A シュツ、困 10B1A(入 朱)、 仁 96A シュツ(入 巽)、正 126 スキツ、厚 119A(入 朱)、德 122A(入)
羊		尹 仁 278 キン(上)、280A キン、健 317(上)、困 22A1(上 巽)、仁 203 キン (上 巽)、正 264A キン(上 巽 ¹)、265A キン、厚 260 イ ン		聿 仁 106A イツ(入)、健 143A イツ(入)、困 10A7A イツ(入 巽)、仁 95 キツ ^{朱 左} 、96A キツ(入 朱 ¹)、正 126A キツ、厚 119A キツ (入 輕 朱)、德 122A ツキツ (入)、原 43A キツ・ユツ 合
日			潤 仁 379A シュン(去濁 A)、健 415A シュツ(去濁 A)、困 28B1A(去濁 A 巽)、 仁 265A(去濁 A 巽)、正 344A シュン(去濁 A 巽 ¹ 巽 ²)、德 354A(去濁 B)	
24	文	吻	問	物
並	墳 原 24(平)	憤 健 16 フン(去)、困 2A2(去 朱)、仁 12(去 朱 ¹)、 正 15 フン、厚 14 フン(去 朱)、德 14(去)	分 仁 272A、613A(去濁 A)、604A(去)、健 311A、 647A(去濁 A)、638A(去)、 困 21B2A、43A4A、 43B6A(去濁 A 巽)、仁 199A(去 朱 ¹)、399A、 404A(去 朱 ¹ ・去濁 A 巽)、 正 259A フン(去 朱)、	

			521A(去 ^{異2})、528A(去 ^{異1})、 厚 255A、524A(去 ^来)、 徳 265A、545A、552A(去)	
明	文 氷 29B3A(平濁 B ^異)、 三 20、22、36(平濁 A ^{来2})、275A(平濁 B ^異)、351A フン、 正 52 フン、 徳 42(平)、368A、563A(平濁 B) 聞 仁 399A フン、 氷 29B6A(平 ^来)、 三 277A(去 ^{来1})、 正 360A フン(平濁 A ^{異2})、 徳 370A(平)(→去声)		問 仁 2、78(去濁 A)、 隼 20 フン(去濁 A)、40、116A(去濁 A)、 氷 3B3、8B3A(去濁 A ^異)、 三 15(去 ^{来1})、30 フン(去 ^{来1} ・去濁 A ^異)、80A(去濁 A ^異)、 正 18 フン ^来 、37 フン、104A フン ^左 、 厚 17(去 ^来)、33 フン、 徳 17(去濁 B)、34(平・去濁 B)、99A(去濁 A) 聞 仁 539A(去濁 A)、 隼 573A(去濁 A)、 氷 39A2A(去濁 A ^異)、 三 89(去 ^異 抹)、359A(去濁 B ^来)、 正 470A フン(去 ^{異2})、 厚 111A(去 ^来)、 徳 489A(去濁 B)(→平声)	物 三 73A(入軽濁 A ^異)、165A フツ(入濁 A ^異)、186A モツ、 正 215A フツ(入濁 A ^{異2})、272A、344A フツ、350A(入濁 A ^{異1})
見	君 仁 90A(平)、 隼 6(平軽)、 氷 19B2A、35B2A(平 ^来)、 三 63(平軽 ^異)、 正 6、82、83、130A、197A、207A、208A クン、274A(平軽 ^異)、428A(平 ^{異2})、477A クン ^{合左} 、 徳 444A(平)			
群	群 仁 286A クン(平軽)、417A クン、 隼 322A、452A(平軽)、503A(上)、 氷 22A7A、31A1A、34A6A(平 ^異)、 三 25 クン(平軽 ^異)、288A(平 ^異)、 正 31、107A、373A、391A クン、269A クン(平軽 ^{異2})、413A クン(平 ^{異2})			
暁			訓 仁 11(去)、62A、66A、185A、290A、489A キン(去)、 隼 49、104A、223A、327A(去)、 氷 4A4、7B6A、15B5A、35B5A(去 ^来)、22B3A(去 ^異)、 三 36 キン、73A(去 ^{来2})、145A クキン(去 ^異)、209A(去 ^異)、331A キン(去 ^異)、 正 45、92A、95A、188A、271A クキン、430A クキン・クキン ^左 、 徳 41、86A、88A クキン(去)、190A、278A、447A(去)	
25	欣	隱	焮	迄
見		謹 原 54A キン		
26	魂	混	懇	没
幫	奔 仁 298A ホン(平)、 隼 334A(平)、 氷 23A4A(平 ^異)、 三 214A(平 ^異)、 正 278A ホン(平 ^{異1})、 厚 275A(平 ^来)	本 仁 80A(上)、 隼 118A(上)、 氷 3B5A(去 ^来)、 三 81A(上 ^異)、 正 106A ホン(上 ^{異2})、 徳 100A、105A(上)		
明	門 仁 9(平 ^異)、358A モン、 正 111、 徳 491 モン			歿 仁 410A(入軽濁 A)、 隼 445A(入濁 A)、 氷 30B2A(入濁 A ^異)、 三 284A、408A(入軽 ^異) 没 仁 181A(入濁 A)、 隼 218A(入濁 A)、654A(入軽)、 氷 15B1A(入濁 A ^異)、 三 142A(入軽濁 B ^異)、 正 185A ホ、368A ホツ、 厚 364A(入 ^来)、 徳 558A(入)
定			鈍 仁 77(去)、560A トン(去)、 隼 115A、595A トン(去)、 氷 3B2A トン(去 ^異)、40A7A(去 ^来)、 三 79A(去濁 B ^異)、372A トム(去濁 B ^異)、 正 103A トン(去 ^{異1})、487A トン(去 ^{異1})、 厚 97A トム、483A トン、 徳 98A トム(去)、508A(去)	
精	尊 仁 95A、181A、287A(平)、 隼 133A、152 ソ			

	ム(平)、323A(平)、 氷 9B5A、11A2A、22B1A(平墨)、13A3A、15A7A、16A5A(平朱)、 三 141A、236A(平軽墨)、207A(平墨)、 正 117A、132A、157A、166A、186A、195A、224A、275A、305A、370A ソン、185A ソン・ソン ^左 、269A ソン(平軽墨 ²)、 徳 113A(平軽)、157A、187A、197A、313A(平)			
清			寸 三 23(去墨)、 正 28 ソン、 徳 26(去)	
従	存 仁 151A、152A(平)、 建 17、189A、190A、476A(平)、 氷 2A3、13B1A、33A2A、37A5A、39A6A(平朱)、13B2A、32B4A(平墨)、 三 13、123A、303A(平墨)、 正 16、161A ソン、392A ソン(平墨 ¹)、 厚 157A ソン、 徳 14、162A、267A、407A、412A、466A、494A、587A(平)			
心	孫 仁 20 ソク(平軽)、 建 58(平)、133A ソン、 氷 4B6(平墨)、 正 54、108A、127A ソン、118A ソム、 厚 50 ソン	損 仁 142A ソム(上)、296A ソン、 建 180A ソン(上)、 氷 12B6A(上墨)、 三 117A(上朱 ¹)、213A(上墨)、 正 154A、277A ソン、 厚 149A ソン(上墨)、274A ソン、 徳 284A(上)		
影	温 仁 393A ヲン(平)、 建 429A(平)、 氷 29A7A(平朱)、 三 273A ヲン(平軽墨)、 正 355A オン(平墨 ¹)、 厚 351A ヲン、 徳 365A(平)			
暁	昏 仁 374A コン、 氷 28A5A(平朱)、 三 261A コン(平軽墨)、 正 340A コン(平墨 ¹)、342A コン、 厚 336A(平朱)、 徳 351A(平)			
来			論 仁 19(去)、 建 57(去)、 氷 4B5(去朱)、 三 42 ロン(去朱 ¹)、 正 53(去墨 ¹)、 徳 48(去)	
27	痕	很	恨	
影	恩 仁 86A(平軽)、 建 124A(平)、 氷 9A4A(平墨)、 正 108A、110A、318A、328A、331A ヲン、257A オン、 徳 103A(平軽)			
07 山撰				
28	元(開)	阮(開)	願(開)	月(開)
見			建 建 25 ケン ^平 (去)、 三 19(去墨)、 正 23 ケン、 徳 22(去)	
疑	言 仁 160A ケン、534A、604A ケン(上濁 A)、 三 37(平朱 ²)、134A、273A、356A(平濁 B墨)、 正 46、168、176A、357A、466A ケン、347A ケン(平濁 A墨 ²)、 徳 356A、358A、364A(平濁 B)			
暁			献(獻) 仁 600A ケン(去)、 建 634A ケン(去)、 氷 42B7A(去朱)、 三 396A(去墨)、 正 518A ケン	
28	元(合)	阮(合)	願(合)	月(合)
非				發(發) 仁 630A(入)、 建 664A(入)、 三 40 ハツ(入軽朱 ¹)、 正 51 ハツ、 厚 47 ハツ、 徳 567A(入) 髮 仁 219A ハツ、 建 257A ハツ、 三 165A ハツ、 正 111 ハツ(入軽墨 ²)、 厚 104 ハツ

奉		飯 仁 648A(去)、建 682A(去)、丞 46A3A(去朱)、三 427A イン・ハン合左、徳 582A(去)		罰 仁 271A、288A ハツ、三 199A、199A(入濁 A ^鼻)、208A、208A(入濁 B ^鼻)、正 259A ハツ(入軽 鼻 ^リ)、259A、270A、271A ハツ、厚 255A(入朱)
微			万(萬) 仁 23 ハン、丞 39A2A(去濁 B ^朱)、三 36、73A、77A(去濁 A ^鼻)、212(去濁 B ^鼻)、正 46、56、130A、275 ハン、徳 95A、102A(去濁 A)、489A(去濁 B)、	
見				厥 原 43A クエツ
溪				闕 正 484A ケツ
疑	元 仁 376A(平濁 A)、建 26(平濁 A)、丞 2B4(平濁 A ^鼻)、三 19(平濁 A ^鼻)、徳 22、351A(平濁 B) 原 仁 216A クケン[ママ](平濁 A)、建 254A ケン(平濁 A)、丞 17B6A(平濁 A ^鼻)、三 164A クエン(平濁 A ^鼻)、正 214A ケン(平濁 A ^鼻)			月 正 106A クエツ
影		宛 仁 211A エン(上)、建 249A エン、丞 17B1A(上朱)、三 161A エン(上鼻)、正 209A エン(上鼻 ^リ)、厚 205A エン、徳 213A(上)		
于		遠 仁 37(上)、建 75(上)、丞 5B7(上朱)、三 55(上鼻)、正 69 エン、徳 63(上)、原 158A エン(→去声)	遠 原 85A(去)(→上声)	日 仁 18 ヤツ(入)、建 56 ヤツ、丞 4B3(入鼻)、三 41 キヤツ(入軽鼻)、正 51 キヤツ、厚 48 キヤツ、徳 47 キヤツ(入)、原 18 エツ・ヤ合左 鉞 仁 274A エツ(入)、275A、277A エツ、建 313A エツ、丞 21B4A(入朱)、三 200A エツ(入朱 ^リ)、正 261A、262A、263A エツ、厚 257A エツ・エツ左、258A エツ、徳 266A □ツ
29	寒	旱	翰	曷
端			旦 仁 112A タム(去)、建 149A タン(去)、257A タン、丞 110B7A、18A1A(去朱)、三 99A、165A(去鼻)、正 130A タン、216A(去鼻 ^リ)、徳 127A(去)	
定	彈(彈) 仁 44(平)、建 82 タン(平)、丞 16A6(平鼻)、三 60(平朱 ^リ)、正 75 タン(平朱)、厚 69 タン、徳 69(平朱)			達 丞 20B2A(入朱)、正 17、247A、323A タツ、232A タ、厚 16 タツ、徳 11、15(入)
泥			難 仁 32、173A(去)、建 70、211A(去)、丞 5B3、14B7A(去鼻)、三 51 ナン(去朱 ^リ)、136A(去朱 ^リ)、正 64 ナン(去朱)、179A ナン(去鼻 ^リ)、徳 59、180A(去)、群 54A(去)	
見				割 群 127A カツ(入)
精			贊 原 2 サン(去)	
影	安 仁 1122A(平)、552 アン、建 1160A(平)、丞 11B2A(平朱)、正 138A アン、徳 136A(平)		案 建 478A、638A アン(去)、丞 43A4A(去朱)、三 304A アム左(去鼻)、399A(去鼻)、正 394A アン左、厚 390A アム、徳 545A(去)	
曉			漢 正 23、50 カン	
匣	寒 建 119A(平)、丞 8B6A(平鼻)、三 82A(平朱 ^リ)、徳 101A(平)			
30	桓	緩	換	末
端	端 丞 44B4A(平朱)、三 413A タン、徳 564A(平)			

見	冠 仁388A、410A クワン(平)、建424A(平)、445A クワン(平)、夙29A3A(平朱)、30B1A(平墨)、三270A、283A(平墨)、正351A クワン(平墨)、368A クワン、徳361A(平) 官 仁400A、563A クワン、夙38B1、38B3A(平朱)、三94A(平墨)、正123A クワン、徳102A、482、484A(平) 棺 夙45B3、45B4A(平朱)、三422(平墨)、徳575、576A(平)、原168 古丸反観(観) 建442A(平)		貴 建13(去)、三10(平墨)、正13 クワン、徳12(去)	
溪	寛 仁201A、393A クワン(平)、建239A、429A(平)、夙16B6A、29A7A(平朱)、三154A クハン(平)、273A(平軽墨)、正201A クワン(平墨)、355A クワン、厚197A クハン、徳204A、365A(平)			
心	酸 原164A サン			
曉	歡(歡) 仁407A(平)、夙30A6A(平墨)、三281A(平墨)、正366A クワン(平墨)、407A(去墨)、厚361A(平朱)、徳377A(平)		煥 原16 クワン(去)	
来			乱(亂) 仁374A ラン、422A(去)、建160A ラン、457A ラン(去)、夙13B1A、24A4、31A6A、32A5(去朱)、三7、260A、300(去墨)、225 ラン(去墨)、292A ラン、正8、138A、161A、292A、339A、340A、342A、390A ラン、291 ラン(去墨)、378A、391A(去墨)、389A アン(去墨)、厚287A、385A ラン(去朱)、徳8(平・去)、298、389A、402、404A(去)	
31	刪(開)	潜(開)	諫(開)	黠(開)
幫	班 仁575A ハン(平軽)、建609A ハン(平)、夙41A6A(平朱)、三382A(平朱・平軽墨)、正498A ハン(平朱・平軽朱)、厚494A ハン(平朱)、徳520A(平) 頒 原14 布還反			
明			慢 仁443A マン(去)、建478A マン(去)、夙32B5A(去朱)、三304A マン(去墨)、正394A マン(去墨)、厚391A(去朱)、徳408A(去)	
見	姦 仁443A、587A カン(平)、建478A カン(平)、621A(平)、夙32B5A、42A3A、42A3A(平朱)、三304A カン(平軽朱)、389A カン(平軽朱)、正394A カン、508A カン(平軽朱)、厚390A カム(平朱)、徳408A、530A(平)		諫 仁566A カン(去)、573A カン、建600A(去)、夙41A4A(去朱)、三376A、380A(去墨)、正489A カム、491A カン、497A カム(去墨)、厚487A(去朱)、492A カム、徳518A(去)	
疑	顔 仁584A カン(平濁A)、建14(平濁A)、618A カン(平濁A)、夙1B7、42A1A(平濁A墨)、三11(平濁A朱)、388A(平濁A墨)、正13 カン、506A カン(平濁A墨)、厚501A カン、徳12、528A(平濁B)			
31	刪(合)	潜(合)	諫(合)	黠(合)
匣			患 仁230A クエン(平濁A・去)、519A クエン(去)、建268A(去)、553A クワン、夙18B4A、37B5A(去)	

			墨)、 三 171A クエン(去墨)、349A(去朱)、 正 225A クワン(去墨)、454A クワン(去朱)、 厚 215A クハ、 徳 228A、472A(去)	
32	山(開)	産(開)	欄(開)	鏝(開)
見	艮 原 25 カン ^音 間 建 26(平)、 永 2B4(平墨)、 三 19(平軽墨)、 正 23 カン、49 カン(平軽墨 ²)、 徳 22、45(平)			
初				察 仁 501A サツ、 團 535A サツ、 三 338A サツ _左 、340 サツ(入軽墨)、 正 440A、451A サツ、442 サツ(入墨)、 徳 460(入)
生	山 三 54(平墨)、143A、144A(平軽墨)、 正 68、264A サン、90A、187A(平軽墨 ²)			
匣	閑 正 10 カン 間 仁 57(平軽)、 建 10(平)、95(平軽)、 永 1B4、7A5(平墨)、 三 8(平朱 ¹)、69(平朱 ¹ ・平軽墨)、 正 88(平墨)、91A カン、 厚 9 カン、 徳 81 音閑⇒「閑」			
32	山(合)	産(合)	欄(合)	鏝(合)
見	鰐 仁 298 クワン(平)、299A ク、 建 335 クワン(平)、 永 23A4 クワン(平墨)、 三 215 クワン(平朱 ¹ ・平墨)音官、 正 279 クワン(平軽朱)、279A クワン、 厚 276A クハン・音官、 徳 285(平)音官、 解 74 クワン(平)			
33	先(開)	銑(開)	霰(開)	屑(開)
端		典 仁 102A、165A(上)、336A テン、 建 198A(上)、 永 10A4A(上墨)、 三 94A テン(上墨)、128A、132A(上墨)、238A(上墨・去墨)、 正 123A、173A テン、169A、308A テン(上墨)、 厚 305A テン		
透	天 厚 301(去墨)			
定	田 永 17B7A(平朱)、 正 215A(平墨 ²)、 徳 218A(平)		奠 三 428A(去墨)	
見			見 永 24A1A(去墨)、 正 288A ゲン、511A(去墨 ¹)、 厚 284A ゲン(去朱)(→匣母・去声)	潔 仁 512A ケツ(入軽)、 建 546A ケツ(入)、 団 37A5A(入朱)、 三 345A ケツ(入墨)、425A(入軽墨)、 正 448A ケツ(入軽墨 ¹)、 厚 444A(入朱)、 徳 466A ケツ(入) 黎 仁 644A(入)
精				節 仁 407A セツ、 建 76 セツ、152A セ、 永 22A1A、33B2A、45B1A(入朱)、 三 56 セツ(入軽墨)、100A、113、167A、167A(入軽墨)、204A(入墨)、 正 70、107A、132A、202A、218A、235A、264A セツ、226A(入墨 ¹)、517A(入墨 ²)、 徳 65、102A、222A、270A、418A、574A(入)
清				切 仁 577A セツ、 建 611A(入)、 永 41B1A(入墨)、 三 383A セツ(入墨)、 正 499A セツ
從	前 仁 562A セン、 建 145A セム、 正 127A セン			
心	先 仁 309A、511(平軽)、 建 6(上)、346A、545(平)、 永 14A6A、37A1、37A4A、37B2A(平朱)、23B7A(平墨)、 三 96A、344(平軽墨)			

	342(平軽 来 ¹)、 正 50、126A、165、287A セン、92(平軽 墨 ²)、445 セン(平来)、448 ソン(平 墨 ²)、 亨 441 セン(平 来)、443(平来)、 徳 5、86、87A、94A、96A(平軽)、46、294A、462A、465、469A(平)、			
暁		顛(顛) 仁 95A(上)、279A ケン(上)、280A、513A ケン、 隼 133A ケム(上)、318A(上)、319A、547A ケン、 夙 9B5A、22A2A(上 墨)、37A6A(上 来)、 三 90A シン、204A(上 墨)、 正 117A、265A、449A ケン、265A ケン(上 墨 ¹)、 徳 113A、467A(上)		
匣	絃 夙 5B4 ケン、 三 53(平 来 ¹)、 正 66 クエン、 亨 61(平 来)、 徳 61(平)、 賢 三 128A(平 墨)、 正 154A ケン、406A(平 墨 ²)		見 隼 347A(去)(→見母・去声)	
来			練 仁 412A レン、 隼 447A(去)、 夙 30B3A(去 来)、 三 284A(去 来 ¹)、 正 369A レン(去 来)、 亨 365A レン、 徳 381A(去)	
33	先(合)	銑(合)	霰(合)	屑(合)
見		畎 仁 537A ケン(上)、 隼 571A ケン(上)、 夙 38B7A ケン(上 墨)、 三 359A ケン(上 来 ¹)、 正 469A ケン(上 来)、 亨 463A ケン、 徳 488A ケン(上)		
暁				血 隼 126A ケツ、 三 86A クエツ、 正 112A クエツ、 亨 105A ケツ、 徳 107A クエツ(入軽)
34	仙(開甲)	獮(開甲)	線(開甲)	薛(開甲)
滂	篇 正 142A ヘン			
並			便 三 304A(去 来 ¹)	
明				滅 仁 176A ヘツ(平濁 A)、634(入)、 正 181A ヘツ、 原 166A ヘツ
從	錢(錢) 仁 2 セン(平)、 隼 38 セン(平)、 夙 3B3(平 墨)、 三 30(平 来 ¹)、 正 37 セン、 亨 32 セン(平 来)、 徳 34(平)		賤(賤) 仁 458A(去)、 隼 194A セン、493A セン(去)、 夙 33B4A(去 来)、 正 166A、406A セン、 徳 420A(去)	
章	鐘 仁 633A セン(平)、 隼 667A セン(平)、 夙 45A3A セン(平 来)、 三 417A セム(平軽 来 ¹)、 徳 569A セン		戰(戰) 仁 148 セン(去)、 隼 186 セン(去)、 夙 13A5(去 来)、 三 121(去 墨)、 正 158 セン、 徳 158(去)、 群 30(去)	折 仁 389A セツ、 隼 424A セツ、 正 270A(入軽 墨)、 三 351A セツ(入 墨 ¹)、 亨 347A セツ
常		善 仁 375(上)、577A、577A セン、 隼 169A セン、411(上)、 夙 11B7A、12A3A、24A7A、30A1A、40B5A、41B1A(去 来)、28A4(上 墨)、28A5A(去 墨)、 三 109A、263A、376A、383A(去 墨)、262(上 墨)、 正 143A、145A セン、228A セン(去 墨 ²)、491A セム、 亨 59 セン、 徳 141A セン(去)、143A、300A、350、351A、352A、373A、513A、522A(去)		
来				列 仁 108A(入軽)、503A レツ、 隼 537A レツ、 三 441A レツ、 烈 隼 146A レツ、 夙 10B2A(入軽 墨)、 三 97A、339A(入軽 墨)、243A レツ 左、 正 127A、314A レツ、 亨 437A(入 来)、 徳 458A(入軽)
日	然 仁 311A(平濁 A)、 隼			

	15(平軽濁 A)、348A(平濁 A)、 夙 2A1(平軽濁 A ^重)、24A2A(平濁 A ^重)、 三 12、16(平濁 A ^{重2})、223A(平濁 B ^重)、 正 14、74、320A セン、153A セム、289A セン(平濁 A ^{重1})、 亨 13 セン			
34	仙(開乙)	彌(開乙)	線(開乙)	薛(開乙)
幫			夔 (變) 仁 67A、455A ヘン、 建 279A ヘム、 夙 33B2A(去 ^朱)、 三 74A、178A(去 ^重)、 正 95A、235A、403A ヘン、 德 89A、418A(去)	
並		辨 仁 114A、122A ヘン(去)、328A(去)、 建 152A、160A、364A ヘン(去)、 夙 11A2A、11B2A、25A4A(去 ^朱)、 三 100A ヘン(去濁 B ^重)、105A ヘン(去 ^重)、233A(去 ^{朱1})、 正 132A ヘム(去 ^{重1})、138A ヘン(去 ^{重1})、302A ヘム、 亨 127A ヘン、299A ヘム(去 ^朱)、 德 130A、136A、310A(去)		別 仁 335A ヘツ(平濁 A)、 三 238A(入 ^重)、 正 308A ヘツ(入濁 A ^{重2})、 亨 304A(入 ^朱)、 德 316A(入)
明		冕 仁 627A ヘン(上濁 A)、 建 661A ヘン(上濁 A)、 夙 44B4A(上濁 B ^朱)、 正 413A ヘン(平濁 B ^重)、 德 564A ヘン(上濁 B)		
知				哲 仁 186A テツ ^五 、 建 224 テツ、 三 145A テツ(入軽 ^{朱1})、 正 189A テツ、 亨 184A テツ、 京 4 智烈反他結反
溪	纂 建 14(平)、 夙 1B7(平 ^朱)、 三 11 ケン(平 ^重)、 正 13 ケン(平軽 ^{重1})、 亨 12 ケン(平 ^朱)			
群	乾 仁 94A(平)、 建 132A(平)、 夙 9B4A(平 ^朱)、 三 89A(平 ^{朱2})、 正 117A ケン、 亨 110A ケン、 德 112A ケン(平)			
疑				孽 仁 315A ケツ(入)、 建 351A ケツ(入)、 夙 24A5A ケツ(入軽 ^重)、 三 225A ケツ・ケチ(入軽 ^重)、 正 292A ケチ・魚列反、 亨 288A ケチ(入 ^朱)、 德 299A ケツ(入濁 B)
34	仙(合甲)	彌(合甲)	線(合甲)	薛(合甲)
從	全 建 127A(入)、 德 106A(平 ^重)			
心	宣 正 187A(平 ^{重2})			
邪	旋 仁 389A、395A セン(平)、 建 425A、431A(平)、 夙 29A4A セン(平 ^朱)、29B2A(平 ^重)、 三 271A セン(平 ^重)、274A セム(平 ^重)、 正 352A セム(平 ^{重1})、356A セン(平 ^{重1})、 亨 348A セム、 德 362A(平)			
章	專 仁 454A(平)、 建 489A セン(平)、 夙 33A7A(平 ^{重1})、 正 402A セン(平 ^{重1})			
昌	川 三 54 セン(平軽 ^重)、 正 68 セン			
書				說 建 85 セツ、 夙 4A3、4B6、6B3(入 ^朱)、 三 44 セツ合、63(入軽 ^重)、 正 44、55、64、78、84 セツ、 德 50(入)、59、72、77(入軽)
辛	捐 三 390A(上 ^重)、 正 509A(上 ^朱)			
于	円 (圓) 仁 339A エン(平軽)、 建 375A エン(平)、 正 311A エン(平 ^{重1})、 亨 308A(平 ^朱)			

34	仙(合乙)	獮(合乙)	線(合乙)	薛(合乙)
定			伝(傳) ㊦11、12、18、35、54(去)、㊦49、51、56、73(去)、㊦4A4(去 ^上)、4B6、4B3、5B6(去 ^上)、㊦36、67(去 ^上)、54 テン、㊦45、67、84 テン、㊦43、62、77(去)	
群	権(權) ㊦343A クエン(平)、㊦379A ケン、㊦243A ケン(平 ^上)、㊦314A クエン(平 ^上)、㊦310A(平 ^上)			
08 効撰				
35	蕭	篠	嘯	
定	条(條) ㊦427A テウ(平濁A)、㊦462A(平)、㊦31B4A(平 ^上)、㊦294A(平 ^上)、㊦382A テウ(平 ^上)、㊦378A(平 ^上)、㊦394A(平)			
36	宵(甲)	小(甲)	笑(甲)	
心		小 ㊦173A(上 ^上)、㊦226A セウ ^合 (上 ^上)、227A セウ(上 ^上)	肖 ㊦161A、458A セウ(去)、㊦199A セウ、493A、568A(去)、㊦38B4A(上 ^上)、㊦129A、313A、356A、422A(去 ^上)、㊦169A、406A セウ(去 ^上)、466A セウ、㊦165A(去 ^上)、403A、461A セウ(去)、㊦421A、485A(上)	
章	照 ㊦286A ショウ(去)、㊦322A セウ(去)、㊦22A7A(去 ^上)、㊦206A(去 ^上)、㊦269A セウ(去 ^上)、㊦266A(去 ^上)		詔 ㊦17(去)、121A セウ、㊦33 ショウ、159A ショウ(去)、㊦3A4、4B3、11B1A(去 ^上)、㊦25(去 ^上)、105A(去 ^上)、㊦31 セウ、138A セウ(去 ^上)、㊦28 セウ、132A セウ(去 ^上)、㊦28、47、136A(去)	
書			少 ㊦165A(去 ^上)	
影	要 ㊦432、433A(去)、㊦467(去)、468A(平・去)、㊦32A1、32A2A、32A3A(去 ^上)、㊦297(平 ^上)、㊦299A(平 ^上)、㊦385A ヨウ(平 ^上)、387A ヨウ(平 ^上)、㊦382A(平 ^上)、㊦398、399A、399A(去)、㊦127(平)(→去声)		要 ㊦63、104A、208A、469(去)、㊦101、246A、504、505A(去)、142A ヨ(去)、㊦7B4(去 ^上)、7B6A、11B2A、34A7、34B1A(去 ^上)、㊦72、77A、159A、209A、320、320A、434A(去 ^上)、73A、80A、95A、105A(去 ^上)、㊦93 エウ(去 ^上)、94A、207A エウ(去 ^上)、104A(去 ^上)、124A エウ、271A、414、415A エウ(去 ^上)、㊦86(去 ^上)、88A、412A エウ、117A、268A、411A(去 ^上)、㊦86、88A、94A、98A、136A、430、431A(去)、㊦138(去)、㊦32、33A、33A(去)(→平声)	
羊			曜 ㊦15 エウ(去)	
36	宵(乙)	小(乙)	笑(乙)	
幫		表 ㊦156A へウ(上)、㊦13B6A(上 ^上)、44B3A(上 ^上)、㊦125A(上 ^上)、㊦166A、563A(上)		
明			廟(廟) ㊦103A(去濁A)、181A、298A へウ、㊦141A へウ(去)、㊦10A5A(去濁A ^上)、37A5A(去 ^上)、㊦94A、214A(去濁B ^上)、140 へウ(去濁B ^上)、141A へウ、㊦124A、185A へウ、183 へウ(去濁A ^上)、185A(平濁A ^上)、㊦117A(去 ^上)、㊦120A へウ、285A(去濁B)、455A、466A(去)	

知	朝 𠄎30A5A(平 ^朱)、𠄎365A チヨウ、𠄎376A(平)(→澄母・平声)			
澄	朝 𠄎587A チヨウ、𠄎42A3A(平 ^朱)、𠄎46A6A(平 ^墨)、𠄎240A テウ、𠄎311A、508A テウ、𠄎531A(平)(→知母・平声)	兆 𠄎125テウ(上)、181A テウ、411A テウ(去)、𠄎164テウ(上)、218A テウ、446A テウ(去)、𠄎11B5(上 ^墨)、15B1A(去 ^墨)、30B2A(去 ^朱)、𠄎108、142A、284A、426Aテウ(去 ^墨)、109A、109A、428A テウ、187A(去 ^墨)、𠄎141、143A、143A、246A、369A テウ、185A テウ(去 ^墨)、𠄎135、137A、242A、365A テウ、180A テウ(去 ^朱)、𠄎141A テウ、380A、583A(去)		
見	驕 𠄎422A ケウ(平)、𠄎452A(平)、457A ケウ(平)、𠄎292A ケウ(平 ^朱)、𠄎378A ケウ(平 ^輕 朱)、𠄎373A ケウ(平 ^朱)			
影	妖 𠄎315A エウ(平)、𠄎351A エウ(平)、𠄎24A5A エウ(平 ^朱)、𠄎225A エウ(平 ^輕 墨)、𠄎291A エウ、𠄎288A エウ(平 ^朱)、𠄎299A エウ(平)			
37	肴	巧	効	
明			貌 𠄎181A ハウ(去)、𠄎218A ハウ(去)、𠄎15B1A(去 ^墨)、𠄎142A ハウ(去濁 ^B 墨)、𠄎185A ハウ(去 ^墨)、186A ハウ、𠄎180A ハウ、𠄎187A(去)	
見	交 𠄎523A カウ、𠄎519A カウ 蛟 𠄎476A カウ(平 ^輕)、𠄎511A カウ(平)、𠄎34B6A(平 ^朱)、𠄎323A カウ(平 ^朱)、𠄎419A カウ(平 ^朱)、𠄎416A カウ、𠄎435A(平) 郊 𠄎334 カウ(平 ^輕)、335A カウ、𠄎370(平 ^輕)、𠄎237A、238A カウ(平 ^墨)、𠄎307、307A カウ、310A カウ(平 ^墨)、𠄎304 カウ(平 ^朱)、304A(平 ^朱)、𠄎316A(平)、𠄎72A(平 ^輕)、144A カウ、𠄎132 カ(平)		教 𠄎66A、220A、260、374A(去)、604A カウ、𠄎104A、258A、298、410A(去)、159A カウ、𠄎5A3、7B6A、18A2A、20B1、20B3A、20B5、25A5A、29B5A、29B5A(去 ^朱)、20B7A、28A4A(去 ^墨)、𠄎73A、103A、166A、188、191、248、251A、261A(去 ^墨)、𠄎11、57、98A、136、145A、246A、249A、315A、321A、323A、358、359A カウ、359A カウ(去 ^墨)、𠄎10、53、88A、100、143A、220A、253A、254、257A、328、330、332A、332A、349A、370A、370A、544A(去)、101A カウ(去)、134 カウ、𠄎5 ケウ・カウ _{合左} 、141 カフ	
曉			孝 𠄎71A(去)、𠄎109A、505A(去)、459A カウ _左 、𠄎8A3A、9A7A(去 ^墨)、22B3、25A5A、30A4、30A6A、33A1、33B5A、37A5A、38A7A(去 ^朱)、𠄎11、128A、141A、153A、159、175、345A、352、385A(去 ^墨)、𠄎14、27、139、168A、200A、483、510、511A カウ、120A(去 ^墨)、226A、405A(去 ^墨)、289A カウ(去 ^墨)、475A カウ _{合左} 、𠄎444A(去 ^朱)、𠄎2、87A、88A、96A、100A、107、111A、277A、298A、300、311A、311A、324A、375、377A、389、391A、411、420A、466A、481A(去)	
匣			校 𠄎23 カウ(去)、𠄎2B2 カウ(去 ^朱)、𠄎18 カウ(去 ^朱)、𠄎22 カウ、𠄎20(去 ^朱)、𠄎20 カウ(去)	

38	豪	皓	号	
幫			報 仁317A(去)、364A ホウ(去)、隼353A、400A(去)、夬247A(去)、三255A、256A(去)、正293A ホウ(去)、332A ホウ、332A ホウ	
並			暴 仁175A、231A、443A(去)、隼213A、270A(去)、478A ホウ(去)、夬15A2A、18B6A、32B5A(去)、三138A、139A、304A ホウ(去)、173A ホウ(去)、正180A ホウ(去)、227A、394A ホウ(去)、厚176A、391A(去)、176A、223A ホウ、隼182A、230A、408A(去)	
定		道 夬8A3A(去)、三6、132A、250A、269A(去)、76A(去)、正4、117A タウ、93、94A、323A(去)、349A(去)、三319A(去)、隼3、85A、86、92A、96A、98A、278A、359A、405A(去)		
見	高 隼2(平)、夬1A3(平)、三2(平)、正199A カウ、厚2(平)、隼2(平)			
溪		考 三224A カウ、正185A、281A、290A、449A カウ		
精			竈 三417A サウ	
清			操 仁456A サウ(去)、隼491A サウ(去)、夬33B2A(去)、三311A サウ(去)、正404A サウ(去)、厚401A サウ(去)、隼418A(去)	
從	曹 仁402A サウ(平)、隼661A(去)、夬30A1A(平)、三279A サウ(平)、正361A サウ(平)		造 仁257A(去)、隼295A サウ(去)、三189A(去)、正248A サウ、厚244A(去)、隼252A(去)	
心	搔 原141A 蘇造反			
曉			好 仁271、271A(去)、隼309、310A(去)、夬21B1、21B1A(去)、三195A、198A(去)、198 カウ(去)、正258 カウ(去)、258A カウ、厚254A(去)、隼263、264A(去)、夬102(去)、102A カフ	
匣			号(號) 仁275A カウ(去)、277A(去)、隼315A(去)、夬21B4A(去)、三201A カウ(去)、202A カウ、381A(去)、正261A カウ(去)、263A カウ、498A カウ(去)、厚257A カウ(去)、259A カウ、隼267A(去)	
来		老 仁302A、484A(上)、隼153A ラウ、519A(上)、夬11A2A、35B7A(上)、35A7A(上)、三60(上)、正29、122A、133A ラウ、隼118A(去)、130A、449A(上)	勞(勞) 仁116A ラウ(去)、隼154A ラウ(去)、夬11A3A(去)、三101A(平)、正133A ラウ、隼131A(去)	
09 果撮				
39	歌	哿	箇	
透	他 三258 タ(平)、正336 タ(平)、337 タ、厚332 タ(平)、333 タ			
見	歌 三53(上)、正66 カ			
溪		可 仁559A カ(上)、600A カ(去)、隼593A(上)、		

		634A(去)、 氷 40A5A(上朱)、 三 268(去)、371A、396A(上朱)、 正 486A、518A カ(上朱)、 字 481A(上朱)、514A カ、 徳 507A(上)		
精		左 仁 62A サ(上)、 健 99A サ、 氷 7B3A(上)、 徳 85A(上)		
清	瑛 仁 577A サ(平)、 健 611A(平)、 三 383A サ(左)、 正 500A サ、 厚 495A サ、 徳 522A(平)			
影	阿 仁 585A ア(平)、 健 619A ア(平)、 氷 42A2A(平)、 三 388A(平朱)、506A ア(平軽朱)、 徳 529A(平)			
匣	河 正 23 カ、49 カ(平)、 徳 22、45(平)			
40	戈(直合)	果(直合)	過(直合)	
定			惰 京 70A タ	
見			過 仁 94A(去)、 健 132A(去)、 氷 9B4A、18B6A、43A6A(去)、 三 89A(去)、400A(去)、 正 117A クワ、226A クワ(去)、523A クワ(去)、 厚 110A、519A(去)、 徳 112A、230A、546A(去)	
疑	科 健 31(平)、 氷 3A2 クハ(平)、 三 23 クワ(平)、 正 29 クワ(平)、 厚 27 クワ(平)、 徳 26(平)			
從		坐 仁 57(上)、 健 19、95(上)、 氷 2A5、7A5(上)、 厚 102、305A(去)、 三 15、69、83、238A(去)、 正 18、92A、110A、308A サ、88(去)、109(去)、 徳 17、81、104、105A、105A、317A(去)		
匣	未 群 72A クワ(平軽) 和 仁 71 クワ(去)、313、417A(平)、559A(去)、560A クワ、 健 109(去)、350、452A(平)、 氷 21A5A(去)、24A4(平)、31A1A、33A7A(平)、 三 76、224、288A、372A、372A(平)、196 クハ(平)、 正 99、290 クワ(平)、256、291A、486A クワ、374A クワ(去)、487A(平)、 厚 92 クワ、252 クワ(平)、287(平)、 徳 93 クワ(平)、261(去)、385A、417A、507A、507A、508A(平)(→去声)	禍 仁 91A、230A(去)、314、444A(上)、 健 268A(去)、350、479A(上)、 氷 9B1A(去)、24A4(上)、32B5A(上)、 三 87A クハ(去)、172A(去)、224 クワ(去)、304A(上)、375A クワ(去)、 正 114A、291、292A、491A クワ、225A、443A クワ(去)、 厚 108A、287(去)、 徳 110A クワ(去)、228A、298、408A、512A(去)、 京 120(去)	和 仁 607A(去)、 健 641A(去)、 三 401A(去)、 徳 547A(去)(→平声)	
10 仮撰				
41	麻(直開)	馬(直開)	禡(直開)	
明	麻 仁 412A ハ(平濁 B)、 徳 563A(平濁 B)	馬 三 24(上濁 A)、61(上濁 B)、 正 30、76 ハ、 徳 28(上濁 B)、 京 11(上)		
見	嘉 仁 185A カ(平)、 健 223A(平)、 氷 15B4A(平)、 三 144A カ(平)、188A カ(平)、 厚 183A カ(平)、 徳 190A(平) 家 仁 572A カ、 三 220A カ、 正 41、162A、473A カ 筋 仁 43(平)、 健 31(平)、 氷 6A5(平)、 三 59 カ(平)、 厚 69 カ、 徳 68 カ(平)	仮(假) 仁 58A(上)、 健 96A(上)、 氷 7A6A(上)、 三 69A カ(上)、89A(去)、 徳 82A カ(去)、83A(去)	稼 仁 217A カ(去)、 健 255A(去)、 氷 17B7A(去)、 三 164A カ(去)、214A カ(去)、 徳 217A(去)	
疑		雅 仁 104(上濁 A)、211A、319A カ、 健		

		142(上)、 永 10A6(上濁 A 墨)、 三 95(上濁 B 墨)、122A(上濁 A 墨)、351A カ、 正 124、295A カ、160A(上 墨)		
初	差 仁 156A(平)、 建 194A サ(平)、 永 13B6A(平 朱)、 三 126A サ(平軽 墨)、 正 166A サ、 厚 161A サ、166A(平)、 暁 116A サ			
匣	選 原 158A カ(平)	下 仁 34、597A カ、157A(上)、 建 195A(上)、 永 21A2A(去 朱)、42B5A(上 朱)、 三 28(去 墨)、53(上 墨)、 正 67、99、126A、167A、200A、516A カ、 徳 93 カ(去) 夏 仁 127A(上)、 建 165A(上)、 永 11B6A(上 墨)、 三 108A カ(去)、 正 142A カ		
41	麻(拗開)	馬(拗開)	禡(拗開)	
邪	邪 仁 603A シヤ(平)、 建 637A シヤ(平)、 永 43A3A(平 朱)、 三 398A シヤ(平 墨)、 正 520A シヤ(去 墨)、 厚 516A シヤ、 徳 544A(平)			
章		者 三 10、63、313A(上 墨)、 正 12 ヤ、36、47、79 シヤ、368A シヤ(上 墨)、406A(上 墨)、406A(上 墨)、 厚 403A(上 朱)		
書	審 仁 223A(平)、 建 261A シヤ(平)、 永 18A5A(平 墨)、 三 168A シヤ(平 朱)、 正 219A シヤ(平 墨)、 厚 215A シヤ		舍 仁 395A シヤ(去)、 建 431A(去)、 永 29B2A(去 朱)、 三 274A(去 墨)、 正 356A シヤ(去 墨)、 徳 366A(去)	
常		社 仁 144(上)、 建 182 シヤ(上)、 永 13A1(上 墨)、39A5A(去 朱)、 三 118 シヤ、 正 156 シヤ、 徳 493A(去)		
羊		夜 仁 183(去)、 建 219(去)、 三 89A(上 墨)、 正 117A、186 ヤ、 徳 112A ヤ		
41	麻(直合)	馬(直合)	禡(直合)	
見		寡 仁 299、469A クワ(上)、 建 335 クワ(上)、504A(上)、 永 34A7A(上 墨)、 三 215 クハ(上 墨)、 正 279、279A クワ、415A クワ(上 墨)、 原 111 クワ		
曉		化 仁 453A クワ、 三 61、176A、193A(上 墨)、 正 4、67、138A、172A、232A、248A、250、401A クワ、 徳 4、62、136A(去)		
1 1	宕撰			
42	陽(開)	養(開)	漾(開)	藥(開)
知		長 仁 83A、208A、216A、363A、450A、501、503A、528、544A(上)、 建 121A、139A、152A、242、399A、485A、535、537A、562(上)、246A(去)、 永 9A1A、11A2A、17B6A、36B2、36B4A、38A7A、39B3A(上 朱)、10A3A(上 朱・上 墨)、17A2、17A3A、17A5A、33A4A、36B3A、38A6、39A6A、39B1A(上 墨)、 三 83A、93A、100A、156、157A、159A、163A、255A、308A、338、353、365A(上 墨)、339A(上 朱)、 正 108A、331A(上 墨)、203、205A チヤウ(上 墨)、207A、208A		

		<p>チャウ、214A、441A、474A(上^墨)、440 チャウ・チャウ^{朱合左}、厚199 チャウ、327A、436、436A(上^朱)、457 チョウ^左、徳103A、118A、129A、207、208A、210A、211A、217A、343A、414A、457、458A、459A、480、494A、498A(上)、群49A、149、149A、165A(上)、原84A(上)(→澄母・平声)</p>		
澄	長 正 28(去 ^墨) (→知母・上声)			
疑		<p>仰 仁388A キヤウ(上濁A)、健424A キヤウ(上)、承29A3A(上濁A^墨)、三270A(上^朱・上^墨)、正351A キヤウ(上濁A^墨)、厚347A キヤウ、徳361A(上濁B)</p>		<p>虐 仁201A、231A キヤク(入濁A)、健239A キヤク(入濁A)、270A(入濁A)、承16B6A、18B6A(入濁A^朱)、三154A(入濁A^墨)、173A キヤク(入軽^朱)、正201A、227A キヤク、197A、222A キヤク、204A、230A(入濁B)</p>
精	<p>將(將) 仁602A シヤウ(平)、健636A(平)、原43A2A(平^朱)、三397A(平^墨)、正519A シヤウ(平^墨)、徳543A(平)</p> <p>漿 仁485A(平)、健520A シヤウ(平)、承45A2A(平^朱)、三417A(平^墨)、徳568A(平)</p>		<p>醬 承35B1A(平^朱)、三329A(平軽^朱)音將、正427A シヤウ(平軽^墨)、厚424A シヤウ、徳443A(平)</p>	<p>爵 仁209A シヤ、459A、486A シヤク、原35B2A(入^朱)、三101A シヤク(入軽^墨)、119A、120A、120A、329A(入濁)、313A シヤツ、正133A、156A、156A、206、207A、274A、406A シヤク、427A シヤク(入軽^墨)、厚127A シヤク、徳157A、157A、444A(入)</p>
清	<p>槍 仁218A サウ(平)、健256A サウ(平)、承18A1A(平^朱)、三165A サウ(平^墨)、正215A サウ、徳219A(平)</p>			
心			<p>相 仁442A(去)、572A シヤウ、健477A(去)、承32B4A、41A3A(去^朱)、三240A、380A(去^朱)、正393A(去^墨)、496A シヤウ(去^朱)、厚491A シヤウ(去^朱)、徳407A、518A(去)</p>	
邪	<p>祥 仁412A シヤウ(平)、439A シヤウ、健447A(平)、474A シヤウ(平)、承30B3A、32B1A(平^朱)、三284A(平^朱)、302A(平^墨)、正369A シヤウ(平^朱)、391A シヤウ(平^墨)、徳381A、404A(平)</p> <p>詳 仁172A(去)</p>	<p>像 仁487A(上)、健522A シヤウ(上)、承35B3A(上^墨)、三330A シヤウ(去^墨)、正428A シヤウ(去^墨)、厚425A(去^墨)、徳445A(去)</p> <p>象 仁58A、129A、487A シヤウ(上)、健96A、522A(上)、167A シヤウ(上)、承7A6A、12A1A、35B3A(上^墨)、三69A、109A(去^墨)、330A(去^朱)、正144A シヤウ、428A シヤウ^{合左}、厚138A(去^墨)、425A シヤウ(去^朱)、徳82A シヤウ(去)、83A、142A、445A(去)</p>		
莊	<p>莊(莊) 仁627A(平)、健661A(平)、承44B4A(平^朱)、徳564A(平)</p>			
生		<p>爽 仁501A サウ(上)、健535A サウ(上)、承36B2A(上^朱)、三338A サウ^合(上^朱)音早[ママ]、正440A サウ(上^朱)、厚435A サウ(上^朱)、徳457A サウ(上)</p>		
章	<p>章 仁396A(平軽)、523A(平)、健432A(平)、承10B1A、29B3A、36B5A(平^朱)、三20(平軽^墨)、正40 フ、187A、265A、295A シヤウ、徳23(平軽)、80、122A、368A(平)、原12(平)</p>			<p>酌 仁491A シヤク(入)、健526A シヤク(入)、承35B6A シヤク(入^朱)、332A シヤク(入^墨)、正431A シヤク(入^墨)、428A シヤク、徳448A シヤク(入)</p>

書	傷 仁89A シヤ(平)、建127A シヤウ(平)、永9A6A(平)、三86A(平軽)、正113A シヤウ(平)、音章、徳108A シヤウ(平・去) 商 仁455A シヤウ、正403A シヤウ	賞 仁271A シヤウ、建639A シヤウ、永21B1A(上)、三199A、199A、200A、399A(上)、正259A、259A、270A、521A シヤウ、厚254A(上)		
常	常 仁453A シヤウ、建3、488A(平)、永19A6A、19B1A、33A6A(平)、33A7A(平)、三3(平軽)、178A(平)、309A(平)、正234A、234A、235A シヤウ、401A シヤウ(平)、厚2(平)、徳2、237A、237A、416A、416A(平)		上 仁157A(去)、416A シヤウ(去)、建195A、451A(去)、永13B6A(去)、30B7A(去)、三288A(去)、正99、149A シヤウ、373A シヤウ(去)、厚369A(去)、徳93 シヤウ(去) 尚 仁126A(去)、建164A(去)、永11B6A(去)、正142A シヤウ、徳49(去)	
影				約 仁222A(入)、433A ヤク、建128ヤク、261A(入)、468A ヤク(入)、永18A5A(入)、三86A(入)、167A ヤク(入)、299A(入)、正113A、218A ヤク、387A ヤク(入)、厚107A ヤク(入)、215A、382A(入)、徳109A、222A(入)、原18ヤ[ママ]
曉	郷 仁39(平軽)、建76 キヤウ(平)、永6A2(平)、三57 キヤウ(平)、正71 キヤウ、厚66 キヤウ、徳65(平軽)	享 仁297A キヤウ(上)、建334A(上)、三214A キヤウ(上)、431A キヤウ(上)、正278A キヤウ、厚275A(上)、徳285A キヤウ、原114A キヤウ	餉 永35B6A ケイ[ママ]	
辛	揚 仁553 ヤウ(平)、建587 ヤウ、永39B6(平)、三367 ヤウ(平)、正480 ヤウ(平)、482A ヤウ、厚476 ヤウ、徳501 ヤウ、辛 仁423A ヤウ(平)、建458A(平)、永31A6A(平)、三292A ヤウ(平)、正378A ヤウ(上)、厚374A ヤウ、徳390A(平)	養 仁249A(上)、建287A(上)、永20A2A(上)、三183A(上)、正241A ヤウ(上)、318A ヤウ(去)、徳245A(上)(→去声)	養 仁424A(去)、建422A(去)、457(上)、永24A2A、30A6A(上)、31A5(上)、31A7A(去)、三223A、246A、291、293A(去)、正289A ヤウ(去)、366A、379A ヤウ、厚286A(上)、373、375A(去)、徳296A(平)、327A、389(去)、377A(上)、原118A(去)(→上声)	
来	良 仁393A(平)、建429A(平)、永29A7A(平)、三273A(平)、正355A(平)	尙(兩) 仁569A(上)、三377A(上)、上、正493A リヤウ(上)		略 建136A リヤク、永10A1A(入)、三92A(入)、正120A リヤク、厚113A(入)、徳116A(入)
日			讓(讓) 仁266 シヤウ(去濁A)、建303(去濁A)、永21A3(去濁A)、三195(上濁B)、195A(去濁A)、正254 シヤウ(去濁A)、255A シヤウ(去濁A)、厚250 シヤウ、徳259(去濁B)	
42	陽(合)	養(合)	漾(合)	藥(合)
非	方 三28(平軽)、正121A ハウ			
微	亡 仁151A、153A、571A(平濁A)、176A ハウ(平濁A)、423A ハウ、建17、189A(平濁A)、454A(平)、605A ハウ、永2A3、13B1A(平濁A)、13B2A(平濁A)、31A7A、32B3A(平濁B)、三13(平軽濁A)、123A、139A、379A(平)、124A(平)、平軽濁A、上濁A、290A ハウ ¹⁵⁹⁾ (平)、292A ハウ(平濁B)、303A ハウ、374(平濁B)、正16、162A、181A、495A ハウ、			

¹⁵⁹⁾ 仮名音注「ハウ」の「ハ」に上濁点あり。

	162A ハウ(平濁 A ^{鼻1})、 376A ハウ(平 ^来 ・平 ^鼻)、 393A(平濁 A ^{鼻2})、 徳 15、 161A、163A、390A、 406A(平濁 B)			
溪	匡 仁 585A(平)、 健 619A キヤウ(平)、 夙 42A1A(平 鼻)、 正 388A(平 ^鼻)、 正 506A キヤウ			
于	王 仁 19(平 ^{来1})、206(平 鼻)、 正 92(平 ^{鼻2})(→去声)		王 仁 573A(去)、 健 607A(去)、 夙 41A5A(去 鼻)、 正 381A(去 ^{来1})、 正 497A(去 ^{来1})、 徳 519A(去)(→平声)	
43	唐(開)	蕩(開)	宕(開)	鐸(開)
幫				博 仁 261(入)、 健 299 ハ (入)、 夙 20B6(入 ^来)、 正 20 ハク、192(入 ^鼻)、193A ハク(入 ^{軽鼻})、 正 251A(入 鼻 ²)、 徳 23、28、255(入)
滂	滂 健 5(平)、 正 4(平 ^軽 来1)、 正 4 ハウ、 厚 4 ハウ (平 ^来)			
並				薄 仁 364A ハク、 健 400A ハク、 正 256A(入 鼻)、 正 332A ハク、 厚 328A ハク(入 ^来)
明				莫 仁 333A ハク(上濁 A)、 正 237A(入濁 B ^鼻)、 正 306A ハク(入 ^{軽濁} A 鼻)、 厚 303A(入 ^来)、 徳 314A(入濁 B)
端	当(當) 仁 31(平)、582A タウ(平)、 健 69(平)、616A タウ(平)、 夙 5B1、 41B6A(平 ^鼻)、 正 50(平 ^来 1)、161A(平濁 B ^鼻)、 386A(平 ^鼻)、 正 63、118A、 504A タウ、 厚 111A(平 ^来)、 徳 58、527A(平)			
透			盪 仁 453A(去)、 健 488A タウ(去)、 夙 33A7A タウ (去 ^来)、 正 310A タウ(去 来1)、 正 402A タウ(去 ^{鼻1})、 厚 399A タウ(去 ^来)、 徳 416A(去)	
定	堂 健 29(平)、 夙 2B6(平 鼻)、 正 26、309 タウ、 徳 24(平)			
見	綱 仁 118A、124A カウ (平)、 健 156A、162A カウ (平)、 夙 11A5A(平 ^来)、 正 103A カウ(平 ^{来1})、107A カウ ^合 (平 ^鼻)、 正 135A、 140A カウ、 徳 133A カウ (平)			
疑				鄂 京 2 カク ^来 ・五各反
精			葬 仁 411A サウ(去)、 411A サウ、 健 446A サウ (去)、 夙 30B2A(去 ^鼻)、 正 284A(去 ^鼻)、 正 369A サ ウ(去 ^{鼻1})、 徳 380A(去)	作 仁 385 サク、 夙 28B7、29A1A、29B2A、 29B3A(入 ^来)、 正 349 サク (入 ^{鼻1})、350A サク、357A ク[ママ](入 ^{鼻2})、 徳 359、 359A、367A、368A(入)
從	藏(藏) 京 158 昨郎反			
心	喪 仁 619(平・去 ^合)、 健 443(平)、 正 282(平 ^{軽鼻}) 桑 仁 618A サウ(平)、 健 652 サウ(平)、 夙 44A3A(平 ^来)、 正 407A(平 鼻)、 正 532A サウ、 厚 528A サウ、 徳 556A(平)			
影				惡(惡*) 仁 317A アク (入)、602 ア□、603A ア ク、 健 353A、636(入)、 夙 24A7A(入 ^鼻)、43A2、 43A3A(入 ^来)、 正 227A、 397(入 ^{軽鼻})、 正 519A ア ク、 厚 515 アク、 徳 301A(入)、 群 125A(入)、

				京 156(入)
来				楽(樂) 仁 491A、491A ラク、628 カク ^{合左} 、 建 60(入濁 A)、 永 35B6A ラ ク、35B7A(入 ^平)、 三 332 音洛、332A ラク、 正 431A、431A ラク、 厚 428A 音洛、428A ラク、 德 448A 音洛
43	唐(合)	蕩(合)	宕(合)	鐸(合)
見	光 仁 95A(平軽)、 建 36(平)、 永 9B5A、 37B4A(平 ^朱)、 三 26(平軽 墨)、26(平墨)、 正 118A ク ワウ、 德 113A、471A(平)	広(廣) 仁 37(上)、 建 75(上)、 永 5B7(上 ^朱)、 三 55(上 ^墨)、 正 69 クワウ、 德 63(上)		柳 永 45B3(入 ^朱)、 三 422(入 ^墨)、 德 576(入)、 京 168 クワク ^平 ・古博反
溪			曠 仁 27 クワウ(去)、 建 66(去)、 永 5A5(去 ^墨)、 三 48(去 ^墨)、 正 60 クワウ、 厚 56(去 ^朱)、 德 55(去)	
曉				霍 建 36(入軽)、 永 3A6(入 ^朱)、 三 26(入軽 ^朱 り)、 正 33 クワク、 厚 30 ク ワク(入 ^朱)、 德 30(入)
匣	皇 仁 484A クワウ(平)、 建 519A(平)、 永 35A7A(平 ^墨)、 正 22、426A クワウ、428A(平 ^墨) 黄 仁 60 ク[ママ](平 ^墨)、 正 75 クワウ			
1 2 梗攝				
44	庚(直開)	梗(直開)	映(直開)	陌(直開)
幫				伯 建 14(入)、 三 11(入 墨)、211 ハク(入軽 ^墨)、 正 13 ク[ママ](入 ^墨 り)、91A ハク(入 ^墨 り)、274 ハク、 厚 12(入 ^朱)、 德 84A(入) 百 仁 165A(入)、 正 136、 215A、382A ハク、 德 102A(入)
並				帛 仁 2 ハク、 三 30 ク [ママ](入 ^朱 り)、 正 37 ハ ク、 厚 32 ハク(入 ^朱)、 德 34(入)
澄				宅 仁 181A、376A タク、 建 219A、412A タク、 三 142A(入 ^墨)、426 タク(入 墨)、 正 185A タク(入 ^墨 り)、 341A タク、 厚 180A タク (入 ^朱)、 德 187A(去 ^朱)、 351A(入)、 京 21 タク 沢(澤) 仁 379A タク、 建 415A タク、 三 265A(入 墨)、 正 344A タク、 厚 340A(入 ^朱)
見	更 永 35A7A(平 ^墨)、 三 328A(平軽 ^朱 り)、 正 426A カウ(上 ^墨 り)、429A カウ			
生	牲 仁 421、484A(平)、 建 456(平)、 永 31A5(平 ^墨)、 35B1A(平 ^朱)、 三 291 セイ (平 ^墨)、329A(平 ^朱 り)、 正 377A セイ(平 ^墨 り)、427A セイ、 厚 373(平 ^朱)、 德 443A(平) 生 仁 211、216A、327A、 509A、632(平軽)、 建 249、 363A、666(平)、 永 17B1、 17B6A、30B5A、37A3A(平 朱)、25A2A(平 ^墨)、 三 161、 343A セイ(平軽 ^墨)、163A、 416、434(平軽 ^墨)、232A セイ、 正 52、209、213A、 325、446A セイ、301A セ イ(平軽 ^墨 り)、 厚 298A(平 朱)、 德 212、216A、309A、 382A、464A、568(平)			
曉				赫 仁 278 カク(入濁 A)、 建 317 カク(入濁 A)、 永 22A1 カク(入濁 A ^墨)、 三

				203 カク(入 ^平), 正 ² 264 カク(入濁 A ^平), 厚 ² 260 カク(入濁 A ^平), 徳 ² 270(入)
匣	行 仁 ⁴ (平), 建 ⁴² (平), 泳 ³ B5(平 ^重), 三 ³ 31(平 ^朱), 正 ³ 39(平 ^朱), 徳 ³ 35(平)(→去声)		行 仁 ^{67A} , 67A, 97A, 162, 168, 169A, 171, 174A, 175A, 179A, 239, 240A, 241A, 317A, 326, 330A, 382, 384A, 511, 513A, 534A, 554A, 603A(去), 536A, 602A カウ(去), 隳 ² 104A, 200A, 209A, 213A, 213A, 217A, 277, 278A, 354A, 362, 366A, 547A, 568A, 570A, 571A, 588A, 636A, 637A(去), 泳 ¹ 1A3, 9B7A, 14B4A, 14B6, 15A2A, 15A2A, 15A6A, 16B4A, 16B4A, 24A7A, 25A2, 28B4, 28B6A, 33A2A, 38B5, 38B6A, 43A2A, 43A3A, 43B2A(去 ^平), 7B7A, 7B7A, 14A4, 15A1A, 19A7, 19A7A, 19B1A, 24B2, 25A5A, 37A5A, 38B7A(去 ^重), 三 ² 74A, 133, 135, 137A, 138A, 141A, 153A, 174A, 177, 178A, 227A, 228, 232, 266, 357, 358A, 398A, 400A, 402A(去 ^平), 74A, 129A, 134A, 137A, 234A, 267A, 273A, 307A, 344, 358A, 368A, 397A(去 ^重), 91A カウ, 正 ² 346, 398A, 523A, 525A(去 ^平), 96A, 354A, 467, 468A(去 ^重), 170A, 176A, 177, 179A, 180A, 180A, 235A カウ(去 ^重), 181A カウ ^合 左(去 ^重), 200A カウ(去 ^重), 293A, 295 カウ(去 ^平), 301, 467A, 482A カウ, 厚 ² 165A, 174A, 230, 290A, 291, 297, 300A, 462A, 463A(去 ^平), 112A(上 ^重), 170 カウ, 徳 ² 90A, 115A, 171, 176, 177A, 178, 180A, 182A, 202A, 231A, 237, 237A, 301A, 303, 309, 312A, 356A, 357A, 358A, 364A, 412A, 465, 466A, 485, 486A, 487A, 503A, 543A, 544A, 546A, 549A(去), 脛 ³ 35, 51A, 57A, 58A, 86, 110, 170(去), 泳 ¹ 35A, 63, 65, 66, 93A, 93A, 123(去)(→平声)	
44	庚(拗開)	梗(拗開)	映(拗開)	陌(拗開)
幫	兵 仁 ⁴¹⁹ へイ(平), 420A キウ[ママ], 隳 ⁴⁵⁴ (平), 泳 ³ 31A3, 31A4A, 31A4A(平 ^朱), 三 ³ 289(平 ^輕), 290A へイ, 正 ³ 375 へイ(平 ^輕), 厚 ³ 371A へイ ^左 , 徳 ³ 388A(平)			
並	平 仁 ³¹³ (平 ^輕), 泳 ³ 24A4(平 ^重), 三 ³ 224(平 ^重), 225A へイ, 正 ³ 290 へイ, 徳 ³ 298 へイ ^左		病 仁 ^{410A} キウ(去), 泳 ³ 30B1A(去 ^重), 三 ³ 283A へイ(去 ^重), 正 ³ 368A へイ(去 ^重)	
明	明 仁 ²⁵⁰ , 254(平), 隳 ²⁸⁸ (平), 泳 ³ 20A3A(平 ^重), 22B3A, 36B2A(平 ^朱), 三 ³ 184, 206(平 ^重), 338A メイ ^左 , 正 ³ 87(平 ^重), 245A, 271A, 449A メイ, 厚 ³ 444A メイ, 徳 ³ 80, 246, 249A, 275A, 277A(平)		命 仁 ^{417A} (去), 569A(平濁 A), 隳 ^{452A} (去), 泳 ³ 31A1A(去 ^重), 40A2(去 ^平), 三 ³ 288A, 368, 369A, 391(去 ^重), 正 ³ 95A, 144A, 387A, 483 メイ, 374A レイ・メイ, 徳 ³ 89A, 502(去)	
見	京 隳 ³² (平), 泳 ³ 3A3(平 ^輕), 三 ³ 24(平 ^輕), 正 ³	境 仁 ^{147A} ケイ(上), 隳 ^{185A} ケイ(上), 泳 ³	敬 仁 ²⁶⁶ (去), 隳 ¹⁵⁷ ケイ, 303(去), 泳 ³ 6B2, 6B3,	

	30 ケイ、 徳 27(平)	13A4A(上 ^平)、 三 120A(上 ^平)、 正 157A ケイ、 厚 153A ケイ	10B7、11A6、16A3、16A6A、21A3、21A4A、21A6A、27B7、28A1A、28A6A、28A6A、30A5、30A6A、30B3A、33A4A、33A4A、33B6、33B7A、34A1、34A2、34A4A、34A4、34A5A、34A6、34B1A、35A3、35A4A、35A4A、35A5、35A6A、35A6A、35B7A、37A5A、37A6A、37B1A、37B1A、39B6、41B3A、46B3(去 ^平)、16A4、22B7A、23A2A(去 ^平)、 三 73A、99、147、149A、197A、210A、220A、223A、259、281、285A、314、315A、317A、317A、384A(去 ^平)、 正 79、122A、131A、136、193、194、255A、272A、285A、289A、291A、337、347A、399A、407、431A、502A ケイ、195A ケイ(去 ^平)、254(去 ^平)、 厚 73、87A ケイ、404(去 ^平)、 徳 71、73、88A、128、133、195、197A、259、262A、282A、283A、293A、297A、327A、336A、346、347A、352A、352A、356A、376、377A、381A、381A、413A、414A、422、423A、424、424、425、427A、427A、427、428A、429、431A、436、437A、438A、438、439A、440A、440、441A、449A、464A、464、466A、467A、468、469A、469A、501(去)、 厚 148 ケイ ^合	
溪	卿 仁 442A、569A ケイ、 正 144A、183、494A ケイ、393A ケイ(平 ^平)		慶 仁 125 ケイ ^合 、127A(去)、 建 163 ケイ、166A ケイ(去)、 困 11B7A(去 ^平)、25A4A(去 ^平)、 三 109A、234A(去 ^平)、 正 143A ケイ、303A ケイ(去 ^平)、 厚 299A(去 ^平)、 徳 141A ケイ(去)、311A(去)	郤 (郤 [*]) 厚 B(入)許逆反
疑	迎 群 72A(平濁)			逆 三 7(入軽濁 ^平)、 正 9 ケキ、 厚 8 ケキ、 徳 8(入軽濁 ^B)
44	庚(直合)	梗(直合)	映(直合)	陌(直合)
匣	鬻 匣 20(平)胡盲反			
44	庚(拗合)	梗(拗合)	映(拗合)	陌(拗合)
曉	兄 匣 34A6A(平 ^平)、 三 166A(上 ^平)、 正 122A、146A、302A ケイ			
于	榮 (榮) 仁 95A(平)、 建 133A(平)、 匣 9B5A(平 ^平)、 正 118A エイ		詠 仁 38(去)、539A エイ、 建 76(去)、573A エイ、 困 6A1(去 ^平)、39A2A(去 ^平)、 正 70 エイ、470A エイ	
45	耕(開)	耿(開)	諍(開)	麦(開)
幫				擘 仁 645 ヘキ、 建 679 ヘキ、 困 45B7 ヘキ(入 ^平)、 三 425 ケツ・ヘキ・ハク ^平 (入 ^平)、427 ケツ、 厚 550 ヘキ、 徳 579 ヘキ、581A(入)
莊	争 (争) 仁 422A サウ(平軽)、 建 457A サウ(平)、600A(平)、 困 31A6A(平 ^平)、 三 292A サウ(去 ^平)、 正 378A シヤウ・サウ ^合 (平 ^平)、 厚 373A シヤウ(平 ^平 ・去 ^平)、 徳 389A(平)		諍 仁 551、566A シヤウ、 三 376A(去 ^平)、 正 491A シヤウ、 厚 487A(去 ^平)	
匣		幸 匣 35(去)		
46	清(開)	静(開)	勁(開)	昔(開)

幫				甞 京170口益反	
滂			聘 群71へイ	僻 仁603Aへキ、健637Aへキ、匣43A3A(入朱)、三398Aへキ(入朱)、正520Aへキ(入朱)、厚516Aへキ、德544A(入)	
並				僻 仁427A、427Aへキ、健462Aへキ(入)、匣31B4A(入朱)、三294Aへキ(入朱)、正381Aへキ(入朱)、382A、383Aへキ、382A(入朱)、厚377A(入朱)、德393A(入)	
明	名 仁553、554A、576、577Aメイ、三238A(平墨)、正201A、308Aメイ(平墨)、482A、500Aメイ				
知	真 仁25(平)、599Aテイ(平)、健61テイ(平軽)、62(平)、633Aテイ(平)、匣5A2(平朱)、5A3、42B6A(平墨)、三46、46、396A(平墨)、正57テイ、517A(平墨)、德53、53(平)				
精	精 仁501Aセイ(平)、520A(平軽)、健535A、554A(平)、永36B2A(平朱)、37B5A(平墨)、三338A(平朱)、349A(平墨)、正439Aセイ(平朱)、454Aセイ、厚435A(平朱)、德457A(平)				
清	清 仁94A(平)、健132A(平)、永9B4A(平墨)、正116Aセイ				
從	情 仁88(平軽)、454Aセイ、健126A(平)、匣9A6A(平墨)、三86A(平墨)、正112Aセイ(平墨)、331Aセイ、402A(平墨)、厚105A(平朱)、538セイ、德107A、563A(平)	靜(靜) 仁388Aセイ(去)、健424A(去)、匣29A2A(去墨)、三270Aセイ(去墨)、正351Aセイ(去墨)、352Aセイ、厚347A、348Aセイ、德361A(去)			
心			姓 仁539A、永7B5A、39A2A(去朱)、三364(去墨)、正94Aセイ(去墨)、101A、107A、137セイ、德87A(去) 性 仁88A、357(去)、健15、126A、393(去)、永2A1、8B2A、9A6A(去墨)、25A1、25A2A(去朱)、三11セイ(去墨)、86A、232、232A、248、251、418(去墨)、正14、103A、326セイ、95Aセ、112A、300、323Aセイ(去墨)、301A(去墨)、厚297、298A、319A(去朱)、德13、89A、98A、107A、308、309A、332A、333A(去)		
邪				夕 三281A(入墨)、正365Aセキ、厚361A(入朱)、德376A(入) 席 永9A3A(入朱)、三78セキ(入墨)、正102、110Aセキ、德96、99Aセキ、97Aセキ(入)	
章			政 仁147A(去)、健185Aセイ、永10A4A、29B4、29B5A(去朱)、13A3A(去墨)、三94A、120A(去墨)、276セイ、正123A、157Aセイ、德119A、369、370A(去) 正 仁13、67A、386A、585A、610A、635(去)、健51、619Aセイ(去)、607A、644A(去)、永7B7A、11B1A、41A4A、42A1A、43B2A、45A5(去朱)、24B3A(去墨)、三38、		

			269A、388A、402A(去 ^平)、418、419A(去 ^来 1)、 正 47、95A、137A、296 セイ、349A、506A(去 ^来 1)、 徳 43 セイ(去)、89A、135A、303A、359A、518A、529A、549A、572A(去)	
昌				尺 正 28 セキ、 徳 26 セキ(入)
書	声(聲) 仁 95A、523A、539A(平)、396A セイ(平)、 建 133A、432A、557A、573A(平)、 丞 29B3A、38A1A、39A2A(平 ^来)、 三 89A、351A、359A(平 ^来)、275A(平 ^来 軽 ^来)、 正 117A、357A セイ(平 ^来 1)、402A セイ、470A(平 ^来 1)、 厚 110A(平 ^来)、		聖 仁 64A(去)、 困 32B2A(去 ^来)、 三 73A、136A(去 ^来)、 正 154A、178A、243A セイ、 徳 405A(去)、 原 125、126 セ	
常	城 仁 34(平)、 建 72(平)、 丞 5B4(平 ^来)、 三 52(平 ^来)、53(平 ^来 軽 ^来)、 正 66、67 セイ、 徳 61(平) 成 正 310A セイ、 京 143A セイ 誠 仁 520A セイ(平 ^来 軽 ^来)、 建 554A(平)、 丞 37B5A(平 ^来)、 三 349A(平 ^来 軽 ^来)、 徳 473A(平)		盛 仁 23、279 セイ(去)、 建 61 セイ(去)、61、318A(去)、319A セイ、 困 5A2、5A2、22A2A、45B6A(去 ^来)、 三 45、46、204A、411A、425A(去 ^来)、204A セイ、 正 57、57、265A セイ、265A(去 ^来 1)、 厚 52 セイ、 徳 52、53、271A、562A(去)	
影	嬰 仁 44(平 ^来 軽 ^来)、 建 82(平)、 丞 6A6(平 ^来)、 三 60、61 エイ(平 ^来 軽 ^来)、 正 75 エイ、76 エイ、 厚 69 エイ、 徳 69 エイ(平 ^来 軽 ^来)、70(平)			
羊	瀛 京 13 エイ ^来 (平)以成反			易 仁 160A エキ(入)、 建 198A(入)、 丞 14A3A(入 ^来)、 三 128A エキ(入 ^来)、 正 169A エキ(入 ^来)、 厚 164A(入 ^来)、 徳 169A(入)
来			令 仁 147A、197A、273A、275A、398、399A(去)、576 レイ(去)、 建 235A、311A、434、435A、610(去)、 困 13A4A(去 ^来)、16B2A、21B2A、21B3A、21B4A、21B6A、29B5A、29B6A、41A7(去 ^来)、 三 120A リヤウ、152A レイ(去 ^来 1)、199A(去 ^来 1)、201A レイ(去 ^来)、202A レイ、276、277A(去 ^来)、382 レイ(去 ^来)、 正 157A、198A、263A レイ、260A、510 レイ(去 ^来)、260A(去 ^来 2)、261A レイ(去 ^来 2)、358、360A、499 レイ(去 ^来 1)、520A(去 ^来 1)、 厚 256A、495(去 ^来)、505 レイ(去 ^来)、 徳 158A、201A、265A、265A、265A、267A、269A、369、370A、370A、385A、521、543A(去)、 歴 198A、159 レイ(去)、115、159A、161(去)	
46	清(合)	静(合)	勁(合)	昔(合)
羊	營 三 428A エイ(平 ^来)			役 仁 547、550A エキ、 建 583A、584A エキ、 三 364 エキ(入 ^来 軽 ^来)、 正 476 ホク合、477A、478A エキ、 厚 472A、474A エキ、 徳 496(入)
47	青(開)	迴(開)	徑(開)	錫(開)
透				楊 仁 655A テキ、 建 689A テキ、 丞 46B2A テキ(入 ^来)、 三 432A テキ、 徳 588A テキ(入)
定			定 仁 166A テイ(去)、 建 204A(去)、 丞 14B1A(去 ^来)、 三 132A テイ(去 ^来)、	濂 仁 453A テキ、 建 488A テキ(入)、 丞 33A7A テキ(入 ^来)、 三 310A テキ

			正]174A テイ、厚]169A テイ、徳]174A(去)	(入 ^来)、正]402A テキ(入 ^来)、厚]399A テキ(入 ^来)、徳]416A テキ ^来 (入)
見	経(經) 仁]239(平軽)、建]3(平軽)、277(平)、永]19A6、19B5、22A3A(平 ^来)、19A6A(平 ^来)、三]61 ケイ、正]2、27、77、233 ケイ、21イ[ママ]、厚]405A ケイ ^合 、徳]2、42、71、236、237A、241、272A(平)、2(平軽)、京]27 ケ、92 ケイ ^合			
精				績 仁]361 セキ(入軽)、建]396 セキ(入)、永]27A4 セキ、三]253 セキ(入 ^来 、 ^来)、254A セキ、正]325、329、330A セキ、厚]325(入 ^来)、徳]338、339A(入)
清				感 永]44B7、45B6(入 ^来)、三]433A セキ、厚]538 セキ 威 仁]83A、101A セキ、建]121A セキ、三]83A、415、424 セキ(入 ^来 、 ^来)、93A、425A セキ、正]108A セキ(入 ^来 、 ^来)、122A セキ、厚]102A セキ、徳]103A セキ(入 ^来)、118A セキ、566、578(入)
心	星 正]106A セイ、徳]101A(平)			
匣	刑 仁]89A、120A、125、259A、419(平)、116A ケイ(平)、429A ケイ、建]127A ケイ(平)、154A、158、163、297A、454(平)、永]11A4A、11B5、31A2(平 ^来)、11A7A(平 ^来)、三]102A、104A、107、250A、289、290A、294(平 ^来)、正]113A、134A、137A、142A、375、383A、385A ケイ、249A、381A ケイ(平 ^来)、323A(平 ^来)、厚]320A(平 ^来)、徳]108A、135A(平) 形 永]9A6A(平 ^来)			
来	靈(靈) 仁]181A レイ、建]218A レイ、三]142A レイ、正]185A レイ			
47	青(合)	廻(合)	徑(合)	錫(合)
匣		洞 仁]491 ケイ(去)、建]526A(去)、三]332A ケイ(去 ^来)、正]431A ケイ(去 ^来)、厚]428A ケイ、徳]448A(去)		
13 曾撮				
48	蒸	拯	證	職(開)
幫				僞 仁]157A ヒヨク(入)、建]195A ヒヨク(入)、永]13B7A ヒヨク(入 ^来)、三]126A ヒヨク・ツ(入 ^来 、 ^来)、正]167A ヒヨク、厚]162A ヒヨク、徳]167A ヒヨツ、京]62A ヒヨク
知	徵 仁]317A テウ(平)、317A(平)、520A チヨウ(平)、建]353A テウ(平)、354A、554A(平)、困]24A7A、37B5A(平 ^来)、24A7A(平 ^来)、三]227A チヨウ(平 ^来)、227A チヨウ、349A チヨウ(平 ^来)、正]293A チヨウ(平 ^来)、293A、454A チヨウ、厚]290A、450A チヨウ(平 ^来)、徳]301A(平)(→知母・止韻)			
澄	懲 徳]473A(平)			直 建]356A チヨク、困]24B3A(入 ^来)、三]229A チ

				ヨク(入 ^畢)、 正 295A(入 ^畢 2)、 厚 292A(入 ^朱)、 徳 303A(入)
見	競 仁 148 キヨウ(平)、 建 186 キヨウ(平)、 夙 13A5(平 ^輕 畢)、 三 121 クキヨウ(平 ^畢 ・平 ^輕 濁A ^畢)、 正 158 クキヨウ(平 ^畢)、 厚 154 クキヨウ、 徳 159(平)、 群 30 キヨウ(平 ^輕) 矜 仁 627A(平)、 建 661A(平)、 夙 44B4A(平 ^朱)、 三 413A キヨウ(平 ^畢)、 徳 564A クキヨウ(平)			
群				極 仁 345A キヨク、 建 381A(入)、 三 244A(入 ^畢)、 正 316A キヨク、 厚 313A(入 ^朱)、 徳 325A(入)
精				獲 仁 144(入 ^輕)、334 シヨク、 建 182 シヨク(入)、 夙 13A1(入 ^輕 畢)、 三 118、237A シヨク、 正 156、307、311A シヨク、 厚 304 シヨク
從	鄭 原 5 シヨウ ^年 ・ソウ ^百 (平)			
莊				側 仁 572A ソク(入)、 建 606A ソク(入)、 夙 41A3A ソク(入 ^朱)、 三 380A ソク(入 ^輕 畢)、 正 496A ソク、 厚 491A ソク(入 ^朱)、 徳 518A(入)
生				襦 仁 217A シヨク、 建 255A ソク(入)、 夙 17B7A ソク(入 ^朱)、 三 164A シヨク(入 ^畢)、 正 214A ソク(入 ^畢)、 厚 210A シヨク、 徳 217A(入)
章	蒸 仁 183A セウ(平)、538A シヨウ(平)、 建 221A(平)、572A シヨウ(平)、596A セウ(平)、 夙 15B3A、39A1A(平 ^朱)、 三 143A(平 ^輕 畢)、359A シヨウ(平 ^輕 畢)、373A(平 ^畢)、 正 187A シヨウ(平 ^輕 畢2)、469A シヨウ、 厚 464A シヨウ、 徳 189A、488A(平)			職 仁 400A、600A シヨク、 建 120A シヨク、 三 199A(入 ^輕 畢)、241 シヨク、 正 107A、244A、270A、316A シヨク、259A(入 ^畢 1)、 原 24之翼反
昌	祢 (稱) 仁 17、64A(平)、625A(去)、 建 55、102A(平)、 夙 4B3(平 ^朱)、 三 41(平 ^朱 1)、73A(平 ^輕 畢)、394A、412A(去 ^畢)、 正 51 セウ(平 ^朱)、140A セウ、516A(去 ^畢 1)、 徳 47、97A(平)(→去声)	祢 (稱) 仁 60A、61A(去)、574A シヨウ(去)、 建 98A、98A、608A、659A(去)、 夙 7B1A、7B2A、41A5A(去 ^畢)、 三 70A、381A(去 ^朱 1)、71A(去 ^畢)、 正 90A セウ(去 ^畢 1)、91A、497A(去 ^畢 1)、 厚 493A(去 ^朱)、 徳 84A、85A(去)(→平声)		
書				識 三 331A(入 ^輕 畢1)、 原 10(入 ^輕) 飾 (饒 [×]) 夙 44B3A(入 ^朱)、 徳 563A(入)、 原 162A シヨク
常	丞 仁 562A シヨウ(平)、 夙 40B1A(平 ^朱)、 正 92A セウ(平 ^畢 1)、488A シヨウ(平 ^畢 1)、 徳 510A(平)、 群 156A(平) 承 仁 62A セウ(平)、 建 99A シヨウ ^左 、 夙 7B3A(平 ^朱)、 三 71A(平 ^畢)、 徳 85A(平)			食 仁 409A シヨク(入)、 建 444A(入)、 夙 B0B1A、45A1A(入 ^朱)、 三 238A シヨク、 正 309A、333A、492A シヨク、 厚 305A シヨク、 徳 17A、343A、379A、513A、567(入)
影				応 (應) 仁 68A、164A、179A、296A、316A、520A(去)、 建 202A、217A、353A、554A(去)、 夙 8A1A、14A6A(去 ^畢)、15A6A、23A2A、24A7A、37B5A(去 ^朱)、 三 74A、130A、213A(去 ^朱 1)、140A ヨウ(去 ^朱 1)、226A、 億 仁 128A ヨク、 建 166A ヨク、 夙 11B7A ヨク、 三 109A ヨク・イク ^左 (入 ^畢)、 正 143A ヨク、 厚 137A ヨク(入 ^畢)、 徳 141A ヨク(入 ^輕)、 原 50A ヨ[ママ] 抑 仁 319A ヨク(入)、 建 356A ヨク(入)、 夙 24B2A

			349A(去 ^準)、 正 96A、454A ヨウ(去 ^準 1)、172A(去 ^準 1)、184A、293A ヨウ、 厚 167A、274A、289A、450A(去 ^準)、 徳 90A、172A、185A、283A、300A、473A(去)、453 ヨウ	ヨク(入 ^準)、 正 228A ヨク(入 ^準)、 正 295A ヨク(入 ^準 1)、 厚 292A ヨク(入 ^準)、 徳 303A ヨク(入)
羊				翼 仁 185A ヨク、 隼 223A ヨク、 水 15B5A ヨク、 三 145A ヨク(入 ^準)、 正 188A ヨク、 厚 184A ヨク
48				職(合)
于				域 三 428A イキ(入 ^軽 準)
49	登(開)	等(開)	嶺(開)	徳(開)
並	朋 仁 101A(平)、 隼 139A、 三 93A ホフ(平 ^準)、 正 122A ホウ、 徳 118A(平)			
明				墨 仁 426A ホク(入 ^軽 濁A)、427A ホク(平濁A)、 水 31B3A(入濁A ^準)、 隼 50 ホ、461A(入濁A)、 三 37(入 ^軽 準1)、294A(入濁A ^準)、 正 46 ホク、381A ホク(入濁A ^準 2)、 徳 42、393A(入濁B)
端		等 仁 156A、459A(上)、293A トウ(上)、 隼 194A、494A トウ(上)、330A(上)、 水 13B6A、33B5A(上 ^準)、22B7A(上 ^準)、 三 126A、211A(上 ^準)、 正 166A トウ(上 ^準 1)、274A トウ、406A トウ(上 ^準 2)、 厚 161A トウ、271A(上 ^準)、 徳 166A、421A(上)		得 仁 80A(入)、 水 8B6A(入 ^準)、 三 81A(入 ^準)、 正 106A トク(入 ^準 1)、 徳 101A(入) 徳 隼 7(入 ^軽)、157 トク、 厚 98、130、249、345 トク、 三 72 トク、103、268(入 ^軽 準)、 正 68、105、125、133A、136、137A、137A、170A、231A、253、271A、295、298、313、341、345A、349、358、433、490A、516A トク、93 トク(入 ^準 2)、146A ト[ママ]、343A(入 ^軽 準2)、357A(入 ^軽 準1)、 徳 86、99 トク(入 ^軽)、87A、100A、101A、302(入)
透				忒 隼 116A トク
泥	能 仁 116A、607A(平)、 隼 154A、641A(平)、 水 11A4A(平 ^準)、 三 101A、401A、402A(平 ^準)、 正 134A、524A ノウ、 徳 131A、547A(平)			
精	曾 隼 17(平)、 水 2A3(平 ^準)、7B2A(去 ^準)、 仁 13(平 ^軽 準)、69(平 ^準)、71A フ、 正 88(平 ^軽 準2)、 徳 15、85A、95A、97A(平)、 原 21 ウ[ママ](平 ^軽)			則 仁 245A ソク(入)、 隼 283A ソク(入)、 水 19B5A(入 ^準)、 正 238A ソク、 徳 242A(入)
從				賊 仁 175A ソク、 隼 213A ソク、 三 138A、138A ソク、 正 181A ソク、 徳 182A(入)
来				勒 仁 433A ロク、 隼 468A ロク(入)、 三 299A ソク ^左 (入 ^準)、 正 387A ロク(入 ^準 1)、 厚 382A(入 ^準)
49	登(合)	等(合)	嶺(合)	徳(合)
見				国(國) 三 278A コク、 正 22、71、296A コク、274A(入 ^準 2)、 厚 271A コク
1 4 流撮				
50	尤	有	宥	
幫		不 仁 561A フ、 隼 459A フ ^左 、 水 31B7、32A6A、33B4A、40A7A、42B1A(上 ^準)、 正 169A、180A、272A、384A、390A フ、226A(上 ^準 2)、 徳 391A、396、402A、421A、508A(上)	富 仁 141A(去)、 隼 179A(去)、 水 12B5A(去 ^準)、 三 118(平 ^準)、 正 154A フ、 徳 153A(去)	

奉		婦 仁198A、247A(上)、 建236A、284A(上)、 函16B4A(上)、 三153A フ(上)、 182A(上)、 正199A、200A、239A フ、 德202A(去) 負 仁108A フ(上)、 建146A フ(上)、 函110B2A(上)、 三97A(去)、 正127A フ	復 永15A1A、15A1A、 41B4A(去)、 德181A、 524A(去)(→奉母・屋韻)	
澄	細 京8 チウ 合注・直由 反勅嶋反		青 仁627A(去)、 函44B5A(去)、 三413A チウ(去)、 德564A(去) 籀 京24 ¹⁶⁰⁾ トウ	
見	鳩 仁402A キウ(平)、 建438A キウ(平)、 函30A1A(平)、 正279A キウ、 正361A キウ(平)、 德372A キウ(平)	九 三101A(上)、 正133A キウ		
溪	丘 仁60A キウ、60A、 339A(平)、 建375A(平)、 永7B1A(平)、 三70A(平)、 輕240A キウ、 正90A(平)、 德83A、83A(平)			
群		咎 仁91、317A キウ(上)、 建129A、353A キウ(上)、 永9B1A、24A7A(上)、 三87A キウ(去)、 正227A キウ(去)、 正114A、293A キウ、 厚107A キウ(去)、 290A(去)、 德110A キウ、 301A(去)	旧(舊) 仁488A キウ、 正429A キフ	
疑	牛 仁423A キウ(平)、 建14(平)、 458A(平)、 函31A6A(平)、 三11、 292A(平)、 正13 キウ(平)、 378A(平)、 厚113(平)、 德12(平)、 390A(平)			
心	修 正116A シウ・音周 脩 仁93A シユウ(平)、 建131A シウ(平)、 函9B3A(平)、 三89A(平)、 音周、 厚109A シウ、 德112A(平)			
章	周 仁575A シウ、 正6、 265A、352A シウ、 187A シウ(平)、 德6(平)			
		醜 仁417A シウ、 建452A(上)、 永31A1A シウ(上)、 三288A シウ(上)、 正373A シウ(上)、 厚369A シウ(上)、 德385A シウ(上)、 群121A シウ(上)		
書	取 三163A(平)	首 建13(上)、 三110(上)、 正13 シユ、 德12(上)		
影	優 仁588A イウ(平)、 建622A イウ(平)、 函42A4A(平)、 三390A(平)、 正508A イウ、 德531A(平)			
曉	休 仁317A キウ(平)、 建353A キウ(平)、 函24A7A(平)、 三227A キウ(平)、 313A キフ(平)、 正293A キウ(平)、 406A キウ(平)、 厚290A キウ(平)、 德300A、421A(平)	朽 京24 キウ		
羊	猶 仁423A イウ(平)、 建458A イウ(平)、 函31A6A(平)、 三292A イウ(平)、 正378A イウ(平)、 厚374A イウ、 德390A イウ(平)	牖 仁648A(上)、 建682A(上)、 函46A2A(上)、 三427A ヨウ(上)		

160) 反切注欠損により判読不可。

	遊(游) 仁33(平)、三52 イフ(平)、正66 イウ、 厚61 イウ				
于		友 仁101A、576A(上)、 健139A(上)、函 10A4A(上)、41A7A(去 来)、三93A イウ(去)、 正122A、499A イウ、厚 495A イウ、徳118A、 521A(去) 右 仁62A イウ(去)、健 101 イウ、泳7B3A(去)、 徳85A(上) 有 仁440A、522A(上)、 健55、475A、556A(上)、 泳32B2A、38A1A(上)、 三23(上)、302A イウ (上)、正12 フ[ママ]、 28、46、133A、525A イウ、 392A イウ(上)、徳11、 405A、475A(上)	佑 仁336A イウ(去)、健 372A(去)、三238A イウ (去)、正308A イウ 祐 徳317A(去)		
来	流 仁462A リウ(平)、健 5、497A(平)、泳33B7A、 41A2A(平)、三4(平 来)、正408A リウ、厚4 リウ(平)、徳424A、 517A(平)		雷 健682A(去)、函 46A3A(去)、三427A リ ウ(去)、徳582A(去)		
日	柔 仁1185A シウ(平濁 A)、健223A(平濁 A)、函 15B4A(平濁 A)、三144A シウ(平濁 B)、正188A シウ(平濁 A)、厚183A シユ(平)、徳190A(平濁 B)				
51	候	厚	候		
明		母 仁83A、85(上濁B)、 正108A、111、210A ホ、 京145 ホ 歌 仁218A、538A ホ (上)、健256A ホ、572A ホ (上)、泳18A1A(上)、 39A1A ホ(上)、三165A ホ(上)、359A ホ(上)、 正215A、469A ホ、厚 211A、463A ホ、徳 219A(上)			
端		斗 健31(上)、泳3A2(上 来)、三23(上)、正29 トウ(上)、厚27 トウ (上)、徳26 トウ(上)			
溪		口 健36(上)、泳3A7(上 来)、正33 コウ、徳31(上)			
精			走 仁298A ソウ(去)、健 335A(去)、泳23A4A(去 来)、三214A(去)、正 278A ソウ(去)、厚 275A(去)		
心		叟 仁484A、489A ソウ			
匣	侯 健7(去)、三210 コ ウ、正273 コウ、厚270 カウ	厚 仁364A、393A コウ (去)、健400A、429A(去)、 泳29A7A(去)、三255A、 273A コウ(去)、正 332A、355A コウ、厚 328A(去)、徳365A(去) 後 仁544A、562A コウ、 泳38B5、40B1A(去)、 三108A コウ(去)、 362A(去)、正467 コウ、 徳486、510A(去)	后 仁334 コウ(去)、三 237A(去)、正307、311A コウ、308A コウ(去)、 厚304 カウ		
来			漏 仁429A(去)		
52	幽	黝	幼		
影			幼 仁83A、114A、 503A(去)、492A イフ、502 イウ(去)、健121A、536、 537A(去)、152A イウ(去)、 526A イウ、泳9A1A、 11A2A、35B7A、36B2、 36B3A、36B4A(去)、三 83A、333A イウ、100A(去)		

			墨)、338、339A イウ(去墨)、 正 108A、132A、441A、441A イウ、432A イフ、440 イウ(去墨 ¹)、 厚 102A ヤウ、436 イウ(去 ^朱)、 徳 103A イウ(去)、129A、449A、457、458A、459A(去)	
1 5 深撮				
53	侵(甲)	寢(甲)	沁(甲)	緝(甲)
心	正 130A シン			
邪				隰 仁 618A シフ(入軽)、 隄 652A シフ(入)、 困 44A3A(入 ^朱)、 三 164A シウ左(入墨)、 厚 528A シフ
章	斟 原 22 シム			執 正 110A(平墨 ¹)
書				濕 (湿) 仁 216A シフ(入)、 隄 254A シウ(入)、 水 17B6A シフ(入 ^朱)、 三 407A(入軽墨)、 正 214A シフ(入墨 ²)、532A シフ、 厚 210A シツ・音集、 徳 217A、556A(入)
常				十 三 189A(平濁 A ^墨)、 正 12、122A、122A、123A、143A シフ、 徳 23(入)
羊	淫 仁 24 イム(平)、 隄 62(平)、 水 5A3 イン(平墨)、 三 46 イム左(平軽墨)、 正 58 イン、 厚 53 イン、 徳 53(平)			
来	臨 仁 286A リン(平)、363A(平)、 隄 322A リン(平)、399A(平)、 水 22A7A(平墨)、 三 207A(平墨)、 正 269A、331A リン、 厚 266A(平 ^朱)、 原 146 リム			
日			任 仁 112A、116A(去濁 A)、 隄 150A、154A(去濁 A)、 水 10B7A、11A3A(去濁 A ^墨)、 三 99A(去 ^朱 ・去濁 B ^墨)、101A(去濁 B ^朱)、 正 134A シン(去濁 A ^墨)、 厚 125A シム、 徳 128A、131A(去濁 A)	甘 三 421A シフ、 徳 25(入濁 B)
53	侵(乙)	寢(乙)	沁(乙)	緝(乙)
幫		稟 仁 129A(上)		
滂		品 仁 58A(上)、 困 7A6A(上 ^墨)、 三 69A(去墨)、 徳 82A ヒム(上)		
見	今 仁 5 キン、 水 3B6(平 ^朱)、 正 40、52 キン、 厚 37 キン、 徳 37(平軽) 禁 仁 197A キン(平)、271、273A、273A(平)、 隄 310、311A、312A(平)、 水 16B3A、21B1、21B3、21B3A(平墨)、21B3A(去 ^朱)、 三 152A、200A(去 ^朱)、198(去 ^朱 ・去墨)、199A、199A、201A(去墨)、199A(平墨)、 正 258、260A、261A キン、259A キン(去墨 ²)、260A キン(去墨 ¹)、 厚 255A(去 ^朱)、 徳 201A、264、265A、266A、267A(去)(→去声) 金 三 24(平墨)、 正 30 キン		禁 隄 37 キン(去)、 水 3B1(去 ^朱)、 三 28(去 ^朱)、 正 34、199A キン、 徳 32(去)(→平声)	級 仁 459A キウ(入軽)、 隄 494A キウ、 三 313A キヨウ(入軽 ^朱)、 正 406A キウ、 厚 404A(入 ^朱)
溪	袞 水 45B5A(平 ^朱)、422 キム(平墨)音今、576(平)、 原 168 キン			泣 三 425 キウ、 厚 550 キウ、 徳 579 キウ
群				及 仁 518A キウ(入軽)、 隄 552A キフ(入)、 困 37B4A(入墨)
疑	吟 仁 43(平濁 A)、 隄 81(平濁 A)、 水 6A5(平濁			

	A ^準 、 三 59(平濁 A ^準)、 正 74 キン、 厚 69 キン、 徳 68(平濁 B)			
生	參(參) 仁 62A シン(平)、63、553 シン、557 シン(平軽)、 健 17 シン(平)、100A(平)、101 シン、587 シン(平軽)、 永 2A3、39B7、40A4(平軽 ^準)、7B2A シン(平軽 ^準)、7B3 シン(平 ^準)、 三 13 シム(平 ^準 朱)、71A、72 シム(平軽 ^準)、367 シム(平 ^準)、 正 16、481、482A、484A シン、91A シン(平軽 ^準)、92(平 ^準)、 厚 15 シン、85 シム、476(平 ^準 朱)音心、 徳 15、85A、96 シム(平)、86、98A(平)、 群 7(平)、 京 34 所林反			
影		飲 三 417A(上 ^準)		邑 仁 35(入軽)、309A(入)、575A ヨウ、 健 345A(入)、 丞 5B5(入 ^準)、23B7A(上 ^準)、 三 53(入軽 ^準)、221A イウ、 正 67、498A イフ、287A イフ(入軽 ^準)、 厚 62 イフ、 徳 61(入軽)
16 咸撮				
54	覃	感	勘	合
端				答 仁 86A タウ(入)、 健 124A タウ(入)、 丞 9A3A(入 ^準)、 三 84A タツ(入 ^準)、 正 110A タウ、 徳 105A(入)
泥	南 正 61、264A ナン 男 仁 328A タン、 三 211(平 ^準)、 正 90A、302A ナン、274 ナン(平 ^準)、 徳 85A(平)			
見		感 仁 270A カン(上)、 健 80 カン、309A カン(上)、 三 59 カム、 正 73、258A カン、 厚 68 カン、 徳 67(上)		
清		慘(慘) 仁 409A サン(上)、 健 444A サン(上)、 永 30B1A サン(上 ^準)、 三 283A サム(上 ^準)、 正 367A サン(上 ^準)、 厚 363A サム、 徳 379A サン(上)		
匣				合 徳 5(入)
55	談	敢	闕	盍
定	鄭 京 3(平)徒甘反			
心	三 三 415(平軽 ^準)、 正 122A サン、377(平軽 ^準)(\rightarrow 去声)		三 三 388A(去 ^準)、 京 8(去)(\rightarrow 平声)	
56	塩(甲)	琰(甲)	艷(甲)	葉(甲)
精				接 仁 553A セツ、 京 140A セツ
清				妾 仁 305 セウ(入軽)、547 セウ、 三 219(入 ^準)、364(入軽 ^準)、 正 284、285A セフ、476 セフ(入 ^準)、 厚 281 シヤウ、 徳 496(入)
書				撰(攝) 仁 335A セツ、 正 308A セツ、 厚 305A(入 ^準)、 徳 316A(入)
匣		陝 京 4 セム・失再反		
来	廉 仁 329A レン(平)、 健 365A レン(平)、 丞 25A4A(平 ^準)、 三 234A レン(平 ^準)、 正 303A レン(平 ^準)、 厚 300A(平 ^準 朱)		斂 仁 633A(去)、 健 667A(去)、 丞 45A3A、45B4A、46A3A(去 ^準)、 三 417(去 ^準)、423A レム(去 ^準)、427A レン ^左 (去 ^準)、 徳 569A、577A、582A(去)、 群 29A レン	
日		冉 健 14(上濁 A)、 丞 1B7(上濁 A ^準)、 三 11 セ		

		ム ¹⁶¹⁾ (去濁)、 正 113 セン、 厚 112(上濁 A ^朱)、 徳 112 セン(上濁 B)		
56	塩(乙)	琰(乙)	艶(乙)	葉(乙)
群		儉(儉) 原 53A ン[ママ]		
影			俺 仁 588A エン(去)、 建 622A エン(去)、 丞 42A4A(去 ^墨)、 三 390A エム ^左 (上 ^朱)、 正 508A エン(上 ^朱)、 厚 504A エン、 徳 531A(去)	
57	添	忝	楝	帖
端		点(點) 仁 62A テン(上)、 建 99A テン、 丞 7B2A(上 ^朱)、 正 71A テム、 正 91A テン(上 ^墨)、 厚 85A テム、 徳 85A テム(上)		
透		忝 原 81A □ム		
定				牒 建 30 テフ、 丞 3A1 テフ(入 ^朱)、 三 23 テフ(入 ^墨)、 正 28 テフ(入 ^墨)、 厚 26 テフ(入 ^朱)、 徳 26 テフ(入 ^朱)
泥			念 仁 105A テン(去濁 A)、 建 143A テン(去)、 丞 10A7A テン(去濁 A ^朱)、 三 96A(去濁 A ^墨)、 正 126A テン、126A テム、 厚 119A テム(去 ^朱)、 徳 122A(去濁 B)	
見	兼 仁 111A(平軽)、 建 149A(平)、279A ケム、 丞 10B6A(平 ^朱)、 三 98A(平軽 ^墨)、 正 130A ケン、 徳 127A(平・去)			
溪	謙 仁 78、90A(平軽)、143A ケン、 建 116A(平)、128A ケン(平)、 丞 8B3A、9A7A(平 ^朱)、 三 80A ケム(平軽 ^朱)、117A(平軽 ^朱)、 正 104A、113A ケン、155A ケン(平 ^墨)、 厚 107A ケン、 徳 98A ケム(平)、109A ケン、154A(平)			
精			僭 仁 156A セン(去)、 建 194A(去)、 丞 13B6A(去 ^墨)、 三 126A セム(去 ^朱)、 正 166A セム、 厚 161A セン、 徳 166A セン(去)、 原 62A セン(去)	
58	咸	賺	陷	洽
莊		斬 仁 411A セン(上)、620A(上)、 建 446A サン(上)、654A(上)、 丞 30B2A サン(上 ^墨)、44A5A(上 ^墨)、 三 284A サム(上 ^朱)、408A セン(上 ^墨)、410A(上 ^墨)、 正 369A サン、 厚 364A サム(上 ^朱)、 徳 380A(上)		
匣	鹹 原 164A カム(平)胡譏反			
60	嚴	儼	醜	業
疑	嚴(嚴) 仁 259A、409(平濁 A)、332A、548A ケン(上濁 A)、347 ケン(上濁 A)、549A(去濁 A)、584A ケン(平濁 A)、 建 297A、383、444(平濁)、386A(平)、618A ケン、 丞 20B4A、39B3A(平濁 B ^朱)、30A7A ケン(平濁 A ^墨)、30B4A(平 ^朱)、42A1A(平濁 A ^墨)、 三 190A、236A、246A、250A、273A(平濁 B ^墨)、245(平濁 B ^朱)、246(平軽濁 A ^墨)、			業 三 80A ケフ(入軽濁 B ^墨)、162A ケウ、164A(入軽濁 A ^墨)、269A キヨウ、 正 104A ケフ ^左 、214A ケフ、350A ケフ(入濁 A ^墨 2)、 徳 99A、359A(入濁 B)

161) 仮名音注「セム」の「セ」に去濁点あり。

	283(平濁 A ^準)、363A(平濁 A ^準 2)、388A(平 ^準)、 凡 249A、367、506A ケン(平濁 A ^準 1)、305A、318A、328A ケン、317 ケン(平 ^準 2・平 ^準 朱)、319(平濁 A ^準 1)、323A(平 ^準 2)、370A(平濁 A ^準 2)、428A ケン(平濁 A ^準 2)、477A ケン _{合左} 、 厚 245A、302A、315、319A(平 ^準 朱)、 徳 254A、326、497A、528A(平濁 B)、313A、328、378、382A、445A(平)、587A(去)、 歴 119(平濁 A)、 原 139A ケム			
61	凡	范	梵	乏
非				法 凡 129A ハツ、254A ハ、602A ハウ、 歴 167A、283A ハウ、 水 11A7A、12A1A、13A4A(入 ^準)、 凡 44 ハフ(入 ^準 軽 ^準)、104A、109A、125、127A、181A ハフ、114A ハツ、 歴 55、123A、137A、143A、165、168、172、184A、245A ハフ、259A ハフ(入 ^準 2)、342A、386A ハウ、 厚 138A、169A ハツ、 徳 135A、142A、158A(入)
奉	凡 凡 208A ハン(平)、 建 246A ハム(平)、 水 17A5A(平 ^準)、 凡 159A ハム(平 ^準 1)、 歴 207A ハン(平 ^準 1)、 厚 203A ハム、 徳 210A(平)	犯 凡 599A(去)、 徳 267A(去) 范 原 6 ハム(去)		

使用テキスト

論語（論語集解）

正和本：『東洋文庫善本叢書 11 重要文化財論語集解正和四年写』（2015、勉誠出版）

『古典研究会叢書漢籍之部第四巻 論語集解（一）』（2017、汲古書院）

嘉暦本：宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧一書誌書影・全文影像データベース—

http://db.sido.keio.ac.jp/kanseki/T_bib_frame.php?id=006671

建武本：『論語：建武本』、蒲田政治郎編（1937）

高山寺清原本・高山寺中原本：『高山寺典籍文書総合調査団編、高山寺古訓点資料第一』（1980、東京大學出版會）

金沢文庫群書治要巻第9：宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧一書誌書影・全文影像データベース—

http://db.sido.keio.ac.jp/kanseki/T_bib_frame.php?id=069336

文永本：『古典研究会叢書漢籍之部 第五巻 論語集解（二）』（2015、汲古書院）

孝經

仁治本：『古文孝經 仁治本』（1939、便利堂）

建長本：京都大学貴重資料デジタルアーカイブ

<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00007929>

永仁本：宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧一書誌書影・全文影像データベース—

http://db.sido.keio.ac.jp/kanseki/T_bib_frame.php?id=044820

三千院本：『古文孝経』（1930、古典保存会）

正安本：天理図書館より申請した写真及び天理図書館における原本調査（2018.5.14-2018.5.16）
による移点本

元亨本：宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧—書誌書影・全文影像データベース—
http://db.sido.keio.ac.jp/kanseki/T_bib_frame.php?id=007285

元徳本：宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧—書誌書影・全文影像データベース—
http://db.sido.keio.ac.jp/kanseki/T_bib_frame.php?id=007283

金沢文庫群書治要巻第9：宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧—書誌書影・全文影像データベース—
http://db.sido.keio.ac.jp/kanseki/T_bib_frame.php?id=069336

清家御注本：京都大学貴重資料デジタルアーカイブ
<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00007918>

三条西実隆写御注孝経：早稲田大学古典籍総合データベース
https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ro12/ro12_00728/index.html

古文尚書

金沢文庫群書治要巻第2：宮内庁書陵部収蔵漢籍収覧—書誌書影・全文影像データベース—
http://db.sido.keio.ac.jp/kanseki/T_bib_frame.php?id=069336

観智院本・天理本・文和本：『天理図書館善本叢書漢籍之部— 文選 趙志集 白氏文集』
（1982、八木書店）

元徳本：『国宝古文尚書巻第三・巻第五・巻第十二 重要文化財古文尚書巻第六 東洋文庫
善本叢書7』（2015、勉誠社）

文選

正安本：

- 小林芳規（1960）「猿投神社蔵正安本文選」『訓点語と訓点資料』14, pp. 9-29
_____（1961a）「猿投神社蔵正安本文選（二）」『訓点語と訓点資料』16, pp. 59-85
_____（1961b）「猿投神社蔵正安本文選（三）」『訓点語と訓点資料』18, pp. 33-54
_____（1962）「猿投神社蔵正安本文選（四）」『訓点語と訓点資料』21, pp. 1-41

書陵部本：山崎誠（1984）「文選巻二宮内庁書陵部蔵「管見記」紙背影印・翻刻並に解説」
『鎌倉時代語研究』7, pp. 6-132

白氏文集

神田本：『神田本白氏文集の研究』（1982、勉誠出版）

時賢本：http://db.sido.keio.ac.jp/kanseki/T_bib_frame.php?id=007506

管見抄：国立公文書館デジタルアーカイブ

<https://www.digital.archives.go.jp/DAS/pickup/view/category/categoryArchives/0400000000/051>

4000000/00

嘉禎本：『金澤文庫本白氏文集 特装本4』(1984、勉誠出版)

正応本・永仁本：『天理図書館善本叢書漢籍之部二 文選 趙志集 白氏文集』(1980、八木書店)

京大本：京都大学貴重資料デジタルアーカイブ

<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00013491#?c=0&m=0&s=0&cv=23&r=0&xywh=-311%2C0%2C4893%2C2980>

谷村本：京都大学貴重資料デジタルアーカイブ

<https://m.kulib.kyoto-u.ac.jp/webopac/digview.do?bibid=RB00010641&seq=000001&lang=ja>

東洋文庫本：東洋文庫における原本調査(2018.10.14、16、22、2020.1.15)による移点本

千字文

上野本『上野本注千字文注解』、和泉書院(1989)

辞典・注釈書

寛永八年版『大広益会玉篇』、出版社不明(1631年上梓本)

『新校索引經典釋文』學海出版社(黄坤堯、鄧仕樑編校、1988)

『經典釈文韻篇索引』、中華民国行政院文化建設委員会(潘重規主編、出版年度不明)

『大宋重修広韻 附索引』、藝文印書館(2002)

『集韻 附索引』、上海古籍出版社(1985)

『諸本集成 倭名類聚抄』臨川書店(京都大学文学部国語学国文学研究室編、1968)

『大漢和辞典』、大修館書店(諸橋轍次著、1986)

データベース

篇韻データベース <http://suzukish.s252.xrea.com/search/> (2020年11月30日アクセス)

参考文献

足利衍述(1932)『鎌倉室町時代之儒教』、日本古典全集刊行会

阿部隆一(1967)「古文孝経旧鈔本の研究(資料篇)」『斯道文庫論集』6、pp.1-1060

有坂秀世(1944a)「メイ(明)ネイ(寧)の類は果たして漢音ならざるか」『国語音韻史の研究』、明世堂、pp.361-366(1938、『音声学協会会報』15(11)初出)

_____ (1944b)「帽子」等の仮名遣について」『国語音韻史の研究』、明世堂、pp.255-274(1941、『文学』16(7)初出)

石塚晴通(1983)「岩崎本古文尚書・毛詩の訓点」『東洋文庫書報』15、pp.22-44

石塚晴通・小助川貞次(2015a)「古文尚書解題」『東洋文庫善本叢書⑦ 国宝古文尚書巻第

- 三・卷第五・卷第十二 重要文化財古文尚書卷第六』、勉誠社、pp.157-165
- _____ (2017)「訓点解説」『古典研究会叢書漢籍之部第四卷 論語集解(一)』、汲古書院、pp.1-24
- 石山裕慈 (2008)「論語古写本における漢字音について」『日本語学論集』4、pp.1-15
- _____ (2011)「中世における『論語』古鈔本の声点について」『弘前大学教育学部紀要』105、pp.1-8
- _____ (2012)「室町時代における漢字音の清濁—『論語』古写本を題材として—」『弘前大学教育学部紀要』108、pp.9-17
- _____ (2013)「『遊仙窟』各本に記入された日本漢字音の位置づけ」『国語と国文学』90(7)、pp.52-65
- 吳 美寧 (2018)「日本 古文孝經 訓読의 系統에 관한 考察」『口訣研究』41、pp.67-87
- 大島正健 (1931)『漢音呉音の研究』、第一書房
- 大矢 透 (1909)『仮名遣及仮名字体沿革史料』国定教科書共同販売所
- 岡本 勲 (1969)「日本漢字音に於ける止撰の所謂長音表記に就て--韻鏡の開合・開・合の分類基準との関連に於て」『国語国文』38(8)、pp.1-19
- _____ (1970)「韻鏡内転第十二「開合」の意味するもの」『国語国文』39(6)、pp.23-43
- 小倉 肇 (1995)『日本呉音の研究』、新典社
- _____ (2014)『続・日本呉音の研究』、和泉書院
- 柏谷嘉弘 (1965)「凶書寮本文鏡秘府論の字音声点」『国語学』61、pp.1-10
- _____ (1998)「正應二年点白氏文集卷四の漢字音」『神戸女子大学文学部紀要』31、pp.13-29
- 春日政治 (1956)「聖語藏本唐写阿毘達磨雜集論の古点について」『古訓点の研究』、pp.188-208 (1940、『安藤教授還暦祝賀記念論文集』初出)
- 金谷 治 (1980)「古文尚書解題」『天理図書館善本叢書 古文尚書・莊子音義 漢籍之部一』、八木書店、pp.3-16
- 菊澤季生 (1933)『国語位相論』、明治書院
- 木島史雄 (2007)「『古文孝經』における鈔本特性の研究—猿投神社本と清家文庫教隆本との対比を通して—」『愛知大学文学論叢』135、pp.1-21
- 興膳宏・木津祐子編 (1995)『京都大学付属図書館貴重書漢籍抄本目録』、京都大学付属図書館
- 小林明美 (1984)「『呉音』と『漢音』」『密教文化』145、pp.116-86
- 小林信明 (1959)『古文尚書の研究』、大修館書店
- 小林芳規 (1967)『平安鎌倉時代における漢籍訓讀の國語史的研究』、東京大學出版會
- _____ (1968)「論語訓読史から見た大東急記念文庫蔵建武本論語」『かがみ』12、pp.1-19
- _____ (1980)「高山寺蔵論語(清原本卷第七・卷第八 中原本卷第四・卷第八) 解題」『高山寺古訓点資料 第一』東京大学出版會、pp.6-13

- _____ (1981)「猿投神社蔵古文孝経建久六年点における地方語的性格」『方言研究の射程』、三省堂、pp. 35-53
- 小松英雄 (1956)「日本字音における唇内入声韻尾の促音化と舌内入声音への合流過程—中世博士家訓点資料からの跡付け—」『国語学』 25、pp.67-79
- _____ (1971)『日本声調史論考』、風間書房
- 坂井健一 (1969)「論語釋文の「書キ入レ」音について」『日本中国学会報』 21、pp.81-99
- 坂水貴司 (2015)「清原宣賢と清原枝賢の字音点の相違について—『論語』『中庸章句』を資料として—」『広島大学大学院教育学研究科紀要』 2(64)、pp.302-294
- 坂本良太郎 (1940)「我が国に於ける孝経古鈔本の系統」『文化』 7(9)、pp.47-85
- _____ (1942)「明経道の乎古止点に就いて」『文化』 9(2)、pp.37-64
- _____ (1943)「中原康富の学問」『文化』 10(11)、pp.29-70
- 佐々木 勇 (1989)「『蒙求』字音点に見られる日本漢音の変遷—鎌倉時代を中心として—」『国文学攷』 121、pp.1-31
- 佐々木 勇 (1992)「日本漢音資料に見られる全濁声母字の濁音形」『小林芳規博士退官記念国語学論集』、汲古書院、pp.645-663
- _____ (1998)「日本漢音における軽声の消滅について—漢籍を資料として—」『鎌倉時代語研究』 21、pp.5-29
- _____ (2002)「日本漢音における反切・同音字注の仮名音注・声点への反映について—金沢文庫本『群書治要』鎌倉中期点の場合—」『国語学』 53(3)、pp.106-93
- _____ (2006)「鎌倉時代の日本漢音資料における濁声点加点について」『小林芳規博士喜寿記念国語学論集』、汲古書院、pp.318-338
- _____ (2009)『平安鎌倉時代における漢音の研究』、汲古書院.
- 佐藤 進 (2013)「四書の訓読における字音の諸問題—口語的字音から規範的字音へ—」『日本漢文学研究』 8、pp.160-149
- 佐藤道生 (2018)「『古文孝経』永仁五年写本の問題点」『図書寮漢籍叢考』、汲古書院、pp.45-53 (論説編)
- 高松政雄 (1982)『日本漢字音の研究』、風間書房
- _____ (1988)『日本漢字音概論』、風間書房
- _____ (1997)『日本漢字音論究』、風間書房
- 武内義雄 (1939)『論語之研究』、岩波書店
- 鄭 門鎬 (2018)「東洋文庫蔵『論語集解』正和四年鈔本の漢字音について」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』 18、pp.11-33
- _____ (2019)「鎌倉時代書写『古文孝経』の漢字音について」『訓点語と訓点資料』 142、pp.66-42
- 築島 裕 (1969)『平安時代語新論』、東京大学出版会 (1978 復刊版)
- _____ (1980)「訓点解説」『天理図書館善本叢書 古文尚書・莊子音義 漢籍之部一』、

- 八木書店、pp.22-35
- 西崎 亨 (1991) 「天理図書館蔵正安本古文孝経の訓点」『ビブリア』97、pp.2-16
- 沼本克明 (1969) 「古文尚書平安中期点字音注記の出典について」『国語学』78、pp.18-33
- _____ (1973) 「唐末上声全濁字の去声化を通じて見たる日本漢音の体系について」『国語と国文学』50(2)、pp.48-67
- _____ (1980) 「中原本論語卷第四・八に引用された論語積文の性格と論語訓読に於る影響について」『高山寺古訓点資料 第一』東京大学出版会、pp.500-509
- _____ (1981) 「フッキ (富貴) をめぐって」『鎌倉時代語研究』4、pp.47-63
- _____ (1982) 『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』、武蔵野書院
- _____ (1986) 『日本漢字音の歴史』、東京堂出版
- _____ (1997) 『日本漢字音の歴史的研究—体系と表記をめぐって—』、汲古書院
- _____ (2013) 『歴史の彼方に隠された濁点の源流を探る』、汲古書院
- _____ (2014) 『帰納と演繹とのはざまに揺れ動く字音仮名遣いを論ず—字音仮名遣い入門—』、汲古書院
- 萩原義雄 (1990) 「西教寺蔵『法華経音義・法華経略音』」『駒澤大學北海道教養部論集』5、pp.1-76
- 橋本進吉 (1966) 『国語音韻史』、岩波書店
- 林 秀一 (1976) 『孝経学論集』、明治書院
- 林 史典 (1980) 「呉音系字音における舌内入声音の仮名表記について」『国語学』122、pp.55-69
- 原 卓志 (1987) 「古文尚書平安中期点における朱声点・点発について」『広島大学文学部紀要』46、pp.32-1
- 廣岡義隆 (1988) 「上代における拗音の仮名について」『人文論叢 (三重大学)』5、pp.1-14
- 松本光隆 (2007) 「古文孝経の訓読における字訓について」『平安鎌倉時代漢文訓読語史料論』、汲古書院 (初出 1987)、pp.61-121
- 満田新造 (1920) 「「スキ」「ツキ」「ユキ」「ルキ」の字音仮名遣いは正しからず」『國學院雜誌』26(7)、pp.19-25
- 山田幸宏 (1983) 「土佐方言サ行子音と上代サ行子音」『国語学』133、pp.164-155
- 湯沢質幸 (1987) 『唐音の研究』、勉誠社
- _____ (1996) 『日本漢字音史論考』、勉誠社
- _____ (2014) 『近世儒学韻学と唐音—訓読の中の唐音直読の軌跡—』、勉誠社